

和歌作品の調査、収集を通じた 鎌倉時代西園寺家像の再構築

課題番号 19720045

2007（平成19）年度～2008（平成20）年度 科学研究費補助金

若手研究（B）

研究成果報告書

2009（平成21）年3月

研究代表者 藤川 功和
(尾道大学芸術文化学部・講師)

2008（平成20）年度 780,000

研究発表

「宝治元年『院御歌合』注釈―「初秋風」題―

（『尾道大学芸術文化学部紀要』第7号 2008年3月

位藤邦生・森下要治・田野慎二・山崎真克・赤迫照子との共著）

「宝治元年『院御歌合』注釈―「海辺月」題―

（『表現技術研究』第4号 2008年3月

位藤邦生・森下要治・田野慎二・山崎真克・赤迫照子との共著）

「『弘長百首』攷―九条基家詠を起点として―

（『国語と国文学』第86巻第2号 2009年2月）

「宝治元年『院御歌合』注釈―「野外雪」題―

（『尾道大学芸術文化学部紀要』第8号 2009年3月

位藤邦生・森下要治・田野慎二・山崎真克・赤迫照子との共著）

「宝治元年『院御歌合』注釈―「忍久恋」題―

（長崎大学教育学部紀要 人文科学』第75号

2009年3月 位藤邦生との共著）

I 研究の概要

1 研究の概要

研究課題

和歌作品の調査、収集を通じた鎌倉時代西園寺家像の再構築

課題番号

19720045

研究種目

若手研究 (B)

研究期間

2007 (平成19) 年度 ～ 2008 (平成20) 年度

研究組織

研究代表者 藤川功和 尾道大学芸術文化学部・講師
研究分担者 位藤邦生 長崎大学教育学部・教授

森下要治 広島文教女子大学人間科学部・教授

田野慎二 広島国際大学医療福祉学部・准教授

山崎真克 松江工業高等専門学校・教授

赤迫照子 広島大学図書館研究開発室・助教

研究経費

2007 (平成19) 年度 800,000

「宝治元年『院御歌合』注釈―「逢不遇恋」題―」

(『表現技術研究』第5号 2009年3月)

位藤邦生・森下要治・田野慎二・山崎真克・赤迫照子との共著)

「宝治元年『院御歌合』注釈―「旅宿嵐」題―」

(『尾道大学日本文学論叢』第4号 2009年5月刊行予定)

位藤邦生・田野慎二・山崎真克との共著)

2 研究の目的と研究の経過・成果の概要

〔西園寺家について〕

本研究は、鎌倉時代西園寺家の文学活動と政治活動の相関関係を明らかにすることを目的とする。以下に、西園寺家に着目する理由とその意義について述べる。

西園寺家は、鎌倉時代の〈政治〉と〈文学〉を研究する上で、欠くことの出来ない存在である。なぜなら、政治的には、家祖公経が、承久の乱（一二二一）後、鎌倉幕府と朝廷との実質的な連絡役「関東申次」となつて以降、歴代当主が代々その任を受け継ぎ、また、公経嫡子実氏は、娘姑子を後宮に入れ、後深草・龜山両天皇の外祖父となる等、朝廷と武家双方の中枢に位置していたからである。また、当時和歌がその主流をなしていた文学の面で、公経は、藤原定家撰『百人一首』に採られ、『新古今和歌集』以後の勅撰集にも多く入集した鎌倉時代を代表する歌人であり、以後の歴代当主も代々の勅撰集に入集する等、和歌をよくした。

〔従来の西園寺家に関する研究の有様〕

従来、西園寺家に関しては、歴史学においては、古記録や古文書を資料として、鎌倉幕府との関連を中心に多くの研究がなされてきた。一方、西園寺家と和歌をはじめとする文学との関わりに関しては、四代実兼（さねかぬ）については、多くの研究がなされてきたものの、他の当主の文学活動に関しては、これまであまり顧みられることがなかった。

〔本研究における申請者の新たな着眼点と期待される成果〕

しかしながら、西園寺家の文学活動の中心をなす和歌活動は、単なる文芸活動ではなく、一つには、自家の政治的位置を天皇や院にアピールする手段として機能していたのであり、

西園寺家の和歌活動を研究することは、和歌文学史の隙間を埋めるのみに留まらない、と申請者は考える。すなわち、今まで歴史学が史料として殆ど用いてこなかった和歌関係の資料を精査することによって、西園寺家が和歌を政治的にどのように利用して、朝廷、鎌倉幕府双方との関係を構築していったのが明らかになり、巨視的にみれば、〈文学〉と〈政治〉との関わりという、現代にも通じる課題を解き明かす鍵となる。

目次

I 研究の概要

1 研究の概要 : i
2 研究の目的と研究の経過・成果の概要 : iv

II 研究報告(第一部)

鎌倉時代西園寺家と和歌 : 1

III 研究報告(第二部)

宝治元年『院御歌合』注釈 : 33
一、「早春霞」題 : 34
二、「山花」題 : 58
三、「五月郭公」題 : 81
四、「初秋風」題 : 104
五、「海辺月」題 : 123
六、「野外雪」題 : 146
七、「忍久恋」題 : 163
八、「逢不遇恋」題 : 180
九、「旅宿嵐」題 : 203

鎌倉時代西園寺家と和歌

一 鎌倉時代西園寺家概略

西園寺家は、藤原氏北家閑院流公実男の通季（一〇九〇—一一二八）を始祖とする。家は、清華だが、通季の曾孫公経（一一七一—一二四四）は、文治末から建久初年頃、鎌倉幕府初代将軍源頼朝（一一四七—一一九九）の妹婿一条能保女全子を娶り、頼朝と姻戚関係を結ぶ。以後、閑東申次として、幕府との連絡役を務めるなど、幕府方との関係を深める。承久の乱に際しては、後鳥羽院によつて長子実氏（一一九四—一二六九）とともに拘禁されるが、家司を遣わして、鎌倉に異変を知らせている。乱後、公経は、承久三年閏十月に内大臣、翌貞応元年には太政大臣に任じられ、清華家としての極官に昇り、また翌年には従一位に叙される。

一方で、公経は四条天皇急逝を受けて鎌倉幕府によつて擁立された後嵯峨天皇（一二二〇—一二七二）に実氏女姞子（一二二五—一二九二、後の大宮院）を入内させる。姞子は、寛元元年（一二四三）六月に久仁親王（後深草天皇）を、建長元年（一二四九）五月には恒仁親王（龜山天皇）を生んだ。寛元四年（一二四六）正月には後嵯峨天皇が当時四歳の後深草天皇に讓位、実氏は今上帝の外戚となり、同年三月には太政大臣に任じられる。同十二月には、九条道家に代わつて閑東申次となる。また、康元二年（一二五七）正月には、実氏女公子（一二三二—一三〇四、後の東二条院）が、後深草天皇の中宮となり、実氏は二代の国父となる。さらに、正元元年（一二五九）後深草天皇讓位をうけ即位した龜山天

皇の外戚ともなっており、西園寺家はここに全盛を極めるのである。

西園寺家は以後も、関東申次を代々継承するとともに、持明院、大覚寺兩皇統にそれぞれ女子を入れて外戚となり、摂関家をしのぐ権勢を、鎌倉時代の終焉まで維持することとなる。

このように、西園寺家は、鎌倉時代政治史を考える上で、極めて重要な位置を占めており、その家の果たした役割については未だに議論がなされている。近年では、例えば本郷和人氏が「西園寺氏再考」(『日本歴史』第635号 平成13年4月)において以下のごとく指摘されている。

1、関東との交渉・連絡は、上皇と摂関にも可能であった。とくに讓位等の重事について、上皇は直に幕府と連絡を持っている。またある一定の廷臣も幕府と交渉することは可能であった。幕府との交渉・連絡を独占できぬ以上、関東申次の地位は、親幕派第一の公家の表象ではあっても、政治的には高く評価できない。

2、西園寺氏は外戚である、と一口に言われるが、実は皇室と縁戚を持たぬ時期もある。それも単に偶然そうだったのでなく、大覚寺統からは明らかに避けられている様子が見える。西園寺氏は外戚であるが、持明院統のそれである。

このような捉え直しは、今後も行われるであろうし、またこのような言及がなされること自体、西園寺家がこの時代の政治史を考える上でいかに重要であるかを物語っている。本研究においては、主に西園寺家歴代当主の和歌作品の分析を通して、西園寺家の政治

と文学の有り様について解明することを目的とするものである。

二 西園寺公経の和歌―『民経記』記載「あやめ草」詠を例に―

(資料1) 『民経記』仁治三年四月五日条(「大日本古記録」に拠る)

同四、五日、後聞、一条入道太相国進菖蒲根於禁裏、相副和哥云々、

あやめ草ともかくにもなかきねを君にひかれてちよもへぬへし

有勅答云々

あやめ草うへをく人も君か代もなかきためにけふやひかれん

□□□□注付也、定有僻事歟、

(□は虫損・破損)

当該記事は、国立歴史民俗博物館所蔵『経光卿記』(仁治・寛元年間記)の内で(原題『故一品記』)、早くは「大日本史料」第五編之十四(昭27 東京大学出版会)に活字化されている。また、「大日本古記録」『民経記八』(平13 岩波書店)にあらためて収められている。『民経記』(『経光卿記』等)も。本稿では便宜上抄出本も含めて『民経記』と称する)は、鎌倉時代中期の公卿藤原経光(一一二一―一二七四)によって記された家記である。同記には、経光自身、また彼が見聞した周辺人物の詩歌が記されている。

「一条入道太相国」西園寺公経(一一七一―一二四四)は、貞応二年(一一二二)、前年に任じられた太政大臣を辞し、寛喜三年(一一三一)六十一歳で病により出家を遂げている(『公卿補任』)。公経が、「禁裏」において「菖蒲根」を奉じた相手は、仁治三年正月、四条天皇が十二歳で急逝したのをうけ、同年三月十八日に即位したばかりの後嵯峨天皇である。

公経の贈歌を読んでみよう。傍線部「ともかくにも」は、「世中はうき物なれや人ごとのともかくにもきこえくるしき」(『後撰和歌集』卷第十六・雑二・一一七六・紀貫

之)の如く、①あれこれ。様々。の意と、「かくしつとにもかくにもながらへて君がやちよにあふよしもがな」(『古今和歌集』巻第七・賀歌・三四七・光孝天皇)の如く、②いずれにせよ。何はともあれ、の二意に大別される。①とすると、(あれこれ様々な)菖蒲の長い根を引かれて)という意になるが、ここではむしろ公経が菖蒲の中でもとりわけ長い根を持つものを帝に献じ、御代の恒久を言祝いだと解釈する方が自然であろう。

さて、先に挙げた例歌の「とにもかくにもきこえ」(様々な風聞)、「とにもかくにもながらへて」(なんとか生きながらえて)の如く、「とにもかくにも」は、直後の句に意味が掛かるのが通例だが、一方、当該歌より時代は若干降るものの、為家詠「なに事をとにもかくにもかるかやの思ひみだるるこころなるらん」(『為家五社百首』かるかや・二八六)において、「とにもかくにも」が、枕詞「かるかや」をとばして四句目に掛かる例もみえる。当該歌においては、「とにもかくにも」は、「君にひかれて」に掛かり、全体の解釈としては、(≪私が献上するこの≫菖蒲草は、長い根が何はともあれ帝の恒久に因んでいるかのように引かれて、きつとこれからの治世と同じように千代も経るであろう)となるろう。

それにしても、「とにもかくにも」(「とにかくも」「ともかくも」「とにかくに」を含む)を当該歌の如く帝の治世の恒久を言祝ぐ詠で用いる例は、『新編国歌大観』に拠ると少なくとも鎌倉時代までには殆どみえず、「つかへつとにもかくにもなれてみん君が八千代の秋の月かげ」(『弘長百首』秋二十首・月五首・三〇三・藤原為氏)、「とにかくにかしき君が御代なれば三のたからのとりもなくなり」(『弁内侍日記』・一八五)ぐらいである。この内、前者は、(何はともあれ)という意味合いだが、詠者主体の動作「なれてみん」に「とにもかくにも」が掛かっており、賀の対象「君」及びその動作「ひかれて」

に掛かる当該歌とは用法が異なっている。また、後者の例歌では、「とにかくに」は、「か
しこき君」に掛かるが、意としては、(様々、あれこれ)となり、こちらも当該歌とは異
なる。即ち、当該歌の如き「とにかくにも」の用例は稀といつてよい。

では「とにかくにも」(何はともあれ)と、公経が詠じた背景を考えてみよう。後嵯
峨天皇は、土御門院皇子で、承久の乱によって土御門院が配流された後は、母の叔父にあ
たる源通方の許に身を寄せ、通方没後、祖母の承明門院に養育された²。後嵯峨天皇は、次
期帝に決定した時、二十三歳にして未だ元服もすませておらず、また、一時は出家も考え
ていたらしい³。四条天皇急逝に伴う次期帝の候補には、順徳院皇子忠成王もあがつてお
り⁴、九条家と縁戚関係にあった公経は、道家とともに忠成王を推した⁵。結局、承久の乱に
積極的に関わった順徳院系の皇子を避けたい鎌倉幕府の意向によって土御門院皇子に決定
したのである。この決定に際しては、源定通方の幕府への働きかけもあったが⁶、(定通は、
土御門院生母承明門院在子の異父弟であり、且つ定通妻は北条義時女)、最終的な判断が
幕府に委ねられていた点では、どちらの候補も同様であった。

そのような、帝位につくまでの後嵯峨天皇の紆余曲折の境涯を念頭に置くと、公経詠の
「とにかくにも」からは、出家まで覚悟していた皇子が、今上帝の急逝と鎌倉幕府の意
向や縁者の働きかけによって、「とにかくにも」(今までの経緯はどうあれ)帝位に
就いた、というニュアンスが読みとれるのではないだろうか。公経は「とにかくにも」
を賀の歌においてはあまりみえない用法で敢えて詠み込むことによって、帝位に至るまで
の後嵯峨天皇の境遇を暗示しつつ御代を言祝いだものと解し得るのである。また、そのよ
うな意味合いを含む詠を献じた公経の行動から、紆余曲折を経てなった御代を我こそが支
えていこうという公経の自己主張をも汲み取つてよいのではないだろうか。

* * * * *

では、公経に対する返歌はどのような意味内容になつてゐるのであるうか。下の句「なかきためしにけふやひかれん」は、公経詠「なかきねを君にひかれて」をうけたもので、（これからの治世の恒久の抛り所として今日このような長い根を引かれたのでしよう）という意であろう。その下の句に掛かる上の句の内、まず「君か代」は、第一義的には（帝の御代）という意であろう。しかし、返歌の首書に「有勅答」とあるので、「君か代」は返歌の送り先―公経に対する尊称とも考えられよう。⁽⁷⁾だが、仮に「君」を公経とすると「うへをく人」は誰を指すのであろうか。「うへ」は「うゑ」（植ゑ）で、「うへをく」は「植ゑ置く」意であろう。⁽⁸⁾注意されるのは、「うへをく人も」とあるように、「君か代」と並び「なかきためし」と詠じられている点である。つまり、「うへをく人」は、「君か代」と並と同じく、今後の「なかきためし」を約束された人なのである。

（資料2）『新古今和歌集』巻第十六・雑歌上・一四四三・藤原忠平

枇杷左大臣の大臣になりて侍りけるよろこび申すとて、梅ををりて

貞信公

おそくとくつひにさきぬる梅の花誰がうゑおきしたねにか有るらん

例えば、（資料2）歌は、兄仲平が右大臣となり、亡くなつた兄時平と三兄弟がいずれも大臣に任じられた喜びを忠平が詠じたものである。この場合、「うゑおきしたね」は、三兄弟の父故基経が最初の関白兼太政大臣となり、その後の繁栄の礎を築いたことを称えた表現で、草木を植える意に、繁栄の基礎を敷いた意を含ませている。⁽⁹⁾この（資料2）詠や、「うへをく人」が「君」とともに「なかきためし」と言祝がれている点を考えると、「君か代」は後嵯峨天皇を、「うへをく人」は公経をそれぞれ指すと考えるのが妥当では

にけり花もわが世も今日さかりかも」と詠じ、同じく行幸、御幸した後深草天皇や東宮（龜山天皇）を「花」に喩え、わが世の春を高らかに謳った。それに対して、実氏は、「いろく にさかへて匂へ桜花我きみく の千代のかざしに」と応じ、姑子腹の天皇、東宮を院とともに言祝ぎ、翌日には、「この春ぞ心の色はひらけぬる六十あまりの花は見しかど」と、栄花の極まりを詠じたのである。⁽¹⁴⁾

三 西園寺実氏の和歌——『院御歌合』を例に——

（資料3）『院御歌合』二番・早春霞・三

二番 左

太政大臣

皇の御代さかゆべき春なれば霞をこめてたちや出でまし

右

俊成卿女

君がためなほ万代の春の色に霞初めたる明ぼのの空

左の御代さかゆべき春世みなこひねがふべきことに侍るうへに、下句そのいはれ聞えてをかしく侍るにや、君がためなほよろづよのといへる、またすてがたく侍れば、両方の祝言をなずらへて為持

（資料3）は、後嵯峨院政初発期の大規模な歌合、宝治元年（1247）『院御歌合』の最初の題「早春霞」の実氏詠である。上の句「皇の御代さかゆべき春なれば」（帝の、ひいては院の治世がこれからきつと栄花を誇るに違いない春なので）と、前年正月に讓位した後嵯峨院のこれからの治世の繁栄が約束されたものであるとして、その所以は、為家判が「下句そのいはれ聞えて」と指摘する「霞をこめてたちや出でまし」であると詠じている。

ないだろうか。おそらくこの返歌は、近仕の者が代詠したものと思量される⁽¹⁰⁾。

さて、先にも述べたが、公経は、四条天皇崩御に伴う次期帝候補としては、道家とともに忠成王を推した。一方、次期帝決定後は、すぐさま土御門院皇子の元服の調度を進上（『民経記』仁治三年正月二十日条）、踐祚後は、度々後嵯峨天皇を方違え行幸の際自邸に迎えている⁽¹¹⁾。さらに、同年六月三日には「関東事安否未聞、然而不可延引之由結構歟、頗不甘心」（『平戸記』同年六月三日条）と、北条泰時病中であるという一部の批判をものともせず、孫娘姑子を入内させる。姑子は同年八月九日に立后、中宮となり、翌年には久仁親王（後深草天皇）を産み、公経は、外戚としての地位を固めるのである。当時既に権勢を極めていた公経が、後嵯峨天皇の後ろ盾となることは、帝にとっても治世の安定に必要不可欠な要素であった。「とにもかくにも」という含み多い表現を用いた詠歌を「菖蒲根」と共に奉じた公経の意図を、勅答の代詠者も（そして恐らくは公経詠と共に代詠にも目を通したであろう）後嵯峨天皇自身もよく知っていたと思しい。「うへをく人」は、仁治三年四月五日時点で既に姑子入内を内々に推し進めていたであろう公経に対する、今後の後嵯峨天皇治世における政治的位置を的確に表したものであつたらう⁽¹²⁾。

* * * * *

寛元元年（一二四三）に誕生した皇子は、ほどなく親王に立てられる。公経自身は同二年に没し、ついに目にすることはなかったが、皇子は、同四年（一二四六）に即位、公経息実氏は、外祖父となり、関東申次且つ院政を開始した後嵯峨院の院評定衆の一員として二十余年に渡り後嵯峨院政を支えていくことになる⁽¹³⁾。

正元元年（一二五九）三月五日、後嵯峨院は、花盛りの北山西園寺邸に大宮院姑子主催一切経供養の為に御幸、翌日には管弦の遊びとなり、院は、「色く」に枝をつらねて咲き

「たなびく」に「引く」を掛け、霞棚引く空にまで長寿が約束されたことを言祝いでいる。また、俊成卿女の『洞院撰政治家百首』出詠歌「朝日さすみかさの山の雲より霞そめたる千代のはつ春」（上・春・霞・八六）では、氏神である春日社の上空に「朝日」とともに「霞」が配され、ここでも、霞が立つことに祝意が込められている（後掲、当該歌合九番左・藤原師継詠も同様の用例と考えられる）。さらに、定家詠「春の色をいく万代かみなせ河霞のほらの昔のみどりに」（『建保名所百首』春二十首・水無瀬河・一九五）の如く、霞は、仙洞御所を連想させる表現でもある。これらの例歌から、当該歌における「霞」は、後嵯峨院政の治世の恒久を暗示する表現として機能していると考えられる。

「早春霞」題の他の詠歌に目を転じると、「早春」に引かれて、「みどりもさむく霞む」（三番左・通忠）、「色うすき山の霞」（四番右・公相）、「霞初めけん」（六番左・為経）、「うす霞つつ」（七番右・雅光）、「霞ぞうすき」（九番右・雅忠）と、霞がたち始めたばかりの状況を詠み込む傾向が強い。また、祝言を詠じたものは、「君がためなほ万代の春の色に霞初めたる明ぼのの空」（二番右・俊成卿女）、「君が代のはじめの春ののどけさを空もしりてや霞たつらん」（九番左・藤原師継）、「明けわたるみねの霞を出づる日の影もくもらぬ千代の初春」（十三番左・嘉陽門院越前）の三首であるが、「霞初め」、「霞たつ」、「明けわたる」と、「明けわたる」と、「霞」と、早春に棚引く霞の景を詠み込んで一面に立ちこめられている。一方、実氏は、院の治世の繁栄を暗示する霞が、早春にあって一面に立ちこめられている様を描出しており、その点が当該歌における実氏の創意の一つといえよう。

では、「たちや出でまし」の主語は何であろうか。一つには「たち」（立ち）の縁語である上の句の「春」が考えられよう⁽¹⁶⁾。その場合、下の句は（早春の霞を）散らすことなく一面に閉じこめて（御代の繁栄を言祝ぐかのように春は）到来するだろう）となろうか。

「くをこむ」の如く他動詞としての「こむ」は、一義的には、「秋の月ひとへにあかぬものならばなみだをこめてやどしてぞみる」（『伊勢集』三〇二）、「とひこかしたちえは梅のみえずとも句をこめて立つ霞かは」（『拾遺愚草』下・部類歌・春・二一三四）等にみえるように、「（対象を）ある物の中へ入れる」「とじ込める」という意で用いられる。

一方、『新編国歌大観』で「霞を」＋「こむ（込む・籠む）」を検索すると、当該歌合以前の例として、「暮れて行く春の霞を猶こめてへだつるをちにたちやわかれん」（『拾遺愚草』上・重奉和早率百首・雑・五九三）、「山のははわけよるままにあらはれて霞をこむる松のむら立」（『御室五十首』寂蓮・八〇七）、「よし野山わけきてのちにながむればかすみをこむる花のしら雲」（『千五百番歌合』春三・百九十三番左・三八五・藤原良平）等がみえる。これらの内、後記二例では、「松のむら立」や「花のしら雲」が霞を隠してしまふ、或いは視界から遮るといふ意味合いになっている。⁽¹⁵⁾ そういった意を仮に当該歌に当てはめると、「霞」が「隠される」存在となつてしまひ題に叶わない。当該歌の場合、先に『伊勢集』や『拾遺愚草』に確認した如く、「霞を」≒「散らすことなく一面に」≒「とじ込めて」という意とならう。

それでは、なぜ霞がとじ込められている状況が、「皇の御代さかゆべき春」なのであるうか。その点を考えるには、以下の用例が理解の一助とならう。

（資料4）『後拾遺和歌集』巻第七・賀・四二八・源兼澄

東三条院四十賀しはべりけるに、屏風に子日してをどこをむなくなるまよりおりてこまつひくところをよめる

源兼澄

かすみさへたなびくのべのまつなればそらにぞ君がちよはしらるる

円融院后東三条院の四十賀における屏風歌で、子の日に小松を引く男女の姿によせて、

しかしながら、「郭公こゑまつほどはかたをかのもりのしづくにたちやぬれまし」(『紫式部集』一三)、「かぞへつるこよひの月はくもるともまつとしきかばたちやいでまし」(『実家集』三二六)等にみる如く、「やくまし」は一義的には「くしようか」と視点人物の意志を表すのであり、当該歌においてもその意味層は無視できない。そもそも「たちや出でまし」の直前に主語が明示されていないことが、このような読みの多様性の要因と
思しく、或いは、実氏は、「たちや出でまし」の主語を一つに限定できないような構造を
敢えて選択したとも考えられよう。すなわち、御代への祝言を含みつつ「早春霞」題の要
件を満たし、一方、視点人物つまり「皇の御代」を言祝ぐ実氏自身の主張を織り交ぜたの
ではないだろうか。では「たちや出でまし」に込めた実氏の主張とは何であるのか。

* * * * *

(資料5)『院御歌合』十五番・山花・二九

十五番 左

太政大臣

おもひ出でよわれもむかしはたつ田山たかねの花も袖にかけてき

右

俊成卿女

春はまた花のみやこと成りにけり桜にほふみよしの山

左われも昔はたつ田山、さだめてゆゑふかく侍らんとみえ

侍るに、右さくらにほふみよしの山、花の都に心もな

りかへりてうつり侍りぬるにこそ

二題目「山花」の実氏詠である。解釈としては、(思い出してください、私も昔は立田
山の高嶺の方にまでも登って、桜狩りをしたことですよー今はもはや老残の身であるので
高嶺に登ることはない)となろう。さらに、二重傍線部「たかねの花」に注目すれば、別

の意味合いもみえてくる。

(資料6)『拾玉集』・第二・詠百首和歌(文集百首)・閑居十首・一九八〇

心足即為富、身閑仍當貴、富貴在此中、何必居高位

谷かげや心のほひ袖にみちぬたかねの花の色もよしなし

建保六年(一二一八)『白氏文集』の詩句を題にした句題和歌「文集百首」の一首である。句題は、『白氏文集』巻六「閑居」の詩句で、心身の充足こそが真の富貴なのであって、高位にあることは何ら真の富貴にはあたらないという意である。慈円は、この詩句の内「居高位」を「たかねの花」と換言し、「谷かげ」すなわち日の当たらない閑居にあつても心の充足があれば、宮中の高位も何の魅力もないと詠じている。

このような例から、実氏の詠歌に戻ると、実氏自身前年の十二月に太政官の最高官である太政大臣を辞していることが想起される。実氏は、立田山の高嶺に桜狩りした昔に思い致す老残の心境に仮託して、太政大臣にあつた今は昔、もはや官を辞した老身であると詠じたものと解される。

(資料7)『院御歌合』四十一番・初秋風・八一

四十一番 左

太政大臣

袖のうへに老のなみだのかかれるを秋きにけりと風やしるらん
右 俊成卿女

秋としもなど荻のはのむすびけん夕のかぜに露の契を

うちまかせては、秋きにけりと風をききてぞ老のなみだも
こぼれぬべく侍るを、なみだのかかれるをみてかぜの秋を
しれるこころめづらしく侍るにや、秋としもなど荻の葉の

とて、夕のかげに露の契をむすびけむといへるも、女のう
たとおぼえていうに侍れば、勝をゆるさるべくや

実氏は、「山花」の二題後「初秋風」でも、（資料7）の如く、（≪秋になって≫我が身の
黄落を感じ私の袖に涙がこぼれるのをみて、風も秋がきたと知るのだからか）と、老残
の心境を詠み込んでいる。

（資料8）『院御歌合』六十七番・野外雪・一三三

六十七番 左

太政大臣

雪おもるみにならひてもおもふかな野なる草木のいかにさゆらん

右

俊成卿女

かりにこしあとだにもなくうづもれて雪ふか草の野への故郷

左みにおもる雪にならひて野なる草木をおもへるころ、

そのゆゑふかくみえ侍るにや、右かりにこしあとたゆるふ

かくさの里は、雪にしもかぎらず、ふりはてたることに侍

れば、また以左為勝

また、「初秋風」の二題後「野外雪」では、「雪」を白髪に見立てて（≪あたかも降り
積もる雪が草木に重くのしかかるように≫すっかり白髪となつてしまつた我が身と引き比
べるにつけ、今実際に雪が降りかかつている野外の草木はどんなにか寒いことであらうか）
と詠じている。例えば、「杣山のこずゑにおもる雪をれにたえぬなげきの身をくだくらむ」
（『新古今和歌集』巻第十六・雑歌上・一五八二・俊成）の如く、雪の降りかかる対象か
ら自身の嘆きを照らし出す詠がみえるが、（資料8）詠では、為家が判詞で「みにおもる
雪にならひて野なる草木をおもへるころ」「そのゆゑふかくみえ侍るにや」と評価した

ように、加齢によつてすっかり白髪となつた我が身から野にある草木を思い遣つてゐる点に実氏の手腕が見て取れる。

さらに、「山花」と「初秋風」の間に位置する「五月郭公」題の実氏詠「我のみとなくやさ月の時鳥たれもね覚をよそにやはきく」について、為家は判詞で、「われのみとなくやさ月とて、たれもね覚はよそにやはきくと侍るこそ、老ののちはまことになつよもわかぬね覚、ことよろしくききなされ侍れ」と、老の身に引きつけて解釈しており、(実氏自身の詠歌意図はともかく)老残のニュアンスを導入した解釈も許される詠歌であるといえる。つまり、実氏は、「山花」題から「野外雪」題まで、老残をモチーフにするか或いはそれに近い響きを持つた詠四首をほぼ連続して出詠していることになる。

そこで、老残を詠み込んだ詠を当該歌合全体で探してみると、「けふしはや花まちつくるおいらくのみ山がくれに春をしるかな」(十九番右・山花・三八・藤原信実)、「老のみにくるしき山のさか越えてなにとよそなる花をみるらん」(廿六番右・山花・五二・藤原為家)と、実氏と同題で信実と為家に一首づつ確認できるのみである。実氏(五十四歳)、信実(七十一歳)、為家(五十歳)という年齢を勘案しても、実氏の四首は、やや多いと言えよう。また、年齢という点で言えば、源有教(五十六歳)や蓮性(六十六歳)には、同様の詠は一首もみえず、(披講の場を持たなかつたにせよ)後嵯峨院主催の歌合出詠歌として実氏が老残をモチーフにした詠歌を続けて出詠している点は注目される。

一方、(資料5)詠の如く(老残)と(我が身の栄花)を対比的に詠み込んだ例歌は、実氏以外にも拾うことができる。

(資料9)『古今和歌集』巻第一・春歌上・五二

そめどののきさきのおまへに花がめにさくらの花をささせ給へるを見てよめる

さきのおほきおほいまうちぎみ

年ふればよはひはおいぬしかはあれど花をし見ればもの思ひもなし

前太政大臣藤原良房が、文徳天皇の中宮となった娘明子の御前に据えられた花瓶の桜を詠んだもので、「花」は明子を喩えている。良房は、天安元年（八五七）人臣として初めて太政大臣に昇りつめ、翌二年文徳天皇が崩じた後、明子所生清和天皇のもとで政治を司った。良房は、（自身は老いてしまったが、今上帝の母后たるわが娘をみていと、何の憂いもない）と詠じており、言外には、栄花を極めた我が身に対する自負を読み取ってよいであろう。

（資料 10）『続後撰和歌集』巻第二十・賀歌・一三四一

今上くらゐにつかせ給うて、太政大臣のよろこびそうし侍りける日、牛車ゆりて、そのころ西園寺のはなを見て

前太政大臣

くちはてぬ老木にさける花ざくら身によそへてもけふはかざさん

実氏にも同様の詠歌がみえる。寛元四年は、実氏にとって慶賀がうち続き、先述した娘姑子腹の久仁親王が正月に帝位につき、自身も三月に太政大臣に任じられ、同時に牛車の宣旨を賜っている。（資料 10）歌は、その頃の西園寺殿の桜を見ての詠である。実氏は、寛元四年に五十三歳。「老木」は我が身を指し、その我が身に思いがけず開いた花桜―娘腹の皇子の即位、任太政大臣、そして牛車の宣旨という栄に浴しています、その栄の象徴とも言わうべき桜花を今日は我が身に挿頭して、このよき日を慶んでいます―という解釈になろう。「花ざくら」は、一門の血を引く帝の即位や自身の栄花の極みを暗示しているのである。

(資料 11) 『続後撰和歌集』 卷第二・春歌中・九五

宝治元年三月、前太政大臣の西園寺の家に御幸ありて花御覽ぜられける日、まゐりてよみ侍りける

後土御門内大臣

おもひきやおい木のさくらよよをへてふたたび春にあはむものとは

もう一例あげよう。『葉黄記』が「三日丙辰、晴、伝聞、於西園寺有和歌御会」(宝治元年三月三日条)と伝える西園寺第への後嵯峨院御幸の折りの、源定通の詠である。定通は時に六十歳。「よよをへてふたたび春に」とは、一旦途絶えてしまった土御門院の皇統が再び巡りきて、姪の通子腹の後嵯峨院が院政を敷き、同腹の兄通光は、従一位太政大臣に任じられた今年の春を言祝いでいる。定通は、この年九月に病で薨ずるが、『葉黄記』は「日来黄病無殊事云々、而此五六日俄増氣、大腹水腫云々、大略無分別、不知前後云々、今夜遂事切了、年六十、高才博覧之人也、院中執権也」(同年九月二十八日条)と、定通は日頃「黄病」ではあったが、別段変わった様子はなく、この五、六日で様態が急変し、今夜事切れたと伝える。「院中執権」とある如く、定通は院評定衆の一員で、七月の評定にもその名がみえ(『葉黄記』同年七月一日条)、さらに子息の出家に際しては、自ら大臣還任並びに大将兼帯を懇望しており(『葉黄記』同年六月四日条)、権勢への執着は、亡くなる直前まで衰えなかつたものと推察される。ここでも「おい木」と自ら詠じるのは、権勢の中枢にあるものが我が栄花を十分に実感した上での謙辞と考えられる。

このように、権門が一種の謙辞として、自身の老いをことさらに言い立てて、我が栄花と対比させる例が『古今和歌集』以来みえる。それは翻って言えば、頂点を極めた者において初めて効果を發揮する詠みぶりとも言えよう。実氏の「山花」題詠や、その後の老残をモチーフにした詠歌の連続も、そういった権力者の一種のポーズの系譜に位置づけられ

るのである。

* * * * *

(資料12)『院御歌合』百十九番・社頭祝・二三七

百十九番 左

太政大臣

八幡山さかゆくみねも越果てて君をぞ祈る身のうれしさに

右

俊成卿女

神ち山すむ月かげも君がよのくもらぬ空に光をぞさす

左われもむかしはをとこ山といへることをかしく侍るを、

君をぞ祈るみをおもふとてといへるちかきうた侍るにや、

ただし身のうれしさとは、いよいよ心ふかくこそ侍らめ、

右神ちすむ月かげおとると申しがたくはべれば、よろしき

為持

当該歌合最後の題「社頭祝」の実氏詠である。この題で各歌人が詠み込んだ社の内訳は、以下の通り。

○伊勢社（「五十鈴川」・「神路山」）――九首（後嵯峨院、俊成卿女、為経、信実、師継、

雅忠、少将内侍、越前、為家）

○石清水社（「石清水」・「八幡山」）――八首（小宰相、実氏、通忠、

通成、雅光、蓮性、下野、禅信）

○住吉社――五首（公基、有教、弁内侍、為氏、経朝）

○春日社（「三笠山」）――二首（実雄、為教）

○賀茂社――一首（公相）

《この他、特定の社を詠まないもの一首〔定雅〕》。

実氏を含めて八人が、石清水社を言祝いでおり、数の上では、和歌の神でもある住吉社をおさえ、伊勢神宮に次いで二番目に多い。

ところで、後嵯峨院が石清水社へ行幸・御幸を繰り返している点について、齊藤歩氏は、仁治三年から文永九年（一二七二）までの三十年間で後嵯峨院の行幸・御幸を「『史籍綜覽』」から調査され、石清水社への行幸・御幸が、賀茂社の二三回を押さえて三二回と最多であることを確認された上で、「特に、石清水八幡宮への崇敬は注目に値する。単に足繁く訪れたというばかりでなく、しばしば七日間の参籠を行っており、最後の御幸は、元寇の前に『異国降伏』を祈願するものであった」と指摘された⁽²⁰⁾。

このような点は、『葉黄記』からも伺え、「上皇始御幸八幡也」（寛元四年四月二十六日条）、「上皇御参籠八幡、可為七箇日云々」（宝治元年二月九日条）、「今朝上皇御参籠八幡」（宝治二年閏十二月八日条）と、院の度々の参詣や参籠が記録されている。また、寛元四年五月二十日条別記に、「上皇自今日七ケ日可有御参籠八幡也、我君殊尊崇宗廟、頼有此臨幸（後鳥羽院初度浄衣御参、正治元年敷）」とみえる如く、近臣の間にも後嵯峨院の石清水社に対する特別な思い入れは伝播していたのである。そして、これら諸資料から伺える後嵯峨院の石清水社に対する崇敬の根底には、次の逸話が大きく影響していると思われる。

（資料13）『古今著聞集』巻第八・好色（本文は「新潮日本古典集成」）

第八十七代の皇帝、後嵯峨天皇と申すは、土御門天皇の第三の皇子なり。父の御門、寛喜三年遠所にて御事ありし後は、御めのと大納言通方卿のもとに、かすかなる御すまひにてわたらせ給へば、御位の事はおぼしめしもよらず。大納言さへ身まかりにけ

れば、仁治二年の冬の比、八幡へ参らせ給ひて、御出家の御いとま申させ給ひけるに、
暁、御宝殿のうちに、「徳はこれ北辰、椿葉の影ふたたび改まる」と、鈴のこゑのや
うにて、まさしく聞えさせ給ひければ、これこそ示現ならめと、うれしくおぼしめし
て還御ありけり。もとの通成中将の亭へはいらせ給はで、御祖母承明門院の土御門の
御所へいらせ給ひて、その年も暮れにけり。(後略)

建長五年(一二五三)成立『古今著聞集』所収の記事である。院は、寛喜三年の父土御
門院崩御後、大叔父に当たるとなる通方のもとに身を寄せていた。そして通方が亡くなった仁治
二年の冬頃、出家の暇乞いに石清水社に参詣したところ、暁方に「徳はこれ北辰、椿葉の
影ふたたび改まる」と、『新撰朗詠集』所収の治世の悠久たることを讃える漢詩の一節が
どこからともなく聞こえてきた。院は、これで出家を思いとどまり、祖母の承明門院の許
でその年の暮れを迎えた。以下、翌仁治三年正月の四条天皇急逝から、順徳院皇子忠成王
踐祚の風聞、一転して幕府の使者城介義景による承明門院方への次期帝決定の報となる(こ
の件は、『増鏡』第四三神山にもみえる)。

ところで、(資料13)の記事は、『古今著聞集』成立後、異本系『なよ竹物語』が抄入
されたものであることが既に指摘されている⁽²⁾。異本系『なよ竹物語』成立の上限について
は、後嵯峨院退位間もない建長三、四年(一二五一―五二)頃も想定として成り立つとす
る説⁽³⁾や、文永九年(一二七二)後嵯峨院崩御後とする説⁽⁴⁾があるが、少なくとも、石清水社
での御託宣の逸話は、後嵯峨院の実体験に基づいたものである。ここでは、その証左の
一つとして、(資料14)後嵯峨院が石清水社に参籠した折り、自身の即位以前の境涯を振
り返って詠んだと思われる詠をあげる。

(資料14)『続古今和歌集』巻第七・神祇歌・七〇三

いはし水木がくれたりしいにしへをおもひいづればすむ心かな

上の句では「君が世にあふさか山のいはし水木がくれたりと思ひけるかな」（『古今和歌集』巻第十九・雑体・壬生忠岑・一〇〇四）を踏まえつつ、（清水が木の下に隠れて見えないように、人に知られることなく沈淪していた私の親王時代）と詠じている。また下の句は、直訳すると（昔の参籠時を思い出せば清らかに澄む私の心であることよ）という意になるが、この点について深津睦夫氏は、（資料14）歌の「意味するところは、即位に際して石清水八幡神の加護があったということを知らないと十分に解せず、「この逸話」が知られていることを前提として歌は採られて「おり「後嵯峨院が命じた勅撰集にこのように入集している」ということは、これが院自身公認の逸話であったことを示している」と指摘される⁽²⁵⁾。上の句の表現や深沢氏の指摘からも『古今著聞集』に抄入された逸話に近い体験が、即位以前の後嵯峨院にあったものと考えてよいであろう。石清水社は、後嵯峨院にとって、帝位への道を示し、出家を思いとどまらせてくれた特別な社なのであった⁽²⁶⁾。

（資料14）詠は、『増鏡』（第五内野の雪）にもみえ、『増鏡』諸注は、「八幡にこもり侍りし時」を、『葉黄記』が「上皇御参籠八幡、可為七箇日云々」と記す、宝治元年二月九日から七日間の参籠時と指摘する⁽²⁷⁾。おそらく、後嵯峨院の石清水社をめぐる逸話は、院が帝位についてまもない頃より語り継がれ、院に連なるものから徐々に宮廷に広まり、最終的に『古今著聞集』や『増鏡』にも収載されるに至ったと考えられる。仮に（資料14）の詠歌年次が宝治元年二月頃であるならば、かねてからの石清水社の御託宣の逸話に、あらたに後嵯峨院の詠が加えられ、院の石清水社に対する崇敬の念を、当該歌合の時点で出詠者が意識したことは十分に想定される。当該歌合の「社頭祝」題において、石清水社が、

住吉社を押さえて八人の歌人に歌材として撰ばれたのも、「社頭祝」題から後嵯峨院↓石清水社の繋がりやを連想した者が多かったからではないだろうか。

次に、実氏以外で石清水社を言祝いだ「社頭祝」題詠をみてみよう。「石清みづながれ
てきよきわが国を君の心に千よもまかせよ」(百十八番・右・小宰相)、「君がよのため
しにすめる石清みづながれ久しきかげはみゆらむ」(百廿番・左・通忠)、「君のみやく
みてしるらむ石清みづたえぬながれのちよの行末」(百廿四番・左・通成)、「石清みづ
きよきながれをむすびても万代いのる神の乙女子」(同・右・雅光)、「うごきなき山ま
つがねのいはしみづすむべきちよのかげぞ久しき」(百廿七番・左・沙弥蓮性)、「千と
せへむながれもしるし石清みづにぎりなきよの末もあらはる」(同・右・下野)、「君す
まむながれ絶えせぬ石清みづいはねどしるき千代のかげかな」(百廿九番・右・沙弥禅信)
等と、社名から「清い」「流れ」といった縁語を詠み込んで、治世の恒久を希求、或いは
言祝ぐ詠となつている。

それに比して、実氏の場合、「八幡山さかゆくみねも越果てて」「身のうれしさ」と、
従一位太政大臣にまで昇り詰め官を辞した自分が⁽²⁸⁾後はひたすら後嵯峨院政の長久を祈る
のみであると、詠者主体にかなり引きつけた内容となつている。「身のうれしさ」には、
実氏が官を極めただけでなく、姞子腹の親王が帝位に就き外戚となつたことも含まれよう。

* * * * *

では、最終題の詠歌内容を確認した上で、改めて、実氏の当該歌合における詠歌態度を
考えてみよう。実氏は、二題目「山花」から六題目「野外雪」までで、あたかも齢を重ね
た自身を写し取るような(或いはそのような解釈も許されるような)詠を繰り返していた。
そして、最終「社頭祝」題詠では、後嵯峨院ゆかりの石清水社を詠み込み、御代を言祝ぐ

嬉しさと共に、榮花を極めた我が身の喜びを高らかに謳っている。

つまり、当該歌合の実氏詠は、へこれから繁栄するに違いない後嵯峨院政において、今上帝の外戚、また関東申次や評定衆でもある自分が、齢を重ねていよいよ重きをなす存在である〜と、歌合の主催者後嵯峨院や他の歌人達に主張しているように読みとれるのである。実氏にとって当該歌合における一番の狙いは、院政初発期に際して自身の政治姿勢や政治的位置を喧伝することにあつたのではないだろうか。

そのように考えれば、冒頭の「早春霞」題で、主体を敢えて臘化した構造で「たちや出でまし」と詠じた意図も理解されよう。すなわち、歌合冒頭題において実氏は、「霞をこめて」に後嵯峨院政の約束された繁栄を託すと同時に、後嵯峨院政の表舞台へ自らが「たちや出でまし」と暗に主張しているのである。⁽²⁰⁾「早春霞」題であるため、自身の主張を余りにも露骨に表せば、題にそぐわない詠となる為、「たちや出でまし」の主体をほかすことで叙景歌の裏に自身の政治的主張を詠み込んだのではないだろうか。

このように捉えた上で、実氏の出詠歌十首を見渡すと、冒頭詠と最終詠とが、いずれも後嵯峨院政への祝言と実氏の主張とが同時に詠み込まれている点で通底しており、首尾が対の構造となつていくことに気付く。すなわち、実氏は、先に確認した老残詠の繰り返しも含めて、自身の政治的主張を、十首のどこに配置しどのように反映させるのかにかなりの意を払い、いわば戦略的に歌作に及んだものと考えられるのである。

* * * * *

後嵯峨院は、当該歌合の翌年七月二十五日に、為家を撰者として勅撰集撰集を下命、『宝治百首』を各歌人に詠進せしめた後、建長三年（一二五一）十二月に十番目の勅撰集として、『続後撰和歌集』が完成奏上された。その最終巻巻頭に、後嵯峨院と実氏の以下の如

き贈答歌が配置されている。

(資料15) 『続後撰和歌集』 卷第二十・賀歌・一三三〇、一三三一

宝治二年、さきのおほきおほいまうちぎみの西園寺のいへに御幸ありてかへらせ給ふ御おくり物に、代代のみかどの御本たてまつるとて、つつみがみにかきつけ侍りける

前太政大臣

つたへきくひじりの代代のあとを見てふるきをうつすみちならばなん

御返し

太上天皇

しらざりしむかしにいまやかへりなんかしこき代代のあとならひなば

この贈答歌について、『続後撰和歌集』の二年後に成立した『古今著聞集』は、「この事、昔は天暦の御門いまだ御子にておはしましたしける時、貞信公の御もとにわたらせおはしましたりける時、御贈物に御手本参らせられける時、君がため祝ふ心のふかければ聖の御代にあとならへとて 御返し、をしへおくことたがはずは行末の道遠くとも跡はまどはじ

この御歌ども『後撰』に入りたり。このためしを思しめしけるにこそ」(巻第五和歌)

と、『後撰和歌集』巻二十所収の村上天皇と藤原忠平との贈答歌にその先例をみている。

また、樋口芳麻呂氏は、この後嵯峨院・実氏兩詠を『続後撰和歌集』賀歌巻頭に据えた点について、「後撰集、更には後撰集を撰進せしめられた天暦の治世を慕い、この続後撰集の撰進される後嵯峨院・後深草天皇の御世も、同じく聖代である様にと祈る為家のひそかな願いが籠められている様に思われる」とされた。さらに、樋口氏の説を承け、佐藤恒雄氏は、この贈答歌を含む巻頭七首までが(一首を除いて)後嵯峨院と実氏の詠であることに関連して、「実氏の歌は、『賀歌』巻頭部分に象徴されるように、多く、後嵯峨院との連関において扱われている。入集総数三六首(定家四三首に次ぐ入集歌数第二位・稿者

注)のうち、賀の歌が五首もあるのをはじめ、ほとんどが公人実氏の詠作であるのはそのため。「実氏厚遇が第一の目的だったのではなく、後嵯峨院讃頌と不即不離の關係にある故の厚遇であったことを意味するもの」で「後嵯峨院の世を、延喜・天曆に典型を見るような、歌道と政事が一体をなした理想の状態にするためには、守文の君を助ける外戚実氏の内輔を欠くことはできない」という為家の思想の反映と指摘されたのである。^(3.1)

当該歌合において、「君がためなほ万代の春の色に霞初めたる明ぼのの空」(二番右・早春霞・俊成卿女)、「君がへむ千とせの秋のはじめとてしらする風も松に吹くなり」(四十二番右・初秋・藤原実雄)、「わかのうらや昔にかへる波のうへに光あまねき秋のよの月」(六十四番左・海辺月・藤原経朝)、「けぬがうへにまた跡つけよ玉ぼこのみちある御代の野べの白雪」(六十九番右・野外雪・藤原公相)等、祝いに言寄せた詠歌が多くみえることから、佐藤恒雄氏は、当該歌合を「政教的色あいの強い」後嵯峨院仙洞歌壇の場の一つとされた。^(3.2) 本稿では、佐藤氏の説を承けつつも、実氏は、自らが院の支えであり御代を支えていく老臣であると自負し、その気概を、院政初発期にあたる宝治元年『院御歌合』の詠に直接間接両様に示しており、臣下としてあくまで受動的に御代を言祝いでいる他の歌人達とは、詠みぶりに一線を画すことを指摘し得るのである。

四 西園寺公相と和歌

公相(一二二三〜一二六七)は、実氏男。嘉禎二年(一二三六)従三位、正嘉元年(一二五七)従一位。弘長元年(一二六一)には太政大臣に任じられるも、文永四年(一二六七)十月、父実氏より早く、四十五歳で亡くなっている。歌歴としては、『続後撰和歌集』に六首入集、勅撰歌人となる。『続古今和歌集』には十首入集。歌人としての活動は、父

実氏同様活発で、宝治元年『院御歌合』、続く『宝治百首』に詠進、建長三年（一二五一）九月一三夜、後嵯峨院仙洞で行われた『影供歌合』にもその名がみえる。文永二年の『続古今和歌集』奏覧前夜に催された、『龜山殿五首歌合』にも出詠しており、当時の所謂盛儀の催しには出詠しているといつてよい。では、具体的にはどういった詠を残しているか。以下、粗々辿ってみよう。

公相の『院御歌合』出詠歌は以下の通り。

「浅みどり春の日かずもしられけりまだ色うすき山の霞に」（早春霞・四番右・八）、「かづらきやいづこを花とたづねまし梢につづく峰の白雲」（山花・十七番右・三四）、「いまよりはまたでやきかむ郭公なきふるしつるさみだれの比」（五月郭公・三十番右・六〇）、「けふはまた夕をわきて久堅の空よりすぐる秋の初かぜ」（初秋風・四十三番右・八六）、「おしてるやなにはのうらの夕なぎにあしの末ばをいづる月かげ」（海辺月・五十六番右・一一二）、「けぬがうへにまた跡つけよ玉ぼこのみちある御代の野べの白雪」（野外雪・六十九番右・一三八）、「名取川おもひ朽ちても年はへぬまだあらはれぬ瀬瀬の埋木」（忍久恋・八十二番右・一六四）、「わすれぬも我が身のとがとるばかりありしにかはる暁もがな」（逢不遇恋・九十五番右・一九〇）、「いくかへりなれぬ嵐もしくるらんみやこを忍ぶよはの枕に」（旅宿嵐・百八番右・二一六）、「君がよをいのる心のしるしあらば久しくちぎれかものみづがき」（社頭祝・百二十一番右・二四二）。

総じて、題を穩当に詠みこなしていると言えようか。詠者主体の主張を織り込んだと思しき詠は殆どみえず、「野外雪」題詠、「社頭祝」題詠の二首で後嵯峨院政への祝言を詠み込んでいる程度である。この内、後者は、題に已に祝言が設定されており、こういった点は、父実氏が出詠歌を有効に活用し、戦略的に自己の主張を展開していったのと極めて

対照的である。

こういつた傾向は、『宝治百首』にも看取され、「ちとせまで松にとのみやかかるらん花さきそむる春の藤波」(松上藤・七二九)、「ひさかたの空にあらしや払ふらん玉しく庭をみがく月影」(庭月・一七二八)、「九重に千代をかさねてかざすかなけふをりえたる白菊の花」(重陽宴・一八四八)、「二三二六夕されば塩ひのかたになく千鳥声をば千代にや千代とぞ鳴く」(鴻千鳥・二三二六)、「ちはやぶる神のやしろのみしめなはながくも絶えじみよの行末」(寄社歌・三九二五)、「みかさ山峰たちのぼる朝日影空にくもらぬよろづ代の春」(寄日祝・三九六五)と、もともと祝意がこめられやすい題において後嵯峨院政への祝言が見て取れる。

『続古今和歌集』成立直前に催された『亀山殿五首歌合』における出詠歌は以下の五首。「大井川みせきの水にかげさえて月もみなぎるせぜの岩浪」(亀山・河月・三番右・六)、「女郎花なびく野ばらの露わけてわが妻とてや鹿の鳴くらん」(亀山・野鹿・十八右番・三三)、「小倉山ひかげうつろふ色そへて雲井にみゆる秋の紅葉ば」(亀山・山紅葉・二十六番右・四九)、「在明の月のかたみもまだしらずつれなきはうき人のこころに」(亀山・不逢恋・三十七番右・六七)、「あはれなど今はかげみぬむれみづながれて猶も袖ぬらすらん」(亀山・絶恋・四十七番右・八七)と、いずれも題について過不足なく詠み込んでいる。

このように、主な百首詠、歌合出詠歌を見る限り、公相については、父実氏に比べるとあまり露骨に自身の政治的主張を詠み込む傾向はみえない。ただし、公相は、先にも触れた通り、実氏に先立ち四十五歳で亡くなっており、政治家として重みを増していく前に生涯を閉じたことも、或いは関係しているのかもしれない。

〔注〕

(1) 広橋守光による抄出本。尾上陽介氏「『民経記』と曆記・日次記」(五味文彦氏編『日記に中世を読む』(吉川弘文館・平10)所収)参照。

(2) 『平戸記』仁治三年正月十九日条に、「彼宮者祖母承明門院令扶持申給、故通方卿雖奉養育、事八變改之後、所令坐彼院給也」とみえる。

(3) 『民経記』仁治三年正月二十日条は、「若宮御坐、故土御門院御末子、春秋廿三、御母故宰相中将通宗卿女、年来為有御出家、被定御師匠、(真忠法印)而自然遅々、不慮御運可貴者歟」と、出家の意志はあつたものの、遅滞していたと伝える。

また、『増鏡』(第四 三神山)は、「土御門殿の宮は廿にもあまり給ぬれど、御冠、沙汰もなし。城興寺宮僧正真性ときこゆる、御弟子にとかたらひ申給ければ、さやうにもと思して、女院にもほのめかし申させ給けるを、いとあるまじき事とのみ諫めきこえさせ給」と記す。

(4) 『民経記』仁治三年正月十一日条に、「於今者後堀川院御後胤絶畢、土御門・佐渡兩院皇子当其撰給歟、帝位事猶東夷計也」とみえる。

(5) 『平戸記』仁治三年正月十九日条は、「入夜使者兩人参一条殿、被召御前云々、其後向相国禪門許、即面謁云々、両所共以不請之氣柄焉云々、東使頗答以笈云々」と鎌倉幕府からの次期帝決定の報を聞いた道家・公経の不满を伝える。

(6) 『平戸記』仁治三年正月十七日条は、「阿波院宮依武士縁、一定御出立之由、世以風聞、件縁者、前内府(言通公)妻者泰時重時等姉妹也、如此之間、私差遣使者於関東、有慇勤之旨云々」の如き風聞を伝える。

(7) 例えば、源頭房は、娘賢子入内を賀した藤原師実詠「ゆきつもるとしのしるしにいとどしくちとせのまつのはなさくぞ見る」(『金葉和歌集』巻第五・賀部・三二九)に対して「つもるべしゆきつもるべし君がよはまつのはなさくちたびみるまで」(同・三三〇)と返し、師実の栄えを言祝いでいる。

(8) 大系本『増鏡』(底本、学習院大学付属図書館所蔵室町時代古写本)は、第五内野の雪における公経詠「山ざくら峯にも尾にも植へをかんみぬ世の春を人や忍と」傍線部について、底本の仮名遣いの右傍に歴史的仮名遣いを注記した上で、「植えておこう」と解釈する。

(9) 例えば、『新古今増抄』当該歌注に「たがうへをきしと先祖の善根をよるこぶなり」とみえる他、『八代集抄』にも「遅かれとかれ終に任大臣の心を梅の咲になぞらへて、たがうへし種にてかゝる御繁昌ぞとの御悦びの心也」とある。

(10) 小林強氏「後嵯峨院の詠作活動に関する基礎的考察」(『中世文芸論稿』第16号平5・3)に拠ると、讓位以前の詠作が確実な現存御製は、本稿で取り上げた詠以外では三首のみであり、いずれも寛元年間の詠である。小林氏が規定される(存疑)歌は含まない。なお、最近刊行された小松茂美氏『天皇の書』(文藝春秋・平18)には、この詠について「後嵯峨天皇は勅答の詠を返す」との記述がみえる。

(11) 『平戸記』仁治三年四月十五日条、五月二十八日条、『民経記』同年七月十日条等。

(12) なお、実氏は公経の没後、以下の如き追想歌を詠んでいる。

『続後撰和歌集』巻第十八・雑歌下・一二五九
入道太政大臣身まかりにける秋のすゑ、西園寺にこもりゐてよみ侍りける

前太政大臣

なき人のかたみもかなしうゑおきてはてはちりぬる庭のみみぢば

(13) 実氏は、二人の中宮（大宮院姞子・東二条院公子）の父となり、二代の天皇（後深草・龜山）の外祖父となる。

(14) この後嵯峨院、実氏兩詠は、いずれも『続古今和歌集』に入集（巻第二十・賀歌・一八六四・一八六五・一八六七）。

(15) 定家詠「暮れて行く春の霞を猶こめてへだつるをちにたちやわかれん」について、久保田淳氏は、『訳注藤原定家全歌集』（昭和60年 河出書房新社）で、「暮春の霞にさらに雲がたちこめて隔てている遠くの方に、春は、そして又人は別れて行くのであろうか」と、「こめて」を自動詞的に解釈されている。当該歌についても自動詞的な解釈の可能性もあるが、いずれにせよ、早春にも拘わらず霞が早くも立ち込めている状況を讀み取る点では一致しよう。

(16) 同題十三番右の為家詠「いつのまに霞の衣うち消えし雪ふる空も春はたつらむ」について、「おほよそ立春早春はいささかおもひわくべきにやとみえ侍れど、たつ春の題に早春の心よめらんよりはことたがひ侍らじとみゆるし侍る」と、本来立春と早春はある程度区別して詠むべきだが、立春題に早春題を詠むよりはよいと為家は判詞で指摘しており、実際「あまのとを明くるやおそき立つ春の霞みてみゆるよこ雲の空」（七番左・通成・勝）、「あまの原雪げの空のかすまずは立ちける春もえやはわかまし」（八番右・弁内侍・勝）等には勝が付されている（但し、十三番の為家詠については「かすみの衣にひかれて立つとおきてはべる、尤まけ侍るべし」とみえる）。

(17) 今回は用例から除外したが、「さみだれのふりにし友とかたらへばなれもこととふほととぎすかな」（五月郭公・下野・72）にも或いは、視点人物の「老い」を讀み取

って良いのかもしれない。また、「月ゆゑと人にはいひてたれをかもめでても恋のお
いとなるらん」(忍久恋・信実・168)は、比喩と判断して用例に加えなかつた。

(18) 例えば、「新編日本古典文学全集」『古今和歌集』(小沢正夫 松田成徳氏校注・訳
平成6年 小学館) 当該歌脚注に、「娘の栄達を祝い、言外によくぞ自分はここまで
きたものだという、ほつとした気持が表明されている」とみえる。

(19) 『重修増鏡詳解』(和田英松・佐藤球氏著 明治書院 大正14年)は、「朽ち果た
る桜の老木にも、春は花のさき栄ゆるなるが、その如く、わが身も老朽に及びて、太
政大臣にのぼり、牛車をさへゆるされて、御恵の露に浴し、栄花をきはむれば、この
花を、わが身によそへて、今日はかざしにさゝむと、思ひ侍りとの意なり」と指摘す
る。

(20) 「理想としての「後嵯峨院時代」」(『日本文学』584号 平成14年2月)。

(21) 後嵯峨院が踐祚以前に出家を考えていたことについては、『民経記』仁治三年正月
二十日条に「年来為有御出家、被定御師匠、(真忠法印、)而自然遅々、不慮御運可
貴者歟」とみえる。

(22) 早くは、江戸後期の国学者岸本由豆流の『鳴門中将物語考証』に指摘がみえる。

(23) 平林文雄氏『なよ竹物語研究並に総索引』(昭和49年 白帝社)
総説篇二、成立・内容および文学的特色 物語の成立参照。

(24) 『なよ竹物語絵巻 直幹申文絵詞』(日本絵巻大成20 昭和53年 中央公論社)久
保田淳氏解説参照。

(25) 「『増鏡』——「王法仏法相依論」——」(『国文学解釈と鑑賞』第57巻12号 平成4年
12月) 参照。

(26) 三角洋一氏は、「後嵯峨院の踐祚が石清水の神意によるということ、その後、兩統迭立時代になってからも皇室の尊崇は篤」と指摘された上で、後深草院中宮東二条院（実氏女）の遊義門院御産の折り、後深草院の「御心の内には、石清水のかたを念じ給つゝ、御手をとらへて泣きたまふ」（第八あすか川）様や、後宇多、後醍醐の石清水社への行幸・御幸、蒙古襲来の折りの石清水社奇譚等が、『増鏡』において語られていることを示された。「『増鏡』の和歌―神祇歌と賀歌をめぐって―」（『王朝和歌と史的展開』≒平成9年 笠間書院≒所収）参照。

(27) 『重修増鏡詳解』、岩波大系本『増鏡』参照。

(28) 当該歌は、『玉葉和歌集』巻第二十・神祇歌・二七六五には「後久我前太政大臣」（源通光）として入集する。岩佐美代子氏は、『玉葉和歌集全注釈』下巻（平成8年 笠間書院）の中で、通光詠という前提のもと、「語釈」「やはた山」の項で「やはた山―石清水八幡（源氏の祖神、作者通光の氏神）のある男山」と指摘された上で、「祖神、石清水八幡を祀る八幡山の坂を昇り、ついに峰を越えるように、榮職を昇りつめて従一位太政大臣に至った今は、ひたすら我が君の御榮えをのみ祈るよ。我が身の嬉しさにつけても」と通釈をされている。

(29) 「表だつた場へ出る」という意の「立ち出づ」の例歌は、「老の波かひある浦に立ちいでてしほたるるあまを誰かとがめむ」（『源氏物語』若菜上・明石の尼君）、「おいのなみなほたちいづるわかのうらにあはれはかけよすみよしの神」（『千五百番歌合』千四百九十三番左・二九八六・讃岐）等散見する。

(30) 「統後撰目録序残欠とその意義」（『国語と国文学』第36巻第9号 昭和34年9月）。

(31) 「『統後撰集』の当代的性格」（『国語国文』第37巻第3号 昭和43年3月）。

(32) 佐藤氏前掲(2) 論文参照。

〔付記〕

二節は「西園寺公経と後嵯峨天皇―『民経記』仁治三年四月五日条記載贈答歌をよむ」(『古代中世国文学』第22号・平成18年6月)、三節は「宝治元年『院御歌合』の西園寺実氏」(『国語と国文学』第八十三卷第六号 平成18年6月)を基に再構成したものである。

II 研究報告（第二部）

宝治元年『院御歌合』注釈

宝治元年『院御歌合』注釈——「早春霞」題——

位藤 邦生・藤川 功和

はじめに

『院御歌合』（『百三十番歌合』、『後嵯峨院歌合』、『宝治歌合』等とも、本稿では「新編国歌大観」に拠る）は、後嵯峨院政初期の宝治元年（一二四七）に各歌人が出詠、加判を経て成立した、出詠歌人二十六人による十題、百三十番、総歌数二百六十首に及ぶ歌合である。仁治二年（一二四二）八月に八十歳で没した父藤原定家の跡を継いで、歌壇の指導者として歩み出した為家が判者を勤めており、為家単独撰である『統後撰和歌集』成立前夜の彼の和歌観や、後嵯峨院歌壇初期の内実を伺う上からも、当該歌合の持つ意味は少なくない。当該歌合に関しては、諸本の整理がなされている他、主に歌壇史や後嵯峨院歌壇研究の一環として先行研究がみえるが、一方で、当該歌合の注釈は未だなされていない。

位藤邦生を代表とする広島大学中世文芸研究会は、平成十六年四月から平成十七年三月にかけてほぼ週一回のペースで当該歌合の輪読を試みた。本稿は、その輪読の成果をもとに、位藤邦生・藤川功和が、あらためて検討した結果を公にし、大方の批正を仰ぐもので

ある。本稿では、「早春霞」題の十三番二十六首の注釈を示す。なお、研究会の輪読における担当者は以下の如くである。

一番—相原宏美（大学院文学研究科博士課程後期）、二番—大園岳雄（大学院文学研究科研究生）、三番—新居和美（大学院文学研究科博士課程後期）、四番—金岡文緒（大学院文学研究科博士課程前期）、五番—位藤邦生・藤川功和、六番—吉川洋子（文学部二年生）、七番—藤川、八番—金岡、九番—吉川、十番—金岡、十一番—位藤・藤川、十二番—新居、十三番—相原（所属は輪読時点）

凡 例

一、底本は、群書類従本（巻第二百所収）を用いた。校合した諸本と略号は、以下の通り。

（書）—書陵部蔵本（『新編国歌大観』所収）、（聚）—書陵部蔵歌合類聚本（『大日本史料』第五篇二十四所収）、（永）—永青文庫本（『細川家永青文庫叢刊』第八卷所収）、（内）—内閣文庫「百三十番歌合（外題）」本、（支）—九州大学支子文庫本

一、本文冒頭にある内題、題目録、作者目録の注釈はこれを略した。

一、番全体の本文と【校異】を示した後、【他書所伝】、【本歌】（適宜【参考歌】を併記）、【語釈】【通釈】を掲げた。

一、【語釈】の内重複する語については、紙幅の関係上略した。

一、表記や送り仮名の異同はこれを略した。

一、見せけちや補入符号のある箇所は、訂正後の本文を採用した。

一、□は読み取り得ていない箇所を示す。

一、翻字本文には適宜読点を施し、字体は現行の活字体に改めた。

一、本文中、異同の存する箇所は、傍線及びイ、ロの如く付し、語釈を施した箇所は、本文右傍に①、②の如く番号を付した。

一、当該歌合以外の和歌の引用は、全て『新編国歌大観』に拠った。

一、引用文中、適宜、傍線、振り仮名等を付した。

一、主な参考文献は、巻末に一括して示した。

〈一番〉

一番 早春霞

左イ 女房

いつくより春はきぬらん天の戸の明るをまたすたつ霞哉

右 承明門院小宰相

春きても猶氷しく衣川霞もいく重立わたるらん

左歌ホ 首尾相叶て、心詞花麗の姿にこそ侍るめれ、

右歌衣川氷しくはかりにて、かけても用なく見え侍る

うへに、猶氷れる程ならば、霞幾重トとは事たかひて侍らん、いかさまにも、以左為勝、

【校異】

イ 勝ーナシ（書） ロ ナシー続古今、春上、ハ はーの（支）

ニ をーも（永） ホ 左ー左の（書） ヘ 右ー右の（書）（永）

ト とはーとまでは（書）（永）、とはは（聚）（内）（支） チ て

ーてや（書）（永） リ にもーにても（永）

【他書所伝】

〈左歌〉

『続古今和歌集』巻第一・春歌上・六

宝治二年歌合に、早春霞を

太上天皇

いつくよりはるはきぬらんあまの戸のあくるもまたすたつかすみかな

『題林愚抄』第一・春部一・八五

（早春霞）

続古

太上天皇

いづこより春はきぬらんあまの戸のあくるもまたす立つ霞かな

〈右歌〉 ナシ

【参考歌】

〈左歌〉

『隣女集』巻第二・立春・一八八

いづくよりくる春なればあまのとのあくるもまたずかすみそむらん
【語釈】

①早春霞―「早春霞」題の先行例としては、慈鎮・定家・家隆・隆祐らが参加した元仁（『隆祐集』の「永仁」は誤り）二年（一二二五）三月、九条大納言（基家）家三十首御会がみえ、「早春霞」はるのきる霞の衣たちそめてまちしもしるしみの山本（『拾玉集』第四・詠三十首和歌・四六二二）、「早春霞」たちそめてけふやいくかの朝まだき霞もなれぬ春のさ衣（『拾遺愚草』中・二〇五八）等が確認できる。

②女房―後嵯峨院を指す。歌合において、御製を「女房」と記す先例は、正治二年九月『院当座歌合』、正治二年十月『院当座歌合』、『仙洞十人歌合』、『老若五十首歌合』等に確認できる。『安斎随筆』「歌合称『女房』禁中御歌合」が、「主上の御歌をば作者を女房とするす。」（中略）判者判断して勝負を分くるにはばかりある故、女房の歌にしてはばかりなく判断すべきがためなり」と記す如く、本来は勝負付けにおいて、判者が憚りなく歌の優劣を判定するためのものであったが、後嵯峨院政期には既に記号化しており、後嵯峨院や宗尊親王の「女房」に負が付される例はみえない。後嵯峨院は、土御門院皇子で、母は源通子。仁治三年（一二四二）四条天皇の急逝に伴い即位。寛元四年（一二四六）正月、後深草天皇に讓位、長く院政を敷いた。『統後撰和歌集』、『統古今和歌集』と、勅撰集を二度撰進させる。文永九年（一二七二）崩御。

③天の戸―もとは記紀にみえる高天原の入り口「天の岩戸」に同じ。当該歌では、「あまのとのあくるけしきもしづかにてくもるよりこそはるはたちけれ」（『新勅撰和歌集』巻第一・春歌上・二・藤原俊成）と同様、「明」と併せて用いられ、夜明けを喩える。

④承明門院小宰相―藤原家隆女。生没年未詳。土御門院生母承明門院在子に仕えた女房歌人。土御門院配流後は、後嵯峨院歌壇で活躍。

⑤衣川―陸奥国の歌枕。「夜をさむみいはまのこほりむすびあひていくへともなきころもがはかな」（永久三年『内大臣家後度歌合』・一・藤原忠通）等、嚴寒の情景を詠み込んだ例歌が散見する。また、地名の「衣」から、「たもとよりおつる涙はみちのくの衣河とぞいふべかりける」（『拾遺和歌集』巻第十二・恋二・七六二・よみ人しらす）の如く、縁語で結ばれる例がみえる。当該歌では、「うちつけに春のかすみを見わたせばころもがはにぞたちわたりける」（『千類集』・二）と同様、「霞」「立つ」と、「衣」「裁つ」が各々縁語で結ばれている。

⑥首尾相叶―上の句と下の句とが無理なく結びついている事。「左歌、首尾相叶、ふるまひもありてをかし」（天徳四年『内裏歌合』十番・実頼判）、「左首尾相叶ひてころ詞よろしくこそ侍れ」（『別雷社歌合』十一番・俊成判）等の用例がみえる。

⑦花麗―花やかな麗しさをいう。『瑩玉集』「やさしく花なる歌」「天の戸をおし開けがたの雲間より神代の月のかげぞ残れる」「松島やをじまの磯にあざりせし海士の袖こそかくはぬれしか」二首の歌評、

「姿詞花麗を先として、遠く世の塵をはなれたり。中にははじめの歌は、いかになみくの品にあらず」とあるのによれば、「やさしさや端正清純な美しさ、品格をも含有する。

⑧事たかひて「千五百番歌合」雲つづくとをちのさとのゆふがすみたえまたえまにかへるかりがね（三十九番左・七七・小侍従）に対する忠良判「左、雲つづくとおきて又たえまたえまと侍る、はじめをはりことたがひてや」の如く、一首の中で詠み込まれた言葉同士に論理的な矛盾が生じている場合等を指す。

【通釈】

一番 早春の霞

左歌 勝

女房（後嵯峨院）

いったいどこから春はやってきたのだろうか。（天の岩戸が開くかのように）夜が明けるのを待たずに立つ霞であるよ。

右歌

承明門院小宰相

春が来てもまだ（まるで衣を敷いたように）一面に氷が張っている衣川には、霞も幾重にか、裁ち重ねた衣のように立ちわたっていることであろう。

【判詞】左歌は上下の句がよく合っており、心（歌の内容）・詞（表現）とも品格のある美しい姿をしているようです。右歌の衣川は氷が敷きつめているというばかりで、詠み込む必要はまったくなく見えます上に、まだ氷っている状態ならば、「霞幾重」とは矛盾してしまうでしょう。どのように見ましても、左を勝とする。

〈二番〉

二番

左挿

太政大臣

右

俊成卿女

皇の御代さかふへき春なれば霞をこめて立や出まし
君かため猶万代の春の色に霞そめたる明ほの、空
左の御代栄ふへき春、世皆可希事に侍るうへに、
下句、そのいはれ聞えて、おかしく侍るにや、右君かため
猶万代といへる、又捨かたく侍れば、両方の祝は、
なすらへて持とす、

【校異】

イ 持一ナシ（書） 口 ふーゆ（書）（永） 八 立一春（支）

ニ 卿一ナシ（支） ホ ふーゆ（書） へ 可希事一こひねがふべ

きこと（書）（聚）（永）（内）（支） ト 右一ナシ（書） チ 猶一

を（支） リ とーのと（書）（永） 又 祝は一祝言を（書）、祝は

（聚）、祝言（永） ル 持とす一為持（書）（聚）（永）（内）（支）

【他書所伝】

〈左歌〉 ナシ 〈右歌〉 ナシ

【語釈】

①太政大臣―現任なら源通光だが、『夫木和歌抄』収載当該歌合出詠歌の作者記載（「常盤井入道太政大臣」）や歌の内容から、前太政

大臣西園寺実氏と推定される。実氏は、建久五年（一一九四）に西園寺公経と一条能保女の間生まれ。仁治三年（一二四二）女姝子が後嵯峨天皇に入内、翌年久仁親王（後深草天皇）が誕生。当該歌合時点で、実氏は今上帝の外祖父。院評定衆、関東申次の任にもあり、後嵯峨院政下において極めて重要な位置にあった。文永六年（一二六九）没。

②皇―「すべらぎ」「すめらぎ」「すめろぎ」等とも。天皇の尊称。多く枕詞的に用いられ、当該歌では、「御代」にかかる。

③霞をこめて―他動詞としての「こむ」は、一義的には、「秋の月ひとへにあかぬものならばなみだをこめてやどしてぞみる」（『伊勢集』・三〇二）の如く、「（対象を）ある物の中へ入れる」とじ込める」という意で用いられ、当該歌の場合、「霞を（散らすことなく一面に）」とじ込めて」という意になる。「かすみさへたなびくのべのまつなればそらにぞ君がちよはしらるる」（『後拾遺和歌集』第七・賀・四二八・源兼澄）では、子の日に小松を引く男女の姿によせて、「たなびく」に「引く」を掛け、霞棚引く空にまで東三条院の長寿が約束されたと詠じる。また、定家詠「春の色をいく万代かみなせ河霞のほらの苔のみどりに」（『建保名所百首』春二十首・水無瀬河・一九五）の如く、霞は、仙洞御所を連想させる表現でもあり、当該歌の「霞」は、後嵯峨院政の恒久を暗示する祝言として機能している。

④立や出まし―春が立ち出るの意。「立」は「霞」の縁語でもある。

一方、「郭公こゑまつほどはかたをかのもりのしづくにたちやぬれまし」（『紫式部集』・一三三）、「かぞへつるこよひの月はくもるともまつとしきかばたちやいでまし」（『実家集』・三二六）等の如く、「やくまし」は多く「ししようか」と視点人物の意志を表すことから、「皇の御代」を言祝ぐ実氏自身の主張をも含んでいると解せる。「老の波かひある浦に立ちいでてしほたるるあまを誰かとがめむ」（『源氏物語』若菜上・明石の尼君）、「おいのなみなほたちいづるわかのうちにあはれはかけよすみよしの神」（『千五百番歌合』千四百九十三番左・二九八六・讃岐）等、「立ち出づ」には、「表だつた場へ出る」という意があり、今上帝の外祖父や院の評定衆として今後の院政下において一役買おうとする自らの意思を叙景歌の裏に暗に主張するか。

⑤俊成卿女―藤原盛頼女。俊成孫。生没年未詳。後鳥羽院歌壇で歌人として開花。晩年は播磨国越部庄に住した。

⑥猶万代の春―御代の長久を意味する「万代の春」に「さらに、ますます」という意の「猶」を加え誇張する。「うごきなくなほ万代ぞたのむべきはこやの山のみねの松かげ」（『千載和歌集』卷第十・賀歌・六二五・式子内親王）がその例。

⑦春の色―漢語「春色」を源泉とし、春の気配を指す。早くは『古今和歌集』に「春の色のいたりいたらぬさとはあらじさけるさかさる花の見ゆらむ」（卷第二・春歌下・九三・よみ人しらず）とある。

⑧霞そめたる―霞が棚引き始める意。左歌同様、霞が立つことに祝

意が込められている。

◎両方の祝は、なすらへて持とす―『八雲御抄』巻第一・正義部に「祝歌は勝也」とみえ、祝の心を詠み込んだ歌は、単なる歌の優劣から離れた評価を受けていた。

【通釈】

二番

左歌 持

太政大臣（西園寺実氏）

天皇と院の御代がこれから弥々栄えるであろう今年の春であるので、霞を（散らすことなく）とじ込めて、春がその中から立ち出るように、私も補佐役として一役買おう。

右歌

俊成卿女

院の（治世を言祝ぐ）ために限らない栄えを湛えるこの春の様子に（さらに祝意を加えるかのように）霞み始める明け方の空よ。

【判詞】左歌の「御代栄ふへき春」は、世の人々皆が希求するはずの事であります上に、下の句は、その（院の治世が繁栄する）証が聞こえて、見事でしょうか。右歌の「君かため猶万代」という（表現は）、又捨てがたいですので、両歌の祝意は、肩を並べて持とする。

〔三番〕

三番

左

権大納言源朝臣通忠

かすか野の草のはつかに雪消て緑も寒く霞む比かな

右

権大納言藤原朝臣実雄

梓弓をして春こそきにけらし野山をこめて霞たなひく

左のかすか野、めつらしき所は見え侍らぬうへに、

みとりも寒くかすむ比かなと侍るや、少し心ゆかぬ

やうに侍らん、右の野山のかすみをこめて、歌から

いさゝか立増ると申へくや、

【校異】

イ 勝一ナシ（書） 口 の一ナシ（永） 八 かすみをこめて霞

をしこめて（聚）（内）、霞はをしこめて（永）

※九州大学支子文庫本は、大幅に本文が異なるので全文を示す。

三番

左

権大納言源朝臣通忠

梓弓おして春こそきにけらし野山をこめて霞たなひく

右

本に此番の哥落敷□無之

【他書所伝】

〔左歌〕ナシ

〈右歌〉

『題林愚抄』第一・春部一・九〇

宝治御歌合

実雄卿

梓弓おして春こそきにけらし野山をこめてかすみたなびく

【語釈】

①権大納言源朝臣通忠―源通光男。母は藤原範光女。建保四年（一二二六）生まれ。正二位大納言に至る。建長二年（一二五〇）没。

②かすか野―春日野。大和国の歌枕。現在の奈良公園一帯の丘陵地をさす。「かすがのはゆきのみつむとみしかどもおひいづるものはわかななりけり」（『後拾遺和歌集』第一・春上・三五・和泉式部）、「春日野のしたもえわたる草の上につれなくみゆる春のあは雪」（『新古今和歌集』巻第一・春歌上・十・源国信）等、春が到来しても春日野には未だ雪が降り積もっているという例歌が散見する。

③草のはつかに―「はつかに」は、わずかな程度を指す。通常、「かすがのゆきまをわけておひいでくる草のはつかに見えしきみはも」（『古今和歌集』巻第十一・恋歌一・四七八・壬生忠岑）の如く、「はつかに」が下の動詞にかかり「ほんの少しくである」となる。当該歌では、「はつかに」は蝶番のように、「草のはつかに」「はつかに雪消て」の両方に掛かり、「ほんの少し消えた雪間から僅かに見える若草」という意をあらわす。

④緑も寒く―所謂共感覚表現。ここでは視覚表現「緑」と触覚「寒」が組み合わされており、春が到来し春日野は霞がかっているのに、

雪間の緑が、いかにも寒々しく見える様をいう。「ひかずふる雪げにまさる炭がまの煙もさむしおほ原の里」（『新古今和歌集』巻第六・冬歌・六九〇・式子内親王）、「あけわたる雲まのほしのひかりまで山のはさむしみねのしらゆき」（『新勅撰和歌集』巻第六・冬歌・四二四・藤原家隆）等がその例。

⑤権大納言藤原朝臣実雄―西園寺公経男。母は平親宗女。建保五年（一二二七）生まれ。後宇多天皇・伏見天皇の外祖父。洞院家の祖。従一位左大臣に至る。文永十年（一二七三）没。

⑥梓弓―梓の木で作った弓。『万葉集』の時代から枕詞的に用いられた。当該歌では、「梓弓おしてはるさめけふふりぬあすさへふらばわかなつみてむ」（『古今和歌集』巻第一・春歌上・二〇・よみ人しらす）の如く、「梓弓おして」までが「春」の序詞で、「おして」は「おしなべて」（あたり一面に）の意である。

⑦歌から―「時しらぬ雪に光やさえぬらんふじの高根の秋のよの月」（建長三年『影供歌合』百十四番右・藤原教定）に対する判「ゆきにさえたるふじのたかねの月、歌からたけたかくきよげにみえ侍りし」の如く、歌全体の品格を指す。なお、歌合判詞においては、「おほかた歌からはなだらかなり」（元永元年十月二日『内大臣家歌合』三番・源俊頼判）の如く、声調に関して用いられる場合もある。

【通釈】

三番

左歌

春日野の若草が僅かに、ほんの少し消えた雪間からみえる、(その雪間の) 緑も寒々しく霞む頃であるよ。

右歌 勝

権大納言藤原朝臣実雄

あたり一面に春がきたらしい。野山をあたかも包み込むかのよう
に霞がたなびいている。

〔判詞〕左歌の「かすか野」、珍しい所は見えませんが、「みとりも寒くかすむ比かな」とありますのは、少し納得がゆかないありさまでしょうか。右歌の「野山が霞をおし包んで」(とあるのは)、歌の品格がわづかばかりすぐれていると申すべきでしょうか。

〔四番〕

四番

左イ掛

権大納言藤原朝臣定雅

梓弓春のみ空に①いつなれてやかて霞②の立かさぬらん

右

権大納言藤原朝臣公相

浅みとり春の日数③もしられけりまた色薄き山の霞に

左イかすみを、春のみ空④にいつなれてと侍るや、いかに

そ見え侍らん、春に霞はたちそへるものにこそ

申ならひて侍れば、あつさ弓も春はかりにて、又引⑤

よせられたる事は侍らぬにや、右また色うすき

霞にて、早春をしれる心、さもやと見え侍るを、ふ

かき迄の難には侍らねと、傍題⑥の山や、花より

さきに出て侍らん、かれこれをなすらへて、持にて

侍るへきにこそ、

【校異】

イ 持一ナシ(書) 口 藤原朝臣一ナシ(聚) 八 日数一霞(聚)

(内)(支) ニ 左かすみ一左のかすみ(永)、左哥(支) ホ み

一ナシ(書) ヘ は一ナシ(書)(永) ト は一も(書)(永)

チ さも一き、(支) リ 傍題一かたはら題(書)、かたはらの題

(書)(永) ヌ 山や一やまや(内)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①権大納言藤原朝臣定雅一建保六年(一一二八)生まれ。藤原忠経

男。母は藤原宗行女。正二位右大臣に至る。永仁二年(一一九四)没。

②いつなれて一「いつ」は「いつしか」の略で、早くもの意であろう。

「なれる」には、「衣服が体によくなじむようになる」の意もあり、

下句「立」(裁)と縁語的に響き合っている。

③霞の立かさぬらん一「立」は霞の縁語。「としをへて立ちかさぬれ

ばみよし野の霞ぞ山のころもなりける」(『久安百首』春二十首・六

〇五・藤原親隆)、「日をへつつ立ちやかさねん吉野山霞の衣まだ一重なり」(『治承三十六人歌合』十二番左・山霞漸聳・二一九・藤原

経家)等、「衣」と併せて用い棚引く霞を衣に見立てる例がみえる。

④権大納言藤原朝臣公相―貞応二年(一二三三)年生まれ。西園寺実氏二男。従一位太政大臣に至る。文永四年(一二六七)没。

⑤浅みとり―薄い緑色。当該歌では、「あさみどりはるをきぬとや

みよしののやまのかすみのおびにみゆらん」(『忠見集』・七〇)の如く、枕詞的に用いられており、「春」にかかる。また、「あはれなり我が身のはてやあさみどりつひには野辺の霞とおもへば」(『新古今和歌集』巻第八・哀傷歌・七五八・小野小町)の如く、「浅みとり」は、「霞」にもかかる。

⑥引よせられたる事―引き合わせるが原義。ここでは一首の中で関連するある語とある語を同時に詠み込むこと。「袖のいろはわかむらさきにあらなくにこころをそむるしのぶもぢずり」(『千五百番歌合』千百三十五番左・二二六八・藤原隆信)について、「左、わかむらさきにしのぶもぢずりをひきよせられたるは、たよりありてきこえはべる」と、『伊勢物語』初段を踏まえた二語を詠み込んでいるとの指摘がみえる。当該歌では、「弓」と「春」(張る)が縁語。

⑦傍題―題詠で、題の中心となることを詠まないで、題に添えたほかのことを中心に詠むこと。『竹園抄』は、「月」の傍題の例歌「月夜には光ぞまさる玉川の卯花垣の里をとばばや」について、「月を

そばに成て、卯の花を讃たる歌なり」とする。

【通釈】

四番

左歌 持

権大納言藤原朝臣定雅

春はみ空に早くも馴れたのだろうか。そうしてそのまま引き続いて、今頃は霞が(まるで衣のように)立ち重なっていることだろう。

右歌

権大納言藤原朝臣公相

春が来て以来の日数の浅さも知られることだよ。山の緑がまだ薄く、浅みどり色の霞がかかっているの。

〔判詞〕左歌は霞を、「春のみ空にいつなれて」とありますのは、さあいかが見えるでしょう。春に霞は立ち添うものと申す習わしでありますので、「あつき弓」も「春(張る)」だけのことで、又(他に)引き付け関係づけられているものはないのでしよう。右歌のまだ色が薄い霞によって、早春を知る心は、そうであろうと見えますが、重大というほどの欠点ではありませんが、傍題の「山」が、「花」より先に出てきていまいしょう。あれこれを並べ比べて、持であるべきでしょう。

〔五番〕

五番

左イ

権大納言藤原朝臣公基

今も猶雪は降つ、朝霞あさたてるやいつこはるはきにけり

右

左近少将藤原朝臣為教

天の戸の明ゆく空は霞あさつ、又あら玉たまの春は来にけり

左雪ひだりゆきは降つ、朝霞あさたてるやいつこと侍る、殊ことに

よろしく侍るにや、右天みぎあめの戸明暮あけくれみなれて侍れば、

尤なほ以もつ左ひだり為勝

【校異】

イ 勝一ナシ(書) ロ ナシ一統拾遺、春上(聚) ハ 左近一左

近権(永)、左近衛(支) ニ あら玉のーあらたまる(書)、あら

玉たまの(永) ホ 左雪一左の雪(支) ヘ 左一ナシ(支)

【他書所伝】

〔左歌〕

『統拾遺和歌集』巻第一・春歌上・七

宝治元年十首歌合に、早春霞

万里小路右大臣

いまも猶雪はふりつつ朝がすみたてるやいつこ春はきにけり

〔右歌〕

『題林愚抄』第一・春部一・九一

(同)

為教朝臣

あまの戸の明行く空は霞みつつまたあらたまる春はきにけり

【本歌】

〔左歌〕

『古今和歌集』巻第一・春歌上・三・よみ人しらず

題しらず

よみ人しらず

春霞たてるやいつこみよしののよしのの山に雪はふりつつ

【参考歌】

〔左歌〕

『正治初度百首』・一四〇六・藤原家隆

(春)

けふも猶雪はふりつつ春がすみたてるやいつこ若菜つみてん

〔右歌〕

『遠島御歌合』四番右・八・如願法師

天の戸のあけゆく空はうれしきを猶はれやらず立つ霞かな

【語釈】

①権大納言藤原朝臣公基一西園寺実氏男。承久二年(一一二二)生

まれ。母は藤原親雅女。正二位右大臣に至る。文永十一年(一一七四)

没。主として嵯峨院歌壇で活躍。

②たてるやいつこ霞はどこにたつてゐるのか、の意。「春霞たて

るやいつこ朝日かげさしゆく舟をまつがうら島」(『後鳥羽院御集』・

一五二九)、「はるがすみたてるやいつこはるをまつこころよりこそ

たちはじめけれ」(『千五百番歌合』百一番右・二〇二・源兼行)等

の先行例がみえる。「はるがすみたちにしものをいまもなほよしのやまにゆきのみぞふる」(『躬恒集』・三〇九)の如く、霞と雪はしばしば組み合わされるが、当該歌では、冬の景物である雪のみが眼前にあり、春の景物である霞が確認できない状況を詠む。

③左近少将藤原朝臣為教・嘉禄三年(一二二七)年生まれ。為家男。母は宇都宮蓮生女。京極家の祖。為氏・源承の同母弟。非参議従二位に至る。『河合社歌合』以下、多くの歌合に出詠。

④あら玉の―枕詞。平安時代以後になると、「あらたまの年立帰る朝よりまたる物はうぐひすのこゑ」(『拾遺和歌集』巻第一・春・五・素性)のように、「年」に続き、「あらたまの」に「改まる」の意を響かせる例が多く見える。「あらたまのはる」では、当該歌が早い例で、他に「いづる日の影ものどけき今朝よりや又あら玉の春はきぬらん」(『嘉元百首』立春・二五九九・権大納言局)、「行かへり又あらたまのはるきぬとおもふにやがてたつかすみかな」(『伏見院御集』・七一一)等がみえる。万葉時代の「あらたし」の語感が響いているとも考えられよう。

⑤天の戸明暮みなれて侍れは―春の始めを詠じる際に、「天の戸」が頻繁に詠み込まれていることを指す。「早春霞」題においては、四首(一番左・後嵯峨院、五番右・為教、六番左・為経、七番左・通成)確認できる。

【通釈】

五番

左歌 勝

権大納言藤原朝臣公基

今(この瞬間)もまだ(眼前には本来冬のものであるはずの)雪が降っては降ってはしていて、(春になったら見えるはずの)朝の霞は、いったいどこに立っているのだろうか。(暦の上では)春はもう到来しているのになあ。

右歌

右近少将藤原朝臣為教

明け方の空は(昨日までと違って)霞みわたり、また新しい春がやってきたことよ。

〔判詞〕左歌の「雪は降つゝ朝霞たてるやいつこ」とありますのが、(全体的に)非常によろしいでしょうか。右歌の「天の戸(の明ゆく)」という表現は(文字どおり)明け暮れ見なれておりますので(珍しくなく)、いかにも左歌を勝とする。

〈六番〉

六番

左

中納言藤原朝臣為経

春たては天つ岩戸の明るより神代も先や霞初けん

右

散位藤原朝臣信実

朝霞風も音せぬあら玉の春は先こそのとけさをみれ

左はすかたよろしく、詞優に侍るめり、右體も心こもりて、ちからあるさまに侍るを、あら玉の春とつゝけたる、少しおほつかなく侍る、あら玉の夏冬など申侍るへきにや、しはらく以左為勝

【校異】

イ 勝一ナシ(書) ロ つ一の(聚)(永)(国) ハ 藤原朝臣一ナシ(書) ニ のとけさをみれ一のどけさをみれ(書)(聚)(内)(支)、のとけきをみれ(永) ホ 左一左(永) ヘ 侍るめり一侍り(支) ト たる一たる事そ(永) チ 少し一ことにすこし(書) リ なんと一なとも(書)(永)

【他所書伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『夫木和歌抄』卷第一・春部一・一一九・藤原信実

宝治元年仙洞十首歌合、早春霞

同

朝がすみ風も音せぬあら玉の春は松こそそのどけきを見れ

【語釈】

①中納言藤原朝臣為経一藤原資経男。母は藤原親綱女。承元四年(一一二〇)生まれ。弁官を歴任し、正二位中納言に至る。『宝治百首』等に出詠。

②神代一我が国で神々が国造りをし、統治していた時代。記紀では、

天地開闢から神武天皇の前までを指す。

③散位藤原朝臣信実一藤原隆信男。母は藤原長重女。治承元年(一一七七)生まれ。正四位下に至る。『河合社歌合』を主催し従弟の為家を判者として迎える一方、反御子左派の蓮性等とも交渉があつた。文永二年(一一六五)没。

④風も音せぬ一「いなばふく風も音せぬ我が宿は秋たちぬともよそにこそきけ」(『林葉和歌集』第三・秋歌・三五〇)、「中中に風もおとせぬ夕ぐれのみ山の秋はこころすみけり」(『後鳥羽院御集』・一七二二)の如く、風さえも音をたてないという意。当該歌では、「を」さまれる世のためしとやかきとめし風もおとせぬあら海の波」(『正治後度百首』禁中・二八三・藤原雅経)と同じく、太平の御代を暗示している。

⑤のとけさ一ゆつたりと落ち着いている様。「吹く風によその紅葉はちりくれど君がときはの影ぞのどけき」(『拾遺和歌集』卷第五・賀・二八二・小野好古)、「君が世のながらの山のかひありとのどけき雲のゐる時ぞ見る」(『拾遺和歌集』卷第十・神楽歌・五九八・大中臣能宣)等と同様、天下太平の意を含む。

⑥すかた一姿。ここでは一首全体の表現様式を指し、「心」「詞」といった歌の要素を指す語に対応する概念。

⑦優一典雅で上品な美しさ。柔和でしとやかな美しさをいう。平安末期以後の多くの歌合判詞に用例が見い出せ、流派を越えた普遍的な概念であつたことが伺える。

⑧心こもりて—ここでの「心」は、表現として具体的に示された作家主体の感動や情趣、情緒等を指し、「心こもる」で、作歌主体の情趣が詠歌に定着していることを意味する。為家判の用例としては、「ときはなる木葉隠はかはらねど月は冬こそさえまさりけれ」(『河合社歌合』六番左・一一・兵衛督)に対する「月は冬こそといへるふる事も、ときはなるとでは、まことに木の葉がくれ、こころもこもりてめづらしく見え侍るべし」等があげられる。

⑨ちからあるさま—為家が『河合社歌合』で「たが為のあふせをよはに尋ぬらん河なみ千鳥立ち鳴くなり」(十五番左・二九・祝部成茂)を「左、上句ちからあるさまに侍るを、末句すこしおぼつかなきやうにや侍らん」と判じている如く、読み手へ訴えかける表現の説得力を意味する。

⑩あら玉の夏冬—「あら玉」は、年や月にかかる枕詞。「あらたまのはるのはじめにふるゆきはいつしかさけるはなかとぞ見る」(『六条修理大夫集』・四二)、「あらたまのはるをむかふる年の内におこもれるとやらふこゑこゑ」(『正治後度百首』公事・二九五・藤原雅経)等の例がみえる。

【通釈】
六番

左歌 勝

中納言藤原朝臣為経

立春になると、天の岩戸が開けるように夜が明けて、今と同じように神代の昔も、まづ霞が立ち初めたのであろうか。

右歌

散位藤原朝臣信実

朝霞がたゆたい、風さえも音をたてない新春は何よりもまづゆつたりとした霽囲気を感じることだ。

〔判詞〕左歌は姿はよく、言葉は品格があるでしょう。右歌は「霞」にも心がこもって、表現の持つ説得力がありますが、「あら玉の春」と続けたのは、(詠み方として)少しはつきりしません。「あら玉の夏・冬」等と申すべきでしょうか。ひとまず左歌を勝とする。

〔七番〕

七番

左

右衛門督源朝臣通成

天の戸の明るやをそき立春の霞て見ゆる横雲の空

右

右近権中将源朝臣雅光

まきもくのあなしの松原猶さえて都の空はうす霞つゝ

左天の戸、させる難なく侍るにや、右あなしの松

原猶さえてと見えては、都の空のうす霞はるかに

へたて、知かたくや侍るへき、よこ雲の空、心

見えわかれ侍れば、左なを勝侍るへし、

【校異】

イ 勝—ナシ(書) 口 源朝臣—ナシ(書) 八 の—を(書)(永)

ニ 近—近衛(支) ホ 源朝臣—ナシ(書) へ 原猶—はらを猶

(永) (支) ト えーナシ (書) チ はーナシ (支) リ て、ー
たりて (書) (永) 又 左ーナシ (聚)

【他書所伝】

〈左歌〉

『題林愚抄』第一・春部一・九二

(注) 本朝歌合
(同)

通成卿

あまの戸のあくるやおそぎ立つ春の霞みてみゆるよこ雲のそら

〈右歌〉 ナシ

【語釈】

①右衛門督源朝臣通成ー貞応元年(一二二二)生まれ。源通方男。

母は一条能保女。正二位内大臣に至る。弘安九年(一二八六)没。

②横雲ー夜明け方東の空に棚引く雲で、『文選』「高唐賦序」の「朝雲暮雨」を踏まえて創作された表現。「霞たつするの松山ほのぼのと波にはなるる横雲の空」(『新古今和歌集』卷第一・春歌上・三七・藤原家隆)、「春の夜のゆめのうき橋とだえして峰にわかるる横雲のそら」(同・三八・藤原定家)等が早い例で新古今時代に流行。

③右近権中将源朝臣雅光ー源通光男。嘉祿二年(一二二六)生まれ(『公卿補任』)。文永四年(一二六七)没。正二位権中納言に至る。勅撰集には入集していない。左歌作者通成とは従兄弟同士。

④まきもくのあなしの檢原ー「まきもく」は、「まきむく」とも。大和国の歌枕。現在の奈良県桜井市穴師一帯の地。「あなし」は、今

の桜井市穴師。巻向の中心の地で垂仁・景行両天皇の皇居があったところ。「巻向之」檢原丹立流 春霞 鬱之思者 名積米八方(『万葉集』卷第十・春雜歌・一八一七)、「まきもくのひばらの霞立返りかくこそは見めあかぬ君かな」(『拾遺和歌集』卷第十三・恋三・八一六・よみ人しらず)等、「まきむ(も)くのひばら」と詠む例は散見するが、「まきもくのあなしの檢原」では、『千五百番歌合』「まきもくのあなしのひばらはるくればかすみをかけて山かつらせり」(十四番右・二八・寂蓮)が早い例。

⑤都の空ー視点人物からみて都の方角の空を指す。当該歌では、「山里はまだふるとしの雪ながら都の空はかすみそめつつ」(『洞院撰政家百首』春・霞五首・九六・但馬)と同様、山里(余寒)と京の都(早春の景)との対比を詠み込む。

⑥うす霞ー平安末期から用例がみえ、「あさとあけん春のけしきを思ひいづる心たがはぬうすがすみかな」(『公衡集』春・一)、「見わたせばあしたのはらのうすがすみうすぎやはるのはじめなるらん」(『広言集』春・三)等、春まだ浅い頃の景物として詠み込まれる一方、「(海路)三月尽」と云ふことをよめる(へだてつるやへのしほぢのうす霞きゆるややがて春の暮れぬる)、『月詣和歌集』卷第三・三月・二三八・藤原公衡)と、晩春の消えゆく霞の例もみえる。

【通釈】
七番
左歌 勝

右衛門督源朝臣通成

(天の岩戸が開けるかのように) 夜の明けるのが遅いとばかりに
立春に(なるや否や) 早くも霞んで見える横雲の空よ。

右歌

右近衛権中将源朝臣雅光

(大和の国の) 巻向の穴師の松原はまだ冷え冷えとしていて。一方、
都の空の方は、うつつすらと霞み霞みしていることだ。

〔判詞〕左歌の「天の戸」は、(詠みぶりに) これといった難点は
ないでしょうか。右歌は(眼前で) 穴師の松原がまだ冷え冷えとし
ていると見えるので、都の空の薄霞は距離を遙かに隔てており、(都
の空の様子は) 知りがたいでしょう。(一方、左の歌は下の句の)「よ
こ雲の空」は、言わんとしていることがはっきりそれと分かりま
すので、左歌がやはり勝でしょう。

〈八番〉

八番

左

兵部卿源朝臣有教

きのふまで雪気に曇る天つ空曙かけてはや霞ぬる

右

弁内侍

天の原雪気のかすますは立ける春もえやはわかまし
両方雪気フの空ハ、いつれハきたかに見えわかれ侍らぬを、
右の霞トは、春たハしかに頭トれて、立まハざり侍るにトや。

【校異】

イ 源朝臣一ナシ(書) 口 勝一ナシ(書) 八 えやは一えやは
(永) 二 両方一両方の(書) (永) ホ 雪気ハの空一雪ハけ空(内)
へ いつれ一いはれ(書) ト 霞一段(支) チ 春一はるの(聚)
リに一ナシ(支)

【他書所伝】

〔左歌〕ナシ 〔右歌〕ナシ

【語釈】

①兵部卿源朝臣有教一建久三年(一一九二)年生まれ。従三位源有
通男。母は丹波重長女。非参議従二位に至る。建長六年(一二五四)
没。『万代和歌集』等の作者。

②雪気一雪が降りそうな空の気配。雪交じりの空模様。古来「ゆき
げ」は「雪消」の意で詠まれたが、『後拾遺和歌集』「とやかへるし
らふのたかのこゝるをなみゆきげのそらにあはせつるかな」(第六・
冬・三九三・藤原長家)は「雪気」の早い例である。

③曙かけて一下二段活用「懸く」が季節や時間を表す語を伴った用
法で、「み山いでて夜はにやきつる郭公暁かけてこゝるのきこゆる」
〔拾遺和歌集〕巻第二・夏・一〇一・平兼盛)と同様、「くハにわたつ
て」という時間の推移を表す。「曙かけて」の先行例としては、「鶯
のあけぼのかけてなくなへに梅と竹とに春風ぞふく」〔拾玉集〕第
四・四四七四)等が見える。

④弁内侍一後深草院弁内侍とも。生没年未詳。藤原信実女。姉妹に

藻壁門院少将、後深草院少将内侍がいる。東宮時代から後深草天皇に仕える。『河合社歌合』、『宝治百首』等に出詠。

⑤天の原―大空を指す。『万葉集』には、神々が統治する天上の国高天原を指す例もみえるが、この頃は空の異称として定着している。

【通釈】

八番

左歌

兵部卿源朝臣有教

昨日まで雪模様で曇っていた空だが、(立春の今日)夜がほのぼのと明け始める頃になって、早くも霞んだことだ。

右歌 勝

弁内侍

雪模様の空がもしも霞まなかったら、春が来たということも見分けがつかないだろう(実際は霞んでいるので春が来たということがわかることだよ)。

〔判詞〕両方の雪模様の空は、どちら(が良い)ともはつきりと見分けがつきませんが、右歌の霞は、春がそこにはつきりとあらわれていて、一段立ち勝っておりますようか。

〈九番〉

九番

左^①

右^①近権中将藤原朝臣師繼

君か代の始の春のの^②とけさを空もしりてや霞立らん

右

右^③近権中将源朝臣雅忠

此ほとは嵐も雪も猶さえて霞そ薄き四方の山の端

左御代の始の春の長閑き心、捨かたく侍るうへに、

右此ほとはといひ出たるほと、こひねかふへき姿

に侍らねは、是もかちは左に侍るへきにや、

【校異】

イ 勝―ナシ(書) 口 近権―近衛権(支) 八 藤原朝臣―ナシ

(書) ニ のとけさ―のどけき(内) (支) ホ 権―衛権(支)

へ 源朝臣―ナシ(書) ト そ―に(聚) (内) (支) チ の―ナ

シ(支) リ の―ナシ(書) (永) 又 出―出し(書) ル 侍ら

ねは―みえ侍らねば(書) (永)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①右近権中将藤原朝臣師繼―藤原忠経男。母は藤原宗行女。貞応元年(一二二二)生まれ。正二位内大臣に至る。『宝治百首』作者。

②君か代―あなたの寿命、わが君の寿命。また、治天の君の御代をいう。多く賀の歌で用いられ、御代の恒久を言祝ぐ。

③右近権中将源朝臣雅忠―源通光男。母は藤原範光女。安貞二年(一二二八)生まれ。正二位大納言に至る。『とはすがたり』作者後深草院二条の父。文永九年(一二七二)没。

④此ほととはいひ出たるほど、こひねかふへき姿に侍らねは―初句に「此ほとは」を配置する先行例は、「この程は木のはもしらぬまきのやに霜をへだててとふ風かな」(『壬二集』卷下・冬部・二五六一)、「この程はをられぬ雲ぞかかるらんたづねもゆかじ山のさくら木」(『夫木和歌抄』卷第四・春部四・一〇六五・藤原家隆)等、家隆の五首の他、慈円、為家に二首、定家、藤原基輔、藤原光経等に各一首確認できる。

【通釈】

九番

左歌 勝

右近権中将藤原朝臣師繼

治天の君の御代の初めの春のゆつたりとした様子を空も分かっているからだろう、こうして(長閑に)霞が棚引いていることだ。

右歌

右近権中将源朝臣雅忠

この頃は(もう春になつてもよいはずなのに)嵐も雪もまだ寒々しくて、霞は四方の山の端に薄くかかっているばかりである。

〔判詞〕左歌は御代の始まりの穏やかな気分が(よく表れており)、捨てがたいようであります上に、右歌の「此ほとは」と(初句に)詠み出しているあたりが、望ましい風体でありませぬので、この番も勝は左歌でしょうか。

〔十番〕

十番

左

沙弥蓮性

春は今と渡りくらし天の原雲のほるかに今朝は霞める

右

下野

さほ姫の霞の衣袖さえてたつとはみれと春をすくなき

左と渡りくらし天の原雲井はるかになと、たけ

あるさまに侍るを、しつかに今見侍れは、春は今と

いひて、今朝はかすめると侍ける、今の字の心にやか

よひ侍らん、右霞の衣は猶そすくなきとよみはて

たる歌、近き比おほくなりて、めにたち侍ら

ねとも、覚束なき事侍らねは、右勝に侍らん、

【校異】

イ 今―今は(永)(内)(支) 口 る―り(永)(支) 八 勝―
 ナシ(書)(支) ニ 侍―ナシ(聚) ホ る―り(支) ヘ 字の
 一字はおなし(永) ト は―ナシ(書) チ 猶―春に(書)、な
 に(永) リ 歌―哥を(支) ヌ 近き比―ちかごろ(書)(聚)(永)
 (内) ル めに―ナシ(書) ヲ 右―右の(永) ワ に―にや(永)

【他書所伝】

〈左歌〉

『蓮性陳状』・一

春は今と渡りくらし天の原雲井遥に今朝はかすめる

〈右歌〉

『題林愚抄』第一・春部一・九三

(宝治御歌合)
(同)

さほ姫のかすみの衣袖さえてたつとはすれど春ぞすくなき

【語釈】

下野

①沙弥蓮性―藤原知家。法名蓮性。顯家男。寿永元年(一一八二)生まれ。正三位に至るも、嘉禎四年(一二三三)病により出家。正嘉二年(一二五八)没。定家存命中にはその指導を受けたが、定家没後、為家の歌壇支配に不満を抱くようになり、光俊(真観)等と反御子左派を結成。『春日若宮社歌合』では判者を勤めている。

②と渡り―「川や海の瀬を渡る」意が原義。当該歌では、早春の空を海に見立てる。「天の原」「と渡る」の例としては、早く『万葉集』に「山葉 左佐良榎壮子 天原 門閼光 見良久之好藻」(巻第六・雑歌・九八八・坂上郎女)とみえる。

③下野―生没年未詳。建長の頃まで生存か。祝部允仲女。兄弟に成茂がいる。源家長室。『宝治百首』等に出詠。

④さほ姫の霞の衣―春の女神。佐保は現在の奈良市北郊の一带。佐保山が当時の平城京のほぼ東北に位置し、東は五行説で四季の春に

相当するので、春をつかさどる女神とされた。秋の竜田姫と対比される。例歌として「さほひめの色めく春に成りにけりかすみの衣いくへたつらむ」(『久安百首』春二十首・五〇九・藤原隆季)、「さほ姫の霞の衣ぬきをうすみ花のにしきをたちやかさねん」(『後鳥羽院御集』・五二二)等がみえる。

⑤春ぞすくなき―「いたづらにすぐす月日はおもほえて花見てくらす春ぞすくなき」(『古今和歌集』巻第七・賀歌・三五一・藤原興風)、「としつきにまさるとしなしとおもへばやはるしもつねにすくなかるらん」(『赤人集』・九)、「あら玉の年にまれなる人までど桜にかこつ春もすくなし」(『拾遺愚草』中・一九六九)のように、春の日数が少なく感じられる意の用例が多く、当該歌の如く「早春の気配が希薄な様」を意味する例は少ない。なお、『為家集』には、「沢水にしづえくちたる川柳まちうる春の色もすくなし」(二〇一一)と、当該歌と同様な例がみえる。

⑥たけあるさま―「たけ」は歌の格調・風格をいう。左歌で、早春の空を海に見立てその雲の遙か先の情景を詠み込んだ点が崇高壮大な様であると評価する。

⑦春は今といひて、今朝はかすめると侍ける、今の字の心にやかよひ侍らん―蓮性詠の内、上の句「春は今」と「今朝」の時間的意味合いに重なりがあることを難じたもの。この為家判を始め、当該歌合で負けを付された四首の判に対して、蓮性は後日『蓮性陳状』を後嵯峨院に奏し、激しく反論している。

【通釈】

十番

左歌

沙弥蓮性

春は今、天の門を渡ってくるらしい。雲のあたりの遙か遠く一面に、今朝は霞が立っていることだ。

右歌 勝

下野

(春の女神である) 佐保姫の霞の衣は(まだ)袖が冴え冴えと冷えているように(立春となり霞が)立っているのは見てわかるけれども、(春になってまだ日が浅いので、一面に霞が立つこともなく)春(らしき)が少ないことだよ。

〔判詞〕左歌は「と渡りくらし天の原雲井はるかに」など、格調ある風体であります。落ちて着いて今見てみますと、「春は今」と言つて、一方「今朝はかすめる」とありますのが、「今」という字の心に重なっているでしょうか。右歌は「霞の衣はまだ少ない」と詠み終わっている歌で、(このような歌は)近頃多くなつていて、目立ちませんけれども、はつきりしない事はありませんので、右歌の勝でしょう。

〔十一番〕

十一番

左イ 榊

左近権中将藤原朝臣為氏

あら玉の年を隔て、朝霞いつしか春もたちけるかな

右

少将内侍

久堅の天つみ空の朝霞立こそわたれ春やきぬ覧

両方の朝霞、あら玉のとしをへたてて久かたの

そらにたてるほと、いく程の浅深見えわき侍らし、

【校異】

イ 持一ナシ(書) 口 権一衛権(支) 八 藤原朝臣一ナシ(書)、

朝臣ナシ(聚) (内) (支) 二 へたてへたて、(聚)

【他書所伝】

〈左歌〉

『題林愚抄』第一・春部一・九四

(同)

為氏朝臣

あら玉のとしをへだてて朝がすみいつしかはるも立ちにけるかな

〈右歌〉

『題林愚抄』第一・春部一・九五

(同)

少将内侍

久かたのあまつみ空の朝がすみ立ちこそわたれはるやきぬらん

『閑窓撰歌合』二十六番左・五〇

廿六番 左

少将内侍

久かたの天つみ空の朝霞たちこそわたれ春やきぬらん

右

前摂政家民部卿

きてみずと人もうらみじいづくにもかくこそ花はさかりなるらめ

【語釈】

①左近権中将藤原朝臣為氏一貞応元年(一二二二)生まれ。為家男。

母は宇都宮頼綱女。二条家祖。正二位権大納言に至る。弘安九年

(一二八六)年没。『河合社歌合』を始め、多くの歌合に出詠。建治

二年(一二七六)、龜山上皇から『統拾遺和歌集』撰進の院宣を受け、

弘安元年(一二七八)に奏覧。

②年を隔てゝ霞を冬と春との目に見える仕切として見立てる。こ

のような例は、「こそこのふゆことしのはるのしるしにはやまのかす

みぞたちへだてける」(『輔親集』・二二)、「立ちかはる春をしれとも

みせがほに年をへだつる霞なりけり」(『御裳濯河歌合』十一番左・

二二)等、散見する。

③朝霞一朝立つ霞。勅撰集における「朝霞」の初例は、「あさがす

みふかく見ゆるや煙たつむろのやしまの渡なるらむ」(『新古今和歌

集』巻第一・春歌上・三四・藤原清輔)で、二十一代集全体でも

十五例と多くはない。当該歌の如く、春の端緒としての「朝霞」の

早い例として、「かづらきやたかまの山のあさがすみ春とともに

立ちにけるかな」(承暦二年『内裏後番歌合』二番右・四)がみえる。

④少将内侍一後深草院少将内侍。生年未詳。文永元年(一二六四)頃まで生存か。藤原信実女。姉に藻壁門院少将・弁内侍がいる。

⑤久堅の天つみ空一「久堅の」は、天、雨、空、雲、日、光等にかかる枕詞。「久方」とも。「久堅之」天水虚尔 照日之 将失日社

吾悉止目」(『万葉集』巻第十二・寄物陳思・三〇一八)、「久かたの天つみそらに雲まけば月の光ぞ庭に敷きける」(『林葉和歌集』第三・秋歌・四四五)等が例歌。

三・秋歌・四四五)等が例歌。

【通釈】

十一番

左歌 持

(新旧の)年(の間)を分け隔ている(かのように、今眼の前に

みえる)朝霞、(その朝霞をみてはたと気付いたのだが、霞が立つ

たように)早くも立春になってしまったのだなあ。

右歌

少将内侍

空に朝霞が一面に立ち渡ったことだ。(このぶんでは)春はすでに

到来しているのであろうよ。

〔判詞〕両方の朝霞が、(一方は)「新旧の年を分け隔て」(もう一方

は)「空に立っている」ところは、(両首とも、発想の斬新さは)それほど

ほどの深淺(があるとも)分別できませんでしょう。

〈十二番〉

十二番

左

①左京権大夫藤原朝臣經朝

横雲の霞にまかふ山かつら暁かけて春は来にけり

右

④沙弥禅信

春来ぬと思ひもあへす久堅の天つみ空に立かすみかな

左歌は、年の明ゆく山かつら霞をかけて春は

きにけりとて、近き世に見侍しにや、かすみに

まかふとては、いよ／＼み所なく侍るにやと、右の哥

殊なるとかなく侍れば、尤勝侍るへし、

【校異】

イ 藤原朝臣一ナシ(書)、朝臣ナシ(支) 口 勝一ナシ(書)

ハ の一を(書) ニ は一ナシ(書)(聚)(永)(内)(支)

ホ 侍るにやと一侍るにや(聚)(永)、や侍るべき(書) への

一ナシ(書)(聚)(永)(内)(支)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①左京権大夫藤原朝臣經朝一建保三年(一一二五)生まれ。世尊寺行能猶子。実父は藤原頼資。正三位に至る。建治二年(一二七六)没。世尊寺流の能書。『宝治百首』の作者。

②横雲の霞―「春はなほあけゆく空ぞ明けやらぬ霞かかれるよこ雲

の山」(『正治後度百首』霞・二〇二・藤原雅経)と同様、夜明け方

東の空に棚引く雲が霞がかつていっている様をいう。「横雲の霞」はその

短縮形。「よこ雲のかすみたなびく木ずるより花になり行く明ぼの

の空」(正治二年『石清水若宮歌合』十四番左・源顕兼・二七)等

がその例。

③山かつら―暁に山の端にかかる雲を髪飾りの鬘に見立てた表現。

「山かつら明行く雲にほととぎすいづる初音も峰わかるなり」(『拾

遺愚草』上・一四一八)が一例。

④沙弥禅信―源俊平。生没年未詳。泰光男。従五位下侍従に至る。

『宝治百首』等に出詠。主に後嵯峨院歌壇で活躍した。

⑤思ひもあへす―おもいもよらないの意。「桜花まつとをしむとす

る程に思ひもあへず過ぐる春かな」(『長秋詠藻』上・一七)、「桜花

思ひもあへずこのもとにちりつもるともいかでこそみめ」(『和泉式

部統集』・五三〇)等がその例。

⑥年の明ゆく山かつら霞をかけて春はきにけりとて、近き世に見侍

しにや―順徳院の家集『紫禁和歌集』七三〇に「同比、二百首和歌」

として「あら玉の年の明行く山かつら霞をかけて春はきにけり」と

みえる。『紫禁和歌集』は、年次を追って配列されていることが指

摘されており、七三〇歌以前の詞書「建保四年正月十九日、松迎春

新」(七二五)、「三月十五日比、内内進北野宮之詩歌合」(七二二)

から、七三〇歌の詠作年次は建保四年(一一二六)頃か。

【通釈】

十二番

左歌

左京権大夫藤原朝臣経朝
横雲が山に（鬘をかけるようにして）霞と見分けがたくなつてい
る。夜明け方にかけて春はきたのだなあ。

右歌 勝

沙弥禅信

春が来たと思つてもないうちに、空に霞が立っていることよ。
〔判詞〕左歌は、「年の明ゆく山かつら霞をかけて春はきにけり」と
いつて、近い折に見ましたでしょうか。「かすみにまかふ」といつ
ては、ますます見るに値する所がないでしょうと（存じます）。右
歌は格別な欠点がありませんので、いかにも勝です。

〈十三番〉

十三番

左勝

嘉陽門院越前

明渡る峯の霞を出る日の影も曇らぬ千世の初春

右

前権大納言藤原朝臣為家

いつのまに霞の衣打カきらし雪降空も春はたつらん

左かすみを出る日影も曇らぬ千世の初春、祝

言フことによく侍れば、かすみの衣、かけてもな

らひかたくこそ見え侍れ、おほよそ立春早春は、

いさゝかおもひわくへきにやと見え侍れと、立
春の題に、早春のこゝろよめらんよりは、ことた
かひ侍らしとみゆるし侍るに、是さへ霞の
衣にひかれて、たつとをきて侍る、尤負侍るへし、

【校異】

イ 勝―ナシ（書） 口 藤原朝臣―ナシ（書）、朝臣ナシ（支）

ハ きらし―消えし（書） 二 ことに―まことに（聚）、もことに

（永）、のことに（支） ホ おほよそ立春早春は、いさゝかおもひ

わくへきにやと見え侍れと―ナシ（支） ヘ の―ナシ（聚）（永）（内）

（支）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『題林愚抄』第一・春部一・八七

同

為家

いつのまに霞の衣うちきらし雪ふる空もはるは立つらん

【語釈】

①嘉陽門院越前―大中臣公親女。生没年未詳。後鳥羽院の生母七条
院殖子や、後鳥羽院皇女嘉陽門院礼子に女房として仕えた。

②明渡る―あたりが一带に明るくなる意で、雲・霞・霧等が晴れる、
又、夜が明けはなれるのにもいう。「ともしするほぐしの松もきえ

なくにと山の雲のあけわたるらん」(『千載和歌集』卷第三・夏歌・一九七・源行宗)等の例歌がみえる。

③日の影―日の光が原義。「千世」「御代」等の語と結びついて、御代の恒久を暗示する。「千世ふべき春の日影は神山のみねよりいづるめぐみとぞみる」(『月詣和歌集』卷第一・四九・源通親)、「小松原春の日影にひきつれて千世のけしきを空にみるかな」(『拾遺愚草』中・一八八〇)等がその例。

④前権大納言藤原朝臣為家―定家男。建久九年(一一九八)生まれ。母は西園寺公経の姉内大臣藤原実宗女。公経猶子。権大納言に至る。若年は蹴鞠に熱中するが、承久の乱以後、本格的に和歌を学び、父の死後歌壇の指導的地位に就き、『続後撰和歌集』、『続古今和歌集』の撰者となる。家集に『為家集』、歌論に『詠歌一体』等がある。建治元年(一二七五)没。

⑤打きらし―雪が空一面を曇らせる意。「うちきらし雪はふりつつしかすがにわが家のそのに驚ぞなく」(『拾遺和歌集』卷第一・春・一一・大伴家持)の如く、「打きらし」は「雪」にかかる。「霞の衣打きらし」と続く文脈では「衣裳をうち着る」の意も響き合う。

【通釈】

十三番

左歌 勝

夜明けがた、峯を覆っている霞が暗れ渡り、そこから射し出る日の光は一点の陰りもなく輝いており、(この光のように帝の威光も

曇ることなく)永遠に続くと思われる、めでたい初春であることよ。

右歌

前権大納言藤原朝臣為家

いつのまに(春は)霞の衣を着たのであろうか。一面に雪が降っている空ではあっても、もう春にはなっているのであろう。

〔判詞〕左歌の「かすみを出る日影も曇らぬ千世の初春」は、(御代を言祝ぐ)祝言(の詠みぶり)が特に結構ですので、「かすみの衣」という私の歌は、まったくかなわないものと見えます。そもそも立春と早春は、少し気をつけておくべきように見えますけれども、立春の題に、早春の風情を詠むとかいうよりは、(今回のように早春題に立春を詠む方が)矛盾がないものと見過ごしてしまつたのですが、加えて霞の衣からの縁語で、「(春が)たつ」と置いたので、いかにも負です。

〔主要参考文献〕

(単行本) 萩谷朴氏『平安朝歌合概説』(昭44 山之内印刷)、安井久善氏『宝治二年院百首とその研究』(昭46 笠間書院)、福田秀一氏『中世和歌史の研究』(昭47 角川書店)、岩佐美代子氏校注・訳『弁内侍日記』(『新編日本古典文学全集48 中世日記紀行集』(平6 小学館)所収)、萩谷朴氏『平安朝歌合大成』(増補新訂) (平7 同朋舎出版)、岩佐美代子氏『宮廷女流文学読解考 中世編』(笠間書院 平11)、佐藤恒雄氏『藤原為家全歌集』(平14 風間書房)。(論文) 杉本邦子氏『後深草院少将内侍』(『学苑』218 昭33・5)、

- 金子磁氏「藤原為氏の生涯」《『立教大学日本文学』31 昭49・3》、
佐藤恒雄氏「後嵯峨院の時代とその歌壇」《『国語と国文学』54・5
昭52・5》、武田元治氏「存直体」と「花麗体」《『解釈』31・7
昭60・7》、荒木尚氏「百三十番歌合」考《『国語国文学研究』21
昭61・2》、池尾和也氏「後嵯峨院時代歌壇史略年表(中期)」礎稿《『
皇學館論叢』26・6 平5・12》、佐藤恒雄氏「後嵯峨院仙洞十
首歌合の諸本」《『香川大学国文研究』26 平13・9》、田淵句美子
氏「御製と「女房」」《『日本文学』51・6 平14・6》、山崎桂子氏
「承明門院小宰相の生涯と和歌」《『国語国文』72・6 平15・6》。

宝治元年『院御歌合』注釈―「山花」題―

位藤 邦生・藤川 功和

はじめに

前号に引き続き、宝治元年（一二四七）『院御歌合』の注釈を試みる。今回は「山花」題十三番を取り上げる。注釈は、広島大学中世文芸研究会における輪読をもとに、位藤邦生と藤川功和が再検討したものである。輪読時の各番担当者と所属を以下に示す。

十四番―土井昌子（文学部研究生）、十五番―鎮西美佳（文学研究科博士課程前期）、十六番―位藤邦生、十七番―山崎真克（松江工業高等専門学校）、十八番―藤川功和、十九番―濱口好太郎（文学研究科博士課程前期）、二十番―岡田潤（同研究生）、二十一番―金岡文緒（課目等履修生）、二十二番―豊田宮子（文学研究科研究生）、二十三番―吉川洋子（文学部四年生）、二十四番―中村朋子（同）、二十五番―富永洋介（同）、二十六番―小林文子（同）

凡 例

- 一、底本は、群書類従本（巻第二百所収）を用いた。
- 一、校合した諸本と略号は、以下の通り。
 - 〔書〕―書陵部蔵本〔五〇一・七四〕（『新編国歌大観』の底本）
 - 〔聚〕―書陵部蔵歌合類聚本（『大日本史料』第五編之二十四所収）
 - 〔永〕―永青文庫蔵本〔一〇七・三六・七〕（『細川家永青文庫叢刊』第八卷所収）
 - 〔内〕―内閣文庫蔵本「百三十番歌合（外題）」〔二〇一・二四七〕
 - 〔支〕―九州大学支子文庫蔵本〔九一一・ホ・一〕
- 一、注釈は、番全体の本文【校異】を示した後、【他書所伝】【本歌】【語釈】【通釈】をあげた。
- 一、【語釈】の内、各詠作者並びに前号既出の語彙については、紙幅の関係上これを略した。
- 一、表記や送り仮名の異同はこれを略し、見せけちや補入符号によって訂正のある箇所は、訂正後の本文を採用した。

一、翻字本文には、適宜読点を施し、字体は現行の活字体に改めた。
 二、本文中、異同の存する箇所には、傍線及びイ、ロ、の如く付し、語釈を施した箇所には、本文右傍に①、②、の如く通し番号を付した。

一、底本で文意不通等が認められる場合、他本の本文に拠り通釈を施した。その際、本文【校異】【通釈】において他本に拠った箇所に網掛けを施した。

一、当該歌合以外の和歌の引用は、原則として『新編国歌大観』に拠り、その他の引用文献は、適宜底本を示した。
 二、引用本文には、適宜、傍線、振り仮名等を付した。

〔十四番〕

十四番 山花

左

女房

みても猶おくそ床しきあし垣の吉野の山のはなの盛は

右

小宰相

雲の上の山も木高き桜花御代のさかりの春にあふらし

左歌おくそゆかしきあしかきのと侍るほと、梅の

立枝にみふるしたるものに侍る、よしのの花

にてあらぬ、ことに凡俗の思ひよるへきさまに

も侍らす、花実あひかぬるとはこれらにこそ侍ら

めと有かたくこそみえ侍れ、右山も木高きさく
 ら花、うちまかせたる哥にならひ侍らましかは、たけ
 あるさまにみえ侍りなまし、猶左かち侍るへし、

【校異】

イ 勝一ナシ (書) ロ ナシ一統後撰、春中 (聚)、後後撰 (永)

ハ 雲の上の山も木高き桜花御代のさかりの春にあふらし一ナシ

(支) ニ の一に (聚)、に (内) ホ しいん (書) ヘ 歌一ナ

シ (支) ト くるるを (書) (聚) (永) (内) (支) チ 花一山 (永)

リ ことに一ことにめつらしくまことに (書)、事にてめつらしく

まことに (永) 又 思ひ一およひ (書) ル 侍一あ (書) ヲ

ぬるとは一ぬなどは (書) (内)、ぬるなどは (永) ワ ら一ナシ (支)

カ に一ナシ (永) ヨ 一には (書) (永) タ 左一左尤 (書) (永)

【他書所伝】

〔左歌〕

『統後撰和歌集』卷第二・春歌中・七八

十首歌合に、山花

太上天皇

見ても猶おくそゆかしきあしがきのよしのの山の花のさかりは

『新三十六人撰』・三三三

太上天皇御製後嵯峨院

見ても猶おくそゆかしき蘆垣のよし野のやまのはなのさかりは

『歌枕名寄』卷第七・吉野篇・二〇三九

見ても猶おくぞゆかしきあしがきのよしの山の花のさかりは

〔右歌〕 ナシ

〔語釈〕

①山花―山中に咲く花を意味する漢語。我が国においては『菅家文草』等に詩句として用例がみえる他、歌題としても多く確認でき、

「山花留人といへることをよめる」をのえはこのもとにてやくちなましはるをかぎりぬさくらなりせば」〔金葉和歌集〕二度本・巻

第一・春部・四八・大中臣公長〕等結題の詠や、「宰相入道教長家

歌合、山花〕よしさらばしるべにもせんけふばかり花もてむかへ春

の山かぜ」〔林葉和歌集〕第一・春歌・一五五〕等二字題の例もみえる。

②あし垣の―「あし垣」は葦を縫い合わせて作った垣根。垣の目が

密であることから「人しれぬ思ひやなぞとあしかきのまぢかけれどもあふよしのなき」〔古今和歌集〕卷第十一・恋歌一・五〇六〕の

如く、「間近」又は「間」等に掛かる枕詞として用いられ、また、

前掲古今集歌では「あし」と「よし」が響き合うように用いられている。当該歌では、後の例であるが「たちかくす霞やなぞとあしが

きのよしのはなをみるよしもがな」〔隣女集〕卷第二・春・三二五〕

等と同様、「吉野の」「はな」に掛かり、桜が間近に咲き誇る吉野山の春景を表現する。

③雲の上の山―白雲のうへより見ゆる足引の山のたかねやみさか

なるらん」〔能因法師集〕中・八九〕の如く、雲よりも高く聳える

山の意。「雲の上」に「久方の雲のうへ」にて見る菊はあまつほしとぞあやまたれける」〔古今和歌集〕卷第五・秋歌下・二六九・藤原

敏行〕、「祝言」雲のうへも春のみ山の万代も松と竹とのすゑにたとへて」〔正治後度百首〕二九六・藤原雅経〕等の如く、宮中の意を響かせる。

④木高き桜花―「木高き」は、「ふたばよりのたのもしきかなかすが山

こだかき松のたねぞとおもへば」〔拾遺和歌集〕卷第五・賀・二六七・大中臣能宣〕の如く繁栄を暗示する。また、「桜花」は、

後嵯峨院が「いろいろに枝をつらねてさきにけりはなもわがよもい

まさかりかも」〔続古今和歌集〕卷第廿・賀歌・一八六四〕と詠じた如く、詠者やそれに連なる者の繁栄の象徴として機能する。なお、

『玉治百首』には、「またれつるこだかき山の桜花末たのもしくさきにけらしな」(春廿首・初花・四九八・藤原定嗣)という類例がみ

える。

⑤御代のさかりの春―前年、久仁親王(後深草天皇)に譲位し、院

政を開始したばかりの後嵯峨院の御代を春闌という状況に引きつけて言祝ぐ。「吹く風ものどけき御代の春にてぞさきける花のさかり

をもしる」〔正治初度百首〕下・春・一九一七・讚岐)はその類例。

⑥梅の立枝にみふるしたるものに侍る―清輔詠「あしがきのおくゆかしくもみゆるかな誰がすむ宿の梅の立えぞ」を指す。勅撰集入集

歌でもない歌を院が詠作に利用していることを指摘し、判者として

院の作為を汲み取っていることと院への賞賛を同時に込める。なお、当該清輔詠は、『太皇太后宮大進清輔朝臣家歌合』、『治承三十六人歌合』、『玄玉和歌集』、『中古六歌仙』、『雲葉和歌集』、『歌仙落書』にみえる。

⑦花実あひかぬる一詞を花、心を実に喩え、あるべき和歌の理想を説く所謂花実論に基づく表現。花と実のどちらを重視するかは、時代や論者によって異なる。定家作と伝えられる『毎月抄』は、「心と詞とを兼ねたらむをよき歌と申すべし」とする。

⑧うちまかせたる哥一ありふれた歌、並一通りの歌。そういった普通の歌と並んでいるなら、右歌も格調のある歌にみえると一定の評価を与える。

【通釈】

十四番 山の花

左(歌) 勝

女房(後嵯峨院)

(実際に) 目の当たりにしてもさらに(吉野山の)奥(の桜)が見たい。葦垣のように間近に(咲き誇る)吉野山の花盛りには。

右(歌)

(承明門院) 小宰相

(眼前に) 雲の上まで高く聳える山(のその) 一段高くに咲く桜の花(がみえる)。(あたかも院の) 御代の絶頂の春を目の当たりにしているかのようであるよ。

【判詞】左歌(の)「おくそゆかしきあしかきの」とありますあたりは、「梅の立枝」と詠み込んだ清輔詠に見慣れた表現でございま

して、「よしのの花」と(表現し)てあらぬ様(に仕立てられてるのは)、特に世間並みの者が考えつく表現でもございません。詞と心が両方備わっている(歌)とはまさにこれらのこととございませと有り難くみえます。右(歌の)「山も木高きさくら花」という表現は、並一通りの歌と並びましたなら、格調のあるようにみえますでしょう。やはり左(歌)が勝ちでございます。

〔十五番〕

十五番

左

太政大臣

思ひ出よ我もむかしは立田山たかねの花も袖にかけてき

右

俊成卿女

春は又花の都と成にけり桜に匂ふみよしの、やま

左我もむかしは立田山、さためてゆへなからす侍らんと

みえ侍り、右桜に匂ふみよしの、山、花の都に

心もなりかへりてうつり侍りぬるにこそ、

【校異】

イ 勝一ナシ(書) □ ナシ一統拾遺、春下、(聚) ハ なから

す一ふかく(書) (永) (内)、なくは(聚)、なかく(支) ニん

一し(聚) ホ 侍り一侍るに(書) へり一く(支) ト て一

ナシ(聚)

【他書所伝】

〈左歌〉

『夫木和歌抄』卷第四・春部四・一二四〇

宝治元年十首歌合

常磐井入道太政大臣

おもひ出でよ我もむかしは立田山たかねの花も袖にかけてき

〈右歌〉

『俊成卿女集』二〇九

宝治元年十首歌合に、山花

春はまた花の都と成りにけり桜にほふみよしの山

『歌枕名寄』卷第七・吉野篇・二〇四四

続拾一

俊成女

春はまた花のみやこと成りにけりさくらにほふみよしの山

【参考歌】

〈左歌〉

『古今和歌集』卷第十七・雑歌上・八八九

(題しらず)

(よみ人しらず)

今こそあれ我も昔はをとこ山さかゆく時も有りこしものを

【語釈】

①立田山―立田は大和国の歌枕で紅葉の名所として古来多くの歌作がなされた。また、当該歌の如く春の景を詠み込んだ作も散見する。

「たつたやまみつつきえこしさくらばなちりかすぎなむわがかへる」とに(『万葉集』卷第二十・四四一九・大伴家持)、「しら雲の春は

かさねて立田山をぐらのみねに花にほふらし」(『新古今和歌集』卷第一・春歌上・九一・藤原定家)等はその例。

②たかねの花―本来「このもとにすみけるあとをみつるかなちのたかねの花を尋ねて」(『山家集』中・雑・八五二)の如く、高山に咲く桜を意味する。一方、慈円は「(心足即為富、身閑仍当貴、富貴在此中、何必居高位)谷かげや心のほひ袖にみちぬたかねの花の色もよしなし」(『拾玉集』第二・詠百首和歌(文集百首)・閑居十首・一九八〇)と、『白氏文集』の詩句「居高位」を「たかねの花」と換言している(実氏は前年太政大臣を辞している)。また、下の句の「袖にかけてき」には、「すべらぎのかざしに折ると藤の花およばぬ枝に袖かけてけり」(『源氏物語』宿木巻・薫)の如く、「女性を我がものにする」という意もあり、恋の趣を含んだ詠とも解し得る。詠者が意図的に真意を臆化させ一首に仕立てたものか。

③花の都―吉野には古代離宮が営まれており、それに因んだ「さとの名はよしの山とあれにしを花ぞ都のかたみなりける」(『俊成卿女集』詠百首和歌・花・八七)等の詠がみえる。当該歌では、「このへの人さへ春はうつりきぬよしの山は花のみやこか」(『拾玉集』第一・一日百首・花・九〇四)の如く、辺り一面に桜が咲き誇る春景から、古宮のあった地を華やかな都に喩える。

④桜に匂ふ―風にしも何かまかせんさくら花匂あかぬにちるはうかりき」(『後撰和歌集』卷第三・春下・一〇六・藤原敦忠)の如く、桜の色が美しく映える意。「桜に匂ふ」例歌としては、「かざしをる

道行人のたもとまで桜に匂ふきさらぎの空」〔拾遺愚草〕中・詠花
鳥和歌・一九八五）がみえる。

⑤さためてゆへなからす―実氏が自詠に込めた比喻の真意を、為家が図りかねた故の評と思われる。

⑥心もなりかへりてうつり侍りぬる―「なりかへる」はその状態に成りきる意。「つき草のうつし心やいかならんむらむらしくもなりかへるかな」〔馬内侍集〕九五、「我がやどもあられふりしくときはみな玉のうてなになりかへるめり」〔相模集〕三七〇）等がその例。「心」は「うつり侍り」にも掛かり、右歌の勝を暗に示す。

【通釈】

十五番

左（歌）

太政大臣（西園寺実氏）

思い出してもみよ、私も昔は立田山（の高嶺）に立ち、そして高嶺の花を我が袖にかけたこともあったことだよ（それが今はまあ…）

右（歌） 勝

俊成卿女

春になると再び花の都となることだなあ。桜で美しく映える吉野

山は。

〔判詞〕左（歌の）「我もむかしは立田山」という表現は、きつと何か理由がなくはないと理解されます。右（歌が）「桜に匂ふみよしの、山」（と詠み、花の都に戻って私の）心もすっかり〔花の都〕詠に）変わって（右歌に）惹かれました。

〔十六番〕

十六番

左

権大納言通忠

みよしの、たかきの山の桜花雲より空に匂ふ色かな

右

権大納言実雄

山かせは心してふけ高砂の尾上の桜いまさかり也

左高木の山のさくら花、哥たけもみえ侍るを、

雲より空こそいまたみをよはぬ事にて侍りけれ、

雲より猶うへさまにはへる色にて侍らめども、あ

まりにあたらしくや侍らん、右姿詞よろしく侍り、

かやうの事おもかけあるやうにて覚つかなく侍れは、

左上下句終の字おなしく侍るも、なきにはおとりて

侍れは、持と申へきにや、

【校異】

イ 持―ナシ（書） ロ ナシ―新後撰（永） ハ 左―ナシ（聚）（永）

（支） ニ の―ナシ（書） ホ 哥―うたの（書）（永） ヘ 空―

空に（聚） ト いまた―ナシ（支） チ より―よりも（書）（永）

リ よろしく―よろしくは（永） ヌ 侍り―侍るか（書）（永）（支）

（内）、侍る（聚） ル おもかけあるやうにて―みしおもかけはへ

るやうにて（書）（永） ヲ 侍れは―侍に（書）（永） ワ 句―の

句（永） カ 持―勝（支） ヱ 申へき―可申（内）

【他書所伝】

〈左歌〉 ナシ

〈右歌〉

【新撰和歌集】 卷第二・春歌下・七九

(宝治元年、十首歌合に、山花) 山階入道左大臣

山風は心してふけ高砂のをへのさくらいまさかりなり

【歌枕名寄】 卷第三十一・雑篇・八二二八

^{新後} 同一 山階入道左大臣

山風はこころしてふけたかさこののをへのさくらいまさかりなり

【語釈】

① みよしのゝたかきの山の桜花―高城山は、大和国吉野山系の一つ。

なお、『教長集』に「みよしののたかぎのやまのさくらばならぶ

にほひはまたなかりけり」(九七)と、当該歌と上の句が完全に一

致する先行例がみえる。

② 雲より空に―『千五百番歌合』に「しら雲のかかるたかねをはじ

めにて空よりほふ山ざくらかな」(春三・百六十三番左・三二五・

藤原良平)と類例がみえる。また、当該歌合とは同時代の例として、

『宝治百首』の「春もいま花もさくらの時ぞとや雲よりほふかづ

らきの山」(初花・五一六・俊成卿女)『新撰古今和歌集』一二四

があげられる。通忠は良平詠から「雲より空に匂ふ」という表現を

案出したか。

③ 山かせは心してふけ―桜の花が散るのを惜しんで山風に「心して

ふけ」と呼びかける趣向の先行例としては、「けふくれぬあすもき
てみむさくらばなこころしてふけはるの山かせ」(『金葉和歌集』二
度本・卷第一・春部・四四・源師俊)が早い例。

④ 高砂の尾上の桜―「高砂」は、播磨国の歌枕で加古川河口付近の
地名。「たかさこののをへのさくらさきにけりと山のかすみたたず
もあらなん」(『後拾遺和歌集』卷第一・春上・一二〇・大江匡房)
等の先行例がみえる。

⑤ いまさかり也―「さくらばないまさかりなりにはのうみおして
るみやにきこしめすなへ」(『万葉集』・卷第二十・四三八五・大伴
家持) 他、先行例多数。なお、「あまつかせよきてふかなんうちひ
さすみやぢのさくら今さかりなり」(『万代和歌集』卷第二・春歌
下・二四〇・藤原定家)は発想において当該歌と似通う。

⑥ 雲より猶つへさまにほへる色にて侍らめとも―左歌下の句「雲
より空に匂ふ色かな」に対する為家の理解。「雲より空に」は【語釈】
②に示した如く、先行例の乏しいこなれない表現であり、作者の意
図を汲み取りつつも表現にやや無理があると指摘する。

⑦ 左上下句終の字おなしく侍るも、なきにはおとりて侍れは―早く
は「歌経標式」に指摘がみえる。また、『俊頼髓脳』は、「あしひき
のやまがくれなるさくらばなちりのこれりと風にしらすな」(『天徳
四年内裏歌合』七番左・一四・少弐命婦)を例示し、「桜ばなとい
へるなの字と、散り残りりと風に知らすなといへる、はてのな文字
となり。(中略)これをば悪しともさだめられず。かやうの程のこ

とは、歌によるなめり」と指摘する。

【通釈】

十六番

左(歌) 持

権大納言(藤原) 通忠

み吉野の高城の山の桜花は(花の盛りになって)、雲から空にかけてひとつづきに美しく咲き匂っていることだよ。

右(歌)

権大納言(藤原) 実雄

山風は心して吹け。高砂の尾上(峰)の桜はいま盛りであるぞ。

〔判詞〕左(歌の)「たかきの山の桜花」という表現は、歌の格調も(よく)見えますが、「雲より空」という表現)はこれまで見たことのないものでございます。(意味するところは)雲よりもなお上方に(美しく)照り映える色でございましょうけれど、あまりにも新奇(な表現)でございましょう。右(歌の)姿・詞(の両方)がまあよろしゅうございます。(しかし)このようなこと(＝着想)は以前に見た表現のようで(新しさという点では)おぼつかのうございまして、(一方)左(歌の)上句と下句の終わりの字「さくらばな」と「色かな」が同じでございすものも、そうした欠点がないのよりは劣っておりますので、(この番は)「持」と申すべきでしよう。

〔十七番〕

十七番

左

権大納言定雅

桜花遠^①の里までなかも覽^②あたにおらすな春の山守

右

権大納言公相

葛城やいつくを花と尋まし梢^③につくみねの白雲

左おもひやりふかくは侍れ^④と、花の遠のさとまで

なかめやりたるさまにや聞なされ侍らん、あた

におらすな春のやまもりと侍るも、上陽春管

領の花処々さためて侍らめとも、いかにそや聞え

侍るにや、右かつらさきの雲梢^⑤につきて花ひと

つなるおもかけたちて侍れは、右勝侍るへし、

【校異】

イ 勝一ナシ(書) 口 権大納言一ナシ(永) ハ 公相一公經

(聚)、公相きむすけ古本(永) ニ 一つく一つこ(書) ホ 侍れと

一みえ侍れと(書)(永) へ なかめやりたる一なかめたる(書)(聚)

(永)(内)(支) ト やまもり一山もと(支) チ 春一ナシ(書)

リ 花処々さためて一花処々にさためて(書)、節處^{せちどころ}にや(永)

又 侍らめとも一侍られとも(内) ル つきて一つきて(内)、

つきては(支) ヲ 花一花も(書)、花の(聚)、花はな(永)

【他書所伝】

〔左歌〕ナシ 〔右歌〕ナシ

【語釈】

①遠の里までなかむ覽―遠くの里人までもが桜花を眺めているだろうの意。「ここに又わがあかぬ月を山のはのをちのさとはおそしとやまつ」(『古今和歌六帖』第一・一七四)の如く、視点人物が遠くの里人の様子を思いやっている状況を表す。

②あたにおらすな春の山守―番人である山守に対して、桜を折らせないように求める趣向。桜を折り取る者を咎める存在としての山守は、既に『後撰和歌集』「山守はいはいはなん高砂のをへの桜折りてかざさむ」(巻第二・春中・五〇・素性)等にみえる。

③葛城―大和国の歌枕。現在の奈良県西部、大阪府との境に位置する山系。平安後期には「葛城の高間の山」の桜の美しさを詠む例が多くみえる。

④梢につくみねの白雲―「吉野やま嶺の桜のさかりこそ雲路につづくながめなりけれ」(『正治初度百首』春・一五二七・藤原範光)の如く、白い花の咲く梢と峰の白雲とが連続するように見え、見分けたつきがたい状況を詠む。なお、公相には、「あしびきの山のたかねを見わたせばくもねにつづくはなざくらかな」(『万代和歌集』

巻第二・春歌下・二四三)という詠もみえる。

⑤おもひやりふかく―遠くの里の様子を思いやる内容は心も深くみえますの意。『千五百番歌合』の宮内卿詠「とやままでみ山のあら

れわけすぎてまさきのかづら秋かぜぞふく」(秋四・七百七十二番左・一五四二)に対する定家判「はるかにおもひやられてをかしくは侍るを」はその一例。

⑥聞なされ侍らん―出詠歌が作者の意図と異なる文脈で判者に理解されることを示す。為家は、上句の表現では桜花が遠くの里まで眺めやっているように理解されてしまおうと指摘する。

⑦上陽春管領の花処々―「和漢朗詠集」上・春興・二〇「歌酒家花処処 莫空管領上陽春」(出典は『白氏文集』巻第五十六「送東都留守令狐尚書赴任」)という詩句を判者為家が想起し、当該歌の趣向と共通点を持つ先例であることを認めた発言。為家の認識した共通点のはっきりしないが、「花処々」に焦点をあてた引用の文言から考えると、花が盛りに咲いている情景を詠んだ点を指すか。あるいは、下句を批評対象とする判詞の構成から考えると、むなく上陽の春を過ぎすなという詩句と、むなく桜を折らすなという歌との表現の類似を指すか。なお、為家には「花処々」を題とした「身を分けてゆかまほしきは山ざくら花のさかりのよもの木のもと」(『為家集』上・春・一九五)がある。

⑧おもかけたち―先行する歌の表現が想起される場合にも用いられるが、ここでは歌に詠まれた情景が視覚的映像として眼前に浮かぶ様を示す。『後京極殿御自歌合』十三番右・二六「はれ曇り嶺しづまらぬ白雲は風にあまぎる桜なりけり」について、俊成は、「見るやうには面影おぼえ侍れど」と判を付している。

〔通釈〕

十七番

左(歌)

権大納言(藤原) 定雅

遠くの里人までもが桜花を眺めていることだろう。むなしく桜を折らせるなよ、春の山守よ。

右(歌) 勝

権大納言(西園寺) 公相

葛城の(山の) いったいどこを花だと思つて探し求めたらよいのであろう。花の咲く梢へ続くように峰には白雲がかかつており、見分けがつきがたいことよ。

〔判詞〕左(歌の)(遠くの里の様子を) 思いやる内容は(心も) 深くみえますが、(これでは) 桜花が遠くの里まで眺めやつていように理解されてしまうでしょう。(下句の)「あたにおらすな春の山守」とありますのも、上陽の春を過ぎし花は至るところに咲いている(という詩句は『和漢朗詠集』に) 確かにございますが、どうであらうと思われるでしょう。右(歌は) 葛城にかかる雲が梢へ続いて雲と花とが一体になるように見える情景が目に見えますので、右(歌) が勝でしょう。

〔十八番〕

十八番

左イ

権大納言公基

よしの山峯にたな引白雲のほふは花の盛なりけり

右

為教朝臣

今朝よりは雲こそ匂へ吉野山高根の桜今や咲らん

左右共に白雲の匂ふによりて花を分るよし

の山、高下をさため申侍らん 中くナに侍れば、可カ為持

〔校異〕

イ 持一ナシ(書) ロ ナシ一新後撰、春下(聚)、新後撰(永)

ハ 今朝一けふ(書) ニ 今一花(書)(永) ホ らんーらし(書)

(永) へのーナシ(書) ト 申一ナシ(支) チ ナシーは(支)

リ 可為持一持たるへし(永)

〔他書所伝〕

〔左歌〕

『新後撰和歌集』卷第二・春歌下・七八

宝治元年、十首歌合に、山花

万里小路右大臣

よし野山みねにたなびくしら雲のほふは花のさかりなりけり

〔右歌〕

『蓮性陳状』(本文は、歌合類聚本(『大日本史料』所収))

今朝よりは雲こそほへ芳野山たかねの桜今やさくらん

【語釈】

①白雲のにはふー「よしの山花の盛やけふならむそらさへ匂ふみねのしら雲」〔御室五十首〕二五七・藤原俊成、「またれつる花のさかりか吉野山かすみのまよりにほふ白雲」〔式子内親王集〕一〇九の如く、白雲が桜の盛りによって一層白く照り映える様を詠む。

②高根の桜―ここでは吉野山の高嶺の桜を指す。「しらくもとをちのたかねに見えつるはこころまどはすさくらなりけり」〔金葉和歌集〕二度本・巻第一・春部・三六・藤原公実)等がその例。

③高下―左右が吉野山を詠んでいることに因んで歌の優劣を換言した表現。例えば、「春日若宮社歌合」祝・三十五番「あめのしたをさまれる代と三笠山嶺の朝日のかげぞのどけき」(藤原経定)「万代とさしてもいはじちはやぶる三笠の山の神にまかせて」(鷹司院帥)の優劣について、判者知家は、「此つがひ、おなじみかさ山、高下あるべからずや」と記す。

【通釈】

十八番

左(歌) 持

権大納言(藤原) 公基

吉野山の峯に棚引いている白雲が色映えて見えるのは(今気付いたのだが峯の辺りの)桜が盛りだからだったのだなあ。

右(歌)

(藤原) 為教朝臣

今朝からは(峯の辺りの白)雲がまさに色映えてみえる。吉野山の高嶺の桜は今まさに咲いているのであろう。

〔判詞〕左右(の歌が)共に(詠み込んでいるのは)白雲が色映えることによって花(が咲いているのをそれと)判別した吉野山(の詠であり)、(歌の出来映えの)高い低いを決め申し上げますのは、なかなか難しゅうございますので、持とする。

〔十九番〕

十九番

左

中納言為経

白波の立重なる瀧の上のみ舟の山は花さかりかも

右

信実朝臣

けふしはや花待つくる老らくのみ山かくれに春を知らん

左歌白波のなとことくしきすかたにおもひ

よりて侍り、み舟の山といへるまでさしてその

難なくみえ侍るを、右歌述懐には侍れと、心詞

いひしりてすかたおかしく、かやうのましらひにも

花待つくる心ちし侍らん、さて、花の心みすてかたき

につきて、いはれなく勝の字をつけぬ

【校異】

イのーに(書)(支) 口 勝ーナシ(書) ハらんーかな(書)(永) 二らん、さてーらむまで(書)(永) ホ花ー老(書)(永) へきーき(永) トのーナシ(書) チつけーつき(聚)(内)(支)

リぬー侍りぬ(書)(永)

【他書所伝】

〈左歌〉

『夫木和歌抄』卷第四・春部四・二二四一

(宇治元年十首歌合)

大宰権帥為経卿

しら浪の立ちかさなれる滝の上のみふねの山は花盛かも

〈右歌〉ナシ

【語釈】

①瀧の上のみ舟の山―瀧は、宮の瀧(宮滝)を指す。大和国の歌枕。「み舟の山」(御船の山)は、同じく大和国の歌枕で、吉野川をはさんで宮滝の東南に位置する。宮瀧と三船山は併せて詠み込まれることが多く、『万葉集』の「たきのうへのみふねのやまにゐるくものつねにあらむとわがおもはななくに」(巻第三・雑歌・二四三・弓削皇子)、「たきのうへのみふねのやまはかしこけどおもひわするるときもひもなし」(巻第六・雑歌・九一九・車持千年)等が早い例。

②み山かくれ―山の奥深くに隠れている意。「わがこひはみ山かくれの草なれやしげさまされどしる人のなき」(『古今和歌集』巻第十二・恋歌二・五六〇・小野美材)、「老いはててみやまかくれにすむまでもわかのころのうせぬかなしさ」(『教長集』九六五・静蓮)等、人知れない恋や隠棲者の比喻としての用例がみえる。

③白波のなとごとくしきすかた―「ことごとし」は、仰々しい、

大層である意。「両首共に事事しからんとは心ざしたれども不聞にや」(『六百番歌合』冬部・寒松・十番判詞)、「左ごとごとしくたかくよみなせる振舞、勝とみえ侍るにや」(建長八年『百首歌合』四十三番)等、プラス評価としての例がみえる。当該歌以前では、「いせのうみのうらのはまゆふいくへともいさしらなみのたちかさねつ」(『明日香井和歌集』上・百日歌合・七二五)が、「白波・立ち重」の先行例としてみえる。

④いひしりて―ものの言い方をよく心得ている意。「左はぬさはせんなどは、いひしられるにては侍れど」(『六百番歌合』恋部下・寄懐偏恋・七番判詞)等がその例。

⑤さて、花の心―書陵部本等は、「らむまで、老の心」とする。「さ」と「ま」、「花」と「老」は各々字体が似ており、また、「花」と「老」は、直前に「花の待つくる」とあり、目移りによる誤写が想定される。底本の「さて」では落ち着きの悪さもあるが、ここでは底本を尊重した。

【通釈】

十九番

左(歌)

中納言(藤原)為経

(流れが激しく)白波が立ち重なっている吉野川急流の上にそびえる三船の山は(これもまた白波が立ち重なっているかのような)桜の盛りであることよ。

右(歌) 勝

(藤原)信実朝臣

今日という今日は、花が咲くのを待っていた老身（のあの人）が（春の訪れが遅い）深山の隠居において春（が来たこと）を知るであらうよ。

〔判詞〕左歌（の）「白波の」など仰々しい情趣に思い至っておりま
す。「み舟の山」と表現しているところまでこれといってその難点
はないように思われますのを、右歌（は）述懐（として老いを嘆い
た歌）ではごさいますけれど、心詞は言い方をよく心得ていて情趣
があり、この（右歌の）ような（世間との）付き合い方であっても
花（が咲くの）を心待ちにする気がするでしょう。さて、（老身で
花を待つ状況で）花（へ）の（執）心が見捨てがたいので、はっき
りとした根拠もなく（右歌に）勝の字をつけてしまった。

二十番

二十番

左イ辨

左衛門督通成

わくかたもなくて詠めん桜花たちなまかひそ山の端の雲

右

右近中将雅光

桜花さくとみしより松山の梢に波のかけぬまもなし

わくかたなくてなかめんといへる、あまりにた、
事にてや侍らん、さくら花さくとみしより又め
つらしきやうにも侍らねは、おなし程のことにや
侍るへき

〔校異〕

イ 持一ナシ（書） □ 左一右（書）（永） 八 近一近衛（支）

二 かた一かたも（書）（聚）（永）（内） ホ にてや一にや（書）（永）

へ より一よりも（書）（永） ト やう一さま（書）（永） チ も

一は（書）（聚）（永）（内）（支） リ るへき一らん（支）

〔他書所伝〕

〔左歌〕

『現存和歌六帖』五七七

（さくら）

右衛門督通成

わくかたもなくてながめんさくらばなたちなまがひそやまのはのくも

〔右歌〕ナシ

〔語釈〕

①左衛門督通成一この時、通成は右衛門督。諸本により改める。

②わくかたもなくて一「めづらしきいもにあふよはほととぎすわく

かたもなくまたれぬるかな」〔太皇太后宮小侍従集〕夏・三三二、「待

つほどはわくかたなきを時鳥たれ一こゑをきまがふらん」〔正治

後度百首〕郭公・七一九・賀茂季保）等の如く、心を他に散らすこ

となく専念する様をいう。

③たちなまかひそ一「よし野山はなどはたれかしらざらむたちなま

がへそみねのしら雲」〔千五百番歌合〕春三・百五十九番右・三二八・

藤原兼宗）等の先行例がみえる。

④松山の梢に波のかけぬまもなし―「松山」は、陸奥国の歌枕「末の松山」を指すとも考えられる。「末の松山」の場合、『後撰和歌集』

「松山」につらきながらも浪こそむ事はさすがに悲しきものを」（巻第十一・恋三・七五五・藤原時平）、「あぢきなくなどか松山浪こそむ事をばさらに思ひはなるる」（同七五九・藤原時平）等の如く、「末

の」は必ずしも詠み込まれないが、本歌である『古今和歌集』「君をおきてあだし心をわがもたばすゑの松山浪もこえなむ」（巻第二十・東歌・一〇九三）の表現「波」・「越す」を詠み込んでいる。

「松山」の桜を波に喩える発想は、「はるくればさくらが枝に風ちりて花の浪こそすゑのまつ山」（『拾玉集』第一・一日百首・花・九〇八）、「春くればこそすゑに花のなみこえてよしののおくもすゑの松山」（『千五百番歌合』春二・百二十六番右・二五二・寂蓮）等の先行する「末の松山」詠と共通するが、当該歌の場合、「越す」という表現がみえないことや、「松山」を「末の松山」と解する必然性が充分ではないことから、松の自生する山として解する。

⑤たゝ事―歌語らしくないことばを指す。「ただことば」に同じ。『実国家歌合』歳暮・六番右歌・七一・平親宗詠「あさましやこよみのおくを今日みれば一くだりにもなりにけるかな」に対する藤原清輔判「むげにただ事どもなり」はその一例。

⑥めつらしきやうにも侍らねは―「桜が咲いたのをみて以来」という詠みぶりに新味がないことを指摘する。「桜花さくとみし」に限っても、「桜花さくとみしまにたかさこの松をのこしてかかるしら雲」

（『続拾遺和歌集』巻第一・春歌上・五九・順徳院）、「春ふかみあらしの山の桜ばなさくと見し間に散りにけるかな」（『金槐和歌集』春部・九二）等の例がみえる。

【通釈】

二十番

左（歌）持

右衛門督（源）通成

心をわけることなく専念して眺めよう桜花よ。立ち昇って桜花と混じり合うな、山の端の雲よ。

右（歌）

右近中将（源）雅光

桜花が咲いたと見たときから松山の梢に白波が絶えずうちかかっているようにみえることだ。

【判詞】（左歌の上の句に）「わくかたもなくて詠めん」と（詠んで）いる（が）、（これは）あまりに日常的な歌語らしくない表現でございましょう。（右歌の上二句の）「桜花さくとみしより」（も）また新鮮さを感じさせる詠みぶりでもございませんで、（どちらも）同じ程度の歌でございましょう。

〔二十一番〕

廿一番

左

兵部卿有教

① 尋^①いる花^②より花に日数へて山^③ちのすゑに幾夜とまりぬ

右

弁内侍

心のみ行^④帰りつ、山高^⑤みおられぬ花^⑥そうつろひぬへき

花より花に日数へて、すかた詞こひねかふへきやうには

侍らぬうへに、山路のすゑも覚東なくこそ侍れ、

こゝろの行てといへる、おかしくとりなされて

侍れは、おられぬ花に心うつろひ侍りぬ、又以右為勝、

〔校異〕

イ 勝一ナシ(書)(内) ロ そ一に(聚) ハ 一の(書)(永)

ニ へて一ナシ(書)(永)(支)、へ(内) ホ やうには一さまに

は(書)、さまには(永) へ こゝろの一こころのみ(聚) ト

又一ナシ(書)(永) チ 右一ナシ(内)

〔他書所伝〕

〔左歌〕ナシ〔右歌〕ナシ

〔本歌〕

〔右歌〕

『古今和歌集』卷第七・賀歌・三五八・凡河内躬恒

(内侍のかみの右大将ふぢはらの朝臣の四十賀しける時に、四

季のゑかけるうしろの屏風にかきたりけるうた)

山たかみくもゐに見ゆるさくら花心の行きてをらぬ日ぞなき

〔語釈〕

① 尋^①いる一深く分け入る意。「深山尋花」はるふかくたづねいるか
なたにがくれかせにしられぬはなやにほふと」(『教長集』一三二)
の如く、花を尋ねて山深く分け入る詠での用例がみえる。

② 花より花に一「やまふかみ花よりはななにつりきてくものあなた
のくもを見るかな」(『秋篠月清集』西洞隠士百首・春廿首・
六一) 等と同様、詠者主体が山中で花を次々と尋ねる様。

③ 山ちのすゑ一「浦ちかき山ちのすゑに日は暮れてふもとのいほに
あまのもしほ火」(『寂蓮法師集』二四七) 等の如く、山から出てい
く路の終端を指す場合と、「たれかまたやまちのすゑにむすぶらん
ちとせをながすきくのした水」(『千五百番歌合』秋四・七百七十九

番左・一五五六・源具親)、「見てもなほ花に心のゆきやらで山路の
すゑにけふもくらしつ」(『東撰和歌六帖』第一・春・桜・一七四・
光西法師)と、山奥の山路の果てを指す意の両様がみえる。当該歌
では後者の意。

④ おられぬ花そうつろひぬへき一前記本歌を踏まえ、実際には手折
られない高嶺の花が色あせていく様に仕立てている。

⑤ とりなされて一あるものを変えて他のものに仕立てるのが原義。
ここでは本歌を上手く踏まえて一首を仕立てていることを指す。
『千五百番歌合』の慈円詠「わがなみだよしののかはのよしさらば

いもせの山のなかにながれよ」(恋三・千三百二十三番左・二六四四)について、「左歌は、ながれてはいもせの山の中におつるよしの河のよしや世の中、と侍る歌、おほかたのいもせのなからひのありやうをよめる歌にて、古今の恋歌のはてにはいりて侍ると見ゆるを、をかしくとりなされても侍るかな」とするのがその一例。

【通釈】

廿一番

左(歌)

兵部卿(源)有教

(花を)探し求めて(山に)分け入り花から(さらに奥に咲いている)花へと(心を留めて移動しながら過)しているうちに意外にも(幾日も経ち、山路のはてに(行き着くまでに) 幾晩も泊まってしまったよ。

右(歌) 勝

弁内侍

心ばかりが行きつ戻りつして、(実際には、)山が高いので手折られない花は、きつと(そのまま)色あせて(散って)しまうことだろう。

〔判詞〕(左歌の)「花より花に日数へて」は、風体や表現が望まじいさまではごさいません上に、「山ちのすゑ」(と詠んだ下の句辺り)も(山路の果てで日数を過)したのか、山路の果てに辿り着くまでに日数を過(したのか)はつきりしません。(右歌は)「心の行きて」という(古今集歌)を、上手に採り入れて変化させておりますので、「おられぬ花」(と詠んだ右歌)に(判者の)心が惹かれました。ま

た右(歌)を以て勝とする。

〔二十二番〕

廿二番

左イ 樹

右近中将師繼

よしの山麓の里の春をへてひと日も桜めかれやはする

右

雅忠朝臣

泊せ山咲そふ花の色みえてことしはふかきみねのしら雲

左の吉野山は、ふもとのさとの春をへてひと日も

めかれせぬといひ、右泊せ山は、咲そふ花の色みえて

ことしはふかしと思へり、知かたく侍れば、此番勝

負弁侍るへし、

【校異】

イ 持一ナシ(書) □ 雅忠朝臣一名本ニ無之可改(支) ハめ

かれせぬ一さくらめかれせぬ(聚)、めかれす(書)(永) 二右

一右の(書)(永) ホ 色みえて一色をみて(書)(聚)(永)(内)、

色みて(支) ヘ ナシ一その心いづれあさしふかしと(書)(永)

【他書所伝】(左歌)ナシ (右歌)ナシ

【語釈】

①よしの山麓の里一山裾の里。「さくらばなさかりになれば芳野山ふもとのさとに旅ねをぞする」(『中宮亮重家朝臣家歌合』四番・八・

右京大夫)の如く、吉野山の麓の里で桜を心ゆくまで愛で春を過ごす数寄の心を表す。

②春をへて―幾年の春を経てという例は多いが、ひと春を過ぎす意としては、「春をへて花ちらましやおく山のかぜをさくらの心とおもはば」(『千載和歌集』巻第二・春歌下・八六・藤原基俊)がみえる。但し、千載集の例では、「春をへて」とする説がある。

③桜めかれやはする―桜から目を離すことが出来ないという意。「かぜをいたみひびきのなだを通る日も嶺の桜にめかれやはする」(『林葉和歌集』第一・春歌・一六七)、「ときは木のたえ間にほふ山桜まれなる色にめかれやはする」(『後鳥羽院御集』詠五百首和歌・春百首・六四五)等が先行例。

④泊せ山―初瀬山(はつせやま)。また、『万葉集』における「泊瀬山」表記を「とませのやま」とする訓み方も別称として通行していた。大和国の歌枕で現奈良県櫻井市初瀬町一帯。初瀬山と桜の取り合わせとしては、「はつせやまくもゐにはなのさきぬればあまのかはなみたつかとぞ見る」(『金葉和歌集』二度本・巻第一・春部・五一・大江匡房)、「はつせ山うつろふ花にはるくれてまがひし雲ぞ嶺にのこれる」(『新古今和歌集』巻第二・春歌下・一五七・藤原良経)、「はつせ山うつろはんとや桜花色かはりゆく峰の白雲」(『内裏百番歌合』二十番左・三九・藤原家隆)等が主な先行例。

⑤咲そふ―花が加わる意。先行例の一つ「としごとさきそふやどのさくら花なほゆくすゑの春ぞゆかしき」(『金葉和歌集』二度本・

巻第一・春部・三四・源雅兼)では、白河院、鳥羽院、待賢門院の白河殿花見御幸に事寄せて、院や帝の盛代を言祝いでいる。当該歌が、院が久仁親王(後深草)に譲位した翌年の出詠である点や下の句の「ことしはふかき」を勘案すれば、或いは一首全体に後嵯峨院政初発期への祝言が響いているか。

【通釈】

二十二番

左(歌) 持

右近中将(藤原)師繼

吉野山の麓の里での春を過ごし、(桜が日に日に奥の方へと咲いていくので)一日として桜から目を離すことができようか、いやできない。

右(歌)

(源)雅忠朝臣

初瀬山では今年のさくらが去年よりも花が咲き加わり色どりが美しく見えて、今年(桜の色が照り映え)峰の白雲も去年より今年が一段と(美しさが)深いことよ。

【判詞】左(歌)の吉野山は、麓の里での春を過ごし一日たりとも桜から目を離すことができないと詠じ、右(歌)の初瀬山は、咲き並ぶ花が(美しく)見えて今年(特に(峯の白雲も一段と)深く)考える。その(左右の)心のどちらが浅い深いかは識別しにくいので、この番の勝負は決めがたいでしょう。

二十三番

廿三番

左

沙弥蓮性

尋きて今そしめゆふ玉たすき雲ゐる山の初桜花

右

下野

みよしの、おくまで花に誘はれぬ帰らん道の枝折たにせて

左今そしめゆふたまたすきなといへる、ふるき

詞をかけていひ知て侍れと、右山とあらはれ

さるに侍れと、枝折といへるに聞えて侍れは、今

たつねくるより帰らん路の枝折たにせてといへる

は、花にまかへる心猶ふかくやそめまして侍る

へき 以右爲勝、

【校異】

イ 山一嶺(永) □ 花一哉(内) ハ 勝一ナシ(書)(内) ニ

帰一まつ(聚)(内)(支) ホ 道一みね(内)(支) ヘ て一ナシ

(聚) ト 侍れと一侍めれと(永) チ 右山とあらはれざるに侍れ

と、枝折といへるに聞えて侍れは一ナシ(聚) リ 山と一山そ(書)

(永)(内)(支) 又 あらはれざるに一あらはれたく(書)(内)、

あらはれたく(永)、あらはれて(支) ル 侍れと一侍れとも(書)

(永) ヲ 枝折といへるに聞えて侍れは、今たつねくるより帰らん

路の一ナシ(支) ワ くる一きたる(書)(永) カ より一より

は(書)(永) ヨ 帰一侍(聚)(内) タ たに一ナシ(支) レ

まかへる一さそはる、(書)(永) ソ ナシ一仍(書)(永)、心(内)

【他書所伝】

〈左歌〉

『万代和歌集』卷第一・春歌上・二〇五

十首御歌合に、山花を

正三位知家

たつねきていまだしめゆふたまたすきくもゐるやまのはつざくらば
な

『夫木和歌抄』卷第四・春部四・花・一〇七二

十首歌合に、山花を、万代

正三位知家卿

尋ねきて今ぞしめゆふ玉たすき雲ゐる山の初ざくら花

〈右歌〉

『新撰和歌集』卷第二・春歌下・九五

(宝治元年、十首歌合に、山花)

後鳥羽院下野

みよしののおくまで花にさそはれぬかへらん道のしをりだにせで

【蓮性陳状】一〇

下野

みよしの、奥まで花に誘はれぬ帰らん道のしをりだにせて

【語釈】

①しめゆふしめ繩を結びめぐらし自分の所有であることを宣言す

る行為。「うゑたてて君がしめゆふ花なれば玉と見えてやつゆもお

くらん」(『後撰和歌集』卷第六・秋中・二八〇・伊勢)等が先行例。

②玉たすき―樗の美称が原義。ここでは「おもひあまりいとますべ

なみ玉たすき雲ある山にわれしめむすぶ」(『古今和歌六帖』第五・

三二一九、原歌は『万葉集』一三三九)と同様の用い方。

③枝折―木の枝を折って道しるべとすること。「花ゆゑにしらぬ山路のあらばこそいるさかへさのしをりをもせめ」(『月詣和歌集』巻

第二・二月・一一四・源有房)、「よしの山こぞのしをりのみちかへ

てまだ見ぬかたの花をたづねん」(『新古今和歌集』巻第一・春歌

上・八六・西行)等の例がみえる。

④ふるき詞をかけて―「今そしめゆふ玉たすき」辺りの表現に「語釈」②既出『古今和歌六帖』歌との表現の似通いを指摘したもの。

⑤右山とあらはれざるに侍れと、枝折といへるに聞えて侍れは―為家は、右歌は「山」と詠み込まれていないが、「枝折」に山の意が響いていると指摘する。定家詠「(山家)しばのとの跡みゆばかり

しをりせよわすれぬ人はかりにもぞとふ」(『正治初度百首』下・

一三九二)は、その例。これに対して『蓮性陳状』は、俊成詠「しをりするならば柴にちる露のはらはらとこそねはなかれけれ」

(『長秋詠藻』上・一四七)に山の意が響いていないことや、『古今和歌六帖』において「枝折」が木の部に入っている点等を指摘し、

為家の判に異議を申し立てている。

【通釈】

二十三番

左(歌)

沙弥蓮性

(探し) 求めてきて(やっと出会い)(私は占有する為に)今こそしめを結おう、雲がかかる(高い)山の初桜花よ。

右(歌) 勝

下野

吉野の随分奥まで花に誘われてきてしまった。帰途の枝折もしないままに…

【判詞】左(歌の)「今そしめゆふ玉たすき」などという、(万葉歌のような)古い詞に関係付けて詞の使い方を心得ていますが、右(歌)は「山」と表現されていませんが「枝折」と詠じたことで(山の意)が聞こえますので、今尋ね来る(というよりは)「帰らん道の枝折りたにせて」という(表現)は、花の中にまじってしまふ(花に魅入られる)心が一層深く反映しています。右(歌)を以て勝とする。

〔二十四番〕

廿四番

左^イ

為氏朝臣

みよしの、花は昔の春なからなと故郷の山となりけん

右

少将内侍

心をは染さらましを桜花山のかひなくうつろはんとや

左上句春なからといへるまで珍らしき所侍らぬ
 にや、下句もあまりにたしかに侍るか、右そめさら
 ましをなといひてうつろはんとや侍る、少心覚東
 なくことたらぬやうに聞え侍れば、さりとは
 左勝侍るへし、

【校異】

イ 勝ーナシ(書) □ ナシー新拾遺、春下、(聚) ハ いへる
 ーいつる(支) ニ ーにそ(書)(永) ホ 侍るかー侍へき(書)
 (永)、侍る(聚)(内)(支) へ なんとー(書)(永) ト とや
 ーとやと(書)(永)

【他書所伝】

〔左歌〕

『新拾遺和歌集』卷第二・春歌下・一一八

宝治元年十首歌合に、山花 前大納言為氏

みよしのの花はむかしの春ながらなどふる郷の山となりけん
 〔右歌〕 ナシ

【語釈】

①故郷ー古跡が原義。ここでは、「(ならの京にまかれりける時にやどれりける所にてよめる) みよしのの山の白雪つもるらしふるさとさむくなりまさるなり」(『古今和歌集』卷第六・冬歌・三三五・坂上是則)の如く、かつて吉野川流域に営まれた離宮を指す。

②山のかひなくー「かひ」は、「峡」と「甲斐」の懸詞。「なげきをばこりのみつみてあしひきの山のかひなくなりぬべらなり」(『古今和歌集』卷第十九・雑体・一〇五七・よみ人しらず)等がその先行例。
 ③春なからといへるまで珍らしき所侍らぬー著名な『伊勢物語』所収歌「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」に連なる詠と理解した上での発言。

④あまりにたしかに侍るーいわんとする事をあまりに直接的に表現し過ぎて意。例えば、俊成は「やましなのいはたのをのに秋くれて風に色あるははそはらかな」(『六百番歌合』秋部・柞・四四〇・藤原隆信)について「はじめ、やましなとおけるぞあまりにたしかにきこえた」と、初句で地名をそのまま詠み込んでいる点を難じている。

【通釈】

二十四番

左(歌) 勝 (藤原) 為氏朝臣

吉野山の(桜の)花は昔と同じ春の花でありながら、どうして旧都の山に(吉野山は)なったのだろう。

右(歌) 少将内侍

桜花に心を染めなければ良かったものを。(その桜が咲く)山の峡の「峡」ではないけれど(その桜を大事に思う)「甲斐」もなく散ろうというのか、桜花よ。

〔判詞〕左(歌の)上の句は「春なから」というまで(特に)新味

がございませんでしうか。下の句も余りにはつきり言い過ぎていでしうか。右(歌は)「染さらましを」などといつて「うつろはんとや」(と)あります(のは)、少し趣意がはつきりせず言葉が足りないように聞こえますので、それならば左(歌)が勝つでしう。

二十五番

廿五番

左

経朝朝臣

吉野山桜にまかふ色そなき峯の白雲名にはたてとも

右

沙弥禅信

さくら花かはらぬ色を分かねて雲さへおしき春の山風

左哥人丸か目にはといへるいにしへの跡を捨て、

今の世にをよはぬこゝろをもて、更にまかふ色

なく思ひさため侍らん事こそ、なかれをくみて

源をわすれん心くちおしく侍れ、右春の山風

はかりにては題の心いか、とみえ侍れ共、雲さへ

おしきといへる花を思ふ心ありて幽に侍れ

は、尤以右為勝、

【校異】

イ 勝一ナシ(書) 口 もてーもちて(書)(永) ハ 更一桜(永)

二 くちおしくー口借(支) ホ は一ナシ(書) へ の一ナシ(永)

ト とーとそ(書)(永) チ いへるーいへるは(書)(永) リ

ありてーあまりて(永) 又 幽ーいう(書)、優(永)、かすか(聚)

(内) ル 侍れー侍る(支) ヲ 為一ナシ(支)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『現存和歌六帖』五八六

(さくら)

源俊平

さくらばなかはらぬいろをわきかねてくもさへをしきはるのやま風

『秋風抄』下・雑歌・二七〇

院御歌合のうた

源俊平

桜花かはらぬ色をわきかねて雲さへをしき春の山かぜ

『秋風和歌集』卷第十七・雑歌上・一〇七八

十首歌合に、山花を

みなもとの俊平

さくら花かはらぬ色をわきかねて雲さへをしき春のやまかぜ

【語釈】

①人丸か目にはといへるいにしへの跡ー『古今和歌集』仮名序「春のあしたよしの山のさくらは人まろが心にはくもかとのみなむおほえける」を踏まえた表現。桜を白雲と見紛うものとした和歌的伝統を指摘し、左歌が「桜にまかふ色そなき」と詠じた点を難じる。

なお、『龜山殿五首歌合』では、真観が「古今序にも、(中略)吉野山のさくらは人丸が目にくもかとぞおほえける」(廿一番・山紅葉)

と判を付している。

②なかれをくみて源をわすれん心―『摩訶止観』を出典とする語。『新古今和歌集』仮名序に「ながれをくみてみなもとをたづぬるゆゑに」とみえる他、『今鏡』序にも引用がみえる。

③幽に―内閣文庫本等では、「幽」の和訓「かすかに」とみえ、一方、永青文庫本では「優」字を宛てている。「幽」「優」では、意味合いが異なり、それぞれ「幽玄」「優美」といった意となる。当時の当て字はそれほど厳密なものではなかったと思われるが、ここでは底本の「幽」を尊重し、花を惜しむ心を奥深く表現した点を評価していると解釈した。

【通釈】

二十五番

左(歌)

(藤原) 経朝朝臣

吉野山には桜と見まがうような美しい色など他にはないことよ。山頂の白雲が(桜と見まがってしまふものだ)評判になつてのだけども。

右(歌) 勝

沙弥禅信

桜の花の変わらないように見える(雲の)色とを見分けることができな、雲までも(吹き散らされること)惜しいことだと思わせる、春の山風よ。

【判詞】左歌「人丸か目には」と言っている従来の歌事蹟を顧みず、今の世で昔にはとても及ばない心をもって、さらに(桜と白雲を)

みまがう色はないものと決めなされたことこそが、流れを汲んで源を忘れる(歌の伝統に立って、源流を忘れて)ような風情であつて残念でございませう。右(歌)「春の山風」という(表現)だけでは題の心としてどうかと思われまますけれども、「雲さへおしき」と言う花を愛でる情緒があつて幽玄でありますので、いかにも右(歌)を以て勝とする。

〔二十六番〕

廿六番

左(歌)

越前

みよしの、花の盛に成ぬれば四方の草木も匂ふ春かせ

右

前権大納言為家

老の身にくるしき山のさかこえて何とよそなる花を^ハ辯覧

左山の心おほつかなくや、右くるしき山の坂こえて^ト

凡卑のすかた、たとへは妻木をへる山人の、なをし

も花の陰をさりてよそにみえたるおもかけ、はな

はたみくるしく侍るにこそ、尤可^ナ負、

【校異】

イ 勝―ナシ(書) □ ナシ―新後撰、春下、(聚) ハ 待覧―

みらん(書) (永) ニ ナシ―と(書)、といへる(永) ホ 凡

卑―凡早(内) へ みえたる―みたる(書) (永) ト みくるし

く侍るにこそ見苦敷こそ侍れ(支) 子 可負一為負(書)(永)、
可曾(支)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『新後撰和歌集』卷第二・春歌下・九四

宝治元年、十首歌合に、山花

前大納言為家

老の身にくるしき山のさかこえてなにとよそなる花をみるらん

『題林愚抄』第三・春部三・九九四

新後撰

為家

老の身にくるしき山の坂こえて何とよそなる花をみるらん

【語釈】

①みよしのゝ花の盛に成ぬれば一吉野山の花盛りの春景を表す。表
現に目新しさはなく、例えば『月詣和歌集』には「みよしののほな
のさかりに成りぬればたたぬ時なき峰のしら雲」(卷第三・三月・
一六五・藤原為業)と、上の句が一致する先行例がみえる。

②老の身にくるしき山のさかこえて一先行例として「老いぬればの
ぼる山路のくるしきに心をひくは桜なりけり」(『民部卿家歌合』四
番石・八・二条院三河内侍)がみえる。

③たとへは妻木をへる山人の、なをしも花の陰をさりてよそにみえ
たるおもかけ一『古今和歌集』仮名序で大伴黒主の和歌の風体につ
いて「おほともくろぬしはそのさまいやし、いはばたきぎおへる

山びとの花のかけにやすめるがごとし」と評した表現を踏まえる。

【通釈】

二十六番

左(歌) 勝

越前

吉野の花が盛りになったので、四方の草木も匂い立つ春風(が吹
いていること)よ。

右(歌)

前権中納言(藤原)為家

(こんな)老いの身で苦しい山の坂を越えてまで、どうして自分
とは関係ないような花を眺めているのであろうか。

〔判詞〕左(歌は)山の心があまり表に出ていないのではないか。

右(歌は)「くるしき山のさかこえて」という表現は凡庸で下品
な様(である)。例えば『古今和歌集』序のように「妻木を背負つ
た山人が、(花の蔭で休むだけでなく)その上花の蔭を離れて他の
場所で見える(ような風体であるのは)、甚だ見苦しゅうございます。
当然負とするのが良い。」

宝治元年『院御歌合』注釈―「五月郭公」題―

位藤邦生 藤川功和

はじめに

「広島大学大学院文学研究科論集」第66巻（平成18年12月）に引き続き、宝治元年（一二四七）『院御歌合』の注釈を試みる。今回は「五月郭公」題十三番を取り上げる。注釈は、広島大学中世文芸研究会における輪読をもとに、位藤邦生と藤川功和が再検討したものである。輪読時の各番担当者と所属を以下に示す。

二十七番―藤川功和、二十八番―濱口好太郎（文学研究科博士課程前期）、二十九番―堤登志江（文学部三年生）、三十番―高田哲治（文学部二年生）、三十一番―流郷織江（文学部四年生）、三十二番―山口正代（文学研究科博士課程後期）、三十三番―新居和美（同）、三十四番―相原宏美（同）、三十五番―中村聡子（文学部四年生）、三十六番―藤川、三十七番―豊田宮子（文学研究科研究生）、三十八番―竹中さやか（文学部四年生）、三十九番―位藤邦生

凡例

- 一、底本は、群書類従本（巻第二百所収）を用いた。
- 一、校合した諸本と略号は、以下の通り。
 - （書）―書陵部蔵本「五〇一・七四」（『新編国歌大観』の底本）
 - （聚）―書陵部蔵歌合類聚本（『大日本史料』第五篇二十四所収）
 - （永）―永青文庫蔵本「二〇七・三六・七」（『細川家永青文庫叢刊』第八巻所収）
 - （内）―内閣文庫蔵本「百三十番歌合（外題）」（二〇一・二四七）
 - （支）―九州大学支子文庫蔵本「九一一・ホ・一」
- 一、注釈は、番全体の本文【校異】を示した後、【他書所伝】【本歌】【語釈】【通釈】をあげた。
- 一、【語釈】の内、各詠作者並びに前号既出の語彙については、紙幅の関係上これを略した。
- 一、表記や送り仮名の異同はこれを略し、見せけちや補入符号によって訂正のある箇所は、訂正後の本文を採用した。
- 一、翻字本文には適宜読点を施し、字体は現行の活字体に改めた。
- 一、本文中、異同の存する箇所には、傍線及びイ、ロ、の如き符号を付し、語釈を施した箇所には、本文右傍に①、②…の通し番号を付した。
- 一、底本で文意不通等が認められる場合、他本の本文に拠り通釈を施した場合がある。その際、本文【校異】【通釈】において他本

に拠った箇所には網掛けを施した。

一、引用本文は、原則として『新編国歌大観』に拠り、その他の引用文献は、適宜底本を示した。

二、引用本文には、適宜、傍線、振り仮名等を付した。

〈二十七番〉

廿七番 五月郭公

左 男

女房

里なれて今そ鳴なる時鳥^ト五月を人はまつへかりけり^ト
右 小宰相

をのか妻いかに契れる郭公五月の空を分てとふらん^ト

左 歌里なれて今そなくなるとて、五月を人は

まつへかりけりと侍る、心姿ことに珍しく、ほと

きすの古声もかく侍りけるものを、まことの秀逸

にこそ侍らめ、右歌さしたる難には侍らねと、をの

か妻、あつまやから衣などはなくて、五月の空をわき

てとふらんといへる、ことにより所なく聞え侍れば、

猶^ト以左為勝

【校異】

イ 勝―ナシ(書) ロ ナシ―続後撰、夏(聚)、続後撰(永)

ハリ―む(内)、る(支) ニる―は(書)(永) ホ て―也

(支) への―ナシ(書) トの―に(聚) チ 逸―^ト■(内)

※■は「速」とよめるかり歌―ナシ(聚) 又は―ナシ(支)

ル なく―なれ(書)(聚)(永)(内)(支) ヲ ―ナシ(書)(聚)

【他書所伝】

〈左歌〉

『続後撰和歌集』卷第四・夏歌・二〇〇

十首歌合に、五月郭公といへる心をよませ給うける 太上天皇

さとなれていまぞなくなるほととぎす五月を人はまつべかりけり

『新三十六人撰』三五

(太上天皇御製後嵯峨院)

里なれて今ぞ啼くなるほととぎす五月を人はまつべかりけり

〈右歌〉ナシ

【語釈】

①五月郭公―郭公は五月頃(旧暦四月)渡来、繁殖し、8、9月頃南方に帰る渡り鳥。和歌の世界では、「さまつ山郭公うちはぶき今もなかなむこそこのふるごゑ」(『古今和歌集』卷第三・夏歌・一三七・よみ人しらず)に代表される如く、五月は、それまで山にいた郭公が人里に下り本格的に鳴く時候とされる。

②里なれて―郭公が、深山から人里へと降りて、徐々に人慣れて鳴

くようになる様をいう。「あしひきの山郭公さとなれてたそかれ時になのりすらしも」〔拾遺和歌集〕卷第十六・雑春・一〇七六・大中臣輔親〕等がその例。

③五月を人はまつへかりけり―「こがくれてさ月まつとも郭公はねならはしに枝うつりせよ」〔後撰和歌集〕卷第四・夏・一五九・伊勢〕等の如く郭公が五月を待つ、或いは「宮こ人ねでまつらめや郭公今ぞ山べをなきていづなる」〔拾遺和歌集〕卷第二・夏・一〇二・藤原道綱母)、「さみだれはいこそねられね郭公夜ぶかくなかむこゑをまつとて」〔拾遺和歌集〕卷第二・夏・一一八・よみ人しらず〕等の如く視点人物が郭公(の鳴き声)を待つという詠が古来多くみえる。一方当該歌の如く視点人物が(郭公が盛んに鳴く季節である)五月を待つという先行例としては「郭公卯花かげの忍び音にわれも五月の空ぞまたるる」〔正治後度百首〕夏・郭公・四一六・藤原隆実〔信実〕〕等があげられるがそれほど多くない。

④をのか妻―郭公を擬人化した表現。「たびにしてつまごひすらしほととぎすかむなびやまにさよふけてなく」〔万葉集〕卷第十・夏雑歌・一九四二、「後撰和歌集」〔卷第四・夏・一八七〕は初句「たびねして」等の如く、妻を恋いつつ鳴く郭公を詠む例が古来みえる。

⑤空を分て―「分て」は、空を分けての意ととりわけの意。「わび人のわきてたちよるこの本はたのむかげなくもみぢちりけり」〔古今和歌集〕卷第五・秋歌下・二九二・遍昭)は後者の例歌。

⑥ほととぎすの古声―郭公の鳴き声の慣用表現。「さ月まつ山郭公う

ちはぶき今もなかなむこぞのふるこゑ」〔語釈〕①既出)の如く「去年と同様」、また「ほととぎすなきてよにふるこゑをだにきかぬこそつれなかりけれ」〔斎宮女御集〕九八)等と「以前と変わらぬ声」と詠まれる場合が多い。

⑦をのか妻、あつまやから衣などはなくて―難解。「をのか妻」といえば伝統的には催馬楽「東屋」(それを用いた『源氏物語』東屋卷)や「唐衣」(それを用いた『伊勢物語』第九段「から衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ」)等がなだらかな連想を誘うものであるが、そうした伝統的な修辭が欠けていることを指していると思われる。初句「をのか妻」は既に『万葉集』からみえるが、これを「わが妻」としないで「をのか妻」とした背景には、二十九番以降に頻出する「をのか五月」の典拠となった良経の歌等への連想が働いていようか。

⑧より所なく―ある表現を用いる必然性に乏しいことを指す。当該歌の場合、上の句「をのか妻」と下の句「五月の空を分てとふらん」の結びつけが唐突で、二つの表現を結びつける必然性に乏しいことを難じていると思われる。

【通釈】

二十七番 五月の郭公

左(歌) 勝

女房(後嵯峨院)

山から出てようやく人里に馴れ今まさに鳴いている郭公よ。(郭公の盛りの声を聴く為に)五月を人は待っていた甲斐があったのだな

あ。

右 (歌)

(承明門院) 小宰相

おのが妻にどのようなように約束をしたので、郭公は今五月の空を裂いてわざわざ飛んでいるのであろうかなあ。

〔判詞〕左歌の「里なれて今そなくなる」といつて、「五月を人はまつへかりけり」とあります、(一首全体の)心や姿は特に珍しく、郭公の古声も(たしかに)この(左歌の)ようでありましたので、まさに本当の秀逸(の歌)であります。右歌は大した難点ではありませんが、「をのか妻」(と詠み、しかし)、「東屋」「唐衣」などは(表現し)なくて、「五月の空をわきてとふらん」と言っているのは、特に表現の必然性に欠けるように思われますので、やはり(この番は)左歌をもって勝ちとする。

〈二十八番〉

廿八番

左^イ 刪

太政大臣

我^ロのみとなくやさ月の時鳥たれもね覚はよそにやは聞

右

俊成卿女

かたらひし宿の軒はの橋にさ月こととふほととぎすかな

我のみとなくやさ月とて、誰もね覚はよそにやは

きくと侍るこそ、老の後はことに夏の夜もわかぬね覚、ことによるしく聞なされ侍れ、かたらひしといひて、さ月こととふと侍るもおなし心にて、聞ふる

されにたれ

【校異】

イ 勝—ナシ (書) ロ は—を (書) ハ とて—のとて (聚)

(内) ニ ことに—まことに (書) (永) ホ わかぬ—有ぬ (支)

へ なされ—なれ (内) ト かたらひし—右かたらひし (永)、か

たらへし (支) チ こととふ—斗とふ (永)、ととふ (支) リ

されにたれ—されにたれはまた左かち侍へし (書)、されたれは又左

勝侍へし (永)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【参考歌】

〈右歌〉

『源氏物語』花散里・一六八・光源氏

橋の香をなつかしみほととぎす花散る里をたづねてぞとふ

【語釈】

①我のみとなくやさ月の時鳥—類例として「とふ人もなきふるさとのたそかれにわれのみ名のるほととぎすかな」『待賢門院堀河集』

一四)、「おのづからとふ人もなきみ山べに我のみなのるほととぎすかな」(『宝治百首』夏十首・関郭公・八八九・西園寺公相)等があげられる。

②かたらひし宿の軒はの橋に—『源氏物語』花散里巻で、光源氏は昔情を交わした中川のあたりの女に「をち返りえぞ忍ばれぬほととぎすほの語らひし宿の垣根に」(一六六)の歌を贈る。当該歌は【参考歌】にあげた光源氏詠とも表現の一致をみせており、おそらく花散里巻を踏まえて、恋の情趣を込めた一首に仕立てたものであろう。

③老の後はことに夏の夜もわかぬね覚—左歌の歌中の「ね覚」を老いの寝覚めと解しての評。時鳥の鳴き声と老いの寝覚の先行例としては、「ききつるやはつねなるらんほととぎすおいはねざめぞうれしかりける」(『後拾遺和歌集』第三・夏・一九六・法橋忠命)、「あけがたにはつねはききつ時鳥まつとしもなき老のねざめに」(『月詣和歌集』巻第七・雑上・七二六・兵衛)等があげられる。なお、為家にも「鳴きふるす涙たづねてほととぎす老のねざめにはつねなくなり」(『為家集』上・夏・四六七)等がみえる。

【通釈】

二十八番

左(歌) 勝

太政大臣(西園寺実氏)

悲しいのは自分だけだと鳴く(泣く)のか、五月の郭公よ、(老いの)寝覚めには、お前の鳴く声を誰が他人事だと聞いていられようぞ。

右(歌)

(以前)語らった宿の軒端に橋(がまた咲いて、この)五月に声をかけて来る郭公であることよ。

〔判詞〕「我のみとなくや五月」と言つて、「誰もね覚めはよそにやはきく」とございますのは、老後は特に夏の短夜もわきまえない寝覚め(という趣向が)、とりわけ優れていると理解されます。「かたらひし」と言つて、「さ月こととふ」とございますのも同様の内容で、ことに新しさはないので又左勝でございます。

〈二十九番〉

廿九番

左

権大納言通忠

立花のにはほふさ月の時鳥いかに忍ふるむかし成らん

右

権大納言実雄

折はへてなげや雲ちの時鳥いまはたをのかさ月きにけり

左右ほととぎすいつかたと聞わかれ侍らねと、いかにしのぶるといへるよりは、今はたをのかといへるは、みくにとまり侍るへくや、

【校異】

イ ナシ―続拾、夏(聚) ロ 勝―ナシ(書) ハ 左右―左右
の(書) ニ わかれ―わかす(支) ホ ふる―ふ(聚)
へるは―る(書) ト とまり―とまり(永) チ 侍るへく
や―侍ぬへくや(書)、侍ぬへくや(永)

【他書所伝】

〈左歌〉

『続拾遺和歌集』卷第三・夏歌・一七七

宝治元年十首歌合に、五月郭公 右近大将通忠

たち花のほふ五月の郭公いかにしのぶるむかしなるらん

『秋風抄』上・夏歌・三六

院御百首に、五月郭公

右大将通忠

橘のほふ五月の郭公いかにしのぶるむかしなるらん

『秋風和歌集』卷第三・夏歌上・一七五

十首の歌合せさせたまける時、五月郭公といふことを

右近大将通忠

たちばなのほふ五月のほととぎすいかにしのぶるむかしなるらん

『和漢兼作集』卷第四・夏部上・四四四

五月郭公

右近大将源通忠

たちばなのほふ五月のほととぎすいかにしのぶるむかしなるらん

『題林愚抄』第五・夏部上・二〇七二

続拾

右大将通忠

橘のほふさ月のほととぎすいかにしのぶるむかしなるらん
〈右歌〉

『題林愚抄』第五・夏部上・二〇七四

宝治歌合

実雄卿

をりはへてなげや雲ちの郭公今はたおのが五月きにけり

【語釈】

①立花のほふさ月の時鳥―橘の香と時鳥の取り合わせは、「たちば
なのほへるかかもほととぎすなくよのあめにうつるひぬらむ」(『万
葉集』卷第十七・大伴家持・三九三八)等古くから見いだせる。

②いかに忍ふるむかし成らん―橘と郭公の取り合わせに、著名な「さ
つきまつ花橘のかをかげば昔の人の袖のかぞする」(『古今和歌集』
卷第三・夏歌・一三九・よみ人しらず)を加え、郭公を擬人化して
一首に仕立てたもの。

③折はへて―長く続ける意。「あしひきの山郭公をりはへてたれかま
さるとねをのみぞなく」(『古今和歌集』卷第三・夏歌・一五〇・よ
み人しらず)、「たがみそぎゆふつけ鳥か唐衣たつたの山にをりはへ
てなく」(『古今和歌集』卷第十八・雑歌下・九九五・よみ人しらず)
等が早い例。

④雲ちの時鳥―雲路は「雲の通ひ路」の短縮形と考えられ、雲の立
ちこめた空を飛ぶ郭公の意。先行例として、「里わかず鳴けや雲路の
ほととぎす空ゆく月の跡をたづねて」(『道助法親王家五十首』夏・

三二四・隆昭)等がみえる。

⑤をのかさ月―俊頼の「ほととぎすおのがさ月の空ならば所もわか
ずしたりがほなれ」(『散木奇歌集』第二・夏部・五月・二二二)が
初例。勅撰集では、良経の「ほととぎすいまいく夜をかちぎるらむ
おのが五月のありあけのころ」(『新勅撰和歌集』卷第三・夏歌・一
七六、『正治初度百首』出詠歌)と「けふここに声をばつくせほとと
ぎすおのがさ月ものこりやはある」(『新勅撰和歌集』同・一七七・
祐盛法師、俊頼男)がある。当該「五月郭公」題では、五首に「を
のか五月」が詠み込まれている。なお、良経には他に「ときしあれ
ば花ちるさとののきのあめにおのが五月の鳥のこゑ」(『千五百番
歌合』夏一・三百六十二番左・七二二)、「ほととぎすおのがさ月の
くれしよりかへるくもぢにこゑうらむなり」(『秋篠月清集』西洞隠
士百首・夏廿首・六三六)もあり、本歌合における「をのか五月」
表現の重用と良経の歌との関係は興味深い所である。

【通釈】
二十九番

左(歌)

権大納言(藤原)通忠

橘(の花の香り)が匂ってくる(時期である)五月の郭公よ、(お

前が今頃)どんなに恋い慕っている昔なのだろうか。

右(歌) 勝

権大納言(藤原)実雄

ずつと長く鳴き続けよ、雲の立ちこめた空を飛ぶ郭公、今またお
まえの(天下である)五月がきたぞ。
〔判詞〕左右のほととぎすはどちら(が良いか)と聞いて(すぐに
は)判断できませんが、「いかにしのふる」というよりは、「いまは
たをのか」といつているのは、一段と印象的でしょう。

〈三十番〉

世番

左(判)

権大納言定雅

つれもなき月をまつとて時鳥なくか涙の五月雨の空

右

権大納言公相

今よりはまたてやきかん時鳥鳴ふるしつる五月雨の比
つれもなき月を有明の空にみならひて侍る
にや、五月雨のゆふにまたるゝ月はすくさすや
とそみえ侍る、下句も例のさしてそれとは
おほえ侍らぬか、みたる心ちし侍れとも、かやう
の事はさのみこそ侍れ、今よりはうたかたふへくも
侍らぬにや、いづれもおほつかなき所侍れば、しは

らく可為持敷、

【校異】

イ 持—ナシ(書)、勝(内) □ か—は(書)、や(永)

ハ 涙の—涙(内) ニ つる—たる(支) ホ 比—空(永)

ヘ ナシ—左(書) ト を—ナシ(書)(永) チ みならひて—

みならひ(内) リ 侍るにや—侍るかや(支) ヌ ゆふ—ゆへ

(書)(永)(内)(支) ル またる—侍らは(書)(永)、侍らる、

(内)、侍らる(支) ヲ すくさすや—すくさはや(永) ワ 侍る

—侍か(支) カ は—も(支) ヨ 心ちし—こちして(永)

タ 今よりはうたかふへくも侍らぬにや—いまよりはたかふへくも

侍らぬにや(聚)、いまよりはまたてやきかむと侍になきふるしたる

とてはうたかふへくも侍らぬにや(書)、いまよりはまたてやきかん

と侍になきふるしつるとてはうたかふへくも侍らぬにや(永)

し 為持敷—持敷(内)、■持(支) ※■は判読不能

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①つれもなき月—見えない月を「つれなき」と見立てる。「五月雨の

月はつれなきみ山よりひとりもいづる郭公かな」(『老若五十首歌合』

夏・七十三番左・一四五・藤原定家、『新古今和歌集』卷第三・夏歌

・二三五)等が、五月雨と郭公の組み合わせにおける先行例。

②涙の五月雨の空—雨を涙に見立てる例は多い。「さみだれののきの

しづくはほととぎすなくや五月のなみだなりけり」(『千五百番歌合』

恋一・千二百二十八番左・二二五四・慈円)等は、特に五月雨と涙を

組み合わせた先行例。なお、為家は「いとどしくかわかぬ苔の袂か

なるもなみだのさみだれの比」(『為家集』上・四五一)等と詠ん

でいる。

③鳴ふるしつる五月雨の比—五月雨の時候を郭公の鳴き古す頃とし

たもので、為家に「あやにくにまたれしかどもほととぎすききふる

さるる五月雨の空」(『為家集』上・三一六)、「いたづらにききふり

にけりほととぎすなくや涙のさみだれの空」(『為家集』上・四四五)

等の類例がみえる。なお、当該歌の「ふる」には、「五月雨のふりぬ

るふるもほととぎすあかやそらになほまたるらむ」(『実材母集』・

一〇四)等の如く、「五月雨が」降る」意も響くか。

④つれもなき月を有明の空にみならひて侍るにや—良経の「有明の

つれなく見えし月はいでぬ山ほととぎす待つよながらに」(『新古今

和歌集』卷第三・夏歌・二〇九)を念頭に置いたものか。良経歌は、

「有あけのつれなく見えし別より暁ばかりうき物はなし」(『古今和

歌集』卷第十三・恋歌三・六二五・壬生忠岑)を本歌取りした詠で、

『千五百番歌合』出詠歌(夏一・三百三十二番左・六六二)でもあ

る。これらを踏まえた為家は「つれもなき月」を「有明の月」と結

びつけて解していると思しい。

⑤五月雨のゆふにまたる月はすくさすやとそみえ侍る—難解。「ゆ

ふ」を諸本の「ゆへ」に改めた上で、試みに解せば次のようになろうか。直前の判詞に拠れば「つれもなき月」には「有明の月」の意が響いており、五月雨のせいで一晩中待たれた月は有明の月であっても見過ごさないという風に解される。なお五月雨と月と郭公の組み合わせとしては、「五月雨の月はつれなき山よりひとりもいづる郭公かな」〔語釈〕①既出、「五月雨の雲まの月のはれ行くをしはし待ちける時鳥かな」〔新古今和歌集〕卷第三・夏歌・二三七・二条院讚岐）等がみえる。

⑥今よりはうたかふへくも侍らぬにや―これも難解。書陵部本「いまよりはまたてやきかむと侍になきふるしたるとてはうたかふへくも侍らぬにや」に拠って試みに通釈する。

【通釈】

三十番

左(歌) 持

権大納言(藤原) 定雅

つれない月を待つといつて時鳥は鳴いているのであろうか。郭公が流す涙が降っているかのような五月雨の空(の下)。

右(歌)

権大納言(西園寺) 公相

時鳥が鳴き古す五月雨の頃ともなればこれからは待つこともなく(その声を) 聴こう。

〔判詞〕「つれもなき月」を「有明の空」に見慣れているせいでしょうか。五月雨が降るせいで(今か今かと) 待たれる月は見過ごさないという風に解されます。下の句も例によってどの歌が特にそれだ

とは覚えておりませんが、既にどこかで見た心地がいたしますもの、こういったことはそんなものでございませう。「今よりはまたてやきかん」とございますのに(下の句で)「鳴ふるしつる」というのでは(論理上の齟齬を) 疑うべくもございませぬ。両歌とも(表現上) はつきりとしなないところがございますので、ひとまずは持とすべきでしょう。

〈三十一番〉

卅一番

左

権大納言公基

人しれすまたれし物を五月雨の空にふりぬる時鳥哉

右

為教朝臣

きかぬまの心つくしの時鳥さ月の空はまたれさりけり

左優に侍るめり、右またれさりけりといへる、
おもひ所なく侍れば、尤可負、

【校異】

イ 勝―ナシ(書) ロ ナシ―続後撰、夏(聚)、続後撰(永)

ハ 右―左(内) ニ れ―袖(内) ※「袖」は「禮」を書き誤ったものか ホ おもひ―おもひ(書)(永) ヘ 可―為(書)(永)

【他書所伝】

〈左歌〉

『続後撰和歌集』卷第四・夏歌・二〇一

権大納言公基

人しれずまたれしものを五月雨のそらにふりぬるほととぎすかな

『題林愚抄』第五・夏部上・二〇六八

(縁後撰)
同

権大納言公基

人しれずまたれしものを五月雨の空にふりぬる郭公かな

〈右歌〉ナシ

【語釈】

①五月雨—書陵部蔵本では「五月雨」を「梅雨」と表記する。

②ふりぬる—五月雨の「降る」と郭公が「鳴き古す」意の掛詞。「五月

月雨のふりぬるこゑもほととぎすあかやそらになほまたるらむ」

『実材母集』一〇四) 等が類例。

③心づくしの時鳥—視点人物が郭公を心待ちにしている様。「待ちし

より心づくしのほととぎすしぼしとどめよもじの関もり」(『月詣和

歌集』第三卷・羈旅部・二四四・賀茂資保)、「今も猶心づくしの郭

公おなじ鳴く音をまたれずもがな」(『洞院撰政治家百首』上・夏・三

九一・少将) 等の先行例がみえる。

④おもひ所なく—書陵部本等には「おもふところなく」とあり、「思

ふところなきにあらざれば、右すこしはまさり侍らむ」(三十八番判

詞)、「おもひ所なきにあらず侍るにや」(七十二番判詞) 等、「おも

ふ所」が当該歌合で肯定的に用いられる例が見い出せる。ここでは
視点人物や判者の感懐の意ではなく、歌う対象への思いやりと解す
る。

【通釈】

三十一番

左(歌) 勝

権大納言(藤原)公基

(卯月には) 人知れず待たれたのに(五月になって) 五月雨が降
る空に鳴き古し(聞き古され) た郭公であるよ。

右(歌)

(藤原) 為教朝臣

(ずつとほととぎすの声を) 聞かない間、心を砕いて待ちに待った
郭公よ、五月の空にあつては(すっかり) 待つ気もなくなつてしま
ったことだよ。

【判詞】左(歌) は優美でございましょう。右(歌) は、「またれさ
りけり」といっているのが、**対象(郭公)への愛情がございませ**
るので、当然負けです。

〈三十二番〉

卅二番

左

中納言為経

立^卯帰^卯り今もなかなん時鳥をのかさ月の去年の古声

右刪

信実朝臣

郭公かたまつよりもまたれけりをのかと思ふさ月きぬれば

左立かへりといへるよりふる声まで、珍しき事は

聞え侍らぬにや、右ことなる事は侍らね共、我が

心よりよみ出したる哥とみえ侍れば、右勝と申へし、

【校異】

イ 立—おち(書)(永)、たち(聚)、立(支) 口 勝—ナシ(書)

(内) ハ かた—はた(書) ニ 立—おち(書)(永)(支)

ホ より—よりは(永) へ 右—右は(支) ト 侍らね—聞え

侍らね(書)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『題林愚抄』第五・夏部上・二〇七五

(宝徳歌合)

信実朝臣

時鳥かたまつよりもまたれけりおのがと思ふさ月きぬれば

【語釈】

①立帰り—もとあつた状態に戻る、昔の状態に戻る意。『家持集』に

「ほととぎすみやこへゆかばたちかへりいまきぬべしといもにつげ

よく」(夏歌・六六)とあり、この場合、もといた場所に戻る意。当

該歌は時鳥が鳴き始めた頃に戻って、あるいは何度もとに戻って

繰り返し鳴いてほしいというように幅広く解釈できようか。一方、

当該箇所には「をちかへり」という異同がある。「をちかへり」の場

合、時鳥に何度も繰り返し鳴いてほしいという意になる。「をちかへ

る(復返)」には若返るといふ意があるので、結句の「去年の古声」

との対応を考えると、「をちかえり」の方が表現的に妙味があるか。

用例としては「をちかへり」の方が多く「郭公をちかへりなけうな

るこがうちたれがみのさみだれのそら」(『拾遺和歌集』巻第二・夏

・一一六・凡河内躬恒)、「ゆふづく日いればをぐらのやまのはにを

ちかへりなくほととぎすかな」(『江帥集』夏・五三)等散見する。

ここでは「立帰り」で解釈しておく。

②去年の古声—去年と変わらない郭公の鳴き声という慣用表現。『古

今和歌集』の「さ月まつ山郭公うちはぶき今もなかなむこそふる

こゑ」(巻第三・夏歌・一三七・よみ人しらず)が代表的な例であ

るが、当該歌は傍線部で語句の一致がみえる。

③かたまつ—ひたすら待つ意。「うぐひすはいまはなかむとかたまた

ばかすみたなびきつきはへにつつ」(『万葉集』巻第十七・四〇五四)、

「いもにあはんよをかたまつとひさかたのあまのかはらに月はへに

けり」(『家持集』二二一)、「郭公かたまつよひの山の端にさもあら

ぬ月ははやいでにけり」(『正治後度百首』夏・郭公・五一六・源家

長)等が先行例。「かたまつ」は郭公、「またれけり」は視点人物の

行為として二つに分けて解する方向もあるか。

④我か心よりよみ出したる哥—いかにして思ひしらせむ時鳥おい

はつるまであかぬころを」(『今撰和歌集』夏・五七・藤原公重)、

「まちつけてことしもききつほととぎすおいはたのみのなきみなれども」(『頼輔集』二二)等、老境に入りなお郭公の声を待ち遠しいと詠む例がみえる。詠者信実は、宝治元年時点で七十歳を越えており、為家は当該歌に信実自身の心情を読み取った上で判を付したものでか。

【通釈】

三十二番

左(歌)

中納言(藤原)為経

もう一度もとに戻って、今すぐにも鳴いてほしい時鳥よ、お前が(盛んに)鳴いた去年の昔のままの声で(よいから)。

右(歌) 勝

(藤原)信実朝臣

郭公よ、(お前の鳴くのが)ひたすら待つというよりもっと待たれてならないことだ。(お前が)自分の時と思う(はずの)五月が来たので。

【判詞】左(歌)は「立かへり」といつている(ところ)より「古声」まで、珍しいと思うようなことはいません。右(歌)も特別なことはいませんが、自分の心より詠み出している歌と見えますので、右を勝ちと申そう。

〈三十三番〉

卅三番

左(歌)

右衛門督通成

時鳥^①わきていつとはおもはぬにをのかさ月と今はなく也

右

左近中将雅光

さ^②月山月まつよひの村雨^③にふり出てなくほととぎす哉

右^④哥^⑤またしとおもへはむらさめの空といへる近き

世の哥より、ほととぎすにはかならず村雨そふへき

事に侍りにたり、五月雨すへき比さへむら雨いかと

と覚え侍るを、左歌わきていつとはおもはぬにと

いへるも、ほととぎすに心いらぬやうに聞えて、

ほいなくや侍らん、持にて侍るへきにや、

【校異】

イ 持―ナシ(書) □ 左近中将―右近中将(聚)(書)(内)(永)、

左近衛中将(支) ハ 右―左(内) ニ 侍り―なり侍(聚)(書)、

成侍り(永)、なり侍る(内)、なり侍り(支) ホ ほととぎす―

時雨(支) ヘ に―には(永) ト やう―さま(書)(永)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①わきていつとはおもはぬに―わきては、「時しらぬ富士の山へのほととぎすいかで五月をわきて鳴くらむ」『洞院摂政家百首』上・夏・三七九・藤原光俊朝臣)等の如く、時期を識別する意。当該歌の場合、郭公とは対照的に視点人物は五月の到来を特に意識していないとする。

②さ月山―五月の頃の山を指す。五月山と郭公の取り合わせは、「さつきやまうのはなづくよほととぎすきけどもあかずまたなかなかも」(巻第十・夏雑歌・一九五七)、「さつきやまはなたちばなにほととぎすこもらふときにあへるきみかも」(同・一九八四)等の如く早くは『万葉集』にみえる。

③村雨―にわか雨。郭公と村雨の組み合わせは、勅撰集では「心をぞつくしはてつるほととぎすほのめくよひの村雨のそら」(『千載和歌集』巻第三・夏歌・一六七・藤原長方)が早い例。中世には村雨と郭公の取り合わせは多くみえる。

④ふり出て―声を高く張り上げる意。加えて村雨が「降る」意と郭公が山から飛び立つ「出づ」の意が響く。「むめの花ちるてふなへにはるさめのふりいでつつなくうぐひすのこゑ」(『伊勢集』三三六)、「入日さすゆふくれなゐのこのまよりふりいでつつなく山ほととぎす」(『御裳濯和歌集』巻第四・夏歌・二二五・大中臣公長)等が類例。

⑤またしとおもへはむらさめの空といへる近き世の哥―「いかにせ

んこぬよあまたの時鳥またじとおもへばむら雨の空」(『新古今和歌集』巻第三・夏歌・二二四・藤原家隆)を指す。

⑥ほととぎすにはかならず村雨そふへき事に侍りにたり―家隆詠は『家隆卿百番自歌合』(十八番右・三六)所収歌で、詞書に「私詠建久五年」とみえる。郭公と村雨の取り合わせ自体は【語釈】③に掲げた千載集所収歌や、「うらめしやまたれたれて時鳥それかあらぬかむらさめの空」(『拾遺愚草』上・二見浦百首・夏・一二四)等の先行例があるが、「軒ちかくしばしかたらへ時鳥雲よく夜ひのむらさめの空」(『後鳥羽院御集』二九)、「あしびきのやまほととぎすひとこゑもそらしづかなるむらさめのくも」(『明日香井和歌集』下・一六七)等、他の新古今歌人の詠はいずれも家隆詠より後のものである。なお、家隆詠は『自讃歌』にもとられた。

⑦五月雨すへき比さへむら雨いかと覚え侍る―初句に「さ月山」とあるのに村雨と詠みこんだ点を、五月の長雨の時候に村雨はそぐわぬとして難じたもの。夏の村雨の用例には「夏ふかみ庭も葉びろの玉がしはしぐれとならず夜はのむら雨」(『夫木和歌抄』巻第九・夏部三・三七五〇・後鳥羽院)等もみえる。

⑧ほととぎすに心いらぬやうに聞えて、ほいなくや侍らん―視点人物が五月の到来を意識しないことが、郭公への無関心に繋がるように聞こえ、題にそぐわないことを咎めたもの。九十二番(逢不遇恋)では、小宰相詠「したの帯のあだにむすびし中なればめぐりあふべき限だになし」について、「下句かぎりだになしとて、恋のこころい

まはおもひすてたるやうにみえ侍る、題の本意侍らねば、尤為負」とする。

【通釈】

三十三番

左(歌) 持

右衛門督(源)通成

郭公の声を聴くのは特にいつがいいとは思っていないのだが、郭公の方は「をのが五月」とばかりに今は鳴いていることだ。

右(歌)

右近中将(源)雅光

五月山で月を待つ宵にあいにく村雨が降り出した、けれど雨の中に飛び出して声を振り立てて鳴いている郭公であるよ。

〔判詞〕右歌は「またしとおもへはむらさめの空」と詠んでいる近い時代の歌から、「ほととぎす」には必ず「村雨」を付け加えることになってしまっているようです。五月雨が降るはずの頃に(五月雨といわずに)村雨(というの)はさあどうであろうかと思われます。(けれど)左歌の「わきていつとおもはぬに」と詠んでいるのも、郭公に十分に心を寄せていないように聞こえますので、甲斐のないことでごさいます。 (どちらも欠点があつて) 持とすべきでしょうか。

〈三十四番〉

卅四番

左¹崩

兵部卿有教

さみたれの空にそあかぬ時鳥卯月の比にまち習ひつゝ

右

弁内侍

まて^②といふになかすもあらは時鳥^①なにをさ月とおもひわかまし

左古詞^③おほく聞えて、よろしきすかたには侍るを、

その心たしかにおもひわかたく侍るを、左題^④

五月本意なく侍るにや、又可為持、

【校異】

イ 持—ナシ(書) □ なに—いつ(聚) ハ 左古詞—右ふる

きこと葉(書)(永)、左右詞(聚)(内)(支) ニ おほく—ナシ

(聚) ホ おもひ—ナシ(永) へ 侍るを—侍に(書)、侍り(永)

ト 題—題の(書)(永) チ 侍るにや、又可為持—やさみたれう

月もいかゝとみえ侍へしふるくは山みねひる日なとをもとかめたる

ことも侍にやなをいつれと申かたし(書)、侍るにや又可持(聚)(支)、

や又五月雨卯月もいかゝと見え侍へしふるくは山みね夜ひるなとを

もとかめたる事も侍にや猶いつれと申かたし(永)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〉右歌〉ナシ

【語釈】

①まち習ひつゝ―「待つ習わしになる」意。「あぢきなくつらきあらしのこゑもうしなどゆふぐれにまちならひけん」〔新古今和歌集〕卷第十三・恋歌三・一一九六・藤原定家)は一例。

②さてといふに―直後の詩句と呼応し、「待てと言えはくする(しな)い)のならば」の意で用いられる。「さてといふにちらでしとまる物ならばなにを桜に思ひまさまし」〔古今和歌集〕卷第二・春歌下・七〇・よみ人しらず、「古今和歌六帖』第六・四一九七・素性、「素性集』一〇)が代表的な先行例で、右歌は古今集歌を踏まえたものと思しい。

③古詞おほく聞えて―「古詞」は古歌の詞。右歌と【語釈】②既出の古今集歌が似通っていることを指す。判詞において古詞の多さに触れる先行例として、『三井寺新羅社歌合』九番に「されどふるき詞おほし、初めて勝とも申しがたし、持なるべし」とみえる。俊成は古詞の多用に否定的とも見えるが、同時に「左歌、詞存古風興入幽玄」ともあり、古歌の利用は状況により評価が異なることが伺える。為家は、「よろしき姿」と、その使用に一定の評価を与えつつも、古詞が有効に機能せず、却って歌意が難解になったことを批判している。

④題五月本意なく侍るにや―題の「五月」に対し「五月雨」「卯月」

の両語を用いることの是非をいうか。

⑤本意なく侍るにや、又可為持―書陵部本・永青文庫本には、この前後に大異があり、底本は本文の脱落・改変を経たものと見られる。書陵部本によると、「さみたれう月もいかゝとみえ侍へし」とし、その論拠として「山みね」「ひる日」の例を挙げる。両例はそれぞれ『亭子院歌合』二月(三・四番歌)判詞、『高陽院七番歌合』秋・一番判詞における歌中での同義語使用(「同心病」)を難じたもので、『俊頼髓脳』、『和歌童蒙抄』、『袋草紙』をはじめ多くの歌学書も歌病の実例として引いている(但し、歌病としての認定には歌学書によって差異がみえる)。当該判詞においては、文脈からみる限り為家は「五月雨」「卯月」をほぼ同義と捉えており、「五月」の「本意なし」と評したのもこれに関わるものであろうか。

【通釈】

三十四番

左(歌)持

兵部卿(源)有教

五月雨の空の下でもなお聞き飽きることのない時鳥(の声)であるよ、四月のころから(それを)待つのが習慣になってしまっているのだ。

右(歌)

弁内侍

待てといえは鳴かずにいるというのなら、時鳥よ、なにを(もつて)五月の到来と判断すればよいのだろうか。

【判詞】右(歌)は古歌の詞が多くあって、姿は悪くないのですが、

歌意ははっきりと理解し難く存じますものの、左(歌)は題の「五月」の本意から外れておりますでしょうか。又持とすべきである。

〈三十五番〉

卅五番

左イ 荆

右ハ 右近中将師繼

徒に初音程ふる時鳥まつとせしまに五月きにけり

右

雅忠朝臣

↑時鳥忍びし程の一声を今はさ月になきやふるさん

左右共に心詞させる無得失侍れば、為持、

【校異】

イ 持—ナシ(書) □ 右近中将師繼—右近—○師繼師つく古本

(永)、右近衛中将師繼(支) ハ ナシ—続古、夏、(聚)

二 に—と(書)(永) ホ さん—らん(永) ヘ ナシ—猶(永)

【他書所伝】

〈左歌〉

『題林愚抄』第五・夏部上・二〇七六

(宝治歌合) 同

師繼卿

いたづらにはつね程ふる時鳥待つとせしまに五月きにけり

〈右歌〉

『続古今和歌集』卷第三・夏歌・二二七

(宝治元年十首の歌合に、五月郭公)

中宮大夫雅忠

ほととぎすしのびしころのひとこゑをいまはさつきとなきやふりな

『題林愚抄』第五・夏部上・二〇六九

続古

雅忠

時鳥忍びしころの—こゑを今はさつきとなきやふりなん

【語釈】

①初音程ふる—「初音程ふる」は初音を聞いて以来二度と聞かないまま時間が経ったととるか、初音を聞こうとして聞かぬまま時間が経ったというのか、俄には判断し難い。ここでは一応前者で解しておく。

②まつとせしまに—時鳥の鳴く声を待っている間にの意。「夜深待郭公」ほととぎすまつとせしまにふしまちの月こそたかくそらになりぬれ」(『在良集』・五)、「郭公まつとせしまに我が宿の池の藤浪うつろひにけり」(『老若五十首歌合』夏・五十九番左・一一七・藤原家隆)等が先行例。

【通釈】

三十五番

左(歌) 持

右近中将(藤原) 師繼

初音を聞いた後徒に時間ばかりが過ぎてしまった郭公、(次の声を)

待っている間にもう五月にもなってしまったことだよ。

右(歌)

(源) 雅忠朝臣

郭公がまだ忍び音に鳴いていた頃の一声を、今は五月になって鳴き古してしまうことだろうよ。

〔判詞〕左右共に意味するところや表現にこれといった長所も短所もありませんので、持とする。

〈三十六番〉

卅六番

左

沙弥蓮性

時鳥いかてあやめに引そへてななかなくねをも玉にぬかまし

右刪

下野

五月雨のふりにし友とかたらへはなれもことふ時鳥かな

左トさまよろしく侍るを、下句を讀上侍らぬほと、

いかに侍るへきにかと聞ゆる所にや侍らん、右ふ

りにし友とかたらへはなれもことふといへる、心か

よへるところさるかたも侍りなんとて、さのみはいかと

おもふ給へなから、又勝トの字をつけ侍りぬ、

【校異】

イ なかなく―なかるゝ(聚) (支) □ 勝―ナシ(書)

ハ 左さま―左うたさま(書) (聚) (永)、左右様(内) (支)

ニ ほと―ほとは(永) ホ にや―ナシ(書)、や(永) へと

―なと(書) (永) ト おもふ給へ―思給(書)、思ひ(永)、おも

ふたとへ(内)、思ふたま(支) チ 又―右(支)

【他書所伝】

〈左歌〉

『題林愚抄』第五・夏部上・二〇七七

(注) 同

蓮性

ほととぎすいかであやめに引きそへてななかかれしねをも玉にぬかまし

〈右歌〉

『題林愚抄』第五・夏部上・二〇七八

(注) 同

下野

五月雨のふりにし友とかたらへばなれもことふほととぎすかな

【語釈】

①あやめに引そへて―菖蒲は根や葉等に芳香があることから邪気を払うものとされ、端午の節句には葉を屋根に葺いたり、根を贈り物とした。郭公の音を添えるという意と共に、「引く」に菖蒲の根を引く意が響く。

②なかなくねをも玉にぬかまし―玉は端午の節句に邪気を払う為に飾る薬玉のことで、沈香等の薬を玉にして錦の袋に入れて菖蒲等で

飾り付け五色の糸を長く垂らした。「ね」は、郭公の音と菖蒲の根との懸詞。郭公の声を薬玉に飾ろうとする趣向は、「ほととぎすいたくななきそながこゑをさつきのためにあへぬくまでに」(巻第八・夏雑歌・一四六九・藤原夫人)、「ほととぎすまでどきなかずあやめぐさたまにぬくひをいまだとほみか」(巻第八・夏雑歌・一四九四・大伴家持)等、既に『万葉集』にみえる。

③五月雨のふりにし友―「ふり」は、「(五月雨が)降る」と「旧友」の懸詞。当該歌合の判を不服として奏上された『蓮性陳状』は、『洞院撰政家百首』出詠歌「さみだれのふることもをかり出でてのどかなる夜の友ぞうれしき」(上・夏・四七四・源家長)との類似を指摘する。また「ふりにし」と過去の時制となつている点から「六月の郭公ともや聞え候ぬらん」と指摘する等、右歌の種々の難点を述べている。

④下句を讀上侍らぬほと、いかに侍るへきにかと聞ゆる―上の句の真意が下の句を詠み上げないと理解されないことを難じたもの。これに対して、『蓮性陳状』では、そのような仕立ての歌は古来より多くあるとし、当該歌合出詠歌「わけしよの契も消えてかなしきはとへどこたへぬみち芝の露」(九十三番右・俊成卿女)を引き合いに出す。

⑤心かよへるところさるかたも侍りなん―「ふりにし友とかたらへは」と「なれもこととふ(時鳥)」は、どちらも心が通じ合っている者同士の意で、こういうこともきつとあるだろうの意。

⑥さのみはいかゝと―蓮性と下野の番が、「早春霞」「山花」と二題続けて下野の勝ちとなつてゐることを指す。

【通釈】

三十六番

左(歌)

沙弥蓮性

時鳥よ、どうにかして菖蒲(の根)を引くのに加えて、お前の鳴く音までも(端午の節句の)薬玉に通したいものだ。

右(歌) 勝

下野

五月雨が降つた日に訪ねてきた旧友と語らつてゐると、お前も私に声をかけてきたんだね、時鳥よ

〔判詞〕左(歌)は一首の趣はよいのですが、下の句を讀み上げません内は、どんな風であろうかと思われる所がございましょう。右(歌)は「ふりにし友とかたらへはなれもこととふ」と言うのは、(どちらも)心が通じ合っている者同士でこういうこともきつとございましょうということ、そればかりではどうであろうかと存じます。又(下野詠に)勝の字を付けました。

〈三十七番〉

卅七番

左、刪

為氏朝臣

あやにくに初音またれし時鳥さ月はをのか時となくなり

右 少将内侍

なげやなけ初音おしみし時鳥今こそ夏は五月なりけれ

兩首いつれとわきかたく侍るを、立帰りよくみ

侍れは、なげやなけといへるよりはをのか

時となくほととぎすは聞所侍るへきにや、題の心

はかりに、かちと申侍るなり、

【校異】

イ 勝—ナシ(書) ロ ナシ—新拾、夏(聚) ハ なり—なる

(聚)(内)(支) ニ なげや—なくや(内) ホ けれ—けり(内)

へ いつれと—いつれも(聚)(内) ト よく—ナシ(書)(永)

チ 侍れ—侍る(支) リ なげや—なくや(内) ヌ は—ナシ

(支) ル にや—や(支) ヲ 題の—題(書)

【他書所伝】

〈左歌〉

『新拾遺和歌集』卷第三・夏歌・二七二・藤原為氏

宝治元年十首歌合に、五月時鳥 前大納言為氏

あやにくに初音またれし時鳥さ月はおのが時となくなり

『題林愚抄』第五・夏部上・二〇七三

新拾 宝治三十首歌合 (右大将通忠)

あやにくにはつねまたれし時鳥さ月はおのが時となくなり

〈右歌〉ナシ

【語釈】

①あやにくに—原義は、ああ憎いと思われるさま。ここでは、無性に郭公の初音が待たれることをいう。為家に「あやにくにまたれしかどもほととぎすききふるさるる五月雨の空」(『為家集』上・夏・寛元元年独吟十首・三二六)という先行例がみえる。

②なげやなけ—郭公に盛んに鳴くよう呼びかけたもの。「なげやなけたか田の山の郭公このさみだれにこゑなをしみそ」(『拾遺和歌集』卷第二・夏・一一七・よみ人しらず)、「なげやなけ山ほととぎすはるくれてものさびしかるきかくれに」(『長能集』六九)、「なげやなけならのをがはのほととぎすおのが五月はこゑもをします」(『重家集』一一四)等が先行例。

③聞所—「なげやなけ」「をのか時となく」という兩首の表現に事寄せて歌の優劣を「聞所侍る」と表現したもの。当該歌合九十二番判詞でも、左歌の小宰相詠「あかしかねまたるる物と成りにけりさしもいとひし鳥の八こゑも」について、「左さしもいとひし鳥の八こゑ、またるる物になれるところ、ききどころおほくゆるふかくおもひいれられて」と評価する。

【通釈】

三十七番

左(歌) 勝

(藤原) 為氏朝臣

無性に初音が待ち遠しかった時鳥、五月ともなると自分の季節であるとはかりに鳴いているのが聞こえるよ。

右(歌)

少将内侍

鳴けや鳴け、初音をおしんでいた時鳥よ、今まさに夏の中でも(郭公が盛んに鳴く)五月になったのだから。

〔判詞〕両首のどちらが(すぐれているか)と判定しにくいことでございますが、繰り返しよく読んでみますと、(郭公に)「なげやなげ」と言うよりは、「をのか時」と鳴く郭公(の方)が聞き所があると申すべきでしょう。題意(をよく汲んでいる点)くらいで、(左歌を)勝と申します。

〈三十八番〉

卅八番

左

經朝朝臣

たか^①為に里はあまたの時鳥をのかさ月と猶忍ふらん

右^②

沙弥禅信

名にしおふやみはあやなし時鳥をのか五月は声もかくれす

左の里はあまたこそ何のよせとも聞え侍らね、

右梅の花色みえぬ事をおもひ出て、五月やみに

よせて名にしおふといへる、思ふ所なきに

あらされは、右少まさり侍らむ、

【校異】

イと一を(書)(永) ロ 勝一ナシ(書)(内) ハの一ナシ

(永) ニよせよう(書)(永)、余所(内)(支) ホ右一ナ

シ(内) へ梅の花色一梅のはな色こそ(聚)、梅花色(永)(内)、

梅花の色(支) トおふ一ほふ(書) チ思ふ一ナシ(内)

リ あらされは一あらす侍れは(支) ヌ少一すこしは(書)(聚)

(永)(内) ル侍らむ一侍らん(永)、侍へらん(内)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〉右歌〉ナシ

【語釈】

①里はあまたの時鳥―「ほととぎすながくさとのあまたあれば猶うとまれぬ思ふものから」(『古今和歌集』卷第三・夏歌・一四七・よみ人しらず、『伊勢物語』第四十三段)の如く、鳴き声を待ち遠しく思う視点人物とは対照的に時鳥には鳴く人里が数多あることを言う。

②をのかさ月と―書陵部本等の「をのかさ月を」だと(おのが五月にもかかわらず)という意となり一首全体の意味の流れも自然である。底本の「をのかさ月と」では書陵部本等のような意味ではとれないので「をのかさ月を」で解した。

③名にしおふやみはあやなし―『古今和歌集』所収「春の夜のやみ

はあやなし梅花色こそ見えねかやはかくるる」(巻第一・春歌上・四
一・凡河内躬恒)を踏まえた表現。

④何のよせ—何の理由もの意。「たか為に」をのかさ月と猶忍らん」という前後の表現の中で、敢えて「里はあまたの」とする必然性に欠けることを指すか。

⑤梅の花色みえぬ事をおもひ出て—【語釈】③既出古今集歌を念頭に置いた評。

⑥思ふ所なきにあらされは—難解。歌の情趣が深いことをいうか。或いは詠者の感懐が託されていることを指摘するか。ここでは仮に前者で解しておく。

【通釈】

三十八番

左(歌)

(藤原) 経朝朝臣

尋ねていく里はたくさんある郭公なのに、一体誰の為に己の五月であるというのに、依然として(声を)忍んでいるのであろうか。

右(歌) 勝

沙弥禅信

(古来) 著名な関は(五月にあつては全く)訳が分からないことだ、郭公は己が五月ともなると五月關の中でも声は隠れないから。【判詞】左の「里はあまた」というのこそどうしてそれを持ち出すのか判りません。右は(古歌の)梅の花の色の見えないことを思い出して、五月關にことよせて「名にしおふ」といっている、風情の感じられる点がなくもないので、右が少し勝っているでしょう。

〈三十九番〉

卅九番

左(歌)

越前

庭にちる花橘の五月雨に声はしほれぬほととぎす哉

右

前権大納言為家

身を歎く涙は時もわかれぬに五月ときなく時鳥かな

声はしほれぬといへる心、聞ふるしたることに

侍れ共、さ月ときなくほととぎす、題のころを

もつて下句に取あつめて、いふかひなく侍るうへに、

身をなけくといへる、まつうけられす侍れは、

左かちとこそ申侍らめ、

【校異】

イ 勝—ナシ(書) 口 前権大納言為家—権大納言為家(聚)(内)

(支)、為家(永) ハ 身を歎く—身はなけて(書)、身をなけて

(内) ニ ときなく—時なく(支) ホ 声は—左声は(書)(内)

へ 心—ナシ(書) ト さ月—右五月(書)(永) チ ときなく

—時なく(支) リ 題のころ—題心(書)(内)、題(支)

又をもつて—ナシ(書)(聚)(永)(内)(支) ル 下句に—しも

の句に(書) ヲ なけく—なけてと(書)(内)、なけて(支)

ワ 左―左を（支） カ こそ―こそは（書） ヨ らめ―へらめ

（永）

※ハについて、書陵部本には「身はなけて」とあるが、書陵部本を底本とする「新編国歌大観」は「身をなけて」とする。

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『題林愚抄』第五・夏部上・二〇七九

同（五拾歌）

為家卿

身をなげくなみだは時も別れぬにさ月ときなく時鳥かな

『為家集』夏・五月郭公・三四八

宝治元年仙洞十首歌合

身をなげく涙は時もわかれぬにさ月にきなくほととぎすかな

【語釈】

①声はしほれぬ―「はるさめはふりしむれどもうぐひすのこゑはし

ほれぬ物にぞありける」『金葉和歌集』二度本・巻第一・春部・一六

・源俊頼朝臣）が先行例としてみえ、当該歌はこれを踏まえていよ

う。新大系『金葉和歌集』脚注には「○しほれぬ 春雨で湿った声

が予想されるが、そうはならず透き通るような美しい声」とある。

②身を歎く―「身を歎く涙やたえずしぐるらんわきて色こきやどの

紅葉葉」『百首歌合』二百六十八番右・五三六・藤原伊平）等の例

がある。一方、「身をなけて」については、「おほみ川となせのたきに身をなけてはやくと人にいはせてしかな」（『千載和歌集』巻第十七・雑歌中・一一四三・空人）、「みをなけてなみだやつゆにまがふらんあれのみまさるなでしこのはな」（『江帥集』四一四）等の例があるが、当該歌には不適切な表現であろう。

③わかれぬに―「わかる」は、判別する、区別する意。用例として「いづれともはなのほひはわかれぬになほしもつけのなつかしきかな」（『皇后宮歌合』一七）、「いとだに憂き身は思ひわかれぬに見しに変わぬ春の明ぼの」（『夜の寝覚』巻四・四九・宰相の上）等があげられる。

④うけられす―「うく」はそれでよいと判断し容認する意。当該歌合百四番でも為家は自詠「我ばかり心ながさをかたるともみし夢とやおもひあはせん」について「右の夢がたり、うけられず侍れば、また負け侍るべし」と判を付している。

【通釈】

三十九番

左（歌） 勝

越前

庭に花橘の花を散らせる五月雨にも、声は湿っぽくならない（で、よい声を聞かせる）時鳥だよ。

右（歌）

前権大納言（藤原）為家

身の上を歎く涙は（いつものこと）どの時という区別はつかないが、（おのが）五月と（ばかりに）来鳴く時鳥よ。

〔判詞〕「声はしほれぬ」という趣向は、聞き古したことでございませが、「さ月ときなくほとときす」は、題意を（皆）下句に取り集めていて、どうもつまらないことでございます上に、「身をなげく」と言うのも、（歌合の場の歌としては）はなっから受け入れ難うございますので、右を勝とこそ言うべきでございましょう。

宝治元年『院御歌合』注釈―「初秋風」題―

位藤 邦生 森下 要治
田野 慎二 山崎 真克
赤迫 照子 藤川 功和

はじめに

『表現技術研究』第3号（平成19年3月）に引き続き、宝治元年（一二四七）『院御歌合』の注釈を試みる。今回は「初秋風」題十三番を取り上げる。各番担当者
と所屬を以下に示す。

四十番―藤川功和、四十一番―赤迫照子（広島大学図書館）、四十二番―赤迫、四十三番―山崎真克（松江工業高等専門学校）、四十四番―藤川、四十五番―田野慎二（広島国際大学）、四十六番―森下要治（広島文教女子大学）、四十七番―藤川、四十八番―山崎、四十九番―藤川、五十番―赤迫、五十一番―田野、五十二番―位藤邦生（長崎大学）

凡例

一、底本は、永青文庫蔵本（二〇七・三六・七）（細川家永青文庫叢刊「第八卷所収」）を用いた。

一、校合した諸本と略号は、以下の通り。

（書）―書陵部蔵本（五〇・一七・四）（『新編国歌大観』の底本）

（内）―内閣文庫蔵本「百三十番歌合（外題）」（二〇・二二・四七）

（支）―九州大学支子文庫蔵本（九一・一・ホ・一）

（聚）―書陵部蔵歌合類聚本（『大日本史料』第五篇二十四所収）

（群）―群書類従本（巻第二百所収）

一、注釈は、番全体の本文【校異】を示した後【他書所伝】【本歌（参考歌）】【語釈】【通釈】をあげた。

一、【語釈】の内、各詠作者並びに前号までに既出の語彙については、紙幅の関係上これを略した。

一、表記や送り仮名の異同はこれを略し、見せけちや補入符号によって訂正のある箇所は、訂正後の本文を採用した。

一、翻字本文には適宜読点を施し、字体は現行の活字体に改めた。

一、本文中、異同の存する箇所には、傍線及びイ、ロ、の如き符号を付し、語釈を施した箇所には、本文右傍に①、②…の通し番号を付した。

一、底本で文意不通等が認められる場合、他本の本文に拠り通釈を施した場合がある。その際、本文【校異】【通釈】において他本に拠った箇所に網掛けを施した。

一、引用本文は、原則として『新編国歌大観』に拠り、その他の引用文献は、適宜底本を示した。なお、引用本文には、適宜、傍線、振り仮名等を付した。

一、『万葉集』については、本文、歌番号ともに塙書房刊『万葉集訳文篇』を用いた。

〔四十番〕

四十番 初秋風

左 勝^① 女房

秋といへばあへす色つく木葉せきけさこそ風の音ねも身みにしめ

右 小宰相

荻の葉あしに声こゑたてねとも吹風の身にしむ色いろに秋あきせしらるゝ

左あへす色つく木葉かなとをきて、けさこそ

風のをとほ身にしめと侍、事はりかなひて姿

詞ことばごとによろしく見え侍に、右吹風の身に

しむ色いろに秋あきせしらるゝといひて、荻の葉

に声こゑたてねとも侍こそ、荻のは秋風あきかぜしら

ぬものに成侍らん、くちをし侍れ、猶なほ以左ひだり為勝、

〔校異〕

イ 勝―ナシ(書) 口 も―は(内)(支)(聚)(群) ハ 声―音(聚)

ニ けさ―今(内)(支) ホ ことに―ナシ(内)(支)(聚)(群) ヘ 吹

―ふかく(書) ト 風の―風(内)(支)(聚) チ には(書) リ 声

―音(支) ヌ 秋―秋の(支)

〔他書所伝〕

〔左歌〕

〔題林愚抄〕秋部一・初秋風・二九五八・「宝治歌合」

秋といへばあへす色づく木のはかなけさこそ風の音は身にしめ

〔右歌〕ナシ

〔語釈〕

①初秋風―立秋間もない頃に吹く風を指す。早くは「嘉言集」に「はつあきかぜ」として「ありしよりかはりどころもなければ秋とおほゆる風の音かな」(七〇)とみえ、近い時代には、建仁三年七月十五日「八幡若宮撰歌合」や建暦二年「松

尾社歌合」にも、歌題として確認される。本歌合の他の歌題「早春霞」「海辺月」「野外雪」「旅宿風」「杜頭祝」を勘案すると、「初秋の風」と読むものと思し。

②あへす色つく―「あへす」はこらえきれなくての意。「秋されば置く露霜にあへずして都の山は色付きぬらむ」(『万葉集』巻第十五・三六九九・詞書省略)、「千はやぶる神のいがきにはふくずも秋にはあへす色づきにけり」(『古今和歌六帖』草・葛・三八八・紀貫之)、「我が袖は四方の木葉のうへよりも秋にはあへず色かはりけり」(『壬二集』洞院撰政家百首・初秋・一四六七)などが先行例。なお、『宝治百首』に「秋にあへずまづ色かはる木の葉かな時雨もまだき神なびの杜」(秋廿首・杜紅葉・一八九一・藤原為経)と近似した表現がみえる。

③風の音も身にしめ―「しめ」(染め)は上の句「色つく」に対応する表現。本来色がなく目に見えない「風の音」が秋の到来とともに身に染みるように感じられるとする。「心にはいつも秋なるねざめかな身にしむ風のいくよともなく」(『新古今和歌集』恋歌三・二二〇六・「題しらず」・よみ人しらず)、「おとづれて身にしむ風かぜのふきしよりむすばぬそでにをぎのうはかせ」(『千五百番歌合』秋・五百七十五番右・一一四九・藤原雅経)など、多くの例がある。「吹きくれば身にもしみける秋風を色なき物と思ひけるかな」(『古今和歌六帖』歳時部・天・秋のかぜ・四二二・紀友則)あたりが淵源であろう。当該歌の如く、風の音により身にしむとする先例には、「をぎのはをなびかすかぜのおときけばあはれみにしむあきのゆふぐれ」(『相模集』秋・五四八)、「月はよしはげしき風のおとさへぞみにしむばかり秋はかなしき」(『後拾遺和歌集』秋下・三三三九・詞書省略・斎院中務)などがある。

④荻の葉―荻の葉音は、秋の到来を告げるものとして多く詠み込まれる。「葦辺なる荻の葉さやぎ秋風の吹き来るなへに雁鳴き渡る」(『万葉集』巻第十・秋雑歌・二二三四・雁を詠む)、「をぎの葉のそよぐ音こそ秋風の人にしらるる始なりけれ」(『貫之集』一〇〇・「七月」)は一例。

⑤事はりかなひて―一首に詠み込まれている内容が理屈として通っていることを指す。和歌を評価する上での重要な評価基準の一つで、例えば当該歌合出詠歌「山川下水のしたにのみ音こそたてね年はへにけり」(九十番左・藤原経朝)につい

て、為家は「左山川の下ゆくとはいかに侍にか、山たかみなとはき、なれて侍り、川水下行は、ことほりもかなはずや」と指摘する。

⑥ 萩のは秋風しらぬものに成侍らん―上の句で「萩の葉に声たてねども」とした
場合、萩の葉に風が吹いていないことになり、下の句「吹風の身にしむ色」との
間で論理的矛盾が生じることを難した。「物ごとにあきのけしきはしるけれど
まづ身にしむは萩のうは風」(『千載和歌集』秋歌上・二三三三・「郁芳門院の前裁合
に萩をよめる」・源行宗)、「目に見えて身にしむ秋やたちぬらんきくに色ある萩の
うは風」(『拾玉集』詠百首和歌・秋二十首・三六〇八)などが萩を吹き抜ける風
によって秋の到来を感じるとした作例。

【通釈】

四十番 初秋の風

左(歌) 勝

女房(後嵯峨院)

秋(が来た)というだけでこらえきれなくて色づく木の葉であることよ。今朝
はまさに風の音も(萩を告げるものとして)身に染みて感じられるよ。

右(歌)

小宰相

萩の葉に葉音を立てないけれども吹く風が身に染む気配に秋(の到来)が知ら
れる。

〔判詞〕左(の)「あへす色つく木葉哉」と置いて、「けさこそ風の音は身にしめ
とあります(のは)、道理が叶って(一首の)姿詞特によくみえますのに、
右(の)「吹風の身にしむ色に秋そしらるゝ」と言って、「萩の葉に声たてねども
とありますのは、萩の葉は秋風(の到来)を知らないものとなりますようなのは、
感心しません、やはり左を勝とする。

〈四十一番〉

四十一番

左

太政大臣

袖の上に老の涙のかゝれるを秋きにけりと風や知らん

右 勝

俊成卿女

秋としもなど萩のはのむすひけん夕の風に露の契を
うちまかせては、秋はきにけりと、風をき、てそ
老の涙もこほれぬへく侍を、涙のかゝれるを見
て風の秋をしれる心めつらしく侍にや、秋とし
もなど萩のはのとて、夕の風に露の契を
むすひけんといへるも、女の哥とおほえて、いふに
侍れば、勝をゆるさるへくや、

【校異】

イ きに―に(支) □ 知―吹(支) ハ 勝―ナシ(書) ニ の―に(聚)
ホ けん―せん(内) ヘ 秋は―秋(書)(内)(支)(聚)(群) ト そ―
こそ(内)(支)(聚)(群) チ か、れるを―か、れる(内)(支) リ し
れる―しる(内)(聚) ヌ 秋―右秋(内)(支)(聚)(群) ル 萩のはの
―萩のは(内)(支)(聚)(群) ヲ ゆるさるへくや―ゆるさる、なり(内)(支)
(聚)(群)

【他書所伝】

〔左歌〕ナシ

〔右歌〕

〔題林愚抄〕秋部一・初秋風・二九五九・「同(宝治歌合)」

秋としもなど萩のはに結びけん夕の風につゆのちぎりを

【語釈】

① 風や知らん―風を擬人化する。涙が袖の上にかかったのを露が置いたと勘違い
し、風が秋の到来を知るの意。類例に「そでのうへのつゆはなみだのおくものを
しりがほにふく野辺の秋風」(『御裳濯和歌集』秋上・三七六・「題不知」・寂延)
がある。

② 秋としも―「しも」は強意。「など」けん」に懸かり、「なぜ他の季節ではな
く、とりわけて秋に」するの」と強調する。「秋としも」を初句とする先行例に

は「秋としもゆきあふことは七夕のながきよとてや契りそめけむ」(『師光集』七夕・三一)、「秋としもあはれをなにかおもひけんくれ行く空のくせにぞありける」(『千五百番歌合』千三百八十四番左・雜一・二七六八・藤原公繼)がある。

③ 露の契を―萩の葉と夕べの風のはかない契りをいう。萩と秋風の「契り」を詠んだ先行例には「をぎの葉もちぎりありてや秋風のおとづれそむるつまとなりけむ」(『新古今和歌集』秋歌上・三〇五・崇徳院に百首歌たてまつりける時・藤原俊成)、「秋風よなど萩にしも契りけむ萩をみなへしなびかずやはあらぬ」(『拾玉集』詠百首和歌・草花・三六九七)がある。当該歌は萩と秋風の契りを萩に結ぶ「露」によそえ、そのはかなさを表現する。なお、『俊成卿女集』には当該歌に近似した「萩の葉にむすびやおきし風の音身にしむ秋の露の契を」(詠百首和歌・初秋・一〇八)等、「露の契り」を詠んだ歌が四例もみられる(二〇八・二四〇・二五三・二五七。ただし、一五七は諸本との校合によって「夢の契り」と改められる)。

④ めつらしく侍にや―秋の到来を知る主体を老人ではなく、風とする趣向を「めづらし」と評価する。なお、『為家集』には「初秋風」の題で「ならひこし秋のはじめも老いらくの身にしみまざる風の音かな」(秋・四七二)のほか、「秋風」題「身にしめし秋にや老のそひぬらん嵐の山の風のさむけさ」(秋・五四八)、「閑居秋風」題「人めみぬ老のすみかの松かげにおとづれとては秋風ぞ吹く」(秋・五五〇)のように、「秋風」と「老い」を取り合わせた歌がみえる。

⑤ 女の哥とおほえて、いふに侍れは―当該歌合における「女の哥」の例はこの一例のみ。右歌の女歌らしい優美さを評価する。

⑥ ゆるさるへくや―優劣の最終判定にあたって諸方に配慮した言い方。なお、当該歌合において「ゆるす」という表現で判じた例は他に七十九番、女房(後嵯峨院)と小宰相の番において「持の字をゆるさるへきにや侍らん」がある。

【通釈】

四十一番

左(歌) 太政大臣(西園寺実氏)
袖の上に老いを嘆く涙がかかっているのを(露と)見て、秋が来たのだと風は思っ

ていることだろう。

右(歌) 勝

俊成卿女

どうしてとりわけて秋に、萩の葉は夕べの風と契りを結んだりしたのか。露のようにはかない契りであるというのに。

〔判詞〕よくありますのは、「秋が来たのだ」と風を聞いて(はじめて)老いの涙もこぼれるはずのものです(この歌では)涙が(袖に)かかっているのを見て風が秋の到来を知るといふ趣向は珍しいのではないのでしょうか。「秋としもなど萩の葉」といい、「夕の風に露の契を」「むすびけん」といつているのも、女の歌と感じられて、優美でございますので、(右歌の方に)勝ちが許されるでしょうか。

〈四十二番〉

四十二番

左

同上 通忠

岡のへやいづともわかぬ松風の身にしむ程に秋はきにけり

右 勝

同 實雄

君かへん千とせの秋の初とてしらする風も松にふく也

左右おなし松風の秋のすかた、いづれと色わきかた

く侍るを、右祝言をおもへるうへに、下句ことに

よろしく侍にや、又以右為勝、

【校異】

イ 同上―権大納言(書)(内)(支)(聚)(群) 口 岡のへや―岡解のへや(聚)

ハ 松風の―松風の(書)(内)(支)(聚)(群) 二 勝―ナシ(書)(内)

ホ 同―権大納言(書)(内)(支)(聚)(群) へ へん―こん(内)

ト 秋のすかた―すかた(書)、秋すかた(内)(支)、秋すかたは(群)

チ 色わきかた―わけかた(内) リ 右祝言を―右祝言(書)、祝言を

(内)、又 ことに―ナシ(内)(支)(聚)(群)

【他所書伝】

〈左歌〉

【統拾遺和歌集】秋歌上・二二二

宝治元年十首歌合に、初秋風

右近大将通忠

岡のべやいつともわかぬ松かぜの身にしむほどに秋はきにけり

【題林愚抄】秋部一・初秋風・二九四四

統拾

右大将通忠

をかのべやいつともわかぬ松風の身にしむ程に秋はきにけり

〈右歌〉

【題林愚抄】秋部一・初秋風・二九六〇・同(宝治歌合)「

君がへん千年の秋のはじめとてしらする風も松にふくなり

【語釈】

①同上―官職は前掲と同じという意であろう。当該箇所のみ「同上」で、他は「同」とある。

②岡のへや―初句切れ。「や」は詠嘆。岡の麓、岡の辺りの意。「をかの辺やなびくかたののしのすきはむけのつゆもときをまちけり」(「千五百番歌合」秋二・六百十九番右・一二三七・源家長)、「岡のべや日影うつろふ玉ざさの葉分にくる霜ぞつれなき」(「寂身法師集」詠四十八首和歌(宝治二年七月日或所勸進)・霜五八八)等の例がある。

③いつともわかぬ松風の―季節毎に色を変えることのない松に吹く風の意。松は落葉することなく一年中緑であることから、長寿や永遠の繁栄を祝うものとされる。和歌文学大系『統拾遺和歌集』は「ゆふづく夜さすやをかべの松のはのいつともわかぬこひもするかな」(「古今和歌集」恋歌一・四九〇・「題しらす」・よみ人しらす)を本歌と指摘する。

④君かへん千とせの秋の初―あなたにとつてこれから幾度もめぐるのである秋の中でも最初の秋の、その初めの意。当該歌合では「君かため猶よろつ代の春の色にかすみそめたる明ほの空」(二番右・早春霞・四・俊成卿女)、「君か代のはしめの春ののとけさを空もしりてや霞たつらん」(九番左・早春霞・一七・藤原師継)

等、後嵯峨院の御代を言祝ぐ歌が見られる。また、「千とせの秋の初」の先行例には「みづのうへにかべるつきのかげみればちとせのあきのはじめなりけり」(「三条左大臣殿前歌合」七〇・橘資成)、「いつよりも月のどかにみゆるかなちとせのあきのはじめとおもへば」(「在良集」月契千秋・一三三)、「ゆふかくるただすのもりにみそぎしてちとせの秋のはじめをぞ待つ」(「為氏集」雑・ただすの杜夏祓正嘉元運生八十賀月次屏風歌・一三八九)等がある。

⑤しらする風―千年の秋の初めを告げ、祝う風であり、かつ、秋の到来を知らせる風でもある。「しらする風」の先行例には「秋たつと人にしらする風のおとすずしや今朝は衣かさねつ」(「堀河百首」秋廿首・立秋・五七三・隆源)等がある。⑥色わかたたく侍るを―松風の「色」(「色彩」)を思わせる両歌どちらも「色」(「趣」)がよろしく、優劣の判断が難しいという意。

【通釈】

四十二番

左(歌)

同上(権大納言)(藤原)通忠

岡の麓では、どの季節でも変わらない松風からでさえも、しみじみと身にしみる程に秋が来たのが感じられることだよ。

右(歌)勝

同(権大納言)(藤原)実雄

我が君の千年の秋の始めなので、その秋を知らせる風も松に吹くことだ。
【判詞】左右同じく松風の秋の姿を詠み、どちらが(勝っている)とその趣の優劣を判断し難くございますのを、右は祝言性を意識している上に、下句が特によろしゅうございます。又右歌を勝とする。

〈四十三番〉

四十三番

左

同 定雅

今ははやあつまのおくによかた通らん秋あきのしるへののにしの山風

右 勝

同 公相

補十五段)などにみられるが、「西の山風」を共に詠み込む先例は未見。類例に「さよ深けてむら雲はらふ秋風は月吹きかへすこちこそすれ」(「正治初度百首」秋・七五五・藤原忠良)がある。

⑥金風はまことにみちのく山にたより侍らめと―「金風」を「あきかぜ」と訓ずる例が『万葉集』に三例(巻第九・一七〇〇、巻第十二・二〇二三、巻第十二・三〇一)みえる。また「みちのく山」も、「天皇の御代栄えむと東なる陸奥山に金花咲く」(『万葉集』巻第十八・四〇九七・賀陸奥国出金詔書歌一首 并短歌)・大伴家持)にみられる。当該歌に詠まれた東国の奥に吹き通っているであろう秋風(金風)は、金が産出されるという点でまさに東国の陸奥山に縁のある詞であることを示す。

⑦空よりすぐると侍そ、すこし荒涼なる所見え侍れとも―「荒涼」は表現の意図、もしくは典拠があいまいで大雑把なことを批判する否定的評語。早くは天徳四年(九六〇)『内裏歌合』(藤原実頼判)に用例がみえる。秋の初風が空を吹きすぎる様子を詠んだと思われる右歌の「空より過る」の用例は未見。「野辺の露は色もなくてやこほれつる袖より過ぐる荻のうは風」(『新古今和歌集』恋五・一三三八・慈円)などの例と異なり、「空より過る」という言い方が大雑把である点を指摘していると思われる。

⑧秋の初風昔より名譽侍れは―「秋の初風」という表現は昔から優れた歌に詠まれてきた、の意か。『藤川五百首』古寺初雪・二六六歌注に「彼百首の時此歌名譽なる由侍れば、凡慮思量に難及よしいへり」とある。「秋の初風」は「わがせこが衣のすそを吹返しうらめづらしき秋のはつ風」(『古今和歌集』巻第四・秋歌上・一七一・「題しらず」・よみ人しらず)を始めとして多くの用例が存し、「たれにまたつゆのあはれをかけんと袖よりすぐる秋のはつかぜ」(『千五百番歌合』秋・一五百三十一番左・一〇六〇・藤原季能)、「いかにとよのこりおほかるあはれかなけさぶき過ぎぬ秋のはつ風」(『拾玉集』第一・日吉百首和歌・秋二十首・四三〇)などの例もみられる。なお、永青文庫本の異本注記は、諸本にもみられず未読。暫く「遊気イ」としておく。

【通釈】
四十三番

左(歌) 同(権大納言)(藤原)定雅
今はもはや、東国の奥に吹き通っていることであろう。(この地に)秋の訪れを告げた西の山風は。

右(歌) 勝 同(権大納言)(西園寺)公相
今日はまだ、夕暮を特に他とは区別して、空を吹きすぎる秋の初風であることよ。
〔判詞〕左(歌の)、「西の山風」は、近い時代に「月吹き返せ」と(いう句とともに)、初めて聞きました表現でしょうか。この(左歌の)「今のはや」とありますのも、秋が訪れて数日経つうちのいつ頃のことでありましょうか。「金風(あきかぜ)」は本当に(金の産出される)「陸奥山」に縁がございますが、幽玄の姿とは思われないことでしょうか。右(歌の)、「夕をわきて」という所は艶なる様子ですので、「空よりすぐる」とございますのが、少し大雑把な所がみえますものの、(左歌の)「東の奥に通ふ西の山風」という表現)よりは、(右歌の)「秋の初風」という表現が昔から優れた歌に詠まれてきましたから、右(歌)の勝で(ございましょう)。

〔四十四番〕

四十四番
左 勝 同 公基
いと、又身にしむ風の吹なへにはやしられぬる秋の空哉
右 為教朝臣
うた、ねの衣手涼し吹風のめには見えすて秋やきぬらん
左吹なへに身にしられぬるなど、たけあるさまに侍にこそ、右吹風のめに見えずといへる事ことに不庶幾之由、庭のをしへ侍しを今思出されて侍れは、以左為勝、

【校異】
イ 勝―ナシ(書) 口 同―権大納言(書)(内)(支)(聚)(群)

ハ 衣手―心も(内) (支) (聚) (群) 二 吹―秋(内)

ホ 身に―はや(聚) へに―ナシ(支) ト 庶―遮(群) チ 庭のを

しへ侍しを―おしへを(内) (聚) (群)、出られ侍りしを(支) リ 出されて

―いたして(書) (内) (支) (聚) (群)

【他書所伝】

〈左歌〉

【万代和歌集】秋歌上・七九三・「十首御歌合に、初秋風といふことを」

いとどまた身にしむかせのふくなへにはやしられぬるあきのそらかな

【題林愚抄】秋部一・初秋風・二九六一・「同(宝治歌合)」

いとどまた身にしむ風の吹くなへにはやしられぬる秋の空かな

〈右歌〉ナシ

【語釈】

① いと、又―いっそうまた。さらにいっそう。当該歌合には、六十六番左女房(後

嵯峨院)の作に、「いと、又かきりも見えず武蔵野やあまき雪の明ほの、空」が

ある。この例の如く「いとどまた」は、本来、一つの事象の上にさらに別の事象

が加わることを言う表現だが、公基の歌ではそのところが判然とせず、「また」が

「再び」の意のようにも解される。

② 吹なへに―吹くのと同時にの意。【奥儀抄】上には「なへ からのなどいふ心な

り」とある。【秋風の草葉そよぎてふくなへ】にはのかにしつるひぐらしのこゑ(後

撰和歌集)秋上・二五三・「題しらず」・よみ人しらず、【古今和歌六帖】(虫・ひ

ぐらし・四〇〇六)には第二句「いなばそよぎて」、「あきかせのやはださむく

ふくなへに萩の上ばのおとぞかなしき」(【新古今和歌集】秋歌上・三五五・「堀河

院に百首歌たてまつりける時」藤原基俊)などが先行例。

③ はやしられぬる―早くも気づかれてしまったの意。【新編国歌大観】で検索する

限りでは、公基の当該歌のみに見られる表現。なお、近似した表現身にしられぬる

は本歌合中基家(二百二番右)と実氏(二百六十二番左)の歌中に見られる。

④ 秋の空―「おほかたの秋のそらだにわびしきに物思ひそふる君にもあるかな」

(後撰和歌集)秋下・四三三・「あひしりて侍りけるをこのひさしうとはず侍り

ければ、なが月ばかりにつかはしける」(右近)にみえる如く、秋の空はもの悲し

さを感じさせる景物の一つ。

⑤ うた、ねの衣手涼し―類似表現に「ながむれば衣手すずしひさかたの天の河原

の秋の夕ぐれ」(【新古今和歌集】秋歌上・三二二・「百首歌のなかに」式子内親王、

「ゆふぐれは衣手すずしたかまどのをへの宮の秋のはつかぜ」(【新勅撰和歌集】

秋歌上・二〇七・「題しらず」源実朝)などがある。うたたねと衣と秋風の組み

合わせとしては「夏衣まだひとへなるうたたねに心してふけ秋のはつ風」(拾遺

和歌集)秋・一三七・「あきのはじめによみ侍りける」安法法師)などが先行例。

なお、文永二年【白河殿七百首】には「いつのまに秋はきぬらんうたたねの我が

衣手の風ぞ身にしむ」(秋百三十首・早涼至・二〇四・藤原為家)と近似した表現

がみえる。

⑥ めには見えすて―目には見えすて。涼しさに秋を知るという趣向で、貫之の

「河風のすずしくもあるかうちよする浪とともにや秋は立つらむ」(【古今和歌集】

秋歌上・一七〇・「秋たつ日、うへのをのこともかほらにかはせうえうしけ

るともにまかりてよめる)以来、為家の時代まで長い伝統を持っている。「秋は

ぎをしがらみふせてなくしかのめには見えすておとのさやけさ」(【古今和歌集】

秋歌上・二二七・「題しらず」・よみ人しらず、「女郎花ふきすぎてる秋風は目

にはみえずてかこそしるけれ」(【古今和歌六帖】草・をみなへし・三六七四・凡

河内躬恒)などが先行例。当該の為歌は、新味はないものの、当該歌合「吹風

もあさけ涼しく成にけりぬる夜のまに秋やきぬらん」(五十二番右・藤原為家)、

「いつの間にか秋はきぬらんうたたねのあさけの風も身にぞしみける」(【宝治百首】

秋廿首・早秋・二二九・祝部成茂)などに見る如く、この時代に好まれた表現

であったと言えよう。

⑦ 不慮幾之由、庭のをしへ侍し―「庶幾」は乞い願う意。「右のはるひ猶不可庶幾」

(【六百番歌合】春部・春水・十三番)など、判詞においては、ある表現について

消極的な評価を下すのにもよく用いられる。「庭のをしへ」は漢語「庭訓」(【論語・

季氏)を読み下したもので、父から子への教訓が原義。ここは家庭教育の意であ

ろう。口伝であった可能性もあり、同内容の指摘を「類証密勘」、「僻案抄」等に

見つけようとしたが、適当な用例を見つけ得なかった。

【通釈】

四十四番

左(歌) 勝

同(権大納言)(藤原)公基

いよいよ又身に染む風が吹くのと同時に早くも(季節の到来が)知られてしま
う秋の空だなあ・・・

右(歌)

(藤原)為教朝臣

うとうととして(目覚めると風が吹き抜ける)袖が涼しく感じられる。吹く風
は目には見えないまま秋は来たのであろうか。

【判詞】左(の)「吹なへに身にしらねる」等は、格調高い表現でございます。右(の)
「吹風のめにみえず」という事は特に好ましくないということ、家の教えがありま
したのを今思い出されましたので、左をもって勝とする。

〈四十五番〉

四十五番

左 掛

同 為経

吹風もす、しくなりぬ久方の天つみ空に秋やきぬらん

右

信実朝臣

身にさむき秋そきぬらし萩原やさらては風のさしもやは吹

秋のはしめの心、みにさむきといへる、あまりにや

侍へき、涼風の至なとこそ申侍れ、下旬なと

はことにしたりかほにきこえ侍にや、天つみ空

に秋やきぬらん、させる事なく侍れと、勝と

まてはいか、とみえ侍れば、為侍、

【校異】

イ 持一ナシ(書) 口 同一中納言(書)(内)(支)(聚)(群)

ハ さらては—さえては(支) ニ の一ナシ(書)(内)(支)(聚)(群)

【他書所伝】

〔左歌〕ナシ 〔右歌〕ナシ

【語釈】

① 吹風もす、しくなりぬ—秋の到来を、涼風に感じるというのは常套的な表現。
「夏と秋と行きかふそらのかよひぢはかたへすずしき風やふくらむ」(古今和歌集)
夏歌・一六八・「みな月のつごもりの日よめる」・凡河内躬恒)のように、秋は空
からやってくると思えられていた。

② 久方の天つみ空—「久方の」は枕詞。「天」「空」などにかかる。「天つみ空」は、
天空の意。「ひさかたの天つみ空に照る月の失せなむ日こそ我が恋止まめ」(万葉
集) 巻第十二・寄物陳思・三〇〇四)に拠る表現。この措辞は、本歌合では、他に、
十一番右歌(少将内侍)、十二番右歌(沙弥禅信)でも用いられている。

③ 身にさむき—秋風を「身に寒き」と表現した和歌は少なくない。「秋風の身にさ
むければつれもなき人をぞたのむくるる夜ごと」(古今和歌集)恋歌二・五五五・
「題しらず」・素性法師)。ただし、「身にさむき秋」という措辞は珍しい。「身に
さむく秋はきにけり今よりの夕の風の哀しれとて」(洞院撰政治家百首)秋・早秋・
五九三・藻壁門院少将)は一例。

④ 萩原や—萩吹く風に秋の到来を知る趣向の歌は多い。「萩の葉のそよぐおとこそ
秋風の人にしらる始なりけれ」(拾遺和歌集)秋・一三九・延喜御時御屏風に「
紀貫之」。「をぎ原やいつまで下にかよひけんけさはに出づる秋のはつ風」(洞院
撰政治家百首)・秋・早秋・五四〇・藤原知家)。

⑤ 秋のはしめの心、みにさむきといへる、あまりにや侍へき—歌題の前半部分「初
秋」の心として、「身にさむき」と表現したのは、行き過ぎではないか、の意。初
秋に吹く風を「さむし」と表現した歌がないわけではないが(「あけぬるか衣手さ
むし」が原やふしみの里の秋のはつ風」(新古今和歌集)秋歌上・二九二・「守覚
法親王、五十首歌よませ侍りけるに」・藤原家隆)、「すずし」(身にしむ)などと

表現されることの方が多い。本歌合でも、「初秋風」題二十六首のうち、十一首が
「身にしむ」を、三首が「すずし」を詠み込む。永青文庫本の本文では、当該信実

歌以外に、連性歌(四十九番左)も「さむし」を詠み込むが、これは本文上やや問題がある(四十九番【語釈】参照)。判者為家は、「ふく風もあさけすずしく成りにけり」(五十二番右)と詠ずる。

⑥涼風の至―【札記】月令に「孟秋之月、…涼風至、白露降、寒蟬鳴、鷹乃祭鳥」とある。

⑦下句などはことにしたりかほにきこえ侍にや―「したりかほ」は、得意顔の意。ここでは、「さら」は風のさしめ、吹」と大げさに力んだ表現を指すか。

⑧させる事なく侍れと―「させる事なし」とは、大したことはなく、難点がない、の意。下句の趣向を、取り立てて優れたところは無いが、難点はないと評している。

【通釈】

四十五番

左(歌) 持

同(中納言)(藤原)為経

吹く風も涼しくなった。天空に秋が来たのであろうか。

右(歌)

(藤原)信実朝臣

身に寒く感じられる秋が来たに違いない。そうでなくては、萩原の風がこんなにも吹くであろうか。

【判詞】(歌題の)「秋の初めの心」を、「身にさむき」と表現したのは、あまりに行き過ぎたものではないでしょうか。「涼風の至る」などと申すではございませんか。下句などは特にしたり顔で大げさに力んでいるように聞こえるのではないのでしょうか。「天つみ空に秋やきぬらん」は、無難な表現ではございますが、勝とするのまではいかがであらうかと思われましますので、持とします。

〈四十六番〉

四十六番

左 掛

同 通成

萩原の末すこす風のをとよりそほのかに秋あきをき、はしめつる

右 同 雅光

袖のうへに露はみたれてむすへとも猶色見えぬ秋の初風
左めつらしき所ところもなくさせる難も侍らす、右袖の露
みたれてむすへとも猶色見えぬと侍、秋風いつ
より風の色見ゆへきにかときこえ侍れと、左
き、はしめつるといひはて、も、かちかたく侍へきに
や、又また為持、

【校異】

イ 持―ナシ(書) 口 同―右衛門督(書)(内)(支)(聚)(群)

ハ 萩原―萩の葉(内)(支)(聚)(群) ニ こす―こすよ(群)

ホ 秋を―秋は(書) へ 同―右近中将(書)(内)(聚)(群)、右近衛中将(支)

ト 所も―所(内)(支)(聚)(群) チ 侍―ナシ(支)

リ 風の色―風の色に(内)(群) 又 見ゆへきにかと―みゆへきかと(書)

ル 左―左も(内)(支)(聚)(群) ヲ 又―ナシ(書)(内)(聚)(群)

【他書所伝】

〔左歌〕

【題林愚抄】秋部一・初秋風・二九六二・「同(宝治歌合)」

をぎのはの末こす風の音よりぞほのかに秋を聞きはじめける

〔右歌〕ナシ

【語釈】

①萩原の末すこす風の―「いくかへりなれてもかなし萩原やすゑこすかぜの秋の夕暮」(統千載和歌集) 秋歌上・三五九・「正治百首歌奉りけるとき」・藤原定家)の影響がある。他に「萩の葉の末こす風の音よりぞ秋のふけゆく程はしらるる」(順集)一四八)や「をきはらやすゑこすかぜのほにいでてしたつゆよりもしのびかねける」(秋篠月清集)治承題百首・四三〇・「草花」・藤原良経)等の先行表現がある。

②き、はしめつる―「きりぎりすまくらかはしてねにけるも此あかつきぞ聞きはじめつる」(林葉和歌集) 秋歌・四二二・「虫声近床歌林苑」・俊恵)が先行例。

本歌合の「初秋風」題の歌を見ると、大きくは「身にしむ(色)」系の歌と「風の音」系の歌、その他の歌、の三つに大別されよう。通成の当該歌はもとより「風の音」系の発想となる。

③みたれてむすへとも―「しら露もみだれてむすぶ秋かぜにしたばさだめぬにはのかるかや」(為家千首) 秋二百首・二四九・藤原為家)の先行例がある。

④猶色見えぬ秋の初風―「猶色見えぬ」は先例のない措辞で、判詞で咎められている表現だが、「色見え」でうつろふ物は世中の人の心の花にぞありける」(古今和歌集) 恋歌五・七九七・小野小町)や「身にしむ」系秋風の代表歌「吹きくれば身にもしみける秋風を色なき物と思ひけるかな」(古今和歌六帖) 歳時部・天・あきの風・四二三・紀友則)などへの連想が働いていると思しい。

【通釈】

四十六番

左(歌) 持

同(右衛門督)(源) 通成
萩原の末を越して吹く風の音から(はじめて)ほのかに秋(の到来)を聞き(わけ)始めたことだよ。

右(歌)

同(右近中将)(源) 雅光
(私の)袖の上に(涙の)露は乱れ(落ちて)結ぶけれども、(それとは違って)まだ色が見えない(はつきりとした様子が見えない)秋の初風よ。

【判詞】左(歌)は珍しいところもなく(また)とりたてての難もございません。右(歌)は袖の露が「みたれてむすへとも猶色見えぬ」とございます。(いったい)秋風はいつから風の色を見ることができなのかなどと(欠点も)ありますもの、左(歌)は、たとえ「き、はしめつる」と言っておおせたとしても、(そちらを)勝とはし難うございます。(この番も)また持とすべきでしょう。

〈四十七番〉

四十七番

左

同 有教

おほつかな秋を告よとたれうへてけさは身にしむ萩の上風

右 勝

弁内侍

くる秋もた、我ためと思つ、きけはや風の身にはしむらん

左はたれ秋をつけよとうへけんとおほつかなく、

右はた、我ためとおもひてき、わける心、いつれ

も身にしむとは見え侍れと、萩の上風は

き、ふりたるかたも侍れは、妖艶の姿につ

きて、以右為勝、

【校異】

イ ナシ―勝(聚) 口 同―兵部卿(書)(内)(支)(聚)(群)

ハ 勝―ナシ(書)(聚) ニ わける―わたる(内)(支)(聚)(群)

ホ も―ナシ(内)(支)(聚)(群) ヘ 右―左(内)(聚)

【他書所伝】

〈左歌〉

【題林愚抄】秋部一・初秋風・二九六三・「同(宝治歌合)」

おほつかな秋をつけよとたれうゑてけさは身にしむ萩の上風

〈右歌〉 ナシ

【語釈】

①おほつかな―初句に置く例として、勅撰集では「おほつかないづこなるらん虫のねをたづねば草の露やみだれん」(拾遺和歌集) 秋・一七八・「廉義公家にて、草むらのよるの虫といふ題をよみ侍りける」・藤原為頼)、「おほつかな雲のかよひぢ見てしかなとりのみゆけばあとはかもなし」(同・物名・三八六・なとりのみゆ・平兼盛)などが早い例。

② たれうへて―「岩戸あけしあまつみことのかみに桜を誰か植始めけん」〔西行法師家集〕・雑・六〇五・「みもすそ川のほとりにて」・「いそのかみふるののさくらたれうへてはるはわすれぬかたみなるらん」〔千五百番歌合〕・春三・百八十番右・三六〇・源通具、〔新古今和歌集〕・春歌上・九六など、何らかの感慨を引き起こさせる植物を最初に誰が植えたのかと咎める発想の系譜がある。

③ 萩の上風―萩の葉の上を吹き抜ける風。秋の到来に起因する感情とともに悲愁を感じさせる景物として古来詠み込まれている。「あきはなほゆふまぐれこそただならぬをぎのうはかせはぎのしたつゆ」〔和漢朗詠集〕・秋興・二二九・藤原義孝、「物ごとにあきのけしきはしるけれどまつ身にしむは萩のうは風」〔千載和歌集〕・秋歌上・二二三・「郁芳門院の前裁合に萩をよめる」・源行宗など、例歌は多く、そういった点を為家は「き、ふりたるかたも侍れば」(表現に目新しさが無い)として負とする。

④ た、我ためと思つ、―「月見ればちちに物こそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど」〔古今和歌集〕・秋歌上・一九三・「これさだのみこの家の歌合によめる」・大江千里などに詠まれた秋の悲哀が我が身に來るといふ詠みぶりを逆転発想したもの。「たが秋のね覚とはむとわかずともただ我がためをしかのこま」〔老若五十首歌合〕・百十九番右・二三八・藤原良経、「秋の露もただ我がためやをかべなる松の葉分の月の衣手」〔拾遺愚草〕・院句題五十首・一八五二・松間月などが類例としてみえる。

⑤ き、わける―底本、書陵部本「き、わける」、他本「き、わたる」。前者だと(きいて判断する)、後者だと(ずっと聞く)となる。底本、書陵部本が「わける」である点と意味の上から「き、わける」で解釈した。

⑥ 妖艶の姿―歌論用語。上品で優雅な美しさや明るく花やかな美しさという「艶」と同類の語。定家は『近代秀歌』において「昔、貫之、歌の心巧みに、たけ及び難く、詞強く、姿おもしろきさまを好みて、余情妖艶の妹をよまず」と貫之歌を評している。なお、当該歌合五十四番右俊成卿女詠「しほるなよ月をは袖の秋の夜もしほたれてもすまのうら人」について、為家は「しほるなよ月をは袖のとて、もしほたれてもすまのうら人といへる心詞、妖艶のすかたことによるしく侍にや」

とする。

【通釈】

四十七番

左(歌)

はつきりしなくて気にかかることだ。秋(の到来)を知らせるようにと誰が植えたせいで今朝はこんなにも我が身に染みる萩の上風が吹くのであろうか。

右(歌) 勝

弁内侍

到來する秋もただ私の為と思ひながら聞くから(秋) 風は我が身に染みいるのだろうか。

〔判詞〕左は誰が秋を告げよと(萩を)植えたのかはつきりせず、右はただ私の為と思つて(秋風の音を)聞き分ける心、どちらも身に染むものとはみえますが、「萩の上風」(という表現)は聞き古したところもありますので、(一首全体が)妖艶の体(であること)によって、右をもつて勝とする。

〔四十八番〕

四十八番

左

同 師繼

をしなへて身にしむのみか吹風の音もさやかに秋はきにけり

右 勝

雅忠朝臣

吹風は昨日も奪もかはらねと身にしむ音に秋そしらる、

左右、おなじさまの心すかたに侍れと、身に

しむのみかと侍より、身にしむをとほまさり侍へし、

【校異】

イ 同―右近中将(書)(内)(支)(聚)(群) 口 勝―ナシ(書) 八 吹風は―吹風の(支) 二 今―(書) 内(支)(聚)(群) ホ さまの―やうに(支)、やうの(群) へ 心すかたに―すかたに(内)(聚)(群)、姿の

(支) ト 身にしむのみかと―身にしむのみ(内) 身にしむのみと(聚)

チ 侍より―侍よりは(書)(内)(支)(聚)(群) リをとほ―音(支)(群)

【他書所伝】

〈左歌〉 ナシ

〈右歌〉 ナシ

【題林愚抄】 秋部一・初秋風・二九六四

(同)〔宝治歌合〕 雅忠朝臣

吹く風のきのふもけふもかはらねど身にしむ音に秋ぞしらるる

【語釈】

①をしなへて身にしむのみか―「おしなべて身にしむ秋の初風をいかなる色とし人ぞなき」〔拾玉集〕第四・秋・五〇〇―などに詠まれるような、秋の到来により一様に身にしむばかりの状況ではなく、吹く風の音によっても秋が認識されることを当該歌では示している。

② 吹風の音もさやかに秋はきにけり―「あききぬとめにはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる」〔古今和歌集〕秋歌上・一六九・「秋立つ日よめる」・藤原敏行)を発想の淵源とする。以来、「ふくかぜもいまはさやかになりけり秋ときこゆるふえのこゑかな」〔道濟集〕九四)、「風のおとにおどろくのみかをぎのはのさやかになびく秋はきにけり」〔千五百番歌合〕秋一・五百二十八番・一〇五四・慈円)など、類想の歌が多く作られた。なお、「色かへぬ竹の葉山に吹く風の音もさやかに秋は来にけり」〔後鳥羽院定家知家入道撰歌(家良)〕知家大宮三位入道撰・秋・一三〇)は下三句が一致する。

③ 昨日も今も―諸本に従い、「昨日も今日も」の本文によって通釈を施した。

④ 身にしむ音に秋ぞしらるる―吹く風が身にしむことで、秋の到来を知るという発想には、「をさをあらみふきなすかぜの身にしみて秋きにけりとまつぞしらるる」〔大式高遠集〕月次・七月・三五〇)、「ゆふまぐれをぎふく風のみにしめば秋きにけりとおどろかれぬる」〔六条斎院歌合〕立秋・左・三・なかつかさ)などの先例がある(当該歌合には「萩のはに声たてねどもふく風の身にしむ色に秋ぞしらるる」〔初秋風・四十番右・小宰相・八〇〕という類例あり)。

【通釈】

四十八番

左(歌)

同(右近中将)(藤原)師繼
一様に身にしむばかりであるか、(いや、それだけではなく)吹く風の音もはつきりと秋は来たことだなあ。

右(歌) 勝

(源) 雅忠朝臣
吹く風自体は、昨日も陰翳も変わらないけれども、身にしむ音によって秋の訪れが感じられることだ。

〔判詞〕左右(の歌)、同じような趣向・姿でございますが、(左歌の)「身にしむのみか」という表現(よりも、(右歌の)「身にしむ音」という表現)が勝っていることでしょう。

〔四十九番〕

四十九番

左 勝

天川あまがわかは風かぜ速妻はやつまのいつかと待し秋やきぬらん

右

下野

いつもふくめに見ぬ風の秋といへは身にしむ色のいかてそふらん
左哥ひだりからことことによろしく待にや、いつもふくめに見ぬ風、まけ待へし、

【校異】

イ 勝―ナシ(書) 口 さむし―勝(書)(内)(支)(聚)(群)

ハ ふく―きく(書) 二 左―左は(書)(内)(聚)(群)、左哥は(支)

ホ ふく―きく(書)(内)(支) へめ―ナシ(内)

【他書所伝】

〈左歌〉

『夫木和歌抄』秋部一・三九二六・「宝治十首歌合、初秋風」

天の川川風すずしとほづまのいつかお待ちし秋やきぬらん

『題林愚抄』秋部一・初秋風・二九六五・同(宝治歌合)

天河かは風涼しとほ妻のいつかとまちし秋やきぬらん

〔右歌〕ナシ

【語釈】

①天川かは風さむしー眼前の景ととるべきか、或いは天空の天の川を言い切ったものか、俄には決しがたい。『伊勢物語』八十二段の業平詠「狩り暮らしたなばたつめに宿からむ天の河原に我は来にけり」では、河内国の歌枕である天川の地名から天空の天の川が連想される。底本は「さむし」だが、他本がすべて「す、し」であること、また、四十五番判詞に「秋のはしめの心、みにさむきといへる、あまりにや待へき」とみえることから「す、し」で解釈した。

②遠妻―「遠妻し高にありせば知らずとも手綱の浜の尋ね来なまし」(『万葉集』巻第九・雑歌・一七四六・「手綱の浜の歌一首」)など、遠くに離れて住んでいる妻が原義。『万葉集』に用例が散見する。当該歌では「年にありて今かまくらむぬばたまの夜霧隠れる遠妻の手を」(『万葉集』巻第十・秋雑歌・二〇三五)と同様、織り姫を念頭に置く。

③いつもふく―書陵部本は「いつもまきく」。判詞では書陵部本、内閣文庫本、支子文庫本共に「いつもまきく」とする。「いつもまきく」の例としては、「いつもまきく風とはきけどをぎのはのそよぐ音にぞ秋はききにける」(『古今和歌六帖』草・をぎ・三七一五・紀貫之)、「いつもまきくふもとのさととおもへども昨日にかはる山おろしのかぜ」(『文治六年女御入内和歌』秋・七月・秋風・一四六・藤原定実)、「新古今和歌集」秋歌上・二八八)、「いつもまきくものとや人のおもふらむこぬゆふくれのあきかぜのこま」(『六百番歌合』恋部下・寄風恋・十七番左・九三三・藤原良経)、「新古今和歌集」恋歌四・二三二〇)などがみえる。この内、貫之詠は、「統後撰和歌集」には「いつもふく風とはきけどをぎの葉のそよぐおとにぞ秋はききにける」(秋歌上・二四四・清慎公の家の屏風に)、「万代和歌集」(秋歌上・七七六)も「いつもふく」として入集している。

④めに見ぬ風の―「浦にやくもしほのけぶりうちなびきめにみぬ風ぞあらはれて行く」(『寂身法師集』雑雑会等・二八〇・「浦煙、同」)、「萩はらや末こそころの夕暮にめにみぬかせも秋ぞかなしき」(『道助法親王家五十首』秋・四六三・「萩風」・道助法親王)などの先行例がみえる。なお、建長八年「百首歌合」では「吹く風のめにみぬからにうつるふやしのに花をさそふなるらん」(二百八十七番左・五七三・院中納言)について「ふく風のめにみぬ、めづらしきつづきには侍らぬ」(藤原知家判)と指摘する。

【通釈】
四十九番
左(歌) 勝 沙弥蓮性
天の川(に吹く)川風が瀟々。遠くに離れている妻(織り姫)が(彦星に逢うのを)早く早くと心待ちにしていた秋が来たのだろうか。

右(歌) 下野
いつも吹いている目に見えない風が秋になったと言うだけで(とたんに)どうして身に染みる秋の様子が添うのだろうか。

【判詞】左(は) 歌柄が特によろしいでしょうか。「いつもふくめにみぬ風」(と詠んだ歌が)、負けでしょう。

〔五十番〕

五十番	左 勝	為氏朝臣
	右	少将内侍
	左	うちつけにまつそ身にしむ秋きぬといふ斗なる萩の上風
	右	いかにして身にしむ色をそめつらん音こそあらめ秋の初風
	左	いふ斗なる萩の上風、右、音こそあらめ秋の初風、これらの勝劣はいく程の事侍らぬを、色をそめつらんといへるあまりにたしかにや侍らん、

【校異】

イ 勝一ナシ (書) □ 朝臣一ナシ (内) (支) (聚) ハ を一を (聚)

二 勝劣 (※■は「哥」とよめるか) 一勝劣 (書)、勝負 (内) (支) (聚) (群)

ホ 色を染つらん一色をは染つらん (書)、そめつらん一 (内) (支) (聚) (群)

へ 侍らん一侍る (内) (支) (聚) (群) ト にや一や (支)

【他書所伝】

【左歌】

【題林愚抄】秋部一・初秋風・二九六六・(同) (宝治歌合)

うちつけにまづぞ身にしむ秋きぬといふばかりなる萩の上風

【右歌】

【万代和歌集】秋歌上・七九二・十首御歌合に、初秋風といふことを

いかにして身にしむいろをそめつらむおとこそあらめあきのはつかぜ

【語釈】

①うちつけに―思いがけず、不意に。秋の初風が「うちつけに」「身にしむ」様を

詠んだ例に「あきたつときよりけふのうちつけに風もみにしむ(こちこそすれ)

【六条斎院歌合】秋・九・駒君、「打ちつけにけふふくかぜの身にしむはいかな

る秋のたてはなるらん」(宝治百首)秋廿首・二二三四・帥)がある。

②秋きぬといふ斗なる―「秋が来た」と言うだけの。「秋きぬといふばかりな

るよもぎふにあさけの風の心がはりよ」(拾遺愚草)関白左大臣家百首・秋・

一五三二、「秋きぬといふばかりなるがめより昨日にはにぬ明ほの空」(宝

治百首)秋廿首・早秋・二二三五・小宰相)等の例がある。

③身にしむ色をそめつらん―「いかにしていくかもあらぬ秋風の身にしむ色をふ

かくそむらん」(後鳥羽院御集)建仁元年三月内宮御百首・秋二十首・二三七

は当該歌と表現が似る。

④勝劣―当該歌合には他に七十七番判詞「いく程の勝劣侍らし」がみえる。【幾程

の勝負なく思う玉ふる程に】(民部卿家歌合 建久六年)五番・初郭公、「いく

ほどの勝まけも侍らぬにやとみえ侍れど」(水無瀬恋十五首歌合)五十三番・関
路恋)といった例があるが、「左右ともにいくほどの勝劣なくや」(仙洞十人歌合
二十八番)、「両首いくほどの勝劣なく侍れど」(千五百番歌合)八十一番・春二
という例も存する。

【通釈】

五十番

左(歌) 勝

思いがけず身に染みることだよ。「秋が来た」と告げるだけの萩の上風なのに。

右(歌)

どうやってしめじみと身にしめる色を染めてしまったのだろうか。秋の初風は、

(たしかに)音はあるのだけれども。

【判詞】左、「いふばかりなる萩の上風」、右、「音こそあらめ秋の初風」、これらの

優劣はどれほどの事でもございませぬが、「色をそめつらん」といいますのは余り

にもはつきりと言ひ過ぎではないでしょうか。又左が勝つべきでしょう。

【五十一番】

五十一番

左 持

白妙の水かけ草や^①あまの河原の秋の初風

右 沙弥禅信

たつねくる秋のしるしもられけり風吹かはるみわの杉むら

左、下句、今までたれもよみのこすへしとも聞え

侍らぬうへに、水かけ草なひくを見れば時は

きにけりなとは、見ならひて侍を、白妙とて

こそ、水の色にや草の色にやとおほつかなく

侍れ、右、みわの杉村秋のしるしなどは、さもやとみえ

侍を、たつねくると侍こそ、秋のくるにや、人至にや、

短慮まとひてわきまへかたく侍れ、吹かふる風の
のをともあまたき、なれて侍れば、可為侍、

【校異】

イ 持―ナシ (書) 口 しけるらん―なびかふ (書) (内) (支) (聚) (群)
ハ たつねくる―尋入 (内) (支) (聚) (群) 二 時は―時も (内) (聚)
ホ にや―ナシ (書) ヘ と―ナシ (内) (聚) ト おほつかなく―おほつ
つかなく (書) チ みえ侍を―侍るを (内) (支) (群)、聞え侍るを (聚)
リ たつねくる―たつねける (内) (支)、たつねいる (聚) (群) 又 くる―
来たる (内) (聚) (群) ル 人―人の (書) (内) (支) (群) (聚)
ヲ 吹かふる風のをとあまたき、なれて侍れば―ナシ (支) ワ をとも―音
もや (内) カ あまた―あたに (内) (聚) ヨ 可―ナシ (書) (支)

【他書所伝】

〔左歌〕 ナシ 〔右歌〕 ナシ

【参考歌】

〔左歌〕

〔天の川水陰草の秋風になびかふ見れば時は来にけり〕〔万葉集〕卷第十・秋雑歌・
二〇一三、第四句、西本願寺本の付訓「ナビクラミレバ」

* 〔古今和歌六帖〕(歳時部・秋・七日の夜・一三四・柿本人丸)は、下句「な
びくを見ればときはきぬらし」〔五代集歌枕〕二二八九、〔袖中抄〕七三七
も、〔赤人集〕(二八二)は、第二句以下「みづくもりぐさふくかぜになび
くとみれば秋はきにけり」、〔続古今和歌集〕(秋歌上・三〇七・山部赤人)は、
下句「なびくをみればときはきにけり」。

【語釈】

① 白妙の―枕詞。「衣」や「袖」のほか、「雲」「月」など白色を連想させる歌語に
かかる。

② 水かけ草―水辺、または水辺の物陰に生える草。「袖中抄」に、「顕昭云、水陰
草とは水の陰に生たる草を云。詞を略したる也」とある。

③ しけるらん―他本「なびくらん」が適した表現であろう。「しける」では、夏歌
のように解されるし、【参考歌】に掲げた万葉歌にも、「なびかふ(なびく)」とある。
また、「らし」では、はっきりとした根拠に基づき推定を表すことになるが、ここ
では、「らん」が適切。

④ 天の河原―七夕伝説で、彦星と織姫の年に一度の逢瀬の舞台となる天空の銀河。
「秋風の吹きにし日より久方のあまのかはらにたたぬ日はなし」〔古今和歌集〕秋
歌上・一七三・「題しらず」・よみ人しらず)。

⑤ たつねくる―訪ねてくる、の意。「わがいははみわの山もとこひしくはとぶらひ
きませすぎたてるかど」〔古今和歌集〕雑歌下・九八二・「題しらず」・よみ人
しらず)、「みわの山いかにまち見む年ふともたつぬる人もあらじと思へば」〔古
今和歌集〕恋歌五・七八〇・「仲平朝臣あひしりて侍りけるをかれ方になりければ、
ちちがやまのかみに侍りけるもとへまかるとよみてつかはしける」・伊勢)に
拠る表現で、三輪山説話と関わる歌語。

⑥ 秋のしるし―秋の目じるし。「しるし」も、「みわの山しるし」のすぎは有りなが
らをしへし人はなくていくよぞ」〔拾遺和歌集〕雑上・四八六・「はつせのみちに
てみわの山を見侍りて」・清原元輔)のように、三輪山説話と関わる歌語。「三輪
の山秋のしるしを尋ぬれば杉間を分けて紅葉しにけり」(中宮亮頭輔家歌合)紅葉・
十番左・四三・藤原親隆)など、類似した発想の先行歌がある。

⑦ 風ふきかはる―秋風に吹き変わる、の意。「あききぬとききつるからにわがやど
の萩のはがぜの吹きかはらん」(千載和歌集)秋歌上・二二六・「秋たつ日よみ
侍りける」・侍従乳母)、「花すすきなびくけしきにしるきかなかせ吹きかはる秋の
ゆふぐれ」(忠度集)薄・三三三、「治承三十六人歌合」二六一では、第二句「まね
く気色に」。

⑧ 下句、今までたれもよみのこすへしとも聞え侍らぬうへに―下句は、今まで誰
もが詠み残しているだろうとも聞いておりませんが、その上に、の意。経朝歌の
下句は、「さかのぼる浪のいくへにしをれけん天の河原の秋の初かせ」(拾遺愚草)
閑居百首・雑・三九六)や「染めもあへぬ紅葉のはしや渡すらん天の河原の秋の初風」
(洞院撰政家百首)秋・早秋・五三四・藤原為家)と一致する。また、「あまの川

水かけ草のうちなびきいその枕に秋風ぞふく」(「正治初度百首」秋・一四一・惟明親王)、「天河水かけ草のうちなびき玉のかつらも露こぼるらん」(「拾遺愚草」下・秋・二二三六・「建保三年七夕内裏七首」)などの例もあって、経朝の当該歌は「白妙の」を除けば新味に欠けよう。前引万葉歌に、表現・趣向ともにもたれ過ぎた歌であることも、評価の低さに繋がっている。

⑨白妙とてこそ、水の色にや草の色にやとおほつかなく侍れ―枕詞の「白妙の」から連想される白色が、水の色なのか、草の色なのかはつきり分らない、の意。経朝が、「白妙の」という歌語を用いたのは、秋の色は白であるという通念(五行思想)と関わるであろう。また、「水の白波」など、水を白と表現することは珍しくはないし、特に、秋の水を白色に表現した例としては、「日を凝ふる暮山は青くして簇簇たり 天を浸す秋水は白くして茫茫たり」(「和漢朗詠集」巻下・山水・五〇一・白楽天)、「秋の水は秋の空にぞ成りにけるしるき浪まにうつる山かけ」(「拾玉集」文集百首・(文集題は前引白楽天の詩句)一九四一)などがある。ただし、「白妙の水(かけ草)」は、「新編国歌大観」で検索する限り、先例のない表現で、為家は、その奇矯な詞続きを難じている。

⑩たつねくると侍こそ、秋のくるにや、人至にや、短慮まとひてわきまへかたく侍れ―「たつねくる」という表現は、「秋が来る」のであろうか、「人が来る」のであろうか、浅はかな考えが迷って見分けることが難しい、の意。初句「たつねくる」は、第二句との続きでは、秋が訪ね来るといふ擬人的な表現となる。また、「(人が)訪ねてきた秋の目じるし」という解釈も可能である。

⑪吹かはる風のをともあまたき、なれて侍れは―秋になつて風の音が吹き変わるという趣向の歌は、前引千載歌や忠度歌のほか少なくない。「あしびきの山した風のいつのまにおとふきかへて秋はきぬらん」(「新勅撰和歌集」秋歌上・一九九・「うへのをのことも、はつ秋の心をつかうまつりけるに」・藤原資季)、「我が門のわさ田のほむけかたよりにけさ吹きかはる秋のはつかぜ」(「洞院撰政治家百首」秋・早秋・五四四・藤原知家)、「思ひあへずけふより秋のくるかたに朝氣の風ぞ吹きかはりける」(「洞院撰政治家百首」秋・早秋・五六〇・藤原信実)、「衣手もいつしか涼しけさのまに吹きかはりぬる秋のはつ風」(「洞院撰政治家百首」秋・早秋・五九四・藻壁門院少将)。

【通釈】
五十一番

左(歌) 持 (藤原) 経朝朝臣
(今ごろは) 川のほとりの草は輝き輝きなる露か。天の川の河原を吹く秋の初風に。

右(歌) 沙弥禅信
(人が) 訪ねて来る、その秋の目じるしも知られたよ。三輪の杉群では風の音が吹き変わって。

【判詞】左(の歌)は、下句は、今まで誰も詠み残しているようにも聞いておりません上に、「水かけ草なびくを見れば時はきにけり」などという歌は、見慣れてございませが、「白妙」という表現は、(それが) 水の色のことなのか草の色のことなのかはつきりいたしません。右(の歌)は、「みわの杉村」「秋のしるし」などの表現は、(三輪山説話に関わる歌々を想起させて) いかにもその通りだと見えませんが、「たつねくる」とございませは、秋が来るのか、人が来るのか、浅はかな私では弁えがとうございませ。「吹き変わる風の音」という発想の歌)も、たくさん聞き慣れておりますので、持とするべきでしょう。

〈五十二番〉

五十二番

左 勝 越前

風わたる秋の夕の萩の葉にをけはかつちる露の白玉

右 為家

吹風もあさけ涼しく成にけりぬる夜のまに秋やきぬらん

左はしめの秋の心おほつかなく侍るにや、右ぬる

夜のまもとめいたしたる事に侍れは、勝負

れるの事にてこそは侍らめ、

【校異】

イ 勝一ナシ(書)(内)(支)、持(群) 口 かつ一かす(書) ハ 為家一
前権大納言為家(書)(内)(支)(聚)(群) ニ おほつかなく一おほつかなく
や(支) ホ 右ね一右の(書) ヘ 夜のまも一夜のまに(内)(支)(聚)(群)
トこそは一こそ(内)(支)(聚)(群)

【他書所伝】

〔左歌〕 ナシ

〔右歌〕

【題林愚抄】 秋部一・初秋風・二九六七・「已上同(宝治歌合)」

吹く風もあさぢらずしく成りにけりぬるよのまに秋やきぬらん

【語釈】

① をけはかつちる―「秋風におけばかつちるしら露のあだのおほ野にうづらなく
なり」(夫木和歌抄) 秋部五・「六帖題 新六」五六七五・藤原為家、佐藤恒雄氏『藤
原為家全歌集』では、この歌の為家作について「存疑歌」とする。「草まくら衣
手寒き秋風におけばかつちる野への白露」(内裏百番歌合)(建保四年)・九七・
藤原康光)が先行例。また【校異】に見る如く書陵部本は第四句を「おけはかす
ちる」とするが、書陵部本のみ本文であり、「数散る」の用例も他に見えないの
で、水青文庫本の本文のまままで通釈を行った。

② かつちる―「しぐれつつかつちるやまののみち葉をいかにふくよのあらしなる
らん」(金葉和歌集) 二度本・秋部・二五八・「從二位藤原親子家造紙合に時雨を
よめる」・藤原顕季)、「したもみちかつちる山の夕しぐれぬれてやひとり鹿のなく
らむ」(新古今和歌集) 秋歌下・四三七・藤原家隆)などの先行例がある。

③ 露の白玉―「をぎの葉にそそやあきかぜ吹きぬなりこばれやしぬるつゆのしら
たま」(詞花和歌集) 秋・一〇八・大江嘉言)のほか、「万葉集」(巻第八・秋雑歌・
一五四七・「藤原朝臣八束の歌一首」・藤原八束)や「古今和歌六帖」(草・きく・
三七四三・紀貫之)など早くからの使用例がある。

④ あさけ涼しく―「あさけ」は「朝明」の略。夜明け、明けがたの意で、「万葉集」
から用例がある。「あさけ涼しく」は当該歌が初例だが、「万葉集」に「秋立ちて

幾日もあらねばこの寝ぬる朝明の風は手本寒しも」(巻第八・一五五五・「安貴王の
歌一首」・「拾遺和歌集」(秋・一四一・「題しらす」)では第二句「いく日もあらね
ど」・結句「たもとすずしも」の例がある。また、「右衛門督家歌合」(久安五年)「九
月盡」題六番左「すずしさはたもとにしらるこのくれのあさけの風に衣がへせむ」
(藤原隆季)について、判者藤原顕輔は「左歌ははつあきの心ちぞする、秋たちて
いくかもあらぬにこのねぬるあさけの風はたもとすずしもとよめる心なり、くれ
の秋とはみえず」と判を付している。他に安貴王歌を本歌とする「このねぬる夜
のまに秋はきにけらしあさけの風のきのふにもにぬ」(新古今和歌集) 秋歌上・
二八七・「百首歌に、はつ秋の心を」・藤原季通)などもみえる。為家は隆季歌や
季通歌、それに安貴王の歌を踏まえて作歌したと思量される。

⑤ もとめいたしたる事に―否定的評価の評語。無理に案出した表現の意であろう。
本歌合の「社頭祝」題の定雅の歌「神垣のくすの下風のとかにてさこそ恨のなき
世なるらめ」(百廿一番左)について、為家は「左の哥うらみなき世は、祝言に侍
を、社頭題にまさかきゆふかつらなどを、きて秋にはあへすといへる、くすの下
風しももとめいたされ侍らん、やすき事をさしをきてわりなき心をめくらせる事
は、これのみにかきらす、こひねかふへからすやとそうけたまはりをき侍し」と
評している。こここの「もとめいたされ侍らん」も、無理な表現の案出を難じたも
のである。

【通釈】

五十二番

左(歌) 勝

越前

風が(吹き) 渡る秋の夕べの萩の葉(の上)に、置く一方で、(すぐに) 散る露
の白玉よ。

右(歌)

(藤原) 為家

吹く風も明けがたには(すつかり) 涼しくなつてしまったことだ。(このぶんで
は) 寝ていた夜の間に秋が来てしまったのであろうなあ。

【判詞】 左(歌) は「初秋」の題意がはつきりとしなのではないでしょうか。右
(歌) は「ねぬる夜のま」という措辞も(無理に)案出した事でございますので、

勝負は従前のままといたうことではなうましよう。

宝治元年『院御歌合』注釈―「海辺月」題―

位藤邦生 森下要治

田野慎二 山崎真克

赤迫照子 藤川功和

はじめに

『尾道大学芸術文化学部紀要』第7号（平成20年3月）に引き続き、宝治元年（一二四七）『院御歌合』の注釈を試みる。今回は「海辺月」題十三番を取り上げる。各番担当者と所属を以下に示す。

五十三番―位藤邦生（長崎大学）、五十四番―赤迫照子（広島大学図書館）、五十五番―田野慎二（広島国際大学）、五十六番―山崎真克（松江工業高等専門学校）、五十七番―藤川功和（尾道大学）、五十八番―森下要治（広島文教女子大学）、五十九番―赤迫、六十番―田野、六十一番―山崎、六十二番―藤川、六十三番―山崎、六十四番―田野、六十五番―位藤

凡例

一、底本は、永青文庫蔵本〔一〇七・三六・七〕（『細川家永青文庫叢刊』第八巻所収）を用いた。

一、校合した諸本と略号は、以下の通り。

書―書陵部蔵本〔五〇一・七四〕（『新編国歌大観』の底本）

内―内閣文庫蔵本〔百三十番歌合（外題）〕〔二〇一・二四七〕

支―九州大学支子文庫蔵本〔九一一・ホ・一〕

聚―書陵部蔵歌合類聚本（『大日本史料』第五篇二十四所収）

群―群書類従本（巻第二百所収）

一、注釈は、番全体の本文【校異】を示した後、【他書所伝】【本歌】

【語釈】【通釈】をあげた。

一、【語釈】の内、各詠作者並びに前号までに既出の語彙については、紙幅の関係上これを略した。

一、表記や送り仮名の異同はこれを略し、見せけちや補入符号によって訂正のある箇所は、訂正後の本文を採用した。

一、翻字本文には適宜読点を施し、字体は現行の活字体に改めた。

一、本文中、異同の存する箇所には、傍線及びイ、ロ、の如き符号を付し、語釈を施した箇所には、本文右傍に①、②…の通し番号を付した。

一、底本で文意不通等が認められる場合、他本の本文に拠り通釈を施した場合がある。その際、本文【校異】【通釈】において他本に拠った箇所を網掛けを施した。

一、引用本文は、原則として『新編国歌大観』に拠り、その他の引用文献は、適宜底本を示した。なお、引用本文には、適宜、傍線、振り仮名等を付した。

一、『万葉集』については、本文、歌番号ともに塙書房刊『万葉集訳文篇』を用いた。

〈五十三番〉

五十三番 海辺月

左 勝

女房

塩かまの浦の煙もたえにけり月みんとての海士のし態に

右

小宰相

わか④のうらやお⑤な⑥しな⑦な⑧れの君か代に又立いて、月をみる哉

左此しほかまの浦こそ、業平朝臣わかみかと

六十余こくの中ににたる所なしと申をき侍にも

猶過て、めつらしくありかたき、あまのしわざと見

たまへ侍れ、いまの世までいかてよみ残し侍にか、

世くたれりとは思ふへくも侍らさりけり、もろくの

みちもかくこそ侍らめと、たのもしくも侍かな、

右歌、おほろけにては此かたはらにたちいつへ

き事とも見え侍へらねは、とかくさたなきをめんほくにて

侍へきにこそ、返、以左為勝、

【校異】

イ 海辺月―ナシ (支) 口 勝―ナシ (書) ハ 続後撰―ナシ

(書・内・支・聚・群)、続後撰、秋中 (聚) ニ 煙も―煙も (書)

・内・支・聚・群) ホ 月みん―月みむ (書)、月みん (内・支・

聚・群) ヘ し態に―しはさか (支) ト わかのうらや―わか

のうら (支) チ なかれ―みなど (群) リ をき―ナシ (書)

又 見たまへ侍れ―見給へれば (内・聚・群) ル 侍らさりけり

―侍らさりける (書) ヲ もろくの―ものを (書) ワ かく

こそ―かく (書・内・支・聚・群) カ 右歌―右の歌 (支・聚・

群) ヨ 見え侍へらねは―みえねは (書)

【他書所伝】

〈左歌〉

『秋風抄』秋歌・八〇・「御歌合、海辺月」・院御製

塩竈の浦のけぶりもたえにけり月みむとての海士のしわざに

『続後撰和歌集』秋歌中・三四八・「十首歌合に、海辺月といへる心

をよませ給うける」・太上天皇

しほがまのうらのけぶりはたえにけり月見むとてのあまのしわざに

『題林愚抄』秋部三・(海辺月) 続後撰・四一四八・太上天皇

しほがまの浦の煙はたえにけり月みんとてのあまのしわざに

『題林愚抄』秋部三・(海辺秋月) 続後撰・四一六二・太上天皇

塩がまのうらの煙はたえにけり月みんとてのあまのしわざに

『歌枕名寄』七二九二・(海辺秋月) 続後六・太上天皇

塩がまのうらのけぶりはたえにけり月みんとてのあまのしわざに

〈右歌〉ナシ

【語釈】

①海辺月―勅撰集では『千載和歌集』に「ながめやる心のはてぞな

かりけるあかしのおきにすめる月影」(秋歌上・二一九)。「海辺月といへるころをよめる」(俊恵)、家集では『従三位頼政集』に「住吉の松の木まより見渡せば月おちかかるあはぢ島山」(上巻・二〇五)。「海辺月」とあるのが早い例で、『新古今和歌集』には「秋の夜の月やをじまのあまのはらあげがたちかきおきのつりぶね」(秋歌上・四〇三)。「和歌所の歌合に、海辺月を」(家隆)のほか、建永元年(一二〇六)七月二十五日「卿相侍臣歌合」の折の「海辺月」題の歌が、雑歌上の部に三首並べて載せられている(一五五六・慈円、一五五七・定家、一五五八・秀能)。院政期から鎌倉期にかけて好まれた歌題であった。

②塩かまの浦―歌枕。陸前。今の宮城県塩釜市。海士と「塩焼く煙をよむことが平安末期以後は圧倒的に多くなつた」と片桐洋一氏は『和歌大辞典』で説明している。「ふるゆきにたくもの煙かきたへてさびしくもあるかしほがまのうら」(『新古今和歌集』冬歌・六七四)。「家に百首歌よませ侍りけるに」(兼実)等が先行例。

③海士のし態に―「ふねのうちなみのしたにぞおいにけるあまのしわざもいとまなき世や」(『千五百番歌合』雑一・千三百八十二番左・二七六四・良経)。「はるの日のどかにてらすおほぞらにむれたるたづのあそぶこゑこゑ」(右・二七六五・兼宗)の番における、慈円の判歌は、「なみのしたのあまのしわざにくらぶればそのこととなきたづのこゑかな」。月の夜に、塩釜の浦の煙が絶えたのが、月を見ようとしての海士のしわざでないことは明らかであるが、それを海士の

風流心からのようにとりなすのが、当時の風であった。たとえば、「ころあるをじまの海人のたもとなつきやどれとはぬれぬものから」(『新古今和歌集』秋歌上・三九九)。「八月十五夜和歌所歌合に、海辺秋月といふことを」(宮内卿)など。

④わかものうら―歌枕。今の和歌山市。片桐洋一氏は『和歌大辞典』に「いっぽう、「和歌の浦」の「和歌」から「歌」「歌道」などを表象するようになるのも平安後期からである」と述べている。ここでは、和歌の隆盛と当該歌合の晴事を言祝ぐ表現となつている。

⑤おなじなかれ―和歌の技巧では「五十鈴川」「飛鳥川」「石清水」などととり合わせ、「同じ流れ」を「一貫する流れ」の意で「川の流れ」と「皇統」の意味を重ね合わせて用いる事が多い。「あまのがはおなじながれとききながらわたらむことのなほぞかなしき」(『後拾遺和歌集』雑一・八八八・周防内侍)。「後冷泉院うせたまひてよのうきことなどおもひみだれてこもりゐてはべりけるに、後三条院くらゐにつかせたまひてのち七月七日にまゐるべきよしおほせごとはべりければよめる」とあり、『讃岐典侍日記』下巻冒頭には、堀河院の崩御後宮仕えを退いていた讃岐典侍が院の後を継いで即位した鳥羽院に再出仕したときの心境を、さきの周防内侍の歌を引いて表現している(ただし第四句が「わたらむことは」)。周防内侍の歌では後冷泉院の後を継いだ後三条院が共に後朱雀院の皇子であることを「おなじながれ」と表現していた。当該歌も「皇統」の意が前面に出ており、「おなじなかれの君か代」は後堀河天皇、四条天皇の時代

の断絶を経て、後嵯峨院の御代に土御門天皇の流れが復活したことを指している。あるいは、後鳥羽院↓土御門院↓後嵯峨院の流れをも指しているか。

⑥月をみる―文運の隆盛を言祝ぎ、今回の歌合の晴儀に参加できた喜びを隠喩として表現しよう。

⑦業平朝臣わかみかと六十余こくの中ににたる所なしと申をき侍―『伊勢物語』第八十一段に「わがみかど六十余国の中に、塩竈といふ所に似たる所なかりけり」とあるのを踏まえた指摘。

【通釈】

五十三番 海辺月

左（歌） 勝

女房（後嵯峨院）

塩釜の浦の煙も絶えてしまったことだ、（塩焼く煙に遮られることなく）月を見ようとするの、海士の（風流な）しわざのために。

右（歌）

（承明門院）小宰相

和歌の浦（の文運盛んなこの時）よ、同じ流れの君の御代に（私も）再び立ち出（ることができ）て、（光栄にも）月（の如くあきらかな歌合の晴儀と歌）を見ることがだ。

〔判詞〕左（歌）は、この塩釜の浦こそ、業平朝臣が「帝の治めるわが国六十余国の中で（他に）似た所がない」と申しおきましたのにも猶過ぎて、（この絶景の所以を）珍しく有難い、海士のしわざと御解しなさいました。いまの世までどうして（こんな視点を）詠み残してごさいましたのか。（こんな例を見ると、次第に）世が下った

（など）とは、思うべくもごさいませんでした。諸々の道もまったくこうであってほしいと、頼もしいもごさいます。右歌は、なみたいていではこの（左歌の）傍らに立ち出ることができるとも思われませんので、あれこれと沙汰（批判）がないのを（せめての）面目とするべきでしょう。どう考えても左をもつて勝といたします。

〈五十四番〉

五十四番

左

太政大臣

① 蘆そよく難波の浪の数く②に身に③しめとすむ月の影哉

右 勝

俊成卿女

④しほるなよ月を袖の秋の夜にも⑤しほたれてもすまのうら人

⑥難波のなみの数く⑦に身に⑧しめとすむといへる

⑨けしき、さこそとすてかたく侍に、しほるなよ月を袖のとて、もしほたれてもすまのうら人といへる心

詞妖艶のすかた、ことによるしく侍にや、とふ人
あらはといへる本哥の心にもゆつりて、勝と申へきにや、

【校異】

イとーて（群） □ 勝―ナシ（書） ハとーて（内・支・群）

二 けしき—景氣（書・内・支・聚・群） 本 本哥の心—本哥心
（内・群）、本哥（支）へ 勝と申へきにや—勝とて申きにや（内）
【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【本歌】

〈右歌〉

『古今和歌集』雑歌下・九六二

田むらの御時に事にあたりてつづくにのすまといふ所にこもり
侍りけるに、宮のうちに侍りける人につかはしける

在原行平

わくらばにとふ人あらばすまの浦にもしほたれつつわぶとこたへよ

【語釈】

① 蘆そよく難波—「難波」は摂津国の歌枕。『万葉集』以来、「蘆」とのとり合わせて海辺の景を詠んだ例が多い。「月」を詠み込むのは「なにはえのあしまにやどる月みればわが身ひとつもしづまざりけり」（『詞花和歌集』雑上・三四七・「神祇伯頭仲ひろたにて歌合し侍るとて、寄月述懐といふことをよみてとこひ侍りければつかはしける」・顕輔）が早い例。当該歌合にも五十六番右・公相「をしてるや難波の空の夕なきにあしの末はを出る月影」がある（永青文庫本以外は全て「難波の浦」とする）。

② 数く—波のひとつひとつに。「かずかず」に月のひかりもうつりけり有明の庭の露のたま萩」（『夫木和歌抄』秋部二・「三十首歌人人

によませ給し時、草花露を」・実兼）。

③ 身にしめとすむ月の影哉—「身にしみよ」と言うように、月影が澄んでいる様子。「むらさきにたなびくものたえまよりみにしむつきのいろをみるかな」（『重之子僧集』・四七・「よぶかきつきをなごめはべりて」）。

④ しほるなよ月をは袖の秋の夜に—「しほる」は「絞る」。絞らずに濡らしたままで、袖に秋の月を宿しておいて欲しいという願う。「秋のよは露もなみだもあまるともしばらじ袖にやどれ月かげ」（『光経集』「月」・五七一）。「月をは袖の」は「昔思ふ涙のそこにやどしてぞ月をばそでの物としりぬる」（『新勅撰和歌集』雑歌一・一〇七五・「五十首歌よみ侍りける時」・守覚法親王）が先行例。

⑤ もしほたれてもすまのうら人—「もしほたる」は海藻に海水をかけて塩をとること。袖がぐったりとなるほど涙を流す意を掛ける。

「袖」をとり合わせた先行例には「恋をのみすまのうらびともしほたれほしあへぬ袖のはてをしらばや」（『新古今和歌集』恋歌二・一〇八三・「百首歌たてまつりし時、恋歌」・良経）がある。

⑥ けしき—歌論用語「景氣」。詞によって視覚的な映像・情趣が感じられることをいう。

【通釈】

五十四番

左（歌）

太政大臣（西園寺実氏）

蘆のそよく難波の浪のひとつひとつに、「身にしみよ」と澄む月の

光であるよ。

右（歌） 勝

俊成卿女

藻塩が垂れても（袖を）絞るなよ、須磨の浦人よ。月が袖に宿る秋の夜に。

〔判詞〕「難波の浪の数く身にしめとすむ」という景色はさぞや、と捨てがたうございますが、「しほるなよ月を袖の」といって「もしほたれてもすまのうら人」という心詞の妖艶の体は、殊更によろしくございますでしょうか。「とふ人あらば」という本歌の心にもお譲りして、（右歌を）勝と申すべきでしょうか。

〈五十五番〉

五十五番

左 勝

通忠

難波^{統後撰}かたあまのたくなはなかし^②とも思ひそはてぬ秋の夜の月

右

実雄

昔よりきくや明石の浦の名も空にしらるゝ秋のよの月

左、あふ人からの秋の夜、あまのたくなはにひきなされ
てよろしく侍にこそ、右、明石のうらの名此程
おほくめなれ侍をもちて負侍へし、

【校異】

イ 勝—ナシ（書） □ 通忠—権大納言通忠（書・内・支・聚・群） ハ 統後撰—ナシ（書・内・支・群）、統後撰、秋中（聚）
ニ 思ひそ—思ひも（群） ホ 実雄—権大納言実雄（書・内・支・聚・群） ヘ 名も—浪（内・支・聚・群） ト 侍にこそ—侍
るに（内・群）、侍る（支）、侍るにや（聚） チ 此—こそ（書）、
この（内・支・聚・群） リ おほく—ナシ（支） ヌ めなれ—
めされて（内・聚）、ためされて（支）、めなれて（群） ル もち
て—もて（群） ヲ 侍へし—侍れかし（書）

【他書所伝】

〈左歌〉

『統後撰和歌集』秋歌中・三五六・「十首歌合に、海辺月」・右近大

将通忠

なにはがたあまのたくなはながしともおもひぞはてぬ秋の夜の月

『歌枕名寄』難波篇・三六二四・「統後六」・右大将通忠

なにはがたあまのたくなはながしとも思ひぞはてぬ秋の夜の月

『題林愚抄』秋部三・四一四九・「同（統後撰）」・右大将通忠

なにはがたあまのたくなはながしとも思ひぞはてぬ秋のよの月

〈右歌〉ナシ

【本歌】

〈左歌〉『古今和歌集』恋三・六三六・「題しらず」・躬恒

ながしとも思ひぞはてぬ昔より逢ふ人からの秋のよなれば

【語釈】

①難波かた―撰津国の歌枕。「わすれじな難波の秋のよはのそらこと浦にすむ月はみるとも」(『新古今和歌集』秋上・四〇〇・「八月十五夜和歌所歌合に、海辺秋月といふことを」・宜秋門院丹後)。

②あまのたくなは―海人が潜水する際に、腰に結びつける档縄。「档縄」は、命綱を意味するとも言う。ここでは、「ながし」を導く序として用いられている。「伊勢の海にはへてもあまるたくなはの長き心は我ぞまさされる」(『後撰和歌集』恋一・五七九・「心みじかきやうにきこゆる人なりといひければ」・読人不知)。

③なかしとも―「長し」は、档縄が長い、の意と、秋の夜が長い、の意を掛ける。

④明石の浦の名も―「明石の浦」は、播磨国の歌枕。地名は、月の名所であることに由来する。「名」には、名声・評判の意もある。「秋のよの月ゆゑえたる浦の名を雲にあらしのつげて過ぎぬる」(『最勝四天王院和歌』明石浦・一五二・慈円)。「明石がた月にみえ行く浦の名を秋とふ人や空にしるらん」(『建保名所百首』明石浦・五八六・範宗)。「かかりけるあきの今夜の月よりやうらをあかしの名にさだめけむ」(『名所月合』二二番右・四四・為家)。

⑤空にしらるゝ―空にはつきりと分かる、の意。「るる」は自発の助動詞。「これやこのあかしのうらととはずともそらにしらるる月のかげかな」(『有房集』一九七「たかまつのみやのうたあはせに、ところによりて月あかしといふことを」)。

⑥ひきなされて―「ひきなす」は、意識的に引きつける、の意。本歌は、長いと言われる秋の夜も、逢う人次第で、長くも短くも感じられる、という恋歌。通忠歌では、難波潟で秋の夜の月を眺めていると、夜が長いと思ひ定めることはない、と詠じられている。

⑦明石のうらの名此程おほくめなれ侍―④に掲げた例のほか、『院御歌合』では、他に、五十八番左(為経)・六十五番左(越前)が、「明石」の「月」を詠じる。為経歌について、為家は、「さきに申侍りつる明石の浦此ほと繁昌し侍にや」と評している。

【通釈】

五十五番

左(歌) 勝

(源) 通忠

海人の档縄が長いように、秋の夜を長いともすつかり思い込むわけにもいかないな。難波潟で、(今宵の美しい)秋の夜の月を眺めていると、(思わぬうちに早く時間が過ぎて)。

右(歌)

(藤原) 実雄

昔から(音に)聞いている明石の浦の名も、秋の夜の月によって、空にはつきりと分かることだ。

【判詞】左(の歌)は、「あふ人からの秋の夜」が、「あまのたくなは」に意識的に引きつけられた趣向が良いように思われます。右(の歌)は、「明石のうらの名」に注目して詠んだ歌が、この頃多く目慣れていますので、負けとするのがよろしいでしょう。

〈五十六番〉

五十六番

左

權大^イ 定雅

①わたの原空もひとつに見わたせはうつらぬ月に波そかゝれる

右 勝

公相

を^カして^ルるや難波の空の夕なきにあしの末はを^ト出る月影

左、下句おろかなる心まとひて、わきまへ侍らす、

海より出て浪に入、よひのま、暁かたなどのことに

侍にや、さなくて^リはうつらぬ月にかゝる波思よるへき

事ともおほえ侍らす、右、させるとか侍らねは、

やすきにつきて以右為勝、

【校異】

イ 權大——權大納言(書・内・支・聚・群) □ うつらぬ——う

らぬ(書・内・支・聚・群) ハ 勝——ナシ(書) ニ 公相——權

大納言公相(書・内・支・聚・群) ホ 空——うら(書・内・支・

聚・群) ヘ まとひて——まよひて(内・支・聚・群) ト 侍ら

す——み侍らす(書) チ 海——川(支) リ さなくては——さなら

ては(書・内・支・聚・群) ヌ おほえ——思(内・支・聚・群)

ル 侍らねは——侍らぬ(内・支・聚・群) ヲ やすき——さすか(内

・支・群)、ナシ(聚)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『新拾遺和歌集』秋歌上・三九六・「宝治元年十首歌合に、海辺月」

・冷泉前太政大臣

おして^ルるや難波のうらの夕なきに蘆の末葉を出づる月影

『題林愚抄』秋部三・海辺月・四一五六・「同〔新拾〕」・冷泉前太政大臣

大臣

おして^ルるやなにはの浦の夕なきに蘆の末ばをいづる月影

【語釈】

①わたの原空もひとつに見わたせは——海と空とがひとつになつて見

える情景を指す。月がともに詠み込まれた例には、「わたのはらしほ

ぢはそらとひとつにてくものなみよりいづる月かげ」(『頼輔集』三

一・「おなじ家(右大臣家)の会、うみのよの月」、「おほ空とひと

つにすめる水うみの波路よりこそ月は出でけれ」(『三井寺新羅社歌

合』湖上月・四五・信親)などがある。

②うつらぬ月——諸本「うつらぬ月」とあり、永青文庫本の異本注記

に合致する本文はみられない。判詞後半部の「うつらぬ月」の部分

には異同がみられないことから、諸本に従うべきか。但し判詞で

も指摘されるように、海面に映らない月に波がかかるという情景は

想起しにくい。「うつらぬ」にはあるいは「移らぬ」の意味の層があ

り、静止した状態の月を詠んだとも考えられるが、判然としない。こうしたあいまいな表現が、判者為家の非難するところとなったか。

③難波の空—「空」は、諸本に従い「うら」とあるべきか。永青文庫本の親本までの段階で、仮名表記「そ」と「う」の字体類似による誤写が生じたと考えられる。

④うつらぬ月にかゝる波思よるへき事とおほえ侍らす—一般的に、「あきの海にうつれる月を立ちかへり浪はあらへど色もかはらず」

『後撰和歌集』秋中・三三二・清原深養父、「月に浪かかるをりまたありきやとふけぬの浦のあまにとはばや」『増基法師集』六・「月の海のおもにやどれるを、浪のしきりあらふを見て」などのように海面に映った月に波がかかるという情景を詠むことが多い点を為家は念頭においているか。

【通釈】

五十六番

左(歌)

権大納言(源) 定雅

大海原も空もひとつになった様子を見渡すと、うつらない月に波がかかっていることだ。

右(歌) 勝

(西園寺) 公相

難波の浦が夕風を迎えた今、蘆の葉の先あたりからのぼってくる月であることよ。

〔判詞〕左(歌の)下句は(私の)愚かな心が困惑して、歌意を理解できません。(月が)海面よりのぼって(それに波がかかり)波間

に入る(ように見える)、宵の間や明け方などの情景を詠んだのでし
ようか。そうでなくてはうつらない月に波がかかる情景は考えつく
とは思われません。右(歌)は取り立てて欠点はございませんので、
あつさりとしているという点により右(歌)を勝とします。

〈五十七番〉

五十七番

左

権大^イ 公基^ロ 公もと 古本

秋の夜^ハの月^イにそみかく玉^ニくしけ^③ふたみのうら^④によする白波

右 勝

為教^ハ 朝日^イ

鏡^ニみぬめの浦^トは名^チのみしておなし影^ニなる秋の夜の月
月にそみかく玉匣^ニふたみの浦、そのゆへ侍^ニに、ます
かみみぬめのうらは名のみしておなしかけなると
思^⑦より侍^ニは、いさゝかめつらしく侍^ニにや、玉匣^ニより
も見^ル所侍^ルる、ますかみ^ニに心^ニうつり侍^ルぬる、ひかめ
にこそ侍^ラらめ、

【校異】

イ 権大—権大納言(書・内・支・聚・群) ロ 公もと 古本—
ナシ(書・内・支) ハ の^ハ—は(書・内・支・聚・群) ニ 勝

―ナシ(書) ホ 為教朝臣(書・内・支・聚・群)

へ 続後撰―ナシ(書・内・支・群)、続後撰、秋中(聚) ト は

一の(内・支) チ 名のみ―なこり(支) リ に―にや(聚)

又 よりも―より(支) ル 侍る―ナシ(内・支・聚・群)

ヲ に心―心に(支) ワ 侍ぬる―ぬる(内・支)、ぬるか(支)、

侍るめる(聚)、ぬ(群) カ ひかめ―目(支)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『続後撰和歌集』秋歌中・三四九・「十首歌合に、海辺月といへる心をよませ給うける」・藤原為教朝臣

ますかがみみぬめのうらは名のみしておなじかげなる秋のよの月

『歌枕名寄』三犬女浦・四三五八・「続後六 月」・右兵衛督為教

ますかがみみぬめのうらは名のみしておなじかげなる秋のよの月

【語釈】

①月にそみかく―この詞つづきでの例は少なく、先行例としては「あきらけきみかげになるる池水を月にぞみがくよろづよの秋」(『建保六年八月中殿御会』二五・信実)がみえる。当該歌とほぼ同時代の例としては、「白妙になみのよせくる玉つ島月にぞみがくおきつ塩風」

(『建長三年九月十三夜影供歌合』百二十五番左・名所月・二四九・雅言)、「くもりなくこほりてこゆる冬の夜の月にぞみがくいけのかがみは」(『実材母集』五九四)等があげられる。「みかく」と「玉」

は縁語。

②玉くしけ―化粧道具を入れる櫛笥の美称。「恋ひつつも今日はあらめど玉くしげ明けなむ明日をいかに暮らさむ」(巻第十二・二八八四・「正に心緒を述ぶる」)等、『万葉集』より用例がみえる。当該歌では、四句目の二見の浦にかかる枕詞として機能している。

③ふたみのうら―二見の浦。播磨国と伊勢国それぞれに該当する地があり、作例も両方確認される。櫛笥の縁語「蓋」の連想から二見浦と詠み込まれる例の早いものとして、「ゆふづくよおぼつかなきを玉匣ふたみの浦は曙てこそ見め」(『古今和歌集』羈旅歌・四一七・「詞書省略」・兼輔)がみえる。「玉匣ふたみのうらの秋の月あけまくつらきあたら夜の空」(『拾遺愚草』院五十首建仁元年・秋・一八〇一)、「秋の月ひかりぞまさる玉くしげふたみのうらの明方の空」(『正治後度百首』暁・六二・後鳥羽院)等は、兼輔詠の影響を受けた例。

④白波―白くたつ波の意。「あけてみるかひもあるかなたまくしげふたみのうらによするしらなみ」(『伊勢大輔集』一五六・「かただがふ、とて人のもとにいきたりしに、いへあるじのちごに丁子をいれてとらせたりしかば、おやのおこせたりし」)、「月影のふたみのうらにかたづけかがみをあらふおきつ白浪」(『出観集』秋・四二六・「暁望浦月」)等の先行例がみえる。

⑤ます鏡―「まさかがみ」等とも。よく澄んではつきり映る鏡が原義。「見る」「影」などに掛かる枕詞としてよく用いられる。

⑥みぬめの浦―敏馬の浦。摂津国の歌枕。「ます鏡」は「みぬめ」の

枕詞として機能しており、先行例としては「まそ鏡敏馬の浦は百舟の過ぎて行くべき浜ならなくに」(『万葉集』巻第六・雑歌・一〇六六・「反歌二首」)等、早くから認められる。当該歌では「見ぬ」の意を掛けており、「わが恋は君をみぬめのうらによるなみのしたくさかわくまぞなき」(『林下集』二〇八・「恋廿首よみしに」)、「よそにだにみぬめの浦にすむあまは袖にたまらぬ玉やひろはん」(『壬二集』院百首・恋・八七二)、「わすれ貝それも思ひの種たえて人をみぬめの浦みてぞぬる」(『拾遺愚草』内大臣家百首・恋廿五首・一一七二)、「秋の鹿わが身こす浪ふく風につまをみぬめのうらみてぞ鳴く」(同・権大納言家三十首・二〇六八・「海辺鹿」)、「ますかがみみぬめの浦の名もしらずたがおもかげにかけてこふらむ」(『光明峰寺撰政家歌合』廿番・寄衣恋・三九・親季)等、恋の情趣で詠み込まれる先行例が多く、為家判「いさゝかめつらしく侍にや」はその点を指摘したもの。月との取り合わせでは「ます鏡みぬめの浦は波のうへにかすめる月の名にこそ有りけれ」(『洞院撰政家百首』春・霞・四三・知家)が先行例として確認される。

⑦思より―思い寄る。思いつく意。後例だが、九条基家は、宗尊親王詠「雪はたがことのはなればふるままにたのめぬ人の猶またらん」(『宗尊親王三百首』冬・一八九)を「此風情、凡夫不思寄歎」と評している。

【通釈】

五十七番

左(歌)

権大納言(西園寺)公基

秋の夜の月にこそ(照らされて)まさに光り輝いている、二見浦に寄せる白波は…

右(歌) 勝

(藤原)為教朝臣

敏馬の浦(「見ぬめの浦」とは名ばかりで他と同じぐらい澄んで明るい光である秋の夜の月よ…

「判詞」「月にそみかく玉匣ふた見の浦」という表現は、その由緒がありますが、「ますかゝ見みぬめのうらは名のみしておなしかけなると(いう表現に)思いあたりますのは、やや珍しいでしょうか。玉匣(の歌)よりも見所がありました、ますかゝみ(の歌)に心が移り(映り)ました。間違った見方でしょうか。

〈五十八番〉

五十八番

左

イ中一 為経

おほかたにくもりなき夜の月なればさそな明石の浦もさやけき

右 勝

信実朝臣

いさこよひなたの海士の子しるへせよしほちの月を漕出てみん

左くもりなき夜の月、その心すてかたく侍に、さきに

申侍りつる明石の浦、此ほと繁昌し侍にや、右

いさこよひなたの海士の子なといひしりて、さる姿と
 みえ侍れば、又勝侍へし、

【校異】

イ 中——中納言(書・内・支・聚・群) □ おほかたに—お
 ほかた(内) ハ さそな—さこそ(内・支・聚・群) ニ 勝—ナ
 シ(書) ホ いさこよひ—いさよひの(支) ヘ さきに—さき(内
 ・聚) ト 侍りつる—侍る(書・支) チ 此ほと—ことに(内・
 支・聚・群) リ 繁昌し—繁昌して(聚) ヌ いさこよひ—い
 さよひ(支) ル 又—ナシ(内・支・聚・群) ヲ 侍—たる(聚)
 【他書所伝】

〔左歌〕ナシ

〔右歌〕

『夫木和歌抄』秋部四・「宝治十首歌合、海辺月」・五六五六・信実
 朝臣

いさこよひなだのあまのこしるべせよ塩路の月をこぎ出でてみん

【語釈】

①くもりなき夜の月なれば—「いつよりもくもりなきよの月なれば
 みる人さへにいりがたきかな」(『後拾遺和歌集』雜一・八四一・「永
 承四年内裏歌合に月をよめる」・江侍従) は二句が一致する先行例。
 「神もみよくもりなきよのかがみ山いのるかひある月ぞさやけき」
 (『続後撰和歌集』賀歌・一三六三・「九月十三夜十首歌合に、名所

月・成茂)、「よもの海風しづかなる浪のうへにくもりなきよの月を
 見るかな」(同・一三六一・「寄月祝」・良経)は「くもりなきよの(月)」
 又「くもりなきよの月」が一致する先例。「よ」には「夜」「世」「代」
 が掛けられていて、「くもりなき夜の月」に太平の御代の意が含蓄さ
 れている。

②なたの海士の子—下句の「しほちの月を漕出してみん」と同じく、
 先行例を見ない。

③さきに申侍りつる明石の浦—本歌合五十五番右歌「昔よりきくや
 明石の浦の名も空にしらるゝ秋のよの月」(実雄)について、為家は
 「右明石のうらの名、此程おほくめなれ侍をもちて、負侍へし」と
 評した。

④此ほと繁昌し侍にや—ここでの「繁昌し」は、「評判になつてゐる」
 「ひっぱりだこになつてゐる」の意。『撰政家月十首歌合』は建治元
 年(一二七五)に開催されたが、その二十三番右(勝)の歌は「く
 るるよはあさぢがにはの月ならでまたまつむしよたれたのむらん」
 (阿仏尼)で、これについて判者の真観(藤原光俊)は「右は人を
 ぞたのむくるる夜ごとに、と申す歌近年繁昌したる本歌にて、これ
 をへつらはれたるにやとぞみたまふれど、庭もたしかに侍れば、ま
 さり侍るべくや」と評している。

⑤いひしりて—詠みかたを十分に心得ている、言語表現を知悉して
 いるの意。俊成も「すがたもいひしりてきこゆれば」(『中宮亮重家
 朝臣家歌合』)などと評している。

【通釈】

五十八番

総じて曇りない夜の月なので、(その月の光のもと) さぞかし明石の浦もさやかなことであろうよ。

右 (歌) 勝

(藤原) 信実朝臣

さあ今夜、灘の海士の子(私を)案内してくれよ。塩路の月を(舟を)漕ぎ出して見よう。

【判詞】左(歌)の、「曇りなき夜の月」は、その趣が捨てがとうございですが、(一方)先に申しました(ように)「明石の浦」は(最近)殊にひっぱりだこ(の、新鮮味のない表現)ではないでしょう。右(歌)は「いさこよひなたのあまの子」など(と言って)表現を十分に心得て、一つの(典型的な)姿と思われまますので、勝ちが適当でございましょう。

〈五十九番〉

五十九番

左 勝

名にしほふなかるの浦の秋のよにゆくともみえてすめる月哉

右

韋雅光

藤通成

見わたせは野嶋かさきの波まより山のはならて出る月影

野嶋かさき、ふたつなき物と思しをみなそこにと

いへる古今下句たかふ所なく見え侍うへに、なかるの

浦、夜雲収盡おもかけまておもひやらるゝかた侍れば、

以左為勝、

【校異】

イ 勝―ナシ(書) 口 右衛門督(書・内・支・聚・群)

ハ に―の(支) ニ 右近―右近中将(書・内・聚・群)、右近

衛中将(支) ホ 古今下句―古今哥下句(書)、古今の哥下句(内

・支・聚・群) ヘ 夜雲収盡―夜雲盡(群) ト 以左為勝―左

為勝(支)

【他所書伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①名にしほふなかるの浦―「長居の浦」は摂津国の歌枕。現在の大阪市住吉区辺りで、「住吉」とともに詠まれる例が多い。「すみよしとあまはつぐともながるすな人忘草おふといふなり」(『古今和歌集』雑上・九一七・「あひしれりける人の住吉にまうでけるにのみてつかはしける」・忠岑)は、『新撰和歌』『古今和歌六帖』『歌枕名寄』『新撰和歌』『古今和歌六帖』は第二句「あまはいふとも」等に採られる有名な歌。

② ずめる月哉—「澄む」と「住む」を掛ける。澄んだ月が長居の浦に長く留まる（＝「長居」「住む」）様子を詠む。類想歌に「秋の夜はながるのうらにとまりしてのどかにてらすありあけの月」（『永縁奈良房歌合』七番左・四一・上総君）がある。

③ 野嶋かさき—淡路国の歌枕。「月」を詠んだ先行例には「こととはむ野島がさきのあま衣浪と月とにいかがしをるる」（『新古今和歌集』秋歌上・四〇二・「題しらず」・七条院大納言）等がある。

④ 波まより山のはならて出る月影—「波間」から「月」が「出る」様子を詠んだ先行例に「しがのうらやとほざかり行く浪間よりこほりて出づるあり明の月」（『新古今和歌集』冬歌・六三九・「摂政太政大臣家歌合に、湖上冬月」・家隆）等がある。

⑤ 古今下句たかふ所なく—「ふたつなき物と思ひしをみなそこに山のはならでいづる月かげ」（『古今和歌集』雑上・八八一・「池に月の見えけるをよめる」・貫之）の下句と一致することをいう。

⑥ 夜雲収盡おもかけまておもひやらるゝかた侍れは—為家は左歌について、『和漢朗詠集』「秋水漲来船去速 夜雲収尽月行遅」（秋・月・二五三・野展郢 ※正しくは「野展」）の「月行遅」をふまえて解釈する。

【通釈】

五十九番

左（歌） 勝

右衛門（督源） 通成

有名な長居の浦の秋の夜に、西に行くとも見えないで（ずっと空

に）住んでいる、澄んだ月であるよ

右（歌）

右近（衛中将源） 雅光

見渡してみれば、山の端ではなく、野嶋崎の波間から出る月の光であるよ。

「判詞」「野嶋かさき」（の歌は）、「ふたつなき物と思しをみなそこに」といいました『古今和歌集』歌の下句と違う所がなく見えます上に、「なかるの浦」（の歌は）、「夜雲収盡」の情趣までも想像される所がありますので、左をもって勝とする。

〈六十番〉

六十番

左

兵部 有教

① わたの原八重の塩路に雲消て月すみのほるすまのうら風
右

弁内侍

④ もしほくむ夜はのさ衣あはれにそあまのしわさは月やとしける
左、けしき思やられて、みたる心ちし侍へし、右、さき
にありかたくみえ侍りつるあまのしわさ、おなしこと
はに優してこれまてかたひき侍ぬる、偏頗にや侍らん、

【校異】

イ 兵部—有教—兵部卿有教 (書・内・支・聚・群) □ 消て—さ

えて (支) ハ 右—右 勝 (内・支・聚・群) ニ けしき—景氣

(書・内・支・聚・群) ホ し—ナシ (内・支・聚・群)

へ 侍りつる—侍へる (書) ト ことはに—ことみに (支)、こ

と (群) チ 優して—優にして (内・支・聚)、優美にして (群)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①わたの原八重の塩路に—「わたの原」は、大海原、広々とした海、の意。「八重の塩路」も、遠く隔たった海路を意味する。「わたのはらやへの塩路をみわたせば浮きたる雲につづくしら波」(『宝治百首』 雑・「海眺望」・三八八五・公相)。

②月すみのぼる—月が冴え冴えと空にのぼる、の意。「嵐吹く有明の空に雲きえて月すみのぼるたかまどのやま」(『長明集』三三三・「月」)。

③すまのうら風—須磨の浦は、摂津国の歌枕。浦を吹く風が雲を吹き消す。「秋の月浪ちもとほくかげさえて心さへにもすまのうらかぜ」(『後鳥羽院御集』浦月・一四八九)。

④もしほくむ—海水を汲む、の意。「もしほくむ袖の月かげおのづからよそにあかさぬすまのうら人」(『新古今和歌集』雑下・一五五七

・「(和歌所歌合に、海辺月といふ事を)」・定家)。

⑤夜はのさ衣—ここでは、海人が潮を汲んで潮に濡れた衣、の意。「すまのうらしほくむあまの衣手にぬれてぞやどる在明の月」(『建保名所百首』須磨浦・三八八・家衡)。

⑥あまのしわさ—海人の行い。海人の仕事。「よさの海のあまのしわざ」とみしものをさもわがやくとたるるしほかな」(『和泉式部集』五六三)。

⑦けしき思やられて、みたる心ちし侍へし—「けしき」については、五十四番判詞参照。「みたる心ちす」は、眼前で見るかのような趣がある、の意。

⑧さきにありかたくみえ侍りつるあまのしわさ—「あまのしわざ」は、本歌合・五十三番左・女房(後嵯峨院)歌に詠み込まれ、為家は、判詞で「めつらしくありかたきあまのしわさと見たまへ侍れ」と評している。

⑨おなしことはに優してこれまてかたひき侍ぬる—後嵯峨院の歌と同じ詞を用いていることで優遇して、この歌までも依怙最厚してしまします、の意。「優す」は、相応に待遇する、の意。「亡き跡にも、さしも道に心ざし深かりし者なればとて、優して十八首を入れられたりければ」(『無名抄』「道因歌に志深事」岩波大系本)。

【通釈】

六十番

左(歌) 勝

(源) 有教

広々とした海の、遠く海路の向こうに雲が消え、月が冴え冴えとのぼる須磨の浦には風が吹き渡る。

右(歌)

弁内侍

海水を汲む海人の、夜の衣は(いかにも) 気の毒に見えるが、あわれにも、海人の行いは、その衣に、月を宿したのだ。

〔判詞〕左(の歌)は、その情景が思いやられて、眼前で見ているかのような心持がするようです。右(の歌)は、前の番いで、素晴らしく思われた「あまのしわざ」と、同じ詞であることで優遇してしまい、この歌まで依怙最厚してしまいましたのは、不公平でしょうが。

〈六十一番〉

六十一番

左 持

師 継

漕出^ハしまつらの海^ナをなかめつゝ月^ナになれぬる秋^ニのさよひめ

右

雅忠朝臣

白妙^ニの袖^ニの浦^ニによる波^ノの数^サへ見^テえて月^ノそさやけき

秋^ノのさよひめはめつらしく、数^サへ見^テえてはめなれて侍^レれと、左^ハはちからをいれ、右^ハはやすくいひくたして、やうかはりたる持^トと見え侍^ニにや、

【校異】

イ 持—ナシ(書) 口 師継—右近中将師継(書・内・聚・群)、

右近衛中将師継(支) ハ 漕出し—すきいてし(支) ニ 海—

浦(内・聚)、海^沖(群) ホ 月そ—月に(内・支)、月そ^に(聚)

へ さよひめは—さよひめ(内・支・聚・群) ト いひくたして

—いひ出して(内・支・聚)、いひなして(群) チ やう—ナシ(内

・聚) リ かはりたる持と—かはりたる躰侍と(支)、かはりたる

躰、持と(群)

【他書所伝】

〈左歌〉

『夫木和歌抄』雑部五・海・一〇三五五・「まつらのうみ、筑前」

建長元年歌合」・花山院内大臣

漕出でて松浦の海をながめつつ月になれぬる秋のさ夜姫

〈右歌〉

『源承和歌口伝』一一一・雅忠卿

白妙の袖のうらによる浪の数さへみえて月ぞさやけき

【語釈】

①まつらの海—肥前国の歌枕。任那へ行く大伴佐提比古の船を高山から領巾を振って見送った松浦佐用姫の伝説がある(『万葉集』巻第五、『肥前国風土記』)。

②秋のさよひめ—判詞で「秋のさよひめはめつらしく」と指摘されるように、「さよひめ」のひれふる袖もややすし秋をまつらの山の下風

『建保名所百首』夏十首・松浦山 筑前国・三五二・家衡) など夏の歌として詠まれる例が多い。

③袖しの浦―出雲国の歌枕 (『八雲御抄』卷五)。駿河国・伊勢国とする説もある。「からころもそでしのうらのうつせがひむなしきこひにとしのへぬらん」(『後拾遺和歌集』恋一・六六〇・藤原国房)、「から衣袖しのうらの月影はむかしかけける玉にやあるらん」(『清輔集』一四一・「月三十五首のなかに」)、「浪かくる袖しのうらの秋の月やどかるままにまづやしぼらん」(『拾遺愚草』下・二三六一・「仁和寺宮より忍びてめされし秋題十首、承久二年八月) 秋旅」などの例がある。

④数さへ見えて―「白雲にはねうちかはしとぶかりのかずさへ見ゆる秋のよの月」(『古今和歌集』秋歌上・一九一・読人不知) に拠る表現。

【通釈】

六十一番

左(歌) 持

(藤原) 師繼

(佐提比古が舟を) 漕ぎ出した松浦の海をながめつつ、月にも馴れ親しんだ様子の秋の佐用姫であることよ。

右(歌)

(源) 雅忠朝臣

袖師の浦に寄せる波の数までが見えるほど、月がさやかであるよ。

【判詞】(左歌の)「秋の佐用姫」は珍しい表現であり、(右歌の)「数さへ見えて」はありふれた表現でございませうけれど、左(歌)は力

が入った様子で詠まれており、(また)右(歌)はあつさりと言いで下っていて、それぞれ様子が変わった持とみえますことでしょうか。

〈六十二番〉

六十二番

左 勝 沙弥蓮性

①うな原やなこの塩干の真砂ちいきよき月夜のさもそさやけき

右 下野

ふけゆけは浦こく舟の音までもさすみまさる夜はの月哉

漕船のをとまてすみまさる心、きくなれて侍にや、なこの塩干のまさこち、まことにきよけに侍れは、

以左為勝、

【校異】

イ 勝―ナシ(書) □ そーや(群) ハ ふけ―ふかく(内)、

深(支) ニ まさる―わたる(支・聚・群) ホ 哉―かな(群)

へ すみまさる―まさる(内)、すみわたる(聚) ト きよけ―よ

け(内・支) チ 侍れは―みえ侍れは(書・内・支・聚・群)

リ 以左―左(支)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 　〈右歌〉ナシ

【語釈】

①うな原や—海の広々とした様への感嘆を表す。「うなばらやおきつしらなみたちくらしやそしまめぐりやすからふね」(『千類集』九〇・「心細十首」)等が早い例。なお、「うな原や」を初句に置く例は、勅撰集では「うなばらやたゆたふ浪のはてもなしいづくなるらんくものをちかた」(『続古今和歌集』雑歌下・一七二六・「宝治二年百首歌たてまつりけるに、海眺望を」・実氏)までみえない。

②なこの塩干—「なこ」は、奈呉(名児)の海。「奈呉の海人の釣する舟は今こそば舟棚打ちてあへて漕ぎ出め」(巻第十七・三九五六・「大目秦忌寸八千島の館に宴する歌一首」)、「奈呉の海の沖つ白波しくしくに思ほえむかも立ち別れなば」(巻第十七・三九八九・「大目秦忌寸八千島の館にして守大伴宿祢家持に餞する宴の歌二首」)、「東の風いたく吹くらし奈呉の海人の釣する小舟漕ぎ隠る見ゆ」(巻第十七・四〇一七・家持)等は、越中の歌枕。一方『万葉集』には、「住吉の名児の浜辺に馬立てて玉拾ひしく常忘らえず」(巻第七・雑歌・一一五三)ともみえ、摂津の国にも同名の海辺があったことが伺える。塩干は、引き潮の意で、「奈呉の海に潮のはや干ばあさりしに出でむと鶴は今ぞ鳴くなる」(『万葉集』巻第十八・四〇三四・(詞書省略)、「うなばらやなごのしほひのはま千鳥なくねもさえてうら風ぞ吹く」(『新和歌集』冬歌・三三一・「海辺千鳥」)・忠茂)、「なこの海しほひ塩見つ磯の石となれるが君が見えかくれする」(『頼政集』

四三五・「時時見恋」)、「ひとりぬるなごのしほひのいそまくら浪たかくみゆたごのうらふぢ」(『出観集』一二九・「旅宿藤花」)等、用例が散見する。

③真砂ちに—引き潮であらわれた真砂に月光が照り映える趣向。後例だが、「霰ちるなごのはまべのまさごぢにいづれをもとの玉とひろはん」(『建長八年百首歌合』五百八十二番右・一一六四・源具氏)とみえる。

④浦こく舟の音までもさすみまさる夜はの月—月の輝きと静寂の中で物音という視覚と聴覚との取り合わせ。「月影にふえのねいたくすみぬなりまだねぬ秋のよやふけぬらむ」(『惠慶法師集』二四・「月夜に、ふえふきて、をとこゆく」)、「あき風のふけひのうらに空はれて波のおとまですめる月かな」(『隆信集』二〇一・「海辺秋月」)、「てる月の光と共にながれ来ておとさへすめる山川の水」(『慈鎮和尚自歌合』大比叡十五番・七番左・一三)等は同様の趣向。類似歌として「難波がた蘆間を分けて漕ぐ舟の音さへすめる秋の夜の月」(『治承三十六人歌合』海上月・九七・寂念)、「玄玉和歌集』天地歌下・二〇七)があげられる。

【通釈】

六十二番

左(歌) 勝

沙弥蓮性

広々とした海よ、奈呉の(海辺の)引き潮にあらわれた真砂を敷いた路に清らかな月夜が本当にあざやかである。

右(歌)

下野

(夜が)更けていくと浦を漕ぎゆく舟の音までもいやまさに一層澄む夜半の月であるなあ…

〔判詞〕漕ぐ舟の音まで澄み勝る(という一首の)心は、聞き慣れていますでしょうか。なこの塩干の真砂路(という表現)は、本当に美しいですので、左歌を勝とする。

〈六十三番〉

六十三番

左

為氏 朝臣

長しとも月におほえぬ秋のよのなとかふけるの浦といふらん

右 勝

少将内侍

秋をへてよわたる海士のすて衣塩なれにける袖の月哉

左、なとかふけるのといへるほど、思ふ所ありけに
みえ侍を、月におほえぬといへるや、たゞことはに
侍らん、右、夜わたる海士のすて衣しほなれにける
袖の月は見所侍へきにや、右勝侍へし、

【校異】

イ 月に一月は(内・支) 口 よのよを(書・内・支・聚・群)

ハ 勝―ナシ(書) ニ ける―けり(支) ホ 月哉―月かけ(内)

・支・聚・群) ヘ なとか―など(内) ト と―など(書・内)

・支・聚・群) チ ほと―程と(支) リ 思ふ―ナシ(支)

又 と―など(内・支・聚・群) ル いへるや―いへるにや(支)

ヲ たゞことは―たゞ哥言葉(内) ワ 右―ナシ(書・内・支・

聚・群) カ 夜―世を(支・群) ヨ しほ―ナシ(内・支・聚

・群) タ 侍へし―侍へし(書・内・支・聚・群)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①ふけるの浦―和泉国の歌枕。「時つ風吹飯の浜に出で居つつ贖ふ命は妹がためこそ」(『万葉集』巻第十二・悲別歌・三二〇一)、「あまつ風ふけひの浦にゐるたづのなとか雲井にかへらざるべき」(『新古今和歌集』雑歌下・一七二三・「殿上はなれ侍りて、よみ侍りける」・清正)などの例がみえる。「夜が更ける」との掛詞の例としては、「しかのねをあはれときくにあきの夜のふけひのうらにちどりさへなく」(『国基集』一〇〇・「いづみのくにふけひのうらといふところ」に、まかりとどまりたりしに、よふけてやまのかたにはしかのこゑきこえ、なぎさにはちどりなきしかば)、「まぢかねてさよもふけひのうらかぜにたのめぬ浪のおとのみぞする」(『千載和歌集』恋歌四・八七九・「寄浦恋といへるこころをよめる」・二条院内侍参河)などがある。

②海士のすて衣塩なれにける―「すずか山いせをのあまのすて衣しほなれたりと人やみるらん」〔後撰和歌集〕恋三・七一八・「女のもとにきぬをぬぎおきて、とりにつかはすとて」・伊尹と類似した発想。

③たゞことは―歌語としてふさわしくない、俗な表現。「月があまりに美しいので、月に向かっていると時間が経つのを意識しない」という意を「月におぼえぬ」と縮約した点を指すか。これに類似した表現は「くもれかしながむるからにかなしきは月におぼゆる人の面影」〔新古今和歌集〕恋歌四・一二七〇・「題しらず」・八条院高倉、「草まくら都の秋をさそひきて月におぼゆるふるさとの空」〔後鳥羽院御集〕建仁元年三月内宮御百首・雑二十首・二八三）などにみられる。

【通釈】

六十三番

左（歌）

（藤原）為氏朝臣

（月が美しいので）長いとも月に向かっていると意識しない秋の夜なのに、どうして吹飯（夜が更ける）の浦というのだろうか。

右（歌） 勝

少将内侍

幾秋を経て、暮らしを立てている海人の脱ぎ捨てた衣の、潮でぐつしよりと濡れている袖に映った月（の美しさ）よ。

【判詞】左（歌の）、「なかふけるの」というあたりの表現は、思うところがあるように見えました。が、「月におぼえぬ」という表現は、

（歌語ではなく俗な）ただの言葉のようでございます。右（歌）の、「よわたる海士のすて衣塩なれにける袖の月」という表現は見所がございませうか。右が勝でございます。

〈六十四番〉

六十四番

左 勝

経朝朝臣

和哥のうらや昔にかへる波の上に光あまねき秋のよの月

右

沙弥禅信

里の海士のしほたれ衣ほしやらてさなからやとす秋の夜の月

右、上下かなひてよろしく侍に、左、わかぬ浦、昔

にかへるとをきて、光あまねき秋の夜の月といへる、

尤宜、賞翫可為勝、

【校異】

イ 勝―ナシ（書）、持（内・支・聚）

の浦や（聚） ハ かへる―ナシ（支） ニ をきて―をき（内・支

・聚・群） ホ 尤宜―尤是（書・内・支・聚・群）

（内・支・聚）

【他書所伝】

〈左歌〉

『雲葉和歌集』秋歌中・五六四・「仙洞にて十首歌合侍りしに、浦月」

・藤原経朝朝臣

和歌のうらやむかしにかへるなみのうへにひかりあまねき秋の夜の月

『続拾遺和歌集』賀歌・七四一・「宝治元年十首歌合に、海辺月」

正三位経朝

わかか浦やむかしにかへる浪の上にひかりあまねき秋の夜の月

『歌枕名寄』玉津島篇・八三三七・「続拾十」・正三位経朝

わかか浦やむかしにかへる波のうへにひかりあまねき秋の夜の月

〈右歌〉

『続後撰和歌集』秋歌中・三五〇・「十首歌合に、海辺月といへる

心をよませ給うける」・源俊平

すまのあまのしほたれ衣ほしやらでさながらやどす秋のよの月

『歌枕名寄』阪磨・四二五一・「続後六」・源俊平

須まのあまの塩たれ衣ほしやらでさながらやどす秋のよの月

【語釈】

①和歌のうら—紀伊国の歌枕。同地にある玉津島神社は、和歌の神として衣通姫を祀る。ここでは、和歌の道をも意味する。「ふくかぜものどけききみのよよのあとむかしにかへるわかのうらなみ」(『新古今竟宴和歌』一七・具親)。

②昔にかへる—古の聖代に立ち返る、の意。「よものうみむかしにか

へるなみのうへにはまびといまやみかりまつらん」(『続古今和歌集』雑中・一六七四・「建保四年人人に百首歌めしける次によませ給ひける」・道家)。

③光あまねき—光が遍く照らす。治世を言祝ぐ意を込める。「世をてらすあまねき空の光にも月をぞ千世のかげに頼まん」(『紫禁和歌集』一〇〇五・「同八月十五日夜今夜庚申於殿上人人詠歌出て、当座」・順徳院)。

④しほたれ衣—海人が潮を汲んで潮に濡れた衣。「須磨の海士の塩たれごろも打ちはへてきてはなどみぬなみの月影」(『最勝四天王院和歌』阪磨浦^{撰津}・一四一・後鳥羽院)。

⑤さなから—そのまま。「夏の夜は山のはいづる月影のさながらのこる在明のそら」(『宝治百首』夏月・一〇四九・公相)。

【通釈】

六十四番

左(歌) 勝

(藤原) 経朝朝臣

和歌の浦の、古の聖代に立ち返る波の上で、秋の夜の月が普く照らすことだ。

右(歌)

沙弥禅信

里の海人の潮垂れ衣をすつかり乾かしてしまふことができなくて、(美しい)秋の夜の月をそのまま宿していることだ。

【判詞】右(の歌)は、上句と下句がぴったりと合っていて悪くはありませんが、左(の歌)は、「和歌の浦」「昔に返る」と置いて、「光

あまねき秋の夜の月」というのは、いかにも良い表現で、賞賛して勝とすべきでしょう。

〈六十五番〉

六十五番

左 勝

越前

明石かた塩やく海士の煙たに①雲こそなけれ月のすむ夜は

右

前権大—為家

秋の夜の名たかのうらの塩風に影さしのほる月のさやけさ

左月のすむ夜はといへる程、こひねかふへきすかた

にあらす侍を、右おなし文字あまりにおほく侍

にや、歌合にはとかめたる事も侍れは、尤負侍へし、

【校異】

イ 勝—ナシ (書) 口 雲—くま (書)、今 (内・支・聚・群)

ハ 夜は—よ (支・聚・群) ニ 前権大—権大納言 (書・内・

支・聚・群) ホ すかたに—すかたには (内・支・聚・群)

へ あまり—あやまり (内) ト 事も—言葉に (内・聚)、事に (支

・群) チ 尤—右 (内・支・聚・群)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①雲こそなけれ—永青文庫本の「雲こそ」は孤例であって、書陵部本は「くまこそ」、その他の諸本は「今こそ」となっている。一首の意味から判断して「くま」が適当と思われるので、ここでは「くまこそ」を採用して通釈する。

②名たかのうら—紀伊国の歌枕。『五代集歌枕』『八雲御抄』は遠江とする。高名な、評判の、の意を掛けて用いられることが多い。「紫の名高の浦のなびき藻の心は妹に寄りにしものを」(『万葉集』巻第十一・二七八〇)はその一例。

③右おなし文字あまりにおほく侍にや、歌合にはとかめたる事も侍れは—『袋草紙』下巻に賀陽院七番歌合(寛治八年八月十九日判者経信卿)二番の筑前(左)と大江匡房(右)の番の、匡房歌(「しら雲とみゆるにしろしむよし野のよしの山の花ざかりかも」)について、筑前の陳状に「輔親が母に申しし事を幼少にて承りしかば、「同字三はいかがせむ。四以上あらん歌をば、公けの歌にはとり出さじ」と申ししに、右歌「し」の字四候ふに、持と定められたるが、口をしきなり」と云々」とある。文中の母は輔親の子伊勢大輔。この後に顕昭が匡房の歌を「シの字五、ノの字五なり」と訂正したことなどが記され、清輔は、同字が多くてもすぐれた歌は勝っているとして、具体例を列挙している。当該為家歌は「の」の字六。但し自作を負けとするための理由付けと考えればよからう(『袋草紙』の引用

〈左歌〉

『雲葉和歌集』秋歌中・五六四・「仙洞にて十首歌合侍りしに、浦月」
・藤原経朝朝臣

和歌のうらやむかしにかへるなみのうへにひかりあまねき秋の夜の月

『続拾遺和歌集』賀歌・七四一・「宝治元年十首歌合に、海辺月」
正三位経朝

わかの浦やむかしにかへる浪の上にひかりあまねき秋の夜の月

『歌枕名寄』玉津島篇・八三三七・「続拾十」・正三位経朝

わかのうらやむかしにかへる波のうへにひかりあまねき秋のよの月

〈右歌〉

『続後撰和歌集』秋歌中・三五〇・「十首歌合に、海辺月といへる心をやませ給うける」・源俊平

すまのあまのしほたれ衣ほしやらでさながらやどす秋のよの月

『歌枕名寄』阪磨・四二五一・「続後六」・源俊平

須まのあまの塩たれ衣ほしやらでさながらやどす秋のよの月

【語釈】

①和哥のうら—紀伊国の歌枕。同地にある玉津島神社は、和歌の神として衣通姫を祀る。ここでは、和歌の道をも意味する。「ふくかぜものどけききみのよよのあとむかしにかへるわかのうらなみ」(『新古今竟宴和歌』一七・具親)。

②昔にかへる—古の聖代に立ち返る、の意。「よものうみむかしにか

へるなみのうへにはまびといまやみかりまつらん」(『続古今和歌集』雑中・一六七四・「建保四年人人に百首歌めしける次によませ給ひける」・道家)。

③光あまねき—光が遍く照らす。治世を言祝ぐ意を込める。「世をてらすあまねき空の光にも月をぞ千世のかけに頼まん」(『紫禁和歌集』一〇〇五・「同八月十五日夜今夜庚申於殿上人詠歌出て、当座」・順徳院)。

④しほたれ衣—海人が潮を汲んで潮に濡れた衣。「須磨の海士の塩たれごろも打ちはへてきてはなどみぬなみの月影」(『最勝四天王院和歌』諏磨浦撰津・一四一・後鳥羽院)。

⑤さなから—そのまま。「夏の夜は山のはいづる月影のさながらのこる在明のそら」(『宝治百首』夏月・一〇四九・公相)。

【通釈】

六十四番
左(歌) 勝 (藤原) 経朝朝臣

和歌の浦の、古の聖代に立ち返る波の上で、秋の夜の月が普く照らすことだ。

右(歌)

里の海人の潮垂れ衣をすっかり乾かしてしまふことができなくて、(美しい)秋の夜の月をそのまま宿していることだ。

【判詞】

右(の歌)は、上句と下句がびったりと合っていて悪くはありませんが、左(の歌)は、「和歌の浦」「昔に返る」と置いて、「光

ありませんが、左(の歌)は、「和歌の浦」「昔に返る」と置いて、「光

あまねき秋の夜の月」というのは、いかにも良い表現で、賞賛して勝とすべきでしょう。

〈六十五番〉

六十五番

左 勝^イ

越前

明石かた塩やく海士の煙たに^①雲こそなけれ月のすむ夜は

右

前権大^フ為家

秋の夜の名たかのうらの塩風に影さしのほる月のさやけさ

左月のすむ夜はといへる程、こひねかふへきすかた

にあらす侍を、右おなし文字あまりにおほく侍

にや、歌合にはとかめたる事も侍れは、尤負侍へし、

【校異】

イ 勝―ナシ (書) 口 雲―くま (書)、今 (内・支・聚・群)

ハ 夜は―よ (支・聚・群) ニ 前権大―権大納言 (書・内・

支・聚・群) ホ すかたに―すかたには (内・支・聚・群)

ヘ あまり―あやまり (内) ト 事も―言葉に (内・聚)、事に (支

・群) チ 尤―右 (内・支・聚・群)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

① 雲こそなけれ―永青文庫本の「雲こそ」は孤例であつて、書陵部本は「くまこそ」、その他の諸本は「今こそ」となっている。一首の意味から判断して「くま」が適当と思われるので、ここでは「くまこそ」を採用して通釈する。

② 名たかのうら―紀伊国の歌枕。『五代集歌枕』『八雲御抄』は遠江とする。高名な、評判の、の意を掛けて用いられることが多い。「紫の名高の浦のなびき藻の心は妹に寄りにしものを」(『万葉集』巻第十一・二七八〇)はその一例。

③ 右おなし文字あまりにおほく侍にや、歌合にはとかめたる事も侍れは―『袋草紙』下巻に賀陽院七番歌合(寛治八年八月十九日判者経信卿)二番の筑前(左)と大江匡房(右)の番の、匡房歌(「しら雲とみゆるにしるしみよし野のよしの山の花ざかりかも」)について、筑前の陳状に「輔親が母に申しし事を幼少にて承りしかば、「同字三はいかがせむ。四以上あらん歌をば、公けの歌にはとり出さじ」と申ししに、右歌「し」の字四候ふに、持と定められたるが、口をしきなり」と云々とある。文中の母は輔親の子伊勢大輔。この後に顕昭が匡房の歌を「シの字五、ノの字五なり」と訂正したことなどが記され、清輔は、同字が多くてもすぐれた歌は勝っているとして、具体例を列挙している。当該為家歌は「の」の字六。但し自作を負けとするための理由付けと考えればよからう(『袋草紙』の引用

は新日本古典文学大系本によった。

【通釈】

六十五番

左(歌) 勝

越前

(ここ) 明石潟では、藻塩を焼く海士の煙さえも(光に照らされない) 隈がないことだ、(こんなにも) 月が澄む夜には。

右(歌)

(藤原) 為家

秋の夜の(風趣で名高い) 名高の浦の塩風(の中)に、光が(高く) さしのぼってゆく、月のさやけさといったら。

〔判詞〕左(歌)の「月のすむよは」といったところなどは、こいねがうべき姿ではございませんもの、右(歌)は、同じ文字が余りに多うございませぬのが、歌合に(出す歌として)は、咎められてゐることもございませぬので、どういっても負けでございませぬ。

宝治元年『院御歌合』注釈―「野外雪」題―

位藤 邦生 森下 要治
田野 慎二 山崎 真克
赤迫 照子 藤川 功和

はじめに

『表現技術研究』第4号(平成20年3月)に引き続き、宝治元年(一二二四七)『院御歌合』の注釈を試みる。今回は「野外雪」題十三番を取り上げる。各番担当者
と所屬を以下に示す。

六十六番―位藤邦生(長崎大学)、六十七番―藤川功和、六十八番―藤川、
六十九番―藤川、七十番―山崎真克(松江工業高等専門学校)、七十一番―
森下要治(広島文教女子大学)、七十二番―赤迫照子(広島大学図書館)、
七十三番―田野慎二(広島国際大学)、七十四番―赤迫、七十五番―山崎、
七十六番―赤迫、七十七番―田野、七十八番―位藤

凡例

一、底本は、永青文庫蔵本(「一〇七・三六・七」)(細川家永青文庫叢刊「第八巻所収」
を用いた。

一、校合した諸本と略号は、以下の通り。

(書)―書陵部蔵本(「五〇一・七四」)(『新編国歌大観』の底本)

(内)―内閣文庫蔵本「百三十番歌合(外題)」(「二〇一・二四七」)

(支)―九州大学支子文庫蔵本(「九一一・ホ・一」)

(聚)―書陵部蔵歌合類聚本(「大日本史料」第五篇二十四所収)
(群)―群書類従本(巻第二百所収)

一、注釈は、番全体の本文【校異】を示した後、【他書所伝】【本歌】【語釈】【通釈】
をあげた。

一、【語釈】の内、各詠作者並びに前号までに既出の語彙については、紙幅の関係
上これを略した。

一、表記や送り仮名の異同はこれを略し、見せけちや補入符号によって訂正のあ
る箇所は、訂正後の本文を採用した。

一、翻字本文には適宜読点を施し、字体は現行の活字体に改めた。

一、本文中、異同の存する箇所には、傍線及びイ、ロ、の如き符号を付し、語釈
を施した箇所には、本文右傍に①、②…の通し番号を付した。

一、底本で文意不通等が認められる場合、他本の本文に拠り通釈を施した場合が
ある。その際、本文【校異】【通釈】において他本に拠った箇所に網掛けを施
した。

一、引用本文は、原則として『新編国歌大観』に拠り、その他の引用文献は、適
宜底本を示した。なお、引用本文には、適宜、傍線、振り仮名等を付した。

一、『万葉集』については、本文、歌番号ともに埴書房刊『万葉集訳文篇』を用いた。

〔六十六番〕

六十六番^① 野外雪

左 勝

女房

いと、又かぎりも見えず武蔵野やあまぎる雪の明ほの、空

右 小宰相

みなせ山ちかき御狩のおもかけやかた野の雪に猶のこるらん

左歌、武蔵野の遠望申ならひたる事に侍

を、あまぎる雪の明ほの、とては、かきり見えぬ所、

いま一きは思やられ侍るへし、右歌、みなせ山

ちかきみかりは、よみふるさぬさまに侍るうへ、おなし

雪もおもかけのこるとて、いかはかりかほと、心わき

まへかたくこそ、右は心あさく、左は雪ふかく侍れ

は、むさし野はるかのかちこそ、

〔校異〕

イ 野外雪―ナシ(内) 口 勝―ナシ(書) ハ とては―とて(支)

ニ 右歌―右(内・支・聚・群) ホ みかりは―みかり(書・群)

ヘ のこるとて―のこるとては(書・支・群) ト むさし野―むさしの、(書)

チ はるかのかち―はるか殊勝に(内・支・群)、はるかに殊に勝(聚)

〔他書所伝〕

〔左歌〕

〔新拾遺和歌集〕冬歌・六六〇・「宝治元年十首歌合に 野外月」・後嵯峨院御製

いとど又かぎりもみえず武蔵野やあまぎる雪の曙の空

〔題林愚抄〕冬部・五九〇四・「(野外月) / 新拾」・後嵯峨院

いとど又かぎりも見えずむさしのやあまぎる雪のあけぼのの空

〔歌枕名寄〕武蔵国・五四四四・「宝治元年十首歌合」・後嵯峨院

いとど又かぎりも見えずむさしのやあまぎる雪のあけぼのの空

〔右歌〕

〔夫木和歌抄〕雑部四・九六六〇・「宝治十首歌合 野外月」・土御門院小宰相

みなせ山ちかきみかりのおもかけやかたのゆきになほのこるらん

〔本歌〕

〔左歌〕

〔古今和歌集〕冬歌・三三四・「(題しらず)」・(よみ人しらず)

梅花それとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれば

この歌は、ある人のいはく、柿本人磨が歌なり

〔拾遺和歌集〕春・二二・「(題しらず)」・柿本人磨

梅の花それとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれば

〔語釈〕

① 野外雪―この歌題は当該歌合が初出と思われる。

② いと、又―以前にもまして。「いとど又さそはぬ水にねをとめて氷にとづる池のうきくさ」〔統後撰和歌集〕冬歌・四九九・「百首歌たてまつりし時、池水」・後

鳥羽院下野)等の例がある。ここでの「百首」は「宝治百首」を指している。

③ かきりも見えず―「八十日ゆく浜のま砂ちはるばるとかぎりも見えずつもる白雪」〔統拾遺和歌集〕冬部・四五六・「白川殿七百首歌に、浜辺雪」・後嵯峨院

がある。貞永元年(一一三三)成立の歌合に「ながき夜のかぎりもみえずむさし

野ややまなき空にすめる月かけ」〔名所月歌合〕名所月・三十一番左・六一・隆祐

があり、この歌は光俊の歌と番えられて、持となっている。「武蔵野」と「かぎり

も見えず」の組み合わせはこの歌からの影響か。

④ 武蔵野―武蔵国の歌枕。広大な野としてよく詠まれた。「むさしのやゆけども秋

のはてぞなきいかなる風かすゑに吹くらむ」〔新古今和歌集〕秋歌上・六七八・「水

無瀬にて、十首歌たてまつりし時」・通光)等の例がある。

⑤ あまぎる雪―「あまぎる」は空が一面に曇る意で、「あまぎる空」「あまぎる月」

「あまぎる霞」等の例がある。「あまぎる雪」は前引の古今集・拾遺集の例があり、

「かきくもりあまぎる雪のふる里を積もらぬさきに問ふ人もがな」〔新古今和歌集〕

冬歌・六七八・「題しらず」・小侍従)「冬の夜はあまぎる雪にそらさえて雲の浪ち

にこぼる月かけ」(『新勅撰和歌集』冬歌・四〇二・千五百番歌合に「宜秋門院丹後」等の例がある。

⑥ちかき御狩―水無瀬山に程近い狩場(Ⅱ交野)での(貴人の)狩獵、が第一義であろうが、為家が「心わきまへかたくこそ」と言うように、表現意図が少々曖昧。「ちかき御狩のおもかけ」が「かた野の雪に猶のこるらん」の措辞から見れば、「ちかき」には近接した時間の意味も生まれよう。一案として、ここでの「ちかき御狩」は、後嵯峨院の祖父後鳥羽院が行った御狩、(それに反応して)読者が思い浮かべる「遠き御狩」は、「伊勢物語」に見られる惟喬親王が行った御狩、ととる解釈を提出したい(さらにその背後には、「万葉集」の輕皇子の安騎野の御狩が響いているかも知れない)。後鳥羽院も惟喬親王も水無瀬に別邸を持ち、交野での狩を楽しんでた。この歌は当該歌合の主催者後嵯峨院への小宰相のメールであったと考えたい。位藤邦生「宝治元年『院御歌合』と小宰相」(『国語と教育』第33号 平成20年11月)参照。

⑦雪ふかく―右の「心あさく」に対して、「心ふかく」を言うために「雪」の縁語仕立てにした修辭。

【通釈】

六十六番

左(歌) 勝

女房(後嵯峨院)

以前にも増して涯も見えないことだよ、武蔵野は、全体を曇らせて雪の降る、明け方の空の下。

右(歌)

(承明門院) 小宰相

みなせ山に程近い狩場で、最近の御狩のおもかけが、交野の雪に今でも残っていることだろうか。

【判詞】左歌、武蔵野の遠望は言い慣らされている面が(たしかに)ございませぬの、(この歌では)「あまさる雪の明ほの」と詠んでいて、(武蔵野の)涯も見えぬところが、(きつと)今ひときわ思いやられましよう。右歌は、「みなせ山ちかきみかり」とは、よみふるされていない上、同じ雪でも面影残ると言っている、さあどれほど(のもの)であろうかと、分別しがたく存じまして。右(歌)は心浅く、

左(歌)は(雪のように)心深くございませぬので、武蔵野の(歌の)はるか勝ち(で)ございませぬ。

【補遺】

『沙石集』巻第五末「(九)哀傷歌ノ事」の中に次の説話が見られる。

一 後鳥羽院ニ召ツカワレテ、ヲリノ御幸思出テ、悲シカリケルアマリ、
隠岐へ奉リケル。西恩法師、

思出ヤ片野ノ御狩カリクラシ 返ルミナセノ山ノハノ月

見レ「バ」マツ涙ナガル、ミナセ河 イツヨリ月ノヒトリスムラム

日本古典文学大系本の頭注によれば、文中の西恩法師は諸本「西因法師」で、西因は続古今集以下の作者。「返ルミナセ」は「かへりみなせの」とする諸本がある。「思出や」の歌については「歌枕名寄」巻第三、雑篇に、「雲葉 交野御狩 月」一〇一五

忘れめやかた野のみかりかりくれてかへるみなせの山のはの月

として掲出し、作者を源家長とする。小宰相の父藤原家隆は家長の同時代人であり、小宰相がこの歌を承知していた可能性は高い。当該歌の背後にはこの歌の面影があったか。

〔六十七番〕

六十七番

左 勝

太政大臣

雪をもる身にならひても思ふかな野なる草木のいかにさゆらん

右

俊成卿女

かりにこし跡たにもなくうつもれて雪深草の野へのふる郷

左身にをもる雪にならひて野なる草木を

おもへる心、そのゆへふかく見え侍にや、右かりにこし

跡たゆる深草のさとは、雪のみにしもかきらす、

ふりはてたる事に侍れば、又以左為勝、

【校異】

イ 勝―ナシ(書) 口 雪のみにしも―雪にしも(書・内・支・聚・群)

ハ ふりはてたる―ふり出たる(支)、ふりはて(聚)

二 事に侍れは―なれば(内・支・群)、たれば(聚)

【他書所伝】

〔左歌〕ナシ 〔右歌〕ナシ

【語釈】

①雪をもる身にならひても思ふかな―「ささのはにふりつむ雪のうれをおもみ本くだちゆくわがさかりはも」〔古今和歌集〕雑歌上・八九一・「題しらず」・よみ人しらず)に代表される如く、草木の積雪から我が身の加齢を連想する発想。

②野なる草木―早くは「紫の色こき時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける」〔古今和歌集〕雑歌上・八六八「めのおとうとをもて侍りける人にうへのきぬをおくるとてよみてやりける」・業平、【伊勢物語】第四十二段)にみえる表現(業平詠では「野なる草木」は妻の義弟の比喩)。「草木」には「あめのしためぐむくさ木のもも春にかざりもしらぬみよの末末」〔新古今和歌集〕賀歌・七三四・「百首歌たてまつりし時」・式子内親王)等、民を喩える例もみえ、当該歌では、実氏が為政者としての立場から歌作したものか。後例だが、「あさみどりあまねきめぐみ色に出でて野なる草木に春雨ぞふる」〔統千載和歌集〕雑歌上・一六六二・「春雨を」・後一条院)等がみえる。

③雪深草―深草は、山城国の歌枕。後掲する【伊勢物語】第一二三段以降、恋物語を背景とする歌枕としてのイメージが定着する。雪との取り合わせも多くみえ、「なにとなくくるるしづりのおとまでも雪あはれなるふかくさのさと」〔山家集〕五三八・「雪歌よみけるに」、「あさとあけて宮このたつみながむればゆきのこずあやふかくさのさと」〔六百番歌合〕冬部・冬朝・五番石・五五〇・家房)等は一例。

④ゆへふかく―実氏詠「おもひ出よ我もむかしは龍田山高根の花も袖にかけてき」〔早春霞〕十五番左・二九)についても、為家は「左我もむかしはたつた山、さためてゆへふかく侍らんと見え侍り」と評している。十五番の実氏詠も詠者主体の

心情にかなり引き付けた詠と解され、そういった実氏の意図を判者として汲み取っていることを暗に示した評言と理解される。

⑤かりにこし跡たゆる深草のさとは、雪のみにしもかきらす、ふりはてたる事に侍れは―自分への愛情が薄れた「男」からの贈歌「年をへて住みこし里を出でていなばいとど深草野とやなりなむ」に対して「野とならば鶴となりて鳴きをらむかりにだにやは君は来ざらむ」と詠み、「男」の愛情を取り戻した【伊勢物語】一二三段所載歌を念頭に置いた評。「女」の歌を踏まえ、結局男の愛情が無くなったとして物語世界を再構築する形で詠まれた「夕されば野へのあきかぜ身にしみてうづら鳴くなりふか草のさと」〔千載和歌集〕秋歌上・二五九・「百首歌たてまつりける時、秋のうたとてよめる」・俊成)は俊成の自讃歌。「かり人の袖こそうたてしをれぬれ露ふかくさのさとの鶉に」〔拾遺愚草〕韻歌 百廿八首和歌・一六四五・秋)、「かりに来て露のみいとど深草の里はまことに野への秋風」〔俊成卿女集〕四四・「北山十首」秋)等は、いずれも【伊勢物語】の「女」の歌を本歌としたもの。

【通釈】

六十七番

左(歌) 勝

太政大臣(西園寺実氏)

雪を次第に重く感じるような我が身の経験から思うことよ、野にある草木は本当の雪が(降り積もって)どんなにか凍えていることだろうよ(民がどんなにかつらい思いをしているかこの頃になってようやくわかることよ)。

右(歌)

俊成卿女

(昔女に会いがてら)狩りに来ていた跡さえもなくすつかり埋もれて。雪深いこの深草の野辺の故郷は……
【判詞】左(の)身に重く降り積もる雪の経験から野にある草木を思う心、その理由は深く見えましようか。右(の)狩りに来ていた跡が絶える深草の里(という情景)は、雪のみに限定されることはなく、すつかり古くなり詠み古されてもいる事でございますので、又左(歌)を勝とする。

〔六十八番〕

六十八番

左 権大―通忠

かち人の分ゆくかたもしらすけのまの、ふる道雪は降つ、

右 勝 同 実雄

しらす雪のふる枝のこはきけさみれはあらぬ花さく宮きの、原

分行かたもしらすけのまの、ふるみち、まことに

雪もふり侍ぬらん、古枝の小萩もあたらしくは

侍らぬを、白雪のとてあらぬ花はしめて見侍れば、

めもとまり侍にや、仍以右為勝、

〔校異〕

イ 権大―権大納言(書・内・支・聚・群) □ かち―かり(支)

ハ かた―末(書・内・支・聚・群) ニ は降つ、―つもりつ、(書・内・支・

聚・群) ホ 勝―ナシ(書) ヘ 同―権大納言(書・内・支・聚・群)

ト まことに―殊に(内・支・聚・群) チ 侍ぬ―侍るぬ(支)

リ 古枝の―古枝(内・聚) 又 花―花は(書・内・支・聚・群)

〔他書所伝〕

〔左歌〕ナシ

〔右歌〕

〔夫木和歌抄〕冬部三・雪・七三三〇・「宝治十首歌合、野外雪」・山階入道左大臣

しらす雪のふるえのこ萩けさみればあらぬ花さくみやぎののはら

〔語釈〕

①しらすけのまの、ふる道―「しらすけの」(白菅の)は、まの(真野)にかかる枕詞。

歌枕としての真野は幾つかあり、「いざ子ども大和へ早く白菅の真野の榛原手折り

て行かむ」(『万葉集』卷第三・雑歌・二八三・「高市連黒人の歌二首」)は、撰

津国の真野を詠んだもの。「しらすけのまのはぎはらつゆなをりをりつる袖ぞ人

などがめそ」(『金葉和歌集』二度本・秋部・二二九・「はぎをよめる」・長実)の

真野は近江国の歌枕とされる。当該歌では、『万葉集』歌を念頭に置き「ふる(古)

道」と詠じたか。なお、白菅には「知らず」の意が掛かり、「むかしこれたがすみ

かともしらすげのまのはぎはら秋はわすれず」(『秋篠月清集』西洞隠士百首・

六四四・「秋廿首」)、「をる人はいさしらすげのまの萩わがたちぬるる露のに

しきか」(『拾遺愚草員外』三二九・(詞書省略))等はその一例。「白菅」「雪」と

一首全体が白色のイメージで仕立てられている。

②あらぬ花さく宮きの、原―白雪を白色の萩の花に見立てる趣向。「宮城野やかれ

はだになき萩がえにをれぬばかりもふれるしらす雪」(『土御門院御集』三九八・(同

冬))は類例。宮城野は陸奥国の歌枕。秋草の名所として古来より和歌に詠み込

まれてきた。

③雪もふり侍ぬらん―「ふり」は、「降る」という意とともに、「ふる、みち」とも

響き合う。直後の右歌の評「あたらし」も「古枝」と対応しており、修辭をちり

ばめた判詞となっている。

④古枝の小萩もあたらしくは侍らぬ―「秋はぎのふるえにさける花見ればもとの

ころはわすれざりけり」(『躬恒集』二七七・「むかししれりける人に、秋の野に

あひて)、「あきにあへぬこののみかはくだらののはぎのふるえもしたもみちせ

り」(『出観集』四八三)、「秋くればはぎもふるえにさくものを人こそかはれもと

のころは」(『粟田口別当入道集』七三・「顕昭法師ひさしうおとづれざりしかば、

秋ころ、はぎのえだにさしてつかはしたりし)、「くだら野のふる枝の萩の花みれ

ばことしばかりの秋としもなし」(『土御門院御集』四八・「萩」)等、先行例が散

見する。

⑤白雪のとてあらぬ花はしめて見侍れば―宮城野・萩・古枝の取り合わせとして

は、「めづらしや今朝初雪に宮城の萩の古枝に花さきにけり」(安元元年「右大

臣家歌合」初雪・九番左・三七・基輔)等の先行例がみえる。なお、為家は後に「草

木にもあらぬ花さく雪のうちの竹の葉分に鶯ぞ鳴く」(『為家集』四六・「同」(文永)

八年正月廿九日前左大臣家月次十首)と詠んでいる。

【通釈】
六十八番

左(歌)

権大(納言源) 通忠

歩いていく人が分け入っていく方向も分からないほど真野の古くなった道には雪が降り続いて・・・

右(歌) 勝

同(権大納言藤原) 実雄

白雪が降った古い枝の小萩を今朝見ると(雪が降り積もって萩とは) 別の(白雪の) 花が咲く宮城野の原・・・

〔判詞〕「分行かたもしらすけのまの、ふるみち」(という表現を聞くと)、本当に古びてしまつてその上雪が降り積もっているかのようでしょう。「古枝の小萩」という表現も新しくはございませんが、「白雪の」と言つて「あらぬ花」という表現は) 初めて見ましたので、目も止まりましたでしょうか。よつて右(歌)を勝とする。

〔六十九番〕

六十九番

左

同 定雅

春日野を分行人の袖さえて道もさりあへず雪は降つ、

右 勝

同 公相

けぬかうへに又跡つけよ玉ほこのみちある御代の野への白雪

左の雪下句すこし打とけて見え侍にや、右野

外雪、た、一句にかきりて無念なる方は侍れとも、

有道之世尤賞詠すへくこそ侍れは、又右為勝、

【校異】

- イ 同―権大納言(書・内・支・聚・群)
- ロ 勝―ナシ(書)
- ハ 同―権大納言(書・内・支・聚・群)
- ニ 左の―左(書・内・支・聚・群)

ホ 下句―上句(書・内・支・聚)、上の句(群) へ 野外雪―野雪(聚)
ト すへく―すへくと(支) チこそ―こそは(書) リ 侍れは―侍れ(支)
又 又―又以(群)

【他所書伝】

〔左歌〕ナシ 〔右歌〕ナシ

【語釈】

①春日野を分行人―春日野は、春日山の西方の麓、東大寺の南、興福寺の東に当たる野原。「かすがのわかなつみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらむ」(古今和歌集) 春歌上・二二・「歌たてまつれとおほせられし時よみてたてまつれる」貫之、「古今和歌六帖」四六では「仁和のみかどの御歌」とする) 等の如く、多く若菜と併せて早春の情景に詠み込まれる。春日野と雪の取り合わせの場合、多くは「かすがのはゆきのみつむとみしかどもおひいづるものはわかかなりけり」(後拾遺和歌集) 春上・三五・「(題不知)・和泉式部」の如く残雪であり、当該歌のように冬の情景歌はあまり多くない。「かすがののべのあきはぎしもゆきのとしふるごとにいるまさりけり」(能宣集) 一一三・「冬二首」は類例。

②道もさりあへず―「さりあへず」は、よけることができないう程、の意。「あづさゆみはるの山辺をこえくれば道もさりあへず花ぞちりける」(古今和歌集) 春歌下・一一五・「しがの山こえに女のおほくあへりけるによみてつかはしける」貫之) が早い例で、後鳥羽院の「みよし野に春の嵐やわたるらん道もさりあへず花のしら雪」(後鳥羽院御集) 同(正治二年) 九月御歌合・一四八六・「落花」は、貫之詠を本歌としたもの。

③けぬかうへに―まだ消えないうちにの意。「けぬかうへに」又もふりしけ春霞たちなばみ雪まれにこそ見ぬ」(古今和歌集) 冬歌・三三三・「題しらず」・よみ人しらず) は早い例。

④玉はこの―「道」に掛かる枕詞。「玉梓の道行き疲れいなむしろしきても君を見むよしもがも」(万葉集) 卷第十一・二六四三・「(物に寄せて思ひを陳ぶる)」等、「万葉集」から用例がみえる。

⑤みちある御代―正しい政道の行われる世の意。「あふみのや坂田のいねをかけた

みて道ある御世のはじめにぞつく」(新古今和歌集) 賀歌・七五三・「仁安元年、大嘗会悠紀歌たてまつりけるに、稻春歌」・俊成、「はるにあひてみちあるみよに若なつむ野ばらの雪に跡は見えけり」(寛喜女御入内和歌) 八・「野沢摘若菜残雪処処」・知家)等は一例。

⑥すこし打とけて見え侍にやー表現がくだけていることを難じたもの。例えば、『六百番歌合』の顕昭詠「あひそめてのちはしかまのいちにてもよがれがちをばかはじとぞおもふ」(恋部下・奇商人恋・廿五番左・一一八九)について、「右申云、左下両句、無下にうちとけたり」とみえる。また、為家は、『河合社歌合』三十番左「思ひねの夢を此世の逢ふ事に頼むさへこそかなはざりけれ」(五九・能違)について、「左、下句すこしうちとけてや侍らむ」と評している。

⑦た、一句にかきりてー『毎月抄』は「題をわから候事、一字題をばいくたびも下句にあらはすべきにて候。二字、三字より後は、題の字を甲乙の句にわから置くべし。結題をば一所に置く事は、無下の事にて待るとやらむ」と指摘する。

【通釈】

六十九番

左(歌)

同(権大納言源) 定雅

春日野を分け入って行く人の袖は冷え冷えとして道をよけることができな程雪は降り続けて……

右(歌) 勝

同(権大納言西園寺) 公相

雪がまだ消えないうちに(いい治世の余光が消えない内に) 又足跡をつけるように事跡を残せ、正しい道を行う御代の野辺の白雪に。

〔判詞〕左の雪(の歌は)上の句(の表現が)少し陳腐に見えましようか。右(は)「野外雪」(題が)、ただ(末句)一句のみに(詠み込まれてい)て残念な点はありませんが、正しい道を行う世はもつとも称賛すべきですので、又右を勝とする。

〔七十番〕

七十番

左 勝

同 公基 ぎんもと古本

霜かれのをの、あさちふ跡もなく心のま、につもるしら雪

右

為教 だめのり古本

かきくらし雪は降つ、梓弓末の、原は入人もなし

左、雪いみしくつもりて侍うへに、右、雪につけても

あつさ弓末の、原はどかり人もいる事さた

めて侍らん物を、霜かれのあさちふ猶よろしく

侍れば、以左勝と申へし、

【校異】

イ 勝ーナシ(書) 口 同ー権大納言(書・内・支・聚・群) ハ きんもと古本ーナシ(書・内・支・聚・群) ニ 霜ー雪(内) ホ 為教ー為教朝

臣(書・内・支・聚・群) ヘ ためのり古本ーナシ(書・内・支・聚・群)

ト 末の、原はーすゑのはら野は(書・内・支・聚・群) チ 雪ー雪は(内・聚

リ つもりてー心つもりて(内・支・聚) 又 右ーナシ(支・群)

ル 末の、原はーすゑのはら野は(書・内・支・聚・群)

ヲ とかり人ーとかりの人(書・内・聚・群)、とはかりの人(支)

【他書所伝】

〔左歌〕ナシ 〔右歌〕ナシ

【語釈】

①霜かれのをの、あさちふー「浅茅」は丈の低いチガヤ。霜枯れの浅茅に雪が降り積もる情景を詠んだ歌には、「霜枯とみし程もなきあさちふに初雪ふりぬいとどさびしも」(安元元年(一一七五)『右大臣家歌合』初雪・七番左・三三・季広)、「霜がれのをがやかりしき旅ねする野べさへさえて雪降りにけり」(三井寺新羅社歌合)野宿雪・三十番右・六〇・長照)等がある。また、本歌合にも「あさち原か

れふのをの、草の上にもしる色なくつもる白雪」(野外雪・七十八番右・一五六・為家)の例がある。

②心のまゝ訪れる人もいないので、雪が思うがままに積もる、という雪を擬人化した表現。「ふみわけてとふ人もなきやどなれば心のままにつもるゆきかな」(『明日香井和歌集』冬・一四一七・「冬歌よみけるなかに」)、「はらはじよ心のままにただつもれとはれぬ山の道のしら雪」(建長八年(一二五六)『百首歌合』冬・四百九十七番右・九九四・忠定)等の例がある。

③かきくらし雪は降つゝ、あたり一面の空を暗くして雪が降っている情景を指す。「かきくらし雪はふりつつかすがにわが家のそのに驚ぞなく」(『後撰和歌集』春歌上・三三三・よみ人しらず)と初二句が一致する。

④末の、原―歌本文・判詞ともに、諸本「すゑのはら野」とする。「梓弓末の腹野に鳥狩する君が弓弦の絶えむと思へや」(『万葉集』巻第十一・奇物陳思・二六三八)が初出例。「校本万葉集」に拠れば「末の腹野」の訓に異同はないが、この万葉歌が所収される作品のうち、「五代集歌枕」、「新勅撰和歌集」、「色葉和難集」、「歌枕名寄」、「夫木和歌抄」は「すゑのはらの」とし、「和歌童蒙抄」、「河海抄」は「すゑのはら」とする(『古今和歌六帖』は「すゑのとはけ」)。また院政期以降の用例も両様存する。なお、『五代集歌枕』第二・野に「すゑのはらの」と掲出されるが所在未詳。

⑤あつさ弓末の、原はとかり人もいる事さためて侍らん物を―末野の原には鳥狩りの人もきつと入るはずだと、前項に掲出した万葉歌を念頭に置いて「入人もなし」と詠むことを否定的に評価した発言。

【通釈】

七十番

左(歌) 勝

権大納言(西園寺)公基

霜枯れた野原の浅茅が生えている所は人の通った跡もなく、思うがままに積もる白雪であることよ。

右(歌)

(藤原) 為教朝臣

あたり一面の空を暗くして雪は降り続いていて、末野の原に入る人もいないこと

とだ。

【判詞】左(歌は)、雪がたいそう積もっている(情景)であります一方、右(歌は)、雪が降っているにしても末野の原には鳥狩りの人もきつと入るでしょうに。(左歌の)霜枯れの浅茅の情景がやはりよろしゅうございまして、左を勝と申すべきでしょう。

〔七十一番〕

七十一番

左 持

中納言 為経

磯上ふるの、み雪ふみ分て今そむかしの跡もみるへき

右

信実 朝臣

をのつからさてもそのみのをよふやと雪の朝の野へに出ぬる

思かねたる雪の朝の眺望、あはれにみなされて侍り、

ふるの、み雪、歌のさまよろしく見え侍を、

題の心やすくきこえ侍らん、いまそむかしの跡も

みるへきといへる、すてかたく侍れば、持にて侍へきにや、

【校異】

イ 持―ナシ(書) 口 ためつね古本―ナシ(書・内・支・聚・群)

ハ ナシ―続古今、冬(聚) 二 みるへき―みゆへき(支・聚・群)

ホ さても―みても(群) へ のそみの―のそみは(内・聚・群)

ト 雪の朝の―雪朝の(書)、雪の朝(内・支・聚・群)

チ みなされて―みなされ(書・内・支・聚・群)

リ 侍り―侍る(聚) 又 歌のさま―哥さま(書・内・支・聚・群)

ル 心やすく―こ、ろややすく(書)、心やあすく(内)、心やあさく(聚・群)

ヲ すてかたく―捨かたき(内)

【他書所伝】

〈左歌〉

【続古今和歌集】冬歌・六六一・「十首歌合に、野外雪を」・大宰権帥為経
いそのかみふるののみゆきふみわけていまぞむかしのあとも見るべき

【題林愚抄】冬歌下・五九〇二・「野外雪／続古」・大宰権帥為経
いそのかみふるののみゆきふみ分けて今ぞむかしの跡もみるべき

〈右歌〉ナシ

【語釈】

①磯上―大和国の歌枕。『万葉集』以来「石上布留」と続けて詠むことが多かった。
当該歌には「深雪」と「御幸」が掛け言葉として響いており、「むかしのあと」は、
一義的には安康・仁賢天皇の都があった場所として意識されていたであろうし、
かつての聖代を漠然と指すとみてもよい。「いそのかみふるき宮この郭公声ばかり
こそむかしなりけれ」(『古今和歌集』夏歌・一四四・「ならのいそのかみでらにて
郭公のなくをよめる」・素性)がある。

②をよぶ―歴史的仮名遣いは「およぶ」。ここでは成就する、望みどおりになる、
かなう、の意で、多くの場合打消しの語を伴って用いる。

③ふるの、のみ雪―底本はここに記した表記のとおりで、そのまま読めば「ふる
の、みちのみ雪」となるが、書写者の注記意図が少々わかりづらい。

【通釈】

七十一番

左(歌) 持

中納言(藤原) 為経

いそのかみふる野の深雪を踏み分けて(行つて、太平の世の)今こそ昔の跡も
見るべきでしょう。

右(歌)

(散位藤原) 信実朝臣

おのずから、さても望みが叶うのではあるまいかと、雪の(降った)朝の野辺
に出てきてしまったことだ。

【判詞】思えばぐねた翌日の雪の朝の眺望は、思いなしのせいか深く心を動かされ
ます。(左の)ふるののみ雪(の歌は)、歌のさまは悪くありませんものの、「野外雪」

という)題(に応じる)歌意が安直に思われます。(しかし)「いまそむかしの跡
もみるべき」と言っているのが、捨てがとうございますので、持とするのが適當
ではありますまいか。

〈七十二番〉

七十二番

左 勝

右 通成

梓弓入の、みちの跡たえてしかもかよはすふれる白雪

右

右 雅光

さ、竹の野への古道まよふとも雪ふみならし問人もかな

さをしかの入野のす、きをとりてあつさ弓引

なさせるに、しかも又かよはすといへる、おもふ所な

きにあらず侍にや、右さ、竹の野へめつらしく見

え侍に、一ふしよせある事も侍らぬにや、いつくの

野にても侍ぬへかりけりとみえ侍、左聊勝侍へし、

【校異】

イ 勝―ナシ(書) 口 右衛―右衛門督(書・内・支・聚・群)

ハ の―も(内・支・聚・群) 二 右近―右近中将(書・内・聚・群)、右

近衛中将(支) ホ あつさ弓引なさせるに―梓弓にひきなせるに(書)、あつ

さ弓にひきなせるに(内・支・聚・群) ヘ しかも又かよはすといへる、お

もふ所なきにあらず侍にや―ナシ(内・聚) ト 右さ、竹の―さ、たけの(書・

内・支・聚・群) チ 侍らぬにや―侍らぬや(書) リ 侍ぬへかりけり―

侍ぬへかりける(書・内・群)、侍るへかりける(支) 又 左聊勝―仍左いさ、

か勝(書)、仍左勝と(支)、仍左勝(内・聚・群)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉ナシ

【語釈】

①梓弓入の、みち―「入野」は入野神社がある山城国の歌枕とする説や、近江国とする説等がある。「五代集歌枕」では「国不蕃」、「歌枕名寄」でも未勘国部。「梓弓」は「射る」に掛かる「入野」の枕詞。「入野」には「(入野への道に) 入る」の意も掛かる。

②しかもかよはず―「さ雄鹿の入野のすすき初尾花いつしか妹が手を枕かむ」(『万葉集』巻第十・秋相聞・二二七七・「花に寄する」)。「新古今和歌集」では第五句「たまくらにせん」をふまえる。「万葉集」歌は将来、妹の許に通うことを期待した内容であるが、当該歌は深い雪のために鹿すらも通わない状況を詠む。鹿に雪を取り合わせた例は、「さびしさのかぎりは雪にふりとめつ竜田の里のしかの通ぢ」(『拾玉集』四〇二六・(詞書省略))、「雪ふかみ尋ぬる宿はうづもれて我よりさきのしかの通路」(『壬二集』院百首正治二年・冬・四六六)等がある。

③さ、竹の野へ―先行例を確認できない。「篠竹」は『万葉集』の「さすだけの大宮人は今もかも人なぶりのみ好みたるらむ」(巻第十五・「右の九首、娘子」・三七七八)の「さすだけ」から転じたらしく、鎌倉時代に入って「ちりもせじ衣にすれるささ竹のおほみや人のかさすさくら」(『新勅撰和歌集』賀歌・四八二二・泥絵屏風、石清水臨時祭・定家)、「ももちどりけさこそきなけささだけのおほみや人」にはつねまたれて(『統古今和歌集』春歌上・二九・「春御歌の中に」・龜山天皇)のように「大宮人」と取り合わせた例が見られる。当該歌は鄙びた「野辺」と取り合わせ、新鮮味を狙ったか。

④古道―人の往来が途絶え、さびれた道。「ふるみちに我やまどはむいにしへの野中の草はしげりあひにけり」(『拾遺和歌集』物名・三七五・「やまと」・輔相)。ここでは「古」と「雪が」降る」を掛ける。なお、「野辺の古道」は「さ」の山みゆきふりにしせりかははのべのふるみちあとはありけり」(『古今和歌六帖』一一三一・「にわじ、せりかははに幸し給ふ時に」・行平、「後撰和歌集」では「千世のふるみち」等の例がある。

⑤おもふ所なきにあらす侍にや―詠者には色々思いを抱く所があるようですが、『万葉集』歌をふまえつつも鹿を不在にしたところに、詠者の個人的な心境

が込められているのかと推量する。

⑥一ふしよせある事も侍らぬにや―右歌に「篠竹の野辺」の縁語が全く存しないことについて、篠竹の縁語「ふし(節)」を用いて難じる。

【通釈】

七十二番

左(歌) 勝

右衛(門督源) 通成

(「射る」「入る」という名をもつ) 入野の道であるが、往来の跡は絶え、鹿も通わず、ただ白雪が降っていることだ。

右(歌)

右近(衛権中将源) 雅光

たとえ迷っても、雪を踏みならし、篠竹の野辺の古道を訪れる人があればよいのに。

【判詞】(『万葉集』歌にある)「さ」をしかの入野のす、き」を取って梓弓をふまえるのに、鹿も又通わないとしたのは、(詠者に) 思う所がない訳ではないようだが(どうなのでしょうか)。右の「さ、竹の野へ」は珍しく見えますが、(それと) 一節も縁のある語がございませんでしょうか、(それでは) どの野であつてもかまわなかつたと見えます。左をわずかながら勝ちとするべきです。

〈七十三番〉

七十三番

左

梨有教

うつもる、かれの、薄ふみ分て猶行末も雪のふる道

右 勝

井内侍

もとかしはもとよりうつむ雪の上なるからをの、道や絶なん

うつもる、枯野ふみ分て猶行末も、いかなる

見所侍へきそとゆかし侍を、雪のふるみち、

た、おなし事にて侍ける、無念にや侍へき、

もとかしはもとよりうつむとて、白雪のふるから

を野と侍は、上下あひかなひて、もとの心も
すてかたく侍にこそ、右勝侍へし、

【校異】

イ 兵——兵部卿（書・内・支・聚・群） □ 勝——ナシ（書）

ハ 見所——所（内・支・聚・群） 二 侍へきそと——侍へきそと（書）、侍るへ
きなど（内・支・聚・群） ホ 事にて——事にや（内・支・聚・群）

へ ふるから——ふるからに（内） ト 心も——心見え（内・支・群）、心見（聚）
チ 侍——ナシ（支・群）

【他書所伝】

〈左歌〉 ナシ 〈右歌〉 ナシ

【本歌】

〈右歌〉

【古今和歌集】雑上・八八六・「題しらず」よみ人しらず

いそのかみふるからをのものとがしは本の心はわすられなくに

【語釈】

①うつもるゝかれの、薄—雪に埋もれた枯野の薄の荒涼とした光景。「雪」と「薄」とを取り合わせた先行歌としては、「婦負の野のすすき押し並べ降る雪に宿借る今日しかなしく思ほゆ」（『万葉集』巻第十七・四〇一六・高市連黒人）「今よりはつぎてふらなむわがやどのすすきおしなみふれるしら雪」（『古今和歌集』冬・三二八・「題しらず」よみ人しらず）が古い例である。「枯野の薄」には、「くちもせぬその名ばかりをとどめおきて枯野の薄かたみにぞみる」（『新古今和歌集』哀傷・七九三・西行）という著名な先行歌がある。なお、後世、「枯野の薄」は、「冷え寂びたる」（『ささめごと』）、「心はそきやう」（『兼載雑談』）といった美的様態の象徴とされる。

②ふみ分て—踏み分けて、の意。「ふみわけてさらにやとはむもみぢばのふりかくしてしみちとみながら」（『古今和歌集』秋下・二八八・「題しらず」よみ人しらず）、「わがやどは雪ふりしきてみちもなしふみわけてどぶ人しなれば」（『古今和歌集』

冬・三三二・「題しらず」よみ人しらず）のように、「踏み分く」には、妨げになるものを押し開いて進み、わざわざ訪ねる、といった内容の歌が多い。

③猶行末も——さらに行き進む先も、の意。第三句の「ふみ分て」を「行」が受ける。「こしかたも猶行末もふる雪に跡こそみえねかへる山人」（『建保名所百首』雑・一〇〇八・「還山越前国」康光）。

④雪のふる道——「古道」は、今はもう寂れている道。「ふるみちに我やまどはむいにしへの野中の草はしげりあひにけり」（『拾遺和歌集』物名・三七五・「やまと」・輔相）「古る」に「降る」を掛ける。「たにふかみ雪のふるみちあとたえてつもれるとしをしる人ぞなき」（『新勅撰和歌集』冬・四三三・「古溪雪をよみ侍りける」・通方）。

⑤もとかしは——冬枯の柏の古木。「顕注密勘」では、本歌について、「もとかしはもふるがしはと云べきにや」（顕昭注）、「冬野にはなべて木の葉、草の色も残らぬに、かしは、かれたる葉の枝につきて、春までおちぬ物なれば……」（定家注）と説明されている。本歌に拠り、第二句の「もとより」を導く。

⑥もとより——もともと、以前から、の意。根本から、の意を掛ける。「あきはぎの下葉よりしももみづるはもとより物ぞ思ふべらなる」（『古今和歌六帖』秋はぎ・三六五・紀貫之）。

⑦ふるからをの——古から小野。「五代集歌枕」「八雲御抄」に拠れば、大和国の歌枕。本歌について、「顕注密勘」では、「いそのかみふるからをのとは、野の名也。いそのかみふるのなかみちともよめり。……布留の乾たる小野といふにや」（顕昭注）、「ふるからをのは枯野をいへる歟」（定家注）と説明する。寂れた枯野が想起されよう。さらに、弁内侍では、「雪が」降る「の意が掛けられる」。

⑧道や絶なん——道は絶えてしまふであろうか、の意。「布留」の「道」としては、「いそのかみふるのなか道なかなかに見ずはこひしと思はましや」（『古今和歌集』恋四・六七九・「題しらず」貫之）が著名である。重ねて降り積もる雪に道はすっかり埋もれて、人の往来も途絶えてしまふのか、というのである。

⑨いかなる見所侍へきそとゆかしく侍を——どのような見所がありますのかと知りたく思いましたが、の意。「見所」は、見るに値するところ、の意。本歌合判詞

では、他に四例(十二・五十七・六十三・七十五番)用いられており、底本の形がふさわしい。わざわざ踏み分けて、行き進んだのだから、さぞかし素晴らしいのであるうかと期待していた、というのである。

⑩雪のふるみち、た、おなし事にて侍ける、無念にや侍へき―第五句の光景は、上句で描かれた光景と大差なく、拍子抜けであった、という非難である。

⑪もとの心もすてかたく侍にこそ―本歌の趣向を生かしている点も捨てがたく思われます、の意。あるいは、「もとの心」は、「もとがしはもとよりうづむ」という弁内侍の趣向を指しているとも考えられる。同じ古今歌を踏まえた七十六番左の為氏詠に対して、為家は、「かしはならては跡見えぬ雪にもとの心もわすれぬへく侍にや」と、「柏」が詠み込まれていない点を難じている。これに対して弁内侍では「柏」が詠み込まれ、この点が「上下あひかな」と評されたであろう。なお、「校異」トの「心見え」とする異文の方が解しやすい。

【通釈】

七十三番

左(歌)

兵(部卿源)有教

雪に埋もれた枯野の薄を踏み分けて、さらに行き着く先も雪の降る古道であることだ。

右(歌) 勝

弁内侍

本柏の根本から、もともと埋めている、その雪の上に、さらに雪が降っているので、古から小野の道は絶えてしまうことだろうか。

【判詞】埋もれた枯野を踏み分けてさらに行き着く先も、どのような見所があるのかと知りたく思いましたが、「雪のふるみち」と、ただ同じ光景でありますのは、遺憾なことではありませんか。「もとかしはもとよりうづむ」と言って、白雪が「ふるからを野」とありますのは、上句と下句とが釣り合っ、本歌の趣向を生かしている点も捨てがたく思われます。右が勝ちましてございます。

〔七十四番〕

七十四番

左(歌)

有(部卿源)

磯上ふる野ののもりふみ分て雪にも御代の道は有けり

右

雅忠(朝臣)

つゝに又もみちぬ色やこれならん野中にたてる松の白雪

君之有道之徳、臣之勤節之貞、左右各存旨趣、彼是難申勝負、尤可為持、

【校異】

イ 持―ナシ(書) 口 右近―右近中将(書・内・聚・群)、右近衛中将(支)

ハ 道は―道(内) 二 君之―君(内・支・聚) ホ 徳―分(支)、跡(聚・群)

ヘ 臣之―臣(聚) ト 貞―興(支) チ 存―孝(支) リ 是―此(内・支・聚・群) 又 難申勝負―難申勝負(書・内・支・群)、難勝負申(聚)

ル 尤可為持―尤為持(書)

【他所書伝】

〔左歌〕ナシ 〔右歌〕ナシ

【語釈】

①磯上ふる野ののもり―七十一番【語釈】参照。「いそのかみふるのなか道なかなに見ずはこひしと思はましやは」(古今和歌集)恋歌四・六七九・「題しらず」・貫之。「野守」は禁猟の野を守る番人。「石上」「布留野」と「野守」を取り合わせた先例は確認できない。

②ふみ分て―七十三番【語釈】参照。「磯上ふるの中道いまささらにふみ分けがたくしげるなつ草」(宝治百首)夏十首・「夏草」・一〇一四・資季。

③御代の道―政道。後醍醐院治世の太平を讃える。「おく山のおどろがしたもふみわけてみちある代ぞと人に知らせん」(新古今和歌集)雑歌中・一六三六・住吉歌合に、山を「後鳥羽院」。「わが君のあまねき御代のみちづくくりくぼめる身をも

あはれとはみよ」〔新撰和歌六帖〕六一九・「みち」・信実。

④つるに又もみちぬーやはり最後まで紅葉することはないと、確認する。「雪ふりて年のくれぬる時にこそつひにもみちぬ松も見えけれ」〔古今和歌集〕冬・三四〇・「寛平御時きさいの宮の歌合のうた」・よみ人しらず。当該歌では風雪に耐え、野中に立つ松の常緑と枝にかかる白雪の色に、永遠の御代を寿ぐ意を込める。
⑤野中にたてる松ー野の中に立つ松の孤高な姿。野中の松を詠んだ例は「磐代の野中に立てる結び松心も解けず古思ほゆ」〔万葉集〕巻第二・挽歌・一四四・「長忌寸奥麻呂、結び松を見て哀しび咽ふ歌二首」をはじめ、「ながめやるさとだに人の跡たえし野中の松に雪はふりつつ」〔順徳院百首〕冬十五首・六十八等がある。

⑥君之有道之徳、臣●勤節之貞ー「勤節」はよく勤めること。「貞」は迷わず、己の信念を貫くこと。各々の歌で帝の徳と、御代の安泰への祈りを詠じていることをいう。

【通釈】

七十四番

左(歌) 持

右近(衛権中将藤原)師継

石上の布留野の古道の雪を、野守が踏み分けていることだ。雪の中でも、御世の道は(確かに)あるのだなあ。

右(歌)

(右近衛権中将源)雅忠朝臣

ついに最後まで紅葉しない色とは、野中に立つ松の緑と白雪、これであるよ。

〔判詞〕帝による道の徳あり、臣下による勤節の貞もあり、左右各々に趣意がございます。あれこれと勝ち負けを申し難く、どういたしまして持とするべきでしよう。

〈七十五番〉

七十五番

左 勝

沙弥蓮性

下おれのみな^①のふし原いやしきにまなくも雪の猶つもるらん

右 下野

木の下^②の露にやまさる宮きの、みかさとりあへぬ雪の木の露にまさるへ

みかさとりあへぬ雪の木の露にまさるへ

き事、すてに^③ことにはあらはれて、うたかひなくや

みえ侍らん、みな^④のふし原いやしきにまなく

つもれる雪、見所^⑤ことに侍れば、尤以左為勝、

【校異】

イ 勝ーナシ(書・支) □ まなくもーまなくし(群) ハ つもるらんー

つもるらし(聚) ニ 雪のー雪(内・支・聚・群) ホ 木の下露ーした露(書)

へ ことにはーこと葉に(書・内・支・聚・群) ト みえ侍らんー侍らん(内・

支・聚・群) チ ふし原いやしきにー藤原敷に(内)、ふしはらいや友に(支)

リ まなくーまなくも(群) ヌ つもれるーつもる(書) ル 為勝ー勝(内)

【他書所伝】

〔左歌〕

〔現存和歌六帖〕六一・「ゆき」・正三位知家

したをれのみな^①のふしはらいやしきにまなくも雪の猶つもりつつ

〔右歌〕 ナシ

【語釈】

①みな^①のふし原ー「猪名野」は摂津国の歌枕。今の兵庫県川西市・伊丹市・尼崎市を流れる猪名川の流域の野(歌枕歌ことは辞典 増訂版)。「万葉集」から用例が見られるが、「みな^①のふしはら」の形では「しながどりみな^①のふし原とびわたるしぎがはねおとしろきかな」(拾遺和歌集)神楽歌・五八六)のほか、「猿丸集」七、「堀河百首」冬十五首・凍・九九九・仲実、「堀河百首」雑廿首・野・一四〇三・基俊等の例がある。また、雪の積もった情景を詠んだ例には、「ふるゆきにみな^①のふし原うづもれてかるもかくべきかたやなからん」(夫木和歌抄)雑部四・原・九八九一・「みな^①のふし原、摂津/永久二年大神宮欄宜歌合、雪」・読

人しらず)、「ありまやまおろすあらしやさえつらむゆきふりにけりるなのふしはら」(『有房集』・二六一・「ゆきのうちにはとけをねんず」)がある。

②いやしきに―いよいよしきりに、の意。「春の雨はいやしき降るに梅の花いまだ咲かなくいと若みかも」(『万葉集』巻第四・相聞・七八六・「大伴宿祢家持、藤原朝臣久須麻呂に報へ贈る歌三首」・家持)、「みどりなるは山の色やかはりぬるいやしきふれるはつしぐれかな」(『堀河百首』冬十五首・時雨・八九七・公実)等の例がある。

③木の下の露にやまさる―「みさぶらひみかさと申せ宮木のこのしたつゆはあめにまされり」(『古今和歌集』東歌・一〇九一・「みちのくうた」)に依拠した表現。当該歌の趣向は、宮城野では雨にまさるといふ木の下の露よりもなお雪の深さがまさるといふもの。同様に木の下の露よりもまさるものを挙げる例には、「みやぎのはこのしたつゆにさみだれのひかずふるこそなほまさりけれ」(『教長集』夏歌・二七七・「東路五月雨 句題百首」)、「宮木野のこのしたふかきゆふつゆもなみだにまさる秋やなからん」(『新勅撰和歌集』雑歌四・一三二八・「題しらず」・平政村)等がある。

④ことには―諸本に従い「こと葉に」に改める。

【通釈】

七十五番

左(歌) 勝

沙弥蓮性

下折れした猪名の柴原には、いよいよしきりに絶え間なく雪がいつそう降り積もっているだろう。

右(歌)

下野

(雨にまさるといふ)木の下の露にもまさることよ。宮城野の御笠もとりおおせないほど降る雪の深さは。

【判詞】(右歌の)御笠もとりおおせないほどの雪が木の下の露にまさるであろうということとは、すでに詞にそのまま表れていて、疑問が生じる余地もなくみえるでしょう。(左歌の)猪名の柴原にいよいよしきりに絶え間なく雪が降り積もっている情景は、見所がとりわけございますので、左を勝といたします。

〔七十六番〕

七十六番

左 勝

為氏 朝臣

けさのまも跡こそみえね白雪のふるからをの、もとの通路

右

少将内侍

思ふよりいと、いくの、みち絶てまたふみもみすつもる白雪

左ふるからをの、もとのかよひち、かしはならては、

跡見えぬ雪に、もとの心もわすれぬへく侍にや、

右いくの、道またふみもみす、おかしく思いた

され侍に、思ふよりもといへる五字そすこしお

ほつかなく侍ける、左の今朝のまもといへるは、

いさ、か心侍へきにや、勝侍へし、

【校異】

イ 勝―ナシ(書) 口 白雪―雪哉(書・内・支)、雪哉(聚) ハ ならて

は―なくては(書・内・支・聚・群) 二 跡―跡は(支・群) ホ わすれ

ぬ―わかれぬ(内・支・聚・群) ヘ おかしく思いたされ―おもひ出され(支)

ト 思ふよりも―思ふより(書・内・支・聚・群) チ いへる五字そ―いへる

そ五字そ(書)、いへる五文字そ(内・聚)、いへる五文字(支・群) リ 左の

―左(内・支・聚・群) 又 いへるは、いさ、か心―いへるは心いささか(書)、

いへる心いさ、か(内・支・聚・群)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

【秋風抄】冬歌・一六六・「雪歌」・少将内侍

おもふよりいとどいくのの道たえてまだふみもみすつもる雪かな

建長三年(一二五二)【閑窓撰歌合】三十四番左・六六・少将内侍

おもふよりいとどいく野の道遠みまだふみもみず積る雪かな

【本歌】

（右歌）

【金葉和歌集】二度本・雑部上・五五〇・「和泉式部保昌にぐして丹後にはべりけるころ、みやこに歌合侍りけるに、小式部内侍うたよみにとられて侍りけるを定頼卿つばねのかたにまうできて、歌はいかがせさせ給ふ、丹後へ人はつかはしてけんや、つかひまうでこずや、いかに心もとなくおほすらんなど、たはぶれてたちけるをひきとどめてよめる」・小式部内侍

おほえやまいくののみちのとほければふみもまだみずあまのはしだて

※「百人秀歌」「袋草紙」等は第四句「まだふみもみず」。

【語釈】

①ふるからをの―七十二番【語釈】参照。当該歌も「いそのかみふるからをの」とがしは本の心はわすられなくに」（『古今和歌集』雑部上・八八六・題しらず・よみ人しらず）をふまえる。

②いくの―丹波国の歌枕。「いく」に「行く」の意をかける。

③かしはならては―「本柏」の語がなければ、「古今和歌集」歌の元々の趣向を忘れてしまい（※他の本文「わかれぬ」を採れば、「離れてしまい」、わからなくなるのではないか、の意。通い路の跡が見えなくなっていく様子に、往來の途絶えの意味を込めている。或いは恋の意を汲み、男の夜離れを嘆く歌ととるべきか。

④思ふよりもといへる五字そすこしおほつかなく侍ける―なぜ生野の道を想像したのか前後の脈絡がなく、歌の構造上、「思ふより」の五字の位置付けが不明瞭であることを批判する。なお、右歌初句と諸本の当該箇所「思ふより」とあるのを採用する。

【通釈】

七十六番

左（歌） 勝

（左近衛権中将藤原）為氏朝臣

今朝も跡は見えない。白雪が降るばかりの、古から小野の以前の通い路は。

右（歌）

少将内侍

想像した以上に、ますます生野の道に白雪が積もり、絶えてしまったので、まだ踏んでもいない。

【判詞】左歌の「ふるからをの、もとのかよいち」は、『古今和歌集』歌にあった「かしは」がないのだから、（通い路の）跡の見えない雪によって、「もとの心」も忘れてしまうのでしょうか。右歌の「いくの、道」「またふみもみず」は、（本歌が）面白く思い出されますが、「思ふより」という五字は少しほんやりしてあります。左歌の「けさのまも」というのは、僅かに歌の内容が明確でございますでしょうか。（左歌の）勝ちでございます。

（七十七番）

七十七番

左 榊

経朝つねとも 古本

ふる雪に野中の松もうつもれて今は嵐の声たにもなし

右 沙弥禅信

ふみ分て行へき道も白雪のしらぬ野原の末そゆかしき

声たにもなし、すゑそゆかしき、いく程の勝劣侍らし、

【校異】

イ 持―ナシ（書）、勝（支） □ 経朝つねとも 古本―経朝朝臣（書・内・支・聚・

群） ハ の―に（内） ニ 野原―野中（内・支・聚・群） ホ 勝劣侍ら

し―勝負なし（内・支・群）、勝劣なし（聚）

【他書所伝】

（左歌）ナシ （右歌）ナシ

【語釈】

①ふる雪に……もうつもれて―上句は、「ふるゆきにすぎのあをばもうつもれてしるしも見えずみわのやまもと」（『金葉和歌集』二度本・冬・二八五・「宇治前太政大臣家歌合に雪の心をよめる」・皇后宮撰津）、「ふる雪にのきはの竹もうつもれて

友こそなけれ冬の山ざと」(『千載和歌集』冬・四六二)「醍醐の清滝の社に歌合し
侍りける時、よめる」・よみ人しらず)等のように、雪の歌の一つの型に添った詠
み方である。

②野中の松―「野中」は、人里のない原野。野中に立つ松を詠み込んだ歌として
は、「岩代の野中に立てる結び松心も解けず古思ほゆ」(『万葉集』巻第二・挽歌・
一四四二)「長忌寸奥麻呂、結び松を見て哀しび咽ふ歌二首」・長忌寸意吉磨)がある。

③今は嵐の声たにもなし―今は嵐の音さえ途絶えてしまった、の意。松に雪が積
もって嵐(風)の音が弱るといふ発想は、「ききなれし嵐の音はうづもれて雪にぞ
なびく峰の松ばら」(『壬二集』冬・二六五七)「後京極撰政治家詩歌合に、雪中松樹
低」・木ずゑにもよはのしらゆきつもるらしおとよわりゆくみねの松かぜ」(『六百
番歌合』冬・寒松・十二番右・五六四・慈円)、「ふる雪に軒ばの松もうづもれて
おとせぬ風もさえまざるなり」(『老若五十首歌合』冬・百九十番左・三七九・寂蓮)
等、先行例も多く、それほど目新しい趣向ではない。「嵐の声」は、嵐の音を擬人
的に表現したもの。「秋山のあらしのこゑをさく時はこのはならねど物ぞかなしき」
(『拾遺和歌集』秋・二〇七)「題しらず」・遍昭)。

④白雪のしらぬ―「白」に「知らず」を掛け、さらに、第四句「知らぬ」を導く。
「まつ人のゆききのかもしら雪のあすさへふらば跡やたえなん」(『壬二集』光
明峰寺入道撰政治家百首・冬・岡雪・六四八)、「さりとともいまゆくすゑもしらゆ
きのしらぬいのちにおもひきえつつ」(『如願法師集』春日詠百首応製和歌・雑・
九三)。

⑤しらぬ野原の末そゆかしき―不案内な野原の、その末が知りたいものだ、の意。
「けふは又しらぬ野ばらに行きくれぬいづれの山か月はいづらん」(『新古今和歌集』
羈旅・九五六)「(たびの歌とてよめる)」・家長)。

【通釈】

七十七番

左(歌) 持

(左京権大夫藤原) 経朝朝臣

降る雪に、野中の松も埋もれて、今は嵐の音さえも途絶えてしまったことだ。

右(歌)

沙弥禅信

踏み分けて行くべき道も(降り積もった白雪のために)知られず、不案内な野
原の、その末がどうなっているのか知りたいものだ。
【判詞】「声たにもなし」、「すゑそゆかしき」、どれほどの勝ち負けもございませぬ。

〔七十八番〕

七十八番

左 勝

越前

春日野や秋の名残も見えわかすみな白妙の雪の下草

右

為家

あさち原かれふのをの、草の上にもまじる色なくつもる白雪

みな白妙、まじる色なく、おなし心に見え侍を、かれ

ふのを野、そことも見え侍らす、かすかにをよ侍らし、

【校異】

イ 勝―ナシ(書・内) □ 為家―前大納言為家(内)、前権大納言為家(書・

支・聚・群) ハ 見え侍らす―見えす(内・支・聚・群) ニ かすかに―

かすかのに(書・内・支・聚・群)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『天木和歌抄』雑部四・九六五三・「宝治十首歌合、野外雪」・民部卿為家卿

あさちはられふのをの草のうへにまじる色なくつもるしらゆき

【語釈】

①みな白妙の―すべてが真っ白に見えるの意。「峰の嵐浦の浪かぜ雪さえてみな白

たへの秋の夜の月」(『拾遺愚草』六九四・花月百首)、「千はやぶる神の心もふる

雪にみな白妙の住吉のうら」(『建保名所百首』冬十首・六二八)「住吉浦撰津国」・

家衡)等の先例がある。

【通釈】

七十八番

左(歌) 勝

(嘉陽門院) 越前

春日野では(今や)秋の名残も判別できない。みな真つ白の雪の下草となつてしまつて。

右(歌)

(前権大納言藤原) 為家

浅茅原は(今はみな)枯れ草となつた野原の草の上に、まじる色なく(白一色に)、つもる白雪であることよ。

〔判詞〕「みな白妙」、「まじる色なく」は、(共に)同じ趣向に見えますが、「かれふのを野」の方は、(特に)どこであるとも見えませんので、「春日(野)」には及びませんでしょう。

宝治元年『院御歌合』注釈―「忍久恋」題―

位 藤 邦 生 藤 川 功 和

はじめに

『尾道大学芸術文化学部紀要』第8号（平成21年3月刊行）に引き続き、宝治元年（一二四七）『院御歌合』の注釈を試みる。今回は「忍久恋」題十三番を取り上げる。各番（第一次稿）担当者と所屬を以下に示す。

七十九番―位藤邦生、八十番―藤川功和（尾道大学）、八十一番―位藤、八十二番―藤川、八十三番―位藤、八十四番―藤川、八十五番―位藤、八十六番―藤川、八十七番―位藤、八十八番―藤川、八十九番―位藤、九十番―藤川、九十一番―位藤

凡 例

- 一、底本は、永青文庫蔵本（一〇七・三六・七）（『細川家永青文庫叢刊』第八卷所収）を用いた。
- 一、校合した諸本と略号は、以下の通り。

書―書陵部蔵本（五〇一・七四）（『新編国歌大観』の底本）
内―内閣文庫蔵本（百三十番歌合（外題））（二〇一・二四七）
支―九州大学支子文庫蔵本（九一一・ホ・一）
聚―書陵部蔵歌合類聚本（『大日本史料』第五篇二十四所収）
群―群書類従本（巻第二百所収）

- 一、注釈は、番全体の本文【校異】を示した後、【他書所伝】【本歌（参考歌）】【語釈】【通釈】をあげた。
- 一、【語釈】の内、各詠作者並びに前号までに既出の語彙については、紙幅の関係上これを略した。
- 一、表記や送り仮名の異同はこれを略し、見せけちや補入符号によって訂正のある箇所は、訂正後の本文を採用した。
- 一、翻字本文には適宜読点を施し、字体は現行の活字体に改めた。
- 一、本文中、異同の存する箇所には、傍線及びイ、ロ、の如き符号を付し、語釈を施した箇所には、本文右傍に①、②…の通し番号を付した。
- 一、底本で文意不通等が認められる場合、他本の本文に拠り通釈

を施した場合がある。その際、本文【校異】【通釈】において他本に拠った箇所を網掛けを施した。

一、引用本文は、原則として「新編国歌大観」に拠り、その他の引用文献は、適宜底本を示した。なお、引用本文には、適宜、傍線、振り仮名等を付した。

一、「万葉集」については、本文、歌番号ともに塙書房刊『万葉集訳文篇』を用いた。

〈七十九番〉

七十九番 忍久恋^①

左 持^イ

女房

つれなきもいはねはこそと思はずは年月いかでなからへも

せん

小宰相

人しれぬ心ハにふるす年月ハのいハのちハとなれる程ハそつれなき

左 題心ハおかしくとりなされて、下の句ハことハによるしく

こそ侍れ、右人しれぬ心ハにふるすとし月ハといへる、

題みな上句ハにきはまりて侍れと、哥ハから優ハに

侍を、程ハそつれなきと侍るそいか、ときこそえ侍、た、

はかなきなどやうハによはよはしきさまに侍らば、いま

すこしえんにも侍へくや、しかれとも是程ハにちか

つける程のおもひいて侍らねは、はしめて持ハの字

をゆるさるへきにや侍らん、

【校異】

イ 持—ナシ(書) 口 新後撰—ナシ(書・内・支・群)、新

後撰、恋一(聚) ハ 続後撰—ナシ(書・内・支・群)、続後撰、恋一(聚) ニ 人しれぬ—人しれず(支) ホ 年月の—とし月を(書) ヘ 題心—題のこ、ろ(書・支・群)、題の心を(内・聚) ト 下の句—下句(書・内・支・聚・群) チ 上句—かみの句(書・支) リ 哥から—うた(書) ヌ 侍を、程—侍るを、と(支) ル やうに—やうによみ(内・支・聚・群) ヲ 侍らは—侍れは(内) ワ 是程に—これ程の(内・支・聚)、これ程のつかひ(群) カ ちかつ—ナシ(群)

【他書所伝】

〈左歌〉

『新後撰和歌集』恋歌一・八二五・「宝治元年、十首歌合に、忍久恋」・後嵯峨院

つれなきもいはねばこそと思はずはとし月いかでながらへもせん

『題林愚抄』恋部一・六三一四・「新後撰」・後嵯峨院

つれなきもいはねばこそと思はずはとし月いかでながらへもせん

〈右歌〉

『続後撰和歌集』恋歌一・六七六・「十首歌合に、忍久恋」・土御門院小宰相

人しれぬ心ハにふるす年月ハのいハのちハとなれるほどぞつれなき

『題林愚抄』恋部一・六三〇九・「忍久恋」、続後撰・土御門院小宰相

人しれぬ心ハにふるすとし月の命ハとなれるほどぞつれなき

【語釈】

①忍久恋—『新編国歌大観』によると、『教長集』「わがこひのおなじいろなるころもでにふりぬるなみだ猶つつむかな」(恋歌・六五八)が「忍久恋」題を最初に使ったと思われる。『教長集』は平安末期の歌集で、作者藤原教長は院政期に活躍した歌人、歌

学者。没年は未詳であるが、治承二年七〇歳までは生存していた。
②いはねはこそと—時代が下るが、「思へどもいはねはこそとなくさめてながらへにける我ぞつれなき」〔新統古今和歌集〕恋歌一・一〇九七・「忍久恋を」・平光俊)があつて、当該歌の影響下の詠歌かと思われる。

③なからへもせん—当該歌以前の用例は見当たらず、同じ嵯峨院の召しによる『弘長百首』に「とへかしなあまのまてかたさのみやはまつに命のながらへもせん」(恋二十首・不逢恋・四五八・融覚)がある。為家は「下の句ことよろしくこそ侍れ」と評するが、やや無骨な表現というべきか。

④人しれぬ—「人」には、(恋する)相手の意と、(世間の)人の両方の用例がある。「人しれぬ思ひやなぞとあしかきのまぢかけれどあふよしのなき」〔古今和歌集〕恋歌一・五〇六・(題しらず)・(読人しらず)、「人しれぬ思ひをつねにするがなるふじの山こそわが身なりけれ」〔古今和歌集〕恋歌一・五三四・(題しらず)・(読人しらず)等は前者、「ひとしれぬわがかよひちのせ関守はよひよひごとのうちもねななむ」〔古今和歌集〕恋歌三・六三二・「ひむがしの五条あたりをしりおきてまかりかよひけり、しのびなるところなりければかどよりしもえいらでかきのくづれよりかよひけるを、たびかさなりければあるじききつけてかのみちに夜ごとを人ふせてまもらすれば、いきけれどえあはでのみかへりてよみてやりける」(業平)は後者。後者については『伊勢物語新釈』に「人にしられぬと云べきをつづめていへる哥詞なり」と説明している。当該歌では後者の意と解しておく。

⑤いのちとなれる—管見の限りでは当該歌の独自表現。「かぎりなきいのちとなるもなべて世の物のあはれをしればなりけり」

〔長秋詠草〕下・四一一・「人記品／寿命無有量、以愍衆生故」は類似表現。俊成歌では「かぎりなきいのち」で「永遠の命・寿命」をさしている。

⑥程そつれなきと侍るそいか、ときこえ侍—「程そつれなき」は当該歌以前には見当たらず、以後も「時鳥よそに過行く—こゑの又おとづれぬ程ぞつれなき」〔新統古今和歌集〕夏歌・二五〇・「夏歌の中に・足利義詮」を見る程度である。「程ぞはかなき」の例は「数ならばいとひもせまし長月にいのちをかくるほどぞはかなき」〔源氏物語〕藤袴・四〇三・鬚黒大将)や「ぬる夢にうつつのうさもわすられておもひなくさむほどぞはかなき」〔新古今和歌集〕恋歌五・一三八四・(題しらず)・徽子女王)など多くの例がある。

〔通釈〕

七十九番 忍久恋

左(歌) 持

女房(後嵯峨院)

(あの人が自分に)冷淡なものも、自分が(あの人への)恋心を胸に忍んで)打ち明けないからだと思わないならば、長い年月をどうして(生き)承らえられようか。

右(歌)

(承明門院) 小宰相

誰も知らない(私の)心の中だけで過ぎて行く(報われない)年月が、(やがて私の)命(を支えるもの)となつた定め、なんとつれないこと。

〔判詞〕左(歌は)歌題を味わい深く(意識的に)とりなして、下の句が殊によろしうございます。右(歌は)「人しれぬ心にあふるとし月」と言っていて、題(の意)がみな上句に集中しておりますものの、(全体に)歌がらが優であります(が)、「程そつれなき」とありますのがさあどうであろうかと思われれます。ただ

「はかなき」などと弱弱いさまでございましたならば、いまま少し艶でもございましたでしょう。けれどもこれほどに（左歌に）近づいたほどの思い出もございませんから、はじめて「持」の字を（付けることを）許されるべきでもございませうか。

八十番

八十番

左 勝

太政大臣

① さのみやはたえぬ思もかくれぬの下行水のくるしかるへき

右

俊成卿女

秋をへて時雨の色を忍ふ山露をもらすな道のはてまで

左かくれぬの下行水といへるいか、と見え侍れと、ことはやすらかにいひしりて、殊よろしく侍めり、右ことなる難には侍らねと、忍ふ山はみちのおくと申ならひたり、道のはてなるとはひたちおひにいひつきて侍にや、まことにおくまでといひてはよろしからず侍へかりけり、負侍れかし、

【校異】

イ 勝—ナシ（書） 口 思も—おもひも（書・内・支・聚・群）
ハ といへる—そ（書・内・支・聚・群） 二 いか、と—いかにと（書・内・支・聚・群） ホ 難には—難も（内・聚）
へ ならひたり—ならひ（書・内・支・聚・群） ト なるとは—などは（書） チ つきて—つきん（書）、つけて（支・群）
リ にや、まことにおくまでといひてはよろしからず侍—ナシ（内・支・聚・群） 又 けり—ける（内・支・聚・群）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

① さのみやは—反語表現で「そうとばかり—であろうか、いやそうではない」の意。初句に置く勅撰集中の初例として、「さのみやはわが身のうきになしはてて人のつらさをうらみざるべき」〔金葉和歌集〕恋部下・四五五・「人をうらみてよめる」・源盛経母）がみえ、以後「さのみやはうけさへ君をうらむべきおきてきつるは人のとがかは」〔林葉和歌集〕恋歌・七四三・「顕輔卿家歌合に、後朝恋」、「さのみやはあはぬためしのあるべきとまたぞこひぢにおもひたちぬる」〔教長集〕恋歌・六四三・「おなじこころをよめる」等、用例が散見する。

② かくれぬの—隠れている沼が原義。忍ぶ恋を詠み込む際によく用いられる。「かくれぬのした行く水のおもほえばいかにせよとか我がねそめけん」〔古今和歌六帖〕一六八六・「ぬま」・赤人）「紅の色にはいでじかくれぬのしたにかよひてこひはしぬとも」〔古今和歌集〕恋歌三・六六一・「寛平御時きさいの宮の歌合のうた」・友則）。

③ 下行水—忍ぶ恋を詠む際にしばしばみえる表現。「山高みした行く水のしたにのみ流れてこひむこひはしぬとも」〔古今和歌集〕恋歌一・四九四・「題しらず」・読人しらず）、「かくとだにおもふ心をいはせ山した行く水のくさがくれつつ」〔新古今和歌集〕恋歌二・一〇八八・「恋うたあまたよみ侍りけるに」・実定）等はその一例。

④ 忍ふ山—信夫山。陸奥国の歌枕。「伊勢物語」第十五段で「男」が「しのぶ山忍びて通ふ道もがな人の心のおくも見るべく」と詠む。

⑤ 忍ふ山はみちのおくと申ならひたり―「いかにしてしるべなくとも尋ね見んしのぶの山のおくの通路」〔長秋詠藻三五九・頼輔朝臣の歌合によみておくりし五首中、忍恋〕、「おくもみぬ忍ぶの山に道とへば我が涙のみさきにたつかな」〔拾遺愚草〕二五七七・「建久七年内大臣殿にて、文字をかみにおきて廿首よみ侍りしに、恋五首、かたおもひ」〔隆信集〕恋一・四七八・「西行かなしのぶの山のおくの通路」〔隆信集〕恋一・四七八・「西行上人伊勢百首に」〔みちのくの忍の山のおくよりもおなじけふこそ春は立つらめ〕〔建保名所百首〕一八二・「忍山陸奥国」・「行意」等の如く、信夫山は多く「道」「奥」とともに詠まれている。

⑥ 道のはてなるとはひたちおひにいひつきて侍にや―「あづまぢのみちのはてなるひたちおびのかごとばかりもあひみてしかな」〔古今和歌六帖〕三三六〇・「おび」・友則を念頭に置いた指摘。

【通釈】

八十番

左(歌) 勝

太政大臣(西園寺実氏)

途切れることのない我が思いも隠れた沼のさらに奥底の水のように心の奥に秘めて苦しいばかりでいいものだろうか(早く思いをあらわにして幸せになりたい)。

右(歌)

俊成卿女

秋が深まり時雨によって紅葉する色を忍んで露を漏らさないように涙を漏らすなよ、この恋路の果てまで。

【判詞】左(の)「かくれぬの下行水」と言う(表現)はどうであらうかと見えますが、詞も穏当に言い方を心得ていて、特によいでしょう。右(は)たいした難点ではないですが、信夫山では

「道の奥」と申す習いで、「道のはてなる」という表現は常陸帯(という詞)を続けるでしょう。(そうかといって)本当に奥までと言つてはよろしくないでしょう。(右の)負けでしょうよ。

〈八十一番〉

八十一番

左 持

權大―通忠

としをふる涙なりともをのつからもらさは袖のひまもあらまし

右

同上 実雄

下にのみ忍ふの山の岩こすけいはて思ひの年そへにける

左年をふるなみたなりともなど、上句艶に

見え侍を、右又いはて思ひのとしそへにける、よろしく侍れば、これらはは持とこそ申侍らめ、

【校異】

イ 持―ナシ(書) 口 權大― 權大納言(書・内・支・聚・群)

ハ 新後撰―ナシ(書・内・支・群)、新後、恋一(聚)

ニ 同―權大納言(書・内・支・聚・群) ホ 思ひの―思の

(内) ヘ 見え侍を―侍を(書・内・支・聚・群) ト へに

ける―へにけり(支) チ これらをは―これをは(内・群)、

是を以テ(支)、これを(聚) リ 持とこそ―持とこそは(内・聚・群)

※この箇所、底本は「れ」を見せけちとして「りイ」とする。

【他書所伝】

〈左歌〉

【新後撰和歌集】恋歌一・八三五・「宝治元年、十首歌合に、忍久恋」・右近大将通忠

年をふる涙なりともおのづからもらさば袖のひまもあらまし

【万代和歌集】恋歌一・一八七二・「十首歌合に、忍久恋といふことを」・右大将通忠

としをふるなみだなりともおのづからもらさばそでのひまもあらまし

【題林愚抄】恋部一・「同（新後撰）」・右大将

としをふるなみだなりともおのづからもらさば袖のひまもあらまし

〈右歌〉

【夫木和歌抄】雑歌十・一三五五四・「宝治十首歌合、忍久恋」・

山階入道左大臣

下にのみしのぶの山のいはこすげいはで思ひのとしぞへにける

【現存和歌六帖】二六三・権大納言実雄

したにのみしのぶのやまのいはこすげいはでおもひの年ぞへにける

【語釈】

①ひまもあらまし―「なれてこそ心にかかれ玉だれのみずはわするるひまもあらまし」【新統古今和歌集】・恋歌二・一一九六・

「建長二年三首歌めされける次に、恋の心をよませ給ふける」・

後嵯峨院、【秋風和歌集】恋歌中・八三六〇があり、「わすられぬ夢だになくはおのづからさむる涙のひまもあらまし」【風葉和歌集】恋四・九九二・「しのびたる女にたまはせける おなじ（我が身にたどるの）みかどの御歌」の例がある。

【通釈】

八十一番

左（歌） 持

（恋心を打ち明けられぬまま）長年にわたって流す涙であつても、万一それ（||その恋心）を（あの人に）洩らしたならば、袖の（乾く）ひまもあるだろうに。

右（歌）

（権大納言藤原）実雄

（心の底の）下にのみ忍ぶの山の岩こすげではないけれども、（あの人への恋心を）言わないまま、（恋しく）思う（ばかり）長い年月を経てきたことだよ。

【判詞】左（歌は）「年をふる涙なりとも」など、上句（が）艶に見えますが、（一方）右（歌も）又「いはて思ひのとしそへにける」（の表現が）、なかなかようございますので、これら（の歌）を持とこそ申すことにいたしましたしょう。

〈八十二番〉

八十二番

左

あふ事をまつに涙の夕しくれとしはふるとも色に出すな

右 勝

同 公相

名とり川思ひくちても年はへぬまたあらはれぬせ、の埋木

左まつになみたの夕時雨、つつきもいか、と聞え

侍に、色に出すなといひはてたる程、しかるへき

すかたならずや侍らん、右名取川、下句よろし

く侍れば、右尤勝侍へし、

定雅 さたまさ 古本

【校異】

イ 定雅—権大納言定雅(書・内・支・聚・群) 口 さたまさ
古本—ナシ(書・内・支・聚・群) ハ すな—めや(群) ニ
勝—ナシ(書) ホ 同—権大納言(書・内・支・聚・群) ヘ
侍に—侍るうへに(聚) ト すなと—めやなど(群) チ 程
—など(内・支・聚・群) リ 侍らん—ナシ(支)

【他書所伝】

へ左歌—ナシ へ右歌—ナシ

【語釈】

①涙の夕しくれ—先行例として、「深山ゆく秋の涙のゆふしぐれ
あらそふものか槇の下葉も」(建永元年七月「卿相侍臣歌合」
中暮・廿九番右・五八・成茂)がみえる。

②名とり川—名取川。陸奥国の歌枕。「名とり河せぜのむもれ木
あらはれば如何にせむとかあひ見そめけむ」(「古今和歌集」恋歌
三・六五〇・「題しらず」・よみ人しらず)以来、「ありとても
あはぬためしのなとり河くちだにはてねせぜの埋木」(「新古今和
歌集」恋歌二・一一一八・「撰政太政大臣家歌合」よみ侍りけ
る」・寂蓮)、「なげかずよいまはたおなじなとり川せぜの埋木く
ちはてぬとも」(「新古今和歌集」恋歌二・一一一九・「千五百番
歌合」・良経)等、「埋れ木」とともに詠み込む恋歌が散見する。
③色に出すなといひはてたる程、しかるへきすかたならずや侍ら
ん—「色に出すな」という表現は先行例が見あたらない。

【通釈】

八十二番

左(歌)

(権大納言源) 定雅
(恋しい人に)逢うのを待ちこがれて夕方に時雨が降り注ぐよ
うに涙が流れる、(こんな風に忍んで)年は過ぎて行こうとも決

して他人に悟られはすまい。

右(歌)

同(権大納言西園寺) 公相

(あの人への恋しい) 思いが実らぬまま年月は経ってしまった。
二度とあらわれぬ瀬々の埋木(ののように)。

【判詞】左(の)「まつになみたの夕時雨」(という表現は、(詞
の)続き具合もどうであろうかと聞こえますが、(下の句で)「色
に出すな」と言い終えているあたり、理想的な姿でないのではな
いでしょうか。右(の)「名取川」は、下の句よろしいので、右
が当然勝ちです。

八十三番

左

公基

あふ事を命にかへて思ふ身の何と忍ひて年のへぬらん

右

為教

みなそこになひく玉もの年をへて思みたると人はしらしな

左下句すこし無念ともや申つへく侍らん、右

玉藻なといへる、哥さまいさ、かえんに侍にや、

へ八十三番

【校異】

イ ナシ—持(支) 口 同—権大納言(書・内・支・聚・群)
ハ あふ事を—逢うことは(書) ニ 勝—ナシ(書・内・支)
ホ 為教—為教朝臣(書・内・支・聚・群) ヘ 申つへく—申
へく(内・支・聚・群) ト えんに—ナシ(書・内・支・聚)、
勝(聚)、まさる(群) チ 侍にや—にや(群)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『題林愚抄』恋部一・六三一八・「(宝治御百首)」・為教朝臣
みなそこになびく玉もの年をへて思ひみだると人はしらじな

【語釈】

①なびく玉もの―「河のせになびくたまものみがくれて人にしられぬこひもするかな」(『古今和歌集』恋歌二・五六四・(紀とも
のり)や「いもせ川なびくたまものみがくれてわれはこふとも
人はしらじな」(『古今和歌六帖』第三・かは・一五七六)など、
恋の比喩に用いた多くの例がある。

【通釈】

八十三番

左(歌)

(あの人に)会うことを命に代えてもと祈っている我が身が、

何で恋心を秘めたまままで何年も経てきているのだろうか。

右(歌) 勝

(右近権少将藤原) 為教

水底に靡く玉藻が何年にもわたって乱れるように、私も(長年
あの人を恋うて) 思い乱れているとも、あの方は知らないのだな
あ。

【判詞】左(歌は)下句(の表現が)少々無念であるとも申しあ
げるのが適当でしょう。右(歌は)玉藻などと言って、(この方
が)歌さまが少々艶でありましょう。

八十四番

八十四番

左

知かたき人の心のやすらひにいはておもひの年をへにける

右 勝

信実

月ゆへと人にはいひて誰をかもめて、も恋の老となるらん

左上句題おほつかなく侍うへに、やすらひもすこし心

ゆかす侍にや、右月故と人にはいひてたれをかも

めて、も恋の老となるらん、心たくみにすかたお

かしく侍れば、まさり侍らん、

【校異】

イ 中――中納言(書・内・支・聚・群) 口 いはて―いか

て(支) ハ 年を―としそ(書・内・支・聚・群) 二 勝―

ナシ(書) ホ 信実―信実朝臣(書・内・支・聚・群)

へ 誰を―たれを(書・内・支・聚・群)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『夫木和歌抄』雑部十八・一七一一・「宝治十首歌合、忍久恋」・

信実朝臣

月ゆゑと人にはいひてたれをかもめてもこひのおいとなるらん

『題林愚抄』恋部一・六三一八・「(宝治御百首)」・信実朝臣

月ゆゑと人にはいひてたれをかもめても恋のおいとなるらん

【語釈】

①やすらひ―躊躇すること。「秋のよの有明の月のいるまでにや

すらひかねてかへりにしかな」(『新古今和歌集』恋歌三・一一六九・「九月十日あまり、夜ふけて、いづみしきぶがかどをたたかせ侍りけるに、きまつけざりければ、あしたにつかはしける」・敦道親王)、「あづまぢやしのぶのさとにやすらひてなこそせきをこえぞわづらふ」(『新勅撰和歌集』恋歌一・六七一・「題しらず」・西行)、「やすらひにいにし人のかよひぢをふるきのほら」といまはみるかな」(『六百番歌合』恋三・絶恋・十三番左・七四五・良経)、「やすらひにいにしままの月のかげ我がなみだのみそでにまでも」(同・恋六・寄月恋・五番左・九〇九・定家)等、恋歌の用例が散見する。

②おもひの年―片思いのまま年を経た意。「かずならでおもふおもひのとしふともかひあるべくもあらずなりゆく」(『好忠集』四五四・「ひのと」)、「大空にちぎる思ひのとしもへぬ月日もうけよ行すゑの空」(『後鳥羽院御集』承元二年二月内宮卅首御歌・一三七七・「雑」)等。

③月ゆへと―「なげけとて月やは物をおもはするかこちがほなるわが涙かな」(『千載和歌集』恋歌五・九二九・「月前恋といへる心をよめる」・西行)等、恋の物思いを月にかこつける発想。

【通釈】

八十四番

左(歌)

中(納言藤原) 為経

知りがたいあの人の気持ち(確かめようかどうしようかと)躊躇して(思いを)言い出さず思うだけの年月を経ってしまったのだなあ…

右(歌) 勝

(散位藤原) 信実

月のせいで、人には言つて、誰かを気に入り愛しても、結局、恋がそのまま老いになつてしまつてしまつてゐるのだろうか…

〔判詞〕左(の)上の句題がはつきりしない上に、「やすらひ」という詞の使い方)も少し納得行きませんでしょうか。右(の)「月故と人はいひてたれをかもめて、も恋の老となるらん」(という詠みぶりは)、心たくみで姿が面白いですので、勝つてしましう。

八十五番

八十五番

左

通成 みちなり 古本

忍^①ふるもくるしき物をなつ引^②のてひきの糸の年をへぬれば

右 勝 雅光 まさみつ 古本

思ひつ、いくとせ波にくちぬらん忍ふの浦の海士のたくなは

左て引の糸の年をへぬればと、をはりの句に

いひはてたる、いと程^③よりもつよく聞え侍にや、

右あまのたくなは哥^④すかたまさりて優に侍に、

下句や若ちかき哥に侍けん、れいの勘出侍らん程、

勝と申へし、

【校異】

イ 通成―右衛門督通成(書・内・支・聚・群) 口 みちなり

古本―ナシ(書・内・支・聚・群) ハ 勝―ナシ(書)

二 雅光―右近中将雅光(書・内・聚・群)、右近衛中将雅光(支)

ホ まさみつ 古本―ナシ(書・内・支・聚・群) ヘ いひは

てたる―いひえてたる(支) ト 程―おもひ(書) チ より

も―よりは(書・内・支・聚・群) リ つよく聞え侍にや―心

つよく聞え侍にや(内・聚・群)、ナシ(支) ヌ 右―ナシ(支)

ル たくなは—たくなはは(書) ヲ 哥すかた—うたのすかた
 (書・内・支・聚・群) ワ 侍に、下句や若ちかき哥に侍けん
 —侍らん(内・支・聚・群) カ 勘出—勘出し(内・支・聚・群)
 群) ヨ 申へし—申侍へし(書・内・支・聚・群)

【他書所伝】

へ左歌へナシ

へ右歌へ

『夫木和歌抄』雑部七・一一六八八・「しのぶのうら、陸奥／建
 長六年歌合」・雅光卿

おもひつついくとせなみにくちぬらんしのぶのうらのあまのたくなは

【語釈】

① 忍ふるもくるしき物を—「しのぶるもくるしかりけりかずならぬ人はなみだのなからましかば」(『金葉和歌集』三奏本・恋・四一九・「ものおもひはべりける時よめる」・出羽弁)なども先蹤がある。

② なつ引のてひきの糸—「ぬれつつもくると見えしは夏引のてびきにたえぬいとにやありけん」(『後撰和歌集』恋五・九七六・「雨にもさはらずまできて、そら物がたりなどしけるをとこの、かどよりわたるとて、雨のいたくふればなんまかりすぎぬるといひたれば」・(読人しらず) など、早くから用例がある。「夏びきのてびきのいとのとしをへてもたえぬおもひにむすほはれつつ」(『新古今和歌集』恋歌二・一一四〇・「ひさしきこひといへること」を・越前)の例もあり、越前は当該歌合の参加者であった。

③ 忍ぶの浦の海士のたくなは—「忍ぶの浦」は、陸奥国の歌枕。

「うちはへてくるしき物は人めのみしのぶのうらのあまのたくなは」(『新古今和歌集』恋歌二・一〇九六・「忍恋の心を」・二条

院讃岐)がある。この歌は『千五百番歌合』に提出された。「下句や若ちかき哥に侍けん」との為家の指摘はこの歌を意識しているようか。

【通釈】

八十五番

左(歌)

(恋心を打ち明けないで) 忍んでいるのも苦しいこと、夏引の手引きの糸が年を経たので(弱るように)。

右(歌)

(あの人を恋しく) 思い思いしながら何年波に朽ちてしまっていることだろう、しのぶの浦の海士の栲縄は。(そして同じような自分は。)

【判詞】左(歌は)「て引の糸の年をへぬれは」と、末句に言い果てているのが、(歌中の)糸(の表現)よりも強く(不調和に)聞こえましよう。右(歌)「あまのたくなは」(の方)は歌姿が優でありますものの、下句はもしかしたら最近の歌にありましたでしょうか。(そうであっても)例によって(自分で)案出したところは、(こちらを)勝と申すべきでしょう。

へ八十六番

【校異】

八十六番

左 持

我ならぬ忍^いの山の松の葉も年へて色に出る物かは

右

おもふ事いはて心のうちにのみつもる月日をしる人のなき

兵 有教

弁内侍

左我ならぬといひはしむるより、いつる物かはとはて
 たるまで、いつくこそと見ゆる所なく、詞つよく
 よみくたして侍めり、右あやにくにちからなく優
 なる姿とりく⑤に侍れば、よき持とこそ見え侍れ、

イ 持—ナシ(書) 口 兵—有教—兵部卿有教(書・内・支・
 聚・群) ハ 新後撰—ナシ(書・内・支・群)、新後撰、恋一
 (聚) ニ ナシ—続拾遺、恋一(聚) ホ いはて—いかて(内・
 支・群) ヘ かはと—かはとて(内・支・聚) ト つよく—
 よく(書) チ くたして—出して(内・支・聚・群) リ と
 こそ—にこそ(書)

【他書所伝】
 <左歌>

【新後撰和歌集】恋歌一・八二六・「(宝治元年、十首歌合に、忍
 久恋)」。兵部卿有教

われならぬしのぶの山の松の葉も年へて色にいづるものかは

【夫木和歌抄】松・一三七八六・「宝治十首歌合、忍久恋」・大蔵

卿有家卿

われならぬしのぶの山の松のはもとしへていろにいづるものかは

【歌枕名寄】山・六九四〇・「同十一」・兵部卿有教

我ならぬしのぶの山の松の葉もとしへて色にいづるものかは

<右歌>

【続拾遺和歌集】恋歌一・七九〇・「(宝治元年十首歌合に、忍久

恋)」。院弁内侍

おもふこといはず心の中にのみつもる月日をしる人のなき

【題林愚抄】恋部一・六三三三・「同」・院弁内侍

おもふこといはず心のうちのみつもる月日をしる人ぞなき

【語釈】

① 忍の山の松の葉—「忍の山」(信夫山)については、八十番参
 照。信夫山と松風の取り合わせとしては、「谷川の氷につけてし
 のぶ山なほうきものは松のゆふ風」(「壬二集」恋部・二八一二・
 「元久元年仙洞にて、北野宮歌合に、忍恋)」、「いかにせむしの
 ぶの山の峰の松いまひとしほの色にいでなば」(「範宗集」四九
 一・「春恋)」等。

② 詞つよく—「六百番歌合」恋部下・寄樵夫恋・廿八番では「こ
 ころざしあべのいちぢにたつ人はこひに命をかへむとやする」
 (家房)について「右、恋に命をといへる、つよき様に侍るべし、
 以右為勝」と積極的評価語として用いている。

③ よみくたして—「左右歌、上下句の心詞ともにをかしくよみく
 だされて侍れば」(「千五百番歌合」恋二・千二百七十四番判詞・
 顕昭)の如く、最初から最後まで詠みきっていることを指す。

④ ちからなく—女歌特有の嫵嫵たる風情を言うか。紀貫之は、「古
 今和歌集」仮名序で、小野小町の歌について「あはれなるやうに
 て、つよからず。いはば、よき女のなやめるところあるに似たり。

つよからぬは、女の歌なればなるべし」と評する。例えば、「千
 五百番歌合」の丹後の出詠歌「ひとりねの袖にしらるるしぐれこ
 そ秋しもわかぬものと見えけれ」(千三百三十番・二六五九)に
 ついて、「右歌は、かみしもあひかなひてよみおほせられて侍る
 めり、古今序に、小野小町が歌を申すに、艶にして気力なしと侍
 り、つよからぬはをんなの歌なればとまうせり、以右為勝」とい
 う判がみえる。

⑤ とりくく⑤に侍れば—左右両歌の美点を尊重する言。「左、すは
 のうみのこほり、右、おくやまのゆきの木ずえ、とりどりに見え
 侍れば勝負難定歎」(「千五百番歌合」春二・百四十九番判詞・忠

良判)等の例がみえる。

【通釈】

八十六番

左(歌) 持

兵(部卿源)有教

(あの人への恋心を忍びとおしている)私ならぬ、信夫山の松の葉も、長年たつと色にでる(恋心が外にあらわれる)ものだろうか。(松は常盤木だからそんなことはない。私もあの松のように辛抱して忍びとおそう。)

右(歌)

弁内侍

思っている事を言わないで(私の)心の内にばかり積み重なっていく月日を知る人のいないことよ。

【判詞】左(の)「我ならぬ」と言い始めるところから、「いつる物かは」と言い果てるるところまで、どこそこ(が欠点)と見える所がなく、詞を強く最初から最後まで詠み下しています。右(の)女の歌らしく(ひじょうに弱々しく優美な姿で(左右)めいめい(の良さ)です)、よい持とみえます。

八十七番

【校異】

八十七番

左 勝

師 継

人しれす思ひしほれて朽ねとや袖に年ふる我涙哉

右

雅 忠 朝 臣

いたつらに年をふるの、を篠原露たに秋の色に出めや

右 小篠原又ことなるふしもみえ侍らぬにや、秋と

侍も、させる用なくや、左くちねとやと侍そ心

ゆかぬ様に侍れと、袖に年ふる我涙かなといへる
はよろしく侍れば、いさ、か勝とや申侍へき、

イ 勝—ナシ(書) □ 右近—右近中将(書・内・聚・群)、

右近衛中将(支) ハ ナシ—統拾遺、恋一(聚) ニ 人しれ

す—人もしれ(支) ホ 露たに—われたに(支) ヘ 又—ナ

シ(支・群) ト も—にも(内・聚・群) チ 我—ナシ(内)

リ いへるは—いへる(書) 又 は—ナシ(支) ル 申侍へ

き—申へき(書)

【他書所伝】

へ左歌

『統拾遺和歌集』恋歌一・七八九・「宝治元年十首歌合に、忍久

恋」・前内大臣師

ひとしれずおもひしをれてくちねとや袖にとしふるわが涙かな

『題林愚抄』恋部一・六三二・「同(統拾)」・前内大臣師

人しれずおもひしほれてくちねとや袖に年ふるわが涙かな

へ右歌—ナシ

【語釈】

①を篠原—小笹原。笹が生い茂っている原。「をざさ原風松露の

消えやらずこのひとふしを思ひおこな」(『新古今和歌集』雑歌

下・一八二二・「やまひかぎりにおほえ侍りける時、定家朝臣中

将転任のこと申すとて、民部卿範光のもとにつかはしける」・俊

成)の例があり、恋歌の例には「わがこひはあはでふるのをざ

さはらいく世までとかしものおくらん」(『新勅撰和歌集』恋歌

四・九〇四・「題しらず」・実朝)がある。

【通釈】

八十七番

左(歌) 勝

(右近権中将藤原) 師繼

あの人に知られないまま、思い萎れて朽ちてしまえ、というわけだろうか、(私の) 袖に長年にわたって降る涙であることよ。

右(歌)

(源) 雅忠朝臣

(いっこうに実ることなく) いたずらに年を経るばかりの、古野の小笹原、(まるで私自身のようだ) せめて露だけでも秋の色にあらわれればよいのに。

【判詞】 右(歌) 小笹原は特別な曲も見えないでしょう。「秋」とございますのも、特に用はないのでは。左(歌は)「くちねとや」とございますのがわかりにくいようでありますもの、「袖に年ふる我涙かな」と言っているのがよろしうございますので、(こちらを) 少々勝と申すべきでしょう。

八十八番

八十八番

左

沙弥蓮性

すかのねのしのひにむすふ^①下^②紐^③のとけすや恋む^④年はへぬとも

右 勝

下野

恋をのみしつか庵のかやむしろしきしのふまに年そへにける

左の下ひも忍ひにむすふ程、おもひいれて侍にや、

右俊頼朝臣哥思出され侍れとも、ことはのつ、

き是もよろしく侍れは、右勝にや、

【校異】

イ おひーひヒ (書・内・支・聚・群) 口 恋むー恋む (書・

内・支・聚・群) ハ へぬともーへぬれと (書) ニ 勝ーナシ

(書) ホ 年そーとしそイ(群) ヘ けるーけるイ(群) ト 左

のー左(書・群) チ ひもー紐も(支) リ いれてー出(書)

又 右俊頼ー俊頼(支) ル ことはのーことは(書)、ことの

(内・支・聚・群) ヲ 是もよろしくーよろしく(聚) ワ に

やーとや(支)

【他書所伝】

へ左歌 題林愚抄 恋部一・六三二〇・蓮性

すがのねの忍びにむすぶ下紐のとけばやとけん年はへぬれど

へ右歌

【蓮性陳状】 一九 恋をのみしづが庵のかやむしろ敷忍ぶまに年ぞへにける

【語釈】

①すかのねー「長し」「思ひ乱る」等に多く掛かる枕詞。「昔の根」

「忍ぶ」と続く例としては、『万葉集』に「(前略) 千鳥鳴くその

佐保川に石に生ふる昔の根取りてしのふ草(後略)」(巻第六・雑

歌・九四八・「四年丁卯の春正月、諸王・諸臣子等に勅して、授

刀寮に散禁せしむる時に作る歌一首」と見える。

②下おひのとけすやー底本「おひ」だが、諸本「ひも」とする点

底本の判詞に「左の下ひも」とある点、さらに「昔の根のねもこ

ろ君が結びたる我が紐の緒を解く人はあらじ」(『万葉集』巻第十

一・物に寄せて思ひを陳ぶる・二四七三)、「人まつをいふはたが

ことすがのねのこのひもとけてといふはたがこと」(『猿丸集』

九・「いかなりけるをりにか有りけむ、女のもとに」等、「紐」

とともに詠み込まれる例が見える一方で、「管の根」「帯」という先行例が見えない点等から、「下ひも」として解釈する。なお、「下紐が解ける」は、「我妹子し我を偲ふらし草枕旅の丸寝に下紐解けぬ」(『万葉集』巻第十二・羈旅にして思ひを發す・三一四五)等に見える如く、衣の下紐が自然に解けるのは恋人が自分に逢いたがっているしるしとする俗信による。

③しつか庵―身分の低い者の住む粗末な庵。「いとどしくしづのいほりのいぶせきに卯のはなくたし五月雨ぞする」(『千載和歌集』夏歌・一七八・「堀河院御時、百首歌たてまつりける時、五月雨のうたとてよめる」・基俊)等の例がみえる。「賤」には、「恋をのみしづのをだまきくるしきはあはで年ふる思ひなりけり」(『千載和歌集』恋歌三・七八八・「堀河院御時、百首歌たてまつりける時、恋の心をよめる」・師時)の如く、恋を「する」という意を掛ける。なお、「恋をのみしつか庵のかやむしろ」は「敷き」を導く序詞。

④おもひいれて侍にや―「宮河歌合」九番左「世の中を思へばなべてちる花の我が身をさてもいかさまにせん」(一七)について、定家は「左歌、世の中を思へばなべてといへるより、をはりの句の末まで、句ごとにおもひ入れて、作者の心ふかくなやませる所侍れば、いかにも勝ち侍らん」と評する。

⑤右俊頼朝臣哥思出され侍れとも―「あさではすあづまをとめのかやむしろしきしのびてもすぐすころかな」(『千載和歌集』恋歌三・七八九・「堀河院御時、百首歌たてまつりける時、恋の心をよめる」・俊頼)を念頭に置いた言。なお、『蓮性陳状』では、「判詞に、俊頼歌おもひ出され侍とも、詞つ、きよろしと候なる、此歌の本意は、しき忍ふを詮と見え候につきては、めつらしきふしなくや候らん」と指摘し、定家や家隆の先行歌を例示しつつ、下

野詠の表現が珍しくないことを指摘する。

【通釈】

八十八番

左(歌)

(あの人を) 恋い忍んで(こっそりと) 結ぶ下紐が解けないように、心解けぬまま私はあの人を恋いつづけよう。年月は経ても右(歌) 勝

恋をするばかり賤の庵のかやむしろではないが、(ずっとあの人を恋い忍んでいる間に年が経ってしまった)。

〔判詞〕左の「下ひも忍ひにむすふ」あたりは、(詠者が)心を込めていましょうか、右(歌は)俊頼朝臣の歌が思い出されますが、詞の続き具合もよろしいですので、右が勝でしょうか。

八十九番

八十九番

左

為氏朝臣

いはて思ふつらきま、なる年月の契イなロに、かゝる命ト

右 勝

少将内侍

おさふへき袖は昔に朽はてぬ我ハくろかみよ涙ニもらすな

たのみよなに、といへる艶ハに見え侍を、袖はむかしに

くちはてぬわかろかみよ涙ハもらすな、題心ハふかく

おも影あはれにいたはしくもみえ侍れば、左の負侍ハぬるにや、

【校異】

イ 年月の―年月を(群) 口 契よ―たのみよ(書・内・支・

聚)、誰みよ(群) ハ そーは(聚) ニ 勝ーナシ(書) ホ
 続後撰ーナシ(書・内・支・群)、続後撰、恋三(聚) へ くら
 かみよー黒かみに(支) ト たのみよーたれ見よ(内・支・群)
 チ 艶ー艶(書・内・支・聚・群) リ 題心ーたいの心(書・
 内・支・聚・群) 又 いたはしくもーいたはしく(支) ル 左
 のー左(書・内・支・聚・群) ヲ 負侍ぬるにやーまけ侍へき
 にや(書)、負侍るにや(支)

【他書所伝】

へ左歌へナシ

へ右歌へ

【続後撰和歌集】恋歌一・六七七・「(十首歌合に、忍久恋)」。少
 将内侍

おさふべきそではむかしにくちははてぬわがくろかみよなみだもら
 すな

【和歌口伝抄】少将内侍

おさふべき袖はむかしに朽ちははてぬわがくろかみよ涙もらすな

【題林愚抄】恋部一・六三一〇・「同(続後撰)」。少将内侍

おさふべき袖はむかしに朽ちははてぬわがくろかみよ涙もらすな

【閑窓撰歌合 建長三年】四十六番左・九〇・少将内侍

おさふべき袖は昔に朽ちははてぬわがくろかみよ涙もらすな

【女房三十六人歌合】七一・少将内侍

おさふべき袖はむかしに朽ちははてぬわが黒かみよなみだもらすな

【語釈】

①契よー書陵部本、内閣文庫本、支子文庫本、歌合類聚本は「た
 のみよ」としており、永青文庫本の為家の判詞も「たのみよな
 に、」としているので、「たのみよ」で解釈する。

【通釈】

八十九番

左(歌)

打ち明けぬまま、一方的に恋しく思いつづけ、(相手は私に)
 冷淡なままである(この)長い年月の、(はかない)頼み、いっ
 たい何に縋って(生きて)いる(私の)命やら。

右(歌) 勝

少将内侍

(涙を)押さえるべき袖はとつくの昔に朽ちははててしまった。我
 が黒髪よ、(独り寝の床で私が流す)涙を漏らさないでくれ。

【判詞】「たのみよなりに」と言っているのが艶に思われますが、
 「袖はむかしにくちははてぬわがくろかみよ涙もらすな」(と言っ
 ている)が、題意を深くあらわして(恋の)面影が心を打ちい
 たわしくも見えますので、(この番は)左が負けとなります。

へ九十番へ

九十番

左

経朝

山川の下行水のしたにのみ音こそたてね年はへにけり

右 勝

沙弥禅信

秋をへてふるき軒はの忍草しのひに露のいくよをくらん

左山川の下ゆくとはいかに侍にか、山たかみなどはき、
 なれて侍り、川水下行は、ことほりもかなはずや、又
 をとこそたてねといへるも、山川のをとにのみきく
 も、しきをなとこそ、ふるくも申ならひて侍れ、

かた／＼おほつかなくや、右ちからあるさまには侍ら
 ねと、難なきにつきて可為勝、

【校異】

イ 経朝—経朝朝臣(書・内・支・聚・群) 口 ふれともイへにけり—
れども(書・内・支・聚・群) ハ 勝—ナシ(書) ニ しの
ひ—しのふ(群) ホ をくらん—へぬらん(内・支・聚・群)
へとは—水とは(聚・群) ト などは—なと(内・支・聚・
群) チ 侍り—侍る(内・支・聚・群) リ 川—河の(書・内・
支・聚・群) ヌ 又 ことはりも—ことはり(聚) ル も—と(支)
ヲ も、しき—百しき(書) ワ なとこそ—なと(書)、なとを
こそ(内・支) カ さま—やう(群) ヨ つきて—つけて(支・
群) タ 可為勝—為勝(書・内・支・聚・群)
※この箇所「百」と読んだが、存擬。

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ
〈右歌〉

【題林愚抄】恋部一・忍久恋・六三二一・「已上同」(宝治御百首)・禅信

秋をへてふるき軒ばの忍ぶ草しのびに露のいくよおくらん

【語釈】

- ① へにけり—諸本により「ふれとも」に改める。
- ② ふるき軒ばの忍草—「忍くさ」は、「忍ぶ草」と「忍ぶ」の掛詞。定家撰「小倉百人一首」に採られた「もししきやふるきのきはのしのぶにも猶あまりある昔なりけり」(『統後撰和歌集』雑歌下・一二〇五・「題しらず」・順徳院)は著名。
- ③ 山川の下ゆくとはいかに侍にか、山たかみなとはき、なれて侍り—「山高みした行く水のしたにのみ流れてこひむこひはしぬとも」(『古今和歌集』恋歌一・四九四・「題しらず」・読人しらず)を念頭に置いた表現。「した行く水」は、「山した水」(山陰

を流れる水)と同意。

④ 山川のをとにのみきくも、しきをなとこそ、ふるくも申ならひて侍れ—「山河のおとにのみきくももしきを身をはやながら見るよしもがな」(『古今和歌集』雑歌下・一〇〇〇・「歌めしける時にたてまつるとてよみて、おくにかきつけてたてまつりける」・伊勢)を念頭に置く。「古今和歌集」歌の「音」は噂の意。

【通釈】

九十番

左(歌)

(左京権大夫藤原) 経朝
山川の山陰を流れる水が麓の方にばかりのみ音が立つように心の内ではばかり忍び音を立てよう、
右(歌) 勝 沙弥禅信

秋が過ぎて古い軒端の忍草のように恋人に飽きられてしまった人にはそつと露が置くように昔を恋い忍んで涙を幾夜流すのだからか。
【判詞】左(の)「山川の下ゆく」とはどういうことでしょうか。「山たかみ」等は聞き慣れてます。「川水下行」は、道理も叶わないか、又「を」とこそたてね」という(表現)も、「山川のをとにのみきくも、しきを」等に、古くに申し馴れています。(左右)それぞれ意味がはっきりしないか、右(は表現に)力強さがあるようではないですが、難がないので勝としよう。

〈九十一番〉

九十一番

左 勝

越前

故郷のしのぶの露も色に出ぬいつわか袖よ人の問まで

右

為家

いはて思ふ枕の下のなみたともしらしな人につもる年月

左忍ニ忍ハすくなくや侍らん、右つもるとし月術

尽たることにこそ侍めれ、れいの負侍へし、

【校異】

イ 勝―ナシ (書) 口 わか―わる (聚) ハ 為家―前権大

納言為家 (書・支・群)、前大納言為家 (内・聚) ニ 忍恋―

忍ニ忍ハる (書・内・支・聚・群) ホ 侍らん―ナシ (聚)

へ こと―ナシ (内・支・聚・群) ト れい―仍例 (支)

【他書所伝】

へ 左歌へナシ

へ 右歌へ

【題林愚抄】恋部一・「(宝治御百首)」・六三一七・為家卿

いはでおもふ枕のしたの涙をもしらしな人につもるとし月

【語釈】

①故郷のしのぶの露―故郷の軒のしのぶ草に置いた露の意。「故

郷のしのぶの露も霜ふかくながめしのきに冬はきにけり」(『拾遺

愚草』・冬・二四二〇・「(文治三年冬、侍従公仲よませ侍りし、冬

十首)。「(訳注藤原定家全歌集)」で久保田淳氏は「荒れまさる軒

のしのぶをながめつつしげくも露のかかる袖かな」(源氏物語・

須磨・花散里)を「参考」としてあげている。

②色に出ぬ―様子にあらわれること。涙の場合は血涙、紅涙となつ

て、人の目に見えるようになること。

③忍恋―永青文庫本以外の五本は「忍心」としており、こちらの本文を採用して解釈する。

【通釈】

九十一番

左(歌) 勝

(嘉陽門院) 越前

故郷の(軒の)しのぶ草の露も(秋が深まり周りも紅葉して)

色にあらわれてしまったことだ。いったいいつ、我が袖よ、(忍

ぶ恋心のために涙が紅涙にかわって袖の色を変え、)あの人(ど

うしたのかと) 尋ねてくれるまで(になるだろうか)。

右(歌)

(前権大納言藤原) 為家

(自分の気持ちを手相に)言わないままでも恋しく思つて(流す)

枕の下の涙とも、(あの人)知らないだろうよ。(彼と我の)人

の上に、ただ(むなしく)年月がつもるばかりで。

【判詞】左(歌は) (の題意) が少ないのではないでしょ

うか。右(歌は) 積もる年月(の間に、恋を成就させる)術が尽

きてしまったということのようであります。例によつて(右歌の)

負けでしょう。

宝治元年「院御歌合」注釈―「逢不遇恋」題―

位藤邦生 森下要治
田野慎二 山崎真克
赤迫照子 藤川功和

はじめに

『長崎大学教育学部紀要 人文科学』第七十五号（平成21年3月発行）に引き続き、宝治元年（一二四七）『院御歌合』の注釈を試みる。今回は「逢不遇恋」題十三番を取り上げる。各番担当者と所属を以下に示す。

九十二番―位藤邦生（長崎大学）、九十三番―赤迫照子（広島大学図書館）、九十四番―藤川功和（尾道大学）、九十五番―藤川、九十六番―山崎真克（松江工業高等専門学校）、九十七番―森下要治（広島文教女子大学）、九十八番―藤川、九十九番―田野慎二（広島国際大学）、百番―赤迫、百一番―山崎、百二番―田野、百三番―田野、百四番―位藤

凡例

一、底本は、永青文庫蔵本（一〇七・三六・七）（細川家永青文庫叢刊）第八卷所収）を用いた。

一、校合した諸本と略号は、以下の通り。

書―書陵部蔵本〔五〇一・七四〕（『新編国歌大観』の底本）

内―内閣文庫蔵本「百三十番歌合（外題）」〔二〇一・二四七〕
支―九州大学支子文庫蔵本（九一一・ホ・一）

聚―書陵部蔵歌合類聚本（『大日本史料』第五篇二十四所収）
群―群書類従本（巻第二百所収）

一、注釈は、番全体の本文【校異】を示した後、【他書所伝】【本歌（参考歌）】【語釈】【通釈】をあげた。

一、【語釈】の内、各詠作者並びに前号までに既出の語彙については、紙幅の関係上これを略した。

一、表記や送り仮名の異同はこれを略し、見せけちや補入符号によって訂正のある箇所は、訂正後の本文を採用した。

一、翻字本文には適宜読点を施し、字体は現行の活字体に改めた。
一、本文中、異同の存する箇所には、傍線及びイ、ロ、の如き符号を付し、語釈を施した箇所には、本文右傍に①、②…の通し番号を付した。

一、底本で文意不通等が認められる場合、他本の本文に拠り通釈を施した場合がある。その際、本文【校異】【通釈】において他本に拠った箇所を網掛けを施した。

一、引用本文は、原則として『新編国歌大観』に拠り、その他の引用文献は、適宜底本を示した。なお、引用本文には、適宜、傍線、振り仮名等を付した。

一、『万葉集』については、本文、歌番号ともに塙書房刊『万葉集 訳文篇』を用いた。

〔九十二番〕

九十二番 逢不逢恋^①

左 勝^① 女房

あかしかねまたる、物となりけりさしもいとひし鳥の八声も^③

右 小宰相

下のおひのあたに結し中なればめぐりあふへき限たになし^④

左さしもいとひし鳥の八こゑ、またる、物になれる

心、き、所おほくゆへふかく思入られて、優美の姿

幽玄の心、ことよろしくこそ侍れ、右下のおひ

あたにむすひしなどは、さもやとみえ侍に、下句

かきりたになしとて、恋心今は思すてたるやう^⑤

に見え侍、題の本意侍らねは、尤為負、

【校異】

イ 勝―ナシ(書) 口 八声も―八こゑを(内・支・聚・群)

ハ 物に―物と(内・支・聚・群) ニ おほく―多く侍る(群)

ホ ゆへふかく―ふかく(支・群) ヘ 入られて―いれて(内・

聚) ト 下のおひ―下のおひの(内・支・聚・群) チ 恋心

―恋の心(書・内・支・聚・群) リ 見え侍―見侍(内・聚)

又 本意―本意に(聚) ル 尤―尤可(内・聚)

【他書所伝】

〔左歌〕

『題林愚抄』恋部二・六九六六・「宝治元仙洞歌合」・女房

あかしかねまたる物と成にけりさしもいとひし鳥の八こゑに

〔右歌〕ナシ

【語釈】

①逢不逢恋―「ひとよとはいつかちぎりしかはたけのながれてとこそおもひそめしか」(『金葉和歌集』二度本・恋部上・三九七・「遇不遇恋の心をよめる」・経忠)、「おもひきやあひみし夜はのうれしさにのちのつらさのままさるべしとは」(『金葉和歌集』三奏本・恋下・四四〇・「逢不逢恋のこころを」・実能)とあるのが、歌題としての早い例。院政期・鎌倉期の勅撰集、私家集等に頻出する。なお、「逢不逢恋」「逢不遇恋」「会不会恋」等の表記がある。

②あかしかね―夜が明けるのを待ちかねて。「ほととぎす来鳴く五月の短夜も一人し寝れば明しかねつも」(『万葉集』巻第十・一九八一・「夏の相聞(鳥に寄する)」、この歌は『拾遺和歌集』夏・一五二・読人しらず、また人麿の作として『古今和歌六帖』第五・二六九九にも入集)。

③鳥の八声―暁に時を告げて多く鳴く鶏。「思ひかねこゆる関路に夜を深みやこゑの鳥に音をぞ添へつる」(『千載和歌集』恋五・九四八五・「隔関路恋といへるこころをよめる」・雅頼)がある。「堀河百首聞書」には「とほつみちいそぎて過ぎし関路には八こゑの鳥を人ぞ

となへし」(『堀河百首』雜廿首・一四一五・仲実)についての注に「庭鳥の声八声なくと申説候へどもたゞしげく啼くといへるまで也」と説明している。「かねのおともやこゑのとりもこころあらばこよひばかりは物わすれなれ」(『建礼門院右京大夫集』二七三)もある。

④下のおひの―下の帯の。枕詞。下の帯は下着、すなわち装束のしたの小袖にしめる帯のこと。帯がいったん左右に分かれて、結ぶときにまた合うところから、「別れて逢う」「めぐりて逢う」などにかかる。「したのおびの道はかたがた別るとも行きめぐりても逢はんとぞ思ふ」(『古今和歌集』離別・四〇五・友則)。小宰相の当該歌でも「めぐりあふへき」に掛かる。また「あたに結し」の縁語ともなる。

⑤かきりたになしとて、恋心今は思すてたるやうに―「かきりたになし」については、「すむ月もちさとのほかはこほりしきゆきのあしたはかきりだになし」(『千五百番歌合』冬三・九七六番右・一九五一・俊成)の如く、空間・距離を示すものがあるが、ここでは同じ『千五百番歌合』恋三・一二九二番左・二五八二「めぐりあはんかぎりはいつとしらねども月なへだてそよそのうき雲」(『新古今和歌集』恋四・二七二・良経、『秋篠月清集』八八六にも)のように、「限り」は「折、機会」の意となっている。「逢不逢恋」の題で「めぐりあふへき限たになし」と断定的な口調で言い切るのは「恋心今は思すてたるやうに見え侍」というのが為家の批判であった。

【通釈】

九十二番 逢不逢恋

左(歌) 勝

(あの人が出来ない長い夜を)あかしかねて、(自然)待たれるものになってしまったよ、(以前は、暁の別れを誘うものとして)あんなにも嫌っていた鳥の八声も。

右(歌)

(承明門院)小宰相

(はじめから)かりそめに結んだ(あの人との)仲だから、(今と違っては再び)めぐり逢う機会とてないことだ。

〔判詞〕左(歌)あんなにも厭うた鳥の八声が、(今では)待たれるものになった(という)趣旨は、聞きどころが多く趣深く共感を誘われて、(一首全体の)優美の姿幽玄の心は、殊によろしうございませぬ。右(歌の)「下のおひあたにむすひし」などは、そうもあらうと思われませぬものの、下句(に)「かきりたになし」と(言つ)て、恋の心は(もう)思い捨てているように見えますのが、(逢不逢恋という)題の本意ではございませぬので、(こちらを)当然負けといたします。

〈九十三番〉

九十三番

左

太政大臣

①身をうらの海士のもしほ木こりすまに立や煙のよそにきえつ、

右 勝^イ

俊成卿女

⑤ わけし夜の契もきえてかなしきはとへとこたへぬ道芝の露

左の哥のさまよろしき姿には侍を、こりすまと

はかりにてもあひにける心は侍ぬへけれども、右分し

夜のといへるより題心^チいますこしあらはにや、いか、

【校異】

イ 勝—ナシ (書) 口 契も—契と (内・支) ハ きえて—き

て (内・支) ニ 左の哥のさま—左うたのさま (書)、左のさま

(内・支・聚・群) ホ 姿には—姿に (支) ヘ こりすまと—

こりすまにと (内・支・聚・群) ト 侍ぬ—侍 (書) チ より

—よりは (内・支・聚) リ 題—題の (書・内・支・聚・群)

又 や—侍にや (書・内・支・聚・群)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉『蓮性陳状』一五・俊成卿女

わけし夜の契りも消えて悲しきはとへと答へぬ道芝の露

『題林愚抄』恋部二・六九六七・「宝治元仙洞歌合」・俊成

わけしよのちぎりもきえてかなしきはとへとこたへぬ道しばの露

【語釈】

① 身をうらの—「浦」と「憂」を掛ける。ここでは海士の辛い境遇と、恋の叶わぬ憂き我が身を掛ける。「見るめなきわが身をうらとし

らねばやかれなであまのあしたゆくくる」(『古今和歌集』恋歌三・六二三・「題しらず」・小野小町)。

② もしほ木—藻塩を焼く際にくべる木。「さみだれはあまのもしほ木くちにけりうらべに煙たえてほどへぬ」(『千載和歌集』夏歌・八五

・「崇徳院に百首歌たてまつりける時、よめる」・待賢門院安芸)。

③ こりすま—「こりすまに又もなきなはたちぬべし人にくからぬ世にしすまへば」(『古今和歌集』恋歌三・六三一・「題しらず」・よ

み人しらず)のように、「懲りもせず」の意。当該歌では「身をう

らの」と結びついて撰津国の歌枕「こりすまのうら」となり、「すま

と「須磨」の意を掛ける。『源氏物語』須磨卷「こりすまの浦のみる

めのゆかしきを塩焼くあまやいかが思はん」(一九〇・光源氏)。

④ 立や煙のよそにきえつ、—浦から遠く余所へと消えていくのに、

煙が性懲りもなく立ち続ける様子に、拒まれても懲りずに恋する意

を掛ける。「風をいたみくゆる煙のたちいでも猶こりすまのうらぞ

こひしき」(『後撰和歌集』恋四・八六五・「人のむすめのもとにしの

びつつかよひ侍りけるを、おやききつけていといたくいひければ、

かへりてつかはしける」・貫之)。

⑤ わけし夜—「道芝の露」を分け入って相手の許を訪ね、契りを結

んだ夜。「ささわけし袖のためしのぬれ衣ほさでいく夜の道芝の露」

(『俊成卿女集』三七・「不逢恋」)。

⑥ 道芝の露—道端の草の露。「尋ぬべき草の原さへ霜枯れて誰に問は

まし道芝の露」(『狭衣物語』四五・狭衣)のように、恋人の許への

道案内を尋ねるものとして詠まれている。また、結んだ契りのはかなさも表現する。「露」と「きえて」は縁語。「みちしばのつゆにあらそふわが身かないづれかまづはきえむとすらむ」(『新古今和歌集』雑下・一七八八・「題しらず」・実頼)。

⑦「こりすまとはかりにても」『新編国歌大観』では「こりすまとは、かりにても」と読点を打つが、ここは「こりすまとはかりにても」とし、左歌は「こりすま」という語がある程度で「逢不逢恋」題に叶っているという文意でとるべきであろう。

⑧題心いますこしあらはにや—右歌は「逢不逢恋」題の趣旨がはっきり現れているという評価。「題はあらはに心はこもりて、ことよろしきよし皆悉申す」(建長三年(一二五二)九月「影供歌合」八十五番判詞 ※判者は為家)。

【通釈】

九十三番

左(歌)

太政大臣(西園寺実氏)

憂き我が身は、こりすまの浦の海士がくべる藻塩木ではないが、余所に消えつつも立つのを繰り返す煙のように、懲りないことだよ。

右(歌) 勝

俊成卿女

(道を)分け入り、結んだ契りも消えて、悲しいのは道端の草の露に(あの人の許への道案内を)問うても答ええないことだ。

【判詞】左の歌の様は良い姿でございますが、「こりすま」という程でも逢瀬があった心はございますけれども、右は「分し夜の」とい

いますことで題の心が(左歌よりも)今少しはつきりしているのではないのでしょうか。いかがでしょうか。

〈九十四番〉

九十四番

左

通忠

限りとも思はてしもや契をきしそのま、にひぬ袖の白露

右 勝

実雄 さねを 古本

思ひ侘わか心にも忘れぬとなけにいひてもねはなかれつ、

左哥^④下句すこし心ゆかぬやうに侍うへに、右哥^⑤

心、さる^⑥事も侍なんとめつらしく侍れば、勝侍へきにこそ、

【校異】

イ 通忠—権大納言通忠(書・内・支・聚・群) □ しもや—の

みや(支) ハ 契—むすひ(内・支・聚・群) 二 勝—ナシ(書

・内) ホ 実雄 さねを 古本—権大納言実雄(書・内・支・聚・

群) ヘ 忘れぬと—わすれぬを(内・支・聚・群) ト なけに

—歎(書) チ 右哥—右うたの(書・内・支・聚・群)

リ さる—させる(書)

【他書所伝】

へ左歌へナシ へ右歌へナシ

【語釈】

①契をきし—お互いに約束する意。「千世へむと契りおきてし姫松のねざしそめてしやどはわすれじ」(『後撰和歌集』恋三・七九二・「方たがへに、人の家に人をぐしてまかりて、かへりてつかはしける」・(よみ人しらず)等。当該歌では、「契をきし」は上句と下句両方にかかるか。

②白露—「わがごとや君もこふらん白露のおきてもねてもそでぞかわかぬ」(『後撰和歌集』恋二・六二六・「とほき所にまかりけるみちより、やむごとなきことによりて京へ人つかはしけるついでに、ふみのはしにかきつけ侍りける」・よみ人しらず)等の如く涙を暗示する。

③ねはなかれつ、—声をあげて泣く意。「つれづれとながむる空の郭公とふにつけてぞねはなかれける」(『後撰和歌集』夏・「五月なが雨のころ、ひさしくたえ侍りにける女のもとにまかりたりければ、女」・一八五・(よみ人しらず)、「ひるはきてよるはわかるる山どりのかげ見る時ぞねはなかれける」(『新古今和歌集』恋歌五・(「題しらず」・一三七二・読人しらず)等。

④下句すこし心ゆかぬやうに侍—「そのま、」の内実が理解しにくい表現の不足を難じたものか。「契をきしそのま、にひぬ」と続ける と理解しやすい。

【通釈】

九十四番

左(歌)

(権大納言源) 通忠

最後まで思ったりもしないで(次を)約束したのだろうか。(けれども相手の心変わりによって)約束を交わした時のままで乾かない(私の)袖の涙・・・

右(歌) 勝

(権大納言藤原) 実雄

(相手が離れたことを)つらく思つて私だつてあの人のことなどもう忘れてしまったと気持ちのないようなことをいっても(相手の心変わりはやはり)つらくて(実際には)声をあげて泣き続けてしまふ。

〔判詞〕左歌(の)下の句は(意味として)すつきりしないようでございます上に、右歌(の)心、そのような事もございますでしょうと珍しくございますので、(右の)勝ちでございますよう。

へ九十五番へ

九十五番

左 勝

定雅

いたつらに明ぬくれぬと玉くしけ二たひあはぬ身こそつられ

右

公相 きんすけ 古本

忘れぬも我身のとかとしるはかりありしにかはるあかつきもかな

右有しにかはる暁もかな、優なるさまにきこえ侍る
 を、心いかにと侍にか、短慮まとひて思わき侍らぬ
 程、左ことほりかくれなく侍れば、勝侍へし、

【校異】

イ 勝―ナシ（書） □ 定雅―権大納言定雅（書・内・支・聚・

群） ハ 新後撰―ナシ（書・内・支・群）、続後撰、恋四（聚）

ニ 公相 きんすけ 古本―権大納言公相（書・内・支・聚・群）

ホ するはかり―しりにけり（内・支・聚・群） へ もかな―も

かなと（内・聚・群） ト さまに―さまには（書・内・聚）、やう

には（群） チ 侍るを―侍に（書・内・聚・群） リ ことほり

―詞は（内・聚・群） 又 勝侍へし―勝へし（内・群）、勝なるへ

し（聚） ※（支）は、判詞が全て欠

【他書所伝】

〈左歌〉

【新後撰和歌集卷】恋歌四・一〇五九・「宝治元年、十首歌合に、逢
 不遇恋」・花山院入道右大臣

いたづらに明けぬくれぬと玉くしげふたびあはぬ身こそつられ

へ右歌〉ナシ

【語釈】

①いたづらに明けぬくれぬと―「みねふかき山さくらどのいたづらに
 明けぬくれぬと花ぞふりしく」（承久元年（一二一九）『内裏百番歌

合』深山花・十六番左・三一・為家）、「いたづらに明けぬ暮れぬと
 住佐びぬ人めかれ行く草のとぎしは」（『洞院撰政治家百首』雜・山家
 五首・一六〇八・経通）等、中世には数例みえる。

②玉くしけ―玉匣。玉櫛笥とも。玉は美称で、櫛等の化粧道具を入
 れる立派な箱。「明」「二（ふた）」「身」は縁語。「海辺月」題五十七
 番（『表現技術研究』第4号所収）参照。

③あかつきもかな―「暁であつてほしい」の意で、八代集にはみえ
 ない言い回し。「見ぬもうしみてもわりなし夢故に物を思はぬ暁もが
 な」（『林葉和歌集』恋歌・八九〇・「暁恋、右大臣家歌合」）、「いか
 にせん夕つけどりのおのづからなく音をいとふあかつきもがな」（『道
 助法親王家五十首』恋・寄鳥恋・九三三・知家）等。

④心いかにと侍にか―「ありしにかはる」が具体的にどういった状
 況を指すのかが曖昧な点を難じたものか。

【通釈】

九十五番

左（歌） 勝

（権大納言源）定雅

（このまま）甲斐なく明けた暮れたと（月日を過ぎし）二度と（あ
 の人と）逢わない我が身は本当に苦しいことだなあ。

右（歌）

（権大納言西園寺）公相

（相手が忘れたのなら私も相手を忘れないといけないのに、私の
 方はあの人を）忘れないのは私の罪と知らされるばかり。（あの人に
 逢っていた頃と）違う暁であつてほしいなあ。

〔判詞〕右（歌）「有しにかはる暁もかな」（という表現は）、優美であるように聞こえますが、（一首全体の）心はどうでございましょうか。浅慮に惑って判別出来ませんうちに、左（歌の）道理ははつきりしてございますので、勝でございましょう。

〈九十六番〉

九十六番

左

公基^イ

①今こむといひし契や^②あた人のた、偽のなさけなりけん^ロ

右勝^ハ

為教^ニ

思きやか、るつらさを契にて有し^③その夜をかきるへしとは

左右ともに同^ホほとにみえ侍に、今こんといひし

はかりにてもあふ心にはかよ^④侍らめと、ありし其

夜はたしかに侍れは、^⑤哥合^チのならひ勝と申侍へきにや、

【校異】

イ 公基―権大納言公基（書・内・支・聚・群） 口 なりけん―なるらん（書・内・支・聚・群） ハ 勝―ナシ（書） ニ 為教―為教朝臣（書・内・支・聚・群） ホ ほとに―ほとには（書）ヘ 心には―心に（支） ト かよひ―かなひ（内・支・聚・群）

チ 哥合の―哥合（書）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

【題林愚抄】恋部二・逢不遇恋・六九六九・（宝治元仙洞歌合）・為教朝臣

【語釈】

①今こむといひし契―男が女に対して今すぐに行くよと言った約束のことで、「今こむといひし」ばかりに長月のありあけの月をまちいでつるかな」（『古今和歌集』・恋四・六九一・「題しらず」・素性）をふまえた表現である。

②あた人のた、偽のなさけなりけん―約束したにもかかわらず訪れないので、移り気な人のひとえに偽りの情愛であった、と恨みを述べる意。あるいは、「こぬ人をうらみもはてじちぎりおきしそのことのはもなさけならずや」（『詞花和歌集』恋下・二四八・「新院位におはしましたし時、雖契不來恋といふことをよませ給けるにのみ侍りける」・忠通）、「いつはりのことのはならんとおもへどもちぎるはなほもなさけなりけり」（『六百番歌合』恋上・契恋・九番左・六七七・季経）などの例のように、男が約束したにもかかわらず訪れないことは、ひとえに移り気な人の偽りではあるけれど、その約束はせめてもの思いやりなのだと思える発想か。「逢不遇恋」題では、相手を

恨むよりは一途に恋情を吐露することが多いことから、試みに後者として解釈する。

③有しその夜をかきるへし―「ふえ竹のあなあさましのよの中やありしやふしのかぎりなるらん」〔千載和歌集〕雑歌下・誹諧歌・一九一・「堀河院御時百首のうち、恋の歌とてよめる」・基俊、「いかがせむ有りし別をかぎりにて此世ながらの心かはらば」〔拾遺愚草〕恋・二六五五・「ひさしくかきたえたる人に」などの例のように、あなたと逢ったその夜を最後の機会とするという意。

④あふ心にはかよひ侍らめと―左歌の「今すぐに行くよと言った」という表現だけでも「逢不遇恋」題の一度逢う心には通うものがあるが、右歌の「あなたと逢ったその夜」のほうが題意がはっきりと現れている点を勝負の根拠として指摘する。

⑤哥合のならひ―題意に適う歌を勝とするのが、歌合批評の習わしである。『千五百番歌合』春四・二百二十九番（俊成判）などに例が存する。

【通釈】

九十六番

左（歌）

（権大納言西園寺）公基

今すぐに行くよと言った約束は、ひとえに移り気な人の偽りではあるけれど、せめてもの思いやりだったのだなあ。

右（歌） 勝

（藤原）為教（朝臣）

思ってもみただであらうか。このような冷淡な仕打ちとなることを

二人の宿縁として、あなたと逢ったその夜を最後の機会とすることになろうとは。

〔判詞〕左右（の歌は）ともに同じほど（の出来）であるともえますのに、（左歌の）「今こんといひし」という表現だけでも題の一度逢う心には通うものがありますが、（右歌の）「ありし其夜」は題意がはっきりと現れておりますので、歌合の習わしとして（右歌の）勝と申すべきでしょう。

〈九十七番〉

九十七番

左 勝

中―為経

右

信実朝臣

いとはる、つらさある世の逢事を何そはまたとたのめをきけん
なにそは又とたのみをきけんといへる心、おかしく
思ひ入ることチによるしく侍を、いきてつらさをなけ
きけるあふにかへてし命ならずやと侍こそ殊
艶に侍れ、右すてかたく侍れとも、左猶勝侍へマきにや、

【校異】

イ 勝―ナシ(書) 口 中―中納言(書・内・支・聚・群)

ハ 続後撰―ナシ(書・内・支・群)、続後撰、戀四(聚)

ニ 歎ける―歎きつる^{ける}(支) ホ 何そは―何そ(内)

ヘ たのめ―契(書) ト たのみ―たのめ(内・支・聚・群)

チ ことに―こと葉(書)、詞(内・支・聚)、ナシ(群)

リ 殊―ことに(書・内・支・聚・群) ヌ 侍―ナシ(書)

【他書所伝】

へ左歌

【続後撰和歌集】恋四・八七一・「十首歌合に、逢不遇恋」・太宰権帥為経

つれなくぞいきてつらさをなげきけるあふにかへてしいのちならずや

へ右歌

【万代和歌集】恋歌四・二三七〇・「十首御歌合に、遇不逢恋を」・信実朝臣

いとほるるつらさあるよのあふことになにそはまたとたのみおきけん

【題林愚抄】恋部二・六九七〇・(宝治元仙洞歌合)・信実朝臣

いとほるるつらさあるよのあふことをなにぞは又とたのめおきけん

【語釈】

①あふにかへてし命ならずや―逢うことに代えて、捨てたはずの命ではなかったか、の意。下旬が完全に一致する例として「いきてな

ぞのちのつらさをなげくらむあふにかへてしいのちならずや」(『万代和歌集』恋歌四・二三九九・「遇不逢恋のころを」・法橋頭昭)が確認される。またこの他に次のような例が、逢うことの引き換えに命を捨てるという発想の先行例として「いのちやはなにぞはつゆのあだ物をあふにしかへばをしからなくに」(『古今和歌集』恋二・六一五・「題しらず」・とものり)など、多数確認できる。なお、「恋ひ死ぬ」の語を用いた歌に代表されるように、恋ゆえに命を捨てるという発想による歌そのものは『万葉集』以来たいへんに多い。

②たのめをきけん―「たのめをきけん」の箇所は、後続の判詞中の本文引用箇所も含めて、諸本の本文が一定しない。【校異】に示したように「たのめ」「たのみ」「契」の三つの形があるが、底本本文どおり「たのめお(を)く」として通釈する。

③おかしく思ひ入て―「やがて嫌われ逢えなくなることもあり得る逢瀬と分かっていたはずなのに、相手の「また(逢いにくるよ)」という言葉を当てにしまった」という右歌に対して、いったん肯定的な評価を与える言葉。右歌の理に傾いた内容について、特に評したものが。

【通釈】

九十七番

左 勝

中 (納言藤原) 為経

そしらぬ顔をして、生きたまま(逢えぬ)つらさをかこつことだ。逢うことに代えて、捨てたはずの命ではなかったか。

右

(藤原) 信実朝臣

嫌われるつらさというものがあつたこの世での逢うことなのに、どうして「また(逢いにくるよ)」と、あてにさせるようなことを言い置いたのだろうか。

〔判詞〕「なにそは又とたのみをきけん」という(一首の)心は、興深く思いを入れていて特によろしいのですが、「いきてつらさをなげきけるあふにかへてし命ならずや」とありますのこそ、特に艶でありましょう。右歌は捨て難いのですが、左歌をやはり勝とするのがよろしいでしょう。

〈九十八番〉

九十八番

左

右 勝

今はた、かさねし袖のうつりかも心のうちにのこる斗そ

右 勝

右 勝

うしとても恨ははてしかた糸のなからへは又あふ夜ありやと

左袖のうつりか、さもとおほえ侍を、とこの枕ねやの

むしろなどを、きて、心のうちにしものこるにかとお

ほつかなく侍り、右かたいとのなからへは又あふ夜あり

やと侍、させるとかむへきふしもみえ侍らねは、為勝、

【校異】

イ 右衛門督通成(書・内・支・聚・群) 口 ナシ―新
続古、恋四(聚) ハ 斗そ―はかなさ(内・支・聚・群)

二 勝―ナシ(書) ホ 右近中将雅光―右近中将雅光(書・内・聚・群)、

右近中将雅光(支) ヘ さもと―さもやと(書) ト などを

、きて―などをきて(内・支・群) チ にかと―かと(内・支・

聚・群) リ 侍り―侍る(聚) ヌ なからへ―存命(群)

ル 侍―侍に(書)

【他書所伝】

〈左歌〉

【新続古今和歌集】恋歌四・一四〇三・「宝治元年九月十三夜内裏十
首歌合に、遇不恋」・土御門入道前内大臣

いまはただかさねし袖のうつり香も心のうちに残るばかりぞ

〈右歌〉

【万代和歌集】恋歌四・二三八二・「十首御歌合に、遇不恋を」・
右近中将雅光

うしとてもうらみははてじかたいとのながらへばまたあふよありや
と

【語釈】

①かさねし袖のうつりか―『建礼門院右京大夫集』に「わびつつは
かさねし袖のうつり香におもひよそへてをりしたちばな」(一五二・
「かへし」・建礼門院右京大夫)という類例がみえる。

②かた糸のなからへは又あふ夜ありやと―「かた糸」(片糸)は、縫り合わす前の細糸。ここでは、「かたいとをこなたかなたによりかけてあはずはなにをたまのをにせむ」(『古今和歌集』恋歌一・四八三・「題しらず」・読人しらず)等の如く、「あふ」に「逢う」意を掛ける。また、糸を縫り合わせて長くすることから、「よりかけてまだ手になれぬ玉のをのかたいとながくたえやはてなん」(『拾遺愚草』一四五六・「不遇恋」)、「としをへて思ひやよわるかた糸のながらへ」(『隣女集』恋・一四一七・「久恋」)等とも詠まれる。

③とこの枕ねやのむしろなどを、きて、心のうちにしものこるにかとおほつかなく侍り―移り香は、枕や筵と縁がある表現なのに、それらの表現を用いず「心のうちにのこる斗そ」と詠じた点を難じたもの。「心にも袖にもとまるうつり香をまくらにのみやちぎりおくべき」(『建礼門院右京大夫集』一四八・「返りてのちみつけたりけるとて、やがてあれより」・資盛)、「あかざりし袖のかたみのうつりがを枕にのこすよはのむめがえ」(『親清五女集』一六六・「梅薰枕」)等は、判詞の指摘と符合する例。

【通釈】
九十八番

左(歌)

右衛(門督源) 通成
今となつては(昔)重ねた袖の移り香も(消えてしまって)心の中に残るばかりだよ……

右(歌) 勝

右近(衛中將源) 通光

つらいけれども恨み切ることはするまい。片思いと言つても(細糸を縫り合わせて長くなるように)永らえばまた(あの人に)逢う夜がありはしないかと(思われるので)……

【判詞】左(歌)「袖のうつりか」、そうであろうとも思えますが、「とこの枕」「ねやのむしろ」など(の表現)を差し置いて、(香りが)心の内にだけ残る(と理解する)のかと(表現として)あいまいでございませう。右(歌)「かたいとのなからへは又あふ夜ありや」とございませう、これといった非難すべき節もみえませぬので、勝とする。

〈九十九番〉

九十九番

左 持

右 弁内侍

たのめをきし我身やあらぬとはかりを今一たひはいかてとはまし
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦
またれしをかはるつらさと思ふまにやかてこぬ夜のつもりはてぬ
④ ⑤ ⑥ ⑦

左は、道雅卿、おもひたえなんの心優に侍れとも、をよひ
かたく侍にや、右又、やかてもちりのといへる事ならひて、
共に心詞ふるきを思ふに、おなし程にて、為持、

【校異】

イ 持―ナシ(書) □ 兵―兵部卿(書・内・支・聚・群)

ハ とはかりを―と斗を本ノマ、(内) ニ 一たひは―一度を(内・支・

聚)、一たひと(群) ホ ナシ―新續古、戀四(聚) へ つもり

―つもる(支) ト はてぬる―ぬる哉(書)、はかなさ(支)

チ をよひ―おもひ(内・支・聚・群) リ 又―ナシ(内・支・

聚・群) 又 ちりの―ちりての(支) ル ならひて―かよひて

(書・内・支・聚・群) ヲ ふるきを―ふかきを(内・支・群)、

ふかき(聚) ワ 思ふに―おもへり(書)、かす(内・支・群)、

おもひ(聚) カ 程にて―程とて(書)

【他書所伝】

へ左歌>ナシ

へ右歌>

【新統古今和歌集】恋四・一四〇四・「(宝治元年九月十三夜内裏十
首歌合に、遇不会恋)・後深草院弁内侍

またれしをかはるつらさと思ふまにやがてこぬ夜のつもりはてぬる

【本歌】

へ左歌>

【後拾遺和歌集】恋三・七五〇・「(伊勢の齋宮わたりよりのぼりて
はべりけるひとにしのびてかよひけることを、おほやけもきこしめ
してまもりめなどつけさせたまひてしのびにもかよはずなりにけれ
ばよみはべりける)・左京大夫道雅

いまはただおもひたえなんとばかりを人づてならでいふよしもがな

【参考歌】

へ左歌>

【千載和歌集】恋五・九二七・「題不知」・俊恵

君やあらぬわが身やあらぬおぼつかなたのめしことのみなかりぬ
る

へ右歌>

【千載和歌集】恋四・八八〇・「恋のうたとてよめる」・さぬき

ひとよとてよがれし床のさむしろにやがてもちりのつもりぬるかな

【語釈】

①たのめをきし―(あなたが)あてにさせた、の意。「たのめおくこ
との葉だにもなきものをなにかかされるつゆのいのちぞ」(『金葉和
歌集』二度本・恋上・四二〇・「恋のころを人にかはりて」・皇
后宮女別当)、「よひのまままつに心やなぐさむといまこんとだにた
のめおかなん」(『千載和歌集』恋三・八〇三・「百首歌たてまつり
ける時、恋のころをよめる」・上西門院兵衛)などのように、女
性が男の不実を恨む歌で用いられる場合もあるが、当該歌では、【本
歌】と同様に、何らかの事情で逢えなくなった女を恨む男の心で詠
じられている。

②我身やあらぬ―我が身は同じ我が身ではないのか、の意。【参考歌】
に掲げた俊恵歌により、言外に、あなたは元の同じあなたではない
のか、の意を含ませているか。「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身

ひとつはもとの身にして」「古今和歌集」恋五・七四七・業平、「伊勢物語」第四段)の世界が髣髴とされる。

③今一たびは—せめてもう一度だけは、の意。「あらざらんこのよのほかのおもひいでにいまひとたびのあふこともがな」(『後拾遺和歌集』恋三・七六三・「こちれいならずはべりけるころ人のもとにつかはしける」・和泉式部)。

④またれしを—(相手の訪れが)自然と待たれましたが、の意。「を」は軽い逆接を表す。「いりあひのおとにつけてはまたれしをねよとのかねに思ひよわりぬ」(『六百番歌合』恋上・待恋・十三番左・六八五・顕昭)

⑤かはるつらさ—(相手の心が)変わってしまう辛さ、の意。「いきて又かはるつらさを見つるかな心にかなふいのちならねば」(『洞院撰政家百首』遇不逢恋・一三〇四・大納言四条坊門)。

⑥ならひて—学んで、または、真似をしての意。本歌合では、「右ふるき哥のことはおなし句詞イにならひてめつらしき心きこえずや侍らん」(百十二番判詞)という例があり、否定的な評語である。他本の「かよひて」だと、似通つての意となる。いずれにせよ【参考歌】に掲げた二条院讚岐歌との表現・趣向上の共通点が問題になっている。

⑦心詞ふるきを思ふに—他本では、「ふるき」を「ふかき」とするものが多いが、底本の方が意味を取りやすい。「詞は古きを慕ひ、心は新しきを求め、及ばぬ高き姿をねがひて……」(『近代秀歌』)などと考えるのが定家の教えである。ここでは、両首ともに、古歌の詞・

歌境を志向している点を一応認めてはいるが、それほどの成果は得られていないと判じられている。

【通釈】

九十九番

左(歌) 持

兵(部卿藤原)有教

(あなたが)期待させた私は、昔の私ではないのですか(あなたは昔のあなたではないのですか)と、ただそれだけを、せめてもう一度だけは何とかして尋ねたいものです。

右(歌)

弁内侍

(あの時は、あなたの訪れが)待たれましたが、(あなたの)心変わりが辛いと思っておりますうちに、そのまま(あなたが)通つて来ない夜の日数がすっかり積もり重なってしまったことです。

【判詞】左は、道雅卿の、「おもひたえなん」の歌の心が優美に感じられますが、(道雅卿の歌には)及びがたいのではないでしようか。右もまた、「やかてもちりの」という歌の表現に学んでいて、両首共に心や詞が古いことを心掛けていますが、同じ程度のもので、持とします。

〈百番〉

百番

左

韋イ師イ繼

① 忘らるゝ思にきえぬ命こそをのか物からうらみられけれ

右勝

雅忠朝臣

はかなしやたか心よりとたえしてみる夜もしらぬ夢のうき橋

左心おかしく侍に、下句そ我身をはうらみぬ事

といひさためたるやしに侍、右ゆめのうきはし、心もうか

れたるさまに侍れと、こと葉つゝき優なるすかた

に侍れば、まさると申へきにこそ、

【校異】

イ 右近——右近中将(書・内・聚・群)、右近衛中将(支)

口 けれ—ける(内) ハ 勝—ナシ(書) ニ 朝臣—ナシ(内

・支) ホ ナシ—續拾遺、戀五、(聚) ヘ 夜も—よし(支)

ト 心おかしく—おかしく(支) チ 事と—事に(書・内・支・

聚・群) リ いひさためたるやしに—いひさためたるやしに(書

・内・聚・群)、いひさためやうに(支) ヌ さま—やう(書)

ル 優なるすかたに—優なるすかた(内・群)、優にすかた(支)

ヲ 申へきに—申へき(支)

【他書所伝】

へ左歌へナシ

へ右歌へ『続拾遺和歌集』恋歌五・一〇四八・〔題しらず〕・大納言

雅忠

はかなしやたが心よりとたえしてみるよもしらぬ夢の浮橋

【語釈】

① 忘らるゝ思にきえぬ命—自分の恋心が相手に忘れられ、悲しくて

死んでしまいたい、それでもなお消えずにいる命。「思」に「おも

ひ(火)」を掛ける。「火」と「きえぬ」は縁語。「うつりがのうすく

なりゆくたきものくゆるおもひにきえぬべきかな」(『後拾遺和歌

集』恋一・七五六・「あるをんなに」・清原元輔)、「よとともうき

人よりもつれなきはおもひにきえぬいのちなりけり」(『千五百番歌

合』恋二・千二百十一番右・二四二一・惟明親王)。

② みる夜—夢を見る夜と男女が逢う夜を掛ける。「せきかへす涙の川

にうきねしてみる夜の夢のさだかにもあらぬ」(『後鳥羽院御集』一

五九四・「依忍増恋」)。

③ 夢のうき橋—夢。「源氏物語」の最終巻名を、藤原定家が「春の夜

のゆめのうき橋とだえして峰にわかるる横雲のそら」(『新古今和歌

集』春歌上・三八・「守覚法親王、五十首歌よませ侍りけるに」と

詠んで以来、和歌で用いられるようになる。「とたえして」は夢が途

切れることと男女の逢瀬の途絶えの意を掛ける。「はかなしや夢のわ

たりの浮橋を頼む心の絶えも果てぬよ」(『狭衣物語』一五二・狭衣)。

④ 下句そ我身をはうらみぬ事といひさためたるやしに侍—左歌の下

句の表現では、自分の命を恨むばかりで、我が身の方は恨まないこ

とと取り決めたかのようにあるということ。「やし」は諸本によって

本文を改める。

⑤ 心もうかれたるさまに侍れと—右歌では「夢のうき橋」という表

現だけでなく、歌の趣旨も恋心が抑えきれず落ち着かない様子を詠んでいるという意。

【通釈】

百番

左(歌)

右近(衛中将藤原) 師継

私の思いは(あなたに)忘れられ、死んでしまいたいが、(それでもなお)消えない命は、我が物ながら恨まれることだよ。

右(歌)

勝

(源) 雅忠朝臣

はかないものだなあ。誰の心変わりによって途絶え、見られる夜もわからない夢なのか。

〔判詞〕左は歌の趣旨が面白くございますが、下句では(まるで)我が身を恨まない事に取り決めたかの^{よう}でございます。右の「ゆめのうきはし」は、心もすっかりしていない様子ですが、ことばの続きが優美な姿でございますので、(右歌が)勝っていると申しあげるべきでしょう。

〈百一番〉

百一番

左 勝^イ

沙弥蓮性

①たのめてもこぬ偽にふけし夜をなかくや人の忘^口はてける

右

下野

②おとろかす人しなければ今はた、みしは夢かと誰に問はまし
左、こぬいつはりにふけし夜^イ、ことによるしく侍めり、
右もみしは夢かとたれにとはましなというに侍
れとも、今はた、といへるほど、をとり侍へし、
③

【校異】

イ 勝―ナシ(書)

口 忘はてける―忘果ぬる(書)、わかればて

ける(内・支)、別はてける^{ぬイ}(聚)、別はてぬる(群) ハ ナシ―

續拾遺、戀三(聚) ニ 夜―夜を(内・支・聚・群)

【他書所伝】

へ左歌へナシ

へ右歌へ

【続拾遺和歌集】恋歌三・九四二・「宝治元年十首歌合に、逢不遇恋」

・後鳥羽院下野

おどろかす人しなければ今はただみしは夢かと誰にとはまし

【語釈】

①たのめてもこぬ偽―私に頼みにさせていながら来ない偽りの状態の意。「たのめつつこぬ夜あまたに成りぬればまたじと思ふぞまつにまされる」(『拾遺和歌集』恋三・八四八・「題しらず」・人麿)、「たのめつつこぬいつはりのつもるかなまことのみちにいりし人さへ」(『建礼門院右京大夫集』一一二九・「しりたる人のさまかへたるが、

こんといひておともせぬに」などの例がみえる。

②おとろかす人しなけれは―「あさましやみしはゆめか」とふほどにおどろかすにもなりぬべきかな」(『後拾遺和歌集』恋三・七三四・「頼綱朝臣ちちのともみものくにはべりけるとき、かのくにのをむなにあひてまたおともしはべらざりければ女のよめる」・読人不^知)をふまえた表現。自分に逢いに来てくれる人の不在を嘆く。

③今はた、―一度逢つて後再び逢えない現在の状況を詠むのが「逢不遇恋」題であるので、「今はた、」とわざわざ詠む必要はないというのが判者為家の批判であると考えられる。

【通釈】

百一番

左(歌)

沙弥蓮性

私に頼みにさせていながら来ない偽りの状態のまま更けた夜を長く私を感じるように、永久にあの人は忘れ果ててしまったのだ。

右(歌) 勝

下野

(自分に逢いに来て) 気付かせてくれる相手がないので、今となつてはもう現実にお逢いしたのは夢かと一体誰に尋ねたらよいのであろうか。

〔判詞〕左(歌の)、「こぬいつはりにふけし夜」、特によろしゅうございます。(右歌)も「みしは夢かとたれにとはまし」などという表現は優でございますが、「今はた、」という部分は、劣っております。

〈百二番〉

百二番

左 勝

為氏朝臣

ありしよをこふるうつ、はかひなきに夢になさはや又もみるや

と

右

少将内侍

夢にたに今はみゆとはみえした、忘れし人にそはぬ身なれは
おなし夢、左、めつらしく見なして侍にや、為勝、

【校異】

イ 勝―ナシ(書)

口 續千載―ナシ(書・内・支・群)、續千載、

戀三(聚)

ハ みるやと―みるやと(書)、みゆやと(内・支・聚

・群)

ニ みゆとは―みゆとも(書) ホ そはぬ―そめぬ(内

・支)

へ 左―左は(書・内・支・聚) ト 見なして―見なし

(内・支・聚・群)

【他書所伝】

へ左歌

『続千載和歌集』恋三・一四二二・「宝治元年十首歌合に、遇不逢恋」
・前大納言為氏

ありし夜をこふるうつつはかひなきに夢になさはや又もみゆやと

【題林愚抄】六九四一・（統千）／逢不遇恋・為氏

ありしよをこふるうつつはかひなきに夢になさばや又もみゆやと
〈右歌〉ナシ

【参考歌】

〈左歌〉

【後拾遺和歌集】恋二・六七五・「をむなにつかはしける」・西宮前
左大臣

うつつにてゆめばかりなるあふことをうつつばかりのゆめになさば
や

〈右歌〉

【古今和歌集】恋四・六八一・（題しらず）・伊勢

夢にだに見ゆとは見えじあさなあさなわがおもかげにはづる身なれ
ば

【語釈】

①ありしよを―過ぎ去ったむかしの逢瀬の夜を、の意。「有りし夜や
うら島が子の箱ならんあけにし日より逢ふ事のなき」（『堀河百首』
遇不逢恋・一一二二・永縁）「よ」には、「世」（男女の仲）を響かせ
る。「めのまへにかはりぬめりとみるものをまたわすれずやありしよ
のこと」（『和泉式部集』六〇七）。

②夢になさはや―夢にしてみたいものです、の意。現実には甲斐がな
いのでその代わりに夢を頼みとするという趣向は、小町歌「うたた
ねに恋しきひとを……」（『古今和歌集』恋二・五五三）に代表され

る伝統的な発想である。直接は、【参考歌】に掲げた後拾遺歌を念頭
に置く。この後拾遺歌は、『和泉式部集』に採録されており（五八四
・「人のおきたりけるかがみのはこそ、かへしやるとて」）、作者は
和泉式部かと思われる。なお、和泉式部には、「うつつにて思へばい
はむかたもなし今宵のことを夢になさばや」（『和泉式部集』四一七、
『和泉式部日記』一三二にも）という歌もある。

③又もみるやと―もう一度（夢で）見えるかと思つて、の意。「見る」
という自分の意志で行う行為よりも、「見ゆ」とするイ本注記などの
本文が適切であろう。「おもひかね夢にみゆやとかへさずはうらさへ
袖はぬらさざらまし」（『千載和歌集』恋三・八二八・「題不知」・頼
政）。

④夢にたに今はみゆとはみえした、―（あなたと逢えなくなつた）
今となつては、せめて夢の中だけでも（あなたに）見えているとは、
ただもう思われたくはないのです、の意。【参考歌】に掲げた伊勢歌
を念頭に置いた表現。「みえした、」は、「ただ見えじ」の倒置表現。

⑤忘れし人にそはぬ身なれは―（私のことを）忘れたあの人に寄り
添わない我が身ですので、の意。二人の仲が疎遠になつても心（魂）
は身から離れてあの人への許へさまよい行くという発想が根底にある。
「ものおもへばさはのほたるをわがみよりあくがれにけるたまかと
ぞみる」（『後拾遺和歌集』雑六 神祇・一一六一・「をとこにわすら
れて侍けるころきぶねにまゐりてみたらしがはにほたるのとび侍け
るをみてよめる」・和泉式部）がよく知られている。「いとほるるみ

をうしとてや心さへわれをはなれて君にそふらん」〔千載和歌集〕
恋三・八三〇・「題不知」・隆親)なども一例。【参考歌】に掲げた伊勢歌の趣向をなぞりつつ、下句の状況を替えて、「遇不逢恋」の心を表した。

【通釈】

百二番

左(歌) 勝

(藤原) 為氏朝臣

昔の、あの逢瀬の夜のことを恋しく思う今の現実には甲斐のないものですので、いっそのこと夢にしてみたいものです。もう一度(夢で)見えるかと思つて。

右(歌)

少将内侍

(あなたと逢えなくなった)今となつては、せめて夢の中だけでも(あなたに)見えているとは、ただもう思われたくはないのです。(私のことを)忘れたあの人に寄り添わない我が身です。【判詞】同じ夢(を題材とした歌で)、左は、珍しく捉えてございませうか。勝とします。

〈百三番〉

百三番

左

経朝朝臣

① 暁はつらきならひの鳥の音を二たひきかぬ契なりけり
②
③

右 勝^イ

沙弥禅信

思きや手枕ふれし朝ねかみみたれてし又恋ん物とは

左、上句はよろしく侍を、八声の鳥のねふた、ひ

きかぬといへる心、おほつかなくや、二夜といへる心なる

へきにや、あふ事は、一夜逢たるによりて、題心ふか、

るへきにあらざるにや、右、手枕ふれしあさねかみ、

作者面影いか、とおほえ侍れと、勝侍へし、

【校異】

イ 勝―ナシ(書) ロ し又―もまた(書)、も又(内・支・聚・群)

ハ とは―かは(支) ニ 上句は―上句(内・支・聚・群)

ホ いへる心なるへきにや、あふ事は、一夜―ナシ(書)

へ あふ事は―あふ事(内・支・聚・群) ト 題心―題の心(内

・支・聚・群) チ にや―や(内・支・聚・群) リ 手枕―枕

(内・支・群) ヌ あさ―あした(支) ル 作者―作者の(書

・内・支・聚・群) ヲ いか、と―いかにとは(書)、いか、とは

(内・支・聚・群) ワ 侍れと―侍れとも(書)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【参考歌】

〈右歌〉

【拾遺和歌集】恋四・八四九・「題しらず」・人麿

あさねがみ我はけづらじうつくしき人のた枕ふれてしものを

〔万葉集〕卷第十一・正述心緒・二五七八、第三句「うるはしき」

第四句「君が手枕」、〔古今和歌六帖〕第五・「かみ」・三二七五など）

〔千載和歌集〕恋二・七五三・「乍臥無実恋といへる心をよめる」・

西住法師

たまぐらのうへにみだるるあさねがみしたにとけずと人はしらじな

【語釈】

①暁はつらきならひ―暁は、逢瀬を過ぎした男女の別れの時で、辛い憂きものとして詠じられる。「有あけのつれなく見えし別より暁ばかりうき物はなし」〔古今和歌集〕恋三・六二五・「題しらず」・忠岑）

②鳥の音―鶏の鳴き声。男女の暁の別れを告げる。「ひとりねし時はまたれし鳥のねもまれにあふよはわびしかりけり」〔拾遺和歌集〕恋二・七一八・「はじめて女の許にまかりて、あしたにつかはしける」・読人知らず）第二句「つらきならひの」は、初句を承け、第三句へ掛かる。

③二たひきかぬ契なりけり―二度は聞かない、（仮初めの）契りであったよ、の意。「けり」は、そのことに初めて気づいた意を表す。

④手枕ふれし朝ねかみたれてし又―（あの人の）手枕が触れた（私）朝寝髪が乱れてもまた、の意。「朝寝髪」は、朝の寝起きの乱れた髪で、男女が共寝した朝の様子を表す。「手枕ふれし朝ねかみ」は「みたれ」を導く序詞でもあり、「みたれ」には、気持ち乱れる意

を掛ける。なお、イ本注記や他の伝本の本文「みたれてもまた」が適切である。

⑤八声の鳥のねふたゝひきかぬといへる心、おほつかなくや、二夜といへる心なるへきにや、あふ事は、一夜逢たるによりて、題心ふかゝるへきにあらざるにや―「八声の鳥」は、鶏を指す。「おもひかねこゆるせきぢに夜をふかみやこゑの鳥にねをぞそへつる」〔千載和歌集〕恋五・九四八・「隔関路恋といへるころをよめる」・雅頼）

〔奥義抄〕には、「鶏をば八声の鳥と云ふ。やこゑ鳴く故也」、〔堀河院百首聞書〕には、「庭鳥のはつ音、八こゑ鳴と申説候へども、たゞしげく鳴といへる心まで也」とあり、文字通り、「八声鳴く鳥」という認識があった。判詞では、八声鳴くという鶏の鳴き声を二度聞かないという趣向の意味するところが判然としない点が難じられている。「八声」に留意すれば、当該歌では、逢瀬の夜を過ぎした男が、最初の鶏の鳴き声を聞いて慌ただしく帰った、とも解せよう。ただし、為家は、「二たひ」は、二夜と捉えるのがよく、一夜の逢瀬によって、「遇不逢恋」の題意がより深く表現されるのではないかと考えているようである。

⑥作者面影いかゝとおほえ侍れと―評語としての「面影」は、歌から感じられる情景、詩的なイメージを意味するが、ここでは、文字通り、人の面ざし、面もち、風貌を意味するか。当該歌は、女性の立場で詠じられた恋歌で、「くろかみのみだれもしらざうちふせばまづかきやりし人ぞこひしき」〔後拾遺和歌集〕恋三・七五五・「題

不知)・和泉式部)、「ながからむ心もしらずくろかみのみだれてけさは物をこそおもへ」(『千載和歌集』恋三・八〇二)・(百首歌たてまつりける時、恋のこころをよめる)・待賢門院堀川)、「かきやりしそのくろかみのすぢごとにうちふすほどは面かげぞたつ」(『新古今和歌集』恋五・一三九〇)・「題しらず」・定家)などのような、官能的な世界を志向したものであろう。僧が、女性の立場で恋歌を詠むことは珍しいことではないが、「手枕ふれしあさねかみ」という生々しい表現から、作者・禅信の面ざしが思わず想起されてしまったことを記したのであろうか。

【通釈】

百三番

左(歌)

(藤原) 経朝朝臣

暁には辛い習いの鳥の音を二度とは聞かない、(仮初めの)契りであつたことです。

右(歌) 勝

沙弥禅信

思いもしませんでした。(あなたの)手枕が触れた(私の)朝寝髪が乱れていたように、(こんなにも)思い乱れてもまた(あなたのことを)恋しく思うことにならうとは。

【判詞】左は、上句は悪くないのですが、八声の鳥の鳴き声を再び聞かないという趣向は、判然としないのではないのでしょうか。(「二たひ」というのは)二夜という意味でありましようか。逢瀬は、一夜逢つたことによつて、題意がより深まるのではないのでしょうか。

右は、「手枕ふれしあさねかみ」は、作者の面ざしはどんなものであつたかと思われませんが、勝とするのがよいでしょう。

〈百四番〉

百四番

左 勝

右

①よひのまのふけ行かねの恨たに思ひたえても年へぬる身を
 ②越前
 ③為家
 ④ホ
 ⑤かたり、うけられす侍れは、又負侍へし、

我はかり心なかさをかたるとも見しゆめとやは思ひあはせん
 左哥今の世まで思つ、けられ侍るらん、恋しき
 事に物忘せず、さもおかしくこそ侍れ、右のゆめ
 ⑤かたり、うけられす侍れは、又負侍へし、

【校異】

イ 勝―ナシ(書)

口 恨たに―限りたに(支)

ハ へぬる―
 けい

へける(書・内・支・聚)、へぬる(群) 二 為家―前権大納言為家(書・内・支・聚・群) ホ 見しゆめとやは―見しは夢とや(内・支・聚・群) へつ、けられ―つ、けられて(内・聚)

【他書所伝】

〈左歌〉

【題林愚抄】恋部二・六九七二・(宝治元仙洞歌合)・越前

あさねがみ我はげづらじうつくしき人のた枕ふれてしものを

〔万葉集〕卷第十一・正述心緒・二五七八、第三句「うるはしき」

第四句「君が手枕」、〔古今和歌六帖〕第五・「かみ」・三二七五など）

〔千載和歌集〕恋二・七五三・「乍臥無実恋といへる心をよめる」・

西住法師

たまぐらのうへにみだるるあさねがみしたにとけずと人はしらじな

【語釈】

①暁はつらきならひ―暁は、逢瀬を過ぎした男女の別れの時で、辛い憂きものとして詠じられる。「有あけのつれなく見えし別より暁ばかりうき物はなし」〔古今和歌集〕恋三・六二五・「題しらず」・忠岑）

②鳥の音―鶏の鳴き声。男女の暁の別れを告げる。「ひとりねし時はまたれし鳥のねもまれにあふよはわびしかりけり」〔拾遺和歌集〕

恋二・七一八・「はじめて女の許にまかりて、あしたにつかはしける」・読人知らず）第二句「つらきならひの」は、初句を承け、第三句へ掛かる。

③二たひきかぬ契なりけり―二度は聞かない、（仮初めの）契りであったよ、の意。「けり」は、そのことに初めて気づいた意を表す。

④手枕ふれし朝ねかみたれてし又―（あの人の）手枕が触れた（私）朝寝髪が乱れてもまた、の意。「朝寝髪」は、朝の寝起きの乱れた髪で、男女が共寝した朝の様子を表す。「手枕ふれし朝ねかみ」は「みたれ」を導く序詞でもあり、「みたれ」には、気持ち乱れる意

を掛ける。なお、イ本注記や他の伝本の本文「みたれてもまた」が適切である。

⑤八声の鳥のねふたゝひきかぬといへる心、おほつかなくや、二夜といへる心なるへきにや、あふ事は、一夜逢たるによりて、題心ふかゝるへきにあらざるにや―「八声の鳥」は、鶏を指す。「おもひかねこゆるせきぢに夜をふかみやこゑの鳥にねをぞそへつる」〔千載和歌集〕恋五・九四八・「隔関路恋といへるころをよめる」・雅頼）

〔奥義抄〕には、「鶏をば八声の鳥と云ふ。やこゑ鳴く故也」、〔堀河院百首聞書〕には、「庭鳥のはつ音、八こゑ鳴くと申説候へども、たゞしげく鳴といへる心まで也」とあり、文字通り、「八声鳴く鳥」という認識があった。判詞では、八声鳴くという鶏の鳴き声を二度聞かないという趣向の意味するところが判然としない点が難じられている。「八声」に留意すれば、当該歌では、逢瀬の夜を過ぎした男が、最初の鶏の鳴き声を聞いて慌ただしく帰った、とも解せよう。ただし、為家は、「二たひ」は、二夜と捉えるのがよく、一夜の逢瀬によって、「遇不逢恋」の題意がより深く表現されるのではないかと考えているようである。

⑥作者面影いかゝとおほえ侍れと―評語としての「面影」は、歌から感じられる情景、詩的なイメージを意味するが、ここでは、文字通り、人の面ざし、面もち、風貌を意味するか。当該歌は、女性の立場で詠じられた恋歌で、「くろかみのみだれもしらさうちふせばまづかきやりし人ぞこひしき」〔後拾遺和歌集〕恋三・七五五・「題

不知)・和泉式部)、「ながからむ心もしらずくろかみのみだれてけさは物をこそおもへ」(『千載和歌集』恋三・八〇二)・(百首歌たてまつりける時、恋のこころをよめる)・待賢門院堀川)、「かきやりしそのくろかみのすぢごとくにうちふすほどは面かげぞたつ」(『新古今和歌集』恋五・一三九〇)・「題しらず」・定家)などのような、官能的な世界を志向したものであろう。僧が、女性の立場で恋歌を詠むことは珍しいことではないが、「手枕ふれしあさねかみ」という生々しい表現から、作者・禅信の面ざしが思わず想起されてしまったことを記したのであろうか。

【通釈】

百三番

左(歌)

(藤原) 経朝朝臣

暁には辛い習いの鳥の音を二度とは聞かない、(仮初めの)契りであつたことです。

右(歌) 勝

沙弥禅信

思いもしませんでした。(あなたの)手枕が触れた(私の)朝寝髪が乱れていたように、(こんなにも)思い乱れてもまた(あなたのことを)恋しく思うことにならうとは。

【判詞】左は、上句は悪くないのですが、八声の鳥の鳴き声を再び聞かないという趣向は、判然としないのではないのでしょうか。(「二たひ」というのは)二夜という意味でありましようか。逢瀬は、一夜逢つたことによつて、題意がより深まるのではないのでしょうか。

右は、「手枕ふれしあさねかみ」は、作者の面ざしはどんなものであつたかと思われませんが、勝とするのがよいでしょう。

〈百四番〉

百四番

左 勝^イ

越前

①よひのまのふけ行かねの恨たに思ひたえても年^ハへぬる身を

右

為家

我はかり心なかさかたるとも見しゆめとやは思ひあはせん

左哥今の世まで思つ、けられ侍らん、恋しき

事に物忘せず、さもおかしくこそ侍れ、右のゆめ

かたり、うけられす侍れは、又負侍へし、

【校異】

イ 勝―ナシ(書)

口 恨たに―限りたに(支)

ハ へぬる―^{ケイ}

へける

(書・内・支・聚)、へぬる(群) 二 為家―前権大納言為

家(書・内・支・聚・群) ホ 見しゆめとやは―見しは夢とや(内

・支・聚・群) へつ、けられ―つ、けられて(内・聚)

【他書所伝】

〈左歌〉

【題林愚抄】恋部二・六九七二・「(宝治元仙洞歌合)」・越前

よひのまの深行くかねのうらみだに思ひたえでも年へける身を

〈右歌〉

『題林愚抄』恋部二・六九七三・「已上同（宝治元仙洞歌合）」・為家卿

我ばかり心ながさをかたるともみしは夢とやおもひあはせん

【語釈】

①よひのまの―越前の当該歌は、著名な「待宵の小侍従」の歌「まつよひのふけ行くかねのこゑきけばあかぬわかれの鳥はものかは」〔『新古今和歌集』恋歌三・一一九一・「題しらず」・小侍従〕と、「まちし夜のふけしをなになげきけんおもひたえてもすこしける身を」〔『金葉和歌集』二度本・恋部上・四〇二・「かたらひける人のかれがれになりてうらめしければつかはしける」・白河女御越後〕を合体させた趣の歌。

②思ひたえても―「誰かはと思ひたえてもまつにのみおとづれてゆく風はうらめし」〔『新古今和歌集』雑歌中・六二二・「守覚法親王、五十首歌よませ侍りけるに、閑居の心をよめる」・有家〕や「うらみわび思ひたえてもやみなましなにおもかげのわすれがたみぞ」〔『新勅撰和歌集』恋歌四・九二一・寂蓮〕など、「思ひたえても」の句を含む複数の歌があるが、『新編国歌大観』では、当該歌の「思ひたえても」を「思ひたえでも」と解している。これに従う。

③心なかさを―「心なかさ」は、「いつまでも心がわりしないこと、誠実であること、また、その度合」〔『日本国語大辞典』〕。「君を思ふ

心ながさは秋の夜にいづれまさと空にしらなん」〔『後撰和歌集』恋四・八四二・「返し」・源是茂、※またざりし秋はきぬれどみし人の心はよそになりもゆくかな（同・八四一・「心ざしおろかに見えける人につかはしける」・なかきがむすめ）への返歌〕などの用例があり、当該歌よりも後の歌に「あひみての心ながさを思ひやれつらきをだにも忘れやはする」〔『続拾遺和歌集』恋歌三・九一八・「題しらず」・津守国基〕の如き類想歌がある。

④見しゆめとやは―当該句は「見し夢とやは」（底本・書陵部本）と「見しは夢とや」（内閣文庫本・九州大学蔵支子文庫本・書陵部蔵類聚歌合本・群書類従本）の二つに本文が分かれている。後者が本来の形であれば、「見し（ふたりが逢って契りかわしたの）は夢だったと（あの人は）思い合わせるであろうか」の意となり、前者が本来の形であれば、「（ふたりの逢瀬は（実は自分のみた）夢だったと（あの人は）思い合わせるのではないか（まさかそんなことはあるまい））」の意となる。本注釈の方針に従って、通釈は底本の本文のままで行うことにする。

⑤うけられす侍れは―信頼して受け入れられませんのでの意で、否定的評価語の一つ。

【通釈】

百四番

左（歌） 勝

（嘉陽門院）越前

宵の間に、夜が更けて行くのを知らせる鐘の（音を聞きながらあ

の人の訪問を待っていた) あの恨みさえも(忘れず、あの人を) 思いつづけて、もう何年も過ぎたわが身だよ。

右(歌)

(前権大納言藤原) 為家

私ばかりが(あの人を忘れない) 心長さを語っても、(あの人の方は、私と違って、ふたりのことは) 見た夢だったと、思い合わせていることだろうか(まさかそんなことはないだろうけれど)。

〔判詞〕左歌は今の世まで(かわらず恋しく) 思いつづけられていますのでしよう。恋しい事を(そのままに) 物忘れせず、たいそう味わい深うございます。右(歌の) 夢語りは、受け入れにくうございますので、又負けとなります。

宝治元年『院御歌合』注釈―「旅宿嵐」題―

藤川 功和 位藤 邦生

田野 慎二 山崎 真克

はじめに

『表現技術研究』第5号（平成21年3月）に引き続き、宝治元年（一二四七）『院御歌合』の注釈を試みる。今回は「旅宿嵐」題十三番を取り上げる。各番担当者と所属を以下に示す。

百五番―位藤邦生（長崎大学）、百六番―藤川功和、百七番―位藤、
百八番―藤川、百九番―山崎真克（松江工業高等専門学校）、
百十番―位藤、百十一番―藤川、百十二番―田野慎二（広島国際
大学）、百十三番―位藤、百十四番―山崎、百十五番―田野、
百十六番―藤川、百十七番―藤川

凡例

一、底本は、永青文庫蔵本〔二〇七・三六・七〕（『細川家永青文庫叢刊』第八卷所収）を用いた。

一、校合した諸本と略号は、以下の通り。

書―書陵部蔵本〔五〇一・七四〕（『新編国歌大観』の底本）

内―内閣文庫蔵本〔百三十番歌合（外題）〕〔二〇一・二四七〕

支―九州大学支子文庫蔵本〔九一・ホ・一〕

聚―書陵部蔵歌合類聚本（『大日本史料』第五篇二十四所収）
群―群書類従本（巻第二百所収）

一、注釈は、番全体の本文【校異】を示した後、【他書所伝】【本歌（参考歌）】【語釈】【通釈】をあげた。

一、【語釈】の内、各詠作者並びに前号までに既出の語彙については、紙幅の関係上これを略した。

一、表記や送り仮名の異同はこれを略し、見せけちや補入符号によって訂正のある箇所は、訂正後の本文を採用した。

一、翻字本文には適宜読点を施し、字体は現行の活字体に改めた。

一、本文中、異同の存する箇所には、傍線及びイ、ロ、の如き符号を付し、語釈を施した箇所には、本文右傍に①、②…の通し番号を付した。

一、底本で文意不通等が認められる場合、他本の本文に拠り通釈を施した場合がある。その際、本文【校異】【通釈】において他本に拠った箇所に網掛けを施した。

一、引用本文は、原則として『新編国歌大観』に拠り、その他の引用文献は、適宜底本を示した。なお、引用本文には、適宜、傍線、振り仮名等を付した。

一、『万葉集』については、本文、歌番号ともに塙書房刊『万葉集訳文篇』を用いた。

〈百五番〉

百五番 旅宿嵐^①

左 勝^イ 女房

松かねの枕^②さためんかたそなきいかに^④はけしき夜半の嵐そ

右 小宰相

いくかへりなれぬ嵐も時雨らん都を忍ふ夜はのまくらに

右 哥題のほかのしくるらんといへる、なにのようとも

きこえ侍らす、夜はの枕になれぬあらしも、又こひ

ねかふへきこと葉つゝきならずや侍らん、左上下相

かなひて、旅宿のころ、景気、面影^⑤あらはに侍に、いか

にねし夜か夢にみえけむ、それとはなく思いたされ

侍、ことよろしくこそ、左尤勝侍へし、

【校異】

イ 勝―ナシ (書) ロ まくらに―嵐に (支) ハ いへる―ナ

シ (聚) ニ 侍らす―侍らぬ (書・内・群) ホ ねし夜か―ね

しよそ (支) ヘ それとはなく―それとはなくて (支)

ト 思いたされ侍―思ひ出され侍るに (支・群) チ ことに―ナ

シ (支・群)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【本歌】

〈左歌〉

『古今和歌集』恋歌一・五一六・「題しらず」・(よみ人しらず)

よひよひに枕さだめむ方もなしにねし夜か夢に見えけむ

『古今和歌六帖』第五・三三三四

ゆふさればまくらさだめんかたもなしにねしよかゆめにみえけ

ん

【語釈】

① 旅宿嵐―「岩がねのどこに嵐をかたしきてひとりやねなんさよの

中山」(『新古今和歌集』騎旅・九六二・藤原有家)の詞書に「石清

水歌合に、旅宿嵐といふ事を」とある。石清水歌合は建仁元年(一

二〇一)催行。定家、慈円の詠歌にも同歌合「旅宿嵐」題のものがある。

② 松かねの枕―「松かねの」は「待つ」「絶ゆ」にかかる枕詞。「松

かねの枕」は松の根を枕とすること、また松の根を枕として野宿す

ること。「松がねの枕もなにかあだならむ玉のゆかとしてつねのどこか

は」(『千載和歌集』羈旅歌・五一〇・崇徳院)などの例がある。

③ 枕さためんかたそなき―枕定むは、寝るとき頭にする方向を定め

る意。その方向によって恋人を夢にみるという俗信があった。当該

歌は先にあげた『古今集』歌を本歌として、恋歌を騎旅歌へと転換

しているが、本歌の「いかに」までを生かそうとしてやや生硬な表

現となっている。

④かたそなき―「かた」は「方角」や「手段」。「ながむればおもひやるべきかたぞなき春のかぎりの夕ぐれのそら」(『千載和歌集』春歌下・一二四・式子内親王)などの先例がある。

⑤面影―詩的イメージ。「景気」と通じるところがある。

⑥いかにねし夜か夢にみえけむ、それとはなく思いたされ侍―「いかにねし夜か夢にみえけむ」は、既出の『古今和歌集』、『古今和歌六帖』のほか『新勅撰和歌集』、『袋草子』、『定家八代抄』等に載せるよみ人しらず歌の下句で、為家はこの歌を本歌と考えていなかったことがわかる。

【通釈】

百五番 旅宿嵐

左(歌)

(今見渡せば、あたりは荒れ) 松がねの枕を定めて野宿をする方も手立てもない。そんなにも激しかった夜半の嵐であったことよ。

右(歌)

何度も何度も、馴れぬ嵐も時雨を運んで(袖は涙に濡れて) いるだろう。(旅にあつて恋しく) 都を忍ぶ夜半の枕に。

〔判詞〕右歌(は) 題にはない「時雨るらん」といつているのが、何の必要があるともわかりません。「夜はの枕になれぬあらし」というのも、又庶幾すべき言葉つづきではないでしょう。左(歌)は上句・下句(の表現)があいかなっていて、旅宿の内容、景気、面影があらわではありますが、「いかにねし夜か夢にみえけむ」という

女房(後嵯峨院)

小宰相

古歌)が、それとなく思い出されますのが、殊によろしゅうございまして、左(歌)がはるかに勝でございましょう。

【補遺】

「旅宿嵐」の歌は、この番の小宰相の歌を例外として、出詠者全員が「旅宿嵐」を経験する当人の視点で詠歌している。小宰相のみが、嵐を聞き時雨に涙して都を恋慕する人物を思いやる立場で歌を詠んでいる。この歌は土佐(阿波)に遷幸した土御門院の悲運を(歌合に参加した)人々に想起させたであろう。(拙稿「宝治元年『院御歌合』と小宰相」(『国語と教育』第三十三号、平成二十年十二月刊)

〈百六番〉

百六番

左 掛^イ

嵐とてよなくきしをとよりも旅ねの庵ははけしかりけり

右

俊成卿女

露^ロけさを契やをきし草枕^カあらし吹そふ秋のたひねに

あらしとてよなくきしと侍程は、すこしおほつ

がなく侍に、旅ねのいはははけしかりけりとてこそ、

故郷の事^トきなされてよろしく侍れ、露けき

草枕^カあらし吹そふ秋のたひねなどいへる、哥のすかた

優艶^ウに侍れは、持^トなど申へきにや、

【校異】

イ 持—ナシ(書) ロ ナシ—後拾遺、羈旅(聚)

ハ と侍程は、すこしおほつかなく侍に、旅ねの—ナシ(支)

ニ 事—事も(内・支・聚・群) ホ あらし—ナシ(支)

へ など—と(支・群)、など、(聚)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『続拾遺和歌集』羈旅歌・六七九・「宝治元年十首歌合に、旅宿嵐」

・皇太后宮大夫俊成女

露けさをちぎりやおきし草枕あらし吹きそふ秋のたびねに

『俊成卿女集』二二三・「宝治元年十月歌合、旅宿花」

露けさを契りやおきし草枕嵐吹きそふ秋の旅寝に

【語釈】

①旅ね—『万葉集』以来羈旅の歌をはじめ頻繁に用いられる表現。

当該歌合「旅宿嵐」題でも、当番右歌の他、百十番右歌、百十二番右歌、百十六番左右歌で詠み込まれている。旅寝と嵐という組み合わせの先行例としては、「吹きまよふあらしとともに旅ねする涙の床に木のはもるなり」(『散木奇歌集』冬部・五八八・「小野山家にて旅宿落葉を」)、「をしみかねはなのあたりに旅ねしつよはの嵐よ心してふけ」(『月詣和歌集』三月附羈旅・一七二・祝部成仲)等がみえる。

②露けさを契やをきし草枕—「露けさ」は、露のように湿りけが多

いことをいい、涙を暗示する場合もある。「草枕」は、本来枕詞だが、

草を結んだ枕、或いは旅や旅寝そのものを意味することもある。「つ

ねだにもねざめのそらはあるものを露けさまさるくさまくらかな」

(『兼澄集』「たびのねざめ」七二)、「草まくらかりがねのねにゆめ

さめてつゆけさまさるたびごろもかな」(『為忠家初度百首』秋・「羈

旅雁」・三四八)等に見る如く、旅寝において露けさがまさるとい

う系譜がみてとれる。また、「露けさ」は、「いとどしくこひしき人

のゆめにみてつゆけさまさるくさまくらかな」(『関白殿藏人所歌合』

「水上待月」題右・一七)、「あひみても帰るあしたのつゆけさはさ

さわけし袖におとりしもせじ」(『重家集』一八二・「後朝恋十首」)

等、恋歌でもしばしば用いられる。

③あらし吹そふ—『源氏物語』帚木巻で、夕顔の頭中将への返歌に

「うち払ふ袖も露けきとこなつに嵐吹きそふ秋も来にけり」(一六)

とみえる。

④あらしとてよなくきしと侍程は、すこしおほつかなく侍—(嵐

を夜な夜な聞く)という例は少なく、先行例として「中中にさても

ねぬべき夜な夜なをうたて嵐の窓たたくらん」(『仙洞句題五十首』

「寄風恋」・二七九・俊成卿女)がみえる。

⑤優艶—上品で美しいことをいう。『六百番歌合』において、俊成は

「くぢらとるかしくきうみのそこまでも君だにすまばなみぢしのが

ん」(七番左・九七三・「寄海恋」・頭昭)について、「いとおそろし

くきこゆ」とした上で、「凡は歌は優艶ならん事をこそ可庶幾」とす

る。

【通釈】

百六番

左（歌） 持

太政大臣（西園寺実氏）

嵐といつて夜ごと聞いていた（嵐の）音よりも、旅のやどりの庵（で聞く嵐の音）は（一層）激しかったよ。

右（歌）

俊成卿女

湿っぽさ（旅のわびしきで流す涙）をお互いに（あらかじめ）約束しておいたのだろうか。嵐が吹き加わる秋の旅寝に。

〔判詞〕「あらしとてよなくきし」とありますあたりは、（表現として）少しはつきりしません、「旅ねのいほははけしかりけり」とあるので、故郷の事が連想されてよろしうございます。露けき草枕「あらし吹そふ秋のたひね」などと詠じているのは、歌の姿が優艶でございますので、持など申すべきでしょうか。

〈百七番〉

百七番

左

① 夜をさむみ衣かせ山秋深てかたしく霜を問あらし哉

右 勝

② ③ ④ ⑤ 幾夜われかたしき侘ぬ旅衣かさなる山の峯のあらしに

左 哥させる難には侍らねと、哥合には、ふるくも

旅の心、みやこの遠きを思ふへきやうに申をき侍

にや、かせ山秋ふけてかたしく霜をとふ嵐など侍る、

ことにかけりたるすかたにて、今の世にはこひ

ねかふへき風体にも侍らぬ上に、旅衣かさなる

山はめつらしき事には侍らねと、題の中に

みえ侍れは、為勝、

【校異】

イ 通忠—権大納言通忠（書・内・支・聚・群） □ 勝—ナシ（書）

ハ 実雄—権大納言実雄（書・内・支・聚・群） 二 新後撰—新

後撰、羈旅（聚）、ナシ（書・内・支・群） ホ 左哥—左（聚・群）

ヘ 旅の—旅ねの（内・聚） ト 嵐など—嵐哉と（書）

チ かけりたるすかたにて、今の世にはこひ—ナシ（内・支・聚・

群） リ 事には—事に（内・支・聚・群）

【他書所伝】

〈左歌〉 ナシ

〈右歌〉

『新後撰和歌集』羈旅歌・五八四・「宝治元年、十首歌合に、旅宿嵐」

・山階入道左大臣

いく夜われかたしきわびぬ旅衣かさなる山の峰のあらしに

【語釈】

① 夜をさむみ衣—「かせ山」にかかる序詞。同じ序詞が「夜をさむ

み衣かりがねなくなへに萩のしたばもうつろひにけり」(『古今和歌集』秋歌上・二二一・「題しらず」・「よみ人しらず」)のごとく「かり(がね)」にかかる場合もある。

②かせ山―鹿背山。京都府相楽郡木津町北東部にある山。木津川に臨む。歌枕。「都いでて今日みかの原いづみ河かは風さむし衣かせ山」(『古今和歌集』羈旅歌・四〇八・「題しらず」・「よみ人しらず」)。

③かたしく霜を―「さむしろに衣かたしきこよひもや我をまつらむうちのはしひめ」(『古今和歌集』恋歌四・六八九・「題しらず」・「よみ人しらず」)を本歌として「さむしろや待つよの秋の風ふけて月をかたしく宇治の端姫」(『新古今和歌集』秋歌上・四二〇・定家)や「かたしきの袖をや霜にかさぬらむ月によがるる宇治のはしひめ」(『新古今和歌集』冬歌・六一一・「橋上霜といへる事をよみ侍りける」・法印幸清)など多くの歌が詠まれた。当該歌の「かたしく霜を」も同様の発想。霜を片敷いて侘しく寝る意。

④問あらし哉―訪ねてくる嵐よ。「まくらにも袖にも涙つららるてむすばぬ夢を問ふあらしかな」(『新古今和歌集』冬歌・六三二・「だいしらず」)・「後鳥羽院」他、多くの例がある。

⑤旅衣かさなる山の―「衣」と「かさなる」の縁語を用い、旅を重ね、幾つもの山を越えてきたことを表現している。「しぐれつつかさなる山のとび衣もみちのしづく袖もほしあへず」(『壬二集』六七八・「秋」)はその先例。

⑥かけりたるすかた―「かける」は、和歌で一句の表現に心の動き

がはつきり現れること。動的表現が鋭く出ていること。「にぶく眠りめなる歌人には、かけりたるかたをまなべと」(『ささめごと』)「ここでは否定的評価につながっている。

【通釈】

百七番

左(歌)

(権大納言源) 通忠

夜が寒いので衣を貸せという、鹿背山の秋が深まつてきて、霜を片敷いて(侘しく)野宿している(私のもと)を訪ねて来る嵐だよ。

右(歌) 勝

(権大納言藤原) 実雄

旅衣が重なり、(旅をつづけて)いくつも重なった山の峯を吹く嵐に、いったい幾夜、私は(旅の衣を)片敷き侘びたことだろうか。「判詞」左歌はとりたてて重大な難ではございませんが、歌合では、昔から旅の内容、都が遠いのを慨嘆すべきように申し置いたのではございませんでしょうか。「かせ山秋ふけてかたしく霜をとふ嵐」などございますのは、特に連想に飛躍の多い姿であって、今の世では庶幾すべき風体でもございませんに、(一方)「旅衣かさなる山」は珍しい事ではございませぬものの、(旅宿嵐という)題の中に(それが)見えておりますので、(こちらを)勝とします。

〈百八番〉

百八番

定雅

左 草枕夢^①のかよひち吹とちて夜半の嵐の音のさやけさ

右 勝 公相

本續後撰 嵐ふく嶺のさゝやの草枕かりねの夢はむすぶともなし^②

此左の哥も、夢の通路吹とちてといへる程、を^④

とめの姿をおもへる雲のかよひちよりは、まことすくなく侍にや、あらし吹みねのさゝや、おほつかなき

ふしも侍らねは、又右勝侍へし、

【校異】

イ 定雅—権大納言定雅（書・内・支・聚・群） □ さ—き（内

・聚） ハ 勝—ナシ（書） ニ 公相—権大納言公相（書・内・

支・聚・群） ホ 續後撰—ナシ（書・内・支・群）、續後撰、羈旅

（聚） ヘ 左の—左（書） ト 哥も—哥（聚）

チ まこと—まことに（内・支・聚・群） リ 又—ナシ（内・支

・聚・群）

【他書所伝】

〈左歌〉

『万代和歌集』雜歌四・三三七九・「十首御歌合に、旅宿嵐を」・権大納言定雅

くさまくらゆめのかよひぢふきとちてよはのあらしのおとのさやけさ

〈右歌〉

『続後撰和歌集』羈旅歌・一三〇二・「十首歌合に、旅宿嵐」・右近大将公相

あらしふくみねのささやの草枕かりねのゆめはむすぶともなし

『万代和歌集』雜歌四・三三八〇・「十首御歌合に、旅宿嵐を」・

権大納言公相

あらしふくみねのささやのくさまくらかりねのゆめはむすぶともなし

し

【語釈】

①夢のかよひち吹とちて—「夢のかよひち」は、夢路と同義。夢の

通路（夢路）が閉じられると詠む例は、「さゆるよのゆめぢは雪にと

ぢられてふしみのさとのかひやなからん」（『雲葉和歌集卷』冬歌・

八五二・（後京極摂政家にて三首歌講ぜられし時、伏見里雪）・宜

秋門院丹後）、「わするとてさてとぢむべき夢ぢかはのちの世までも

たえしあふせを」（『我が身にたどる姫君』四八・（関白）等がある

が、あまりみえない表現。夢が途絶えることをも意味する。

②嶺のさゝや—「さゝや」（笹屋）は、笹ぶきの小さな家で、「この

のへのくもぬのうへにすむ月のしづのささやにいかでもらん」（『唯

心房集』九六・（月の歌）、「あられふるしづがささ屋よそよさら

に一夜ばかりの夢をやはみる」（『拾遺愚草』・閑居百首・二六一・

「（冬十五首）」等がみえる。勅撰集では、当該公相詠と前掲定家詠

が『続後撰和歌集』に初めて入集する。「嶺の笹屋」とする例は、「つ

りぶねのはるかにうかぶかがり火をみねのささやにいくよみつらん」

〔『定家名号七十首』五六・「(山家)」にみえる。なお、右歌の類例として「ささの屋の夜ぶかきしものおきもせずねもせぬとこにあらし吹くなり」〔『明日香井和歌集』雜・一五六六・「これもおなじあづまの道にてよみ侍りける歌の中に」〕があげられる。

③むすふともなし―先行例として「なほざりに袖のあやめをかたしきて枕も夢も結ぶともなし」〔『老若五十首歌合』夏・七十三番右・一四六〕がみえる。なお、公相は後に「あらしふくみねのしの屋の草まくらかりねの夢はむすぶともなし」〔『三十六人大歌合』五番左・六九〕を出詠している。

④をとめの姿をおもへる雲のかよひち―「あまつかぜ雲のかよひぢ吹きとぢよをとめのすがたしばしとどめむ」〔『古今和歌集』雜歌上・八七二・「五節のまひひめを見てよめる」・宗貞〕を踏まえる。

【通釈】

百八番

左(歌)

(権大納言源) 定雅

旅寝にあつて夢の中での行き通いが吹き閉じて。夜の嵐の音の響きのさえていること…

右(歌) 勝

(西園寺) 公相

嵐が吹く嶺の笹屋の旅寝のうたたねでは夢をみることもない。

〔判詞〕この左の歌も、「夢の通路吹とちて」というあたり、(あの『古今集』歌の)乙女の姿を思える「雲のかよひち」よりは、真実味が少ないでしょうか。「あらし吹みねのさゝや」、はつきりしない

言い回しもごさいませんので、又右(歌)が勝ちでございませぬ。

〔百九番〕

百九番

左

権大―公基

吹まよふあらしの風の寒夜にかりねさひしきさやの中山

右 勝

為教 朝臣

かり枕夢もむすはすさゝの屋のふしうき程の夜半の嵐に

左、やすらかにてさせる難なく侍にや、右、さゝの

屋ふしうき夜半の嵐なと結構しいたして侍、心

優如し侍へきにや、

【校異】

イ 左―左勝(支) □ 権大―公基―権大納言公基(書・内・支

・聚・群) ハ 風―かけ(支) 二 勝―ナシ(書・内・支)

ホ かり枕―かり枕(聚) ヘ やすらかにて―やすらかに(書)

ト 難なく侍にや―難侍らぬにや(書・内・支・聚・群) チ さ

ゝの屋―さゝの(書)、さゝのやの(内・聚・群)、さゝの(支)

リ 夜半の嵐―よは(書・内・支・聚・群) 又 さしに―

支・聚・群) ル 優如し侍へきにや―優如く侍へきにや(書)、

優怒し侍へきにや(内)、優ぬし侍るへきにや(支)、優に侍るへき

や(聚)、優に侍るへきにや(群)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『続拾遺和歌集』羈旅歌・六九二・「宝治元年十首歌合に、旅宿風」
・前右兵衛督為教

かり枕ゆめもむすばずささのやのふしうきほどのよはの嵐に

【語釈】

①さやの中山―遠江国の歌枕。旅の情景を詠んだ歌には、「岩がねの
とこに嵐をかたしきてひとりやねなんさよの中山」『新古今和歌集』
羈旅歌・九六二・「石清水歌合に、旅宿風といふ事を」・有家、「よ
そながら嵐の声のさびしさをそへてやきかむさやの中山」『建保名
所百首』雜二十首・一一二二・「佐夜中山 遠江国」・兵衛内侍、「夜
もすがら松吹く風の音づれてかりねさびしきさやの中山」『嘉元百
首』旅・四八六・藤原師教）などがある。

②夢もむすはず―旅寝の仮の枕では夢を見ることもないという意。

「旅ごろもうらがなしさにあかしかね草の枕は夢もむすはず」『源
氏物語』明石巻・二二三、「まくらにも袖にも涙つららゐてむすば
ぬ夢を問ふあらしかな」『新古今和歌集』冬歌・六三三・「だい
しらず」・良経、「草まくらむすばぬゆめは夜ごろへてただ山風の
松にふくこゑ」『石清水社歌合』（建仁元年）一番左・旅宿風・一・
後鳥羽院）などの例がある。

③結構しいたして―「おひかぜにすだくかはづのもろごゑも浪もよ

りくるるでの河みづ」『六百番歌合』春部・廿番左・一五九・蛙・
有家）に対する俊成判に「左、おひかぜ右方申旨可然歟、浪もより
くるなども、結構の気は見えて殊なる事なきにや」とあるように、
趣向をめぐらした様子を指す。この歌の場合は、旅寝で夢を見るこ
とがないのは、粗末な篠屋に吹き寄せる夜更けの強い風のためとし
た趣向を指すか。

④さしに―諸本に従い「更に」と改める。

⑤優如し侍へきにや―諸本間で異同がみられるが、右歌を「優」と
して肯定的に評価する判詞と解釈できる。あるいは『千五百番歌合』
夏三・五百十番の良経判「浦号郷名強結構 若優其志定同科」を為
家は意識しているか。

【通釈】

百九番

左（歌）

権大（納言西園寺）公基

方角も定まらず吹き乱れる強い山風が寒い夜に、仮寝がさびしい
佐夜の中山であることよ。

右（歌） 勝

（藤原）為教朝臣

旅寝の仮の枕では夢も見ることはない。篠の屋の臥しわずらうほ
どの夜更けの強い風のために。

「判詞」左（の歌は）、穏やかでやさしく取り立てて欠点がないよう
でございましょうか。右（の歌は）、「さ」の屋ふしうき夜半の嵐」
などは趣向をめぐらしてあり、歌の内容が優（優）のよう（優）でござい

ましようか。

〔百十番〕

百十番

為経

① 左 勝イ
② 枕また臥なれぬうたゝねに嶺のあらしも心してふけ
③

右

信実

今夜又こゝに旅ねの松のかけむへ山あらしをとのさひしき

右哥すかたことはいひしりてをかしくきこえ侍

を、むへ山あらしと思ひあはせむこと、すこしおほつか

なくや侍へき、左夏衣またひとへなる秋風峯の

あらしに、音まさりてこそきこえ侍めれ、為勝

【校異】

イ 勝―ナシ(書) 口 為経―中納言為経(書・内・支・聚・群)

ハ 信実―信実朝臣(書・内・支・聚・群) ニ かけ―風(聚)

ホ さひしき―さひしき(群) ヘ ことは―詞は(内・支・聚)

ト こと―こゝろ(書・内・支・聚・群) チ おほつかなくや―

おほつかなく(支・群) リ 侍へき侍へし(支・聚・群)

又 左夏―左哥(書) ル 秋風―秋風の(支・群) ヲ 吹なせ

る―~~秋風~~(書・内・支・聚・群) ワ 侍めれ―侍らめ(内

・支・聚・群)

【他書所伝】

〔左歌〕ナシ 〔右歌〕ナシ

【語釈】

① ささ枕―草枕に同じ。笹を結んで枕として野宿すること。「すがはらやふしみのさとのささ枕ゆめもいくよの人めよくらん」(『続後撰和歌集』恋歌二・七三〇・「名所百首歌めしける時」・順徳院)「すがはらやふしみにむすぶささまくらひとよのつゆもしぼりかねつる」(『秋篠月清集』南海漁夫百首・五六六・「羈旅十首」・良経)等、新古今時代前後に愛好された表現。

② また臥なれぬ―まだ臥しなれていない。「みじか夜のまだふしなれぬあしのやのつまもあらはにあくるしのめ」(『新勅撰和歌集』雑歌四・一二八四・「名所歌たてまつりける時、あしのや」・家隆)のほか新古今時代の用例が多い。

③ 心してふけ―「うたたね」とともに詠む例に「夏衣まだひとへなるうたたねに心してふけ秋のはつ風」(『拾遺和歌集』夏・一三七・「あきのはじめによみ侍りける」・安法法師)。この歌は夏部の巻頭歌であり、『千五百番歌合』の判詞に引用されるなど著名であった。「まだひとへなる」を「また臥しなれぬ」に対応させるなど、為経の当該歌は安法法師の歌を強く意識していた。

④ むへ山あらし―人口に膾炙した「吹くからに秋の草木のしをるればむべ山かぜをあらしといふらむ」(『古今和歌集』秋歌上・二四九・「これさだのみこの家の歌合のうた」・文屋康秀)を踏まえた表現。

【通釈】

百十番

左(歌) 勝

(中納言藤原) 為経

笹を結んで枕にするものの、まだ臥しなれていない(私の)うたたねに、峰の嵐も心して吹け。

右(歌)

(散位藤原) 信実

今夜またここに旅寝をする松の木陰、なるほど山嵐の音が(ひとさわ)寂しく聞こえることだ。

〔判詞〕右歌は姿・ことばを、(作者が)よく心得ていて面白く聞こえますが、「むへ山あらし」と(古歌を)思い合わせることは、少々はつきりしないのではないのでしょうか。左(歌)は「夏衣またひとへなる」秋風を峰の嵐に(意識的に) ~~吹~~、(そのほうが嵐の)音もまさって聞こえるようですので、(こちらを)勝とします。

〈百十一番〉

百十一番

左 勝

通成

① 足引の山の嵐をかたしきてならはぬ岩の枕をそする

右

雅光

いか計都の遠くなりぬらん夢ちもよそに吹嵐哉

③ 左嵐をかたしくといひ、右吹あらし哉とはてたる、

ともにこのみ詠すへきすかた詞に侍らねと、左
はことわりつよく侍にや、右夢のならひ、都ちかき
程はみえ、とをさかれは、見えぬにや侍らん、もろこし
も夢に見しかはなと申ならひて侍にや、左
にはおとり侍へきにこそ、

【校異】

イ 勝―ナシ(書) □ 通成―右衛門督通成(書・内・支・聚・群) ハ 岩―いま(書) ニ 雅光―右近中将雅光(書・内・聚・群) 右近衛雅光(支)、右近少将雅光(群) ホ には―(内・支・聚・群) ヘ 左は―左(内・支・聚・群) ト 夢―都(内・支・群)、旅(聚) チ 見え―み(支・聚・群)
リ おとり―■とり(内) ※■は未読箇所

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

① 足引の山の嵐―「足引の」は「山」に掛かる枕詞。当該歌の如く「山の嵐」と続く例は、「あしひきの山のあらしは吹かねども君なき夕はかねて寒しも」『万葉集』巻第十・冬の相聞・二三五〇・「夜に寄する」等、古来よりみえる。

② 岩の枕―旅寝において岩を枕にすること。「苔むせる岩の枕に旅ねして外山の桜ちるまでもみん」『田多民治集』一八・「さくらを」・「このごろは苔のさむしろ片敷きて巖の枕臥しよからまし」『狭衣

物語』一四六・狭衣)、「やまかげやいはのまくらのなみむしろしみ
づ身にしむ月のかげかな」(『如願法師集』春日詠百首応製和歌・三
一・〔夏〕)等。

③嵐をかたしくといひ―先行例として「岩がねのところに嵐をかたし
きてひとりやねなんさよの中山」(『新古今和歌集』羈旅歌・九六二
・「石清水歌合に、旅宿嵐といふ事を」・有家、『石清水社歌合』出詠
歌で有家の自讃歌)があげられるが、他にあまり例をみない。

④吹あらし哉とはてたる―「ささのはは深山もさやにうちそよぎこ
ほれる霜を吹く嵐かな」(『新古今和歌集』冬歌・六一五・「百首歌た
てまつりし時」・良経)、「露をだにいまはかたみのふぢ衣あだにも袖
をふくあらしかな」(『新古今和歌集』哀傷歌・七八九・「ちち秀宗身
まかりての秋、寄風懐旧といふ事をよみ侍りける」・秀能)、「浅茅生
や袖にくちにし秋の霜わすれぬ夢をふく嵐かな」(『新古今和歌集』
雑歌上・一五六四・「寄風懐旧といふことを」・通光)等が先行例。
勅撰集では前掲『新古今集』歌が初出で、新古今時代に流行した表
現。

⑤右夢のならひ、都ちかき程はみえ、とをさかれは、見えぬにや侍
らん、もろこしも夢に見しかはなと申ならひて侍にや―「もろこし
も夢に見しかばちかかりきおもはぬ中ぞはるけかりける」(『古今和
歌集』恋歌五・けむげい法し・七六八)を踏まえた言。ある対象を
夢にみるのは、その対象を近くに認識しているという和歌的発想に
基づく。

【通釈】

百十一番

左(歌) 勝

(右衛門督源) 通成

山の嵐を(床に)敷いて慣れない岩の枕をする(かのような私の
旅寝よ)。

右(歌)

(右近衛中将源) 雅光

どれぐらい都は遠くになつてゐるのだろうか。夢をみることもな
く、夢と関係なく、吹く嵐であるよ…

〔判詞〕左(歌)「嵐をかたしく」といい、右(歌)「吹あらし哉」
と言いつわつてゐる、共に好んで詠むべき姿・詞ではございませ
んが、左(歌)は理が強うございましょうか。右(歌)は夢というも
のの習いとして、都が近い距離では夢に見え、(都を)遠ざかったの
で、(この右歌では)見えないのでしょうか。(『古今集』歌の)「も
ろこしも夢に見しかは(ちかかりき)」など言い慣わしておりました
う。(右歌は)左(歌)には劣りませう。

〈百十二番〉

百十二番

左 勝

有教

① ② ③
かたしきて幾夜になりぬ旅衣袖になれぬる嶺の嵐を

右

弁内侍

岩の上の嵐のかせはいとさむし旅ねの衣かす人もかな

右、ふるき^ニ哥^ホのことは、おなし^ト句にならひて、めつらし
 き心きこえずや侍らん、左、たひ衣、袖をは^リさて
 をきて、かたしく物にみねの嵐をせられて侍、こと
 はりたかひてや侍らん、たゝし、此^ヌ番の左、思出^ルすく
 なく侍れば、これ^ヲはかりは、右のま^カけに申^ナすへ
 くや侍らん、

【校異】

イ 勝—ナシ(書) 口 有教—兵部卿有教(書・内・支・聚・群)
 ハ 上の—上に(書) ニ ふるき—ふかき(内) ホ 哥の—哥(内
 ・支・聚・群) ヘ ことは—ことは、(内・支) ことはに(聚)
 詞は(群) ト おなし^ト句に—おなし句に(書) 同句に(内・支・
 聚・群) チ 左—ナシ(内・聚) リ さてをきて—まきをきて
 (内・支・聚・群) ヌ 番の—番(内・支・聚・群) ル 思出
 —おもひいて(書) おもひて(内) 思ひて(支・聚) 思ひ出(群)
 ヲ はかりは—はかり(内・支・聚) ヲ 右の—ころの(群)
 カ 申—ナシ(内・聚)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【本歌】

〈右歌〉

『後撰和歌集』雑三・一一九五・「いその神といふてらにまうでて、
 日のくれにければ、夜あけてまかりかへらむとてとどまりて、この

寺に遍昭侍りと人のつげ侍りければ、ものいひ心見むとていひ侍り
 ける」・小野小町

いはのうへに旅ねをすればいとさむし^シ昔の衣を我にかさなん

(同 一一九六・「返し」・遍昭)

世をそむく昔の衣はただひとへかさねばうとしいざふたりねん)

【語釈】

①かたしきて幾夜になりぬ旅衣—二句切。「片敷く」は、恋歌や羈旅
 歌で頻用され、独り寝の寂しさを表す。有教歌は、上句だけで考え
 ると、「(旅衣を) 片方だけ敷いて幾夜になっただろうか」という意
 となるう。「旅ころも夜な夜な袖をかたしきておもへばわれはとほく
 ゆきなん」(『平家物語』覚一本・巻第七・「経正都落」・「経正」。当該
 歌では「旅衣」は上句・下句のどちらにも掛かる仕掛けとなってい
 る。

②袖になれぬる嶺の嵐を—袖に馴染んだ嶺の嵐を、の意。旅宿を幾
 夜も続けたことで、嶺の嵐にもすっかり馴染んでしまったというので
 ある。「しら雲のいくへの嶺をこえぬらんれぬ嵐に袖をまかせて」
 (『新古今和歌集』羈旅・九五五・「たびの歌とてよめる」・「雅経」
 とは対照的。

③嵐のかせはいとさむし—「嵐の風」を「寒し」とする先行歌として
 は、「相坂の嵐のかせはさむけれどゆくへしらねばわびつつぞぬる」
 (『古今和歌集』雑下・九八八・「題しらす」・よみ人しらす)、「人

心嵐の風のさむければこのめも見えず枝ぞしをる」(『後撰和歌集』

雑四・一二八二・「人のもとにつかはしける」・伊勢）などが早い例である。特に、後者は、嵐に、人の心の荒々しき、寒々しきが重ねられる。

④ふるき哥のことは、おなし句にならひて、めつらしき心きこえずや侍らん——本歌の語句（特に初句と第三句）の置き所が同じであることの指摘である。定家は、『近代秀歌』において、「かの本哥を思ふに、たとへば五七五の七五の字をさながらをき、七々の字をおなじくつゞけつれば、新しき哥にきくなされぬところぞ侍る」と述べ、判詞でも、古歌との距離をどのようにとるかを度々問題にしている。

⑤たひ衣、袖をはさてをきて、かたしく物にみねの嵐をせられて侍、ことはりたかひてや侍らん——片敷くものが「旅衣」や「袖」ならば、道理に叶った表現であるが、「嶺の嵐を」と結ばれたため、「嶺の嵐を片敷く」という文脈が際立ってしまう。「旅衣」や「袖」を差しおいて、「嶺の嵐」を「片敷く」とするのでは、道理に合わないという指摘である。為家は、本歌合百十一番左「足引の山の嵐をかたしきてならはぬ岩の枕をそする」（通成）について、「左、嵐をかたしくといひ、右、吹あらし哉とはてたる、ともにこのみ詠すへきすかた詞に侍らねと」とも難じている。しかし、「岩がねのどこに嵐をかたしきてひとりやねなんさよの中山」（『新古今和歌集』羈旅・九六二・「石清水歌合に、旅宿嵐といふ事を」・有家）という歌もあって、「嵐を片敷く」には先例がある。

⑥思出すくなく侍れは——「思出」は、後で思出す事柄、思出す

縁となるもの、の意。歌合判詞では、多く、「思ひ出でられて」といった表現で、特定の古歌・古詩などが想起されることを示す。本歌合では、三十八番の用例が、古今歌の表現を想起するという意味で、「梅花色みえぬ事をおもひいて」と用いられている。しかし、ここは、本歌合の有教歌に、当該歌合における記憶に残るような出来のいい歌が少ないので、の意。次項⑦参照。

⑦これはかりは右のまけに申なすへくや侍らん——ここまで弁内侍と有教の番の勝敗は、弁内侍の五勝三持であった。また、有教歌に対して、「花よりはなの日かす、すかたこと葉こひねかふへきさまに侍らぬうへに、山ちの末もおほつかなくこそ侍れ」（廿一番）、「題のさ月ほいなくや、五月雨卯月もいかと見え侍へし」（三十四番）、「うつもるゝ枯野ふみ分て猶行末もいかなる見所侍へきそとゆかしく侍を、雪のふるみち、たゝおなし事にて侍ける、無念にや侍へき」（七十三番）など、厳しい評が目立つ。

【通釈】

百十二番

左（歌） 勝

兵部卿（藤原）有教

片方だけ敷いて幾夜になったことだろうか。旅衣の袖に馴染んでしまった嶺の嵐を。

右（歌）

弁内侍

岩の上の嵐の風はたいそう寒い。旅寝の衣を貸してくれる人がいればいいなあ。

〔判詞〕右は、古歌の詞が、同じ句に並んで、珍しい趣向が聞こえないのではないでしようか。左は、旅衣や袖を差しおいて、片敷くものに嶺の嵐をなさっておられますのは、道理に合わないのではありませんか。ただし、この番いの左は、記憶に残るような出来のいい歌が少なくございますので、今回ばかりは、右の負けだとあえて申し上げるのが適当でしようか。

〈百十三番〉

百十三番

左 勝^イ

師^ロ繼

さゆる夜の嵐に夢もむすひけり身はならはしの草の枕^ハに

右

雅^ニ忠

草枕^ハね覚^ハの床のさひしさもことわり過て吹嵐哉

左さゆるといひてさせるようなくやみえ侍らん、

あらしにならひて草の枕夢むすふ心はさも

侍らん、右あまりにやすくて脂燭^チの哥^トなど申

へくや侍らん、為^リ負、

【校異】

イ 勝—ナシ(書) ロ 師繼—右近中将師繼(書・内・支・聚・

群) ハ 枕に—枕を(支) ニ 雅忠—雅忠朝臣(書・内・支

・聚・群) ホ ね覚—旅ね(群) ヘ 心は—心(支・聚・群)

ト 右—ナシ(支・聚) チ 脂燭—脂燭(支)、照燭(群)
リ 為負—為勝(聚)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①嵐に夢もむすひけり—嵐にも(かかわらず)夢はむすびけりの意。「夢も結ばぬ」の例は多いが、この歌ではそれを逆転させている。

②身はならはしの—身は慣れ次第だ、慣れっこになってしまった、等の意。「た枕のすきまの風もさむかりき身はならはしの物にぞありける」(『拾遺和歌集』恋四・九〇一・「題しらず」)・「よみ人しらず」や、これを本歌とした「さとはあれぬむなしきとこのあたりまで身はならはしの秋かぜぞふく」(『新古今和歌集』恋歌四・一三二・「和歌所にて歌合侍りしに、あひてあはぬ恋の心を」・寂蓮)などの例がある。

③ことわり過て—道理にも過ぎて。「うきも身のむくひなれども折ふしにことわり過ぎてねこそなかるれ」(『為家集下』雑・一四四五・建長五年作)があるが、雅忠の当該歌以前には用例を見ない。

④脂燭の哥—紙(脂)燭が一、二寸燃える短い間に作る歌。また、それを作る競技。紙燭一寸の歌とも言う。「右はしそくの歌にや侍らむ。いと心得ずとて左勝つべくや」(『六百番歌合』秋上・七番、俊成の判詞※本によつて「秀句の歌にや」とする)。

【通釈】

百十三番

左(歌) 勝

(右近権中将藤原) 師繼

冷える夜の嵐の中でも夢は結んだことだよ。(今では)慣れっこになつた草を結んで枕にする野宿に。

右(歌)

(源) 雅忠(朝臣)

草枕をして寝る(夜の)、寝覚めの床の寂しさは覚悟しているが、道理にも過ぎて吹きつける嵐であることよ。

〔判詞〕左(歌)は「さゆる」と言つて(いるが)特に「旅宿嵐」

のこの歌では)用もなく思われましよう。嵐に慣れて草の枕(にも)

夢を結ぶ(という)内容はそのようでもありません。右(歌)は

あまりに安易で「脂燭の歌」などと言ふべきでしょう。(右歌を)負

けとします。

〈百十四番〉

百十四番

左 勝

沙弥 蓮性

岩かねの枕のあらしさらたにいねかてなるを心してふけ^①

右

下野

行暮てひと夜やとかる松かねに何と嵐の床はらふらん^②

左、上下句はしめの同文字みとかむるおりも侍れ^④

とも、いねかてなるを心して吹、ことよろしく、おなし^③

嵐もきこえ侍にや、右、なにと嵐のといへる、心にいれぬさまに侍れば、尤^ト以左為勝、

【校異】

イ 勝—ナシ(書)

口 行暮て—^{新古今}ゆき暮て(聚) ^{源集}

(書・内・支・聚・群) 二 上下句—上下の句(書・支) ホ

おなし—おかしく(書) へ 右—ナシ(内・聚) ト 尤—ナシ

(聚)

【他書所伝】

〔左歌〕ナシ

〔右歌〕

『新統古今和歌集』羈旅歌・九一八・「宝治元年九月十三夜仙洞にて十首歌合に」・後鳥羽院下野

行きくれて一夜やどかる松がねになにとあらしの床はらふらむ

【語釈】

①心してふけ—風や嵐に対して「心してふけ」と呼びかけた例は、「夏

衣まだひとへなるうたたねに心してふけ秋のはつ風」(『拾遺和歌集』

秋・一三七・「あきのはじめにのみ侍りける」・安法法師、『拾遺抄』

秋・八七)が早く、旅の情景を詠んだ歌には「をしみかねはなのあ

たりに旅ねしつよはの嵐よ心してふけ」(『月詣和歌集』三月・一七

二・「花筵」・祝部成仲)、「吹きすぐる峰のあらしも心せよ真木の

いたぶし今夜ばかりぞ」(『石清水社歌合』(建仁元年)二番右・旅宿

嵐・四・小侍従)などがある。百十番語釈参照。

②何と嵐の—強い風はどうして(くだらう)と疑問を呈する意。「谷風はとをふきあけているものをなにとあらしのまどたたくらん」『山家集』雑・九六六、「しをれ果て結ぶさびしくさまくらなにと嵐のあはれそふらむ」『石清水社歌合』(建仁元年)二番左・旅宿嵐・三・通親)などの例がある。

③床はらふらん—「まそでもちとこうちはらひきままつとをりしあひだにつきかたぶきぬ」『万葉集』巻第十一・寄物陳思・二六六七、「夕されば人なきとこを打ちはらひなげかむためとなれるわがみか」『古今和歌集』恋歌五・八一五・(題しらず)・よみ人しらず)などの例のように、床を払うのは男の来訪を祈る行為。この歌の場合、旅の仮寝の床を強い風が払うのはどうしてかと疑問を呈し、誰も訪れるはずのない旅先での一人寝の寂しさを歌ったものである。

④上下句はしめの同文字みとかむるおり—第一句の始めの文字(「岩かね」の「い」と第四句の始めの文字(「いねかてなるを」の「い」)が同じ文字であることを咎めるもので、平頭病とされる。『内裏歌合』(天徳四年)恋・一八番右・三七・中務歌に対する実頼判、『或所歌合』(保延四年)恋・殿下参河歌に対する基俊判(『袋草紙』の記述による)のほか、『俊頼髓脳』、『和歌童蒙抄』、『袋草紙』、『八雲御抄』などに取り上げられるが、歌病として咎める対象にする場合と、取り立てて問題にしない場合とがある。

【通釈】

百十四番

左(歌) 勝

岩を枕にする旅寝に吹く強い風よ、そうでなくてさえ寝つけないだから気を遣って吹いてくれよ。

右(歌)

下野

旅行くうちに日が暮れて松の根元に一夜の宿を借りているのに、強い風はどうして床を払うのだろう。

〔判詞〕左(歌の)、上の句と下の句の始めが同じ文字であることを見咎めることもございませうが、「いねかてなるを心して吹」というのは、殊によるしゅうございまして、同じ嵐でも(格別に情趣が増して)聞こえますことでしょうか。右(歌)の、「なにと嵐の」と(疑問を呈する)部分は、納得がいかないさまでございませうので、左歌を勝ちといたします。

〈百十五番〉

百十五番

左 持

為氏朝臣

① うちとけてねられやはする草枕むすふ山路の嶺の嵐に

右

少将内侍

都人なにか夢にみえつらんかりねかなしきみねのあらしに

左の草枕は、むすふ
かこち、右のかりねは、都人何しか夢に見ゆらん

とおもへる程、をのく心なきにあらされは、嶺の
あらし、かたくチいつれときわかれ侍らす、リ為持、

【校異】

イ 持—ナシ(書) 口 左の—左(書) ハ 山路の—
・内・支・聚・群) ニ 何しか—なにしにか(内・支) ホ 夢
に—夢かり(内) ヘ 見ゆらん—見えつらん(内・支・聚・群)
トをのく—各(書・内)、右(支) チ かたく—ナシ(内)
リ 為持—為勝(内)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①うちとけて—くつろいで、の意。「霜むすぶ袖のかたしきうちとけてねぬよの月の影ぞさむけき」(『新古今和歌集』冬・六〇九・「千五百番歌合に」・通具)。左歌中の「むすぶ」の縁でこう言った。
②かりね—旅などで、いつもの床でない床で眠ること。「草まくらかりねの夢にいくたびかなれし都にゆきかへるらん」(『千載和歌集』羈旅・五三四・「旅のうたとてよみ侍りける」・隆房)。
百十五番

左(歌) 持

為氏朝臣

くつろいで眠ることなどできようか。草枕を結ぶ山路の嶺の嵐の激しさに。

右(歌)

少将内侍

都人がどうして夢に見えたのであろうか。仮寝が悲しく感じられる嶺の嵐(が吹くなか)で。

「判詞」左の草枕は、結ぶくつろいで眠れないのを託ち、右の仮寝は、都人がどうして夢に見えるのかと思っている様子は、それぞれ情趣が感じられないわけではないので、両首の嶺の嵐は、どちらか一方をすぐれていると判断することができません。持とします。

〈百十六番〉

百十六番

左 勝イ

経朝朝臣

①故郷にかよふ夢路の関守は旅ねおとろく嵐なりけり

右

沙弥禅信

嵐吹山ちかさなる草枕むすぶ旅ねの夢そすくなき

②左旅ねおとろかすとそ、ありたく聞え侍れとも、右

むすぶ旅ねに夢そすくなき、又見なれて侍

うへに、あらし吹山ちかさなる、いひくたされぬ

やうに侍にや、関守力ありけにみえ侍れば、勝侍へきにや、

【校異】

イ 勝—ナシ(書) 口 一の(支・聚・群) ハ なる—なる

とは(聚・群) ニ みえ侍—侍(内・支・聚・群)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〔右歌〕ナシ

【語釈】

①故郷にかよふ夢路の関守…嵐なりけり―「まどろまぬうつともなき旅ねしてあらしにたゆるふるさとの夢」(建仁元年(一一〇一))

『石清水社歌合』十番左・九・俊成卿女)、「たびねするよはのあらしにゆめさめてうちながむればありあけの月」(『千五百番歌合』千四百二十六番左・二八五二・後鳥羽院)等の如く、嵐が夢を断ち切る例は散見する。なお、類想歌として「故里の秋の夢ぢの関もりはみかきがはらの松虫のこゑ」(建仁元年(一一〇一))『和歌所影供歌合』故郷虫・四番左・一一五・慈円)があげられる。夢路にせよ現実にせよ、出逢いを妨げるものとしての関守は、もとより『伊勢物語』第五段に基づいている。

②左旅ねおとろかすとそ、ありたく聞え侍れ―嵐が主体の場合、「おとろかす」とするのが意味の通りとして妥当であることを指摘する。

「嵐」が「驚かす」例としては、「ねがふ事みつの深山のたびねとや嶺のあらしやおどろかすらん」(建仁元年(一一〇一))『石清水社歌合』旅宿嵐・六番右・一二・静賢)、「おどろかす関のとだちのあらしかなゆめもむすばぬ旅のまろねは」(同・九番右・一八・中納言)等がみえる。

③あらし吹山ちかさなる、いひくたされぬやうに侍にや―「吹」は「山ち」に掛かり、(嵐が吹く中、険しい山路がひき続く旅路)とい

う意で、言葉つづきに流麗さがないことを難じたものか。「山ちかさなる」という表現は、「さよふけてむまやづたひのすずきけば山ちかさなるものぞかなしき」(正治二年(一一〇〇))『三百六十番歌合』十四番左・内大臣・六〇三)、「わかれても心へだつなたび衣いくへかさなる山路なりとも」(『拾遺愚草』初学百首養和元年四月・別・九〇)、「心のみへだてずともたび衣山路かさなるをちのしら雲」(『十六夜日記』一〇八・為相)等にみえる。「いひくたされぬ」は、例えば、『六百番歌合』で俊成が、「きさかたやいもこひしらにさぬる夜のいそのねざめに月かたぶきぬ」(旅恋・廿九番左・八九七・顕昭)について「左歌、はじめをはりよくいひくたしてはみえ侍り」と用いている。

【通釈】

百十六番

左(歌) 勝

(藤原) 経朝朝臣

故郷に通う夢路の関守は、旅寝にあつて(その音で)目が覚める嵐であつたのだなあ。

右(歌)

沙弥禅信

嵐が吹く山路が続く旅寝において見る夢は(まんじりとも出来ず)に)本当に少ない。

【判詞】左(歌)「おとろく」でなく「旅ねおとろかす」と、ありたいところですが、右(歌)「むすぶ旅ねに夢そすくなき」という表現は、又見慣れておりますうえに、「あらし吹山ちかさなる」(と

いう表現は)、(すんなりとは) 言いくだされないうようでごさいます
ようか。(左歌の)「関守」という(表現の方が)力があるように思
われますので、(左歌の)勝ちでございませうか。

〈百十七番〉

百十七番

左 勝^イ

越前

花す^①きかりねの野へに片敷て月も嵐も都恋しも^ロ

右

為家

草木ふくむへ山風とき^ハしかと猶そかりねの袖はしほる^イ

左あらしあらはに聞え侍れば、為勝

【校異】

イ 勝—ナシ(書) ロ も—き(群) ハ 為家—前権大納言為

家(書・内・支・聚・群) ニ かり—旅(内・支・聚・群)

ホ 聞え—聞えて(書)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『和歌用意条々』故禪門(為家)・二八

草木ふくむべ山風と聞きしかば旅ねの袖は猶ぞしほる

『為家集』雑・「旅宿嵐 宝治元年仙洞十首歌合」・一三三二

草木吹くむべ山風と聞きしかど猶ぞかりねの袖はしほる

【本歌】

〈右歌〉

『古今和歌集』秋歌下・「これさだのみこの家の歌合のうた」・文屋
やすひで・二四九

吹くからに秋の草木のしをるればむべ山かぜをあらしといふらむ

【語釈】

①花すき—穂の出た薄。『万葉集』以来多くの例がみえる。「野べ
ならばたびねしてまし花薄まねくたもとにこころとまりて」(『大武
高遠集』「花すすき」・一三九)、「ゆく人をまねくかのべのはなすす
ききよひもここにたびねせよとや」(『忠盛集』「野客留人」・一二〇)
は一例。

②月も嵐も—「きよみがたひとりいはねの秋のよに月もあらしもこ
ろぞかなしき」(『秋篠月清集』南海漁父百首(「羈旅十首」)・五七三)、
「外にすみよそにふかなん秋のよの月も嵐も恨みはてけり」(『壬二
集』「恋歌あまたよみ侍りしに」・二八七六)等が、先行例としてみ
える。

【通釈】

百十七番

左(歌) 勝

(嘉陽門院) 越前

(私は) 穂の出た薄を仮寝の野辺に片敷いて寝て、月につけ嵐につけても都が恋しいことだ。

右(歌)

(前権大納言藤原) 為家

『古今集』歌が詠じるように、「嵐」は(草木を吹いて(萎れさす)なるほど山の風と聞いてはいたが、それ以上に(私の)仮寝の袖が萎れるよ。

〔判詞〕左(歌)の「あらし」は(その様子が)はっきりとわかりますので、勝ちとする。

和歌作品の調査、収集を通じた鎌倉時代西園寺家像の再構築

2007（平成19）年度～2008（平成20）年度 科学研究費補助金

若手研究（B）
研究成果報告書

2009（平成21）年3月31日 発行

研究代表者 藤川 功 和

〒722-8506 尾道市久山田町1600番地
尾道大学芸術文化学部日本文学科

印刷・製本 三原プリント

鎌倉時代西園寺家と和歌

一 鎌倉時代西園寺家概略

西園寺家は、藤原氏北家閑院流公実男の通季（一〇九〇—一一二八）を始祖とする。家は、清華だが、通季の曾孫公経（一一七一—一二四四）は、文治末から建久初年頃、鎌倉幕府初代将軍源頼朝（一一四七—一一九九）の妹婿一条能保女全子を娶り、頼朝と姻戚関係を結ぶ。以後、閑東申次として、幕府との連絡役を務めるなど、幕府方との関係を深める。承久の乱に際しては、後鳥羽院によつて長子実氏（一一九四—一二六九）とともに拘禁されるが、家司を遣わして、鎌倉に異変を知らせている。乱後、公経は、承久三年閏十月に内大臣、翌貞応元年には太政大臣に任じられ、清華家としての極官に昇り、また翌年には従一位に叙される。

一方で、公経は四条天皇急逝を受けて鎌倉幕府によつて擁立された後嵯峨天皇（一二二〇—一二七二）に実氏女姞子（一二二五—一二九二、後の大宮院）を入内させる。姞子は、寛元元年（一二四三）六月に久仁親王（後深草天皇）を、建長元年（一二四九）五月には恒仁親王（龜山天皇）を生んだ。寛元四年（一二四六）正月には後嵯峨天皇が当時四歳の後深草天皇に讓位、実氏は今上帝の外戚となり、同年三月には太政大臣に任じられる。同十二月には、九条道家に代わつて閑東申次となる。また、康元二年（一二五七）正月には、実氏女公子（一二三二—一三〇四、後の東二条院）が、後深草天皇の中宮となり、実氏は二代の国父となる。さらに、正元元年（一二五九）後深草天皇讓位をうけ即位した龜山天

皇の外戚ともなっており、西園寺家はここに全盛を極めるのである。

西園寺家は以後も、関東申次を代々継承するとともに、持明院、大覚寺兩皇統にそれぞれ女子を入れて外戚となり、摂関家をしのぐ権勢を、鎌倉時代の終焉まで維持することとなる。

このように、西園寺家は、鎌倉時代政治史を考える上で、極めて重要な位置を占めており、その家の果たした役割については未だに議論がなされている。近年では、例えば本郷和人氏が「西園寺氏再考」(『日本歴史』第635号 平成13年4月)において以下のごとく指摘されている。

1、関東との交渉・連絡は、上皇と摂関にも可能であった。とくに讓位等の重事について、上皇は直に幕府と連絡を持っている。またある一定の廷臣も幕府と交渉することは可能であった。幕府との交渉・連絡を独占できぬ以上、関東申次の地位は、親幕派第一の公家の表象ではあっても、政治的には高く評価できない。

2、西園寺氏は外戚である、と一口に言われるが、実は皇室と縁戚を持たぬ時期もある。それも単に偶然そうだったのでなく、大覚寺統からは明らかに避けられている様子が見える。西園寺氏は外戚であるが、持明院統のそれである。

このような捉え直しは、今後も行われるであろうし、またこのような言及がなされること自体、西園寺家がこの時代の政治史を考える上でいかに重要であるかを物語っている。本研究においては、主に西園寺家歴代当主の和歌作品の分析を通して、西園寺家の政治

と文学の有り様について解明することを目的とするものである。

二 西園寺公経の和歌―『民経記』記載「あやめ草」詠を例に―

(資料1) 『民経記』仁治三年四月五日条(「大日本古記録」に拠る)

同四、五日、後聞、一条入道太相国進菖蒲根於禁裏、相副和哥云々、

あやめ草ともかくにもなかきねを君にひかれてちよもへぬへし

有勅答云々

あやめ草うへをく人も君か代もなかきためにけふやひかれん

□□□□注付也、定有僻事歟、

(□は虫損・破損)

当該記事は、国立歴史民俗博物館所蔵『経光卿記』(仁治・寛元年間記)の内で(原題『故一品記』)、早くは「大日本史料」第五編之十四(昭27 東京大学出版会)に活字化されている。また、「大日本古記録」『民経記八』(平13 岩波書店)にあらためて収められている。『民経記』(『経光卿記』等)も。本稿では便宜上抄出本も含めて『民経記』と称する)は、鎌倉時代中期の公卿藤原経光(一一二一―一二七四)によって記された家記である。同記には、経光自身、また彼が見聞した周辺人物の詩歌が記されている。

「一条入道太相国」西園寺公経(一一七一―一二四四)は、貞応二年(一一二二)、前年に任じられた太政大臣を辞し、寛喜三年(一一三一)六十一歳で病により出家を遂げている(『公卿補任』)。公経が、「禁裏」において「菖蒲根」を奉じた相手は、仁治三年正月、四条天皇が十二歳で急逝したのをうけ、同年三月十八日に即位したばかりの後嵯峨天皇である。

公経の贈歌を読んでみよう。傍線部「ともかくにも」は、「世中はうき物なれや人ごとのともかくにもきこえくるしき」(『後撰和歌集』卷第十六・雑二・一一七六・紀貫

之)の如く、①あれこれ。様々。の意と、「かくしつとにもかくにもながらへて君がやちよにあふよしもがな」(『古今和歌集』巻第七・賀歌・三四七・光孝天皇)の如く、②いずれにせよ。何はともあれ、の二意に大別される。①とすると、(あれこれ様々な)菖蒲の長い根を引かれて)という意になるが、ここではむしろ公経が菖蒲の中でもとりわけ長い根を持つものを帝に献じ、御代の恒久を言祝いだと解釈する方が自然であろう。

さて、先に挙げた例歌の「とにもかくにもきこえ」(様々な風聞)、「とにもかくにもながらへて」(なんとか生きながらえて)の如く、「とにもかくにも」は、直後の句に意味が掛かるのが通例だが、一方、当該歌より時代は若干降るものの、為家詠「なに事をとにもかくにもかるかやの思ひみだるるこころなるらん」(『為家五社百首』かるかや・二八六)において、「とにもかくにも」が、枕詞「かるかや」をとばして四句目に掛かる例もみえる。当該歌においては、「とにもかくにも」は、「君にひかれて」に掛かり、全体の解釈としては、(≪私が献上するこの≫菖蒲草は、長い根が何はともあれ帝の恒久に因んでいるかのように引かれて、きつとこれからの治世と同じように千代も経るであろう)となるろう。

それにしても、「とにもかくにも」(「とにかくも」「ともかくも」「とにかくに」を含む)を当該歌の如く帝の治世の恒久を言祝ぐ詠で用いる例は、『新編国歌大観』に拠ると少なくとも鎌倉時代までには殆どみえず、「つかへつとにもかくにもなれてみん君が八千代の秋の月かげ」(『弘長百首』秋二十首・月五首・三〇三・藤原為氏)、「とにかくにかしき君が御代なれば三のたからのとりもなくなり」(『弁内侍日記』・一八五)ぐらいである。この内、前者は、(何はともあれ)という意味合いだが、詠者主体の動作「なれてみん」に「とにもかくにも」が掛かっており、賀の対象「君」及びその動作「ひかれて」

に掛かる当該歌とは用法が異なっている。また、後者の例歌では、「とにかくに」は、「か
しこき君」に掛かるが、意としては、（様々、あれこれ）となり、こちらも当該歌とは異
なる。即ち、当該歌の如き「とにかくにも」の用例は稀といつてよい。

では「とにかくにも」（何はともあれ）と、公経が詠じた背景を考えてみよう。後嵯
峨天皇は、土御門院皇子で、承久の乱によって土御門院が配流された後は、母の叔父にあ
たる源通方の許に身を寄せ、通方没後、祖母の承明門院に養育された²。後嵯峨天皇は、次
期帝に決定した時、二十三歳にして未だ元服もすませておらず、また、一時は出家も考え
ていたらしい³。四条天皇急逝に伴う次期帝の候補には、順徳院皇子忠成王もあがつてお
り⁴、九条家と縁戚関係にあった公経は、道家とともに忠成王を推した⁵。結局、承久の乱に
積極的に関わった順徳院系の皇子を避けたい鎌倉幕府の意向によって土御門院皇子に決定
したのである。この決定に際しては、源定通方の幕府への働きかけもあったが⁶、定通は、
土御門院生母承明門院在子の異父弟であり、且つ定通妻は北条義時女、最終的な判断が
幕府に委ねられていた点では、どちらの候補も同様であった。

そのような、帝位につくまでの後嵯峨天皇の紆余曲折の境涯を念頭に置くと、公経詠の
「とにかくにも」からは、出家まで覚悟していた皇子が、今上帝の急逝と鎌倉幕府の意
向や縁者の働きかけによって、「とにかくにも」——（今までの経緯はどうあれ）帝位に
就いた、というニュアンスが読みとれるのではないだろうか。公経は「とにかくにも」
を賀の歌においてはあまりみえない用法で敢えて詠み込むことによって、帝位に至るまで
の後嵯峨天皇の境遇を暗示しつつ御代を言祝いだものと解し得るのである。また、そのよ
うな意味合いを含む詠を献じた公経の行動から、紆余曲折を経てなった御代を我こそが支
えていこうという公経の自己主張をも汲み取ってよいのではないだろうか。

* * * * *

では、公経に対する返歌はどのような意味内容になつてゐるのであるうか。下の句「なかきためしにけふやひかれん」は、公経詠「なかきねを君にひかれて」をうけたもので、（これからの治世の恒久の抛り所として今日このような長い根を引かれたのでしよう）という意であろう。その下の句に掛かる上の句の内、まず「君か代」は、第一義的には（帝の御代）という意であろう。しかし、返歌の首書に「有勅答」とあるので、「君か代」は返歌の送り先―公経に対する尊称とも考えられよう。⁽⁷⁾だが、仮に「君」を公経とすると「うへをく人」は誰を指すのであろうか。「うへ」は「うゑ」（植ゑ）で、「うへをく」は「植ゑ置く」意であろう。⁽⁸⁾注意されるのは、「うへをく人も」とあるように、「君か代」と並び「なかきためし」と詠じられてゐる点である。つまり、「うへをく人」は、「君か代」と並と同じく、今後の「なかきためし」を約束された人なのである。

（資料2）『新古今和歌集』巻第十六・雑歌上・一四四三・藤原忠平

枇杷左大臣の大臣になりて侍りけるよろこび申すとて、梅ををりて

貞信公

おそくとくつひにさきぬる梅の花誰がうゑおきしたねにか有るらん

例えば、（資料2）歌は、兄仲平が右大臣となり、亡くなつた兄時平と三兄弟がいずれも大臣に任じられた喜びを忠平が詠じたものである。この場合、「うゑおきしたね」は、三兄弟の父故基経が最初の関白兼太政大臣となり、その後の繁栄の礎を築いたことを称えた表現で、草木を植える意に、繁栄の基礎を敷いた意を含ませてゐる。⁽⁹⁾この（資料2）詠や、「うへをく人」が「君」とともに「なかきためし」と言祝がれてゐる点を考えると、「君か代」は後嵯峨天皇を、「うへをく人」は公経をそれぞれ指すと考えるのが妥当では

にけり花もわが世も今日さかりかも」と詠じ、同じく行幸、御幸した後深草天皇や東宮（龜山天皇）を「花」に喩え、わが世の春を高らかに謳った。それに対して、実氏は、「いろく にさかへて匂へ桜花我きみく の千代のかざしに」と応じ、姑子腹の天皇、東宮を院とともに言祝ぎ、翌日には、「この春ぞ心の色はひらけぬる六十あまりの花は見しかど」と、栄花の極まりを詠じたのである。⁽¹⁴⁾

三 西園寺実氏の和歌——『院御歌合』を例に——

（資料3）『院御歌合』二番・早春霞・三

二番 左

太政大臣

皇の御代さかゆべき春なれば霞をこめてたちや出でまし

右

俊成卿女

君がためなほ万代の春の色に霞初めたる明ぼのの空

左の御代さかゆべき春世みなこひねがふべきことに侍るうへに、下句そのいはれ聞えてをかしく侍るにや、君がためなほよろづよのといへる、またすてがたく侍れば、両方の祝言をなずらへて為持

（資料3）は、後嵯峨院政初発期の大規模な歌合、宝治元年（1247）『院御歌合』の最初の題「早春霞」の実氏詠である。上の句「皇の御代さかゆべき春なれば」（帝の、ひいては院の治世がこれからきつと栄花を誇るに違いない春なので）と、前年正月に讓位した後嵯峨院のこれからの治世の繁栄が約束されたものであるとして、その所以は、為家判が「下句そのいはれ聞えて」と指摘する「霞をこめてたちや出でまし」であると詠じている。

ないだろうか。おそらくこの返歌は、近仕の者が代詠したものと思量される⁽¹⁰⁾。

さて、先にも述べたが、公経は、四条天皇崩御に伴う次期帝候補としては、道家とともに忠成王を推した。一方、次期帝決定後は、すぐさま土御門院皇子の元服の調度を進上（『民経記』仁治三年正月二十日条）、踐祚後は、度々後嵯峨天皇を方違え行幸の際自邸に迎えている⁽¹¹⁾。さらに、同年六月三日には「関東事安否未聞、然而不可延引之由結構歟、頗不甘心」（『平戸記』同年六月三日条）と、北条泰時病中であるという一部の批判をものともせず、孫娘姑子を入内させる。姑子は同年八月九日に立后、中宮となり、翌年には久仁親王（後深草天皇）を産み、公経は、外戚としての地位を固めるのである。当時既に権勢を極めていた公経が、後嵯峨天皇の後ろ盾となることは、帝にとっても治世の安定に必要不可欠な要素であった。「とにもかくにも」という含み多い表現を用いた詠歌を「菖蒲根」と共に奉じた公経の意図を、勅答の代詠者も（そして恐らくは公経詠と共に代詠にも目を通したであろう）後嵯峨天皇自身もよく知っていたと思しい。「うへをく人」は、仁治三年四月五日時点で既に姑子入内を内々に推し進めていたであろう公経に対する、今後の後嵯峨天皇治世における政治的位置を的確に表したものであつたらう⁽¹²⁾。

* * * * *

寛元元年（一二四三）に誕生した皇子は、ほどなく親王に立てられる。公経自身は同二年に没し、ついに目にすることはなかったが、皇子は、同四年（一二四六）に即位、公経息実氏は、外祖父となり、関東申次且つ院政を開始した後嵯峨院の院評定衆の一員として二十余年に渡り後嵯峨院政を支えていくことになる⁽¹³⁾。

正元元年（一二五九）三月五日、後嵯峨院は、花盛りの北山西園寺邸に大宮院姑子主催一切経供養の為に御幸、翌日には管弦の遊びとなり、院は、「色く」に枝をつらねて咲き

「たなびく」に「引く」を掛け、霞棚引く空にまで長寿が約束されたことを言祝いでいる。また、俊成卿女の『洞院撰政治家百首』出詠歌「朝日さすみかさの山の雲より霞そめたる千代のはつ春」(上・春・霞・八六)では、氏神である春日社の上空に「朝日」とともに「霞」が配され、ここでも、霞が立つことに祝意が込められている(後掲、当該歌合九番左・藤原師継詠も同様の用例と考えられる)。さらに、定家詠「春の色をいく万代かみなせ河霞のほらの昔のみどりに」(『建保名所百首』春二十首・水無瀬河・一九五)の如く、霞は、仙洞御所を連想させる表現でもある。これらの例歌から、当該歌における「霞」は、後嵯峨院政の治世の恒久を暗示する表現として機能していると考えられる。

「早春霞」題の他の詠歌に目を転じると、「早春」に引かれて、「みどりもさむく霞む」(三番左・通忠)、「色うすき山の霞」(四番右・公相)、「霞初めけん」(六番左・為経)、「うす霞つつ」(七番右・雅光)、「霞ぞうすき」(九番右・雅忠)と、霞がたち始めたばかりの状況を詠み込む傾向が強い。また、祝言を詠じたものは、「君がためなほ万代の春の色に霞初めたる明ぼのの空」(二番右・俊成卿女)、「君が代のはじめの春ののどけさを空もしりてや霞たつらん」(九番左・藤原師継)、「明けわたるみねの霞を出づる日の影もくもらぬ千代の初春」(十三番左・嘉陽門院越前)の三首であるが、「霞初め」、「霞たつ」、「明けわたる」¹⁰⁶と、早春に棚引く霞の景を詠み込んで一面に立ちこめられている。一方、実氏は、院の治世の繁栄を暗示する霞が、早春にあって一面に立ちこめられている様を描出しており、その点が当該歌における実氏の創意の一つといえよう。

では、「たちや出でまし」の主語は何であろうか。一つには「たち」(立ち)の縁語である上の句の「春」が考えられよう。その場合、下の句は(早春の霞を)散らすことなく一面に閉じこめて(御代の繁栄を言祝ぐかのように春は)到来するだろう)となろうか。

「くをこむ」の如く他動詞としての「こむ」は、一義的には、「秋の月ひとへにあかぬものならばなみだをこめてやどしてぞみる」（『伊勢集』三〇二）、「とひこかしたちえは梅のみえずとも句をこめて立つ霞かは」（『拾遺愚草』下・部類歌・春・二一三四）等にみえるように、「（対象を）ある物の中へ入れる」「とじ込める」という意で用いられる。

一方、『新編国歌大観』で「霞を」＋「こむ（込む・籠む）」を検索すると、当該歌合以前の例として、「暮れて行く春の霞を猶こめてへだつるをちにたちやわかれん」（『拾遺愚草』上・重奉和早率百首・雑・五九三）、「山のははわけよるままにあらはれて霞をこむる松のむら立」（『御室五十首』寂蓮・八〇七）、「よし野山わけきてのちにながむればかすみをこむる花のしら雲」（『千五百番歌合』春三・百九十三番左・三八五・藤原良平）等がみえる。これらの内、後記二例では、「松のむら立」や「花のしら雲」が霞を隠してしまふ、或いは視界から遮るといふ意味合いになっている。⁽¹⁵⁾ そういった意を仮に当該歌に当てはめると、「霞」が「隠される」存在となつてしまひ題に叶わない。当該歌の場合、先に『伊勢集』や『拾遺愚草』に確認した如く、「霞を」≒「散らすことなく一面に」≒「とじ込めて」という意とならう。

それでは、なぜ霞がとじ込められている状況が、「皇の御代さかゆべき春」なのであるうか。その点を考えるには、以下の用例が理解の一助とならう。

（資料4）『後拾遺和歌集』巻第七・賀・四二八・源兼澄

東三条院四十賀しはべりけるに、屏風に子日してをどこをむなくなるまよりおりてこまつひくところをよめる

源兼澄

かすみさへたなびくのべのまつなればそらにぞ君がちよはしらるる

円融院后東三条院の四十賀における屏風歌で、子の日に小松を引く男女の姿によせて、

しかしながら、「郭公こゑまつほどはかたをかのもりのしづくにたちやぬれまし」(『紫式部集』一三)、「かぞへつるこよひの月はくもるともまつとしきかばたちやいでまし」(『実家集』三二六)等にみる如く、「やくまし」は一義的には「くしようか」と視点人物の意志を表すのであり、当該歌においてもその意味層は無視できない。そもそも「たちや出でまし」の直前に主語が明示されていないことが、このような読みの多様性の要因と
思しく、或いは、実氏は、「たちや出でまし」の主語を一つに限定できないような構造を
敢えて選択したとも考えられよう。すなわち、御代への祝言を含みつつ「早春霞」題の要
件を満たし、一方、視点人物つまり「皇の御代」を言祝ぐ実氏自身の主張を織り交ぜたの
ではないだろうか。では「たちや出でまし」に込めた実氏の主張とは何であるのか。

* * * * *

(資料5)『院御歌合』十五番・山花・二九

十五番 左

太政大臣

おもひ出でよわれもむかしはたつ田山たかねの花も袖にかけてき

右

俊成卿女

春はまた花のみやこと成りにけり桜にほふみよしの山

左われも昔はたつ田山、さだめてゆゑふかく侍らんとみえ

侍るに、右さくらにほふみよしの山、花の都に心もな

りかへりてうつり侍りぬるにこそ

二題目「山花」の実氏詠である。解釈としては、(思い出してください、私も昔は立田
山の高嶺の方にまでも登って、桜狩りをしたことですよー今はもはや老残の身であるので
高嶺に登ることはない)となろう。さらに、二重傍線部「たかねの花」に注目すれば、別

の意味合いもみえてくる。

(資料6) 『拾玉集』・第二・詠百首和歌(文集百首)・閑居十首・一九八〇

心足即為富、身閑仍當貴、富貴在此中、何必居高位

谷かげや心のほひ袖にみちぬたかねの花の色もよしなし

建保六年(一二一八)『白氏文集』の詩句を題にした句題和歌「文集百首」の一首である。句題は、『白氏文集』巻六「閑居」の詩句で、心身の充足こそが真の富貴なのであって、高位にあることは何ら真の富貴にはあたらないという意である。慈円は、この詩句の内「居高位」を「たかねの花」と換言し、「谷かげ」すなわち日の当たらない閑居にあつても心の充足があれば、宮中の高位も何の魅力もないと詠じている。

このような例から、実氏の詠歌に戻ると、実氏自身前年の十二月に太政官の最高官である太政大臣を辞していることが想起される。実氏は、立田山の高嶺に桜狩りした昔に思い致す老残の心境に仮託して、太政大臣にあつた今は昔、もはや官を辞した老身であると詠じたものと解される。

(資料7) 『院御歌合』四十一番・初秋風・八一

四十一番 左

太政大臣

袖のうへに老のなみだのかかれるを秋きにけりと風やしるらん
右 俊成卿女

秋としもなど荻のはのむすびけん夕のかぜに露の契を

うちまかせては、秋きにけりと風をききてぞ老のなみだも
こぼれぬべく侍るを、なみだのかかれるをみてかぜの秋を
しれるこころめづらしく侍るにや、秋としもなど荻の葉の

とて、夕のかげに露の契をむすびけむといへるも、女のう
たとおぼえていうに侍れば、勝をゆるさるべくや

実氏は、「山花」の二題後「初秋風」でも、(資料7)の如く、(≪秋になって≫我が身の
黄落を感じ私の袖に涙がこぼれるのをみて、風も秋がきたと知るのだからか)と、老残
の心境を詠み込んでいる。

(資料8)『院御歌合』六十七番・野外雪・一三三

六十七番 左

太政大臣

雪おもるみにならひてもおもふかな野なる草木のいかにさゆらん

右

俊成卿女

かりにこしあとだにもなくうづもれて雪ふか草の野への故郷

左みにおもる雪にならひて野なる草木をおもへるころ、

そのゆゑふかくみえ侍るにや、右かりにこしあとたゆるふ

かくさの里は、雪にしもかぎらず、ふりはてたることに侍

れば、また以左為勝

また、「初秋風」の二題後「野外雪」では、「雪」を白髪に見立てて(≪あたかも降り
積もる雪が草木に重くのしかかるように≫すっきり白髪となつてしまつた我が身と引き比
べるにつけ、今実際に雪が降りかかつている野外の草木はどんなにか寒いことであらうか)
と詠じている。例えば、「杣山のこずゑにおもる雪をれにたえぬなげきの身をくだくらむ」
(『新古今和歌集』巻第十六・雑歌上・一五八二・俊成)の如く、雪の降りかかる対象か
ら自身の嘆きを照らし出す詠がみえるが、(資料8)詠では、為家が判詞で「みにおもる
雪にならひて野なる草木をおもへるころ」「そのゆゑふかくみえ侍るにや」と評価した

ように、加齢によつてすっかり白髪となつた我が身から野にある草木を思い遣つてゐる点に実氏の手腕が見て取れる。

さらに、「山花」と「初秋風」の間に位置する「五月郭公」題の実氏詠「我のみとなくやさ月の時鳥たれもね覚をよそにやはきく」について、為家は判詞で、「われのみとなくやさ月とて、たれもね覚はよそにやはきくと侍るこそ、老ののちはまことになつよもわかぬね覚、ことよろしくききなされ侍れ」と、老の身に引きつけて解釈しており、(実氏自身の詠歌意図はともかく)老残のニュアンスを導入した解釈も許される詠歌であるといえる。つまり、実氏は、「山花」題から「野外雪」題まで、老残をモチーフにするか或いはそれに近い響きを持つた詠四首をほぼ連続して出詠していることになる。

そこで、老残を詠み込んだ詠を当該歌合全体で探してみると、「けふしはや花まちつくるおいらくのみ山がくれに春をしるかな」(十九番右・山花・三八・藤原信実)、「老のみにくるしき山のさか越えてなにとよそなる花をみるらん」(廿六番右・山花・五二・藤原為家)と、実氏と同題で信実と為家に一首づつ確認できるのみである。実氏(五十四歳)、信実(七十一歳)、為家(五十歳)という年齢を勘案しても、実氏の四首は、やや多いと言えよう。また、年齢という点で言えば、源有教(五十六歳)や蓮性(六十六歳)には、同様の詠は一首もみえず、(披講の場を持たなかつたにせよ)後嵯峨院主催の歌合出詠歌として実氏が老残をモチーフにした詠歌を続けて出詠している点は注目される。

一方、(資料5)詠の如く(老残)と(我が身の栄花)を対比的に詠み込んだ例歌は、実氏以外にも拾うことができる。

(資料9)『古今和歌集』巻第一・春歌上・五二

そめどののきさきのおまへに花がめにさくらの花をささせ給へるを見てよめる

さきのおほきおほいまうちぎみ

年ふればよはひはおいぬしかはあれど花をし見ればもの思ひもなし

前太政大臣藤原良房が、文徳天皇の中宮となった娘明子の御前に据えられた花瓶の桜を詠んだもので、「花」は明子を喩えている。良房は、天安元年（八五七）人臣として初めて太政大臣に昇りつめ、翌二年文徳天皇が崩じた後、明子所生清和天皇のもとで政治を司った。良房は、（自身は老いてしまったが、今上帝の母后たるわが娘をみてみると、何の憂いもない）と詠じており、言外には、栄花を極めた我が身に対する自負を読み取ってよいであろう。

（資料 10）『続後撰和歌集』巻第二十・賀歌・一三四一

今上くらゐにつかせ給うて、太政大臣のよろこびそうし侍りける日、牛車ゆりて、そのころ西園寺のはなを見て

前太政大臣

くちはてぬ老木にさける花ざくら身によそへてもけふはかざさん

実氏にも同様の詠歌がみえる。寛元四年は、実氏にとって慶賀がうち続き、先述した娘姝子腹の久仁親王が正月に帝位につき、自身も三月に太政大臣に任じられ、同時に牛車の宣旨を賜っている。（資料 10）歌は、その頃の西園寺殿の桜を見ての詠である。実氏は、寛元四年に五十三歳。「老木」は我が身を指し、その我が身に思いがけず開いた花桜―娘腹の皇子の即位、任太政大臣、そして牛車の宣旨という栄に浴しています、その栄の象徴とも言わうべき桜花を今日は我が身に挿頭して、このよき日を慶んでいます―という解釈になろう。「花ざくら」は、一門の血を引く帝の即位や自身の栄花の極みを暗示しているのである。

(資料 11) 『続後撰和歌集』 卷第二・春歌中・九五

宝治元年三月、前太政大臣の西園寺の家に御幸ありて花御覽ぜられける日、まゐりてよみ侍りける

後土御門内大臣

おもひきやおい木のさくらよよをへてふたたび春にあはむものとは

もう一例あげよう。『葉黄記』が「三日丙辰、晴、伝聞、於西園寺有和歌御会」(宝治元年三月三日条)と伝える西園寺第への後嵯峨院御幸の折りの、源定通の詠である。定通は時に六十歳。「よよをへてふたたび春に」とは、一旦途絶えてしまった土御門院の皇統が再び巡りきて、姪の通子腹の後嵯峨院が院政を敷き、同腹の兄通光は、従一位太政大臣に任じられた今年の春を言祝いでいる。定通は、この年九月に病で薨ずるが、『葉黄記』は「日来黄病無殊事云々、而此五六日俄増氣、大腹水腫云々、大略無分別、不知前後云々、今夜遂事切了、年六十、高才博覧之人也、院中執権也」(同年九月二十八日条)と、定通は日頃「黄病」ではあったが、別段変わった様子はなく、この五、六日で様態が急変し、今夜事切れたと伝える。「院中執権」とある如く、定通は院評定衆の一員で、七月の評定にもその名がみえ(『葉黄記』同年七月一日条)、さらに子息の出家に際しては、自ら大臣還任並びに大将兼帯を懇望しており(『葉黄記』同年六月四日条)、権勢への執着は、亡くなる直前まで衰えなかつたものと推察される。ここでも「おい木」と自ら詠じるのは、権勢の中枢にあるものが我が栄花を十分に実感した上での謙辞と考えられる。

このように、権門が一種の謙辞として、自身の老いをことさらに言い立てて、我が栄花と対比させる例が『古今和歌集』以来みえる。それは翻って言えば、頂点を極めた者において初めて効果を發揮する詠みぶりとも言えよう。実氏の「山花」題詠や、その後の老残をモチーフにした詠歌の連続も、そういった権力者の一種のポーズの系譜に位置づけられ

るのである。

* * * * *

(資料12) 『院御歌合』百十九番・社頭祝・二三七

百十九番 左

太政大臣

八幡山さかゆくみねも越果てて君をぞ祈る身のうれしさに

右

俊成卿女

神ち山すむ月かげも君がよのくもらぬ空に光をぞさす

左われもむかしはをとこ山といへることをかしく侍るを、

君をぞ祈るみをおもふとてといへるちかきうた侍るにや、

ただし身のうれしさとは、いよいよ心ふかくこそ侍らめ、

右神ちすむ月かげおとると申しがたくはべれば、よろしき

為持

当該歌合最後の題「社頭祝」の実氏詠である。この題で各歌人が詠み込んだ社の内訳は、以下の通り。

○伊勢社（「五十鈴川」・「神路山」）――九首〔後嵯峨院、俊成卿女、為経、信実、師継、

雅忠、少将内侍、越前、為家〕

○石清水社（「石清水」・「八幡山」）――八首〔小宰相、実氏、通忠、

通成、雅光、蓮性、下野、禅信〕

○住吉社――五首〔公基、有教、弁内侍、為氏、経朝〕

○春日社（「三笠山」）――二首〔実雄、為教〕

○賀茂社――一首〔公相〕

《この他、特定の社を詠まないもの一首〔定雅〕》。

実氏を含めて八人が、石清水社を言祝いでおり、数の上では、和歌の神でもある住吉社をおさえ、伊勢神宮に次いで二番目に多い。

ところで、後嵯峨院が石清水社へ行幸・御幸を繰り返している点について、齊藤歩氏は、仁治三年から文永九年（一二七二）までの三十年間で後嵯峨院の行幸・御幸を「『史籍綜覽』」から調査され、石清水社への行幸・御幸が、賀茂社の二三回を押さえて三二回と最多であることを確認された上で、「特に、石清水八幡宮への崇敬は注目に値する。単に足繁く訪れたというばかりでなく、しばしば七日間の参籠を行っており、最後の御幸は、元寇の前に『異国降伏』を祈願するものであった」と指摘された⁽²⁰⁾。

このような点は、『葉黄記』からも伺え、「上皇始御幸八幡也」（寛元四年四月二十六日条）、「上皇御参籠八幡、可為七箇日云々」（宝治元年二月九日条）、「今朝上皇御参籠八幡」（宝治二年閏十二月八日条）と、院の度々の参詣や参籠が記録されている。また、寛元四年五月二十日条別記に、「上皇自今日七ケ日可有御参籠八幡也、我君殊尊崇宗廟、頼有此臨幸（後鳥羽院初度浄衣御参、正治元年敷）」とみえる如く、近臣の間にも後嵯峨院の石清水社に対する特別な思い入れは伝播していたのである。そして、これら諸資料から伺える後嵯峨院の石清水社に対する崇敬の根底には、次の逸話が大きく影響していると思われる。

（資料13）『古今著聞集』巻第八・好色（本文は「新潮日本古典集成」）

第八十七代の皇帝、後嵯峨天皇と申すは、土御門天皇の第三の皇子なり。父の御門、寛喜三年遠所にて御事ありし後は、御めのと大納言通方卿のもとに、かすかなる御すまひにてわたらせ給へば、御位の事はおぼしめしもよらず。大納言さへ身まかりにけ

れば、仁治二年の冬の比、八幡へ参らせ給ひて、御出家の御いとま申させ給ひけるに、
暁、御宝殿のうちに、「徳はこれ北辰、椿葉の影ふたたび改まる」と、鈴のこゑのや
うにて、まさしく聞えさせ給ひければ、これこそ示現ならめと、うれしくおぼしめし
て還御ありけり。もとの通成中将の亭へはいらせ給はで、御祖母承明門院の土御門の
御所へいらせ給ひて、その年も暮れにけり。(後略)

建長五年(一二五三)成立『古今著聞集』所収の記事である。院は、寛喜三年の父土御
門院崩御後、大叔父に当たるとなる通方のもとに身を寄せていた。そして通方が亡くなった仁治
二年の冬頃、出家の暇乞いに石清水社に参詣したところ、暁方に「徳はこれ北辰、椿葉の
影ふたたび改まる」と、『新撰朗詠集』所収の治世の悠久たることを讃える漢詩の一節が
どこからともなく聞こえてきた。院は、これで出家を思いとどまり、祖母の承明門院の許
でその年の暮れを迎えた。以下、翌仁治三年正月の四条天皇急逝から、順徳院皇子忠成王
踐祚の風聞、一転して幕府の使者城介義景による承明門院方への次期帝決定の報となる(こ
の件は、『増鏡』第四三神山にもみえる)。

ところで、(資料13)の記事は、『古今著聞集』成立後、異本系『なよ竹物語』が抄入
されたものであることが既に指摘されている⁽²⁾。異本系『なよ竹物語』成立の上限について
は、後嵯峨院退位間もない建長三、四年(一二五一―五二)頃も想定として成り立つとす
る説⁽³⁾や、文永九年(一二七二)後嵯峨院崩御後とする説⁽⁴⁾があるが、少なくとも、石清水社
での御託宣の逸話は、後嵯峨院の実体験に基づいたものである。ここでは、その証左の
一つとして、(資料14)後嵯峨院が石清水社に参籠した折り、自身の即位以前の境涯を振
り返って詠んだと思われる詠をあげる。

(資料14)『続古今和歌集』巻第七・神祇歌・七〇三

いはし水木がくれたりしいにしへをおもひいづればすむ心かな

上の句では「君が世にあふさか山のいはし水木がくれたりと思ひけるかな」（『古今和歌集』巻第十九・雑体・壬生忠岑・一〇〇四）を踏まえつつ、（清水が木の下に隠れて見えないように、人に知られることなく沈淪していた私の親王時代）と詠じている。また下の句は、直訳すると（昔の参籠時を思い出せば清らかに澄む私の心であることよ）という意になるが、この点について深津睦夫氏は、（資料14）歌の「意味するところは、即位に際して石清水八幡神の加護があったということを知らないと十分に解せず、「この逸話が知られていることを前提として歌は採られて」おり「後嵯峨院が命じた勅撰集にこのように入集している」ということは、これが院自身公認の逸話であったことを示している」と指摘される⁽²⁵⁾。上の句の表現や深沢氏の指摘からも『古今著聞集』に抄入された逸話に近い体験が、即位以前の後嵯峨院にあったものと考えてよいであろう。石清水社は、後嵯峨院にとって、帝位への道を示し、出家を思いとどまらせてくれた特別な社なのであった⁽²⁶⁾。

（資料14）詠は、『増鏡』（第五内野の雪）にもみえ、『増鏡』諸注は、「八幡にこもり侍りし時」を、『葉黄記』が「上皇御参籠八幡、可為七箇日云々」と記す、宝治元年二月九日から七日間の参籠時と指摘する⁽²⁷⁾。おそらく、後嵯峨院の石清水社をめぐる逸話は、院が帝位についてまもない頃より語り継がれ、院に連なるものから徐々に宮廷に広まり、最終的に『古今著聞集』や『増鏡』にも収載されるに至ったと考えられる。仮に（資料14）の詠歌年次が宝治元年二月頃であるならば、かねてからの石清水社の御託宣の逸話に、あらたに後嵯峨院の詠が加えられ、院の石清水社に対する崇敬の念を、当該歌合の時点で出詠者が意識したことは十分に想定される。当該歌合の「社頭祝」題において、石清水社が、

住吉社を押さえて八人の歌人に歌材として撰ばれたのも、「社頭祝」題から後嵯峨院↓石清水社の繋がりやを連想した者が多かったからではないだろうか。

次に、実氏以外で石清水社を言祝いだ「社頭祝」題詠をみてみよう。「石清みづながれ
てきよきわが国を君の心に千よもまかせよ」（百十八番・右・小宰相）、「君がよのため
しにすめる石清みづながれ久しきかげはみゆらむ」（百廿番・左・通忠）、「君のみやく
みてしるらむ石清みづたえぬながれのちよの行末」（百廿四番・左・通成）、「石清みづ
きよきながれをむすびても万代いのる神の乙女子」（同・右・雅光）、「うごきなき山ま
つがねのいはしみづすむべきちよのかげぞ久しき」（百廿七番・左・沙弥蓮性）、「千と
せへむながれもしるし石清みづにごりなきよの末もあらはる」（同・右・下野）、「君す
まむながれ絶えせぬ石清みづいはねどしるき千代のかげかな」（百廿九番・右・沙弥禅信）
等と、社名から「清い」「流れ」といった縁語を詠み込んで、治世の恒久を希求、或いは
言祝ぐ詠となつている。

それに比して、実氏の場合、「八幡山さかゆくみねも越果てて」「身のうれしさ」と、
従一位太政大臣にまで昇り詰め官を辞した自分が、⁽²⁸⁾後はひたすら後嵯峨院政の長久を祈る
のみであると、詠者主体にかなり引きつけた内容となつている。「身のうれしさ」には、
実氏が官を極めただけでなく、姞子腹の親王が帝位に就き外戚となつたことも含まれよう。

* * * * *

では、最終題の詠歌内容を確認した上で、改めて、実氏の当該歌合における詠歌態度を
考えてみよう。実氏は、二題目「山花」から六題目「野外雪」までで、あたかも齢を重ね
た自身を写し取るような（或いはそのような解釈も許されるような）詠を繰り返していた。
そして、最終「社頭祝」題詠では、後嵯峨院ゆかりの石清水社を詠み込み、御代を言祝ぐ

嬉しさと共に、榮花を極めた我が身の喜びを高らかに謳っている。

つまり、当該歌合の実氏詠は、へこれから繁栄するに違いない後嵯峨院政において、今上帝の外戚、また関東申次や評定衆でもある自分が、齢を重ねていよいよ重きをなす存在である〜と、歌合の主催者後嵯峨院や他の歌人達に主張しているように読みとれるのである。実氏にとって当該歌合における一番の狙いは、院政初発期に際して自身の政治姿勢や政治的位置を喧伝することにあつたのではないだろうか。

そのように考えれば、冒頭の「早春霞」題で、主体を敢えて臘化した構造で「たちや出でまし」と詠じた意図も理解されよう。すなわち、歌合冒頭題において実氏は、「霞をこめて」に後嵯峨院政の約束された繁栄を託すと同時に、後嵯峨院政の表舞台へ自らが「たちや出でまし」と暗に主張しているのである。⁽²⁰⁾「早春霞」題であるため、自身の主張を余りにも露骨に表せば、題にそぐわない詠となる為、「たちや出でまし」の主体をほかすことで叙景歌の裏に自身の政治的主張を詠み込んだのではないだろうか。

このように捉えた上で、実氏の出詠歌十首を見渡すと、冒頭詠と最終詠とが、いずれも後嵯峨院政への祝言と実氏の主張とが同時に詠み込まれている点で通底しており、首尾が対の構造となつていくことに気付く。すなわち、実氏は、先に確認した老残詠の繰り返しも含めて、自身の政治的主張を、十首のどこに配置しどのように反映させるのかにかなりの意を払い、いわば戦略的に歌作に及んだものと考えられるのである。

* * * * *

後嵯峨院は、当該歌合の翌年七月二十五日に、為家を撰者として勅撰集撰集を下命、『宝治百首』を各歌人に詠進せしめた後、建長三年（一二五一）十二月に十番目の勅撰集として、『続後撰和歌集』が完成奏上された。その最終巻巻頭に、後嵯峨院と実氏の以下の如

き贈答歌が配置されている。

(資料15) 『続後撰和歌集』 卷第二十・賀歌・一三三〇、一三三一

宝治二年、さきのおほきおほいまうちぎみの西園寺のいへに御幸ありてかへらせ給ふ御おくり物に、代代のみかどの御本たてまつるとて、つつみがみにかきつけ侍りける

前太政大臣

つたへきくひじりの代代のあとを見てふるきをうつすみちならばなん

御返し

太上天皇

しらざりしむかしにいまやかへりなんかしこき代代のあとならひなば

この贈答歌について、『続後撰和歌集』の二年後に成立した『古今著聞集』は、「この事、昔は天暦の御門いまだ御子にておはしましたしける時、貞信公の御もとにわたらせおはしましたりける時、御贈物に御手本参らせられける時、君がため祝ふ心のふかければ聖の御代にあとならへとて 御返し、をしへおくことたがはずは行末の道遠くとも跡はまどはじ

この御歌ども『後撰』に入りたり。このためしを思しめしけるにこそ」(巻第五和歌)

と、『後撰和歌集』巻二十所収の村上天皇と藤原忠平との贈答歌にその先例をみている。

また、樋口芳麻呂氏は、この後嵯峨院・実氏兩詠を『続後撰和歌集』賀歌巻頭に据えた点について、「後撰集、更には後撰集を撰進せしめられた天暦の治世を慕い、この続後撰集の撰進される後嵯峨院・後深草天皇の御世も、同じく聖代である様にと祈る為家のひそかな願いが籠められている様に思われる」とされた。さらに、樋口氏の説を承け、佐藤恒雄氏は、この贈答歌を含む巻頭七首までが(一首を除いて)後嵯峨院と実氏の詠であることに関連して、「実氏の歌は、『賀歌』巻頭部分に象徴されるように、多く、後嵯峨院との連関において扱われている。入集総数三六首(定家四三首に次ぐ入集歌数第二位・稿者

注)のうち、賀の歌が五首もあるのをはじめ、ほとんどが公人実氏の詠作であるのはそのため。「実氏厚遇が第一の目的だったのではなく、後嵯峨院讃頌と不即不離の関係にある故の厚遇であったことを意味するもの」で「後嵯峨院の世を、延喜・天曆に典型を見るような、歌道と政事が一体をなした理想の状態にするためには、守文の君を助ける外戚実氏の内輔を欠くことはできない」という為家の思想の反映と指摘されたのである。^(3.1)

当該歌合において、「君がためなほ万代の春の色に霞初めたる明ぼのの空」(二番右・早春霞・俊成卿女)、「君がへむ千とせの秋のはじめとてしらする風も松に吹くなり」(四十二番右・初秋・藤原実雄)、「わかのうらや昔にかへる波のうへに光あまねき秋のよの月」(六十四番左・海辺月・藤原経朝)、「けぬがうへにまた跡つけよ玉ぼこのみちある御代の野べの白雪」(六十九番右・野外雪・藤原公相)等、祝いに言寄せた詠歌が多くみえることから、佐藤恒雄氏は、当該歌合を「政教的色あいの強い」後嵯峨院仙洞歌壇の場の一つとされた。^(3.2) 本稿では、佐藤氏の説を承けつつも、実氏は、自らが院の支えであり御代を支えていく老臣であると自負し、その気概を、院政初発期にあたる宝治元年『院御歌合』の詠に直接間接両様に示しており、臣下としてあくまで受動的に御代を言祝いでいる他の歌人達とは、詠みぶりに一線を画すことを指摘し得るのである。

四 西園寺公相と和歌

公相(一二二三〜一二六七)は、実氏男。嘉禎二年(一二三六)従三位、正嘉元年(一二五七)従一位。弘長元年(一二六一)には太政大臣に任じられるも、文永四年(一二六七)十月、父実氏より早く、四十五歳で亡くなっている。歌歴としては、『続後撰和歌集』に六首入集、勅撰歌人となる。『続古今和歌集』には十首入集。歌人としての活動は、父

実氏同様活発で、宝治元年『院御歌合』、続く『宝治百首』に詠進、建長三年（一二五一）九月一三夜、後嵯峨院仙洞で行われた『影供歌合』にもその名がみえる。文永二年の『続古今和歌集』奏覧前夜に催された、『龜山殿五首歌合』にも出詠しており、当時の所謂盛儀の催しには出詠しているといつてよい。では、具体的にはどういった詠を残しているか。以下、粗々辿ってみよう。

公相の『院御歌合』出詠歌は以下の通り。

「浅みどり春の日かずもしられけりまだ色うすき山の霞に」（早春霞・四番右・八）、「かづらきやいづこを花とたづねまし梢につづく峰の白雲」（山花・十七番右・三四）、「いまよりはまたでやきかむ郭公なきふるしつるさみだれの比」（五月郭公・三十番右・六〇）、「けふはまた夕をわきて久堅の空よりすぐる秋の初かぜ」（初秋風・四十三番右・八六）、「おしてるやなにはのうらの夕なぎにあしの末ばをいづる月かげ」（海辺月・五十六番右・一一二）、「けぬがうへにまた跡つけよ玉ぼこのみちある御代の野べの白雪」（野外雪・六十九番右・一三八）、「名取川おもひ朽ちても年はへぬまだあらはれぬ瀬瀬の埋木」（忍久恋・八十二番右・一六四）、「わすれぬも我が身のとがとるばかりありしにかはる暁もがな」（逢不遇恋・九十五番右・一九〇）、「いくかへりなれぬ嵐もしくるらんみやこを忍ぶよはの枕に」（旅宿嵐・百八番右・二一六）、「君がよをいのる心のしるしあらば久しくちぎれかものみづがき」（社頭祝・百二十一番右・二四二）。

総じて、題を穩当に詠みこなしていると言えようか。詠者主体の主張を織り込んだと思しき詠は殆どみえず、「野外雪」題詠、「社頭祝」題詠の二首で後嵯峨院政への祝言を詠み込んでいる程度である。この内、後者は、題に已に祝言が設定されており、こういった点は、父実氏が出詠歌を有効に活用し、戦略的に自己の主張を展開していったのと極めて

対照的である。

こういつた傾向は、『宝治百首』にも看取され、「ちとせまで松にとのみやかかるらん花さきそむる春の藤波」(松上藤・七二九)、「ひさかたの空にあらしや払ふらん玉しく庭をみがく月影」(庭月・一七二八)、「九重に千代をかさねてかざすかなけふをりえたる白菊の花」(重陽宴・一八四八)、「二三二六夕されば塩ひのかたになく千鳥声をば千代にや千代とぞ鳴く」(鴻千鳥・二三二六)、「ちはやぶる神のやしろのみしめなはながくも絶えじみよの行末」(寄社歌・三九二五)、「みかさ山峰たちのぼる朝日影空にくもらぬよろづ代の春」(寄日祝・三九六五)と、もともと祝意がこめられやすい題において後嵯峨院政への祝言が見て取れる。

『続古今和歌集』成立直前に催された『亀山殿五首歌合』における出詠歌は以下の五首。「大井川みせきの水にかげさえて月もみなぎるせぜの岩浪」(亀山・河月・三番右・六)、「女郎花なびく野ばらの露わけてわが妻とてや鹿の鳴くらん」(亀山・野鹿・十八右番・三三)、「小倉山ひかげうつろふ色そへて雲井にみゆる秋の紅葉ば」(亀山・山紅葉・二十六番右・四九)、「在明の月のかたみもまだしらずつれなきはうき人のこころに」(亀山・不逢恋・三十七番右・六七)、「あはれなど今はかげみぬむれみづながれて猶も袖ぬらすらん」(亀山・絶恋・四十七番右・八七)と、いずれも題について過不足なく詠み込んでいる。

このように、主な百首詠、歌合出詠歌を見る限り、公相については、父実氏に比べるとあまり露骨に自身の政治的主張を詠み込む傾向はみえない。ただし、公相は、先にも触れた通り、実氏に先立ち四十五歳で亡くなっており、政治家として重みを増していく前に生涯を閉じたことも、或いは関係しているのかもしれない。

〔注〕

(1) 広橋守光による抄出本。尾上陽介氏「『民経記』と曆記・日次記」(五味文彦氏編『日記に中世を読む』(吉川弘文館・平10)所収)参照。

(2) 『平戸記』仁治三年正月十九日条に、「彼宮者祖母承明門院令扶持申給、故通方卿雖奉養育、事八變改之後、所令坐彼院給也」とみえる。

(3) 『民経記』仁治三年正月二十日条は、「若宮御坐、故土御門院御末子、春秋廿三、御母故宰相中将通宗卿女、年来為有御出家、被定御師匠、(真忠法印)而自然遅々、不慮御運可貴者歟」と、出家の意志はあつたものの、遅滞していたと伝える。

また、『増鏡』(第四 三神山)は、「土御門殿の宮は廿にもあまり給ぬれど、御冠、沙汰もなし。城興寺宮僧正真性ときこゆる、御弟子にとかたらひ申給ければ、さやうにもと思して、女院にもほのめかし申させ給けるを、いとあるまじき事とのみ諫めきこえさせ給」と記す。

(4) 『民経記』仁治三年正月十一日条に、「於今者後堀川院御後胤絶畢、土御門・佐渡兩院皇子当其撰給歟、帝位事猶東夷計也」とみえる。

(5) 『平戸記』仁治三年正月十九日条は、「入夜使者兩人参一条殿、被召御前云々、其後向相国禪門許、即面謁云々、両所共以不請之氣柄焉云々、東使頗答以笈云々」と鎌倉幕府からの次期帝決定の報を聞いた道家・公経の不满を伝える。

(6) 『平戸記』仁治三年正月十七日条は、「阿波院宮依武士縁、一定御出立之由、世以風聞、件縁者、前内府(言通公)妻者泰時重時等姉妹也、如此之間、私差遣使者於関東、有慇勤之旨云々」の如き風聞を伝える。

(7) 例えば、源頭房は、娘賢子入内を賀した藤原師実詠「ゆきつもるとしのしるしにいとどしくちとせのまつのはなさくぞ見る」(『金葉和歌集』巻第五・賀部・三二九)に対して「つもるべしゆきつもるべし君がよはまつのはなさくちたびみるまで」(同・三三〇)と返し、師実の栄えを言祝いでいる。

(8) 大系本『増鏡』(底本、学習院大学付属図書館所蔵室町時代古写本)は、第五内野の雪における公経詠「山ざくら峯にも尾にも植へをかんみぬ世の春を人や忍と」傍線部について、底本の仮名遣いの右傍に歴史的仮名遣いを注記した上で、「植えておこう」と解釈する。

(9) 例えば、『新古今増抄』当該歌注に「たがうへをきしと先祖の善根をよるこぶなり」とみえる他、『八代集抄』にも「遅かれとかれ終に任大臣の心を梅の咲になぞらへて、たがうへし種にてかゝる御繁昌ぞとの御悦びの心也」とある。

(10) 小林強氏「後嵯峨院の詠作活動に関する基礎的考察」(『中世文芸論稿』第16号平5・3)に拠ると、讓位以前の詠作が確実な現存御製は、本稿で取り上げた詠以外では三首のみであり、いずれも寛元年間の詠である。小林氏が規定される(存疑)歌は含まない。なお、最近刊行された小松茂美氏『天皇の書』(文藝春秋・平18)には、この詠について「後嵯峨天皇は勅答の詠を返す」との記述がみえる。

(11) 『平戸記』仁治三年四月十五日条、五月二十八日条、『民経記』同年七月十日条等。

(12) なお、実氏は公経の没後、以下の如き追想歌を詠んでいる。

『続後撰和歌集』巻第十八・雑歌下・一二五九
入道太政大臣身まかりにける秋のすゑ、西園寺にこもりゐてよみ侍りける

前太政大臣

なき人のかたみもかなしうゑおきてはてはちりぬる庭のみみぢば

(13) 実氏は、二人の中宮（大宮院姞子・東二条院公子）の父となり、二代の天皇（後深草・龜山）の外祖父となる。

(14) この後嵯峨院、実氏兩詠は、いずれも『続古今和歌集』に入集（巻第二十・賀歌・一八六四・一八六五・一八六七）。

(15) 定家詠「暮れて行く春の霞を猶こめてへだつるをちにたちやわかれん」について、久保田淳氏は、『訳注藤原定家全歌集』（昭和60年 河出書房新社）で、「暮春の霞にさらに雲がたちこめて隔てている遠くの方に、春は、そして又人は別れて行くのであろうか」と、「こめて」を自動詞的に解釈されている。当該歌についても自動詞的な解釈の可能性もあるが、いずれにせよ、早春にも拘わらず霞が早くも立ち込めてくる状況を読み取る点では一致しよう。

(16) 同題十三番右の為家詠「いつのまに霞の衣うち消えし雪ふる空も春はたつらむ」について、「おほよそ立春早春はいささかおもひわくべきにやとみえ侍れど、たつ春の題に早春の心よめらんよりはことたがひ侍らじとみゆるし侍る」と、本来立春と早春はある程度区別して詠むべきだが、立春題に早春題を詠むよりはよいと為家は判詞で指摘しており、実際「あまのとを明くるやおそき立つ春の霞みてみゆるよこ雲の空」（七番左・通成・勝）、「あまの原雪げの空のかすまずは立ちける春もえやはわかまし」（八番右・弁内侍・勝）等には勝が付されている（但し、十三番の為家詠については「かすみの衣にひかれて立つとおきてはべる、尤まけ侍るべし」とみえる）。

(17) 今回は用例から除外したが、「さみだれのふりにし友とかたらへばなれもこととふほととぎすかな」（五月郭公・下野・72）にも或いは、視点人物の「老い」を読み取

って良いのかもしれない。また、「月ゆゑと人にはいひてたれをかもめでても恋のおいとなるらん」(忍久恋・信実・168)は、比喩と判断して用例に加えなかつた。

(18) 例えば、「新編日本古典文学全集」『古今和歌集』(小沢正夫 松田成徳氏校注・訳平成6年 小学館) 当該歌脚注に、「娘の栄達を祝い、言外によくぞ自分はここまできたものだという、ほつとした気持が表明されている」とみえる。

(19) 『重修増鏡詳解』(和田英松・佐藤球氏著 明治書院 大正14年)は、「朽ち果たる桜の老木にも、春は花のさき栄ゆるなるが、その如く、わが身も老朽に及びて、太政大臣にのぼり、牛車をさへゆるされて、御恵の露に浴し、栄花をきはむれば、この花を、わが身によそへて、今日はかざしにさゝむと、思ひ侍りとの意なり」と指摘する。

(20) 「理想としての「後嵯峨院時代」」(『日本文学』584号 平成14年2月)。

(21) 後嵯峨院が踐祚以前に出家を考えていたことについては、『民経記』仁治三年正月二十日条に「年来為有御出家、被定御師匠、(真忠法印、)而自然遅々、不慮御運可貴者歟」とみえる。

(22) 早くは、江戸後期の国学者岸本由豆流の『鳴門中将物語考証』に指摘がみえる。

(23) 平林文雄氏『なよ竹物語研究並に総索引』(昭和49年 白帝社) 総説篇二、成立・内容および文学的特色 物語の成立参照。

(24) 『なよ竹物語絵巻 直幹申文絵詞』(日本絵巻大成20 昭和53年 中央公論社) 久保田淳氏解説参照。

(25) 「『増鏡』——「王法仏法相依論」——」(『国文学解釈と鑑賞』第57巻12号 平成4年12月) 参照。

(26) 三角洋一氏は、「後嵯峨院の踐祚が石清水の神意によるということ、その後、兩統迭立時代になってからも皇室の尊崇は篤」と指摘された上で、後深草院中宮東二条院（実氏女）の遊義門院御産の折り、後深草院の「御心の内には、石清水のかたを念じ給つゝ、御手をとらへて泣きたまふ」（第八あすか川）様や、後宇多、後醍醐の石清水社への行幸・御幸、蒙古襲来の折りの石清水社奇譚等が、『増鏡』において語られていることを示された。「『増鏡』の和歌―神祇歌と賀歌をめぐって―」（『王朝和歌と史的展開』≒平成9年 笠間書院≒所収）参照。

(27) 『重修増鏡詳解』、岩波大系本『増鏡』参照。

(28) 当該歌は、『玉葉和歌集』巻第二十・神祇歌・二七六五には「後久我前太政大臣」（源通光）として入集する。岩佐美代子氏は、『玉葉和歌集全注釈』下巻（平成8年 笠間書院）の中で、通光詠という前提のもと、「語釈」「やはた山」の項で「やはた山―石清水八幡（源氏の祖神、作者通光の氏神）のある男山」と指摘された上で、「祖神、石清水八幡を祀る八幡山の坂を昇り、ついに峰を越えるように、榮職を昇りつめて従一位太政大臣に至った今は、ひたすら我が君の御榮えをのみ祈るよ。我が身の嬉しさにつけても」と通釈をされている。

(29) 「表だつた場へ出る」という意の「立ち出づ」の例歌は、「老の波かひある浦に立ちいでてしほたるるあまを誰かとがめむ」（『源氏物語』若菜上・明石の尼君）、「おいのなみなほたちいづるわかのうらにあはれはかけよすみよしの神」（『千五百番歌合』千四百九十三番左・二九八六・讃岐）等散見する。

(30) 「統後撰目録序残欠とその意義」（『国語と国文学』第36巻第9号 昭和34年9月）。

(31) 「『統後撰集』の当代的性格」（『国語国文』第37巻第3号 昭和43年3月）。

(32) 佐藤氏前掲(2) 論文参照。

〔付記〕

二節は「西園寺公経と後嵯峨天皇―『民経記』仁治三年四月五日条記載贈答歌をよむ」(『古代中世国文学』第22号・平成18年6月)、三節は「宝治元年『院御歌合』の西園寺実氏」(『国語と国文学』第八十三卷第六号 平成18年6月)を基に再構成したものである。

宝治元年『院御歌合』注釈——「早春霞」題——

位藤 邦生・藤川 功和

はじめに

『院御歌合』（『百三十番歌合』、『後嵯峨院歌合』、『宝治歌合』等とも、本稿では「新編国歌大観」に拠る）は、後嵯峨院政初期の宝治元年（一二四七）に各歌人が出詠、加判を経て成立した、出詠歌人二十六人による十題、百三十番、総歌数二百六十首に及ぶ歌合である。仁治二年（一二四二）八月に八十歳で没した父藤原定家の跡を継いで、歌壇の指導者として歩み出した為家が判者を勤めており、為家単独撰である『統後撰和歌集』成立前夜の彼の和歌観や、後嵯峨院歌壇初期の内実を伺う上からも、当該歌合の持つ意味は少なくない。当該歌合に関しては、諸本の整理がなされている他、主に歌壇史や後嵯峨院歌壇研究の一環として先行研究がみえるが、一方で、当該歌合の注釈は未だなされていない。

位藤邦生を代表とする広島大学中世文芸研究会は、平成十六年四月から平成十七年三月にかけてほぼ週一回のペースで当該歌合の輪読を試みた。本稿は、その輪読の成果をもとに、位藤邦生・藤川功和が、あらためて検討した結果を公にし、大方の批正を仰ぐもので

ある。本稿では、「早春霞」題の十三番二十六首の注釈を示す。なお、研究会の輪読における担当者は以下の如くである。

一番—相原宏美（大学院文学研究科博士課程後期）、二番—大園岳雄（大学院文学研究科研究生）、三番—新居和美（大学院文学研究科博士課程後期）、四番—金岡文緒（大学院文学研究科博士課程前期）、五番—位藤邦生・藤川功和、六番—吉川洋子（文学部二年生）、七番—藤川、八番—金岡、九番—吉川、十番—金岡、十一番—位藤・藤川、十二番—新居、十三番—相原（所属は輪読時点）

凡 例

一、底本は、群書類従本（巻第二百所収）を用いた。校合した諸本と略号は、以下の通り。

（書）—書陵部蔵本（『新編国歌大観』所収）、（聚）—書陵部蔵歌合類聚本（『大日本史料』第五篇二十四所収）、（永）—永青文庫本（『細川家永青文庫叢刊』第八卷所収）、（内）—内閣文庫「百三十番歌合（外題）」本、（支）—九州大学支子文庫本

一、本文冒頭にある内題、題目録、作者目録の注釈はこれを略した。

一、番全体の本文と【校異】を示した後、【他書所伝】、【本歌】（適宜【参考歌】を併記）、【語釈】【通釈】を掲げた。

一、【語釈】の内重複する語については、紙幅の関係上略した。

一、表記や送り仮名の異同はこれを略した。

一、見せけちや補入符号のある箇所は、訂正後の本文を採用した。

一、□は読み取り得ていない箇所を示す。

一、翻字本文には適宜読点を施し、字体は現行の活字体に改めた。

一、本文中、異同の存する箇所は、傍線及びイ、ロの如く付し、語釈を施した箇所は、本文右傍に①、②の如く番号を付した。

一、当該歌合以外の和歌の引用は、全て『新編国歌大観』に拠った。

一、引用文中、適宜、傍線、振り仮名等を付した。

一、主な参考文献は、巻末に一括して示した。

〈一番〉

一番 早春霞

左^イ 女房

いつくより春はきぬらん^天の戸の明るをまたすたつ霞哉

右 承明門院小宰相

春きても猶氷しく衣川霞もいく重立わたるらん

左歌^ホ 首尾相叶て、心詞花麗の姿にこそ侍るめれ、

右歌^ハ 衣川氷しくはかりにて、かけても用なく見え侍る

うへに、猶氷れる程ならば、霞幾重とは事たかひて侍らん、いかさまにも、以左為勝、

【校異】

イ 勝ーナシ（書） ロ ナシー続古今、春上、ハ はーの（支）

ニ をーも（永） ホ 左ー左の（書） ヘ 右ー右の（書）（永）

ト とはーとまでは（書）（永）、とはは（聚）（内）（支） チ て

ーてや（書）（永） リ にもーにても（永）

【他書所伝】

〈左歌〉

『続古今和歌集』巻第一・春歌上・六

宝治二年歌合に、早春霞を

太上天皇

いつくよりはるはきぬらんあまの戸のあくるもまたすたつかすみかな

『題林愚抄』第一・春部一・八五

（早春霞）

続古

太上天皇

いづこより春はきぬらんあまの戸のあくるもまたす立つ霞かな

〈右歌〉 ナシ

【参考歌】

〈左歌〉

『隣女集』巻第二・立春・一八八

いづくよりくる春なればあまのとのあくるもまたずかすみそむらん
【語釈】

①早春霞―「早春霞」題の先行例としては、慈鎮・定家・家隆・隆祐らが参加した元仁（『隆祐集』の「永仁」は誤り）二年（一二二五）三月、九条大納言（基家）家三十首御会がみえ、「早春霞 はるのきる霞の衣たちそめてまちしもしるしみの山本」（『拾玉集』第四・詠三十首和歌・四六二二）、「早春霞 たちそめてけふやいくかの朝まだき霞もなれぬ春のさ衣」（『拾遺愚草』中・二〇五八）等が確認できる。

②女房―後嵯峨院を指す。歌合において、御製を「女房」と記す先例は、正治二年九月『院当座歌合』、正治二年十月『院当座歌合』、『仙洞十人歌合』、『老若五十首歌合』等に確認できる。『安斎随筆』「歌合称『女房』禁中御歌合」が、「主上の御歌をば作者を女房とするす。（中略）判者判断して勝負を分くるにはばかりある故、女房の歌にしてはばかりなく判断すべきがためなり」と記す如く、本来は勝負付けにおいて、判者が憚りなく歌の優劣を判定するためのものであったが、後嵯峨院政期には既に記号化しており、後嵯峨院や宗尊親王の「女房」に負が付される例はみえない。後嵯峨院は、土御門院皇子で、母は源通子。仁治三年（一二四二）四条天皇の急逝に伴い即位。寛元四年（一二四六）正月、後深草天皇に讓位、長く院政を敷いた。『統後撰和歌集』、『統古今和歌集』と、勅撰集を二度撰進させる。文永九年（一二七二）崩御。

③天の戸―もとは記紀にみえる高天原の入り口「天の岩戸」に同じ。当該歌では、「あまのとのあくるけしきもしづかにてくもるよりこそはるはたちけれ」（『新勅撰和歌集』巻第一・春歌上・二・藤原俊成）と同様、「明」と併せて用いられ、夜明けを喩える。

④承明門院小宰相―藤原家隆女。生没年未詳。土御門院生母承明門院在子に仕えた女房歌人。土御門院配流後は、後嵯峨院歌壇で活躍。

⑤衣川―陸奥国の歌枕。「夜をさむみいはまのこほりむすびあひていくへともなきころもがはかな」（永久三年『内大臣家後度歌合』・一・藤原忠通）等、嚴寒の情景を詠み込んだ例歌が散見する。また、地名の「衣」から、「たもとよりおつる涙はみちのくの衣河とぞいふべかりける」（『拾遺和歌集』巻第十二・恋二・七六二・よみ人しらす）の如く、縁語で結ばれる例がみえる。当該歌では、「うちつけに春のかすみを見わたせばころもがはにぞたちわたりける」（『千類集』・二）と同様、「霞」「立つ」と、「衣」「裁つ」が各々縁語で結ばれている。

⑥首尾相叶―上の句と下の句とが無理なく結びついている事。「左歌、首尾相叶、ふるまひもありてをかし」（天徳四年『内裏歌合』十番・実頼判）、「左首尾相叶ひてころ詞よろしくこそ侍れ」（『別雷社歌合』十一番・俊成判）等の用例がみえる。

⑦花麗―花やかな麗しさをいう。『瑩玉集』「やさしく花なる歌」「天の戸をおし開けがたの雲間より神代の月のかげぞ残れる」「松島やをじまの磯にあざりせし海士の袖こそかくはぬれしか」二首の歌評、

「姿詞花麗を先として、遠く世の塵をはなれたり。中にははじめの歌は、いかになみくの品にあらず」とあるのによれば、「やさしさや端正清純な美しさ、品格をも含有する。

⑧事たかひて「千五百番歌合」雲つづくとをちのさとのゆふがすみたえまたえまにかへるかりがね（三十九番左・七七・小侍従）に対する忠良判「左、雲つづくとおきて又たえまたえまと侍る、はじめをはりことたがひてや」の如く、一首の中で詠み込まれた言葉同士に論理的な矛盾が生じている場合等を指す。

【通釈】

一番 早春の霞

左歌 勝

女房（後嵯峨院）

いったいどこから春はやってきたのだろうか。（天の岩戸が開くかのように）夜が明けるのを待たずに立つ霞であるよ。

右歌

承明門院小宰相

春が来てもまだ（まるで衣を敷いたように）一面に氷が張っている衣川には、霞も幾重にか、裁ち重ねた衣のように立ちわたっていることであろう。

【判詞】左歌は上下の句がよく合っており、心（歌の内容）・詞（表現）とも品格のある美しい姿をしているようです。右歌の衣川は氷が敷きつめているというばかりで、詠み込む必要はまったくなく見えます上に、まだ氷っている状態ならば、「霞幾重」とは矛盾してしまうでしょう。どのように見ましても、左を勝とする。

〈二番〉

二番

左挿

太政大臣

右

俊成卿女

皇の御代さかふへき春なれば霞をこめて立や出まし
君かため猶万代の春の色に霞そめたる明ほの、空
左の御代栄ふへき春、世皆可希事に侍るうへに、
下句、そのいはれ聞えて、おかしく侍るにや、右君かため
猶万代といへる、又捨かたく侍れば、両方の祝は、
なすらへて持とす、

【校異】

イ 持一ナシ（書） 口 ふーゆ（書）（永） 八 立一春（支）

ニ 卿一ナシ（支） ホ ふーゆ（書） へ 可希事一こひねがふべ

きこと（書）（聚）（永）（内）（支） ト 右一ナシ（書） チ 猶一

を（支） リ とーのと（書）（永） 又 祝は一祝言を（書）、祝は

（聚）、祝言（永） ル 持とす一為持（書）（聚）（永）（内）（支）

【他書所伝】

〈左歌〉 ナシ 〈右歌〉 ナシ

【語釈】

①太政大臣―現任なら源通光だが、『夫木和歌抄』収載当該歌合出詠歌の作者記載（「常盤井入道太政大臣」）や歌の内容から、前太政

大臣西園寺実氏と推定される。実氏は、建久五年（一一九四）に西園寺公経と一条能保女の間生まれ。仁治三年（一二四二）女姝子が後嵯峨天皇に入内、翌年久仁親王（後深草天皇）が誕生。当該歌合時点で、実氏は今上帝の外祖父。院評定衆、関東申次の任にもあり、後嵯峨院政下において極めて重要な位置にあった。文永六年（一二六九）没。

②皇―「すべらぎ」「すめらぎ」「すめろぎ」等とも。天皇の尊称。多く枕詞的に用いられ、当該歌では、「御代」にかかる。

③霞をこめて―他動詞としての「こむ」は、一義的には、「秋の月ひとへにあかぬものならばなみだをこめてやどしてぞみる」（『伊勢集』・三〇二）の如く、「（対象を）ある物の中へ入れる」とじ込める」という意で用いられ、当該歌の場合、「霞を（散らすことなく一面に）」とじ込めて」という意になる。「かすみさへたなびくのべのまつなればそらにぞ君がちよはしらるる」（『後拾遺和歌集』第七・賀・四二八・源兼澄）では、子の日に小松を引く男女の姿によせて、「たなびく」に「引く」を掛け、霞棚引く空にまで東三条院の長寿が約束されたと詠じる。また、定家詠「春の色をいく万代かみなせ河霞のほらの苔のみどりに」（『建保名所百首』春二十首・水無瀬河・一九五）の如く、霞は、仙洞御所を連想させる表現でもあり、当該歌の「霞」は、後嵯峨院政の恒久を暗示する祝言として機能している。

④立や出まし―春が立ち出るの意。「立」は「霞」の縁語でもある。

一方、「郭公こゑまつほどはかたをかのもりのしづくにたちやぬれまし」（『紫式部集』・一三三）、「かぞへつるこよひの月はくもるともまつとしきかばたちやいでまし」（『実家集』・三二六）等の如く、「やくまし」は多く「ししようか」と視点人物の意志を表すことから、「皇の御代」を言祝ぐ実氏自身の主張をも含んでいると解せる。「老の波かひある浦に立ちいでてしほたるるあまを誰かとがめむ」（『源氏物語』若菜上・明石の尼君）、「おいのなみなほたちいづるわかのうちにあはれはかけよすみよしの神」（『千五百番歌合』千四百九十三番左・二九八六・讃岐）等、「立ち出づ」には、「表だつた場へ出る」という意があり、今上帝の外祖父や院の評定衆として今後の院政下において一役買おうとする自らの意思を叙景歌の裏に暗に主張するか。

⑤俊成卿女―藤原盛頼女。俊成孫。生没年未詳。後鳥羽院歌壇で歌人として開花。晩年は播磨国越部庄に住した。

⑥猶万代の春―御代の長久を意味する「万代の春」に「さらに、ますます」という意の「猶」を加え誇張する。「うごきなくなほ万代ぞたのむべきはこやの山のみねの松かげ」（『千載和歌集』卷第十・賀歌・六二五・式子内親王）がその例。

⑦春の色―漢語「春色」を源泉とし、春の気配を指す。早くは『古今和歌集』に「春の色のいたりいたらぬさとはあらじさけるさかざる花の見ゆらむ」（卷第二・春歌下・九三・よみ人しらず）とある。

⑧霞そめたる―霞が棚引き始める意。左歌同様、霞が立つことに祝

意が込められている。

◎両方の祝は、なすらへて持とす―『八雲御抄』巻第一・正義部に「祝歌は勝也」とみえ、祝の心を詠み込んだ歌は、単なる歌の優劣から離れた評価を受けていた。

【通釈】

二番

左歌 持

太政大臣（西園寺実氏）

天皇と院の御代がこれから弥々栄えるであろう今年の春であるので、霞を（散らすことなく）とじ込めて、春がその中から立ち出るように、私も補佐役として一役買おう。

右歌

俊成卿女

院の（治世を言祝ぐ）ために限らない栄えを湛えるこの春の様子に（さらに祝意を加えるかのように）霞み始める明け方の空よ。

〔判詞〕左歌の「御代栄ふへき春」は、世の人々皆が希求するはずの事であります上に、下の句は、その（院の治世が繁栄する）証が聞こえて、見事でしょうか。右歌の「君かため猶万代」という（表現は）、又捨てがたいですので、両歌の祝意は、肩を並べて持とする。

〔三番〕

三番

左

権大納言源朝臣通忠

かすか野の草のはつかに雪消て緑も寒く霞む比かな

右

権大納言藤原朝臣実雄

梓弓をして春こそきにけらし野山をこめて霞たなひく

左のかすか野、めつらしき所は見え侍らぬうへに、みとりも寒くかすむ比かなと侍るや、少し心ゆかぬやうに侍らん、右の野山のかすみをこめて、歌からいさゝか立増ると申へくや、

【校異】

イ 勝一ナシ（書） 口のーナシ（永） 八 かすみをこめて霞

をしこめて（聚）（内）、霞はをしこめて（永）

※九州大学支子文庫本は、大幅に本文が異なるので全文を示す。

三番

左

権大納言源朝臣通忠

梓弓おして春こそきにけらし野山をこめて霞たなひく

右

本に此番の哥落敷□無之

【他書所伝】

〔左歌〕ナシ

〈右歌〉

『題林愚抄』第一・春部一・九〇

宝治御歌合

実雄卿

梓弓おして春こそきにけらし野山をこめてかすみたなびく

【語釈】

①権大納言源朝臣通忠―源通光男。母は藤原範光女。建保四年（一二二六）生まれ。正二位大納言に至る。建長二年（一二五〇）没。

②かすか野―春日野。大和国の歌枕。現在の奈良公園一帯の丘陵地をさす。「かすがのはゆきのみつむとみしかどもおひいづるものはわかななりけり」（『後拾遺和歌集』第一・春上・三五・和泉式部）、「春日野のしたもえわたる草の上につれなくみゆる春のあは雪」（『新古今和歌集』巻第一・春歌上・十・源国信）等、春が到来しても春日野には未だ雪が降り積もっているという例歌が散見する。

③草のはつかに―「はつかに」は、わずかな程度を指す。通常、「かすがのゆきまをわけておひいでくる草のはつかに見えしきみはも」（『古今和歌集』巻第十一・恋歌一・四七八・壬生忠岑）の如く、「はつかに」が下の動詞にかかり「ほんの少しくである」となる。当該歌では、「はつかに」は蝶番のように、「草のはつかに」「はつかに雪消て」の両方に掛かり、「ほんの少し消えた雪間から僅かに見える若草」という意をあらわす。

④緑も寒く―所謂共感覚表現。ここでは視覚表現「緑」と触覚「寒」が組み合わせられており、春が到来し春日野は霞がかっているのに、

雪間の緑が、いかにも寒々しく見える様をいう。「ひかずふる雪げにまさる炭がまの煙もさむしおほ原の里」（『新古今和歌集』巻第六・冬歌・六九〇・式子内親王）、「あけわたる雲まのほしのひかりまで山のはさむしみねのしらゆき」（『新勅撰和歌集』巻第六・冬歌・四二四・藤原家隆）等がその例。

⑤権大納言藤原朝臣実雄―西園寺公経男。母は平親宗女。建保五年（一二二七）生まれ。後宇多天皇・伏見天皇の外祖父。洞院家の祖。従一位左大臣に至る。文永十年（一二七三）没。

⑥梓弓―梓の木で作った弓。『万葉集』の時代から枕詞的に用いられた。当該歌では、「梓弓おしてはるさめけふふりぬあすさへふらばわかなつみてむ」（『古今和歌集』巻第一・春歌上・二〇・よみ人しらす）の如く、「梓弓おして」までが「春」の序詞で、「おして」は「おしなべて」（あたり一面に）の意である。

⑦歌から―「時しらぬ雪に光やさえぬらんふじの高根の秋のよの月」（建長三年『影供歌合』百十四番右・藤原教定）に対する判「ゆきにさえたるふじのたかねの月、歌からたけたかくきよげにみえ侍りし」の如く、歌全体の品格を指す。なお、歌合判詞においては、「おほかた歌からはなだらかなり」（元永元年十月二日『内大臣家歌合』三番・源俊頼判）の如く、声調に関して用いられる場合もある。

【通釈】

三番

左歌

春日野の若草が僅かに、ほんの少し消えた雪間からみえる、(その雪間の) 緑も寒々しく霞む頃であるよ。

右歌 勝

権大納言藤原朝臣実雄

あたり一面に春がきたらしい。野山をあたかも包み込むかのよう
に霞がたなびいている。

〔判詞〕左歌の「かすか野」、珍しい所は見えませんが、「みとりも寒くかすむ比かな」とありますのは、少し納得がゆかないありさまでしょうか。右歌の「野山が霞をおし包んで」(とあるのは)、歌の品格がわづかばかりすぐれていると申すべきでしょうか。

〔四番〕

四番

左イ掛

権大納言藤原朝臣定雅

梓弓春のみ空に①いつなれてやかて霞②の立かさぬらん

右

権大納言藤原朝臣公相

浅みとり春の日数③もしられけりまた色薄き山の霞に

左ナかすみを、春のみ空ナにいつなれてと侍るや、いかに

そ見え侍らん、春に霞はたちそへるものにこそ

申ならひて侍れば、あつさ弓も春はかりにて、又引④

よせられたる事は侍らぬにや、右また色うすき

霞にて、早春をしれる心、さもやと見え侍るを、ふ

かき迄の難には侍らねと、傍題⑤の山や、花より

さきに出て侍らん、かれこれをなすらへて、持にて

侍るへきにこそ、

【校異】

イ 持一ナシ(書) 口 藤原朝臣一ナシ(聚) 八 日数一霞(聚)

(内)(支) ニ 左かすみ一左のかすみ(永)、左哥(支) ホ み

一ナシ(書) ヘ は一ナシ(書)(永) ト は一も(書)(永)

チ さも一き、(支) リ 傍題一かたはら題(書)、かたはらの題

(書)(永) ヌ 山や一やまや(内)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①権大納言藤原朝臣定雅一建保六年(一一二八)生まれ。藤原忠経

男。母は藤原宗行女。正二位右大臣に至る。永仁二年(一一九四)没。

②いつなれて一「いつ」は「いつしか」の略で、早くもの意であろう。

「なれる」には、「衣服が体によくなじむようになる」の意もあり、

下句「立」(裁)と縁語的に響き合っている。

③霞の立かさぬらん一「立」は霞の縁語。「としをへて立ちかさぬれ

ばみよし野の霞ぞ山のころもなりける」(『久安百首』春二十首・六

〇五・藤原親隆)、「日をへつつ立ちやかさねん吉野山霞の衣まだ一重なり」(『治承三十六人歌合』十二番左・山霞漸聳・二一九・藤原経家)等、「衣」と併せて用い棚引く霞を衣に見立てる例がみえる。

④権大納言藤原朝臣公相―貞応二年(一二二二)年生まれ。西園寺実氏二男。従一位太政大臣に至る。文永四年(一二六七)没。

⑤浅みとり―薄い緑色。当該歌では、「あさみどりはるをきぬとやみよしののやまのかすみのおびにみゆらん」(『忠見集』・七〇)の如く、枕詞的に用いられており、「春」にかかる。また、「あはれなり我が身のはてやあさみどりつひには野辺の霞とおもへば」(『新古今和歌集』巻第八・哀傷歌・七五八・小野小町)の如く、「浅みとり」は、「霞」にもかかる。

⑥引よせられたる事―引き合わせるが原義。ここでは一首の中で関連するある語とある語を同時に詠み込むこと。「袖のいろはわかむらさきにあらなくにこころをそむるしのぶもぢずり」(『千五百番歌合』千百三十五番左・二二六八・藤原隆信)について、「左、わかむらさきにしのぶもぢずりをひきよせられたるは、たよりありてきこえはべる」と、『伊勢物語』初段を踏まえた二語を詠み込んでいるとの指摘がみえる。当該歌では、「弓」と「春」(張る)が縁語。

⑦傍題―題詠で、題の中心となることを詠まないで、題に添えたほかのことを中心に詠むこと。『竹園抄』は、「月」の傍題の例歌「月夜には光ぞまさる玉川の卯花垣の里をとばばや」について、「月を

そばに成て、卯の花を讃たる歌なり」とする。

【通釈】

四番

左歌 持

権大納言藤原朝臣定雅

春はみ空に早くも馴れたのだろうか。そうしてそのまま引き続いて、今頃は霞が(まるで衣のように)立ち重なっていることだろう。

右歌

権大納言藤原朝臣公相

春が来て以来の日数の浅さも知られることだよ。山の緑がまだ薄く、浅みどり色の霞がかかっているの。

〔判詞〕左歌は霞を、「春のみ空にいつなれて」とありますのは、さあいかが見えるでしょう。春に霞は立ち添うものと申す習わしでありますので、「あつき弓」も「春(張る)」だけのことで、又(他に)引き付け関係づけられているものはないのでしよう。右歌のまだ色が薄い霞によって、早春を知る心は、そうであろうと見えますが、重大というほどの欠点ではありませんが、傍題の「山」が、「花」より先に出てきていまいしょう。あれこれを並べ比べて、持であるべきでしょう。

〔五番〕

五番

左イ

権大納言藤原朝臣公基

今も猶雪は降つ、朝霞あさたてるやいつこはるはきにけり

右

左近少将藤原朝臣為教

天の戸の明ゆく空は霞あつ、又あら玉たまの春は来にけり

左雪ひは降つ、朝霞あたてるやいつこと侍る、殊に

よろしく侍るにや、右天あの戸明暮くれみなれて侍れば、

尤なほ以も左ひ為勝、

【校異】

イ 勝一ナシ(書) ロ ナシ一統拾遺、春上(聚) ハ 左近一左

近権(永)、左近衛(支) ニ あら玉のーあらたまる(書)、あら

玉たまの(永) ホ 左雪一左の雪(支) ヘ 左一ナシ(支)

【他書所伝】

〔左歌〕

『統拾遺和歌集』巻第一・春歌上・七

宝治元年十首歌合に、早春霞

万里小路右大臣

いまも猶雪はふりつつ朝がすみたてるやいつこ春はきにけり

〔右歌〕

『題林愚抄』第一・春部一・九一

(同)

為教朝臣

あまの戸の明行く空は霞みつつまたあらたまる春はきにけり

【本歌】

〔左歌〕

『古今和歌集』巻第一・春歌上・三・よみ人しらず

題しらず

よみ人しらず

春霞たてるやいつこみよしののよしのの山に雪はふりつつ

【参考歌】

〔左歌〕

『正治初度百首』・一四〇六・藤原家隆

(春)

けふも猶雪はふりつつ春がすみたてるやいつこ若菜つみてん

〔右歌〕

『遠島御歌合』四番右・八・如願法師

天の戸のあけゆく空はうれしきを猶はれやらず立つ霞かな

【語釈】

①権大納言藤原朝臣公基一西園寺実氏男。承久二年(一一二二)生

まれ。母は藤原親雅女。正二位右大臣に至る。文永十一年(一一七四)

没。主として嵯峨峨院歌壇で活躍。

②たてるやいつこ霞はどこにたつてゐるのか、の意。「春霞たて

るやいつこ朝日かげさしゆく舟をまつがうら島」(『後鳥羽院御集』・

一五二九)、「はるがすみたてるやいつこはるをまつこころよりこそ

たちはじめけれ」(『千五百番歌合』百一番右・二〇二・源兼行)等

の先行例がみえる。「はるがすみたちにしものをいまもなほよしのやまにゆきのみぞふる」(『躬恒集』・三〇九)の如く、霞と雪はしばしば組み合わせられるが、当該歌では、冬の景物である雪のみが眼前にあり、春の景物である霞が確認できない状況を詠む。

③左近少将藤原朝臣為教・嘉禄三年(一二二七)年生まれ。為家男。母は宇都宮蓮生女。京極家の祖。為氏・源承の同母弟。非参議従二位に至る。『河合社歌合』以下、多くの歌合に出詠。

④あら玉の―枕詞。平安時代以後になると、「あらたまの年立帰る朝よりまたる物はうぐひすのこゑ」(『拾遺和歌集』巻第一・春・五・素性)のように、「年」に続き、「あらたまの」に「改まる」の意を響かせる例が多く見える。「あらたまのはる」では、当該歌が早い例で、他に「いづる日の影ものどけき今朝よりや又あら玉の春はきぬらん」(『嘉元百首』立春・二五九九・権大納言局)、「行かへり又あらたまのはるきぬとおもふにやがてたつかすみかな」(『伏見院御集』・七一一)等がみえる。万葉時代の「あらたし」の語感が響いているとも考えられよう。

⑤天の戸明暮みなれて侍れは―春の始めを詠じる際に、「天の戸」が頻繁に詠み込まれていることを指す。「早春霞」題においては、四首(一番左・後嵯峨院、五番右・為教、六番左・為経、七番左・通成)確認できる。

【通釈】

五番

左歌 勝

権大納言藤原朝臣公基

今(この瞬間)もまだ(眼前には本来冬のものであるはずの)雪が降っては降ってはしていて、(春になったら見えるはずの)朝の霞は、いったいどこに立っているのだろうか。(暦の上では)春はもう到来しているのになあ。

右歌

右近少将藤原朝臣為教

明け方の空は(昨日までと違って)霞みわたり、また新しい春がやってきたことよ。

〔判詞〕左歌の「雪は降つゝ朝霞たてるやいつこ」とありますのが、(全体的に)非常によろしいでしょうか。右歌の「天の戸(の明ゆく)」という表現は(文字どおり)明け暮れ見なれておりますので(珍しくなく)、いかにも左歌を勝とする。

〈六番〉

六番

左

春たては天つ岩戸の明るより神代も先や霞初けん

右

朝霞風も音せぬあら玉の春は先こそのとけさをみれ

中納言藤原朝臣為経

散位藤原朝臣信実

左はすかたよろしく、詞優に侍るめり、右體も心こもりて、ちからあるさまに侍るを、あら玉の春とつゝけたる、少しおほつかなく侍る、あら玉の夏冬など申侍るへきにや、しはらく以左為勝

【校異】

イ 勝一ナシ(書) ロ っ一の(聚)(永)(国) ハ 藤原朝臣一ナシ(書) ニ のとけさをみれ一のどけさをみれ(書)(聚)(内)(支)、のとけきをみれ(永) ホ 左一左(永) ヘ 侍るめり一侍り(支) ト たる一たる事そ(永) チ 少し一ことにすこし(書) リ なんと一なとも(書)(永)

【他所書伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『夫木和歌抄』卷第一・春部一・一一九・藤原信実

宝治元年仙洞十首歌合、早春霞

同

朝がすみ風も音せぬあら玉の春は松こそそのどけきを見れ

【語釈】

①中納言藤原朝臣為経一藤原資経男。母は藤原親綱女。承元四年(一一二〇)生まれ。弁官を歴任し、正二位中納言に至る。『宝治百首』等に出詠。

②神代一我が国で神々が国造りをし、統治していた時代。記紀では、

天地開闢から神武天皇の前までを指す。

③散位藤原朝臣信実一藤原隆信男。母は藤原長重女。治承元年(一一七七)生まれ。正四位下に至る。『河合社歌合』を主催し従弟の為家を判者として迎える一方、反御子左派の蓮性等とも交渉があつた。文永二年(一一六五)没。

④風も音せぬ一「いなばふく風も音せぬ我が宿は秋たちぬともよそにこそきけ」(『林葉和歌集』第三・秋歌・三五〇)、「中中に風もおとせぬ夕ぐれのみ山の秋はこころすみけり」(『後鳥羽院御集』・一七二二)の如く、風さえも音をたてないという意。当該歌では、「を」さまれる世のためしとやかきとめし風もおとせぬあら海の波」(『正治後度百首』禁中・二八三・藤原雅経)と同じく、太平の御代を暗示している。

⑤のとけさ一ゆつたりと落ち着いている様。「吹く風によその紅葉はちりくれど君がときは影ぞのとけき」(『拾遺和歌集』卷第五・賀・二八二・小野好古)、「君が世のながらの山のかひありとのどけき雲のゐる時ぞ見る」(『拾遺和歌集』卷第十・神楽歌・五九八・大中臣能宣)等と同様、天下太平の意を含む。

⑥すかた一姿。ここでは一首全体の表現様式を指し、「心」「詞」といった歌の要素を指す語に対応する概念。

⑦優一典雅で上品な美しさ。柔和でしとやかな美しさをいう。平安末期以後の多くの歌合判詞に用例が見い出せ、流派を越えた普遍的な概念であつたことが伺える。

⑧心こもりて—ここでの「心」は、表現として具体的に示された作家主体の感動や情趣、情緒等を指し、「心こもる」で、作歌主体の情趣が詠歌に定着していることを意味する。為家判の用例としては、「ときはなる木葉隠はかはらねど月は冬こそさえまさりけれ」(『河合社歌合』六番左・一一・兵衛督) に対する「月は冬こそといへるふる事も、ときはなるとでは、まことに木の葉がくれ、こころもこもりてめづらしく見え侍るべし」等があげられる。

⑨ちからあるさま—為家が『河合社歌合』で「たが為のあふせをよはに尋ぬらん河なみ千鳥立ち鳴くなり」(十五番左・二九・祝部成茂)を「左、上句ちからあるさまに侍るを、末句すこしおぼつかなきやうにや侍らん」と判じている如く、読み手へ訴えかける表現の説得力を意味する。

⑩あら玉の夏冬—「あら玉」は、年や月にかかる枕詞。「あらたまのはるのはじめにふるゆきはいつしかさけるはなかとぞ見る」(『六条修理大夫集』・四二)、「あらたまのはるをむかふる年の内におこもれるとやらふこゑこゑ」(『正治後度百首』公事・二九五・藤原雅経)等の例がみえる。

【通釈】
六番

左歌 勝

中納言藤原朝臣為経

立春になると、天の岩戸が開けるように夜が明けて、今と同じように神代の昔も、まづ霞が立ち初めたのであろうか。

右歌

散位藤原朝臣信実

朝霞がたゆたい、風さえも音をたてない新春は何よりもまづゆつたりとした雰囲気を感じることだ。

〔判詞〕左歌は姿はよく、言葉は品格があるでしょう。右歌は「霞」にも心がこもって、表現の持つ説得力がありますが、「あら玉の春」と続けたのは、(詠み方として)少しはつきりしません。「あら玉の夏・冬」等と申すべきでしょうか。ひとまず左歌を勝とする。

〔七番〕

七番

左

右衛門督源朝臣通成

天の戸の明るやをそき立春の霞て見ゆる横雲の空

右

右近権中将源朝臣雅光

まきもくのあなしの松原猶さえて都の空はうす霞つゝ

左天の戸、させる難なく侍るにや、右あなしの松

原猶さえてと見えては、都の空のうす霞はるかに

へたて、知かたくや侍るへき、よこ雲の空、心

見えわかれ侍れば、左なを勝侍るへし、

【校異】

イ 勝—ナシ(書) 口 源朝臣—ナシ(書) 八 の—を(書)(永)

ニ 近—近衛(支) ホ 源朝臣—ナシ(書) へ 原猶—はらを猶

(永) (支) ト えーナシ (書) チ はーナシ (支) リ て、ー
たりて (書) (永) 又 左ーナシ (聚)

【他書所伝】

〈左歌〉

『題林愚抄』第一・春部一・九二

(注) 本朝歌合
(同)

通成卿

あまの戸のあくるやおそぎ立つ春の霞みてみゆるよこ雲のそら

〈右歌〉 ナシ

【語釈】

①右衛門督源朝臣通成ー貞応元年(一二二二)生まれ。源通方男。

母は一条能保女。正二位内大臣に至る。弘安九年(一二八六)没。

②横雲ー夜明け方東の空に棚引く雲で、『文選』「高唐賦序」の「朝雲暮雨」を踏まえて創作された表現。「霞たつするの松山ほのぼのと波にはなるる横雲の空」(『新古今和歌集』卷第一・春歌上・三七・藤原家隆)、「春の夜のゆめのうき橋とだえして峰にわかるる横雲のそら」(同・三八・藤原定家)等が早い例で新古今時代に流行。

③右近権中将源朝臣雅光ー源通光男。嘉祿二年(一二二六)生まれ(『公卿補任』)。文永四年(一二六七)没。正二位権中納言に至る。勅撰集には入集していない。左歌作者通成とは従兄弟同士。

④まきもくのあなしの檢原ー「まきもく」は、「まきむく」とも。大和国の歌枕。現在の奈良県桜井市穴師一帯の地。「あなし」は、今

の桜井市穴師。巻向の中心の地で垂仁・景行両天皇の皇居があったところ。「巻向之」檢原丹立流 春霞 鬱之思者 名積米八方(『万葉集』卷第十・春雜歌・一八一七)、「まきもくのひばらの霞立返りかくこそは見めあかぬ君かな」(『拾遺和歌集』卷第十三・恋三・八一六・よみ人しらず)等、「まきむ(も)くのひばら」と詠む例は散見するが、「まきもくのあなしの檢原」では、『千五百番歌合』「まきもくのあなしのひばらはるくればかすみをかけて山かつらせり」(十四番右・二八・寂蓮)が早い例。

⑤都の空ー視点人物からみて都の方角の空を指す。当該歌では、「山里はまだふるとしの雪ながら都の空はかすみそめつつ」(『洞院撰政家百首』春・霞五首・九六・但馬)と同様、山里(余寒)と京の都(早春の景)との対比を詠み込む。

⑥うす霞ー平安末期から用例がみえ、「あさとあけん春のけしきを思ひいづる心たがはぬうすがすみかな」(『公衡集』春・一)、「見わたせばあしたのはらのうすがすみうすぎやはるのはじめなるらん」(『広言集』春・三)等、春まだ浅い頃の景物として詠み込まれる一方、「(海路)三月尽」と云ふことをよめる(へだてつるやへのしほぢのうす霞きゆるややがて春の暮れぬる)、『月詣和歌集』卷第三・三月・二三八・藤原公衡)と、晩春の消えゆく霞の例もみえる。

【通釈】
七番
左歌 勝

右衛門督源朝臣通成

(天の岩戸が開けるかのように) 夜の明けるのが遅いとばかりに
立春に(なるや否や) 早くも霞んで見える横雲の空よ。

右歌

右近衛権中将源朝臣雅光

(大和の国の) 卷向の穴師の松原はまだ冷え冷えとしていて。一方、
都の空の方は、うつつすらと霞み霞みしていることだ。

〔判詞〕左歌の「天の戸」は、(詠みぶりに) これといった難点は
ないでしょうか。右歌は(眼前で) 穴師の松原がまだ冷え冷えとし
ていると見えるので、都の空の薄霞は距離を遙かに隔てており、(都
の空の様子は) 知りがたいでしょう。(一方、左の歌は下の句の)「よ
こ雲の空」は、言わんとしていることがはっきりそれと分かりま
すので、左歌がやはり勝でしょう。

〈八番〉

八番

左

兵部卿源朝臣有教

きのふまで雪気に曇る天つ空曙かけてはや霞ぬる

右

弁内侍

天の原雪気のかすますは立ける春もえやはわかまし
両方雪気フの空ハ、いつれハきたかに見えわかれ侍らぬを、
右の霞トは、春たハしかに頭トれて、立まさり侍るにや。

【校異】

イ 源朝臣―ナシ(書) 口 勝―ナシ(書) 八 えやは―えやは
(永) 二 両方―両方の(書) (永) ホ 雪気ハの空―雪ハけ空(内)
へ いつれ―いはれ(書) ト 霞―段(支) チ 春―はるの(聚)
リに―ナシ(支)

【他書所伝】

〔左歌〕ナシ 〔右歌〕ナシ

【語釈】

①兵部卿源朝臣有教―建久三年(一一九二)年生まれ。従三位源有
通男。母は丹波重長女。非参議従二位に至る。建長六年(一二五四)
没。『万代和歌集』等の作者。

②雪気―雪が降りそうな空の気配。雪交じりの空模様。古来「ゆき
げ」は「雪消」の意で詠まれたが、『後拾遺和歌集』「とやかへるし
らふのたかのこゝるをなみゆきげのそらにあはせつるかな」(第六・
冬・三九三・藤原長家)は「雪気」の早い例である。

③曙かけて―下二段活用「懸く」が季節や時間を表す語を伴った用
法で、「み山いでて夜はにやきつる郭公暁かけてこゝるのきこゆる」
〔拾遺和歌集〕巻第二・夏・一〇一・平兼盛)と同様、「くハにわたつ
て」という時間の推移を表す。「曙かけて」の先行例としては、「鶯
のあけぼのかけてなくなへに梅と竹とに春風ぞふく」〔拾玉集〕第
四・四四七四)等が見える。

④弁内侍―後深草院弁内侍とも。生没年未詳。藤原信実女。姉妹に

藻壁門院少将、後深草院少将内侍がいる。東宮時代から後深草天皇に仕える。『河合社歌合』、『宝治百首』等に出詠。

⑤天の原―大空を指す。『万葉集』には、神々が統治する天上の国高天原を指す例もみえるが、この頃は空の異称として定着している。

【通釈】

八番

左歌

兵部卿源朝臣有教

昨日まで雪模様で曇っていた空だが、(立春の今日)夜がほのぼのと明け始める頃になって、早くも霞んだことだ。

右歌 勝

弁内侍

雪模様の空がもしも霞まなかったら、春が来たということも見分けがつかないだろう(実際は霞んでいるので春が来たということがわかることだよ)。

〔判詞〕両方の雪模様の空は、どちら(が良い)ともはつきりと見分けがつきませんが、右歌の霞は、春がそこにはつきりとあらわれていて、一段立ち勝っておりますようか。

〈九番〉

九番

左^①

右^①近権中将藤原朝臣師繼

君か代の始の春のの^②とけさを空もしりてや霞立らん

右

右^③近権中将源朝臣雅忠

此ほとは嵐も雪も猶さえて霞そ薄き四方の山の端

左御代の始の春の長閑き心、捨かたく侍るうへに、

右此ほとはといひ出たるほと、こひねかふへき姿

に侍らねは、是もかちは左に侍るへきにや、

【校異】

イ 勝―ナシ(書) 口 近権―近衛権(支) 八 藤原朝臣―ナシ

(書) ニ のとけさ―のどけき(内) (支) ホ 権―衛権(支)

へ 源朝臣―ナシ(書) ト そ―に(聚) (内) (支) チ の―ナ

シ(支) リ の―ナシ(書) (永) 又 出―出し(書) ル 侍ら

ねは―みえ侍らねば(書) (永)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①右近権中将藤原朝臣師繼―藤原忠経男。母は藤原宗行女。貞応元年(一二二二)生まれ。正二位内大臣に至る。『宝治百首』作者。

②君か代―あなたの寿命、わが君の寿命。また、治天の君の御代をいう。多く賀の歌で用いられ、御代の恒久を言祝ぐ。

③右近権中将源朝臣雅忠―源通光男。母は藤原範光女。安貞二年(一二二八)生まれ。正二位大納言に至る。『とはすがたり』作者後深草院二条の父。文永九年(一二七二)没。

④此ほととはいひ出たるほど、こひねかふへき姿に侍らねは―初句に「此ほとは」を配置する先行例は、「この程は木のはもしらぬまきのやに霜をへだててとふ風かな」(『壬二集』卷下・冬部・二五六一)、「この程はをられぬ雲ぞかかるらんたづねもゆかじ山のさくら木」(『夫木和歌抄』卷第四・春部四・一〇六五・藤原家隆)等、家隆の五首の他、慈円、為家に二首、定家、藤原基輔、藤原光経等に各一首確認できる。

【通釈】

九番

左歌 勝

右近権中将藤原朝臣師繼

治天の君の御代の初めの春のゆつたりとした様子を空も分かっているからだろう、こうして(長閑に)霞が棚引いていることだ。

右歌

右近権中将源朝臣雅忠

この頃は(もう春になつてもよいはずなのに)嵐も雪もまだ寒々しくて、霞は四方の山の端に薄くかかっているばかりである。

〔判詞〕左歌は御代の始まりの穏やかな気分が(よく表れており)、捨てがたいようであります上に、右歌の「此ほとは」と(初句に)詠み出しているあたりが、望ましい風体でありませぬので、この番も勝は左歌でしょうか。

〔十番〕

十番

左

沙弥蓮性

春は今と渡りくらし天の原雲はるかに今朝は霞める

右

下野

さほ姫の霞の衣袖さえてたつとはみれと春をすくなき

左と渡りくらし天の原雲井はるかになと、たけ

あるさまに侍るを、しつかに今見侍れは、春は今と

いひて、今朝はかすめると侍ける、今の字の心にやか

よひ侍らん、右霞の衣は猶そすくなきとよみはて

たる歌、近き比おほくなりて、めにたち侍ら

ねとも、覚束なき事侍らねは、右勝に侍らん、

【校異】

イ 今―今は(永)(内)(支) 口 る―り(永)(支) 八 勝―
 ナシ(書)(支) 二 侍―ナシ(聚) ホ る―り(支) へ 字の
 一字はおなし(永) ト は―ナシ(書) チ 猶―春に(書)、な
 に(永) リ 歌―哥を(支) ヌ 近き比―ちかごろ(書)(聚)(永)
 (内) ル めに―ナシ(書) ヲ 右―右の(永) ワ に―にや(永)

【他書所伝】

〈左歌〉

『蓮性陳状』・一

春は今と渡りくらし天の原雲井遥に今朝はかすめる

〈右歌〉

『題林愚抄』第一・春部一・九三

(宝治御歌合)
(同)

さほ姫のかすみの衣袖さえてたつとはすれど春ぞすくなき

【語釈】

下野

①沙弥蓮性―藤原知家。法名蓮性。顯家男。寿永元年(一一八二)生まれ。正三位に至るも、嘉禎四年(一二三三)病により出家。正嘉二年(一二五八)没。定家存命中にはその指導を受けたが、定家没後、為家の歌壇支配に不満を抱くようになり、光俊(真観)等と反御子左派を結成。『春日若宮社歌合』では判者を勤めている。

②と渡り―「川や海の瀬を渡る」意が原義。当該歌では、早春の空を海に見立てる。「天の原」「と渡る」の例としては、早く『万葉集』に「山葉 左佐良榎壮子 天原 門閼光 見良久之好藻」(巻第六・雑歌・九八八・坂上郎女)とみえる。

③下野―生没年未詳。建長の頃まで生存か。祝部允仲女。兄弟に成茂がいる。源家長室。『宝治百首』等に出詠。

④さほ姫の霞の衣―春の女神。佐保は現在の奈良市北郊の一带。佐保山が当時の平城京のほぼ東北に位置し、東は五行説で四季の春に

相当するので、春をつかさどる女神とされた。秋の竜田姫と対比される。例歌として「さほひめの色めく春に成りにけりかすみの衣いくへたつらむ」(『久安百首』春二十首・五〇九・藤原隆季)、「さほ姫の霞の衣ぬきをうすみ花のにしきをたちやかさねん」(『後鳥羽院御集』・五二二)等がみえる。

⑤春ぞすくなき―「いたづらにすぐす月日はおもほえて花見てくらす春ぞすくなき」(『古今和歌集』巻第七・賀歌・三五一・藤原興風)、「としつきにまさるとしなしとおもへばやはるしもつねにすくなかるらん」(『赤人集』・九)、「あら玉の年にまれなる人までど桜にかこつ春もすくなし」(『拾遺愚草』中・一九六九)のように、春の日数が少なく感じられる意の用例が多く、当該歌の如く「早春の気配が希薄な様」を意味する例は少ない。なお、『為家集』には、「沢水にしづえくちたる川柳まちうる春の色もすくなし」(二〇二)と、当該歌と同様な例がみえる。

⑥たけあるさま―「たけ」は歌の格調・風格をいう。左歌で、早春の空を海に見立てその雲の遙か先の情景を詠み込んだ点が崇高壮大な様であると評価する。

⑦春は今といひて、今朝はかすめると侍ける、今の字の心にやかよひ侍らん―蓮性詠の内、上の句「春は今」と「今朝」の時間的意味合いに重なりがあることを難じたもの。この為家判を始め、当該歌合で負けを付された四首の判に対して、蓮性は後日『蓮性陳状』を後嵯峨院に奏し、激しく反論している。

【通釈】

十番

左歌

沙弥蓮性

春は今、天の門を渡ってくるらしい。雲のあたりの遙か遠く一面に、今朝は霞が立っていることだ。

右歌 勝

下野

(春の女神である) 佐保姫の霞の衣は(まだ)袖が冴え冴えと冷えているように(立春となり霞が)立っているのは見てわかるけれども、(春になってまだ日が浅いので、一面に霞が立つこともなく)春(らしき)が少ないことだよ。

〔判詞〕左歌は「と渡りくらし天の原雲井はるかに」など、格調ある風体であります。落ちて着いて今見てみますと、「春は今」と言つて、一方「今朝はかすめる」とありますのが、「今」という字の心に重なっているでしょうか。右歌は「霞の衣はまだ少ない」と詠み終わっている歌で、(このような歌は)近頃多くなつていて、目立ちませんけれども、はつきりしない事はありませんので、右歌の勝でしょう。

〔十一番〕

十一番

左イ 榊

左近権中将藤原朝臣為氏

あら玉の年を隔て、朝霞いつしか春もたちにけるかな

右

少将内侍

久堅の天つみ空の朝霞立こそわたれ春やきぬ覧

両方の朝霞、あら玉のとしをへたてて久かたの

そらにたてるほと、いく程の浅深見えわき侍らし、

【校異】

イ 持一ナシ(書) 口 権一衛権(支) 八 藤原朝臣一ナシ(書)、

朝臣ナシ(聚) (内) (支) 二 へたてへたて、(聚)

【他書所伝】

〈左歌〉

『題林愚抄』第一・春部一・九四

(同)

為氏朝臣

あら玉のとしをへだてて朝がすみいつしかはるも立ちにけるかな

〈右歌〉

『題林愚抄』第一・春部一・九五

(同)

少将内侍

久かたのあまつみ空の朝がすみ立ちこそわたれはるやきぬらん

『閑窓撰歌合』二十六番左・五〇

廿六番 左

少将内侍

久かたの天つみ空の朝霞たちこそわたれ春やきぬらん

右

前摂政家民部卿

きてみずと人もうらみじいづくにもかくこそ花はさかりなるらめ

【語釈】

①左近権中将藤原朝臣為氏一貞応元年(一二二二)生まれ。為家男。

母は宇都宮頼綱女。二条家祖。正二位権大納言に至る。弘安九年

(一二八六)年没。『河合社歌合』を始め、多くの歌合に出詠。建治

二年(一二七六)、龜山上皇から『統拾遺和歌集』撰進の院宣を受け、

弘安元年(一二七八)に奏覧。

②年を隔てゝ霞を冬と春との目に見える仕切として見立てる。こ

のような例は、「こそこのふゆことしのはるのしるしにはやまのかす

みぞたちへだてける」(『輔親集』・二二)、「立ちかはる春をしれとも

みせがほに年をへだつる霞なりけり」(『御裳濯河歌合』十一番左・

二二)等、散見する。

③朝霞一朝立つ霞。勅撰集における「朝霞」の初例は、「あさがす

みふかく見ゆるや煙たつむろのやしまの渡なるらむ」(『新古今和歌

集』巻第一・春歌上・三四・藤原清輔)で、二十一代集全体でも

十五例と多くはない。当該歌の如く、春の端緒としての「朝霞」の

早い例として、「かづらきやたかまの山のあさがすみ春とともに

立ちにけるかな」(承暦二年『内裏後番歌合』二番右・四)がみえる。

④少将内侍一後深草院少将内侍。生年未詳。文永元年(一二六四)頃まで生存か。藤原信実女。姉に藻壁門院少将・弁内侍がいる。

⑤久堅の天つみ空一「久堅の」は、天、雨、空、雲、日、光等にかかる枕詞。「久方」とも。「久堅之」天水虚尔 照日之 将失日社

吾悉止目」(『万葉集』巻第十二・寄物陳思・三〇一八)、「久かたの天つみそらに雲まけば月の光ぞ庭に敷きける」(『林葉和歌集』第三・秋歌・四四五)等が例歌。

【通釈】

十一番

左歌 持

(新旧の)年(の間)を分け隔ている(かのように、今眼の前に

みえる)朝霞、(その朝霞をみてはたと気付いたのだが、霞が立つ

たように)早くも立春になってしまったのだなあ。

右歌

空に朝霞が一面に立ち渡ったことだ。(このぶんでは)春はすでに到来しているのであろうよ。

〔判詞〕両方の朝霞が、(一方は)「新旧の年を分け隔て」(もう一方

は)「空に立っている」ところは、(両首とも、発想の斬新さは)そ

れほどの深淺(があるとも)分別できませんでしょう。

少将内侍

〈十二番〉

十二番

左

①左京権大夫藤原朝臣經朝

横雲の霞にまかふ山かつら暁かけて春は来にけり

右

④沙弥禅信

春来ぬと思ひもあへす久堅の天つみ空に立かすみかな

左歌は、年の明ゆく山かつら霞をかけて春は

きにけりとて、近き世に見侍しにや、かすみに

まかふとては、いよ／＼み所なく侍るにやと、右の哥

殊なるとかなく侍れば、尤勝侍るへし、

【校異】

イ 藤原朝臣一ナシ(書)、朝臣ナシ(支) 口 勝一ナシ(書)

ハ の一を(書) ニ は一ナシ(書)(聚)(永)(内)(支)

ホ 侍るにやと一侍るにや(聚)(永)、や侍るべき(書) への

一ナシ(書)(聚)(永)(内)(支)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①左京権大夫藤原朝臣經朝一建保三年(一一二五)生まれ。世尊寺行能猶子。実父は藤原頼資。正三位に至る。建治二年(一二七六)没。世尊寺流の能書。『宝治百首』の作者。

②横雲の霞―「春はなほあけゆく空ぞ明けやらぬ霞かかれるよこ雲

の山」(『正治後度百首』霞・二〇二・藤原雅経)と同様、夜明け方

東の空に棚引く雲が霞がかつていよう。横雲の霞はその

短縮形。「よこ雲のかすみたなびく木ずるより花になり行く明ぼの

の空」(正治二年『石清水若宮歌合』十四番左・源頭兼・二七)等

がその例。

③山かつら―暁に山の端にかかる雲を髪飾りの鬘に見立てた表現。

「山かつら明行く雲にほととぎすいづる初音も峰わかるなり」(『拾

遺愚草』上・一四一八)が一例。

④沙弥禅信―源俊平。生没年未詳。泰光男。従五位下侍従に至る。

『宝治百首』等に出詠。主に後嵯峨院歌壇で活躍した。

⑤思ひもあへす―おもいもよらないの意。「桜花まつとをしむとする

程に思ひもあへず過ぐる春かな」(『長秋詠藻』上・一七)、「桜花

思ひもあへずこのもとにちりつもるともいかでこそみめ」(『和泉式

部統集』・五三〇)等がその例。

⑥年の明ゆく山かつら霞をかけて春はきにけりとて、近き世に見侍

しにや―順徳院の家集『紫禁和歌集』七三〇に「同比、二百首和歌」

として「あら玉の年の明行く山かつら霞をかけて春はきにけり」と

みえる。『紫禁和歌集』は、年次を追って配列されていることが指

摘されており、七三〇歌以前の詞書「建保四年正月十九日、松迎春

新」(七二五)、三月十五日比、内内進北野宮之詩歌合」(七二二)

から、七三〇歌の詠作年次は建保四年(一一二六)頃か。

【通釈】

十二番

左歌

左京権大夫藤原朝臣経朝
横雲が山に（鬘をかけるようにして）霞と見分けがたくなつてい
る。夜明け方にかけて春はきたのだなあ。

右歌 勝

沙弥禅信

春が来たと思つてもないうちに、空に霞が立っていることよ。
〔判詞〕左歌は、「年の明ゆく山かつら霞をかけて春はきにけり」と
いつて、近い折に見ましたでしょうか。「かすみにまかふ」といつ
ては、ますます見るに値する所がないでしょうと（存じます）。右
歌は格別な欠点がありませんので、いかにも勝です。

〈十三番〉

十三番

左勝

嘉陽門院越前

明渡る峯の霞を出る日の影も曇らぬ千世の初春

右

前権大納言藤原朝臣為家

いつのまに霞の衣打カきらし雪降空も春はたつらん

左かすみを出る日影も曇らぬ千世の初春、祝

言フことによく侍れば、かすみの衣、かけてもな

らひかたくこそ見え侍れ、おほよそ立春早春は、

いさゝかおもひわくへきにやと見え侍れと、立
春の題に、早春のこゝろよめらんよりは、ことた
かひ侍らしとみゆるし侍るに、是さへ霞の
衣にひかれて、たつとをきて侍る、尤負侍るへし、

【校異】

イ 勝―ナシ（書） 口 藤原朝臣―ナシ（書）、朝臣ナシ（支）

ハ きらし―消えし（書） 二 ことに―まことに（聚）、もことに

（永）、のことに（支） ホ おほよそ立春早春は、いさゝかおもひ

わくへきにやと見え侍れと―ナシ（支） ヘ の―ナシ（聚）（永）（内）

（支）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『題林愚抄』第一・春部一・八七

同

為家

いつのまに霞の衣うちきらし雪ふる空もはるは立つらん

【語釈】

①嘉陽門院越前―大中臣公親女。生没年未詳。後鳥羽院の生母七条
院殖子や、後鳥羽院皇女嘉陽門院礼子に女房として仕えた。

②明渡る―あたりが一带に明るくなる意で、雲・霞・霧等が晴れる、
又、夜が明けはなれるのにもいう。「ともしするほぐしの松もきえ

なくにと山の雲のあけわたるらん」(『千載和歌集』卷第三・夏歌・一九七・源行宗)等の例歌がみえる。

③日の影―日の光が原義。「千世」「御代」等の語と結びついて、御代の恒久を暗示する。「千世ふべき春の日影は神山のみねよりいづるめぐみとぞみる」(『月詣和歌集』卷第一・四九・源通親)、「小松原春の日影にひきつれて千世のけしきを空にみるかな」(『拾遺愚草』中・一八八〇)等がその例。

④前権大納言藤原朝臣為家―定家男。建久九年(一一九八)生まれ。母は西園寺公経の姉内大臣藤原実宗女。公経猶子。権大納言に至る。若年は蹴鞠に熱中するが、承久の乱以後、本格的に和歌を学び、父の死後歌壇の指導的地位に就き、『続後撰和歌集』、『続古今和歌集』の撰者となる。家集に『為家集』、歌論に『詠歌一体』等がある。建治元年(一二七五)没。

⑤打きらし―雪が空一面を曇らせる意。「うちきらし雪はふりつつしかすがにわが家のそのに驚ぞなく」(『拾遺和歌集』卷第一・春・一一・大伴家持)の如く、「打きらし」は「雪」にかかる。「霞の衣打きらし」と続く文脈では「衣裳をうち着る」の意も響き合う。

【通釈】

十三番

左歌 勝

夜明けがた、峯を覆っている霞が暗れ渡り、そこから射し出る日の光は一点の陰りもなく輝いており、(この光のように帝の威光も

曇ることなく)永遠に続くと思われる、めでたい初春であることよ。

右歌

前権大納言藤原朝臣為家

いつのまに(春は)霞の衣を着たのであろうか。一面に雪が降っている空ではあっても、もう春にはなっているのであろう。

〔判詞〕左歌の「かすみを出る日影も曇らぬ千世の初春」は、(御代を言祝ぐ)祝言(の詠みぶり)が特に結構ですので、「かすみの衣」という私の歌は、まったくかなわないものと見えます。そもそも立春と早春は、少し気をつけておくべきように見えますけれども、立春の題に、早春の風情を詠むとかいうよりは、(今回のように早春題に立春を詠む方が)矛盾がないものと見過ごしてしまつたのですが、加えて霞の衣からの縁語で、「(春が)たつ」と置いたので、いかにも負です。

〔主要参考文献〕

(単行本) 萩谷朴氏『平安朝歌合概説』(昭44 山之内印刷)、安井久善氏『宝治二年院百首とその研究』(昭46 笠間書院)、福田秀一氏『中世和歌史の研究』(昭47 角川書店)、岩佐美代子氏校注・訳『弁内侍日記』(『新編日本古典文学全集48 中世日記紀行集』(平6 小学館)所収)、萩谷朴氏『平安朝歌合大成』(増補新訂) (平7 同朋舎出版)、岩佐美代子氏『宮廷女流文学読解考 中世編』(笠間書院 平11)、佐藤恒雄氏『藤原為家全歌集』(平14 風間書房)。(論文) 杉本邦子氏『後深草院少将内侍』(『学苑』218 昭33・5)、

- 金子磁氏「藤原為氏の生涯」《『立教大学日本文学』31 昭49・3》、
佐藤恒雄氏「後嵯峨院の時代とその歌壇」《『国語と国文学』54・5
昭52・5》、武田元治氏「存直体」と「花麗体」《『解釈』31・7
昭60・7》、荒木尚氏「百三十番歌合」考《『国語国文学研究』21
昭61・2》、池尾和也氏「後嵯峨院時代歌壇史略年表(中期)」礎稿《『
皇學館論叢』26・6 平5・12》、佐藤恒雄氏「後嵯峨院仙洞十
首歌合の諸本」《『香川大学国文研究』26 平13・9》、田淵句美子
氏「御製と「女房」」《『日本文学』51・6 平14・6》、山崎桂子氏
「承明門院小宰相の生涯と和歌」《『国語国文』72・6 平15・6》。

宝治元年『院御歌合』注釈―「山花」題―

位藤 邦生・藤川 功和

はじめに

前号に引き続き、宝治元年（一二四七）『院御歌合』の注釈を試みる。今回は「山花」題十三番を取り上げる。注釈は、広島大学中世文芸研究会における輪読をもとに、位藤邦生と藤川功和が再検討したものである。輪読時の各番担当者と所属を以下に示す。

十四番―土井昌子（文学部研究生）、十五番―鎮西美佳（文学研究科博士課程前期）、十六番―位藤邦生、十七番―山崎真克（松江工業高等専門学校）、十八番―藤川功和、十九番―濱口好太郎（文学研究科博士課程前期）、二十番―岡田潤（同研究生）、二十一番―金岡文緒（課目等履修生）、二十二番―豊田宮子（文学研究科研究生）、二十三番―吉川洋子（文学部四年生）、二十四番―中村朋子（同）、二十五番―富永洋介（同）、二十六番―小林文子（同）

凡 例

- 一、底本は、群書類従本（巻第二百所収）を用いた。
 - 一、校合した諸本と略号は、以下の通り。
 - 〔書〕―書陵部蔵本〔五〇一・七四〕（『新編国歌大観』の底本）
 - 〔聚〕―書陵部蔵歌合類聚本（『大日本史料』第五編之二十四所収）
 - 〔永〕―永青文庫蔵本〔一〇七・三六・七〕（『細川家永青文庫叢刊』第八卷所収）
 - 〔内〕―内閣文庫蔵本「百三十番歌合（外題）」〔二〇一・二四七〕
 - 〔支〕―九州大学支子文庫蔵本〔九一一・ホ・一〕
- 一、注釈は、番全体の本文【校異】を示した後、【他書所伝】【本歌】【語釈】【通釈】をあげた。
- 一、【語釈】の内、各詠作者並びに前号既出の語彙については、紙幅の関係上これを略した。
- 一、表記や送り仮名の異同はこれを略し、見せけちや補入符号によって訂正のある箇所は、訂正後の本文を採用した。

一、翻字本文には、適宜読点を施し、字体は現行の活字体に改めた。
 二、本文中、異同の存する箇所には、傍線及びイ、ロ、の如く付し、語釈を施した箇所には、本文右傍に①、②、の如く通し番号を付した。

一、底本で文意不通等が認められる場合、他本の本文に拠り通釈を施した。その際、本文【校異】【通釈】において他本に拠った箇所に網掛けを施した。

一、当該歌合以外の和歌の引用は、原則として『新編国歌大観』に拠り、その他の引用文献は、適宜底本を示した。

一、引用本文には、適宜、傍線、振り仮名等を付した。

〔十四番〕

十四番 山花

左

女房

みても猶おくそ床しきあし垣の吉野の山のはなの盛は

右

小宰相

雲の上の山も木高き桜花御代のさかりの春にあふらし

左歌おくそゆかしきあしかきのと侍るほと、梅の

立枝にみふるしたるものに侍る、よしのの花

にてあらぬ、ことに凡俗の思ひよるへきさまに

も侍らす、花実あひかぬるとはこれらにこそ侍ら

めと有かたくこそみえ侍れ、右山も木高きさく
 ら花、うちまかせたる哥にならひ侍らましかは、たけ
 あるさまにみえ侍りなまし、猶左かち侍るへし、

【校異】

イ 勝一ナシ (書) ロ ナシ一統後撰、春中 (聚)、後後撰 (永)

ハ 雲の上の山も木高き桜花御代のさかりの春にあふらし一ナシ

(支) ニ の一に (聚)、に (内) ホ しーん (書) ヘ 歌一ナ

シ (支) ト ーるを (書) (聚) (永) (内) (支) チ 花一山 (永)

リ ことに一ことにめつらしくまことに (書)、事にてめつらしく

まことに (永) 又 思ひ一およひ (書) ル 侍一あ (書) ヲ

ぬるとは一ぬなどは (書) (内)、ぬるなどは (永) ワ ーナシ (支)

カ ーナシ (永) ヨ ーには (書) (永) タ 左一左尤 (書) (永)

【他書所伝】

〔左歌〕

『統後撰和歌集』卷第二・春歌中・七八

十首歌合に、山花

太上天皇

見ても猶おくそゆかしきあしがきのよしのの山の花のさかりは

『新三十六人撰』・三三三

太上天皇御製後嵯峨院

見ても猶おくそゆかしき蘆垣のよし野のやまのはなのさかりは

『歌枕名寄』卷第七・吉野篇・二〇三九

見ても猶おくぞゆかしきあしがきのよしの山の花のさかりは

〔右歌〕 ナシ

〔語釈〕

①山花―山中に咲く花を意味する漢語。我が国においては『菅家文草』等に詩句として用例がみえる他、歌題としても多く確認でき、

「山花留人といへることをよめる」をのえはこのもとにてやくちなましはるをかぎりぬさくらなりせば」〔金葉和歌集〕二度本・巻

第一・春部・四八・大中臣公長〕等結題の詠や、「宰相入道教長家

歌合、山花)よしさらばしるべにもせんけふばかり花もてむかへ春

の山かぜ」〔林葉和歌集〕第一・春歌・一五五)等二字題の例もみえる。

②あし垣の―「あし垣」は葦を縫い合わせて作った垣根。垣の目が

密であることから「人しれぬ思ひやなぞとあしかきのまぢかけれどもあふよしのなき」〔古今和歌集〕巻第十一・恋歌一・五〇六)の

如く、「間近」又は「間」等に掛かる枕詞として用いられ、また、

前掲古今集歌では「あし」と「よし」が響き合うように用いられている。当該歌では、後の例であるが「たちかくす霞やなぞとあしが

きのよしのはなをみるよしもがな」〔隣女集〕巻第二・春・三二五)

等と同様、「吉野の」「はな」に掛かり、桜が間近に咲き誇る吉野山の春景を表現する。

③雲の上の山―白雲のうへより見ゆる足引の山のとかねやみさか

なるらん」〔能因法師集〕中・八九)の如く、雲よりも高く聳える

山の意。「雲の上」に「久方の雲のうへ」にて見る菊はあまつほしとぞあやまたれける」〔古今和歌集〕巻第五・秋歌下・二六九・藤原

敏行)、「祝言」雲のうへも春のみ山の万代も松と竹とのすゑにたとへて」〔正治後度百首〕二九六・藤原雅経)等の如く、宮中の意を響かせる。

④木高き桜花―「木高き」は、「ふたばよりのたのもしきかなかすが山

こだかき松のたねぞとおもへば」〔拾遺和歌集〕巻第五・賀・二六七・大中臣能宣)の如く繁栄を暗示する。また、「桜花」は、

後嵯峨院が「いろいろに枝をつらねてさきにけりはなもわがよもい

まさかりかも」〔続古今和歌集〕巻第廿・賀歌・一八六四)と詠じた如く、詠者やそれに連なる者の繁栄の象徴として機能する。なお、

『玉治百首』には、「またれつるこだかき山の桜花末たのもしくさきに

にけらしな」(春廿首・初花・四九八・藤原定嗣)という類例がみえる。

⑤御代のさかりの春―前年、久仁親王(後深草天皇)に譲位し、院

政を開始したばかりの後嵯峨院の御代を春闌という状況に引きつけて言祝ぐ。「吹く風ものどけき御代の春にてぞさきける花のさかり

をもしる」〔正治初度百首〕下・春・一九一七・讚岐)はその類例。

⑥梅の立枝にみふるしたるものに侍る―清輔詠「あしがきのおくゆかしくもみゆるかな誰がすむ宿の梅の立えぞ」を指す。勅撰集入集

歌でもない歌を院が詠作に利用していることを指摘し、判者として

院の作為を汲み取っていることと院への賞賛を同時に込める。なお、当該清輔詠は、『太皇太后宮大進清輔朝臣家歌合』、『治承三十六人歌合』、『玄玉和歌集』、『中古六歌仙』、『雲葉和歌集』、『歌仙落書』にみえる。

⑦花実あひかぬる一詞を花、心を実に喩え、あるべき和歌の理想を説く所謂花実論に基づく表現。花と実のどちらを重視するかは、時代や論者によって異なる。定家作と伝えられる『毎月抄』は、「心と詞とを兼ねたらむをよき歌と申すべし」とする。

⑧うちまかせたる哥一ありふれた歌、並一通りの歌。そういった普通の歌と並んでいるなら、右歌も格調のある歌にみえると一定の評価を与える。

【通釈】

十四番 山の花

左(歌) 勝

女房(後嵯峨院)

(実際に) 目の当たりにしてもさらに(吉野山の)奥(の桜)が見たい。葦垣のように間近に(咲き誇る)吉野山の花盛りには。

右(歌)

(承明門院) 小宰相

(眼前に) 雲の上まで高く聳える山(のその) 一段高くに咲く桜の花(がみえる)。(あたかも院の) 御代の絶頂の春を目の当たりにしているかのようであるよ。

【判詞】左歌(の)「おくそゆかしきあしかきの」とありますあたりは、「梅の立枝」と詠み込んだ清輔詠に見慣れた表現でございま

して、「よしのの花」と(表現し)てあらぬ様(に仕立てられてるのは)、特に世間並みの者が考えつく表現でもございません。詞と心が両方備わっている(歌)とはまさにこれらのこととございませと有り難くみえます。右(歌の)「山も木高きさくら花」という表現は、並一通りの歌と並びましたなら、格調のあるようにみえますでしょう。やはり左(歌)が勝ちでございます。

〔十五番〕

十五番

左

太政大臣

思ひ出よ我もむかしは立田山たかねの花も袖にかけてき

右

俊成卿女

春は又花の都と成にけり桜に匂ふみよしの、やま

左我もむかしは立田山、さためてゆへなからす侍らんと

みえ侍り、右桜に匂ふみよしの、山、花の都に

心もなりかへりてうつり侍りぬるにこそ、

【校異】

イ 勝一ナシ(書) □ ナシ一統拾遺、春下、(聚) ハ なから

す一ふかく(書) (永) (内)、なくは(聚)、なくく(支) ニん

一し(聚) ホ 侍り一侍るに(書) へり一く(支) ト て一

ナシ(聚)

【他書所伝】

〈左歌〉

『夫木和歌抄』卷第四・春部四・一二四〇

宝治元年十首歌合

常磐井入道太政大臣

おもひ出でよ我もむかしは立田山たかねの花も袖にかけてき

〈右歌〉

『俊成卿女集』二〇九

宝治元年十首歌合に、山花

春はまた花の都と成りにけり桜にほふみよしの山

『歌枕名寄』卷第七・吉野篇・二〇四四

続拾一

俊成女

春はまた花のみやこと成りにけりさくらにほふみよしの山

【参考歌】

〈左歌〉

『古今和歌集』卷第十七・雑歌上・八八九

(題しらず)

(よみ人しらず)

今こそあれ我も昔はをとこ山さかゆく時も有りこしものを

【語釈】

①立田山―立田は大和国の歌枕で紅葉の名所として古来多くの歌作がなされた。また、当該歌の如く春の景を詠み込んだ作も散見する。

「たつたやまみつつきえこしさくらばなちりかすぎなむわがかへるとに」(『万葉集』卷第二十・四四一九・大伴家持)、「しら雲の春は

かさねて立田山をぐらのみねに花にほふらし」(『新古今和歌集』卷第一・春歌上・九一・藤原定家)等はその例。

②たかねの花―本来「このもとにすみけるあとをみつるかなちのたかねの花を尋ねて」(『山家集』中・雑・八五二)の如く、高山に咲く桜を意味する。一方、慈円は「(心足即為富、身閑仍当貴、富貴在此中、何必居高位)谷かげや心のほひ袖にみちぬたかねの花の色もよしなし」(『拾玉集』第二・詠百首和歌(文集百首)・閑居十首・一九八〇)と、『白氏文集』の詩句「居高位」を「たかねの花」と換言している(実氏は前年太政大臣を辞している)。また、下の句の「袖にかけてき」には、「すべらぎのかざしに折ると藤の花およばぬ枝に袖かけてけり」(『源氏物語』宿木巻・薫)の如く、「女性を我がものにする」という意もあり、恋の趣を含んだ詠とも解し得る。詠者が意図的に真意を臆化させ一首に仕立てたものか。

③花の都―吉野には古代離宮が営まれており、それに因んだ「さとの名はよしの山とあれにしを花ぞ都のかたみなりける」(『俊成卿女集』詠百首和歌・花・八七)等の詠がみえる。当該歌では、「このへの人さへ春はうつりきぬよしの山は花のみやこか」(『拾玉集』第一・一日百首・花・九〇四)の如く、辺り一面に桜が咲き誇る春景から、古宮のあった地を華やかな都に喩える。

④桜に匂ふ―風にしも何かまかせんさくら花匂あかぬにちるはうかりき」(『後撰和歌集』卷第三・春下・一〇六・藤原敦忠)の如く、桜の色が美しく映える意。「桜に匂ふ」例歌としては、「かざしをる

道行人のたもとまで桜に匂ふきさらぎの空」〔拾遺愚草〕中・詠花
鳥和歌・一九八五）がみえる。

⑤さためてゆへなからす―実氏が自詠に込めた比喻の真意を、為家が図りかねた故の評と思われる。

⑥心もなりかへりてうつり侍りぬる―「なりかへる」はその状態に成りきる意。「つき草のうつし心やいかならんむらむらしくもなりかへるかな」〔馬内侍集〕九五、「我がやどもあられふりしくときはみな玉のうてなになりかへるめり」〔相模集〕三七〇）等がその例。「心」は「うつり侍り」にも掛かり、右歌の勝を暗に示す。

【通釈】

十五番

左（歌）

太政大臣（西園寺実氏）

思い出してもみよ、私も昔は立田山（の高嶺）に立ち、そして高嶺の花を我が袖にかけたこともあったことだよ（それが今はまあ…）

右（歌） 勝

俊成卿女

春になると再び花の都となることだなあ。桜で美しく映える吉野

山は。

〔判詞〕左（歌の）「我もむかしは立田山」という表現は、きつと何か理由がなくはないと理解されます。右（歌が）「桜に匂ふみよしの、山」（と詠み、花の都に戻って私の）心もすっかり〔花の都〕詠に）変わって（右歌に）惹かれました。

〔十六番〕

十六番

左

権大納言通忠

みよしの、たかきの山の桜花雲より空に匂ふ色かな

右

権大納言実雄

山かせは心してふけ高砂の尾上の桜いまさかり也

左高木の山のさくら花、哥たけもみえ侍るを、

雲より空こそいまたみをよはぬ事にて侍りけれ、

雲より猶うへさまにはへる色にて侍らめども、あ

まりにあたらしくや侍らん、右姿詞よろしく侍り、

かやうの事おもかけあるやうにて覚つかなく侍れは、

左上下句終の字おなしく侍るも、なきにはおとりて

侍れは、持と申へきにや、

【校異】

イ 持―ナシ（書） ロ ナシ―新後撰（永） ハ 左―ナシ（聚）（永）

（支） ニ の―ナシ（書） ホ 哥―うたの（書）（永） ヘ 空―

空に（聚） ト いまた―ナシ（支） チ より―よりも（書）（永）

リ よろしく―よろしくは（永） ヌ 侍り―侍るか（書）（永）（支）

（内）、侍る（聚） ル おもかけあるやうにて―みしおもかけはへ

るやうにて（書）（永） ヲ 侍れは―侍に（書）（永） ワ 句―の

句（永） カ 持―勝（支） ヱ 申へき―可申（内）

【他書所伝】

〈左歌〉 ナシ

〈右歌〉

【新撰撰和歌集】 卷第二・春歌下・七九

(宝治元年、十首歌合に、山花) 山階入道左大臣

山風は心してふけ高砂のをへのさくらいまさかりなり

【歌枕名寄】 卷第三十一・雑篇・八二二八

^{新後} 同一 山階入道左大臣

山風はこころしてふけたかさこののをへのさくらいまさかりなり

【語釈】

① みよしのゝたかきの山の桜花―高城山は、大和国吉野山系の一つ。

なお、『教長集』に「みよしののたかぎのやまのさくらばなならぶ

にほひはまたなかりけり」(九七)と、当該歌と上の句が完全に一

致する先行例がみえる。

② 雲より空に―『千五百番歌合』に「しら雲のかかるたかねをはじ

めにて空よりほふ山ざくらかな」(春三・百六十三番左・三二五・

藤原良平)と類例がみえる。また、当該歌合とは同時代の例として、

【宝治百首】の「春もいま花もさくらの時ぞとや雲よりほふかづ

らきの山」(初花・五一六・俊成卿女)『新撰古今和歌集』一二四

があげられる。通忠は良平詠から「雲より空に匂ふ」という表現を

案出したか。

③ 山かせは心してふけ―桜の花が散るのを惜しんで山風に「心して

ふけ」と呼びかける趣向の先行例としては、「けふくれぬあすもき
てみむさくらばなこころしてふけはるの山かせ」(『金葉和歌集』二
度本・巻第一・春部・四四・源師俊)が早い例。

④ 高砂の尾上の桜―「高砂」は、播磨国の歌枕で加古川河口付近の
地名。「たかさこののをへのさくらさきにけりと山のかすみたたず
もあらなん」(『後拾遺和歌集』巻第一・春上・一二〇・大江匡房)
等の先行例がみえる。

⑤ いまさかり也―「さくらばないまさかりなりにはのうみおして
るみやにきこしめすなへ」(『万葉集』・巻第二十・四三八五・大伴
家持) 他、先行例多数。なお、「あまつかせよきてふかなんうちひ
さすみやぢのさくら今さかりなり」(『万代和歌集』巻第二・春歌
下・二四〇・藤原定家)は発想において当該歌と似通う。

⑥ 雲より猶つへさまにほへる色にて侍らめとも―左歌下の句「雲
より空に匂ふ色かな」に対する為家の理解。「雲より空に」は【語釈】
②に示した如く、先行例の乏しいこなれない表現であり、作者の意
図を汲み取りつつも表現にやや無理があると指摘する。

⑦ 左上下句終の字おなしく侍るも、なきにはおとりて侍れは―早く
は「歌経標式」に指摘がみえる。また、『俊頼髓腦』は、「あしひき
のやまがくれなるさくらばなちりのこれりと風にしらすな」(『天徳
四年内裏歌合』七番左・一四・少弐命婦)を例示し、「桜ばなとい
へるなの字と、散り残りりと風に知らすなといへる、はてのな文字
となり。(中略)これをば悪しともさだめられず。かやうの程のこ

とは、歌によるなめり」と指摘する。

【通釈】

十六番

左(歌) 持

権大納言(藤原) 通忠

み吉野の高城の山の桜花は(花の盛りになって)、雲から空にかけてひとつづきに美しく咲き匂っていることだよ。

右(歌)

権大納言(藤原) 実雄

山風は心して吹け。高砂の尾上(峰)の桜はいま盛りであるぞ。

〔判詞〕左(歌の)「たかきの山の桜花」という表現は、歌の格調も(よく)見えますが、「雲より空」という表現)はこれまで見たことのないものでございます。(意味するところは)雲よりもなお上方に(美しく)照り映える色でございましょうけれど、あまりにも新奇(な表現)でございましょう。右(歌の)姿・詞(の両方)がまあよろしゅうございます。(しかし)このようなこと(＝着想)は以前に見た表現のようで(新しさという点では)おぼつかのうございまして、(一方)左(歌の)上句と下句の終わりの字(「さくらばな」と「色かな」)が同じでございすもの、そうした欠点がないのよりは劣っておりますので、(この番は)「持」と申すべきでしよう。

〔十七番〕

十七番

左

権大納言定雅

桜花遠^①の里までなかも覽^②あたにおらすな春の山守

右

権大納言公相

葛城やいつくを花と尋まし梢^③につくみねの白雲

左おもひやりふかくは侍^④れと、花の遠のさとまで

なかめやりたるさまにや聞なされ侍らん、あた

におらすな春のやまもりと侍るも、上陽春管

領の花処々さためて侍^⑤らめとも、いかにそや聞え

侍るにや、右かつらさきの雲梢^⑥につきて花ひと

つなるおもかけたちて侍^⑦れは、右勝侍るへし、

【校異】

イ 勝一ナシ(書) 口 権大納言一ナシ(永) ハ 公相一公經

(聚)、公相きむすけ古本(永) ニ 一つく一つこ(書) ホ 侍れと

一みえ侍れと(書)(永) ヘ なかめやりたる一なかめたる(書)(聚)

(永)(内)(支) ト やまもり一山もと(支) チ 春一ナシ(書)

リ 花処々さためて一花処々にさためて(書)、節處^{せちどころ}にや(永)

又 侍らめとも一侍られとも(内) ル つきて一つきて(内)、

つきては(支) ヲ 花一花も(書)、花の(聚)、花はな(永)

【他書所伝】

〔左歌〕ナシ 〔右歌〕ナシ

【語釈】

①遠の里までなかむ覽―遠くの里人までもが桜花を眺めているだろうの意。「ここに又わがあかぬ月を山のはのをちのさとはおそしとやまつ」(『古今和歌六帖』第一・一七四)の如く、視点人物が遠くの里人の様子を思いやっている状況を表す。

②あたにおらすな春の山守―番人である山守に対して、桜を折らせないように求める趣向。桜を折り取る者を咎める存在としての山守は、既に『後撰和歌集』「山守はいはばいはなん高砂のをへの桜折りてかざさむ」(巻第二・春中・五〇・素性)等にみえる。

③葛城―大和国の歌枕。現在の奈良県西部、大阪府との境に位置する山系。平安後期には「葛城の高間の山」の桜の美しさを詠む例が多くみえる。

④梢につくみねの白雲―「吉野やま嶺の桜のさかりこそ雲路につづくながめなりけれ」(『正治初度百首』春・一五二七・藤原範光)の如く、白い花の咲く梢と峰の白雲とが連続するように見え、見分けたつきがたい状況を詠む。なお、公相には、「あしびきの山のたかねを見わたせばくもねにつづくはなざくらかな」(『万代和歌集』

巻第二・春歌下・二四三)という詠もみえる。

⑤おもひやりふかく―遠くの里の様子を思いやる内容は心も深くみえますの意。『千五百番歌合』の宮内卿詠「とやままでみ山のあら

れわけすぎてまさきのかづら秋かぜぞふく」(秋四・七百七十二番左・一五四二)に対する定家判「はるかにおもひやられてをかしくは侍るを」はその一例。

⑥聞なされ侍らん―出詠歌が作者の意図と異なる文脈で判者に理解されることを示す。為家は、上句の表現では桜花が遠くの里まで眺めやっているように理解されてしまおうと指摘する。

⑦上陽春管領の花処々さためて侍らめとも―『和漢朗詠集』上・春興・二〇「歌酒家花処処 莫空管領上陽春」(出典は『白氏文集』巻第五十六「送東都留守令狐尚書赴任」)という詩句を判者為家が想起し、当該歌の趣向と共通点を持つ先例であることを認めた発言。為家の認識した共通点のはっきりしないが、「花処々」に焦点をあてた引用の文言から考えると、花が盛りに咲いている情景を詠んだ点を指すか。あるいは、下句を批評対象とする判詞の構成から考えると、むなしく上陽の春を過ごすなという詩句と、むなしく桜を折らすなという歌との表現の類似を指すか。なお、為家には「花処々」を題とした「身を分けてゆかまほしきは山ざくら花のさかりのよもの木のもと」(『為家集』上・春・一九五)がある。

⑧おもかけたちて―先行する歌の表現が想起される場合にも用いられるが、ここでは歌に詠まれた情景が視覚的映像として眼前に浮かぶ様を示す。『後京極殿御自歌合』十三番右・二六「はれ曇り嶺しづまらぬ白雲は風にあまぎる桜なりけり」について、俊成は、「見るやうには面影おぼえ侍れど」と判を付している。

〔通釈〕

十七番

左(歌)

権大納言(藤原) 定雅

遠くの里人までもが桜花を眺めていることだろう。むなしく桜を折らせるなよ、春の山守よ。

右(歌) 勝

権大納言(西園寺) 公相

葛城の(山の) いったいどこを花だと思つて探し求めたらよいのであろう。花の咲く梢へ続くように峰には白雲がかかつており、見分けがつきがたいことよ。

〔判詞〕左(歌の) (遠くの里の様子を) 思いやる内容は(心も) 深くみえますが、(これでは) 桜花が遠くの里まで眺めやつていように理解されてしまうでしょう。(下句の) 「あたにおらすな春の山守」とありますのも、上陽の春を過ぎし花は至るところに咲いている(という詩句は『和漢朗詠集』に) 確かにございますが、どうであらうと思われるでしょう。右(歌は) 葛城にかかる雲が梢へ続いて雲と花とが一体になるように見える情景が目に見えますので、右(歌) が勝でしょう。

〔十八番〕

十八番

左イ

権大納言公基

よしの山峯にたな引白雲のほふは花の盛なりけり

右

為教朝臣

今朝よりは雲こそ匂へ吉野山高根の桜今や咲らん

左右共に白雲の匂ふによりて花を分るよし

の山、高下をさため申侍らん 中くナに侍れば、可カ為持

〔校異〕

イ 持一ナシ(書) ロ ナシ一新後撰、春下(聚)、新後撰(永)

ハ 今朝一けふ(書) ニ 今一花(書)(永) ホ らんーらし(書)

(永) へのーナシ(書) ト 申一ナシ(支) チ ナシーは(支)

リ 可為持一持たるへし(永)

〔他書所伝〕

〔左歌〕

『新後撰和歌集』卷第二・春歌下・七八

宝治元年、十首歌合に、山花

万里小路右大臣

よし野山みねにたなびくしら雲のほふは花のさかりなりけり

〔右歌〕

『蓮性陳状』(本文は、歌合類聚本『大日本史料』所収)

今朝よりは雲こそほへ芳野山たかねの桜今やさくらん

【語釈】

①白雲のにはふー「よしの山花の盛やけふならむそらさへ匂ふみねのしら雲」〔御室五十首〕二五七・藤原俊成、「またれつる花のさかりか吉野山かすみのまよりにほふ白雲」〔式子内親王集〕一〇九の如く、白雲が桜の盛りによって一層白く照り映える様を詠む。

②高根の桜―ここでは吉野山の高嶺の桜を指す。「しらくもとをちのたかねに見えつるはこころまどはすさくらなりけり」〔金葉和歌集〕二度本・巻第一・春部・三六・藤原公実)等がその例。

③高下―左右が吉野山を詠んでいることに因んで歌の優劣を換言した表現。例えば、「春日若宮社歌合」祝・三十五番「あめのしたをさまれる代と三笠山嶺の朝日のかげぞのどけき」(藤原経定)「万代とさしてもいはじちはやぶる三笠の山の神にまかせて」(鷹司院帥)の優劣について、判者知家は、「此つがひ、おなじみかさ山、高下あるべからずや」と記す。

【通釈】

十八番

左(歌) 持

権大納言(藤原) 公基

吉野山の峯に棚引いている白雲が色映えて見えるのは(今気付いたのだが峯の辺りの)桜が盛りだからだったのだなあ。

右(歌)

(藤原) 為教朝臣

今朝からは(峯の辺りの白)雲がまさに色映えてみえる。吉野山の高嶺の桜は今まさに咲いているのであるう。

〔判詞〕左右(の歌が)共に(詠み込んでいるのは)白雲が色映えることによって花(が咲いているのをそれと)判別した吉野山(の詠であり)、(歌の出来映えの)高い低いを決め申し上げますのは、なかなか難しゅうございますので、持とする。

〔十九番〕

十九番

左

中納言為経

白波の立重なる瀧の上のみ舟の山は花さかりかも

右

信実朝臣

けふしはや花待つくる老らくのみ山かくれに春を知らん

左歌白波のなとことくしきすかたにおもひ

よりて侍り、み舟の山といへるまでさしてその

難なくみえ侍るを、右歌述懐には侍れと、心詞

いひしりてすかたおかしく、かやうのましらひにも

花待つくる心ちし侍らん、さて、花の心みすてかたき

につきて、いはれなく勝の字をつけぬ

【校異】

イのーに(書)(支) 口 勝ーナシ(書) 八らんーかな(書)(永)
ニらん、さてーらむまで(書)(永) ホ 花ー老(書)(永) へ
きーき(永) トのーナシ(書) チつけーつき(聚)(内)(支)

リぬー侍りぬ(書)(永)

【他書所伝】

〈左歌〉

『夫木和歌抄』卷第四・春部四・二二四一

(宇治元年十首歌合)

大宰権帥為経卿

しら浪の立ちかさなれる滝の上のみふねの山は花盛かも

〈右歌〉ナシ

【語釈】

①瀧の上のみ舟の山―瀧は、宮の瀧(宮滝)を指す。大和国の歌枕。「み舟の山」(御船の山)は、同じく大和国の歌枕で、吉野川をはさんで宮滝の東南に位置する。宮瀧と三船山は併せて詠み込まれることが多く、『万葉集』の「たきのうへのみふねのやまにゐるくものつねにあらむとわがおもはななくに」(巻第三・雑歌・二四三・弓削皇子)、「たきのうへのみふねのやまはかしこけどおもひわするるときもひもなし」(巻第六・雑歌・九一九・車持千年)等が早い例。

②み山かくれ―山の奥深くに隠れている意。「わがこひはみ山かくれの草なれやしげさまされどしる人のなき」(『古今和歌集』巻第十二・恋歌二・五六〇・小野美材)、「老いはててみやまかくれにすむまでもわかのことろのうせぬかなしさ」(『教長集』九六五・静蓮)等、人知れない恋や隠棲者の比喻としての用例がみえる。

③白波のなとごとくしきすかた―「ことごとし」は、仰々しい、

大層である意。「両首共に事事しからんとは心ざしたれども不聞にや」(『六百番歌合』冬部・寒松・十番判詞)、「左ごとごとくしたかくよみなせる振舞、勝とみえ侍るにや」(建長八年『百首歌合』四十三番)等、プラス評価としての例がみえる。当該歌以前では、「いせのうみのうらのはまゆふいくへともいさしらなみのたちかさねつ」(『明日香井和歌集』上・百日歌合・七二五)が、「白波・立ち重」の先行例としてみえる。

④いひしりて―ものの言い方をよく心得ている意。「左はぬさはせんなどは、いひしられるににては侍れど」(『六百番歌合』恋部下・寄懐偏恋・七番判詞)等がその例。

⑤さて、花の心―書陵部本等は、「らむまで、老の心」とする。「さ」と「ま」、「花」と「老」は各々字体が似ており、また、「花」と「老」は、直前に「花の待つくる」とあり、目移りによる誤写が想定される。底本の「さて」では落ち着きの悪さもあるが、ここでは底本を尊重した。

【通釈】

十九番

左(歌)

中納言(藤原)為経

(流れが激しく)白波が立ち重なっている吉野川急流の上にそびえる三船の山は(これもまた白波が立ち重なっているかのような)桜の盛りであることよ。

右(歌) 勝

(藤原)信実朝臣

今日という今日は、花が咲くのを待っていた老身（のあの人）が（春の訪れが遅い）深山の隠居において春（が来たこと）を知るであらうよ。

〔判詞〕左歌（の）「白波の」など仰々しい情趣に思い至っておりま
す。「み舟の山」と表現しているところまでこれといってその難点
はないように思われますのを、右歌（は）述懐（として老いを嘆い
た歌）ではごさいますけれど、心詞は言い方をよく心得ていて情趣
があり、この（右歌の）ような（世間との）付き合い方であっても
花（が咲くの）を心待ちにする気がするでしょう。さて、（老身で
花を待つ状況で）花（へ）の（執）心が見捨てがたいので、はっき
りとした根拠もなく（右歌に）勝の字をつけてしまった。

二十番

二十番

左イ辨

左衛門督通成

わくかたもなくて詠めん桜花たちなまかひそ山の端の雲

右

右近中将雅光

桜花さくとみしより松山の梢に波のかけぬまもなし

わくかたなくてなかめんといへる、あまりにた、
事にてや侍らん、さくら花さくとみしより又め
つらしきやうにも侍らねは、おなし程のことにや
侍るへき

〔校異〕

イ 持一ナシ（書） □ 左一右（書）（永） 八 近一近衛（支）

二 かた一かたも（書）（聚）（永）（内） ホ にてや一にや（書）（永）

へ より一よりも（書）（永） ト やう一さま（書）（永） チ も

一は（書）（聚）（永）（内）（支） リ るへき一らん（支）

〔他書所伝〕

〔左歌〕

『現存和歌六帖』五七七

（さくら）

右衛門督通成

わくかたもなくてながめんさくらばなたちなまがひそやまのはのくも

〔右歌〕ナシ

〔語釈〕

①左衛門督通成一この時、通成は右衛門督。諸本により改める。

②わくかたもなくて一「めづらしきいもにあふよはほととぎすわくかたもなくまたれぬるかな」〔太皇太后宮小侍従集〕夏・三三二、「待つほどはわくかたなきを時鳥たれ一こゑをきまがふらん」〔正治後度百首〕郭公・七一九・賀茂季保等如く、心を他に散らすことなく専念する様をいう。

③たちなまかひそ一「よし野山はなどはたれかしらざらむたちなまがへそみねのしら雲」〔千五百番歌合〕春三・百五十九番右・三二八・藤原兼宗等の先行例がみえる。

④松山の梢に波のかけぬまもなし―「松山」は、陸奥国の歌枕「末の松山」を指すとも考えられる。「末の松山」の場合、『後撰和歌集』

「松山」につらきながらも浪こそむ事はさすがに悲しきものを」（巻第十一・恋三・七五五・藤原時平）、「あぢきなくなどか松山浪こそむ事をばさらに思ひはなるる」（同七五九・藤原時平）等の如く、「末

の」は必ずしも詠み込まれないが、本歌である『古今和歌集』「君をおきてあだし心をわがもたばすゑの松山浪もこえなむ」（巻第二十・東歌・一〇九三）の表現「波」・「越す」を詠み込んでいる。

「松山」の桜を波に喩える発想は、「はるくればさくらが枝に風ちりて花の浪こそすゑのまつ山」（『拾玉集』第一・一日百首・花・九〇八）、「春くればこそすゑに花のなみこえてよしののおくもすゑの松山」（『千五百番歌合』春二・百二十六番右・二五二・寂蓮）等の先行する「末の松山」詠と共通するが、当該歌の場合、「越す」という表現がみえないことや、「松山」を「末の松山」と解する必然性が充分ではないことから、松の自生する山として解する。

⑤たゝ事―歌語らしくないことばを指す。「ただことば」に同じ。『実国家歌合』歳暮・六番右歌・七一・平親宗詠「あさましやこよみのおくを今日みれば一くだりにもなりにけるかな」に対する藤原清輔判「むげにただ事どもなり」はその一例。

⑥めつらしきやうにも侍らねは―「桜が咲いたのをみて以来」という詠みぶりに新味がないことを指摘する。「桜花さくとみし」に限っても、「桜花さくとみしまにたかさこの松をのこしてかかるしら雲」

（『続拾遺和歌集』巻第一・春歌上・五九・順徳院）、「春ふかみあらしの山の桜ばなさくと見し間に散りにけるかな」（『金槐和歌集』春部・九二）等の例がみえる。

【通釈】

二十番

左（歌）持

右衛門督（源）通成

心をわけることなく専念して眺めよう桜花よ。立ち昇って桜花と混じり合うな、山の端の雲よ。

右（歌）

右近中将（源）雅光

桜花が咲いたと見たときから松山の梢に白波が絶えずうちかかっているようにみえることだ。

【判詞】（左歌の上の句に）「わくかたもなくて詠めん」と（詠んで）いる（が）、（これは）あまりに日常的な歌語らしくない表現でございましょう。（右歌の上二句の）「桜花さくとみしより」（も）また新鮮さを感じさせる詠みぶりでもございませんで、（どちらも）同じ程度の歌でございましょう。

〔二十一番〕

廿一番

左

兵部卿有教

① 尋^①いる花^②より花に日数へて山^③ちのすゑに幾夜とまりぬ

右

弁内侍

心のみ行^④帰りつ、山高^⑤みおられぬ花^⑥ぞうつろひぬへき

花より花に日数へて、すかた詞こひねかふへきやうには

侍らぬうへに、山路のすゑも覚東なくこそ侍れ、

こゝろの行てといへる、おかしくとりなされて

侍れは、おられぬ花に心うつろひ侍りぬ、又以右為勝、

〔校異〕

イ 勝一ナシ(書)(内) ロ そーに(聚) ハ にーの(書)(永)

ニ へて一ナシ(書)(永)(支)、へ(内) ホ やうには一さまに

は(書)、さまには(永) へ こゝろのーこころのみ(聚) ト

又一ナシ(書)(永) チ 右一ナシ(内)

〔他書所伝〕

〔左歌〕ナシ〔右歌〕ナシ

〔本歌〕

〔右歌〕

『古今和歌集』卷第七・賀歌・三五八・凡河内躬恒

(内侍のかみの右大将ふぢはらの朝臣の四十賀しける時に、四

季のゑかけるうしろの屏風にかきたりけるうた)

山たかみくもゐに見ゆるさくら花心の行きてをらぬ日ぞなき

〔語釈〕

① 尋^①いる一深く分け入る意。「深山尋花」はるふかくたづねいるか
なたにがくれかせにしられぬはなやにほふと」(『教長集』一三二)
の如く、花を尋ねて山深く分け入る詠での用例がみえる。

② 花より花に一「やまふかみ花よりはなないうつりきてくものあなた
のくもを見るかな」(『秋篠月清集』西洞隠士百首・春廿首・
六一) 等と同様、詠者主体が山中で花を次々と尋ねる様。

③ 山ちのすゑ一「浦ちかき山ちのすゑに日は暮れてふもとのいほに
あまのもしほ火」(『寂蓮法師集』二四七) 等の如く、山から出てい
く路の終端を指す場合と、「たれかまたやまちのすゑにむすぶらん
ちとせをながすきくのした水」(『千五百番歌合』秋四・七百七十九

番左・一五五六・源具親)、「見てもなほ花に心のゆきやらで山路の
すゑにけふもくらしつ」(『東撰和歌六帖』第一・春・桜・一七四・
光西法師)と、山奥の山路の果てを指す意の両様がみえる。当該歌
では後者の意。

④ おられぬ花ぞうつろひぬへき一前記本歌を踏まえ、実際には手折
られない高嶺の花が色あせていく様に仕立てている。

⑤ とりなされて一あるものを変えて他のものに仕立てるのが原義。
ここでは本歌を上手く踏まえて一首を仕立てていることを指す。

『千五百番歌合』の慈円詠「わがなみだよしののかはのよしさらば

いもせの山のなかにながれよ」(恋三・千三百二十三番左・二六四四)について、「左歌は、ながれてはいもせの山の中におつるよしの河のよしや世の中、と侍る歌、おほかたのいもせのなからひのありやうをよめる歌にて、古今の恋歌のはてにはいりて侍ると見ゆるを、をかしくとりなされても侍るかな」とするのがその一例。

【通釈】

廿一番

左(歌)

兵部卿(源)有教

(花を)探し求めて(山に)分け入り花から(さらに奥に咲いている)花へと(心を留めて移動しながら過)しているうちに意外にも(幾日も経ち、山路のはてに(行き着くまでに) 幾晩も泊まってしまったよ。

右(歌) 勝

弁内侍

心ばかりが行きつ戻りつして、(実際には、)山が高いので手折られない花は、きつと(そのまま)色あせて(散って)しまうことだろう。

【判詞】(左歌の)「花より花に日数へて」は、風体や表現が望ましさまでではございません上に、「山ちのすゑ」(と詠んだ下の句辺り)も(山路の果てで日数を過)したのか、山路の果てに辿り着くまでに日数を過(したのか)はつきりしません。(右歌は)「心の行きて」という(古今集歌)を、上手に採り入れて変化させておりますので、「おられぬ花」(と詠んだ右歌)に(判者の)心が惹かれました。ま

た右(歌)を以て勝とする。

〔二十二番〕

廿二番

左イ

右近中将師繼

よしの山麓の里の春をへてひと日も桜めかれやはする

右

雅忠朝臣

泊せ山咲そふ花の色みえてことしはふかきみねのしら雲

左の吉野山は、ふもとのさとの春をへてひと日も

めかれせぬといひ、右泊せ山は、咲そふ花の色みえて

ことしはふかしと思へり、知かたく侍れば、此番勝

負不弁侍るへし、

【校異】

イ 持一ナシ(書) □ 雅忠朝臣一 名本ニ無之可改(支) ハ め

かれせぬ一 さくらめかれせぬ(聚)、めかれす(書)(永) 二 右

一 右の(書)(永) ホ 色みえて一 色をみて(書)(聚)(永)(内)、

色みて(支) ヘ ナシ一 その心いづれあさしふかしと(書)(永)

【他書所伝】(左歌)ナシ (右歌)ナシ

【語釈】

①よしの山麓の里一山裾の里。「さくらばなさかりになれば芳野山ふもとのさとに旅ねをぞする」(『中宮亮重家朝臣家歌合』四番・八・

右京大夫)の如く、吉野山の麓の里で桜を心ゆくまで愛で春を過ごす数寄の心を表す。

②春をへて―幾年の春を経てという例は多いが、ひと春を過ぎす意としては、「春をへて花ちらましやおく山のかぜをさくらの心とおもはば」(『千載和歌集』巻第二・春歌下・八六・藤原基俊)がみえる。但し、千載集の例では、「春をへて」とする説がある。

③桜めかれやはする―桜から目を離すことが出来ないという意。「かぜをいたみひびきのなだを通る日も嶺の桜にめかれやはする」(『林葉和歌集』第一・春歌・一六七)、「ときは木のたえ間にほふ山桜まれなる色にめかれやはする」(『後鳥羽院御集』詠五百首和歌・春百首・六四五)等が先行例。

④泊せ山―初瀬山(はつせやま)。また、『万葉集』における「泊瀬山」表記を「とませのやま」とする訓み方も別称として通行していた。大和国の歌枕で現奈良県櫻井市初瀬町一帯。初瀬山と桜の取り合わせとしては、「はつせやまくもゐにはなのさきぬればあまのかはなみたつかとぞ見る」(『金葉和歌集』二度本・巻第一・春部・五一・大江匡房)、「はつせ山うつろふ花にはるくれてまがひし雲ぞ嶺にのこれる」(『新古今和歌集』巻第二・春歌下・一五七・藤原良経)、「はつせ山うつろはんとや桜花色かはりゆく峰の白雲」(『内裏百番歌合』二十番左・三九・藤原家隆)等が主な先行例。

⑤咲そふ―花が加わる意。先行例の一つ「としごとさきそふやどのさくら花なほゆくすゑの春ぞゆかしき」(『金葉和歌集』二度本・

巻第一・春部・三四・源雅兼)では、白河院、鳥羽院、待賢門院の白河殿花見御幸に事寄せて、院や帝の盛代を言祝いでいる。当該歌が、院が久仁親王(後深草)に譲位した翌年の出詠である点や下の句の「ことしはふかき」を勘案すれば、或いは一首全体に後嵯峨院政初発期への祝言が響いているか。

【通釈】

二十二番

左(歌) 持

右近中将(藤原)師繼

吉野山の麓の里での春を過ごし、(桜が日に日に奥の方へと咲いていくので)一日として桜から目を離すことができようか、いやできない。

右(歌)

(源)雅忠朝臣

初瀬山では今年のさくらが去年よりも花が咲き加わり色どりが美しく見えて、今年(桜の色が照り映え)峰の白雲も去年より今年が一段と(美しさが)深いことよ。

【判詞】左(歌)の吉野山は、麓の里での春を過ごし一日たりとも桜から目を離すことができないと詠じ、右(歌)の初瀬山は、咲き並ぶ花が(美しく)見えて今年(特に(峯の白雲も一段と)深く)考える。その(左右の)心のどちらが浅い深いかは識別しにくいので、この番の勝負は決めがたいでしょう。

二十三番

廿三番

左

沙弥蓮性

尋きて今そしめゆふ玉たすき雲ゐる山の初桜花

右

下野

みよしの、おくまで花に誘はれぬ帰らん道の枝折たにせて

左今そしめゆふたまたすきなといへる、ふるき

詞をかけていひ知て侍れと、右山とあらはれ

さるに侍れと、枝折といへるに聞えて侍れは、今

たつねくるより帰らん路の枝折たにせてといへる

は、花にまかへる心猶ふかくやそめまして侍る

へき、以右爲勝、

【校異】

イ 山一嶺(永) 口 花一哉(内) ハ 勝一ナシ(書)(内) ニ

帰一まつ(聚)(内)(支) ホ 道一みね(内)(支) ヘ て一ナシ

(聚) ト 侍れと一侍めれと(永) チ 右山とあらはれざるに侍れ

と、枝折といへるに聞えて侍れは一ナシ(聚) リ 山と一山そ(書)

(永)(内)(支) ヌ 又 あらはれざるに一あらはれたく(書)(内)、

あらはれたく(永)、あらはれて(支) ル 侍れと一侍れとも(書)

(永) ヲ 枝折といへるに聞えて侍れは、今たつねくるより帰らん

路の一ナシ(支) ワ くる一きたる(書)(永) カ より一より

は(書)(永) ヨ 帰一侍(聚)(内) タ たに一ナシ(支) レ

まかへる一さそはる、(書)(永) ソ ナシ一仍(書)(永)、心(内)

【他書所伝】

〈左歌〉

『万代和歌集』卷第一・春歌上・二〇五

十首御歌合に、山花を

正三位知家

たつねきていまだしめゆふたまたすきくもゐるやまのはつざくらば

な

『夫木和歌抄』卷第四・春部四・花・一〇七二

十首歌合に、山花を、万代

正三位知家卿

尋ねきて今ぞしめゆふ玉たすき雲ゐる山の初ざくら花

〈右歌〉

『新撰和歌集』卷第二・春歌下・九五

(宝治元年、十首歌合に、山花)

後鳥羽院下野

みよしののおくまで花にさそはれぬかへらん道のしをりだにせで

【蓮性陳状】一〇

下野

みよしの、奥まで花に誘はれぬ帰らん道のしをりだにせて

【語釈】

①しめゆふしめ繩を結びめぐらし自分の所有であることを宣言す

る行為。「うゑたてて君がしめゆふ花なれば玉と見えてやつゆもお

くらん」(『後撰和歌集』卷第六・秋中・二八〇・伊勢)等が先行例。

②玉たすき―樗の美称が原義。ここでは「おもひあまりいとますべ

なみ玉たすき雲ある山にわれしめむすぶ」(『古今和歌六帖』第五・

三二一九、原歌は『万葉集』一三三九)と同様の用い方。

③枝折―木の枝を折って道しるべとすること。「花ゆゑにしらぬ山

路のあらばこそいるさかへさのしをりをもせめ」(『月詣和歌集』巻

第二・二月・一一四・源有房)、「よしの山こぞのしをりのみちかへ

てまだ見ぬかたの花をたづねん」(『新古今和歌集』巻第一・春歌

上・八六・西行)等の例がみえる。

④ふるき詞をかけて―「今そしめゆふ玉たすき」辺りの表現に「語

釈」②既出『古今和歌六帖』歌との表現の似通いを指摘したもの。

⑤右山とあらはれざるに侍れと、枝折といへるに聞えて侍れは―為

家は、右歌は「山」と詠み込まれていないが、「枝折」に山の意が

響いていると指摘する。定家詠「(山家)しばのとの跡みゆばかり

しをりせよわすれぬ人はかりにもぞとふ」(『正治初度百首』下・

一三九二)は、その例。これに対して『蓮性陳状』は、俊成詠「し

をりするならば柴にちる露のはらはらとこそねはなかれけれ」

(『長秋詠藻』上・一四七)に山の意が響いていないことや、『古今

和歌六帖』において「枝折」が木の部に入っている点等を指摘し、

為家の判に異議を申し立てている。

【通釈】

二十三番

左(歌)

(探し) 求めてきて(やっと出会い)(私は占有する為に)今こそ

しめを結おう、雲がかかる(高い)山の初桜花よ。

右(歌) 勝

吉野の随分奥まで花に誘われてきてしまった。帰途の枝折もしな

いままに…

【判詞】左(歌の)「今そしめゆふ玉たすき」などという、(万葉歌の

ような)古い詞に関係付けて詞の使い方を心得ていますが、右(歌

は)「山」と表現されていませんが「枝折」と詠じたことで(山の意)

が聞こえますので、今尋ね来る(というよりは)「帰らん道の枝折り

たにせて」という(表現)は、花の中にまじってしまふ(花に魅入

られる)心が一層深く反映しています。右(歌)を以て勝とする。

〔二十四番〕

廿四番

左^イ

みよしの、花は昔の春なからなと故郷の山となりけん

右

心をは染さらましを桜花山のかひなくうつろはんとや

為氏朝臣

少将内侍

左上句春なからといへるまで珍らしき所侍らぬ
 にや、下句もあまりにたしかに侍るか、右そめさら
 ましをなといひてうつろはんとや侍る、少心覚東
 なくことたらぬやうに聞え侍れば、さりとは
 左勝侍るへし、

【校異】

イ 勝ーナシ(書) □ ナシー新拾遺、春下、(聚) ハ いへる
 ーいつる(支) ニ ーにそ(書)(永) ホ 侍るかー侍へき(書)
 (永)、侍る(聚)(内)(支) へ なんとー(書)(永) ト とや
 ーとやと(書)(永)

【他書所伝】

〈左歌〉

『新拾遺和歌集』卷第二・春歌下・一一八

宝治元年十首歌合に、山花

前大納言為氏

みよしのの花はむかしの春ながらなどふる郷の山となりけん

〈右歌〉 ナシ

【語釈】

①故郷ー古跡が原義。ここでは、「(ならの京にまかれりける時にやどれりける所にてよめる) みよしのの山の白雪つもるらしふるさとさむくなりまさるなり」(『古今和歌集』卷第六・冬歌・三三五・坂上是則)の如く、かつて吉野川流域に営まれた離宮を指す。

②山のかひなくー「かひ」は、「峡」と「甲斐」の懸詞。「なげきをばこりのみつみてあしひきの山のかひなくなりぬべらなり」(『古今和歌集』卷第十九・雑体・一〇五七・よみ人しらず)等がその先行例。
 ③春なからといへるまで珍らしき所侍らぬー著名な『伊勢物語』所収歌「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」に連なる詠と理解した上での発言。

④あまりにたしかに侍るーいわんとする事をあまりに直接的に表現し過ぎて意。例えば、俊成は「やましなのいはたのをのに秋くれて風に色あるははそはらかな」(『六百番歌合』秋部・柞・四四〇・藤原隆信)について「はじめ、やましなとおけるぞあまりにたしかにきこえた」と、初句で地名をそのまま詠み込んでいる点を難じている。

【通釈】

二十四番

左(歌) 勝

(藤原) 為氏朝臣

吉野山の(桜の)花は昔と同じ春の花でありながら、どうして旧

都の山に(吉野山は)なったのだろう。

右(歌)

少将内侍

桜花に心を染めなければ良かったものを。(その桜が咲く)山の峡の「峡」ではないけれど(その桜を大事に思う)「甲斐」もなく散ろうというのか、桜花よ。

〔判詞〕左(歌の)上の句は「春なから」というまで(特に)新味

がございませんでしうか。下の句も余りにはつきり言い過ぎていでしうか。右(歌は)「染さらましを」などといつて「うつろはんとや」(と)あります(のは)、少し趣意がはつきりせず言葉が足りないように聞こえますので、それならば左(歌)が勝つでしう。

二十五番

廿五番

左

経朝朝臣

吉野山桜にまかふ色そなき峯の白雲名にはたてとも

右

沙弥禅信

さくら花かはらぬ色を分かねて雲さへおしき春の山風

左哥人丸か目にはといへるいにしへの跡を捨て、

今の世にをよはぬこゝろをもて、更にまかふ色

なく思ひさため侍らん事こそ、なかれをくみて

源をわすれん心くちおしく侍れ、右春の山風

はかりにては題の心いか、とみえ侍れ共、雲さへ

おしきといへる花を思ふ心ありて幽に侍れ

は、尤以右為勝、

【校異】

イ 勝一ナシ(書) 口 もてーもちて(書)(永) ハ 更一桜(永)
ニ くちおしくー口借(支) ホ は一ナシ(書) へ の一ナシ(永)

ト とーとそ(書)(永) チ いへるーいへるは(書)(永) リ

ありてーあまりて(永) 又 幽ーいう(書)、優(永)、かすか(聚)
(内) ル 侍れー侍る(支) ヲ 為一ナシ(支)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『現存和歌六帖』五八六

(さくら)

源俊平

さくらばなかはらぬいろをわきかねてくもさへをしきはるのやま風

『秋風抄』下・雑歌・二七〇

院御歌合のうた

源俊平

桜花かはらぬ色をわきかねて雲さへをしき春の山かぜ

『秋風和歌集』卷第十七・雑歌上・一〇七八

十首歌合に、山花を

みなもとの俊平

さくら花かはらぬ色をわきかねて雲さへをしき春のやまかぜ

【語釈】

①人丸か目にはといへるいにしへの跡ー『古今和歌集』仮名序「春のあしたよしの山のさくらは人まろが心にはくもかとのみなむおほえける」を踏まえた表現。桜を白雲と見紛うものとした和歌的伝統を指摘し、左歌が「桜にまかふ色そなき」と詠じた点を難じる。

なお、『龜山殿五首歌合』では、真観が「古今序にも、(中略)吉野山のさくらは人丸が目にくもかとぞおほえける」(廿一番・山紅葉)

と判を付している。

②なかれをくみて源をわすれん心―『摩訶止観』を出典とする語。『新古今和歌集』仮名序に「ながれをくみてみなもとをたづぬるゆゑに」とみえる他、『今鏡』序にも引用がみえる。

③幽に―内閣文庫本等では、「幽」の和訓「かすかに」とみえ、一方、永青文庫本では「優」字を宛てている。「幽」「優」では、意味合いが異なり、それぞれ「幽玄」「優美」といった意となる。当時の当て字はそれほど厳密なものではなかったと思われるが、ここでは底本の「幽」を尊重し、花を惜しむ心を奥深く表現した点を評価していると解釈した。

【通釈】

二十五番

左(歌)

(藤原) 経朝朝臣

吉野山には桜と見まがうような美しい色など他にはないことよ。山頂の白雲が(桜と見まがってしまふものだ)評判になつてのだけども。

右(歌) 勝

沙弥禅信

桜の花の変わらないように見える(雲の)色とを見分けることができな、雲までも(吹き散らされること)惜しいことだと思わせる、春の山風よ。

【判詞】左歌「人丸か目には」と言っている従来の歌事蹟を顧みず、今の世で昔にはとても及ばない心をもって、さらに(桜と白雲を)

みまがう色はないものと決めなされたことこそが、流れを汲んで源を忘れる(歌の伝統に立って、源流を忘れて)ような風情であつて残念でございませう。右(歌)「春の山風」という(表現)だけでは題の心としてどうかと思われまますけれども、「雲さへおしき」と言う花を愛でる情緒があつて幽玄でありますので、いかにも右(歌)を以て勝とする。

〔二十六番〕

廿六番

左(歌)

越前

みよしの、花の盛に成ぬれば四方の草木も匂ふ春かせ

右

前権大納言為家

老の身にくるしき山のさかこえて何とよそなる花を^ハ辯覽

左山の心おほつかなくや、右くるしき山の坂こえて^ト

凡卑のすかた、たとへは妻木をへる山人の、なをし

も花の陰をさりてよそにみえたるおもかけ、はな

はたみくるしく侍るにこそ、尤可^ナ負、

【校異】

イ 勝―ナシ(書) □ ナシ―新後撰、春下、(聚) ハ 待覽―

みらん(書) (永) ニ ナシ―と(書)、といへる(永) ホ 凡

卑―凡早(内) へ みえたる―みたる(書) (永) ト みくるし

く侍るにこそ見苦敷こそ侍れ(支) 子 可負一為負(書)(永)、
可曾(支)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『新後撰和歌集』卷第二・春歌下・九四

宝治元年、十首歌合に、山花

前大納言為家

老の身にくるしき山のさかこえてなにとよそなる花をみるらん

『題林愚抄』第三・春部三・九九四

新後撰

為家

老の身にくるしき山の坂こえて何とよそなる花をみるらん

【語釈】

①みよしのゝ花の盛に成ぬれば一吉野山の花盛りの春景を表す。表
現に目新しさはなく、例えば『月詣和歌集』には「みよしののほな
のさかりに成りぬればたたぬ時なき峰のしら雲」(卷第三・三月・
一六五・藤原為業)と、上の句が一致する先行例がみえる。

②老の身にくるしき山のさかこえて一先行例として「老いぬればの
ぼる山路のくるしきに心をひくは桜なりけり」(『民部卿家歌合』四
番石・八・二条院三河内侍)がみえる。

③たとへは妻木をへる山人の、なをしも花の陰をさりてよそにみえ
たるおもかけ一『古今和歌集』仮名序で大伴黒主の和歌の風体につ
いて「おほともくろぬしはそのさまいやし、いはばたきぎおへる

山びとの花のかけにやすめるがごとし」と評した表現を踏まえる。

【通釈】

二十六番

左(歌) 勝

越前

吉野の花が盛りになったので、四方の草木も匂い立つ春風(が吹
いていること)よ。

右(歌)

前権中納言(藤原)為家

(こんな)老いの身で苦しい山の坂を越えてまで、どうして自分
とは関係ないような花を眺めているのであろうか。

〔判詞〕左(歌は)山の心があまり表に出ていないのではないか。

右(歌は)「くるしき山のさかこえて」という表現は凡庸で下品
な様(である)。例えば『古今和歌集』序のように「妻木を背負つ
た山人が、(花の蔭で休むだけでなく)その上花の蔭を離れて他の
場所で見える(ような風体であるのは)、甚だ見苦しゅうございます。
当然負とするのが良い。」

宝治元年『院御歌合』注釈―「五月郭公」題―

位藤邦生 藤川功和

はじめに

「広島大学大学院文学研究科論集」第66巻（平成18年12月）に引き続き、宝治元年（一二四七）『院御歌合』の注釈を試みる。今回は「五月郭公」題十三番を取り上げる。注釈は、広島大学中世文芸研究会における輪読をもとに、位藤邦生と藤川功和が再検討したものである。輪読時の各番担当者と所属を以下に示す。

二十七番―藤川功和、二十八番―濱口好太郎（文学研究科博士課程前期）、二十九番―堤登志江（文学部三年生）、三十番―高田哲治（文学部二年生）、三十一番―流郷織江（文学部四年生）、三十二番―山口正代（文学研究科博士課程後期）、三十三番―新居和美（同）、三十四番―相原宏美（同）、三十五番―中村聡子（文学部四年生）、三十六番―藤川、三十七番―豊田宮子（文学研究科研究生）、三十八番―竹中さやか（文学部四年生）、三十九番―位藤邦生

凡例

- 一、底本は、群書類従本（巻第二百所収）を用いた。
- 一、校合した諸本と略号は、以下の通り。
 - （書）―書陵部蔵本「五〇一・七四」（『新編国歌大観』の底本）
 - （聚）―書陵部蔵歌合類聚本（『大日本史料』第五篇二十四所収）
 - （永）―永青文庫蔵本「二〇七・三六・七」（『細川家永青文庫叢刊』第八巻所収）
 - （内）―内閣文庫蔵本「百三十番歌合（外題）」（二〇一・二四七）
 - （支）―九州大学支子文庫蔵本「九一一・ホ・一」
- 一、注釈は、番全体の本文【校異】を示した後、【他書所伝】【本歌】【語釈】【通釈】をあげた。
- 一、【語釈】の内、各詠作者並びに前号既出の語彙については、紙幅の関係上これを略した。
- 一、表記や送り仮名の異同はこれを略し、見せけちや補入符号によって訂正のある箇所は、訂正後の本文を採用した。
- 一、翻字本文には適宜読点を施し、字体は現行の活字体に改めた。
- 一、本文中、異同の存する箇所には、傍線及びイ、ロ、の如き符号を付し、語釈を施した箇所には、本文右傍に①、②…の通し番号を付した。
- 一、底本で文意不通等が認められる場合、他本の本文に拠り通釈を施した場合がある。その際、本文【校異】【通釈】において他本

に拠った箇所には網掛けを施した。

一、引用本文は、原則として『新編国歌大観』に拠り、その他の引用文献は、適宜底本を示した。

一、引用本文には、適宜、傍線、振り仮名等を付した。

〈二十七番〉

廿七番 五月郭公

左 男

女房

里なれて今そ鳴なる時鳥^ト五月を人はまつへかりけり^ト
右 小宰相

をのか妻いかに契れる郭公五月の空を分てとふらん^ト

左歌里なれて今そなくなるとて、五月を人は

まつへかりけりと侍る、心姿ことに珍しく、ほと

きすの古声もかく侍りけるものを、まことの秀逸

にこそ侍らめ、右歌さしたる難には侍らねと、をの

か妻、あつまやから衣などはなくて、五月の空をわき

てとふらんといへる、ことにより所なく聞え侍れば、

猶^ト以左為勝

【校異】

イ 勝―ナシ(書) ロ ナシ―続後撰、夏(聚)、続後撰(永)

ハリ―む(内)、る(支) ニる―は(書)(永) ホ て―也

(支) への―ナシ(書) トの―に(聚) チ 逸―^ト■(内)

※■は「速」とよめるかり歌―ナシ(聚) 又は―ナシ(支)

ル なく―なれ(書)(聚)(永)(内)(支) ヲ ―ナシ(書)(聚)

【他書所伝】

〈左歌〉

『続後撰和歌集』卷第四・夏歌・二〇〇

十首歌合に、五月郭公といへる心をよませ給うける 太上天皇

さとなれていまぞなくなるほととぎす五月を人はまつべかりけり

『新三十六人撰』三五

(太上天皇御製後嵯峨院)

里なれて今ぞ啼くなるほととぎす五月を人はまつべかりけり

〈右歌〉ナシ

【語釈】

①五月郭公―郭公は五月頃(旧暦四月)渡来、繁殖し、8、9月頃南方に帰る渡り鳥。和歌の世界では、「さまつ山郭公うちはぶき今もなかなむこそこのふるごゑ」(『古今和歌集』卷第三・夏歌・一三七・よみ人しらず)に代表される如く、五月は、それまで山にいた郭公が人里に下り本格的に鳴く時候とされる。

②里なれて―郭公が、深山から人里へと降りて、徐々に人慣れて鳴

くようになる様をいう。「あしひきの山郭公さとなれてたそかれ時になのりすらしも」〔拾遺和歌集〕卷第十六・雑春・一〇七六・大中臣輔親〕等がその例。

③五月を人はまつへかりけり―「こがくれてさ月まつとも郭公はねならはしに枝うつりせよ」〔後撰和歌集〕卷第四・夏・一五九・伊勢〕等の如く郭公が五月を待つ、或いは「宮こ人ねでまつらめや郭公今ぞ山べをなきていづなる」〔拾遺和歌集〕卷第二・夏・一〇二・藤原道綱母)、「さみだれはいこそねられね郭公夜ぶかくなかむこゑをまつとて」〔拾遺和歌集〕卷第二・夏・一一八・よみ人しらず〕等の如く視点人物が郭公(の鳴き声)を待つという詠が古来多くみえる。一方当該歌の如く視点人物が(郭公が盛んに鳴く季節である)五月を待つという先行例としては「郭公卯花かげの忍び音にわれも五月の空ぞまたるる」〔正治後度百首〕夏・郭公・四一六・藤原隆実〔信実〕〕等があげられるがそれほど多くない。

④をのか妻―郭公を擬人化した表現。「たびにしてつまごひすらしほととぎすかむなびやまにさよふけてなく」〔万葉集〕卷第十・夏雑歌・一九四二、「後撰和歌集」〔卷第四・夏・一八七〕は初句「たびねして」等の如く、妻を恋いつつ鳴く郭公を詠む例が古来みえる。

⑤空を分て―「分て」は、空を分けての意ととりわけの意。「わび人のわきてたちよるこの本はたのむかげなくもみぢちりけり」〔古今和歌集〕卷第五・秋歌下・二九二・遍昭)は後者の例歌。

⑥ほととぎすの古声―郭公の鳴き声の慣用表現。「さ月まつ山郭公う

ちはぶき今もなかなむこぞのふるこゑ」〔語釈〕①既出)の如く「去年と同様」、また「ほととぎすなきてよにふるこゑをだにきかぬこそつれなかりけれ」〔斎宮女御集〕九八)等と「以前と変わらぬ声」と詠まれる場合が多い。

⑦をのか妻、あつまやから衣などはなくて―難解。「をのか妻」といえば伝統的には催馬楽「東屋」(それを用いた『源氏物語』東屋卷)や「唐衣」(それを用いた『伊勢物語』第九段「から衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ」)等がなだらかな連想を誘うものであるが、そうした伝統的な修辭が欠けていることを指していると思われる。初句「をのか妻」は既に『万葉集』からみえるが、これを「わが妻」としないので「をのか妻」とした背景には、二十九番以降に頻出する「をのか五月」の典拠となった良経の歌等への連想が働いていようか。

⑧より所なく―ある表現を用いる必然性に乏しいことを指す。当該歌の場合、上の句「をのか妻」と下の句「五月の空を分てとふらん」の結びつけが唐突で、二つの表現を結びつける必然性に乏しいことを難じていると思われる。

【通釈】

二十七番 五月の郭公

左(歌) 勝

女房(後嵯峨院)

山から出てようやく人里に馴れ今まさに鳴いている郭公よ。(郭公の盛りの声を聴く為に)五月を人は待っていた甲斐があったのだな

あ。

右 (歌)

(承明門院) 小宰相

おのが妻にどのようなように約束をしたので、郭公は今五月の空を裂いてわざわざ飛んでいるのであろうかなあ。

〔判詞〕 左歌の「里なれて今そなくなる」といつて、「五月を人はまつへかりけり」とあります、(一首全体の) 心や姿は特に珍しく、郭公の古声も(たしかに) この(左歌の) ようでありますので、まさに本当の秀逸(の歌) でありましょう。右歌は大した難点ではありませんが、「をのか妻」(と詠み、しかし)、「東屋」「唐衣」などは(表現し) なくて、「五月の空をわきてとふらん」と言っているのは、特に表現の必然性に欠けるように思われますので、やはり(この番は) 左歌をもって勝ちとする。

〈二十八番〉

廿八番

左_イ 刪

太政大臣

我^①のみとなくやさ月の時鳥たれもね覚はよそにやは聞

右

俊成卿女

かたらひし宿の軒はの橋にさ月こととふほととぎすかな
我のみとなくやさ月とて、誰もね覚はよそにやは

きくと侍るこそ、老の後はことに夏の夜もわかぬね覚、ことによるしく聞なされ侍れ、かたらひしといひて、さ月こととふと侍るもおなし心にて、聞ふる

されにたれ

【校異】

イ 勝—ナシ (書) □ は—を (書) ハ とて—のとて (聚)

(内) ニ ことに—まことに (書) (永) ホ わかぬ—有ぬ (支)

へ なされ—なれ (内) ト かたらひし—右かたらひし (永)、か

たらへし (支) チ こととふ—斗とふ (永)、ととふ (支) リ

されにたれ—されにたれはまた左かち侍へし (書)、されたれは又左

勝侍へし (永)

【他書所伝】

〔左歌〕 ナシ 〔右歌〕 ナシ

【参考歌】

〔右歌〕

『源氏物語』花散里・一六八・光源氏

橋の香をなつかしみほととぎす花散る里をたづねてぞとふ

【語釈】

① 我のみとなくやさ月の時鳥—類例として「とふ人もなきふるさとのたそかれにわれのみ名のるほととぎすかな」(『待賢門院堀河集』)

一四)、「おのづからとふ人もなきみ山べに我のみなのるほととぎすかな」(『宝治百首』夏十首・関郭公・八八九・西園寺公相)等があげられる。

②かたらひし宿の軒はの橋に—『源氏物語』花散里巻で、光源氏は昔情を交わした中川のあたりの女に「をち返りえぞ忍ばれぬほととぎすほの語らひし宿の垣根に」(一六六)の歌を贈る。当該歌は【参考歌】にあげた光源氏詠とも表現の一致をみせており、おそらく花散里巻を踏まえて、恋の情趣を込めた一首に仕立てたものであろう。

③老の後はことに夏の夜もわかぬね覚—左歌の歌中の「ね覚」を老いの寝覚めと解しての評。時鳥の鳴き声と老いの寝覚の先行例としては、「ききつるやはつねなるらんほととぎすおいはねざめぞうれしかりける」(『後拾遺和歌集』第三・夏・一九六・法橋忠命)、「あけがたにはつねはききつ時鳥まつとしもなき老のねざめに」(『月詣和歌集』巻第七・雑上・七二六・兵衛)等があげられる。なお、為家にも「鳴きふるす涙たづねてほととぎす老のねざめにはつねなくなり」(『為家集』上・夏・四六七)等がみえる。

【通釈】

二十八番

左(歌) 勝

太政大臣(西園寺実氏)

悲しいのは自分だけだと鳴く(泣く)のか、五月の郭公よ、(老いの)寝覚めには、お前の鳴く声を誰が他人事だと聞いていられようぞ。

右(歌)

(以前)語らった宿の軒端に橋(がまた咲いて、この)五月に声をかけて来る郭公であることよ。

〔判詞〕「我のみとなくや五月」と言つて、「誰もね覚めはよそにやはきく」とございますのは、老後は特に夏の短夜もわきまえない寝覚め(という趣向が)、とりわけ優れていると理解されます。「かたらひし」と言つて、「さ月こととふ」とございますのも同様の内容で、ことに新しさはないので又左勝でございます。

〈二十九番〉

廿九番

左

権大納言通忠

立花のにはほふさ月の時鳥いかに忍ふるむかし成らん

右

権大納言実雄

折はへてなけや雲ちの時鳥いまはたをのかさ月きにけり

左右ほととぎすいつかたと聞わかれ侍らねと、いかにしのふるといへるよりは、今はたをのかといへるは、みくにとまり侍るへくや、

【校異】

イ ナシ―続拾、夏(聚) ロ 勝―ナシ(書) ハ 左右―左右
の(書) ニ わかれ―わかす(支) ホ ふる―ふ(聚)
へるは―る(書) ト とまり―とまり(永) チ 侍るへく
や―侍ぬへくや(書)、侍ぬへくや(永)

【他書所伝】

〈左歌〉

『続拾遺和歌集』卷第三・夏歌・一七七

宝治元年十首歌合に、五月郭公 右近大将通忠

たち花のほふ五月の郭公いかにしのぶるむかしなるらん

『秋風抄』上・夏歌・三六

院御百首に、五月郭公

右大将通忠

橘のほふ五月の郭公いかにしのぶるむかしなるらん

『秋風和歌集』卷第三・夏歌上・一七五

十首の歌合せさせたまける時、五月郭公といふことを

右近大将通忠

たちばなのほふ五月のほととぎすいかにしのぶるむかしなるらん

『和漢兼作集』卷第四・夏部上・四四四

五月郭公

右近大将源通忠

たちばなのほふ五月のほととぎすいかにしのぶるむかしなるらん

『題林愚抄』第五・夏部上・二〇七二

続拾

右大将通忠

橘のほふさ月のほととぎすいかにしのぶるむかしなるらん
〈右歌〉

『題林愚抄』第五・夏部上・二〇七四

宝治歌合

実雄卿

をりはへてなげや雲ちの郭公今はたおのが五月きにけり

【語釈】

①立花のほふさ月の時鳥―橘の香と時鳥の取り合わせは、「たちば
なのほへるかかもほととぎすなくよのあめにうつるひぬらむ」(『万
葉集』卷第十七・大伴家持・三九三八)等古くから見いだせる。

②いかに忍ふるむかし成らん―橘と郭公の取り合わせに、著名な「さ
つきまつ花橘のかをかげば昔の人の袖のかぞする」(『古今和歌集』
卷第三・夏歌・一三九・よみ人しらず)を加え、郭公を擬人化して
一首に仕立てたもの。

③折はへて―長く続ける意。「あしひきの山郭公をりはへてたれかま
さるとねをのみぞなく」(『古今和歌集』卷第三・夏歌・一五〇・よ
み人しらず)、「たがみそぎゆふつけ鳥か唐衣たつたの山にをりはへ
てなく」(『古今和歌集』卷第十八・雑歌下・九九五・よみ人しらず)
等が早い例。

④雲ちの時鳥―雲路は「雲の通ひ路」の短縮形と考えられ、雲の立
ちこめた空を飛ぶ郭公の意。先行例として、「里わかず鳴けや雲路の
ほととぎす空ゆく月の跡をたづねて」(『道助法親王家五十首』夏・

三二四・隆昭)等がみえる。

⑤をのかさ月―俊頼の「ほととぎすおのがさ月の空ならば所もわか
ずしたりがほなれ」(『散木奇歌集』第二・夏部・五月・二二二)が
初例。勅撰集では、良経の「ほととぎすいまいく夜をかちぎるらむ
おのが五月のありあけのころ」(『新勅撰和歌集』卷第三・夏歌・一
七六、『正治初度百首』出詠歌)と「けふここに声をばつくせほとと
ぎすおのがさ月ものこりやはある」(『新勅撰和歌集』同・一七七・
祐盛法師、俊頼男)がある。当該「五月郭公」題では、五首に「を
のか五月」が詠み込まれている。なお、良経には他に「ときしあれ
ば花ちるさとののきのあめにおのが五月の鳥のこゑ」(『千五百番
歌合』夏一・三百六十二番左・七二二)、「ほととぎすおのがさ月の
くれしよりかへるくもぢにこゑうらむなり」(『秋篠月清集』西洞隠
士百首・夏廿首・六三六)もあり、本歌合における「をのか五月」
表現の重用と良経の歌との関係は興味深い所である。

【通釈】
二十九番

左(歌)

権大納言(藤原)通忠

橘(の花の香り)が匂ってくる(時期である)五月の郭公よ、(お

前が今頃)どんなに恋い慕っている昔なのだろうか。

右(歌) 勝

権大納言(藤原)実雄

ずつと長く鳴き続けよ、雲の立ちこめた空を飛ぶ郭公、今またお
まえの(天下である)五月がきたぞ。
〔判詞〕左右のほととぎすはどちら(が良いか)と聞いて(すぐに
は)判断できませんが、「いかにしのふる」というよりは、「いまは
たをのか」といつているのは、一段と印象的でしょう。

〈三十番〉

世番

左(判)

権大納言定雅

つれもなき月をまつとて時鳥なくか涙の五月雨の空

右

権大納言公相

今よりはまたてやきかん時鳥鳴ふるしつる五月雨の比
つれもなき月を有明の空にみならひて侍る
にや、五月雨のゆふにまたるゝ月はすくさすや
とそみえ侍る、下句も例のさしてそれとは
おほえ侍らぬか、みたる心ちし侍れとも、かやう
の事はさのみこそ侍れ、今よりはうたかたふへくも
侍らぬにや、いづれもおほつかなき所侍れば、しは

らく可為持敷、

【校異】

イ 持—ナシ(書)、勝(内) □ か—は(書)、や(永)

ハ 涙の—涙(内) ニ つる—たる(支) ホ 比—空(永)

ヘ ナシ—左(書) ト を—ナシ(書)(永) チ みならひて—

みならひ(内) リ 侍るにや—侍るかや(支) ヌ ゆふ—ゆへ

(書)(永)(内)(支) ル またる—侍らは(書)(永)、侍らる、

(内)、侍らる(支) ヲ すくさすや—すくさはや(永) ワ 侍る

—侍か(支) カ は—も(支) ヨ 心ちし—こちして(永)

タ 今よりはうたかふへくも侍らぬにや—いまよりはたかふへくも

侍らぬにや(聚)、いまよりはまたてやきかむと侍になきふるしたる

とてはうたかふへくも侍らぬにや(書)、いまよりはまたてやきかん

と侍になきふるしつるとてはうたかふへくも侍らぬにや(永)

し 為持敷—持敷(内)、■持(支) ※■は判読不能

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①つれもなき月—見えない月を「つれなき」と見立てる。「五月雨の

月はつれなきみ山よりひとりもいづる郭公かな」(『老若五十首歌合』

夏・七十三番左・一四五・藤原定家、『新古今和歌集』卷第三・夏歌

・二三五)等が、五月雨と郭公の組み合わせにおける先行例。

②涙の五月雨の空—雨を涙に見立てる例は多い。「さみだれののきの

しづくはほととぎすなくや五月のなみだなりけり」(『千五百番歌合』

恋一・千二百二十八番左・二二五四・慈円)等は、特に五月雨と涙を

組み合わせた先行例。なお、為家は「いとどしくかわかぬ苔の袂か

なるもなみだのさみだれの比」(『為家集』上・四五一)等と詠ん

でいる。

③鳴ふるしつる五月雨の比—五月雨の時候を郭公の鳴き古す頃とし

たもので、為家に「あやにくにまたれしかどもほととぎすききふる

さるる五月雨の空」(『為家集』上・三一六)、「いたづらにききふり

にけりほととぎすなくや涙のさみだれの空」(『為家集』上・四四五)

等の類例がみえる。なお、当該歌の「ふる」には、「五月雨のふりぬ

るふるもほととぎすあかやそらになほまたるらむ」(『実材母集』・

一〇四)等の如く、「五月雨が」降る」意も響くか。

④つれもなき月を有明の空にみならひて侍るにや—良経の「有明の

つれなく見えし月はいでぬ山ほととぎす待つよながらに」(『新古今

和歌集』卷第三・夏歌・二〇九)を念頭に置いたものか。良経歌は、

「有あけのつれなく見えし別より暁ばかりうき物はなし」(『古今和

歌集』卷第十三・恋歌三・六二五・壬生忠岑)を本歌取りした詠で、

『千五百番歌合』出詠歌(夏一・三百三十二番左・六六二)でもあ

る。これらを踏まえた為家は「つれもなき月」を「有明の月」と結

びつけて解していると思しい。

⑤五月雨のゆふにまたる月はすくさすやとそみえ侍る—難解。「ゆ

ふ」を諸本の「ゆへ」に改めた上で、試みに解せば次のようになろうか。直前の判詞に拠れば「つれもなき月」には「有明の月」の意が響いており、五月雨のせいで一晩中待たれた月は有明の月であっても見過ごさないという風に解される。なお五月雨と月と郭公の組み合わせとしては、「五月雨の月はつれなき山よりひとりもいづる郭公かな」〔語釈〕①既出、「五月雨の雲まの月のはれ行くをしはし待ちける時鳥かな」〔新古今和歌集〕卷第三・夏歌・二三七・二条院讃岐）等がみえる。

⑥今よりはうたかふへくも侍らぬにや―これも難解。書陵部本「いまよりはまたてやきかむと侍になきふるしたるとてはうたかふへくも侍らぬにや」に拠って試みに通釈する。

【通釈】

三十番

左(歌) 持

権大納言(藤原) 定雅

つれない月を待つといつて時鳥は鳴いているのであろうか。郭公が流す涙が降っているかのような五月雨の空(の下)。

右(歌)

権大納言(西園寺) 公相

時鳥が鳴き古す五月雨の頃ともなればこれからは待つこともなく(その声を) 聴こう。

〔判詞〕「つれもなき月」を「有明の空」に見慣れているせいでしようか。五月雨が降るせいで(今か今かと) 待たれる月は見過ごさないという風に解されます。下の句も例によってどの歌が特にそれだ

とは覚えておりませんが、既にどこかで見た心地がいたしますもの、こういったことはそんなものでございませう。「今よりはまたてやきかん」とございますのに(下の句で)「鳴ふるしつる」というのでは(論理上の齟齬を)疑うべくもございませぬ。両歌とも(表現上)はつきりとしないうところがございますので、ひとまずは持とすべきでしょう。

〈三十一番〉

卅一番

左

権大納言公基

人しれすまたれし物を五月雨の空にふりぬる時鳥哉

右

為教朝臣

きかぬまの心つくしの時鳥さ月の空はまたれさりけり

左優に侍るめり、右またれさりけりといへる、
おもひ所なく侍れば、尤可負、

【校異】

イ 勝―ナシ(書) ロ ナシ―続後撰、夏(聚)、続後撰(永)

ハ 右―左(内) ニ れ―袖(内) ※「袖」は「禮」を書き誤ったものか ホ おもひ―おもひ(書)(永) ヘ 可―為(書)(永)

【他書所伝】

〈左歌〉

『続後撰和歌集』卷第四・夏歌・二〇一

権大納言公基

人しれずまたれしものを五月雨のそらにふりぬるほととぎすかな

『題林愚抄』第五・夏部上・二〇六八

(縁後撰)
同

権大納言公基

人しれずまたれしものを五月雨の空にふりぬる郭公かな

〈右歌〉ナシ

【語釈】

①五月雨―書陵部蔵本では「五月雨」を「梅雨」と表記する。

②ふりぬる―五月雨の「降る」と郭公が「鳴き古す」意の掛詞。「五月

月雨のふりぬるこゑもほととぎすあかやそらになほまたるらむ」

『実材母集』一〇四) 等が類例。

③心づくしの時鳥―視点人物が郭公を心待ちにしている様。「待ちし

より心づくしのほととぎすしぼしとどめよもじの関もり」(『月詣和

歌集』第三卷・羈旅部・二四四・賀茂資保)、「今も猶心づくしの郭

公おなじ鳴く音をまたれずもがな」(『洞院撰政治家百首』上・夏・三

九一・少将) 等の先行例がみえる。

④おもひ所なく―書陵部本等には「おもふところなく」とあり、「思

ふところなきにあらざれば、右すこしはまさり侍らむ」(三十八番判

詞)、「おもひ所なきにあらず侍るにや」(七十二番判詞) 等、「おも

ふ所」が当該歌合で肯定的に用いられる例が見い出せる。ここでは
視点人物や判者の感懐の意ではなく、歌う対象への思いやりと解す
る。

【通釈】

三十一番

左(歌) 勝

権大納言(藤原)公基

(卯月には) 人知れず待たれたのに(五月になって) 五月雨が降
る空に鳴き古し(聞き古され) た郭公であるよ。

右(歌)

(藤原) 為教朝臣

(ずつとほととぎすの声を) 聞かない間、心を砕いて待ちに待った
郭公よ、五月の空にあつては(すっかり) 待つ気もなくなつてしま
ったことだよ。

【判詞】左(歌) は優美でございましょう。右(歌) は、「またれさ
りけり」といっているのが、**対象(郭公)への愛情がございません**
ので、当然負けです。

〈三十二番〉

卅二番

左

中納言為経

立^レ帰^ルり今もなかなん時鳥をのかさ月の去年の古声

右刪

信実朝臣

郭公かたまつよりもまたれけりをのかと思ふさ月きぬれば

左立かへりといへるよりふる声まで、珍しき事は

聞え侍らぬにや、右ことなる事は侍らね共、我が

心よりよみ出したる哥とみえ侍れば、右勝と申へし、

【校異】

イ 立—おち(書)(永)、たち(聚)、立(支) 口 勝—ナシ(書)

(内) ハ かた—はた(書) ニ 立—おち(書)(永)(支)

ホ より—よりは(永) ヘ 右—右は(支) ト 侍らね—聞え

侍らね(書)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『題林愚抄』第五・夏部上・二〇七五

(宝徳歌合)

信実朝臣

時鳥かたまつよりもまたれけりおのがと思ふさ月きぬれば

【語釈】

①立帰り—もとあつた状態に戻る、昔の状態に戻る意。『家持集』に

「ほととぎすみやこへゆかばたちかへりいまきぬべしといもにつげ

よく」(夏歌・六六)とあり、この場合、もといた場所に戻る意。当

該歌は時鳥が鳴き始めた頃に戻って、あるいは何度もとに戻って

繰り返し鳴いてほしいというように幅広く解釈できようか。一方、

当該箇所には「をちかへり」という異同がある。「をちかへり」の場

合、時鳥に何度も繰り返し鳴いてほしいという意になる。「をちかへ

る(復返)」には若返るといふ意があるので、結句の「去年の古声」

との対応を考えると、「をちかえり」の方が表現的に妙味があるか。

用例としては「をちかへり」の方が多く「郭公をちかへりなけうな

るこがうちたれがみのさみだれのそら」(『拾遺和歌集』卷第二・夏

・一一六・凡河内躬恒)、「ゆふづく日いればをぐらのやまのはにを

ちかへりなくほととぎすかな」(『江帥集』夏・五三)等散見する。

ここでは「立帰り」で解釈しておく。

②去年の古声—去年と変わらない郭公の鳴き声という慣用表現。『古

今和歌集』の「さ月まつ山郭公うちはぶき今もなかなむこそふる

こゑ」(卷第三・夏歌・一三七・よみ人しらず)が代表的な例であ

るが、当該歌は傍線部で語句の一致がみえる。

③かたまつ—ひたすら待つ意。「うぐひすはいまはなかわとかたまて

ばかすみたなびきつきはへにつつ」(『万葉集』卷第十七・四〇五四)、

「いもにあはんよをかたまつとひさかたのあまのかはらに月はへに

けり」(『家持集』二二一)、「郭公かたまつよひの山の端にさもあら

ぬ月ははやいでにけり」(『正治後度百首』夏・郭公・五一六・源家

長)等が先行例。「かたまつ」は郭公、「またれけり」は視点人物の

行為として二つに分けて解する方向もあるか。

④我か心よりよみ出したる哥—いかにして思ひしらせむ時鳥おい

はつるまであかぬころを」(『今撰和歌集』夏・五七・藤原公重)。

「まちつけてことしもききつほととぎすおいはたのみのなきみなれども」(『頼輔集』二二)等、老境に入りなお郭公の声を待ち遠しいと詠む例がみえる。詠者信実は、宝治元年時点で七十歳を越えており、為家は当該歌に信実自身の心情を読み取った上で判を付したものでか。

【通釈】

三十二番

左(歌)

中納言(藤原)為経

もう一度もとに戻って、今すぐにも鳴いてほしい時鳥よ、お前が(盛んに)鳴いた去年の昔のままの声で(よいから)。

右(歌) 勝

(藤原)信実朝臣

郭公よ、(お前の鳴くのが)ひたすら待つというよりもっと待たれてならないことだ。(お前が)自分の時と思う(はずの)五月が来たので。

【判詞】左(歌)は「立かへり」といつている(ところ)より「古声」まで、珍しいと思うようなことはいません。右(歌)も特別なことはいませんが、自分の心より詠み出している歌と見えますので、右を勝ちと申そう。

〈三十三番〉

卅三番

左(歌)

右衛門督通成

時鳥^①わきていつとはおもはぬにをのかさ月と今はなく也

右

左近中将雅光

さ^②月山月まつよひの村雨^③にふり出てなくほととぎす哉

右^④哥またしとおもへはむらさめの空といへる近き

世の哥より、ほととぎすにはかならず村雨そふへき

事に侍りにたり、五月雨すへき比さへむら雨いかと

と覚え侍るを、左歌わきていつとはおもはぬにと

いへるも、ほととぎすに心いらぬやうに聞えて、

ほいなくや侍らん、持にて侍るへきにや、

【校異】

イ 持―ナシ(書) □ 左近中将―右近中将(聚)(書)(内)(永)、

左近衛中将(支) ハ 右―左(内) ニ 侍り―なり侍(聚)(書)、

成侍り(永)、なり侍る(内)、なり侍り(支) ホ ほととぎす―

時雨(支) へ に―には(永) ト やう―さま(書)(永)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①わきていつとはおもはぬに―わきては、「時しらぬ富士の山へのほととぎすいかで五月をわきて鳴くらむ」〔洞院摂政家百首〕上・夏・三七九・藤原光俊朝臣〕等の如く、時期を識別する意。当該歌の場合、郭公とは対照的に視点人物は五月の到来を特に意識していないとする。

②さ月山―五月の頃の山を指す。五月山と郭公の取り合わせは、「さつきやまうのはなづくよほととぎすきけどもあかずまたなかなかも」〔巻第十・夏雑歌・一九五七〕、「さつきやまはなたちばなにほととぎすこもらふときにあへるきみかも」〔同・一九八四〕等の如く早くは『万葉集』にみえる。

③村雨―にわか雨。郭公と村雨の組み合わせは、勅撰集では「心をぞつくしはてつるほととぎすほのめくよひの村雨のそら」〔千載和歌集〕巻第三・夏歌・一六七・藤原長方〕が早い例。中世には村雨と郭公の取り合わせは多くみえる。

④ふり出て―声を高く張り上げる意。加えて村雨が「降る」意と郭公が山から飛び立つ「出づ」の意が響く。「むめの花ちるてふなへにはるさめのふりいでつつなくうぐひすのこゑ」〔伊勢集〕三三六、

「入日さすゆふくれなゐのこのまよりふりいでつつなく山ほととぎす」〔御裳濯和歌集〕巻第四・夏歌・二二五・大中臣公長〕等が類例。

⑤またしとおもへはむらさめの空といへる近き世の哥―「いかにせ

んこぬよあまたの時鳥またじとおもへばむら雨の空」〔新古今和歌集〕巻第三・夏歌・二二四・藤原家隆〕を指す。

⑥ほととぎすにはかならず村雨そふへき事に侍りにたり―家隆詠は『家隆卿百番自歌合』(十八番右・三六)所収歌で、詞書に「私詠建久五年」とみえる。郭公と村雨の取り合わせ自体は【語釈】③に掲げた千載集所収歌や、「うらめしやまたれたれて時鳥それかあらぬかむらさめの空」〔拾遺愚草〕上・二見浦百首・夏・一二四〕等の先行例があるが、「軒ちかくしばしかたらへ時鳥雲よく夜ひのむらさめの空」〔後鳥羽院御集〕二九)、「あしびきのやまほととぎすひとこゑもそらしづかなるむらさめのくも」〔明日香井和歌集〕下・一六七)等、他の新古今歌人の詠はいずれも家隆詠より後のものである。なお、家隆詠は『自讃歌』にもとられた。

⑦五月雨すへき比さへむら雨いかと覚え侍る―初句に「さ月山」とあるのに村雨と詠みこんだ点を、五月の長雨の時候に村雨はそぐわぬとして難じたもの。夏の村雨の用例には「夏ふかみ庭も葉びろの玉がしはしぐれとならず夜はのむら雨」〔夫木和歌抄〕巻第九・夏部三・三七五〇・後鳥羽院〕等もみえる。

⑧ほととぎすに心いらぬやうに聞えて、ほいなくや侍らん―視点人物が五月の到来を意識しないことが、郭公への無関心に繋がるように聞こえ、題にそぐわないことを咎めたもの。九十二番(逢不遇恋)では、小宰相詠「したの帯のあだにむすびし中なればめぐりあふべき限だになし」について、「下句かぎりだになしとて、恋のこころい

まはおもひすてたるやうにみえ侍る、題の本意侍らねば、尤為負」とする。

【通釈】

三十三番

左(歌) 持

右衛門督(源)通成

郭公の声を聴くのは特にいつがいいとは思っていないのだが、郭公の方は「をのが五月」とばかりに今は鳴いていることだ。

右(歌)

右近中将(源)雅光

五月山で月を待つ宵にあいにく村雨が降り出した、けれど雨の中に飛び出して声を振り立てて鳴いている郭公であるよ。

〔判詞〕右歌は「またしとおもへはむらさめの空」と詠んでいる近い時代の歌から、「ほととぎす」には必ず「村雨」を付け加えることになってしまっているようです。五月雨が降るはずの頃に(五月雨といわずに)村雨(というの)はさあどうであろうかと思われます。(けれど)左歌の「わきていつとおもはぬに」と詠んでいるのも、郭公に十分に心を寄せていないように聞こえますので、甲斐のないことでごさいます。 (どちらも欠点があつて) 持とすべきでしょうか。

〈三十四番〉

卅四番

左¹崩

兵部卿有教

さみたれの空にそあかぬ時鳥卯月の比にまち習ひつゝ

右

弁内侍

まてといふになかすもあらは時鳥^ハなにをさ月とおもひわかまし

左古詞^ハおほく聞えて、よろしきすかたには侍るを、

その心たしかにおもひわかたたく侍るを、左題^ト

五月本意なく侍るにや、又可為持、

【校異】

イ 持—ナシ(書) □ なに—いつ(聚) ハ 左古詞—右ふる

きこと葉(書)(永)、左右詞(聚)(内)(支) ニ おほく—ナシ

(聚) ホ おもひ—ナシ(永) ヘ 侍るを—侍に(書)、侍り(永)

ト 題—題の(書)(永) チ 侍るにや、又可為持—やさみたれう

月もいかゝとみえ侍へしふるくは山みねひる日などをもとかめたる

ことも侍にやなをいつれと申かたし(書)、侍るにや又可持(聚)(支)、

や又五月雨卯月もいかゝと見え侍へしふるくは山みね夜ひるなどを

もとかめたる事も侍にや猶いつれと申かたし(永)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 　〈右歌〉ナシ

【語釈】

①まぢ習ひつゝ―「待つ習わしになる」意。「あぢきなくつらきあらしのこゑもうしなどゆふぐれにまぢならひけん」〔新古今和歌集〕卷第十三・恋歌三・一一九六・藤原定家)は一例。

②まてといふに―直後の詩句と呼応し、「待てと言えばくする(しな)い)のならば」の意で用いられる。「まてといふにちらでしとまる物ならばなにを桜に思ひまさまし」〔古今和歌集〕卷第二・春歌下・七〇・よみ人しらず、『古今和歌六帖』第六・四一九七・素性、『素性集』一〇)が代表的な先行例で、右歌は古今集歌を踏まえたものと思しい。

③古詞おほく聞えて―「古詞」は古歌の詞。右歌と【語釈】②既出の古今集歌が似通っていることを指す。判詞において古詞の多さに触れる先行例として、『三井寺新羅社歌合』九番に「されどふるき詞おほし、初めて勝とも申しがたし、持なるべし」とみえる。俊成は古詞の多用に否定的とも見えるが、同時に「左歌、詞存古風興入幽玄」ともあり、古歌の利用は状況により評価が異なることが伺える。為家は、「よろしき姿」と、その使用に一定の評価を与えつつも、古詞が有効に機能せず、却って歌意が難解になったことを批判している。

④題五月本意なく侍るにや―題の「五月」に対し「五月雨」「卯月」

の両語を用いることの是非をいうか。

⑤本意なく侍るにや、又可為持―書陵部本・永青文庫本には、この前後に大異があり、底本は本文の脱落・改変を経たものと見られる。書陵部本によると、「さみたれう月もいかゝとみえ侍へし」とし、その論拠として「山みね」「ひる日」の例を挙げる。両例はそれぞれ『亭子院歌合』二月(三・四番歌)判詞、『高陽院七番歌合』秋・一番判詞における歌中での同義語使用(「同心病」を難じたもので、『俊頼髓脳』、『和歌童蒙抄』、『袋草紙』をはじめ多くの歌学書も歌病の実例として引いている(但し、歌病としての認定には歌学書によって差異がみえる)。当該判詞においては、文脈からみる限り為家は「五月雨」「卯月」をほぼ同義と捉えており、「五月」の「本意なし」と評したのもこれに関わるものであろうか。

【通釈】

三十四番

左(歌)持

兵部卿(源)有教

五月雨の空の下でもなお聞き飽きることのない時鳥(の声)であるよ、四月のころから(それを)待つのが習慣になってしまっているのだ。

右(歌)

弁内侍

待てといえば鳴かずにいるというのなら、時鳥よ、なにを(もつて)五月の到来と判断すればよいのだろうか。

【判詞】右(歌)は古歌の詞が多くあって、姿は悪くないのですが、

歌意ははっきりと理解し難く存じますものの、左(歌)は題の「五月」の本意から外れておりますでしょうか。又持とすべきである。

〈三十五番〉

卅五番

左 荆

右 近中将師繼

徒に初音程ふる時鳥まつとせしまに五月きにけり

右

雅忠朝臣

↑ 時鳥忍びし程の一声を今はさ月になきやふるさん

左右共に心詞させる無得失侍れば、為持、

【校異】

イ 持—ナシ(書) □ 右近中将師繼—右近—○師繼師つく古本

(永)、右近衛中将師繼(支) ハ ナシ—続古、夏、(聚)

二 に—と(書)(永) ホ さん—らん(永) ヘ ナシ—猶(永)

【他書所伝】

〈左歌〉

『題林愚抄』第五・夏部上・二〇七六

(宝治歌合) 同

師繼卿

いたづらにはつね程ふる時鳥待つとせしまに五月きにけり

〈右歌〉

『続古今和歌集』卷第三・夏歌・二二七

(宝治元年十首の歌合に、五月郭公)

中宮大夫雅忠

ほととぎすしのびしころのひとこゑをいまはさつきとなきやふりな

『題林愚抄』第五・夏部上・二〇六九

続古

雅忠

時鳥忍びしころの—こゑを今はさつきとなきやふりなん

【語釈】

①初音程ふる—「初音程ふる」は初音を聞いて以来二度と聞かないまま時間が経ったととるか、初音を聞こうとして聞かぬまま時間が経ったというのか、俄には判断し難い。ここでは一応前者で解しておく。

②まつとせしまに—時鳥の鳴く声を待っている間にの意。「夜深待郭公」ほととぎすまつとせしまにふしまちの月こそたかくそらになりぬれ」(『在良集』・五)、「郭公まつとせしまに我が宿の池の藤浪うつろひにけり」(『老若五十首歌合』夏・五十九番左・一一七・藤原家隆)等が先行例。

【通釈】

三十五番

左(歌) 持

右近中将(藤原) 師繼

初音を聞いた後徒に時間ばかりが過ぎてしまった郭公、(次の声を)

待っている間にもう五月にもなってしまったことだよ。

右(歌)

(源) 雅忠朝臣

郭公がまだ忍び音に鳴いていた頃の一声を、今は五月になって鳴き古してしまうことだろうよ。

〔判詞〕左右共に意味するところや表現にこれといった長所も短所もありませんので、持とする。

〈三十六番〉

卅六番

左

沙弥蓮性

時鳥いかてあやめに引そへてななかなくねをも玉にぬかまし

右刪

下野

五月雨のふりにし友とかたらへばなれもこととふ時鳥かな

左トさまよろしく侍るを、下句を讀上侍らぬほど、

いかに侍るへきにかと聞ゆる所にや侍らん、右ふ

りにし友とかたらへばなれもこととふといへる、心か

よへるところさるかたも侍りなんとて、さのみはいかこと

おもふ給へなから、又勝トの字をつけ侍りぬ、

【校異】

イ なかなく―なかるゝ(聚)(支) □ 勝―ナシ(書)

ハ 左さま―左うたさま(書)(聚)(永)、左右様(内)(支)

ニ ほと―ほとは(永) ホ にや―ナシ(書)、や(永) へと

―なと(書)(永) ト おもふ給へ―思給(書)、思ひ(永)、おも

ふたとへ(内)、思ふたま(支) チ 又―右(支)

【他書所伝】

〈左歌〉

『題林愚抄』第五・夏部上・二〇七七

(注) 同

蓮性

ほととぎすいかであやめに引きそへてななかれしねをも玉にぬかまし

〈右歌〉

『題林愚抄』第五・夏部上・二〇七八

(注) 同

下野

五月雨のふりにし友とかたらへばなれもこととふほととぎすかな

【語釈】

①あやめに引そへて―菖蒲は根や葉等に芳香があることから邪気を払うものとされ、端午の節句には葉を屋根に葺いたり、根を贈り物とした。郭公の音を添えるという意と共に、「引く」に菖蒲の根を引く意が響く。

②なかなくねをも玉にぬかまし―玉は端午の節句に邪気を払う為に飾る薬玉のことで、沈香等の薬を玉にして錦の袋に入れて菖蒲等で

飾り付け五色の糸を長く垂らした。「ね」は、郭公の音と菖蒲の根との懸詞。郭公の声を薬玉に飾ろうとする趣向は、「ほととぎすいたくななきそながこゑをさつきのためにあへぬくまでに」（巻第八・夏雑歌・一四六九・藤原夫人）、「ほととぎすまでどきなかずあやめぐさたまにぬくひをいまだとほみか」（巻第八・夏雑歌・一四九四・大伴家持）等、既に『万葉集』にみえる。

③五月雨のふりにし友―「ふり」は、「（五月雨が）降る」と「旧友」の懸詞。当該歌合の判を不服として奏上された『蓮性陳状』は、『洞院撰政家百首』出詠歌「さみだれのふることもをかり出でてのどかなる夜の友ぞうれしき」（上・夏・四七四・源家長）との類似を指摘する。また「ふりにし」と過去の時制となつている点から「六月の郭公ともや聞え候ぬらん」と指摘する等、右歌の種々の難点を述べている。

④下句を讀上侍らぬほと、いかに侍るへきにかと聞ゆる―上の句の真意が下の句を詠み上げないと理解されないことを難じたもの。これに対して、『蓮性陳状』では、そのような仕立ての歌は古来より多くあるとし、当該歌合出詠歌「わけしよの契も消えてかなしきはとへどこたへぬみち芝の露」（九十三番右・俊成卿女）を引き合いに出す。

⑤心かよへるところさるかたも侍りなん―「ふりにし友とかたらへは」と「なれもこととふ（時鳥）」は、どちらも心が通じ合っている者同士の意で、こういうこともきつとあるだろうの意。

⑥さのみはいかゝと―蓮性と下野の番が、「早春霞」「山花」と二題続けて下野の勝ちとなっていることを指す。

【通釈】

三十六番

左（歌）

沙弥蓮性

時鳥よ、どうにかして菖蒲（の根）を引くのに加えて、お前の鳴く音までも（端午の節句の）薬玉に通したいものだ。

右（歌） 勝

下野

五月雨が降った日に訪ねてきた旧友と語らっていると、お前も私に声をかけてきたんだね、時鳥よ

〔判詞〕左（歌）は一首の趣はよいのですが、下の句を讀み上げません内は、どんな風であろうかと思われる所がございましょう。右（歌）は「ふりにし友とかたらへはなれもこととふ」と言うのは、（どちらも）心が通じ合っている者同士でこういうこともきつとございましょうということ、そればかりではどうであろうかと存じます。又（下野詠に）勝の字を付けました。

〈三十七番〉

卅七番

左、刪

為氏朝臣

あやにくに初音またれし時鳥さ月はをのか時となくなり

右 少将内侍

なげやなけ初音おしみし時鳥今こそ夏は五月なりけれ

兩首いつれとわきかたく侍るを、立帰りよくみ

侍れは、なげやなけといへるよりはをのか

時となくほととぎすは聞所侍るへきにや、題の心

はかりに、かちと申侍るなり、

【校異】

イ 勝—ナシ(書) ロ ナシ—新拾、夏(聚) ハ なり—なる

(聚)(内)(支) ニ なげや—なくや(内) ホ けれ—けり(内)

へ いつれと—いつれも(聚)(内) ト よく—ナシ(書)(永)

チ 侍れ—侍る(支) リ なげや—なくや(内) ヌ は—ナシ

(支) ル にや—や(支) ヲ 題の—題(書)

【他書所伝】

〈左歌〉

『新拾遺和歌集』卷第三・夏歌・二七二・藤原為氏

宝治元年十首歌合に、五月時鳥 前大納言為氏

あやにくに初音またれし時鳥さ月はおのが時となくなり

『題林愚抄』第五・夏部上・二〇七三

新拾 宝治三十首歌合 (右大将通忠)

あやにくにはつねまたれし時鳥さ月はおのが時となくなり

〈右歌〉ナシ

【語釈】

①あやにくに—原義は、ああ憎いと思われるさま。ここでは、無性に郭公の初音が待たれることをいう。為家に「あやにくにまたれしかどもほととぎすききふるさるる五月雨の空」(『為家集』上・夏・寛元元年独吟十首・三二六)という先行例がみえる。

②なげやなけ—郭公に盛んに鳴くよう呼びかけたもの。「なげやなけたか田の山の郭公このさみだれにこゑなをしみそ」(『拾遺和歌集』卷第二・夏・一一七・よみ人しらず)、「なげやなけ山ほととぎすはるくれてものさびしかるきかくれに」(『長能集』六九)、「なげやなけならのをがはのほととぎすおのが五月はこゑもをします」(『重家集』一一四)等が先行例。

③聞所—「なげやなけ」「をのか時となく」という兩首の表現に事寄せて歌の優劣を「聞所侍る」と表現したもの。当該歌合九十二番判詞でも、左歌の小宰相詠「あかしかねまたる物と成りにけりさしもいとひし鳥の八こゑも」について、「左さしもいとひし鳥の八こゑ、またるる物になれるところ、ききどころおほくゆるふかくおもひいれられて」と評価する。

【通釈】

三十七番

左(歌) 勝

(藤原) 為氏朝臣

無性に初音が待ち遠しかった時鳥、五月ともなると自分の季節であるとはかりに鳴いているのが聞こえるよ。

右(歌)

少将内侍

鳴けや鳴け、初音をおしんでいた時鳥よ、今まさに夏の中でも(郭公が盛んに鳴く)五月になったのだから。

〔判詞〕両首のどちらが(すぐれているか)と判定しにくいことでございますが、繰り返しよく読んでみますと、(郭公に)「なげやなげ」と言うよりは、「をのか時」と鳴く郭公(の方)が聞き所があると申すべきでしょう。題意(をよく汲んでいる点)くらいで、(左歌を)勝と申します。

〈三十八番〉

卅八番

左

經朝朝臣

たか^①為に里はあまたの時鳥をのかさ月と猶忍ふらん

右^②

沙弥禅信

名にしおふやみはあやなし時鳥をのか五月は声もかくれす

左の里はあまたこそ何のよせとも聞え侍らね、

右梅の花色みえぬ事をおもひ出て、五月やみに

よせて名にしおふといへる、思ふ所なきに

あらされは、右少まさり侍らむ、

【校異】

イと一を(書)(永) ロ 勝一ナシ(書)(内) ハ の一ナシ

(永) ニ よせよう(書)(永)、余所(内)(支) ホ 右一ナ

シ(内) へ 梅の花色一梅のはな色こそ(聚)、梅花色(永)(内)、

梅花の色(支) ト おふ一ほふ(書) チ 思ふ一ナシ(内)

リ あらされは一あらす侍れは(支) ヌ 少一すこしは(書)(聚)

(永)(内) ル 侍らむ一侍らん(永)、侍へらん(内)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〉右歌〉ナシ

【語釈】

①里はあまたの時鳥―「ほととぎすながくさとのあまたあれば猶うとまれぬ思ふものから」(『古今和歌集』卷第三・夏歌・一四七・よみ人しらず、『伊勢物語』第四十三段)の如く、鳴き声を待ち遠しく思う視点人物とは対照的に時鳥には鳴く人里が数多あることを言う。

②をのかさ月と―書陵部本等の「をのかさ月を」だと(おのが五月にもかかわらず)という意となり一首全体の意味の流れも自然である。底本の「をのかさ月と」では書陵部本等のような意味ではとれないので「をのかさ月を」で解した。

③名にしおふやみはあやなし―『古今和歌集』所収「春の夜のやみ

はあやなし梅花色こそ見えねかやはかくるる」(巻第一・春歌上・四一・凡河内躬恒)を踏まえた表現。

④何のよせ—何の理由もの意。「たか為に」「をのかさ月と猶忍らん」という前後の表現の中で、敢えて「里はあまたの」とする必然性に欠けることを指すか。

⑤梅の花色みえぬ事をおもひ出て—【語釈】③既出古今集歌を念頭に置いた評。

⑥思ふ所なきにあらされは—難解。歌の情趣が深いことをいうか。或いは詠者の感懐が託されていることを指摘するか。ここでは仮に前者で解しておく。

【通釈】

三十八番

左(歌)

(藤原) 経朝朝臣

尋ねていく里はたくさんある郭公なのに、一体誰の為に己の五月であるというのに、依然として(声を)忍んでいるのであろうか。

右(歌) 勝

沙弥禅信

(古来) 著名な関は(五月にあつては全く)訳が分からないことだ、郭公は己が五月ともなると五月關の中でも声は隠れないから。

【判詞】左の「里はあまた」というのこそどうしてそれを持ち出すのか判りません。右は(古歌の)梅の花の色の見えないことを思い出して、五月關にことよせて「名にしおふ」といっている、風情の感じられる点がなくもないので、右が少し勝っているでしょう。

〈三十九番〉

卅九番

左(歌)

越前

庭にちる花橘の五月雨に声はしほれぬほととぎす哉

右

前権大納言為家

身を歎く涙は時もわかれぬに五月ときなく時鳥かな

声はしほれぬといへる心、聞ふるしたることに

侍れ共、さ月ときなくほととぎす、題のころを

もつて下句に取あつめて、いふかひなく侍るうへに、

身をなけくといへる、まつうけられす侍れは、

左かちとこそ申侍らめ、

【校異】

イ 勝—ナシ(書) 口 前権大納言為家—権大納言為家(聚)(内)

(支)、為家(永) ハ 身を歎く—身はなけて(書)、身をなけて

(内) ニ ときなく—時なく(支) ホ 声は—左声は(書)(内)

へ 心—ナシ(書) ト さ月—右五月(書)(永) チ ときなく

—時なく(支) リ 題のころ—題心(書)(内)、題(支)

又をもつて—ナシ(書)(聚)(永)(内)(支) ル 下句に—しも

の句に(書) ヲ なけく—なけてと(書)(内)、なけて(支)

ワ 左―左を（支） カ こそ―こそは（書） ヨ らめ―へらめ

（永）

※ハについて、書陵部本には「身はなけて」とあるが、書陵部本を底本とする「新編国歌大観」は「身をなけて」とする。

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『題林愚抄』第五・夏部上・二〇七九

同（五拾歌）

為家卿

身をなげくなみだは時も別れぬにさ月ときなく時鳥かな

『為家集』夏・五月郭公・三四八

宝治元年仙洞十首歌合

身をなげく涙は時もわかれぬにさ月にきなくほととぎすかな

【語釈】

①声はしほれぬ―「はるさめはふりしむれどもうぐひすのこゑはし

ほれぬ物にぞありける」（『金葉和歌集』二度本・巻第一・春部・一六

・源俊頼朝臣）が先行例としてみえ、当該歌はこれを踏まえていよ

う。新大系『金葉和歌集』脚注には「○しほれぬ 春雨で湿った声

が予想されるが、そうはならず透き通るような美しい声」とある。

②身を歎く―「身を歎く涙やたえずしぐるらんわきて色こきやどの

紅葉葉」（『百首歌合』二百六十八番右・五三六・藤原伊平）等の例

がある。一方、「身をなけて」については、「おほみ川となせのたきに身をなけてはやくと人にいはせてしかな」（『千載和歌集』巻第十七・雑歌中・一一四三・空人）、「みをなけてなみだやつゆにまがふらんあれのみまさるなでしこのはな」（『江帥集』四一四）等の例があるが、当該歌には不適切な表現であろう。

③わかれぬに―「わかる」は、判別する、区別する意。用例として「いづれともはなのほひはわかれぬになほしもつけのなつかしきかな」（『皇后宮歌合』一七）、「いとだに憂き身は思ひわかれぬに見しに変わぬ春の明ぼの」（『夜の寝覚』巻四・四九・宰相の上）等があげられる。

④うけられす―「うく」はそれでよいと判断し容認する意。当該歌合百四番でも為家は自詠「我ばかり心ながさをかたるともみし夢とやおもひあはせん」について「右の夢がたり、うけられず侍れば、また負け侍るべし」と判を付している。

【通釈】

三十九番

左（歌） 勝

越前

庭に花橘の花を散らせる五月雨にも、声は湿っぽくならない（で、よい声を聞かせる）時鳥だよ。

右（歌）

前権大納言（藤原）為家

身の上を歎く涙は（いつものこと）どの時という区別はつかないが、（おのが）五月と（ばかりに）来鳴く時鳥よ。

〔判詞〕「声はしほれぬ」という趣向は、聞き古したことでございませが、「さ月ときなくほとときす」は、題意を（皆）下句に取り集めていて、どうもつまらないことでございます上に、「身をなげく」と言うのも、（歌合の場の歌としては）はなっから受け入れ難うございますので、右を勝とこそ言うべきでございましょう。

宝治元年『院御歌合』注釈―「初秋風」題―

位藤 邦生 森下 要治
田野 慎二 山崎 真克
赤迫 照子 藤川 功和

はじめに

『表現技術研究』第3号（平成19年3月）に引き続き、宝治元年（一二四七）『院御歌合』の注釈を試みる。今回は「初秋風」題十三番を取り上げる。各番担当者
と所屬を以下に示す。

四十番―藤川功和、四十一番―赤迫照子（広島大学図書館）、四十二番―赤迫、四十三番―山崎真克（松江工業高等専門学校）、四十四番―藤川、四十五番―田野慎二（広島国際大学）、四十六番―森下要治（広島文教女子大学）、四十七番―藤川、四十八番―山崎、四十九番―藤川、五十番―赤迫、五十一番―田野、五十二番―位藤邦生（長崎大学）

凡例

- 一、底本は、永青文庫蔵本（二〇七・三六七）（細川家永青文庫叢刊第八卷所収）を用いた。
- 一、校合した諸本と略号は、以下の通り。
 - （書）―書陵部蔵本（五〇一・七四）（『新編国歌大観』の底本）
 - （内）―内閣文庫蔵本「百三十番歌合（外題）」（二〇一・二四七）

（支）―九州大学支子文庫蔵本（九一一・ホ・一）

（聚）―書陵部蔵歌合類聚本（『大日本史料』第五篇二十四所収）

（群）―群書類従本（巻第二百所収）

- 一、注釈は、番全体の本文【校異】を示した後【他書所伝】【本歌（参考歌）】【語釈】【通釈】をあげた。

一、【語釈】の内、各詠作者並びに前号までに既出の語彙については、紙幅の関係上これを略した。

一、表記や送り仮名の異同はこれを略し、見せけちや補入符号によって訂正のある箇所は、訂正後の本文を採用した。

一、翻字本文には適宜読点を施し、字体は現行の活字体に改めた。

一、本文中、異同の存する箇所には、傍線及びイ、ロ、の如き符号を付し、語釈を施した箇所には、本文右傍に①、②…の通し番号を付した。

一、底本で文意不通等が認められる場合、他本の本文に拠り通釈を施した場合がある。その際、本文【校異】【通釈】において他本に拠った箇所に網掛けを施した。

一、引用本文は、原則として『新編国歌大観』に拠り、その他の引用文献は、適宜底本を示した。なお、引用本文には、適宜、傍線、振り仮名等を付した。

一、『万葉集』については、本文、歌番号ともに塙書房刊『万葉集訳文篇』を用いた。

〔四十番〕

四十番 初秋風

左 勝^① 女房

秋といへばあへす色つく木葉せきけさこそ風の音ねも身にしめ

右 小宰相

荻の葉あしに声こゑたてねとも吹風の身にしむ色いろに秋あきせしらる、

左あへす色つく木葉かなとをきて、けさこそ

風のをとほ身にしめと侍、事はりかなひて姿

詞ことばごとによろしく見え侍に、右吹風の身に

しむ色いろに秋あきせしらる、といひて、荻の葉

に声こゑたてねともと侍こそ、荻のは秋風あきかぜしら

ぬものに成侍らん、くちをし侍れ、猶なほ以左ひだり為勝、

〔校異〕

イ 勝―ナシ(書) 口 も―は(内)(支)(聚)(群) ハ 声―音(聚)

ニ けさ―今(内)(支) ホ ことに―ナシ(内)(支)(聚)(群) ヘ 吹

―ふかく(書) ト 風の―風(内)(支)(聚) チ には(書) リ 声

―音(支) ヌ 秋―秋の(支)

〔他書所伝〕

〔左歌〕

〔題林愚抄〕秋部一・初秋風・二九五八・「宝治歌合」

秋といへばあへす色づく木のはかなけさこそ風の音は身にしめ

〔右歌〕ナシ

〔語釈〕

①初秋風―立秋間もない頃に吹く風を指す。早くは「嘉言集」に「はつあきかぜ」として「ありしよりかはりどころもなければ秋とおほゆる風の音かな」(七〇)とみえ、近い時代には、建仁三年七月十五日「八幡若宮撰歌合」や建暦二年「松

尾社歌合」にも、歌題として確認される。本歌合の他の歌題「早春霞」「海辺月」「野外雪」「旅宿風」「杜頭祝」を勘案すると、「初秋の風」と読むものと思し。

②あへす色つく―「あへす」はこらえきれなくての意。「秋されば置く露霜にあへずして都の山は色付きぬらむ」(『万葉集』巻第十五・三六九九・詞書省略)、「千はやぶる神のいがきにはふくずも秋にはあへす色づきにけり」(『古今和歌六帖』草・葛・三八八・紀貫之)、「我が袖は四方の木葉のうへよりも秋にはあへす色かはりけり」(『壬二集』洞院撰政家百首・初秋・一四六七)などが先行例。なお、『宝治百首』に「秋にあへずまつ色かはる木の葉かな時雨もまだき神なびの杜」(秋廿首・杜紅葉・一八九一・藤原為経)と近似した表現がみえる。

③風の音も身にしめ―「しめ」(染め)は上の句「色つく」に対応する表現。本来色がなく目に見えない「風の音」が秋の到来とともに身に染みるように感じられるとする。「心にはいつも秋なるねざめかな身にしむ風のいくよともなく」(『新古今和歌集』恋歌三・二二〇六・「題しらず」・よみ人しらず)、「おとづれて身にしむ風かぜのふきしよりむすばぬそでにをぎのうはかせ」(『千五百番歌合』秋・五百七十五番右・一一四九・藤原雅経)など、多くの例がある。「吹きくれば身にもしみける秋風を色なき物と思ひけるかな」(『古今和歌六帖』歳時部・天・秋のかぜ・四二二・紀友則)あたりが淵源であろう。当該歌の如く、風の音により身にしむとする先例には、「をぎのはをなびかすかぜのおときけばあはれみにしむあきのゆふぐれ」(『相模集』秋・五四八)、「月はよしはげしき風のおとさへぞみにしむばかり秋はかなしき」(『後拾遺和歌集』秋下・三三三九・詞書省略・斎院中務)などがある。

④荻の葉―荻の葉音は、秋の到来を告げるものとして多く詠み込まれる。「葦辺なる荻の葉さやぎ秋風の吹き来るなへに雁鳴き渡る」(『万葉集』巻第十・秋雑歌・二二三四・雁を詠む)、「をぎの葉のそよぐ音こそ秋風の人にしらるる始なりけれ」(『貫之集』一〇〇・「七月」)は一例。

⑤事はりかなひて―一首に詠み込まれている内容が理屈として通っていることを指す。和歌を評価する上での重要な評価基準の一つで、例えば当該歌合出詠歌「山川下水のしたにのみ音こそたてね年はへにけり」(九十番左・藤原経朝)につい

て、為家は「左山川の下ゆくとはいかに侍にか、山たかみなとはき、なれて侍り、川水下行は、ことほりもかなはずや」と指摘する。

⑥ 萩のは秋風しらぬものに成侍らん—上の句で「萩の葉に声たてねども」とした
場合、萩の葉に風が吹いていないことになり、下の句「吹風の身にしむ色」との
間で論理的矛盾が生じることを難した。「物ごとにあきのけしきはしるけれど
まづ身にしむは萩のうは風」(『千載和歌集』秋歌上・二三三三・「郁芳門院の前裁合
に萩をよめる」・源行宗)、「目に見えて身にしむ秋やたちぬらんきくに色ある萩の
うは風」(『拾玉集』詠百首和歌・秋二十首・三六〇八)などが萩を吹き抜ける風
によって秋の到来を感じるとした作例。

【通釈】

四十番 初秋の風

左(歌) 勝

女房(後嵯峨院)

秋(が来た)というだけでこらえきれなくて色づく木の葉であることよ。今朝
はまさに風の音も(萩を告げるものとして)身に染みて感じられるよ。

右(歌)

小宰相

萩の葉に葉音を立てないけれども吹く風が身に染む気配に秋(の到来)が知ら
れる。

〔判詞〕左(の)「あへす色つく木葉哉」と置いて、「けさこそ風の音は身にしめ
とあります(のは)、道理が叶って(一首の)姿詞特によくみえますのに、
右(の)「吹風の身にしむ色に秋そしらるゝ」と言って、「萩の葉に声たてねども
とありますのは、萩の葉は秋風(の到来)を知らないものとなりますようなのは、
感心しません、やはり左を勝とする。

〈四十一番〉

四十一番

左

太政大臣

袖の上に老の涙のかゝれるを秋きにけりと風や知らん

右 勝

俊成卿女

秋としもなど萩のはのむすひけん夕の風に露の契を
うちまかせては、秋はきにけりと、風をき、てそ
老の涙もこほれぬへく侍を、涙のかゝれるを見
て風の秋をしれる心めつらしく侍にや、秋とし
もなど萩のはのとて、夕の風に露の契を
むすひけんといへるも、女の哥とおほえて、いふに
侍れば、勝をゆるさるへくや、

【校異】

イ きにーに(支) □ 知吹(支) ハ 勝ナシ(書) ニ のーに(聚)
ホ けんーせん(内) ヘ 秋はー秋(書)(内)(支)(聚)(群) ト そー
こそ(内)(支)(聚)(群) チ か、れるをーか、れる(内)(支) リ し
れるーしる(内)(聚) ヌ 秋ー右秋(内)(支)(聚)(群) ル 萩のはの
ー萩のは(内)(支)(聚)(群) ヲ ゆるさるへくやーゆるさる、なり(内)(支)
(聚)(群)

【他書所伝】

〔左歌〕ナシ

〔右歌〕

〔題林愚抄〕秋部一・初秋風・二九五九・「同(宝治歌合)」

秋としもなど萩のはに結びけん夕の風につゆのちぎりを

【語釈】

① 風や知らん—風を擬人化する。涙が袖の上にかかったのを露が置いたと勘違いし、風が秋の到来を知るの意。類例に「そでのうへのつゆはなみだのおくものをしりがほにふく野辺の秋風」(『御裳濯和歌集』秋上・三七六・「題不知」・寂延)がある。

② 秋としも—「しも」は強意。「など」けん」に懸かり、「なぜ他の季節ではなく、とりわけて秋に…するの」と強調する。「秋としも」を初句とする先行例に

は「秋としもゆきあふことは七夕のながきよとてや契りそめけむ」(『師光集』七夕・三一)、「秋としもあはれをなにかおもひけんくれ行く空のくせにぞありける」(『千五百番歌合』千三百八十四番左・雑一・二七六八・藤原公繼)がある。

③ 露の契を―萩の葉と夕べの風のはかない契りをいう。萩と秋風の「契り」を詠んだ先行例には「をぎの葉もちぎりありてや秋風のおとづれそむるつまとなりけむ」(『新古今和歌集』秋歌上・三〇五・崇徳院に百首歌たてまつりける時・藤原俊成)、「秋風よなど萩にしも契りけむ萩をみなへしなびかずやはあらぬ」(『拾玉集』詠百首和歌・草花・三六九七)がある。当該歌は萩と秋風の契りを萩に結ぶ「露」によそえ、そのはかなさを表現する。なお、『俊成卿女集』には当該歌に近似した「萩の葉にむすびやおきし風の音身にしむ秋の露の契を」(詠百首和歌・初秋・一〇八)等、「露の契り」を詠んだ歌が四例もみられる(二〇八・二四〇・二五三・二五七。ただし、一五七は諸本との校合によって「夢の契り」と改められる)。

④ めつらしく侍にや―秋の到来を知る主体を老人ではなく、風とする趣向を「めづらし」と評価する。なお、『為家集』には「初秋風」の題で「ならひこし秋のはじめも老いらくの身にしみまざる風の音かな」(秋・四七二)のほか、「秋風」題「身にしめし秋にや老のそひぬらん嵐の山の風のさむけさ」(秋・五四八)、「閑居秋風」題「人めみぬ老のすみかの松かげにおとづれとては秋風ぞ吹く」(秋・五五〇)のように、「秋風」と「老い」を取り合わせた歌がみえる。

⑤ 女の哥とおほえて、いふに侍れは―当該歌合における「女の哥」の例はこの一例のみ。右歌の女歌らしい優美さを評価する。

⑥ ゆるさるへくや―優劣の最終判定にあたって諸方に配慮した言い方。なお、当該歌合において「ゆるす」という表現で判じた例は他に七十九番、女房(後嵯峨院)と小宰相の番において「持の字をゆるさるへきにや侍らん」がある。

【通釈】

四十一番

左(歌) 太政大臣(西園寺実氏)
袖の上に老いを嘆く涙がかかっているのを(露と)見て、秋が来たのだと風は思っ

ていることだろう。

右(歌) 勝

俊成卿女

どうしてとりわけて秋に、萩の葉は夕べの風と契りを結んだりしたのか。露のようにはかない契りであるというのに。

〔判詞〕よくありますのは、「秋が来たのだ」と風を聞いて(はじめて)老いの涙もこぼれるはずのものです(この歌では)涙が(袖に)かかっているのを見て風が秋の到来を知るとい趣向は珍しいのではないのでしょうか。「秋としもなど萩の葉」といい、「夕の風に露の契を」「むすびけん」といつているのも、女の歌と感じられて、優美でございますので、(右歌の方に)勝ちが許されるでしょうか。

〈四十二番〉

四十二番

左

同上 通忠

岡のへやいづともわかぬ松風の身にしむ程に秋はきにけり

右 勝

同 實雄

君かへん千とせの秋の初とてしらする風も松にふく也

左右おなし松風の秋のすかた、いづれと色わきかた

く侍るを、右祝言をおもへるうへに、下句ことに

よろしく侍にや、又以右為勝、

【校異】

イ 同上―権大納言(書)(内)(支)(聚)(群) 口 岡のへや―岡解のへや(聚)

ハ 松風の―松風の(書)(内)(支)(聚)(群) 二 勝―ナシ(書)(内)

ホ 同―権大納言(書)(内)(支)(聚)(群) へ へん―こん(内)

ト 秋のすかた―すかた(書)、秋すかた(内)(支)、秋すかたは(群)

チ 色わきかた―わけかた(内) リ 右祝言を―右祝言(書)、祝言を

(内)、又 ことに―ナシ(内)(支)(聚)(群)

【他所書伝】

〈左歌〉

【統拾遺和歌集】秋歌上・二二二

宝治元年十首歌合に、初秋風

右近大将通忠

岡のべやいつともわかぬ松かぜの身にしむほどに秋はきにけり

【題林愚抄】秋部一・初秋風・二九四四

統拾

右大将通忠

をかのべやいつともわかぬ松風の身にしむ程に秋はきにけり

〈右歌〉

【題林愚抄】秋部一・初秋風・二九六〇・同(宝治歌合)「

君がへん千年の秋のはじめとてしらする風も松にふくなり

【語釈】

①同上―官職は前掲と同じという意であろう。当該箇所のみ「同上」で、他は「同」とある。

②岡のへや―初句切れ。「や」は詠嘆。岡の麓、岡の辺りの意。「をかの辺やなびくかたののしのすきはむけのつゆもときをまちけり」(「千五百番歌合」秋二・六百十九番右・一二三七・源家長)、「岡のべや日影うつろふ玉ざさの葉分にくる霜ぞつれなき」(「寂身法師集」詠四十八首和歌(宝治二年七月日或所勸進)・霜五八八)等の例がある。

③いつともわかぬ松風の―季節毎に色を変えることのない松に吹く風の意。松は落葉することなく一年中緑であることから、長寿や永遠の繁栄を祝うものとされる。和歌文学大系『統拾遺和歌集』は「ゆふづく夜さすやをかべの松のはのいつともわかぬこひもするかな」(「古今和歌集」恋歌一・四九〇・「題しらす」・よみ人しらす)を本歌と指摘する。

④君かへん千とせの秋の初―あなたにとつてこれから幾度もめぐるのである秋の中でも最初の秋の、その初めの意。当該歌合では「君かため猶よろつ代の春の色にかすみそめたる明ほの空」(二番右・早春霞・四・俊成卿女)、「君か代のはしめの春ののとけさを空もしりてや霞たつらん」(九番左・早春霞・一七・藤原師継)

等、後嵯峨院の御代を言祝ぐ歌が見られる。また、「千とせの秋の初」の先行例に

は「みづのうへにかべるつきのかげみればちとせのあきのはじめなりけり」(「三条左大臣殿前歌合」七〇・橘資成)、「いつよりも月のどかにみゆるかなちとせのあきのはじめとおもへば」(「在良集」月契千秋・一三三)、「ゆふかくるただすのもりにみそぎしてちとせの秋のはじめをぞ待つ」(「為氏集」雑・ただすの杜夏祓正嘉元蓮生八十賀月次屏風歌・一三八九)等がある。

⑤しらする風―千年の秋の初めを告げ、祝う風であり、かつ、秋の到来を知らせる風でもある。「しらする風」の先行例には「秋たつと人にしらする風のおとすずしや今朝は衣かさねつ」(「堀河百首」秋廿首・立秋・五七三・隆源)等がある。⑥色わかたたく侍るを―松風の「色」(「色彩」)を思わせる両歌どちらも「色」(「趣」)がよろしく、優劣の判断が難しいという意。

【通釈】

四十二番
左(歌) 同上(権大納言)(藤原)通忠

岡の麓では、どの季節でも変わらない松風からでさえも、しみじみと身にしみる程に秋が来たのが感じられることだよ。

右(歌) 勝

同(権大納言)(藤原)実雄

我が君の千年の秋の始めなので、その秋を知らせる風も松に吹くことだ。
【判詞】左右同じく松風の秋の姿を詠み、どちらが(勝っている)とその趣の優劣を判断し難くございますのを、右は祝言性を意識している上に、下句が特によろしゅうございます。又右歌を勝とする。

〈四十三番〉

四十三番

左

同 定雅

今ははやあつまのおくによかた通らん秋あきのしるへののにしの山風

右 勝

同 公相

補十五段)などにみられるが、「西の山風」を共に詠み込む先例は未見。類例に「さよ深けてむら雲はらふ秋風は月吹きかへすこちこそすれ」(「正治初度百首」秋・七五五・藤原忠良)がある。

⑥金風はまことにみちのく山にたより侍らめと―「金風」を「あきかぜ」と訓ずる例が『万葉集』に三例(巻第九・一七〇〇、巻第十二・二〇二三、巻第十二・三〇一)みえる。また「みちのく山」も、「天皇の御代栄えむと東なる陸奥山に金花咲く」(『万葉集』巻第十八・四〇九七・賀陸奥国出金詔書歌一首 并短歌)・大伴家持)にみられる。当該歌に詠まれた東国の奥に吹き通っているであろう秋風(金風)は、金が産出されるという点でまさに東国の陸奥山に縁のある詞であることを示す。

⑦空よりすぐると侍そ、すこし荒涼なる所見え侍れとも―「荒涼」は表現の意図、もしくは典拠があいまいで大雑把なことを批判する否定的評語。早くは天徳四年(九六〇)『内裏歌合』(藤原実頼判)に用例がみえる。秋の初風が空を吹きすぎる様子を詠んだと思われる右歌の「空より過る」の用例は未見。「野辺の露は色もなくてやこほれつる袖より過ぐる荻のうは風」(『新古今和歌集』恋五・一三三八・慈円)などの例と異なり、「空より過る」という言い方が大雑把である点を指摘していると思われる。

⑧秋の初風昔より名譽侍れは―「秋の初風」という表現は昔から優れた歌に詠まれてきた、の意か。『藤川五百首』古寺初雪・二六六歌注に「彼百首の時此歌名譽なる由侍れば、凡慮思量に難及よしいへり」とある。「秋の初風」は「わがせこが衣のすそを吹返しうらめづらしき秋のはつ風」(『古今和歌集』巻第四・秋歌上・一七一・「題しらず」・よみ人しらず)を始めとして多くの用例が存し、「たれにまたつゆのあはれをかけんと袖よりすぐる秋のはつかぜ」(『千五百番歌合』秋・一五百三十一番左・一〇六〇・藤原季能)、「いかにとよのこりおほかるあはれかなけさぶき過ぎぬ秋のはつ風」(『拾玉集』第一・日吉百首和歌・秋二十首・四三〇)などの例もみられる。なお、永青文庫本の異本注記は、諸本にもみられず未読。暫く「遊気イ」としておく。

【通釈】
四十三番

左(歌) 同(権大納言)(藤原)定雅
今はもはや、東国の奥に吹き通っていることであろう。(この地に)秋の訪れを告げた西の山風は。

右(歌) 勝 同(権大納言)(西園寺)公相
今日はまだ、夕暮を特に他とは区別して、空を吹きすぎる秋の初風であることよ。
〔判詞〕左(歌の)、「西の山風」は、近い時代に「月吹き返せ」と(いう句とともに)、初めて聞きました表現でしょうか。この(左歌の)「今のはや」とありますのも、秋が訪れて数日経つうちのいつ頃のことでありましょうか。「金風(あきかぜ)」は本当に(金の産出される)「陸奥山」に縁がございますが、幽玄の姿とは思われないことでしょうか。右(歌の)、「夕をわきて」という所は艶なる様子ですので、「空よりすぐる」とございますのが、少し大雑把な所がみえますもの、(左歌の)「東の奥に通ふ西の山風」という表現)よりは、(右歌の)「秋の初風」という表現が昔から優れた歌に詠まれてきましたから、右(歌)の勝で(ございましょう)。

〔四十四番〕

四十四番
左 勝 同 公基
いと、又身にしむ風の吹なへにはやしられぬる秋の空哉
右 為教朝臣
うた、ねの衣手涼し吹風のめには見えすて秋やきぬらん
左吹なへに身にしられぬるなど、たけあるさまに侍にこそ、右吹風のめに見えずといへる事に不庶幾之由、庭のをしへ侍しを今思出されて侍れは、以左為勝、

【校異】
イ 勝―ナシ(書) 口 同―権大納言(書)(内)(支)(聚)(群)

ハ 衣手―心も(内) (支) (聚) (群) 二 吹―秋(内)

ホ 身に―はや(聚) へに―ナシ(支) ト 庶―遮(群) チ 庭のを

しへ侍しを―おしへを(内) (聚) (群)、出られ侍りしを(支) リ 出されて

―いたして(書) (内) (支) (聚) (群)

【他書所伝】

〈左歌〉

【万代和歌集】秋歌上・七九三・「十首御歌合に、初秋風といふことを」

いとどまた身にしむかせのふくなへにはやしられぬるあきのそらかな

【題林愚抄】秋部一・初秋風・二九六一・「同(宝治歌合)」

いとどまた身にしむ風の吹くなへにはやしられぬる秋の空かな

〈右歌〉ナシ

【語釈】

① いと、又―いっそうまた。さらにいっそう。当該歌合には、六十六番左女房(後

嵯峨院)の作に、「いと、又かきりも見えず武蔵野やあまき雪の明ほの、空」が

ある。この例の如く「いとどまた」は、本来、一つの事象の上にさらに別の事象

が加わることを言う表現だが、公基の歌ではそのところが判然とせず、「また」が

「再び」の意のようにも解される。

② 吹なへに―吹くのと同時にの意。【奥儀抄】上には「なへ からのなどいふ心な

り」とある。【秋風の草葉そよぎてふくなへ】にはのかにしつるひぐらしのこゑ(後

撰和歌集)秋上・二五三・「題しらず」・よみ人しらず、【古今和歌六帖】(虫・ひ

ぐらし・四〇〇六)には第二句「いなばそよぎて」、「あきかせのやはださむく

ふくなへに萩の上ばのおとぞかなしき」(【新古今和歌集】秋歌上・三五五・「堀河

院に百首歌たてまつりける時」藤原基俊)などが先行例。

③ はやしられぬる―早くも気づかれてしまったの意。【新編国歌大観】で検索する

限りでは、公基の当該歌のみに見られる表現。なお、近似した表現身にしられぬる

は本歌合中基家(二百二番右)と実氏(二百六十二番左)の歌中に見られる。

④ 秋の空―「おほかたの秋のそらだにわびしきに物思ひそふる君にもあるかな」

(後撰和歌集)秋下・四三三・「あひしりて侍りけるをこのひさしうとはず侍り

ければ、なが月ばかりにつかはしける」(右近)にみえる如く、秋の空はもの悲し

さを感じさせる景物の一つ。

⑤ うた、ねの衣手涼し―類似表現に「ながむれば衣手すずしひさかたの天の河原

の秋の夕ぐれ」(【新古今和歌集】秋歌上・三二二・「百首歌のなかに」式子内親王、

「ゆふぐれは衣手すずしたかまどのをへの宮の秋のはつかぜ」(【新勅撰和歌集】

秋歌上・二〇七・「題しらず」源実朝)などがある。うたたねと衣と秋風の組み

合わせとしては「夏衣まだひとへなるうたたねに心してふけ秋のはつ風」(拾遺

和歌集)秋・一三七・「あきのはじめによみ侍りける」安法法師)などが先行例。

なお、文永二年【白河殿七百首】には「いつのまに秋はきぬらんうたたねの我が

衣手の風ぞ身にしむ」(秋百三十首・早涼至・二〇四・藤原為家)と近似した表現

がみえる。

⑥ めには見えすて―目には見えすして。涼しさに秋を知るとい趣向で、貫之の

「河風のすずしくもあるかうちよする浪とともにや秋は立つらむ」(【古今和歌集】

秋歌上・一七〇・「秋たつ日、うへのをのこともかほらにかはせうえうしけ

るともにまかりてよめる)以来、為家の時代まで長い伝統を持っている。「秋は

ぎをしがらみふせてなくしかのめには見えすておとのさやけさ」(【古今和歌集】

秋歌上・二二七・「題しらず」・よみ人しらず、「女郎花ふきすぎてる秋風は目

にはみえずてかこそしるけれ」(【古今和歌六帖】草・をみなへし・三六七四・凡

河内躬恒)などが先行例。当該の為歌は、新味はないものの、当該歌合「吹風

もあさけ涼しく成にけりぬる夜のまに秋やきぬらん」(五十二番右・藤原為家)、

「いつの間にか秋はきぬらんうたたねのあさけの風も身にぞしみける」(【宝治百首】

秋廿首・早秋・二二九・祝部成茂)などに見る如く、この時代に好まれた表現

であったと言えよう。

⑦ 不慮幾之由、庭のをしへ侍し―「庶幾」は乞い願う意。「右のはるひ猶不可庶幾」

(【六百番歌合】春部・春水・十三番)など、判詞においては、ある表現について

消極的な評価を下すのにもよく用いられる。「庭のをしへ」は漢語「庭訓」(【論語・

季氏)を読み下したもので、父から子への教訓が原義。ここは家庭教育の意であ

ろう。口伝であった可能性もあり、同内容の指摘を「類註密勘」、「僻案抄」等に

見つけようとしたが、適当な用例を見つけ得なかった。

【通釈】

四十四番

左(歌) 勝

同(権大納言)(藤原)公基

いよいよ又身に染む風が吹くのと同時に早くも(季節の到来が)知られてしま
う秋の空だなあ・・・

右(歌)

(藤原)為教朝臣

うとうととして(目覚めると風が吹き抜ける)袖が涼しく感じられる。吹く風
は目には見えないまま秋は来たのであろうか。

【判詞】左(の)「吹なへに身にしらねる」等は、格調高い表現でございます。右(の)
「吹風のめにみえず」という事は特に好ましくないということ、家の教えがありま
したのを今思い出されましたので、左をもって勝とする。

〈四十五番〉

四十五番

左 掛

同 為経

吹風もす、しくなりぬ久方の天つみ空に秋やきぬらん

右

信実朝臣

身にさむき秋そきぬらし萩原やさらては風のさしもやは吹

秋のはしめの心、みにさむきといへる、あまりにや

侍へき、涼風の至なとこそ申侍れ、下旬なと

はことにしたりかほにきこえ侍にや、天つみ空

に秋やきぬらん、させる事なく侍れと、勝と

まてはいか、とみえ侍れば、為侍、

【校異】

イ 持一ナシ(書) 口 同一中納言(書)(内)(支)(聚)(群)

ハ さらては—さえては(支) ニ の一ナシ(書)(内)(支)(聚)(群)

【他書所伝】

〔左歌〕ナシ 〔右歌〕ナシ

【語釈】

① 吹風もす、しくなりぬ—秋の到来を、涼風に感じるといふのは常套的な表現。
「夏と秋と行きかふそらのかよひぢはかたへすずしき風やふくらむ」(古今和歌集)
夏歌・一六八・「みな月のつごもりの日よめる」・凡河内躬恒)のように、秋は空
からやってくると思えられていた。

② 久方の天つみ空—「久方の」は枕詞。「天」「空」などにかかる。「天つみ空」は、
天空の意。「ひさかたの天つみ空に照る月の失せなむ日こそ我が恋止まめ」(万葉
集) 巻第十二・寄物陳思・三〇〇四)に拠る表現。この措辞は、本歌合では、他に、
十一番右歌(少将内侍)、十二番右歌(沙弥禅信)でも用いられている。

③ 身にさむき—秋風を「身に寒き」と表現した和歌は少なくない。「秋風の身にさ
むければつれもなき人をぞたのむくるる夜ごと」(古今和歌集)恋歌二・五五五・
「題しらず」・素性法師)。ただし、「身にさむき秋」という措辞は珍しい。「身に
さむく秋はきにけり今よりの夕の風の哀しれとて」(洞院撰政治家百首)秋・早秋・
五九三・藻壁門院少将)は一例。

④ 萩原や—萩吹く風に秋の到来を知る趣向の歌は多い。「萩の葉のそよぐおとこそ
秋風の人にしらる始なりけれ」(拾遺和歌集)秋・一三九・延喜御時御屏風に・
紀貫之)。「をぎ原やいつまで下にかよひけんけさはに出づる秋のはつ風」(洞院
撰政治家百首)・秋・早秋・五四〇・藤原知家)。

⑤ 秋のはしめの心、みにさむきといへる、あまりにや侍へき—歌題の前半部分「初
秋」の心として、「身にさむき」と表現したのは、行き過ぎではないか、の意。初
秋に吹く風を「さむし」と表現した歌がないわけではないが(「あけぬるか衣手さ
むし」が原やふしみの里の秋のはつ風」(新古今和歌集)秋歌上・二九二・「守覚
法親王、五十首歌よませ侍りけるに」・藤原家隆)、「すずし」(身にしむ)などと
表現されることの方が多い。本歌合でも、「初秋風」題二十六首のうち、十一首が
「身にしむ」を、三首が「すずし」を詠み込む。永青文庫本の本文では、当該信実

歌以外に、連性歌(四十九番左)も「さむし」を詠み込むが、これは本文上やや問題がある(四十九番【語釈】参照)。判者為家は、「ふく風もあさけすずしく成りにけり」(五十二番右)と詠ずる。

⑥涼風の至―【札記】月令に「孟秋之月、…涼風至、白露降、寒蟬鳴、鷹乃祭鳥」とある。

⑦下句などはことにしたりかほにきこえ侍にや―「したりかほ」は、得意顔の意。ここでは、「さら」は風のさしめ、吹」と大げさに力んだ表現を指すか。

⑧させる事なく侍れと―「させる事なし」とは、大したことはなく、難点がない、の意。下句の趣向を、取り立てて優れたところは無いが、難点はないと評している。

【通釈】

四十五番

左(歌) 持

同(中納言)(藤原)為経

吹く風も涼しくなった。天空に秋が来たのであろうか。

右(歌)

(藤原)信実朝臣

身に寒く感じられる秋が来たに違いない。そうでなくては、萩原の風がこんなにも吹くであろうか。

【判詞】(歌題の)「秋の初めの心」を、「身にさむき」と表現したのは、あまりに行き過ぎたものではないでしょうか。「涼風の至る」などと申すではございませんか。下句などは特にしたり顔で大げさに力んでいるように聞こえるのではないのでしょうか。「天つみ空に秋やきぬらん」は、無難な表現ではございますが、勝とするのまではいかがであらうかと思われましますので、持とします。

〔四十六番〕

四十六番

左 掛

同 通成

萩原の末すこす風のをとよりそほのかに秋あきをき、はしめつる

右 同 雅光

袖のうへに露はみたれてむすへとも猶色見えぬ秋の初風
左めつらしき所ところもなくさせる難も侍らす、右袖の露
みたれてむすへとも猶色見えぬと侍、秋風いつ
より風の色見ゆへきにかときこえ侍れと、左
き、はしめつるといひはて、も、かちかたく侍へきに
や、又また為持、

【校異】

イ 持―ナシ(書) 口 同―右衛門督(書)(内)(支)(聚)(群)

ハ 萩原―萩の葉(内)(支)(聚)(群) ニ こそ―こそよす(群)

ホ 秋を―秋は(書) へ 同―右近中将(書)(内)(聚)(群)、右近衛中将(支)

ト 所も―所(内)(支)(聚)(群) チ 侍―ナシ(支)

リ 風の色―風の色に(内)(群) ヲ 又見ゆへきにかと―みゆへきかと(書)

ル 左―左も(内)(支)(聚)(群) ヲ 又―ナシ(書)(内)(聚)(群)

【他書所伝】

〔左歌〕

【題林愚抄】秋部一・初秋風・二九六二・「同(宝治歌合)」

をぎのはの末すこす風の音よりそほのかに秋を聞きはじめける

〔右歌〕ナシ

【語釈】

①萩原の末すこす風の―「いくかへりなれてもかなし萩原やすゑこそかぜの秋の夕暮」(続千載和歌集) 秋歌上・三五九・「正治百首歌奉りけるとき」・藤原定家)の影響がある。他に「萩の葉の末すこす風の音よりそ秋のふけゆく程はしらるる」(順集)一四八)や「をきはらやすゑこそかぜのほにいでてしたつゆよりもしのびかねける」(秋篠月清集)治承題百首・四三〇・「草花」・藤原良経)等の先行表現がある。

②き、はしめつる―「きりぎりすまくらかはしてねにけるも此あかつきぞ聞きはじめつる」(林葉和歌集) 秋歌・四二二・「虫声近床歌林苑」・俊恵)が先行例。

本歌合の「初秋風」題の歌を見ると、大きくは「身にしむ(色)」系の歌と「風の音」系の歌、その他の歌、の三つに大別されよう。通成の当該歌はもとより「風の音」系の発想となる。

③みたれてむすへとも―「しら露もみだれてむすぶ秋かぜにしたばさだめぬにはのかるかや」(為家千首) 秋二百首・二四九・藤原為家)の先行例がある。

④猶色見えぬ秋の初風―「猶色見えぬ」は先例のない措辞で、判詞で咎められている表現だが、「色見え」でうつろふ物は世中の人の心の花にぞありける」(古今和歌集) 恋歌五・七九七・小野小町)や「身にしむ」系秋風の代表歌「吹きくれば身にもしみける秋風を色なき物と思ひけるかな」(古今和歌六帖) 歳時部・天・あきの風・四二三・紀友則)などへの連想が働いていると思しい。

【通釈】

四十六番

左(歌) 持

同(右衛門督)(源) 通成
萩原の末を越して吹く風の音から(はじめて)ほのかに秋(の到来)を聞き(わけ)始めたことだよ。

右(歌)

同(右近中将)(源) 雅光
(私の)袖の上に(涙の)露は乱れ(落ちて)結ぶけれども、(それとは違って)まだ色が見えない(はつきりとした様子が見えない)秋の初風よ。

【判詞】左(歌)は珍しいところもなく(また)とりたてての難もございません。右(歌)は袖の露が「みたれてむすへとも猶色見えぬ」とございます。(いったい)秋風はいつから風の色を見ることができなのかなどと(欠点も)ありますもの、左(歌)は、たとえ「き、はしめつる」と言っておおせたとしても、(そちらを)勝とはし難うございます。(この番も)また持とすべきでしょう。

〈四十七番〉

四十七番

左 ト

おほつかかな秋を告よとたれうへてけさは身にしむ萩の上風

右 勝

くる秋もた、我ためと思つ、きけはや風の身にはしむらん

左はたれ秋をつけよとうへけんとおほつかなく、

右はた、我ためとおもひてき、わける心、いつれ

も身にしむとは見え侍れと、萩の上風は

き、ふりたるかたも侍れは、妖艶の姿につ

きて、以右為勝、

同 有教

弁内侍

【校異】

イ ナシ―勝(聚) 口 同―兵部卿(書)(内)(支)(聚)(群)

ハ 勝―ナシ(書)(聚) ニ わける―わたる(内)(支)(聚)(群)

ホ も―ナシ(内)(支)(聚)(群) ヘ 右―左(内)(聚)

【他書所伝】

〈左歌〉

【題林愚抄】秋部一・初秋風・二九六三・「同(宝治歌合)」

おほつかかな秋をつけよとたれうゑてけさは身にしむ萩の上風

〈右歌〉 ナシ

【語釈】

①おほつかかな―初句に置く例として、勅撰集では「おほつかないづこなるらん虫のねをたづねば草の露やみだれん」(拾遺和歌集) 秋・一七八・「廉義公家にて、草むらのよるの虫といふ題をよみ侍りける」・藤原為頼)、「おほつかかな雲のかよひぢ見てしかなとりのみゆけばあとはかもなし」(同・物名・三八六・なとりのみゆ・平兼盛)などが早い例。

② たれうへて―「岩戸あけしあまつみことのかみに桜を誰か植始めけん」(『西行法師家集』・雑・六〇五・「みもすそ川のほとりにて」)、「いそのかみふるののさくらたれうへてはるはわすれぬかたみなるらん」(『千五百番歌合』・春三・百八十番右・三六〇・源通具、『新古今和歌集』・春歌上・九六)など、何らかの感慨を引き起こさせる植物を最初に誰が植えたのかと咎める発想の系譜がある。

③ 萩の上風―萩の葉の上を吹き抜ける風。秋の到来に起因する感情とともに悲愁を感じさせる景物として古来詠み込まれている。「あきはなほゆふまぐれこそただならぬをぎのうはかせはぎのしたつゆ」(『和漢朗詠集』・秋興・二二九・藤原義孝)、「物ごとにあきのけしきはしるけれどまつ身にしむは萩のうは風」(『千載和歌集』・秋歌上・二二三・「郁芳門院の前裁合に萩をよめる」・源行宗)など、例歌は多く、そういった点を為家は「き、ふりたるかたも侍れば」(表現に目新しさが無い)として負とする。

④ た、我ためと思つ、―「月見ればちちに物こそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど」(『古今和歌集』・秋歌上・一九三・「これさだのみこの家の歌合によめる」・大江千里)などに詠まれた秋の悲哀が我が身に來るといふ詠みぶりを逆転発想したもの。「たが秋のね覚とはむとわかずともただ我がためをしかのこゑ」(『老若五十首歌合』・百十九番右・二三八・藤原良経)、「秋の露もただ我がためやをかべなる松の葉分の月の衣手」(『拾遺愚草』・院句題五十首・一八五二・松間月)などが類例としてみえる。

⑤ き、わける―底本、書陵部本「き、わける」、他本「き、わたる」。前者だと(きいて判断する)、後者だと(ずっと聞く)となる。底本、書陵部本が「わける」である点と意味の上から「き、わける」で解釈した。

⑥ 妖艶の姿―歌論用語。上品で優雅な美しさや明るく花やかな美しさという「艶」と同類の語。定家は『近代秀歌』において「昔、貫之、歌の心巧みに、たけ及び難く、詞強く、姿おもしろきさまを好みて、余情妖艶の鉢をよまず」と貫之歌を評している。なお、当該歌合五十四番右俊成卿女詠「しほるなよ月を袖の秋の夜にもしはたれてもすまのうら人」について、為家は「しほるなよ月を袖のとて、もしはたれてもすまのうら人といへる心詞、妖艶のすかたことによりしく侍にや」

とする。

【通釈】

四十七番

左(歌)

はつきりしなくて気にかかることだ。秋(の到来)を知らせるようにと誰が植えたせいで今朝はこんなにも我が身に染みる萩の上風が吹くのであろうか。

右(歌) 勝

弁内侍

到來する秋もただ私の為と思ひながら聞くから(秋)風は我が身に染みいるのだろうか。

【判詞】左は誰が秋を告げよと(萩を)植えたのかはつきりせず、右はただ私の為と思つて(秋風の音を)聞き分ける心、どちらにも身に染むものとはみえますが、「萩の上風」(という表現)は聞き古したところもありますので、(一首全体が)妖艶の体(であること)によって、右をもつて勝とする。

〈四十八番〉

四十八番

左

同 師繼

をしなへて身にしむのみか吹風の音もさやかに秋はきにけり

右 勝

雅忠朝臣

吹風は昨日も奪もかはらねと身にしむ音に秋そしらる、

左右、おなじさまの心すかたに侍れと、身に

しむのみかと侍より、身にしむをとほまさり侍へし、

【校異】

イ 同―右近中将(書)(内)(支)(聚)(群) 口 勝―ナシ(書) 八 吹風は―吹風の(支) 二 今―燦爛(書)(内)(支)(聚)(群) ホ さまの―やうに(支)、やうの(群) へ 心すかたに―すかたに(内)(聚)(群)、姿の

(支) ト 身にしむのみかと―身にしむのみ(内) 身にしむのみと(聚)

チ 侍より―侍よりは(書)(内)(支)(聚)(群) リをとほ―音(支)(群)

【他書所伝】

(左歌) ナシ

(右歌)

【題林愚抄】秋部一・初秋風・二九六四

(同)〔宝治歌合〕 雅忠朝臣

吹く風のきのふもけふもかはらねど身にしむ音に秋ぞしらるる

【語釈】

①をしなへて身にしむのみか―「おしなべて身にしむ秋の初風をいかなる色とし人ぞなき」〔拾玉集〕第四・秋・五〇〇―などに詠まれるような、秋の到来により一様に身にしむばかりの状況ではなく、吹く風の音によっても秋が認識されることを当該歌では示している。

②吹風の音もさやかに秋はきにけり―「あききぬとめにはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる」〔古今和歌集〕秋歌上・一六九・「秋立つ日よめる」・藤原敏行)を発想の淵源とする。以来、「ふくかぜもいまはさやかにけり」秋ときこゆるふえのこゑかな〔道濟集〕九四)、「風のおとにおどろくのみかをぎのはのさやかになびく秋はきにけり」〔千五百番歌合〕秋一・五百二十八番・一〇五四・慈円)など、類想の歌が多く作られた。なお、「色かへぬ竹の葉山に吹く風の音もさやかに秋は来にけり」〔後鳥羽院定家知家入道撰歌(家良)〕知家大宮三位入道撰・秋・一三〇)は下三句が一致する。

③昨日も今も―諸本に従い、「昨日も今日も」の本文によって通釈を施した。

④身にしむ音に秋ぞしらるる―吹く風が身にしむことで、秋の到来を知るという発想には、「をさをあらみふきなすかぜの身にしみて秋きにけりとまつぞしらるる」〔大式高遠集〕月次・七月・三五〇)、「ゆふまぐれをぎふく風のみにしめば秋きにけりとおどろかれぬる」〔六条斎院歌合〕立秋・左・三・なかつかさ)などの先例がある(当該歌合には「萩のはに声たてねどもふく風の身にしむ色に秋ぞしらるる」〔初秋風・四十番右・小宰相・八〇)という類例あり)。

【通釈】

四十八番

左(歌)

同(右近中将)(藤原)師繼

一様に身にしむばかりであるか、(いや、それだけではなく)吹く風の音もはつきりと秋は来たことだなあ。

右(歌) 勝

(源) 雅忠朝臣

吹く風自体は、昨日も陰翳も変わらないけれども、身にしむ音によって秋の訪れが感じられることだ。

【判詞】左右(の歌)、同じような趣向・姿でございますが、(左歌の)「身にしむのみか」という表現よりも、(右歌の)「身にしむ音」という表現が勝っていることでしょう。

【四十九番】

四十九番

左 勝

天川かは風速妻のいつかと待し秋やきぬらん

右

いつもふくめに見ぬ風の秋といへは身にしむ色のいかてそふらん

左哥からことによるしく待にや、いつもふく

めに見ぬ風、まけ待へし、

沙弥蓮性

下野

【校異】

イ 勝―ナシ(書) 口 さむし―勝(書)(内)(支)(聚)(群)

ハ ふく―きく(書) 二 左―左は(書)(内)(聚)(群)、左哥は(支)

ホ ふく―きく(書)(内)(支) へめ―ナシ(内)

【他書所伝】

(左歌)

『夫木和歌抄』秋部一・三九二六・「宝治十首歌合、初秋風」

天の川川風すずしとほづまのいつかお待ちし秋やきぬらん

『題林愚抄』秋部一・初秋風・二九六五・同(宝治歌合)

天河かは風涼しとほ妻のいつかとまちし秋やきぬらん

〔右歌〕ナシ

【語釈】

①天川かは風さむしー眼前の景ととるべきか、或いは天空の天の川を言い切ったものか、俄には決しがたい。『伊勢物語』八十二段の業平詠「狩り暮らしたなばたつめに宿からむ天の河原に我は来にけり」では、河内国の歌枕である天川の地名から天空の天の川が連想される。底本は「さむし」だが、他本がすべて「す、し」であること、また、四十五番判詞に「秋のはしめの心、みにさむきといへる、あまりにや待へき」とみえることから「す、し」で解釈した。

②遠妻―「遠妻し高にありせば知らずとも手綱の浜の尋ね来なまし」(『万葉集』巻第九・雑歌・一七四六・「手綱の浜の歌一首」)など、遠くに離れて住んでいる妻が原義。『万葉集』に用例が散見する。当該歌では「年にありて今かまくらむぬばたまの夜霧隠れる遠妻の手を」(『万葉集』巻第十・秋雑歌・二〇三五)と同様、織り姫を念頭に置く。

③いつもふく―書陵部本は「いつもまきく」。判詞では書陵部本、内閣文庫本、支子文庫本共に「いつもまきく」とする。「いつもまきく」の例としては、「いつもまきく風とはきけどをぎのはのそよぐ音にぞ秋はききにける」(『古今和歌六帖』草・をぎ・三七一五・紀貫之)、「いつもまきくふもとのさととおもへども昨日にかはる山おろしのかぜ」(『文治六年女御入内和歌』秋・七月・秋風・一四六・藤原定実)、『新古今和歌集』秋歌上・二八八)、「いつもまきくものとや人のおもふらむこぬゆふくれのあきかぜのこま」(『六百番歌合』恋部下・寄風恋・十七番左・九三三・藤原良経)、『新古今和歌集』恋歌四・二三二〇)などがみえる。この内、貫之詠は、『統後撰和歌集』には「いつもふく風とはきけどをぎの葉のそよぐおとにぞ秋はききにける」(秋歌上・二四四・清慎公の家の屏風に)、『万代和歌集』(秋歌上・七七六)も「いつもふく」として入集している。

④めに見ぬ風の―「浦にやくもしほのけぶりうちなびきめにみぬ風ぞあらはれて行く」(『寂身法師集』雑雑会等・二八〇・「浦煙、同」)、「萩はらや末こそころの夕暮にめにみぬかせも秋ぞかなしき」(『道助法親王家五十首』秋・四六三・「萩風」・道助法親王)などの先行例がみえる。なお、建長八年「百首歌合」では「吹く風のめにみぬからにうつるふやしのに花をさそふなるらん」(二百八十七番左・五七三・院中納言)について「ふく風のめにみぬ、めづらしきつづきには侍らぬ」(藤原知家判)と指摘する。

【通釈】

四十九番 左(歌) 勝 沙弥蓮性
天の川(に吹く)川風が瀧邊。遠くに離れている妻(織り姫)が(彦星に逢うのを)早く早くと心待ちにしていた秋が来たのだろうか。

右(歌) 下野
いつも吹いている目に見えない風が秋になったと言うだけで(とたんに)どうして身に染みる秋の様子が添うのだろうか。

〔判詞〕左(は) 歌柄が特によろしいでしょうか。「いつもふくめにみぬ風」(と詠んだ歌が)、負けでしょう。

〔五十番〕

五十番	左 勝	為氏朝臣
	右	少将内侍
	左	うちつけにまつそ身にしむ秋きぬといふ斗なる萩の上風
	右	いかにして身にしむ色をそめつらん音こそあらめ秋の初風
	左	いふ斗なる萩の上風、右、音こそあらめ秋の初風、これらの勝劣はいく程の事侍らぬを、色をそめつらんといへるあまりにたしかにや侍らん、

【校異】

イ 勝一ナシ (書) □ 朝臣一ナシ (内) (支) (聚) ハ を一を (聚)

二 勝劣 (※■は「哥」とよめるか) 一勝劣 (書)、勝負 (内) (支) (聚) (群)

ホ 色を染つらん一色をは染つらん (書)、そめつらん一 (内) (支) (聚) (群)

へ 侍らん一侍る (内) (支) (聚) (群) ト にや一や (支)

【他書所伝】

【左歌】

【題林愚抄】秋部一・初秋風・二九六六・【同】(宝治歌合)

うちつけにまつぞ身にしむ秋きぬといふばかりなる萩の上風

【右歌】

【万代和歌集】秋歌上・七九二・十首御歌合に、初秋風といふことを

いかにして身にしむいろをそめつらむおとこそあらめあきのはつかぜ

【語釈】

①うちつけに―思いがけず、不意に。秋の初風が「うちつけに」「身にしむ」様を

詠んだ例に「あきたつときよりけふのうちつけに風もみにしむ(こちこそすれ)

【六条斎院歌合】秋・九・駒君、「打ちつけにけふふくかぜの身にしむはいかな

る秋のたてはなるらん」(宝治百首)秋廿首・二二三四・帥)がある。

②秋きぬといふ斗なる―「秋が来た」と言うだけの。「秋きぬといふばかりな

るよもぎふにあさけの風の心がはりよ」(拾遺愚草)関白左大臣家百首・秋・

一五三二、「秋きぬといふばかりなるがめより昨日にはにぬ明ほの空」(宝

治百首)秋廿首・早秋・二二三五・小宰相)等の例がある。

③身にしむ色をそめつらん―「いかにしていくかもあらぬ秋風の身にしむ色をふ

かくそむらん」(後鳥羽院御集)建仁元年三月内宮御百首・秋二十首・二三七

は当該歌と表現が似る。

④勝劣―当該歌合には他に七十七番判詞「いく程の勝劣侍らし」がみえる。【幾程

ほどの勝まけも侍らぬにやとみえ侍れど」(水無瀬恋十五首歌合)五十三番・関
路恋)といった例があるが、「左右ともにいくほどの勝劣なくや」(仙洞十人歌合)
二十八番)、「両首いくほどの勝劣なく侍れど」(千五百番歌合)八十一番・春二)
という例も存する。

【通釈】

五十番

左(歌) 勝

思いがけず身に染みることだよ。「秋が来た」と告げるだけの萩の上風なのに。

右(歌)

どうやってしみじみと身にしみる色を染めてしまったのだろうか。秋の初風は、
(たしかに)音はあるのだけれども。

【判詞】左、「いふばかりなる萩の上風」、右、「音こそあらめ秋の初風」、これらの

優劣はどれほどの事でもございませぬが、「色をそめつらん」といいますのは余り

にもはつきりと言ひ過ぎではないでしょうか。又左が勝つべきでしょう。

【五十一番】

五十一番

左 持

白妙の水かけ草や^①あまの河原の秋の初風

右 沙弥禅信

たつねくる秋のしるしもしらけり風吹かはるみわの杉むら

左、下句、今までたれもよみのこすへしとも聞え

侍らぬうへに、水かけ草なひくを見れば時は

きにけりなとは、見ならひて侍を、白妙とて

こそ、水の色にや草の色にやとおほつかなく

侍れ、右、みわの杉村秋のしるしなどは、さもやとみえ

侍を、たつねくると侍こそ、秋のくるにや、人至にや、

短慮まとひてわきまへかたく侍れ、吹かふる風の
のをともあまたき、なれて侍れば、可為侍、

【校異】

イ 持―ナシ (書) 口 しけるらん―なびかふ (書) (内) (支) (聚) (群)
ハ たつねくる―尋入 (内) (支) (聚) (群) 二 時は―時も (内) (聚)
ホ にや―ナシ (書) ヘ と―ナシ (内) (聚) ト おほつかなく―おほつ
つかなく (書) チ みえ侍を―侍るを (内) (支) (群)、聞え侍るを (聚)
リ たつねくる―たつねける (内) (支)、たつねいる (聚) (群) 又 くる―
来たる (内) (聚) (群) ル 人―人の (書) (内) (支) (群) (聚)
ヲ 吹かふる風のをとあまたき、なれて侍れば―ナシ (支) ワ をとも―音
もや (内) カ あまた―あたに (内) (聚) ヨ 可―ナシ (書) (支)

【他書所伝】

〔左歌〕 ナシ 〔右歌〕 ナシ

【参考歌】

〔左歌〕

〔天の川水陰草の秋風になびかふ見れば時は来にけり〕〔万葉集〕卷第十・秋雑歌・
二〇一三、第四句、西本願寺本の付訓「ナビクラミレバ」

* 〔古今和歌六帖〕(歳時部・秋・七日の夜・一三四・柿本人丸)は、下句「な
びくを見ればときはきぬらし」〔五代集歌枕〕二二八九、〔袖中抄〕七三七
も、〔赤人集〕(二八二)は、第二句以下「みづくもりぐさふくかぜになび
くとみれば秋はきにけり」、〔続古今和歌集〕(秋歌上・三〇七・山部赤人)は、
下句「なびくをみればときはきにけり」。

【語釈】

① 白妙の―枕詞。「衣」や「袖」のほか、「雲」「月」など白色を連想させる歌語に
かかる。

② 水かけ草―水辺、または水辺の物陰に生える草。「袖中抄」に、「顕昭云、水陰
草とは水の陰に生たる草を云。詞を略したる也」とある。

③ しけるらん―他本「なびくらん」が適した表現であろう。「しける」では、夏歌
のように解されるし、【参考歌】に掲げた万葉歌にも、「なびかふ(なびく)」とある。
また、「らし」では、はっきりとした根拠に基づき推定を表すことになるが、ここ
では、「らん」が適切。

④ 天の河原―七夕伝説で、彦星と織姫の年に一度の逢瀬の舞台となる天空の銀河。
「秋風の吹きにし日より久方のあまのかはらにたたぬ日はなし」〔古今和歌集〕秋
歌上・一七三・「題しらず」・よみ人しらず。

⑤ たつねくる―訪ねてくる、の意。「わがいははみわの山もとこひしくはとぶらひ
きませすきたてるかど」〔古今和歌集〕雑歌下・九八二・「題しらず」・よみ人
しらず、「みわの山いかにまち見む年ふともたつぬる人もあらじと思へば」〔古
今和歌集〕恋歌五・七八〇・仲平朝臣あひしりて侍りけるをかれ方になりければ、
ちちがやまのかみに侍りけるもとへまかるとよみてつかはしける・伊勢に
掲る表現で、三輪山説話と関わる歌語。

⑥ 秋のしるし―秋の目じるし。「しるし」も、「みわの山しるし」のすぎは有りなが
らをしへし人はなくていくよぞ」〔拾遺和歌集〕雑上・四八六・「はつせのみちに
てみわの山を見侍りて」・清原元輔)のように、三輪山説話と関わる歌語。「三輪
の山秋のしるしを尋ぬれば杉間を分けて紅葉しにけり」(中宮亮頭輔家歌合)紅葉・
十番左・四三・藤原親隆)など、類似した発想の先行歌がある。

⑦ 風ふきかはる―秋風に吹き変わる、の意。「あききぬとききつるからにわがやど
の萩のはがぜの吹きかはるらん」(千載和歌集)秋歌上・二二六・「秋たつ日よみ
侍りける」・侍従乳母)、「花すすきなびくけしきにしるきかなかせ吹きかはる秋の
ゆふぐれ」(忠度集)薄・三三三、「治承三十六人歌合」二六一では、第二句「まね
く気色に」。

⑧ 下句、今までたれもよみのこすへしとも聞え侍らぬうへに―下句は、今まで誰
もが詠み残しているだろうとも聞いておりませんが、その上に、の意。経朝歌の
下句は、「さかのぼる浪のいくへにしをれけん天の河原の秋の初かせ」(拾遺愚草)
閑居百首・雑・三九六)や「染めもあへぬ紅葉のはしや渡すらん天の河原の秋の初風」
(洞院撰政治家百首)秋・早秋・五三四・藤原為家)と一致する。また、「あまの川

水かけ草のうちなびきいその枕に秋風ぞふく」(「正治初度百首」秋・一四一・惟明親王)、「天河水かけ草のうちなびき玉のかつらも露こぼるらん」(「拾遺愚草」下・秋・二二三六・「建保三年七夕内裏七首」)などの例もあって、経朝の当該歌は「白妙の」を除けば新味に欠けよう。前引万葉歌に、表現・趣向ともにもたれ過ぎた歌であることも、評価の低さに繋がっている。

⑨白妙とてこそ、水の色にや草の色にやとおほつかなく侍れ―枕詞の「白妙の」から連想される白色が、水の色なのか、草の色なのかはつきり分らない、の意。経朝が、「白妙の」という歌語を用いたのは、秋の色は白であるという通念(五行思想)と関わるであろう。また、「水の白波」など、水を白と表現することは珍しくはないし、特に、秋の水を白色に表現した例としては、「日を凝ふる暮山は青くして簇簇たり 天を浸す秋水は白くして茫茫たり」(「和漢朗詠集」巻下・山水・五〇一・白楽天)、「秋の水は秋の空にぞ成りにけるしろき浪まにうつる山かけ」(「拾玉集」文集百首・(文集題は前引白楽天の詩句)一九四一)などがある。ただし、「白妙の水(かけ草)」は、「新編国歌大観」で検索する限り、先例のない表現で、為家は、その奇矯な詞続きを難じている。

⑩たつねくると侍こそ、秋のくるにや、人至にや、短慮まとひてわきまへかたく侍れ―「たつねくる」という表現は、「秋が来る」のであろうか、「人が来る」のであろうか、浅はかな考えが迷って見分けることが難しい、の意。初句「たつねくる」は、第二句との続きでは、秋が訪ね来るといふ擬人的な表現となる。また、「(人が)訪ねてきた秋の目じるし」といふ解釈も可能である。

⑪吹かはる風のをともあまたき、なれて侍れは―秋になつて風の音が吹き変わるという趣向の歌は、前引千載歌や忠度歌のほか少なくない。「あしびきの山した風のいつのまにおとふきかへて秋はきぬらん」(「新勅撰和歌集」秋歌上・一九九・「うへのをのことも、はつ秋の心をつかうまつりけるに」・藤原資季)、「我が門のわさ田のほむけかたよりにけさ吹きかはる秋のはつかぜ」(「洞院撰政治家百首」秋・早秋・五四四・藤原知家)、「思ひあへずけふより秋のくるかたに朝氣の風ぞ吹きかはりける」(「洞院撰政治家百首」秋・早秋・五六〇・藤原信実)、「衣手もいつしか涼しけさのまに吹きかはりぬる秋のはつ風」(「洞院撰政治家百首」秋・早秋・五九四・藻壁門院少将)。

【通釈】
五十一番

左(歌) 持 (藤原) 経朝朝臣
(今ごろは) 川のほとりの草は輝き輝きなる露か。天の川の河原を吹く秋の初風に。

右(歌) 沙弥禅信
(人が) 訪ねて来る、その秋の目じるしも知られたよ。三輪の杉群では風の音が吹き変わって。

【判詞】左(の歌)は、下句は、今まで誰も詠み残しているようにも聞いておりません上に、「水かけ草なびくを見れば時はきにけり」などという歌は、見慣れてございませが、「白妙」という表現は、(それが) 水の色のことなのか草の色のことなのかはつきりいたしません。右(の歌)は、「みわの杉村」「秋のしるし」などの表現は、(三輪山説話に関わる歌々を想起させて) いかにもその通りだと見えませんが、「たつねくる」とございませは、秋が来るのか、人が来るのか、浅はかな私では弁えがとうございませ。「吹き変わる風の音」といふ発想の歌)も、たくさん聞き慣れておりますので、持とするべきでしょう。

〈五十二番〉

五十二番

左 勝 越前

風わたる秋の夕の萩の葉にをけはかつちる露の白玉

右 為家

吹風もあさけ涼しく成にけりぬる夜のまに秋やきぬらん

左はしめの秋の心おほつかなく侍るにや、右ぬる

夜のまもとめいたしたる事に侍れは、勝負

れるの事にてこそは侍らめ、

【校異】

イ 勝―ナシ(書)(内)(支)、持(群) 口 かつ―かず(書) ハ 為家―
前権大納言為家(書)(内)(支)(聚)(群) ニ おほつかなく―おほつかなく
や(支) ホ 右ね―右の(書) ヘ 夜のまも―夜のまに(内)(支)(聚)(群)
ト こそは―こそ(内)(支)(聚)(群)

【他書所伝】

〔左歌〕 ナシ

〔右歌〕

【題林愚抄】 秋部一・初秋風・二九六七・「已上同(宝治歌合)」

吹く風もあさぢらずしく成りにけりねぬるよのまに秋やきぬらん

【語釈】

① をけはかつちる―「秋風におけばかつちるしら露のあだのおほ野にうづらなく
なり」(夫木和歌抄) 秋部五・「六帖題 新六」五六七五・藤原為家、佐藤恒雄氏『藤
原為家全歌集』では、この歌の為家作について「存疑歌」とする。「草まくら衣
手寒き秋風におけばかつちる野への白露」(内裏百番歌合)(建保四年)・九七・
藤原康光)が先行例。また【校異】に見る如く書陵部本は第四句を「おけはかす
ちる」とするが、書陵部本のみ本文であり、「数散る」の用例も他に見えないの
で、水青文庫本の本文のまままで通釈を行った。

② かつちる―「しぐれつつかつちるやまののみち葉をいかにふくよのあらしなる
らん」(金葉和歌集) 二度本・秋部・二五八・「從二位藤原親子家造紙合に時雨を
よめる」・藤原顕季)、「したもみちかつちる山の夕しぐれぬれてやひとり鹿のなく
らむ」(新古今和歌集) 秋歌下・四三七・藤原家隆)などの先行例がある。

③ 露の白玉―「をぎの葉にそそやあきかぜ吹きぬなりこばれやしぬるつゆのしら
たま」(詞花和歌集) 秋・一〇八・大江嘉言)のほか、「万葉集」(巻第八・秋雑歌・
一五四七・「藤原朝臣八束の歌一首」・藤原八束)や「古今和歌六帖」(草・きく・
三七四三・紀貫之)など早くからの使用例がある。

④ あさけ涼しく―「あさけ」は「朝明」の略。夜明け、明けがたの意で、「万葉集」
から用例がある。「あさけ涼しく」は当該歌が初例だが、「万葉集」に「秋立ちて

幾日もあらねばこの寝ぬる朝明の風は手本寒しも」(巻第八・一五五五・「安貴王の
歌一首」・「拾遺和歌集」(秋・一四一・「題しらす」)では第二句「いく日もあらね
ど」・結句「たもとすずしも」の例がある。また、「右衛門督家歌合」(久安五年)「九
月盡」題六番左「すずしさはたもとにしらるこのくれのあさけの風に衣がへせむ」
(藤原隆季)について、判者藤原顕輔は「左歌ははつあきの心ちぞする、秋たちて
いくかもあらぬにこのねぬるあさけの風はたもとすずしもとよめる心なり、くれ
の秋とはみえず」と判を付している。他に安貴王歌を本歌とする「このねぬる夜
のまに秋はきにけらしあさけの風のきのふにもにぬ」(新古今和歌集) 秋歌上・
二八七・「百首歌に、はつ秋の心を」・藤原季通)などもみえる。為家は隆季歌や
季通歌、それに安貴王の歌を踏まえて作歌したと思量される。

⑤ もとめいたしたる事に―否定的評価の評語。無理に案出した表現の意であろう。
本歌合の「社頭祝」題の定雅の歌「神垣のくすの下風のとかにてさこそ恨のなき
世なるらめ」(百廿一番左)について、為家は「左の哥うらみなき世は、祝言に侍
を、社頭題にまさかきゆふかつらなどを、きて秋にはあへすといへる、くすの下
風しももとめいたされ侍らん、やすき事をさしをきてわりなき心をめくらせる事
は、これのみにかきらす、こひねかふへからすやとそうけたまはりをき侍し」と
評している。こここの「もとめいたされ侍らん」も、無理な表現の案出を難じたも
のである。

【通釈】

五十二番

左(歌) 勝

越前

風が(吹き) 渡る秋の夕べの萩の葉(の上)に、置く一方で、(すぐに) 散る露
の白玉よ。

右(歌)

(藤原) 為家

吹く風も明けがたには(すつかり) 涼しくなりましたことだ。(このぶんで
は) 寝ていた夜の間に秋が来てしまったのであろうなあ。

【判詞】 左(歌) は「初秋」の題意がはっきりとしないのではないのでしょうか。右
(歌) は「ねぬる夜のま」という措辞も(無理に)案出した事でございますので、

勝負は従前のままといたうことではなうましよう。

宝治元年『院御歌合』注釈―「海辺月」題―

位藤邦生 森下要治

田野慎二 山崎真克

赤迫照子 藤川功和

はじめに

『尾道大学芸術文化学部紀要』第7号（平成20年3月）に引き続き、宝治元年（一二四七）『院御歌合』の注釈を試みる。今回は「海辺月」題十三番を取り上げる。各番担当者と所属を以下に示す。

五十三番―位藤邦生（長崎大学）、五十四番―赤迫照子（広島大学図書館）、五十五番―田野慎二（広島国際大学）、五十六番―山崎真克（松江工業高等専門学校）、五十七番―藤川功和（尾道大学）、五十八番―森下要治（広島文教女子大学）、五十九番―赤迫、六十番―田野、六十一番―山崎、六十二番―藤川、六十三番―山崎、六十四番―田野、六十五番―位藤

凡例

一、底本は、永青文庫蔵本〔一〇七・三六・七〕（『細川家永青文庫叢刊』第八巻所収）を用いた。

一、校合した諸本と略号は、以下の通り。

書―書陵部蔵本〔五〇一・七四〕（『新編国歌大観』の底本）

内―内閣文庫蔵本〔百三十番歌合（外題）〕〔二〇一・二四七〕

支―九州大学支子文庫蔵本〔九一一・ホ・一〕

聚―書陵部蔵歌合類聚本（『大日本史料』第五篇二十四所収）

群―群書類従本（巻第二百所収）

一、注釈は、番全体の本文【校異】を示した後、【他書所伝】【本歌】

【語釈】【通釈】をあげた。

一、【語釈】の内、各詠作者並びに前号までに既出の語彙については、紙幅の関係上これを略した。

一、表記や送り仮名の異同はこれを略し、見せけちや補入符号によって訂正のある箇所は、訂正後の本文を採用した。

一、翻字本文には適宜読点を施し、字体は現行の活字体に改めた。

一、本文中、異同の存する箇所には、傍線及びイ、ロ、の如き符号を付し、語釈を施した箇所には、本文右傍に①、②…の通し番号を付した。

一、底本で文意不通等が認められる場合、他本の本文に拠り通釈を施した場合がある。その際、本文【校異】【通釈】において他本に拠った箇所を網掛けを施した。

一、引用本文は、原則として『新編国歌大観』に拠り、その他の引用文献は、適宜底本を示した。なお、引用本文には、適宜、傍線、振り仮名等を付した。

一、『万葉集』については、本文、歌番号ともに塙書房刊『万葉集訳文篇』を用いた。

〈五十三番〉

五十三番 海辺月

左 勝

女房

塩かまの浦の煙もたえにけり月みんとての海士のし態に

右

小宰相

わか④のうらやお⑤な⑥しな⑦な⑧れの君か代に又立いて、月をみる哉

左此しほかまの浦こそ、業平朝臣わかみかと

六十余こくの中ににたる所なしと申をき侍にも

猶過て、めつらしくありかたき、あまのしわざと見

たまへ侍れ、いまの世までいかてよみ残し侍にか、

世くたれりとは思ふへくも侍らさりけり、もろくの

みちもかくこそ侍らめと、たのもしくも侍かな、

右歌、おほろけにては此かたはらにたちいつへ

き事とも見え侍へらねは、とかくさたなきをめんほくにて

侍へきにこそ、返、以左為勝、

【校異】

イ 海辺月―ナシ (支) 口 勝―ナシ (書) ハ 続後撰―ナシ

(書・内・支・聚・群)、続後撰、秋中 (聚) ニ 煙も―煙も (書)

・内・支・聚・群) ホ 月みん―月みむ (書)、月みん (内・支・

聚・群) ヘ し態に―しはさか (支) ト わかのうらや―わか

のうら (支) チ なかれ―みなど (群) リ をき―ナシ (書)

又 見たまへ侍れ―見給へれば (内・聚・群) ル 侍らさりけり

―侍らさりける (書) ヲ もろくの―ものを (書) ワ かく

こそ―かく (書・内・支・聚・群) カ 右歌―右の歌 (支・聚・

群) ヨ 見え侍へらねは―みえねは (書)

【他書所伝】

〈左歌〉

『秋風抄』秋歌・八〇・「御歌合、海辺月」・院御製

塩竈の浦のけぶりもたえにけり月みむとての海士のしわざに

『続後撰和歌集』秋歌中・三四八・「十首歌合に、海辺月といへる心

をよませ給うける」・太上天皇

しほがまのうらのけぶりはたえにけり月見むとてのあまのしわざに

『題林愚抄』秋部三・(海辺月) 続後撰・四一四八・太上天皇

しほがまの浦の煙はたえにけり月みんとてのあまのしわざに

『題林愚抄』秋部三・(海辺秋月) 続後撰・四一六二・太上天皇

塩がまのうらの煙はたえにけり月みんとてのあまのしわざに

『歌枕名寄』七二九二・(海辺秋月) 続後六・太上天皇

塩がまのうらのけぶりはたえにけり月みんとてのあまのしわざに

〈右歌〉ナシ

【語釈】

①海辺月―勅撰集では『千載和歌集』に「ながめやる心のはてぞな

かりけるあかしのおきにすめる月影」(秋歌上・二一九)。「海辺月といへるころをよめる」(俊恵)、家集では『従三位頼政集』に「住吉の松の木まより見渡せば月おちかかるあはぢ島山」(上巻・二〇五)。「海辺月」とあるのが早い例で、『新古今和歌集』には「秋の夜の月やをじまのあまのはらあげがたちかきおきのつりぶね」(秋歌上・四〇三)。「和歌所の歌合に、海辺月を」(家隆)のほか、建永元年(一二〇六)七月二十五日「卿相侍臣歌合」の折の「海辺月」題の歌が、雑歌上の部に三首並べて載せられている(一五五六・慈円、一五五七・定家、一五五八・秀能)。院政期から鎌倉期にかけて好まれた歌題であった。

②塩かまの浦―歌枕。陸前。今の宮城県塩釜市。海士と「塩焼く煙をよむことが平安末期以後は圧倒的に多くなつた」と片桐洋一氏は『和歌大辞典』で説明している。「ふるゆきにたくもの煙かきたへてさびしくもあるかしほがまのうら」(『新古今和歌集』冬歌・六七四)。「家に百首歌よませ侍りけるに」(兼実)等が先行例。

③海士のし態に―「ふねのうちなみのしたにぞおいにけるあまのしわざもいとまなき世や」(『千五百番歌合』雑一・千三百八十二番左・二七六四・良経)。「はるの日のどかにてらすおほぞらにむれたるたづのあそぶこゑこゑ」(右・二七六五・兼宗)の番における、慈円の判歌は、「なみのしたのあまのしわざにくらぶればそのこととなきたづのこゑかな」。月の夜に、塩釜の浦の煙が絶えたのが、月を見ようとしての海士のしわざでないことは明らかであるが、それを海士の

風流心からのようにとりなすのが、当時の風であった。たとえば、「ころあるをじまの海人のたもとなつきやどれとはぬれぬものから」(『新古今和歌集』秋歌上・三九九)。「八月十五夜和歌所歌合に、海辺秋月といふことを」(宮内卿)など。

④わかものうら―歌枕。今の和歌山市。片桐洋一氏は『和歌大辞典』に「いっぽう、「和歌の浦」の「和歌」から「歌」「歌道」などを表象するようになるのも平安後期からである」と述べている。ここでは、和歌の隆盛と当該歌合の晴事を言祝ぐ表現となつている。

⑤おなじなかれ―和歌の技巧では「五十鈴川」「飛鳥川」「石清水」などととり合わせ、「同じ流れ」を「一貫する流れ」の意で「川の流れ」と「皇統」の意味を重ね合わせて用いる事が多い。「あまのがはおなじながれとききながらわたらむことのなほぞかなしき」(『後拾遺和歌集』雑一・八八八・周防内侍)。「後冷泉院うせたまひてよのうきことなどおもひみだれてこもりゐてはべりけるに、後三条院くらゐにつかせたまひてのち七月七日にまゐるべきよしおほせごとはべりければよめる」とあり、『讃岐典侍日記』下巻冒頭には、堀河院の崩御後宮仕えを退いていた讃岐典侍が院の後を継いで即位した鳥羽院に再出仕したときの心境を、さきの周防内侍の歌を引いて表現している(ただし第四句が「わたらむことは」)。周防内侍の歌では後冷泉院の後を継いだ後三条院が共に後朱雀院の皇子であることを「おなじながれ」と表現していた。当該歌も「皇統」の意が前面に出ており、「おなじなかれの君か代」は後堀河天皇、四条天皇の時代

の断絶を経て、後嵯峨院の御代に土御門天皇の流れが復活したことを指している。あるいは、後鳥羽院↓土御門院↓後嵯峨院の流れをも指しているか。

⑥月をみる―文運の隆盛を言祝ぎ、今回の歌合の晴儀に参加できた喜びを隠喩として表現しよう。

⑦業平朝臣わかみかと六十余こくの中ににたる所なしと申をき侍―『伊勢物語』第八十一段に「わがみかど六十余国の中に、塩竈といふ所に似たる所なかりけり」とあるのを踏まえた指摘。

【通釈】

五十三番 海辺月

左（歌） 勝

女房（後嵯峨院）

塩釜の浦の煙も絶えてしまったことだ、（塩焼く煙に遮られることなく）月を見ようとするの、海士の（風流な）しわざのために。

右（歌）

（承明門院）小宰相

和歌の浦（の文運盛んなこの時）よ、同じ流れの君の御代に（私も）再び立ち出（ることができ）て、（光栄にも）月（の如くあきらかな歌合の晴儀と歌）を見ることがだ。

〔判詞〕左（歌）は、この塩釜の浦こそ、業平朝臣が「帝の治めるわが国六十余国の中で（他に）似た所がない」と申しおきましたのにも猶過ぎて、（この絶景の所以を）珍しく有難い、海士のしわざと御解しなさいました。いまの世までどうして（こんな視点を）詠み残してごさいましたのか。（こんな例を見ると、次第に）世が下った

（など）とは、思うべくもごさいませんでした。諸々の道もまったくこうであってほしいと、頼もしいもごさいます。右歌は、なみたいていではこの（左歌の）傍らに立ち出ることができるとも思われませんので、あれこれと沙汰（批判）がないのを（せめての）面目とするべきでしょう。どう考えても左をもつて勝といたします。

〈五十四番〉

五十四番

左

太政大臣

① 蘆そよく難波の浪の数く②に身に③しめとすむ月の影哉

右 勝

俊成卿女

④しほるなよ月を袖の秋の夜にも⑤しほたれてもすまのうら人

⑥難波のなみの数く⑦に身に⑧しめとすむといへる

⑨けしき、さこそとすてかたく侍に、しほるなよ月を袖のとて、もしほたれてもすまのうら人といへる心

詞妖艶のすかた、ことによるしく侍にや、とふ人
あらはといへる本哥の心にもゆつりて、勝と申へきにや、

【校異】

イとて（群） □ 勝―ナシ（書） ハとて（内・支・群）

二 けしき—景氣（書・内・支・聚・群） 本 本哥の心—本哥心
（内・群）、本哥（支）へ 勝と申へきにや—勝とて申きにや（内）
【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【本歌】

〈右歌〉

『古今和歌集』雑歌下・九六二

田むらの御時に事にあたりてつづくにのすまといふ所にこもり
侍りけるに、宮のうちに侍りける人につかはしける

在原行平

わくらばにとふ人あらばすまの浦にもしほたれつつわぶとこたへよ

【語釈】

① 蘆そよく難波—「難波」は摂津国の歌枕。『万葉集』以来、「蘆」とのとり合わせて海辺の景を詠んだ例が多い。「月」を詠み込むのは「なにはえのあしまにやどる月みればわが身ひとつもしづまざりけり」（『詞花和歌集』雑上・三四七・「神祇伯頭仲ひろたにて歌合し侍るとて、寄月述懐といふことをよみてとこひ侍りければつかはしける」・顕輔）が早い例。当該歌合にも五十六番右・公相「をしてるや難波の空の夕なきにあしの末はを出る月影」がある（永青文庫本以外は全て「難波の浦」とする）。

② 数く—波のひとつひとつに。「かずかず」に月のひかりもうつりけり有明の庭の露のたま萩」（『夫木和歌抄』秋部二・「三十首歌人人

によませ給し時、草花露を」・実兼）。

③ 身にしめとすむ月の影哉—「身にしみよ」と言うように、月影が澄んでいる様子。「むらさきにたなびくものたえまよりみにしむつきのいろをみるかな」（『重之子僧集』・四七・「よぶかきつきをなごめはべりて」）。

④ しほるなよ月をは袖の秋の夜に—「しほる」は「絞る」。絞らずに濡らしたままで、袖に秋の月を宿しておいて欲しいという願う。「秋のよは露もなみだもあまるともしばらじ袖にやどれ月かげ」（『光経集』「月」・五七一）。「月をは袖の」は「昔思ふ涙のそこにやどしてぞ月をばそでの物としりぬる」（『新勅撰和歌集』雑歌一・一〇七五・「五十首歌よみ侍りける時」・守覚法親王）が先行例。

⑤ もしほたれてもすまのうら人—「もしほたる」は海藻に海水をかけて塩をとること。袖がぐったりとなるほど涙を流す意を掛ける。

「袖」をとり合わせた先行例には「恋をのみすまのうらびともしほたれほしあへぬ袖のはてをしらばや」（『新古今和歌集』恋歌二・一〇八三・「百首歌たてまつりし時、恋歌」・良経）がある。

⑥ けしき—歌論用語「景氣」。詞によって視覚的な映像・情趣が感じられることをいう。

【通釈】

五十四番

左（歌）

太政大臣（西園寺実氏）

蘆のそよく難波の浪のひとつひとつに、「身にしみよ」と澄む月の

光であるよ。

右（歌） 勝

俊成卿女

藻塩が垂れても（袖を）絞るなよ、須磨の浦人よ。月が袖に宿る秋の夜に。

〔判詞〕「難波の浪の数く身にしめとすむ」という景色はさぞや、と捨てがたうございますが、「しほるなよ月を袖の」といって「もしほたれてもすまのうら人」という心詞の妖艶の体は、殊更によろしくございますでしょうか。「とふ人あらば」という本歌の心にもお譲りして、（右歌を）勝と申すべきでしょうか。

〈五十五番〉

五十五番

左 勝

通忠

難波かたあまのたくなはなかしとも思ひそはてぬ秋の夜の月

右

実雄

昔よりきくや明石の浦の名も空にしらるゝ秋のよの月

左、あふ人からの秋の夜、あまのたくなはにひきなされ
てよろしく侍にこそ、右、明石のうらの名此程
おほくめなれ侍をもちて負侍へし、

【校異】

イ 勝—ナシ（書） □ 通忠—権大納言通忠（書・内・支・聚・群）
ハ 続後撰—ナシ（書・内・支・群）、続後撰、秋中（聚）
ニ 思ひそ—思ひも（群） ホ 実雄—権大納言実雄（書・内・支・聚・群）
ヘ 名も—浪（内・支・聚・群） ト 侍にこそ—侍
この（内・支・聚・群） リ おほく—ナシ（支） ヌ めなれ—
めされて（内・聚）、ためされて（支）、めなれて（群） ル もち
て—もて（群） ヲ 侍へし—侍れかし（書）

【他書所伝】

〈左歌〉

『続後撰和歌集』秋歌中・三五六・「十首歌合に、海辺月」・右近大

将通忠

なにはがたあまのたくなはながしともおもひぞはてぬ秋の夜の月

『歌枕名寄』難波篇・三六二四・「続後六」・右大将通忠

なにはがたあまのたくなはながしとも思ひぞはてぬ秋の夜の月

『題林愚抄』秋部三・四一四九・「同（続後撰）」・右大将通忠

なにはがたあまのたくなはながしとも思ひぞはてぬ秋のよの月

〈右歌〉ナシ

【本歌】

〈左歌〉『古今和歌集』恋三・六三六・「題しらず」・躬恒

ながしとも思ひぞはてぬ昔より逢ふ人からの秋のよなれば

【語釈】

①難波かた―撰津国の歌枕。「わすれじな難波の秋のよはのそらこと浦にすむ月はみるとも」(『新古今和歌集』秋上・四〇〇・「八月十五夜和歌所歌合に、海辺秋月といふことを」・宜秋門院丹後)。

②あまのたくなは―海人が潜水する際に、腰に結びつける栲縄。「栲縄」は、命綱を意味するとも言う。ここでは、「ながし」を導く序として用いられている。「伊勢の海にはへてもあまるたくなはの長き心は我ぞまさされる」(『後撰和歌集』恋一・五七九・「心みじかきやうにきこゆる人なりといひければ」・読人不知)。

③なかしとも―「長し」は、栲縄が長い、の意と、秋の夜が長い、の意を掛ける。

④明石の浦の名も―「明石の浦」は、播磨国の歌枕。地名は、月の名所であることに由来する。「名」には、名声・評判の意もある。「秋のよの月ゆゑえたる浦の名を雲にあらしのつげて過ぎぬる」(『最勝四天王院和歌』明石浦・一五二・慈円)。「明石がた月にみえ行く浦の名を秋とふ人や空にしるらん」(『建保名所百首』明石浦・五八六・範宗)。「かかりけるあきの今夜の月よりやうらをあかしの名にさだめけむ」(『名所月合』二二番右・四四・為家)。

⑤空にしらるゝ―空にはつきりと分かる、の意。「るる」は自発の助動詞。「これやこのあかしのうらととはずともそらにしらるる月のかげかな」(『有房集』一九七「たかまつのみやのうたあはせに、ところによりて月あかしといふことを」)。

⑥ひきなされて―「ひきなす」は、意識的に引きつける、の意。本歌は、長いと言われる秋の夜も、逢う人次第で、長くも短くも感じられる、という恋歌。通忠歌では、難波潟で秋の夜の月を眺めていると、夜が長いと思ひ定めることはない、と詠じられている。

⑦明石のうらの名此程おほくめなれ侍―④に掲げた例のほか、『院御歌合』では、他に、五十八番左(為経)・六十五番左(越前)が、「明石」の「月」を詠じる。為経歌について、為家は、「さきに申侍りつる明石の浦此ほと繁昌し侍にや」と評している。

【通釈】

五十五番

左(歌) 勝

(源) 通忠

海人の栲縄が長いように、秋の夜を長いともすつかり思い込むわけにもいかないな。難波潟で、(今宵の美しい)秋の夜の月を眺めていると、(思わぬうちに早く時間が過ぎて)。

右(歌)

(藤原) 実雄

昔から(音に)聞いている明石の浦の名も、秋の夜の月によって、空にはつきりと分かることだ。

【判詞】左(の歌)は、「あふ人からの秋の夜」が、「あまのたくなは」に意識的に引きつけられた趣向が良いように思われます。右(の歌)は、「明石のうらの名」に注目して詠んだ歌が、この頃多く目慣れていますので、負けとするのがよろしいでしょう。

〈五十六番〉

五十六番

左

權大^イ 定雅

①わたの原空もひとつに見わたせはうつらぬ月に波そかゝれる

右 勝

公相

を^カして^ルるや難波の空の夕なきにあしの末はを^ト出る月影

左、下句おろかなる心まとひて、わきまへ侍らす、

海より出て浪に入、よひのま、暁かたなどのことに

侍にや、さなく^リてはう^カつらぬ月にかゝる波思よるへき

事ともおほえ侍らす、右、させるとか侍らねは、

やすきにつきて以右為勝、

【校異】

イ 權大——權大納言(書・内・支・聚・群) □ う^カつらぬ——う^カつ

らぬ(書・内・支・聚・群) ハ 勝——ナシ(書) ニ 公相——權

大納言公相(書・内・支・聚・群) ホ 空——う^カら(書・内・支・

聚・群) ヘ まとひて——まよひて(内・支・聚・群) ト 侍ら

す——み侍らす(書) チ 海——川(支) リ さなく^テは——さなら

ては(書・内・支・聚・群) ヌ おほえ——思(内・支・聚・群)

ル 侍らねは——侍らぬ(内・支・聚・群) ヲ やすき——さすか(内

・支・群)、ナシ(聚)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『新拾遺和歌集』秋歌上・三九六・「宝治元年十首歌合に、海辺月」

・冷泉前太政大臣

おして^ルるや難波のうらの夕なきに蘆の末葉を出づる月影

『題林愚抄』秋部三・海辺月・四一五六・「同〔新拾〕」・冷泉前太政大臣

大臣

おして^ルるやなにはの浦の夕なきに蘆の末ばをいづる月影

【語釈】

①わたの原空もひとつに見わたせは——海と空とがひとつになつて見

える情景を指す。月がともに詠み込まれた例には、「わたのはらしほ

ぢはそらとひとつにてくものなみよりいづる月かげ」(『頼輔集』三

一・「おなじ家(右大臣家)の会、うみのよの月」、「おほ空とひと

つにすめる水うみの波路よりこそ月は出でけれ」(『三井寺新羅社歌

合』湖上月・四五・信親)などがある。

②う^カつらぬ月——諸本「うつらぬ月」とあり、永青文庫本の異本注記

に合致する本文はみられない。判詞後半部の「うつらぬ月」の部分

には異同がみられないことから、諸本に従うべきか。但し判詞で

も指摘されるように、海面に映らない月に波がかかるという情景は

想起しにくい。「うつらぬ」にはあるいは「移らぬ」の意味の層があ

り、静止した状態の月を詠んだとも考えられるが、判然としない。こうしたあいまいな表現が、判者為家の非難するところとなったか。

③難波の空―「空」は、諸本に従い「うら」とあるべきか。永青文庫本の親本までの段階で、仮名表記「そ」と「う」の字体類似による誤写が生じたと考えられる。

④うつらぬ月にかゝる波思よるへき事とおほえ侍らす―一般的に、「あきの海にうつれる月を立ちかへり浪はあらへど色もかはらず」

『後撰和歌集』秋中・三三二・清原深養父、「月に浪かかるをりまたありきやとふけの浦のあまにとはばや」『増基法師集』六・「月の海のおもにやどれるを、浪のしきりあらふを見て」などのように海面に映った月に波がかかるという情景を詠むことが多い点を為家は念頭においているか。

【通釈】

五十六番

左(歌)

権大納言(源) 定雅

大海原も空もひとつになった様子を見渡すと、うつらない月に波がかかっていることだ。

右(歌) 勝

(西園寺) 公相

難波の浦が夕風を迎えた今、蘆の葉の先あたりからのぼってくる月であることよ。

〔判詞〕左(歌の)下句は(私の)愚かな心が困惑して、歌意を理解できません。(月が)海面よりのぼって(それに波がかかり)波間

に入る(ように見える)、宵の間や明け方などの情景を詠んだのでし
ようか。そうでなくてはうつらない月に波がかかる情景は考えつく
とは思われません。右(歌)は取り立てて欠点はございませんので、
あつさりとしているという点により右(歌)を勝とします。

〈五十七番〉

五十七番

左

権大― 公基^ロ公もと 古本

秋の夜^ハの月^イにそみかく玉^ニくしけ^②ふた^③みのうら^④によする白波

右 勝

為教^ハ朝日^イ

鏡^ニみぬめの浦^トは名^チのみしておなし影^ニなる秋の夜の月
月にそみかく玉匣^ニふた^ニみの浦、そのゆへ侍^ニに、ます
かみみぬめのうらは名のみしておなしかけなると
思^⑦より侍^ニは、いさゝかめつらしく侍^ニにや、玉匣^ニより
も見^ル所侍^ルる、ますかみ^ニに心^ニうつり侍^ルぬる、ひかめ
にこそ侍^ラらめ、

【校異】

イ 権大― 権大納言(書・内・支・聚・群) ロ 公もと 古本―
ナシ(書・内・支) ハ の―は(書・内・支・聚・群) ニ 勝

―ナシ(書) ホ 為教朝臣(書・内・支・聚・群)

へ 続後撰―ナシ(書・内・支・群)、続後撰、秋中(聚) ト は

一の(内・支) チ 名のみ―なこり(支) リ 一に―にや(聚)

又 よりも―より(支) ル 侍る―ナシ(内・支・聚・群)

ヲ に心―心に(支) ワ 侍ぬる―ぬる(内・支)、ぬるか(支)、

侍るめる(聚)、ぬ(群) カ ひかめ―目(支)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『続後撰和歌集』秋歌中・三四九・「十首歌合に、海辺月といへる心をよませ給うける」・藤原為教朝臣

ますかがみみぬめのうらは名のみしておなじかげなる秋のよの月

『歌枕名寄』三犬女浦・四三五八・「続後六 月」・右兵衛督為教

ますかがみみぬめのうらは名のみしておなじかげなる秋のよの月

【語釈】

①月にそみかく―この詞つづきでの例は少なく、先行例としては「あきらけきみかげになるる池水を月にぞみがくよろづよの秋」(『建保

六年八月中殿御会』二五・信実)がみえる。当該歌とほぼ同時代の

例としては、「白妙になみのよせくる玉つ島月にぞみがくおきつ塩風」

(『建長三年九月十三夜影供歌合』百二十五番左・名所月・二四九・

雅言)、「くもりなくこほりてこゆる冬の夜の月にぞみがくいけのか

がみは」(『実材母集』五九四)等があげられる。「みかく」と「玉」

は縁語。

②玉くしけ―化粧道具を入れる櫛笥の美称。「恋ひつつも今日はあらめど玉くしげ明けなむ明日をいかに暮らさむ」(巻第十二・二八八四

・「正に心緒を述ぶる」)等、『万葉集』より用例がみえる。当該歌では、四句目の二見の浦にかかる枕詞として機能している。

③ふたみのうら―二見の浦。播磨国と伊勢国それぞれに該当する地

があり、作例も両方確認される。櫛笥の縁語「蓋」の連想から二見浦と詠み込まれる例の早いものとして、「ゆふづくよおぼつかなきを

玉匣ふたみの浦は曙てこそ見め」(『古今和歌集』羈旅歌・四一七・(詞書省略)・兼輔)がみえる。「玉匣ふたみのうらの秋の月あけまくつ

らきあたら夜の空」(『拾遺愚草』院五十首建仁元年・秋・一八〇一)、

「秋の月ひかりぞまさる玉くしげふたみのうらの明方の空」(『正治

後度百首』暁・六二・後鳥羽院)等は、兼輔詠の影響を受けた例。

④白波―白くたつ波の意。「あけてみるかひもあるかなたまくしげふ

たみのうらによするしらなみ」(『伊勢大輔集』一五六・「かただがふ、

とて人のもとにいきたりしに、いへあるじのちごに丁子をいれてと

らせたりしかば、おやのおこせたりし」)、「月影のふたみのうらにか

たぶけばかがみをあらふおきつ白浪」(『出観集』秋・四二六・「暁望

浦月」)等の先行例がみえる。

⑤ます鏡―「まさかがみ」等とも。よく澄んではつきり映る鏡が原

義。「見る」「影」などに掛かる枕詞としてよく用いられる。

⑥みぬめの浦―敏馬の浦。摂津国の歌枕。「ます鏡」は「みぬめ」の

枕詞として機能しており、先行例としては「まそ鏡敏馬の浦は百舟の過ぎて行くべき浜ならなくに」(『万葉集』巻第六・雑歌・一〇六六・「反歌二首」)等、早くから認められる。当該歌では「見ぬ」の意を掛けており、「わが恋は君をみぬめのうらによるなみのしたくさかわくまぞなき」(『林下集』二〇八・「恋廿首よみしに」)、「よそにだにみぬめの浦にすむあまは袖にたまらぬ玉やひろはん」(『壬二集』院百首・恋・八七二)、「わすれ貝それも思ひの種たえて人をみぬめの浦みてぞぬる」(『拾遺愚草』内大臣家百首・恋廿五首・一一七二)、「秋の鹿わが身こす浪ふく風につまをみぬめのうらみてぞ鳴く」(同・権大納言家三十首・二〇六八・「海辺鹿」)、「ますかがみみぬめの浦の名もしらずたがおもかげにかけてこふらむ」(『光明峰寺撰政家歌合』廿番・寄衣恋・三九・親季)等、恋の情趣で詠み込まれる先行例が多く、為家判「いさゝかめつらしく侍にや」はその点を指摘したもの。月との取り合わせでは「ます鏡みぬめの浦は波のうへにかすめる月の名にこそ有りけれ」(『洞院撰政家百首』春・霞・四三・知家)が先行例として確認される。

⑦思より―思い寄る。思いつく意。後例だが、九条基家は、宗尊親王詠「雪はたがことのはなればふるままにたのめぬ人の猶またらん」(『宗尊親王三百首』冬・一八九)を「此風情、凡夫不思寄歎」と評している。

【通釈】

五十七番

左(歌)

権大納言(西園寺)公基

秋の夜の月にこそ(照らされて)まさに光り輝いている、二見浦に寄せる白波は…

右(歌) 勝

(藤原)為教朝臣

敏馬の浦(「見ぬめの浦」とは名ばかりで他と同じぐらい澄んで明るい光である秋の夜の月よ…

「判詞」「月にそみかく玉匣ふた見の浦」という表現は、その由緒がありますが、「ますかゝ見みぬめのうらは名のみしておなしかける」と(いう表現に)思いあたりますのは、やや珍しいでしょうか。玉匣(の歌)よりも見所がありました、ますかゝみ(の歌)に心が移り(映り)ました。間違った見方でしょうか。

〈五十八番〉

五十八番

左

イ中一 為経

おほかたにくもりなき夜の月なればさそな明石の浦もさやけき

右 勝

信実朝臣

いさこよひなたの海士の子しるへせよしほちの月を漕出てみん

左くもりなき夜の月、その心すてかたく侍に、さきに

申侍りつる明石の浦、此ほと繁昌し侍にや、右

いさこよひなたの海士の子なといひしりて、さる姿と
みえ侍れば、又勝侍へし、

【校異】

イ 中——中納言(書・内・支・聚・群) □ おほかたに—お
ほかた(内) ハ さそな—さこそ(内・支・聚・群) ニ 勝—ナ
シ(書) ホ いさこよひ—いさよひの(支) ヘ さきに—さき(内
・聚) ト 侍りつる—侍る(書・支) チ 此ほと—ことに(内・
支・聚・群) リ 繁昌し—繁昌して(聚) ヌ いさこよひ—い
さよひ(支) ル 又—ナシ(内・支・聚・群) ヲ 侍—たる(聚)
【他書所伝】

〔左歌〕ナシ

〔右歌〕

『夫木和歌抄』秋部四・「宝治十首歌合、海辺月」・五六五六・信実
朝臣

いさこよひなだのあまのこしるべせよ塩路の月をこぎ出でてみん

【語釈】

①くもりなき夜の月なれば—「いつよりもくもりなきよの月なれば
みる人さへにiriがたきかな」(『後拾遺和歌集』雜一・八四一・「永
承四年内裏歌合に月をよめる」・江侍従)は二句が一致する先行例。
「神もみよくもりなきよのかがみ山いのるかひある月ぞさやけき」
(『続後撰和歌集』賀歌・一三六三・「九月十三夜十首歌合に、名所

月・成茂)、「よもの海風しづかなる浪のうへにくもりなきよの月を
見るかな」(同・一三六一・「寄月祝」・良経)は「くもりなきよの(月)」
又「くもりなきよの月」が一致する先例。「よ」には「夜」「世」「代」
が掛けられていて、「くもりなき夜の月」に太平の御代の意が含意さ
れている。

②なたの海士の子—下句の「しほちの月を漕出してみん」と同じく、
先行例を見ない。

③さきに申侍りつる明石の浦—本歌合五十五番右歌「昔よりきくや
明石の浦の名も空にしらるゝ秋のよの月」(実雄)について、為家は
「右明石のうらの名、此程おほくめなれ侍をもちて、負侍へし」と
評した。

④此ほと繁昌し侍にや—ここでの「繁昌し」は、「評判になつてゐる」
「ひっぱりだこになつてゐる」の意。『撰政家月十首歌合』は建治元
年(一二七五)に開催されたが、その二十三番右(勝)の歌は「く
るるよはあさぢがにはの月ならでまたまつむしよたれたのむらん」
(阿仏尼)で、これについて判者の真観(藤原光俊)は「右は人を
ぞたのむくるる夜ごとに、と申す歌近年繁昌したる本歌にて、これ
をへつらはれたるにやとぞみたまふれど、庭もたしかに侍れば、ま
さり侍るべくや」と評している。

⑤いひしりて—詠みかたを十分に心得ている、言語表現を知悉して
いるの意。俊成も「すがたもいひしりてきこゆれば」(『中宮亮重家
朝臣家歌合』)などと評している。

【通釈】

五十八番

総じて曇りない夜の月なので、(その月の光のもと) さぞかし明石の浦もさやかなことであろうよ。

右 (歌) 勝

(藤原) 信実朝臣

さあ今夜、灘の海士の子(私を)案内してくれよ。塩路の月を(舟を)漕ぎ出して見よう。

【判詞】左(歌)の、「曇りなき夜の月」は、その趣が捨てがとうございですが、(一方)先に申しました(ように)「明石の浦」は(最近)殊にひっぱりだこ(の、新鮮味のない表現)ではないでしょう。右(歌)は「いさよひなたのあまの子」など(と言って)表現を十分に心得て、一つの(典型的な)姿と思われまますので、勝ちが適当でございましょう。

〈五十九番〉

五十九番

左 勝

名にしほふなかるの浦の秋のよにゆくともみえてすめる月哉

右

韋雅光

藤通成

見わたせは野嶋かさきの波まより山のはならて出る月影

野嶋かさき、ふたつなき物と思しをみなそこにと

いへる古今下句たかふ所なく見え侍うへに、なかるの

浦、夜雲収盡おもかけまておもひやらるゝかた侍れば、

以左為勝、

【校異】

イ 勝―ナシ(書) 口 右衛―右衛門督(書・内・支・聚・群)

ハ に―の(支) ニ 右近―右近中将(書・内・聚・群)、右近

衛中将(支) ホ 古今下句―古今哥下句(書)、古今の哥下句(内

・支・聚・群) ヘ 夜雲収盡―夜雲盡(群) ト 以左為勝―左

為勝(支)

【他所書伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①名にしほふなかるの浦―「長居の浦」は摂津国の歌枕。現在の大阪市住吉区辺りで、「住吉」とともに詠まれる例が多い。「すみよしとあまはつぐともながるゝなすな人忘草おふといふなり」(『古今和歌集』雑上・九一七・「あひしれりける人の住吉にまうでけるにのみてつかはしける」・忠岑)は、『新撰和歌』『古今和歌六帖』『歌枕名寄』(『新撰和歌』『古今和歌六帖』は第二句「あまはいふとも」)等に採られる有名な歌。

② **すめる月哉**—「澄む」と「住む」を掛ける。澄んだ月が長居の浦に長く留まる（＝「長居」「住む」）様子を詠む。類想歌に「秋の夜はながるのうらにとまりしてのどかにてらすありあけの月」（『永縁奈良房歌合』七番左・四一・上総君）がある。

③ **野嶋かさき**—淡路国の歌枕。「月」を詠んだ先行例には「こととはむ野島がさきのあま衣浪と月とにいかがしをるる」（『新古今和歌集』秋歌上・四〇二・「題しらず」・七条院大納言）等がある。

④ **波まより山のは**ならて出る月影—「波間」から「月」が「出る」様子を詠んだ先行例に「しがのうらやとほざかり行く浪間よりこほりて出づるあり明の月」（『新古今和歌集』冬歌・六三九・「摂政太政大臣家歌合に、湖上冬月」・家隆）等がある。

⑤ **古今下句たかふ所なく**—「ふたつなき物と思ひしをみなそこに山のはならでいづる月かげ」（『古今和歌集』雑上・八八一・「池に月の見えけるをよめる」・貫之）の下句と一致することをいう。

⑥ **夜雲収盡おもかけ**までおもひやらるゝかた侍れは—為家は左歌について、『和漢朗詠集』「秋水漲来船去速 夜雲収尽月行遅」（秋・月・二五三・野展郢 ※正しくは「野展」）の「月行遅」をふまえて解釈する。

【通釈】
五十九番

左（歌） 勝 右衛門（督源） 通成
有名な長居の浦の秋の夜に、西に行くとも見えないで（ずっと空

に）住んでいる、澄んだ月であるよ

右（歌）

右近（衛中将源） 雅光

見渡してみれば、山の端ではなく、野嶋崎の波間から出る月の光であるよ。

「判詞」「野嶋かさき」（の歌は）、「ふたつなき物と思しをみなそこに」といいました『古今和歌集』歌の下句と違う所がなく見えます上に、「なかるの浦」（の歌は）、「夜雲収盡」の情趣までも想像される所がありますので、左をもって勝とする。

〈六十番〉

六十番

左

兵部 有教

① わたの原八重の塩路に雲消て月すみのほるすまのうら風
右

弁内侍

④ もしほくむ夜はのさ衣あはれにそあまのしわさは月やとしける
左、けしき思やられて、みたる心ちし侍へし、右、さき
にありかたくみえ侍りつるあまのしわさ、おなしこと
はに優してこれまでかたひき侍ぬる、偏頗にや侍らん、

【校異】

イ 兵部—有教—兵部卿有教 (書・内・支・聚・群) □ 消て—さ

えて (支) ハ 右—右 勝 (内・支・聚・群) ニ けしき—景氣

(書・内・支・聚・群) ホ し—ナシ (内・支・聚・群)

へ 侍りつる—侍へる (書) ト ことはに—ことみに (支)、こ

と (群) チ 優して—優にして (内・支・聚)、優美にして (群)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①わたの原八重の塩路に—「わたの原」は、大海原、広々とした海、の意。「八重の塩路」も、遠く隔たった海路を意味する。「わたのはらやへの塩路をみわたせば浮きたる雲につづくしら波」(『宝治百首』 雑・「海眺望」・三八八五・公相)。

②月すみのぼる—月が冴え冴えと空にのぼる、の意。「嵐吹く有明の空に雲きえて月すみのぼるたかまどのやま」(『長明集』三三三・「月」)。

③すまのうら風—須磨の浦は、摂津国の歌枕。浦を吹く風が雲を吹き消す。「秋の月浪ちもとほくかげさえて心さへにもすまのうらかぜ」(『後鳥羽院御集』浦月・一四八九)。

④もしほくむ—海水を汲む、の意。「もしほくむ袖の月かげおのづからよそにあかさぬすまのうら人」(『新古今和歌集』雑下・一五五七

・「和歌所歌合に、海辺月といふ事を」・定家)。

⑤夜はのさ衣—ここでは、海人が潮を汲んで潮に濡れた衣、の意。「すまのうらしほくむあまの衣手にぬれてぞやどる在明の月」(『建保名所百首』須磨浦・三八八・家衡)。

⑥あまのしわさ—海人の行い。海人の仕事。「よさの海のあまのしわざ」とみしものをさもわがやくとたるるしほかな」(『和泉式部集』五六三)。

⑦けしき思やられて、みたる心ちし侍へし—「けしき」については、五十四番判詞参照。「みたる心ちす」は、眼前で見るかのような趣がある、の意。

⑧さきにありかたくみえ侍りつるあまのしわさ—「あまのしわざ」は、本歌合・五十三番左・女房(後嵯峨院)歌に詠み込まれ、為家は、判詞で「めつらしくありかたきあまのしわさと見たまへ侍れ」と評している。

⑨おなしことはに優してこれまてかたひき侍ぬる—後嵯峨院の歌と同じ詞を用いていることで優遇して、この歌までも依怙最厚してしまします、の意。「優す」は、相応に待遇する、の意。「亡き跡にも、さしも道に心ざし深かりし者なればとて、優して十八首を入れられたりければ」(『無名抄』「道因歌に志深事」岩波大系本)。

【通釈】

六十番

左(歌) 勝

(源) 有教

広々とした海の、遠く海路の向こうに雲が消え、月が冴え冴えとのぼる須磨の浦には風が吹き渡る。

右(歌)

弁内侍

海水を汲む海人の、夜の衣は(いかにも)気の毒に見えるが、あわれにも、海人の行いは、その衣に、月を宿したのだ。

〔判詞〕左(の歌)は、その情景が思いやられて、眼前で見ているかのような心持がするようです。右(の歌)は、前の番いで、素晴らしく思われた「あまのしわざ」と、同じ詞であることで優遇してしまい、この歌まで依怙最厚してしまいましたのは、不公平でしょうが。

〈六十一番〉

六十一番

左 持

師 継

漕出しまつらの海をなかめつゝ月になれぬる秋のさよひめ

右

雅忠朝臣

白妙の袖^③の浦による波の数さへ見えて月そさやけき

秋のさよひめはめつらしく、数さへ見えてはめなれて侍れと、左はちからをいれ、右はやすくいひくたして、やうかはりたる持と見え侍にや、

【校異】

イ 持—ナシ(書) 口 師継—右近中将師継(書・内・聚・群)、

右近衛中将師継(支) ハ 漕出し—すきいてし(支) ニ 海—

浦(内・聚)、海(群) ホ 月そ—月に(内・支)、月そ(聚)

へ さよひめは—さよひめ(内・支・聚・群) ト いひくたして

—いひ出して(内・支・聚)、いひなして(群) チ やう—ナシ(内

・聚) リ かはりたる持と—かはりたる躰侍と(支)、かはりたる

躰、持と(群)

【他書所伝】

〈左歌〉

『夫木和歌抄』雑部五・海・一〇三五五・「まつらのうみ、筑前」

建長元年歌合」・花山院内大臣

漕出でて松浦の海をながめつゝ月になれぬる秋のさ夜姫

〈右歌〉

『源承和歌口伝』一一一・雅忠卿

白妙の袖しのうらによる浪の数さへみえて月ぞさやけき

【語釈】

①まつらの海—肥前国の歌枕。任那へ行く大伴佐提比古の船を高山から領巾を振って見送った松浦佐用姫の伝説がある(『万葉集』巻第五、『肥前国風土記』)。

②秋のさよひめ—判詞で「秋のさよひめはめつらしく」と指摘されるように、「さよひめ」のひれふる袖もややすし秋をまつらの山の下風」

『建保名所百首』夏十首・松浦山 筑前国・三五二・家衡) など夏の歌として詠まれる例が多い。

③袖しの浦―出雲国の歌枕 (『八雲御抄』卷五)。駿河国・伊勢国とする説もある。「からころもそでしのうらのうつせがひむなしきこひにとしのへぬらん」(『後拾遺和歌集』恋一・六六〇・藤原国房)、「から衣袖しのうらの月影はむかしかけける玉にやあるらん」(『清輔集』一四一・「月三十五首のなかに」)、「浪かくる袖しのうらの秋の月やどかるままにまづやしぼらん」(『拾遺愚草』下・二三六一・「仁和寺宮より忍びてめされし秋題十首、承久二年八月) 秋旅」などの例がある。

④数さへ見えて―「白雲にはねうちかはしとぶかりのかずさへ見ゆる秋のよの月」(『古今和歌集』秋歌上・一九一・読人不知) に拠る表現。

【通釈】

六十一番

左(歌) 持

(藤原) 師繼

(佐提比古が舟を) 漕ぎ出した松浦の海をながめつつ、月にも馴れ親しんだ様子の秋の佐用姫であることよ。

右(歌)

(源) 雅忠朝臣

袖師の浦に寄せる波の数までが見えるほど、月がさやかであるよ。

【判詞】(左歌の)「秋の佐用姫」は珍しい表現であり、(右歌の)「数さへ見えて」はありふれた表現でございませうけれど、左(歌)は力

が入った様子で詠まれており、(また)右(歌)はあつさりと言いで下っていて、それぞれ様子が変わった持とみえますことでしょうか。

〈六十二番〉

六十二番

左 勝 沙弥蓮性

①うな原やなこの塩干の真砂ちいきよき月夜のさもそさやけき

右 下野

ふけゆけは浦こく舟の音までもさすみまさる夜はの月哉

漕船のをとまてすみまさる心、きよなれて侍にや、なこの塩干のまさこち、まことにきよけに侍れは、

以左為勝、

【校異】

イ 勝―ナシ(書) □ そーや(群) ハ ふけ―ふかく(内)、

深(支) ニ まさる―わたる(支・聚・群) ホ 哉―かな(群)

へ すみまさる―まさる(内)、すみわたる(聚) ト きよけ―よ

け(内・支) チ 侍れは―みえ侍れは(書・内・支・聚・群)

リ 以左―左(支)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 　〈右歌〉ナシ

【語釈】

①うな原や—海の広々とした様への感嘆を表す。「うなばらやおきつしらなみたちくらしやそしまめぐりやすからふね」(『千類集』九〇・「心細十首」)等が早い例。なお、「うな原や」を初句に置く例は、勅撰集では「うなばらやたゆたふ浪のはてもなしいづくなるらんくものをちかた」(『続古今和歌集』雑歌下・一七二六・「宝治二年百首歌たてまつりけるに、海眺望を」・実氏)までみえない。

②なこの塩干—「なこ」は、奈呉(名児)の海。「奈呉の海人の釣する舟は今こそば舟棚打ちてあへて漕ぎ出め」(巻第十七・三九五六・「大目秦忌寸八千島の館に宴する歌一首」)、「奈呉の海の沖つ白波しくしくに思ほえむかも立ち別れなば」(巻第十七・三九八九・「大目秦忌寸八千島の館にして守大伴宿祢家持に餞する宴の歌二首」)、「東の風いたく吹くらし奈呉の海人の釣する小舟漕ぎ隠る見ゆ」(巻第十七・四〇一七・家持)等は、越中の歌枕。一方『万葉集』には、「住吉の名児の浜辺に馬立てて玉拾ひしく常忘らえず」(巻第七・雑歌・一一五三)ともみえ、摂津の国にも同名の海辺があったことが伺える。塩干は、引き潮の意で、「奈呉の海に潮のはや干ばあさりしに出でむと鶴は今ぞ鳴くなる」(『万葉集』巻第十八・四〇三四・(詞書省略)、「うなばらやなごのしほひのはま千鳥なくねもさえてうら風ぞ吹く」(『新和歌集』冬歌・三三一・「海辺千鳥」)・忠茂)、「なこの海しほひ塩見つ磯の石となれるが君が見えかくれする」(『頼政集』

四三五・「時時見恋」)、「ひとりぬるなごのしほひのいそまくら浪たかくみゆたごのうらふぢ」(『出観集』一二九・「旅宿藤花」)等、用例が散見する。

③真砂ちに—引き潮であらわれた真砂に月光が照り映える趣向。後例だが、「霰ちるなごのはまべのまさごぢにいづれをもとの玉とひろはん」(『建長八年百首歌合』五百八十二番右・一一六四・源具氏)とみえる。

④浦こく舟の音までもさすみまさる夜はの月—月の輝きと静寂の中で物音という視覚と聴覚との取り合わせ。「月影にふえのねいたくすみぬなりまだねぬ秋のよやふけぬらむ」(『惠慶法師集』二四・「月夜に、ふえふきて、をとこゆく」)、「あき風のふけひのうらに空はれて波のおとまですめる月かな」(『隆信集』二〇一・「海辺秋月」)、「てる月の光と共にながれ来ておとさへすめる山川の水」(『慈鎮和尚自歌合』大比叡十五番・七番左・一三)等は同様の趣向。類似歌として「難波がた蘆間を分けて漕ぐ舟の音さへすめる秋の夜の月」(『治承三十六人歌合』海上月・九七・寂念)、「玄玉和歌集』天地歌下・二〇七)があげられる。

【通釈】

六十二番

左(歌) 勝

沙弥蓮性

広々とした海よ、奈呉の(海辺の)引き潮にあらわれた真砂を敷いた路に清らかな月夜が本当にあざやかである。

右(歌)

下野

(夜が) 更けていくと浦を漕ぎゆく舟の音までもいやまさに一層澄む夜半の月であるなあ…

〔判詞〕漕ぐ舟の音まで澄み勝る(という一首の)心は、聞き慣れていますでしょうか。なこの塩干の真砂路(という表現)は、本当に美しいですので、左歌を勝とする。

〈六十三番〉

六十三番

左

為氏 朝臣

長しとも月におほえぬ秋のよのなとかふけるの浦といふらん

右 勝

少将内侍

秋をへてよわたる海士のすて衣塩なれにける袖の月哉

左、なとかふけるのといへるほど、思ふ所ありけに
みえ侍を、月におほえぬといへるや、たゞことはに
侍らん、右、夜わたる海士のすて衣しほなれにける
袖の月は見所侍へきにや、右勝侍へし、

【校異】

イ 月に一月は(内・支) 口 よのよを(書・内・支・聚・群)

ハ 勝―ナシ(書) ニ ける―けり(支) ホ 月哉―月かけ(内)

・支・聚・群) ヘ なとか―など(内) ト と―など(書・内)

・支・聚・群) チ ほと―程と(支) リ 思ふ―ナシ(支)

又 と―など(内・支・聚・群) ル いへるや―いへるにや(支)

ヲ たゞことは―たゞ哥言葉(内) ワ 右―ナシ(書・内・支・

聚・群) カ 夜―世を(支・群) ヨ しほ―ナシ(内・支・聚

・群) タ 侍へし―侍へし(書・内・支・聚・群)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①ふけるの浦―和泉国の歌枕。「時つ風吹飯の浜に出で居つつ贖ふ命は妹がためこそ」(『万葉集』巻第十二・悲別歌・三二〇一)、「あまつ風ふけひの浦にゐるたづのなとか雲井にかへらざるべき」(『新古今和歌集』雑歌下・一七二三・「殿上はなれ侍りて、よみ侍りける」・清正)などの例がみえる。「夜が更ける」との掛詞の例としては、「しかのねをあはれときくにあきの夜のふけひのうらにちどりさへなく」(『国基集』一〇〇・「いづみのくにふけひのうらといふところ」に、まかりとどまりたりしに、よふけてやまのかたにはしかのこゑきこえ、なぎさにはちどりなきしかば)、「まぢかねてさよもふけひのうらかぜにたのめぬ浪のおとのみぞする」(『千載和歌集』恋歌四・八七九・「寄浦恋といへるこころをよめる」・二条院内侍参河)などがある。

②海士のすて衣塩なれにける―「すずか山いせをのあまのすて衣しほなれたりと人やみるらん」〔後撰和歌集〕恋三・七一八・「女のもとにきぬをぬぎおきて、とりにつかはすとて」・伊尹と類似した発想。

③たゞことは―歌語としてふさわしくない、俗な表現。「月があまりに美しいので、月に向かっていると時間が経つのを意識しない」という意を「月におぼえぬ」と縮約した点を指すか。これに類似した表現は「くもれかしながむるからにかなしきは月におぼゆる人の面影」〔新古今和歌集〕恋歌四・一二七〇・「題しらず」・八条院高倉、「草まくら都の秋をさそひきて月におぼゆるふるさとの空」〔後鳥羽院御集〕建仁元年三月内宮御百首・雑二十首・二八三）などにみられる。

【通釈】

六十三番

左（歌）

（藤原）為氏朝臣

（月が美しいので）長いとも月に向かっていると意識しない秋の夜なのに、どうして吹飯（夜が更ける）の浦というのだろうか。

右（歌） 勝

少将内侍

幾秋を経て、暮らしを立てている海人の脱ぎ捨てた衣の、潮でぐつしよりと濡れている袖に映った月（の美しさ）よ。

【判詞】左（歌の）、「なかふけるの」というあたりの表現は、思うところがあるように見えました。が、「月におぼえぬ」という表現は、

（歌語ではなく俗な）ただの言葉のようでございます。右（歌）の、「よわたる海士のすて衣塩なれにける袖の月」という表現は見所がございませうか。右が勝でございます。

〈六十四番〉

六十四番

左 勝

経朝朝臣

和哥のうらや昔にかへる波の上に光あまねき秋のよの月

右

沙弥禅信

里の海士のしほたれ衣ほしやらてさなからやとす秋の夜の月

右、上下かなひてよろしく侍に、左、わかぬ浦、昔

にかへるとをきて、光あまねき秋の夜の月といへる、

尤宜、賞翫可為勝、

【校異】

イ 勝―ナシ（書）、持（内・支・聚）

の浦や（聚） ハ かへる―ナシ（支） ニ をきて―をき（内・支

・聚・群） ホ 尤宜―尤是（書・内・支・聚・群）

（内・支・聚）

【他書所伝】

〈左歌〉

『雲葉和歌集』秋歌中・五六四・「仙洞にて十首歌合侍りしに、浦月」

・藤原経朝朝臣

和歌のうらやむかしにかへるなみのうへにひかりあまねき秋の夜の月

『続拾遺和歌集』賀歌・七四一・「宝治元年十首歌合に、海辺月」・

正三位経朝

わかの浦やむかしにかへる浪の上にひかりあまねき秋の夜の月

『歌枕名寄』玉津島篇・八三三七・「続拾十」・正三位経朝

わかのうらやむかしにかへる波のうへにひかりあまねき秋のよの月

〈右歌〉

『続後撰和歌集』秋歌中・三五〇・「十首歌合に、海辺月といへる

心をよませ給うける」・源俊平

すまのあまのしほたれ衣ほしやらでさながらやどす秋のよの月

『歌枕名寄』阪磨・四二五一・「続後六」・源俊平

須まのあまの塩たれ衣ほしやらでさながらやどす秋のよの月

【語釈】

①和哥のうら—紀伊国の歌枕。同地にある玉津島神社は、和歌の神として衣通姫を祀る。ここでは、和歌の道をも意味する。「ふくかぜものどけききみのよよのあとむかしにかへるわかのうらなみ」(『新古今竟宴和歌』一七・具親)。

②昔にかへる—古の聖代に立ち返る、の意。「よものうみむかしにか

へるなみのうへにはまびといまやみかりまつらん」(『続古今和歌集』雑中・一六七四・「建保四年人人に百首歌めしける次によませ給ひける」・道家)。

③光あまねき—光が遍く照らす。治世を言祝ぐ意を込める。「世をてらすあまねき空の光にも月をぞ千世のかけに頼まん」(『紫禁和歌集』一〇〇五・「同八月十五日夜今夜庚申於殿上人人詠歌出て、当座」・順徳院)。

④しほたれ衣—海人が潮を汲んで潮に濡れた衣。「須磨の海士の塩たれごろも打ちはへてきてはなどみぬなみの月影」(『最勝四天王院和歌』阪磨浦撰津・一四一・後鳥羽院)。

⑤さなから—そのまま。「夏の夜は山のはいづる月影のさながらのこる在明のそら」(『宝治百首』夏月・一〇四九・公相)。

【通釈】

六十四番

左(歌) 勝

(藤原) 経朝朝臣

和歌の浦の、古の聖代に立ち返る波の上で、秋の夜の月が普く照らすことだ。

右(歌)

沙弥禅信

里の海人の潮垂れ衣をすつかり乾かしてしまふことができなくて、(美しい)秋の夜の月をそのまま宿していることだ。

【判詞】右(の歌)は、上句と下句がぴったりと合っていて悪くはありませんが、左(の歌)は、「和歌の浦」「昔に返る」と置いて、「光

あまねき秋の夜の月」というのは、いかにも良い表現で、賞賛して勝とすべきでしょう。

〈六十五番〉

六十五番

左 勝

越前

明石かた塩やく海士の煙たに①雲こそなけれ月のすむ夜は

右

前権大—為家

秋の夜の名たかのうらの塩風に影さしのほる月のさやけさ

左月のすむ夜はといへる程、こひねかふへきすかた

にあらず侍を、右おなし文字あまりにおほく侍

にや、歌合にはとかめたる事も侍れは、尤負侍へし、

【校異】

イ 勝—ナシ (書) 口 雲—くま (書)、今 (内・支・聚・群)

ハ 夜は—よ (支・聚・群) ニ 前権大—権大納言 (書・内・

支・聚・群) ホ すかたに—すかたには (内・支・聚・群)

へ あまり—あやまり (内) ト 事も—言葉に (内・聚)、事に (支

・群) チ 尤—右 (内・支・聚・群)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①雲こそなけれ—永青文庫本の「雲こそ」は孤例であって、書陵部本は「くまこそ」、その他の諸本は「今こそ」となっている。一首の意味から判断して「くま」が適当と思われるので、ここでは「くまこそ」を採用して通釈する。

②名たかのうら—紀伊国の歌枕。『五代集歌枕』『八雲御抄』は遠江とする。高名な、評判の、の意を掛けて用いられることが多い。「紫の名高の浦のなびき藻の心は妹に寄りにしものを」(『万葉集』巻第十一・二七八〇)はその一例。

③右おなし文字あまりにおほく侍にや、歌合にはとかめたる事も侍れは—『袋草紙』下巻に賀陽院七番歌合(寛治八年八月十九日判者経信卿)二番の筑前(左)と大江匡房(右)の番の、匡房歌(「しら雲とみゆるにしろしむよし野のよしの山の花ざかりかも」)について、筑前の陳状に「輔親が母に申しし事を幼少にて承りしかば、「同字三はいかがせむ。四以上あらん歌をば、公けの歌にはとり出さじ」と申ししに、右歌「し」の字四候ふに、持と定められたるが、口をしきなり」と云々とある。文中の母は輔親の子伊勢大輔。この後に顕昭が匡房の歌を「シの字五、ノの字五なり」と訂正したことなどが記され、清輔は、同字が多くてもすぐれた歌は勝っているとして、具体例を列挙している。当該為家歌は「の」の字六。但し自作を負けとするための理由付けと考えればよからう(『袋草紙』の引用

〈左歌〉

『雲葉和歌集』秋歌中・五六四・「仙洞にて十首歌合侍りしに、浦月」
・藤原経朝朝臣

和歌のうらやむかしにかへるなみのうへにひかりあまねき秋の夜の月

『続拾遺和歌集』賀歌・七四一・「宝治元年十首歌合に、海辺月」
正三位経朝

わかの浦やむかしにかへる浪の上にひかりあまねき秋の夜の月

『歌枕名寄』玉津島篇・八三三七・「続拾十」・正三位経朝

わかのうらやむかしにかへる波のうへにひかりあまねき秋のよの月

〈右歌〉

『続後撰和歌集』秋歌中・三五〇・「十首歌合に、海辺月といへる心をよませ給うける」・源俊平

すまのあまのしほたれ衣ほしやらでさながらやどす秋のよの月

『歌枕名寄』阪磨・四二五一・「続後六」・源俊平

須まのあまの塩たれ衣ほしやらでさながらやどす秋のよの月

【語釈】

①和哥のうら—紀伊国の歌枕。同地にある玉津島神社は、和歌の神として衣通姫を祀る。ここでは、和歌の道をも意味する。「ふくかぜものどけききみのよよのあとむかしにかへるわかのうらなみ」(『新古今竟宴和歌』一七・具親)。

②昔にかへる—古の聖代に立ち返る、の意。「よものうみむかしにか

へるなみのうへにはまびといまやみかりまつらん」(『続古今和歌集』雑中・一六七四・「建保四年人人に百首歌めしける次によませ給ひける」・道家)。

③光あまねき—光が遍く照らす。治世を言祝ぐ意を込める。「世をてらすあまねき空の光にも月をぞ千世のかけに頼まん」(『紫禁和歌集』一〇〇五・「同八月十五日夜今夜庚申於殿上人詠歌出て、当座」・順徳院)。

④しほたれ衣—海人が潮を汲んで潮に濡れた衣。「須磨の海士の塩たれごろも打ちはへてきてはなどみぬなみの月影」(『最勝四天王院和歌』諏磨浦撰津・一四一・後鳥羽院)。

⑤さなから—そのまま。「夏の夜は山のはいづる月影のさながらのこる在明のそら」(『宝治百首』夏月・一〇四九・公相)。

【通釈】

六十四番
左(歌) 勝 (藤原) 経朝朝臣

和歌の浦の、古の聖代に立ち返る波の上で、秋の夜の月が普く照らすことだ。

右(歌)

沙弥禅信
里の海人の潮垂れ衣をすっかり乾かしてしまふことができなくて、(美しい)秋の夜の月をそのまま宿していることだ。

【判詞】

右(の歌)は、上句と下句がびつたりと合っていて悪くはありませんが、左(の歌)は、「和歌の浦」「昔に返る」と置いて、「光

ありませんが、左(の歌)は、「和歌の浦」「昔に返る」と置いて、「光

あまねき秋の夜の月」というのは、いかにも良い表現で、賞賛して勝とすべきでしょう。

〈六十五番〉

六十五番

左 勝^イ

越前

明石かた塩やく海士の煙たに^①雲こそなけれ月のすむ夜は

右

前権大^フ為家

秋の夜の名たかのうらの塩風に影さしのほる月のさやけさ

左月のすむ夜はといへる程、こひねかふへきすかた

にあらす侍を、右おなし文字あまりにおほく侍

にや、歌合にはとかめたる事も侍れは、尤負侍へし、

【校異】

イ 勝―ナシ (書) 口 雲―くま (書)、今 (内・支・聚・群)

ハ 夜は―よ (支・聚・群) ニ 前権大―権大納言 (書・内・

支・聚・群) ホ すかたに―すかたには (内・支・聚・群)

ヘ あまり―あやまり (内) ト 事も―言葉に (内・聚)、事に (支

・群) チ 尤―右 (内・支・聚・群)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

① 雲こそなけれ―永青文庫本の「雲こそ」は孤例であつて、書陵部本は「くまこそ」、その他の諸本は「今こそ」となっている。一首の意味から判断して「くま」が適当と思われるので、ここでは「くまこそ」を採用して通釈する。

② 名たかのうら―紀伊国の歌枕。『五代集歌枕』『八雲御抄』は遠江とする。高名な、評判の、の意を掛けて用いられることが多い。「紫の名高の浦のなびき藻の心は妹に寄りにしものを」(『万葉集』巻第十一・二七八〇)はその一例。

③ 右おなし文字あまりにおほく侍にや、歌合にはとかめたる事も侍れは―『袋草紙』下巻に賀陽院七番歌合(寛治八年八月十九日判者経信卿)二番の筑前(左)と大江匡房(右)の番の、匡房歌(「しら雲とみゆるにしるしみよし野のよしの山の花ざかりかも」)について、筑前の陳状に「輔親が母に申しし事を幼少にて承りしかば、「同字三はいかがせむ。四以上あらん歌をば、公けの歌にはとり出さじ」と申ししに、右歌「し」の字四候ふに、持と定められたるが、口をしきなり」と云々とある。文中の母は輔親の子伊勢大輔。この後に顕昭が匡房の歌を「シの字五、ノの字五なり」と訂正したことなどが記され、清輔は、同字が多くてもすぐれた歌は勝っているとして、具体例を列挙している。当該為家歌は「の」の字六。但し自作を負けとするための理由付けと考えればよからう(『袋草紙』の引用

は新日本古典文学大系本によった。

【通釈】

六十五番

左(歌) 勝

越前

(ここ) 明石潟では、藻塩を焼く海士の煙さえも(光に照らされない) 隈がないことだ、(こんなにも) 月が澄む夜には。

右(歌)

(藤原) 為家

秋の夜の(風趣で名高い) 名高の浦の塩風(の中)に、光が(高く) さしのぼってゆく、月のさやけさといったら。

〔判詞〕左(歌)の「月のすむよは」といったところなどは、こいねがうべき姿ではございませんもの、右(歌)は、同じ文字が余りに多うございませぬのが、歌合に(出す歌として)は、咎められてゐることもございませぬので、どういっても負けでございませぬ。

宝治元年『院御歌合』注釈―「野外雪」題―

位藤 邦生 森下 要治
田野 慎二 山崎 真克
赤迫 照子 藤川 功和

はじめに

『表現技術研究』第4号(平成20年3月)に引き続き、宝治元年(一二二四七)『院御歌合』の注釈を試みる。今回は「野外雪」題十三番を取り上げる。各番担当者
と所属を以下に示す。

六十六番―位藤邦生(長崎大学)、六十七番―藤川功和、六十八番―藤川、
六十九番―藤川、七十番―山崎真克(松江工業高等専門学校)、七十一番―
森下要治(広島文教女子大学)、七十二番―赤迫照子(広島大学図書館)、
七十三番―田野慎二(広島国際大学)、七十四番―赤迫、七十五番―山崎、
七十六番―赤迫、七十七番―田野、七十八番―位藤

凡例

一、底本は、永青文庫蔵本(「一〇七・三六・七」)(細川家永青文庫叢刊「第八巻所収」
を用いた。

一、校合した諸本と略号は、以下の通り。

(書)―書陵部蔵本(「五〇一・七四」)(『新編国歌大観』の底本)

(内)―内閣文庫蔵本「百三十番歌合(外題)」(「二〇一・二四七」)

(支)―九州大学支子文庫蔵本(「九一一・ホ・一」)

(聚)―書陵部蔵歌合類聚本(「大日本史料」第五篇二十四所収)
(群)―群書類従本(巻第二百所収)

一、注釈は、番全体の本文【校異】を示した後、【他書所伝】【本歌】【語釈】【通釈】
をあげた。

一、【語釈】の内、各詠作者並びに前号までに既出の語彙については、紙幅の関係
上これを略した。

一、表記や送り仮名の異同はこれを略し、見せけちや補入符号によって訂正のあ
る箇所は、訂正後の本文を採用した。

一、翻字本文には適宜読点を施し、字体は現行の活字体に改めた。
一、本文中、異同の存する箇所には、傍線及びイ、ロ、の如き符号を付し、語釈
を施した箇所には、本文右傍に①、②…の通し番号を付した。

一、底本で文意不通等が認められる場合、他本の本文に拠り通釈を施した場合が
ある。その際、本文【校異】【通釈】において他本に拠った箇所に網掛けを施
した。

一、引用本文は、原則として『新編国歌大観』に拠り、その他の引用文献は、適
宜底本を示した。なお、引用本文には、適宜、傍線、振り仮名等を付した。

一、『万葉集』については、本文、歌番号ともに『万葉集訳文篇』を用いた。

〈六十六番〉

六十六番^① 野外雪

左 勝

女房

いと、又かぎりも見えず武蔵野やあまぎる雪の明ほの、空

右 小宰相

みなせ山ちかき御狩のおもかけやかた野の雪に猶のこるらん

左歌、武蔵野の遠望申ならひたる事に侍

を、あまぎる雪の明ほのとは、かきり見えぬ所、

いま一きは思やられ侍るへし、右歌、みなせ山

ちかきみかりは、よみふるさぬさまに侍るうへ、おなし

雪もおもかけのこるとて、いかはかりかほと、心わき

まへかたくこそ、右は心あさく、左は雪ふかく侍れ

は、むさし野はるかのかちこそ、

【校異】

イ 野外雪―ナシ(内) 口 勝―ナシ(書) ハ とては―とて(支)

ニ 右歌―右(内・支・聚・群) ホ みかりは―みかり(書・群)

ヘ のこるとて―のこるとては(書・支・群) ト むさし野―むさしの、(書)

チ はるかのかち―はるか殊勝に(内・支・群)、はるかに殊に勝(聚)

【他書所伝】

〈左歌〉

【新拾遺和歌集】冬歌・六六〇・「宝治元年十首歌合に 野外月」・後嵯峨院御製

いとど又かぎりもみえず武蔵野やあまぎる雪の曙の空

【題林愚抄】冬部・五九〇四・「(野外月) / 新拾」・後嵯峨院

いとど又かぎりも見えずむさしのやあまぎる雪のあけぼのの空

【歌枕名寄】武蔵国・五四四四・「宝治元年十首歌合」・後嵯峨院

いとど又かぎりも見えずむさしのやあまぎる雪のあけぼのの空

〈右歌〉

【夫木和歌抄】雑部四・九六六〇・「宝治十首歌合 野外月」・土御門院小宰相
みなせ山ちかきみかりのおもかけやかたのゆきになほのこるらん

【本歌】

〈左歌〉

【古今和歌集】冬歌・三三四・「(題しらず)」・(よみ人しらず)

梅花それとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれば

この歌は、ある人のいはく、柿本人磨が歌なり

【拾遺和歌集】春・二二・「(題しらず)」・柿本人磨

梅の花それとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれば

【語釈】

① 野外雪―この歌題は当該歌合が初出と思われる。

② いと、又―以前にもまして。「いとど又さそはぬ水にねをとめて氷にとづる池のうきくさ」(「統後撰和歌集」冬歌・四九九・「百首歌たてまつりし時、池水」・後鳥羽院下野)等の例がある。ここでの「百首」は「宝治百首」を指している。

③ かきりも見えず―「八十日ゆく浜のま砂ちはるばるとかぎりも見えずつもる白雪」(「統拾遺和歌集」冬部・四五六・「白川殿七百首歌に、浜辺雪」・後嵯峨院)がある。貞永元年(一一三三)成立の歌合に「ながき夜のかぎりもみえずむさし野ややまなき空にすめる月かけ」(「名所月歌合」名所月・三十一番左・六一・隆祐)があり、この歌は光俊の歌と番えられて、持となっている。「武蔵野」と「かぎりも見えず」の組み合わせはこの歌からの影響か。

④ 武蔵野―武蔵国の歌枕。広大な野としてよく詠まれた。「むさしのやゆけども秋のはてぞなきいかなる風かすゑに吹くらむ」(「新古今和歌集」秋歌上・六七八・「水無瀬にて、十首歌たてまつりし時」・通光)等の例がある。

⑤ あまぎる雪―「あまぎる」は空が一面に曇る意で、「あまぎる空」「あまぎる月」「あまぎる霞」等の例がある。「あまぎる雪」は前引の古今集・拾遺集の例があり、「かきくもりあまぎる雪のふる里を積もらぬさきに問ふ人もがな」(「新古今和歌集」冬歌・六七八・「題しらず」・小侍従)「冬の夜はあまぎる雪にそらさえて雲の浪ち

にこぼる月かけ」(『新勅撰和歌集』冬歌・四〇二・千五百番歌合に「宜秋門院丹後」等の例がある。

⑥ちかき御狩―水無瀬山に程近い狩場(Ⅱ交野)での(貴人の)狩獵、が第一義であろうが、為家が「心わきまへかたくこそ」と言うように、表現意図が少々曖昧。「ちかき御狩のおもかけ」が「かた野の雪に猶のこるらん」の措辞から見れば、「ちかき」には近接した時間の意味も生まれよう。一案として、ここでの「ちかき御狩」は、後嵯峨院の祖父後鳥羽院が行った御狩、(それに反応して)読者が思い浮かべる「遠き御狩」は、「伊勢物語」に見られる惟喬親王が行った御狩、ととる解釈を提出したい(さらにその背後には、「万葉集」の輕皇子の安騎野の御狩が響いているかも知れない)。後鳥羽院も惟喬親王も水無瀬に別邸を持ち、交野での狩を楽しんでた。この歌は当該歌合の主催者後嵯峨院への小宰相のエールであったと考えたい。位藤邦生「宝治元年『院御歌合』と小宰相」(『国語と教育』第33号 平成20年11月)参照。

⑦雪ふかく―右の「心あさく」に対して、「心ふかく」を言うために「雪」の縁語仕立てにした修辭。

【通釈】

六十六番

左(歌) 勝

女房(後嵯峨院)

以前にも増して涯も見えないことだよ、武蔵野は、全体を曇らせて雪の降る、明け方の空の下。

右(歌)

(承明門院) 小宰相

みなせ山に程近い狩場で、最近の御狩のおもかけが、交野の雪に今でも残っていることだろうか。

【判詞】左歌、武蔵野の遠望は言い慣らされている面が(たしかに)ございませぬの、(この歌では)「あまさる雪の明ほの」と詠んでいて、(武蔵野の)涯も見えぬところが、(きつと)今ひときわ思いやられましよう。右歌は、「みなせ山ちかきみかり」とは、よみふるされてない上、同じ雪でも面影残ると言っている、さあどれほど(のもの)であろうかと、分別しがたく存じまして。右(歌)は心浅く、

左(歌)は(雪のように)心深くございませぬので、武蔵野の(歌の)はるか勝ち(で)ございませぬ。

【補遺】

『沙石集』巻第五末「(九)哀傷歌ノ事」の中に次の説話が見られる。

一 後鳥羽院ニ召ツカワレテ、ヲリノ御幸思出テ、悲シカリケルアマリ、
隠岐へ奉リケル。西恩法師、

思出ヤ片野ノ御狩カリクラシ 返ルミナセノ山ノハノ月

見レ「バ」マツ涙ナガル、ミナセ河 イツヨリ月ノヒトリスムラム

日本古典文学大系本の頭注によれば、文中の西恩法師は諸本「西因法師」で、西因は続古今集以下の作者。「返ルミナセ」は「かへりみなせの」とする諸本がある。「思出や」の歌については「歌枕名寄」巻第三、雑篇に、「雲葉 交野御狩 月」一〇一五

忘れめやかた野のみかりかりくれてかへるみなせの山のはの月

として掲出し、作者を源家長とする。小宰相の父藤原家隆は家長の同時代人であり、小宰相がこの歌を承知していた可能性は高い。当該歌の背後にはこの歌の面影があったか。

〔六十七番〕

六十七番

左 勝

太政大臣

雪をもる身にならひても思ふかな野なる草木のいかにさゆらん

右

俊成卿女

かりにこし跡たにもなくうつもれて雪深草の野へのふる郷

左身にをもる雪にならひて野なる草木を

おもへる心、そのゆへふかく見え侍にや、右かりにこし

跡たゆる深草のさとは、雪のみにしもかきらす、

ふりはてたる事に侍れば、又以左為勝、

【校異】

イ 勝―ナシ(書) 口 雪のみにしも―雪にしも(書・内・支・聚・群)

ハ ふりはてたる―ふり出たる(支)、ふりはて(聚)

ニ 事に侍れは―なれば(内・支・群)、たれば(聚)

【他書所伝】

〔左歌〕ナシ 〔右歌〕ナシ

【語釈】

①雪をもる身にならひても思ふかな―「ささのほにふりつむ雪のうれをおもみ本くだちゆくわがさかりはも」〔古今和歌集〕雑歌上・八九一・「題しらず」・よみ人しらず)に代表される如く、草木の積雪から我が身の加齢を連想する発想。

②野なる草木―早くは「紫の色こき時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける」〔古今和歌集〕雑歌上・八六八「めのおとうとをもて侍りける人に向へのきぬをおくるとてよみてやりける」・業平、【伊勢物語】第四十二段)にみえる表現(業平詠では「野なる草木」は妻の義弟の比喩)。「草木」には「あめのしためぐむくさ木のもも春にかざりもしらぬみよの末末」〔新古今和歌集〕賀歌・七三四・「百首歌たてまつりし時」・式子内親王)等、民を喩える例もみえ、当該歌では、実氏が為政者としての立場から歌作したものか。後例だが、「あさみどりあまねきめぐみ色に出でて野なる草木に春雨ぞふる」〔統千載和歌集〕雑歌上・一六六二・「春雨を」・後一条院)等がみえる。

③雪深草―深草は、山城国の歌枕。後掲する【伊勢物語】第一二三段以降、恋物語を背景とする歌枕としてのイメージが定着する。雪との取り合わせも多くみえ、「なにとなくくるるしづりのおとまでも雪あはれなるふかくさのさと」〔山家集〕五三八・「雪歌よみけるに」、「あさとあけて宮このたつみながむればゆきのこずあやふかくさのさと」〔六百番歌合〕冬部・冬朝・五番石・五五〇・家房)等は一例。

④ゆへふかく―実氏詠「おもひ出よ我もむかしは龍田山高根の花も袖にかけてき」〔早春霞・十五番左・二九)についても、為家は「左我もむかしはたつた山、さためてゆへふかく侍らんと見え侍り」と評している。十五番の実氏詠も詠者主体の

心情にかなり引き付けた詠と解され、そういった実氏の意図を判者として汲み取っていることを暗に示した評言と理解される。

⑤かりにこし跡たゆる深草のさとは、雪のみにしもかきらす、ふりはてたる事に侍れは―自分への愛情が薄れた「男」からの贈歌「年をへて住みこし里を出でていなばいとど深草野とやなりなむ」に対して「野とならば鶴となりて鳴きをらむかりにだにやは君は来ざらむ」と詠み、「男」の愛情を取り戻した【伊勢物語】一―二三段所載歌を念頭に置いた評。「女」の歌を踏まえ、結局男の愛情が無くなったとして物語世界を再構築する形で詠まれた「夕されば野へのあきかぜ身にしみてうづら鳴くなりふか草のさと」〔千載和歌集〕秋歌上・二五九・「百首歌たてまつりける時、秋のうたとてよめる」・俊成)は俊成の自讃歌。「かり人の袖こそうたてしをれぬれ露ふかくさのさとの鶉に」〔拾遺愚草〕韻歌 百廿八首和歌・一六四五・秋)、「かりに来て露のみいとど深草の里はまことに野への秋風」〔俊成卿女集〕四四・「北山十首」秋)等は、いずれも【伊勢物語】の「女」の歌を本歌としたもの。

【通釈】

六十七番

左(歌) 勝

雪を次第に重く感じるような我が身の経験から思うことよ、野にある草木は本

当の雪が(降り積もって)どんなにか凍えていることだろうよ(民がどんなにか

つらい思いをしているかこの頃になってようやくわかることよ)。

右(歌)

(昔女に会いがてら)狩りに来ていた跡さえもなくすつかり埋もれて。雪深いこの

深草の野辺の故郷は……

〔判詞〕左(の)身に重く降り積もる雪の経験から野にある草木を思う心、その理由は深く見えましようか。右(の)狩りに来ていた跡が絶える深草の里(という情景)は、雪のみに限定されることはなく、すつかり古くなり詠み古されてもいる事でございますので、又左(歌)を勝とする。

〔六十八番〕

六十八番

左 權大―通忠

かち人の分ゆくかたもしらすけのまの、ふる道雪は降つ、

右 勝 同 実雄

しらす雪のふる枝のこはきけさみれはあらぬ花さく宮きの、原

分行かたもしらすけのまの、ふるみち、まことに

雪もふり侍ぬらん、古枝の小萩もあたらしくは

侍らぬを、白雪のとてあらぬ花はしめて見侍れば、

めもとまり侍にや、仍以右為勝、

〔校異〕

イ 權大―權大納言(書・内・支・聚・群) □ かち―かり(支)

ハ かた―末(書・内・支・聚・群) ニ は降つ、―つもりつ、(書・内・支・

聚・群) ホ 勝―ナシ(書) ヘ 同―權大納言(書・内・支・聚・群)

ト まことに―殊に(内・支・聚・群) チ 侍ぬ―侍るぬ(支)

リ 古枝の―古枝(内・聚) 又 花―花は(書・内・支・聚・群)

〔他書所伝〕

〔左歌〕ナシ

〔右歌〕

〔夫木和歌抄〕冬部三・雪・七三三〇・「宝治十首歌合、野外雪」・山階入道左大臣

しらす雪のふるえのこ萩けさみればあらぬ花さくみやぎののはら

〔語釈〕

①しらすけのまの、ふる道―「しらすけの」(白菅の)は、まの(真野)にかかる枕詞。

歌枕としての真野は幾つかあり、「いざ子ども大和へ早く白菅の真野の榛原手折り

て行かむ」(『万葉集』卷第三・雑歌・二八三・「高市連黒人の歌二首」)は、撰

津国の真野を詠んだもの。「しらすけのまのはぎはらつゆなをりをりつる袖ぞ人

などがめそ」(『金葉和歌集』二度本・秋部・二二九・「はぎをよめる」・長実)の

真野は近江国の歌枕とされる。当該歌では、『万葉集』歌を念頭に置き「ふる(古)

道」と詠じたか。なお、白菅には「知らず」の意が掛かり、「むかしこれたがすみ

かともしらすげのまのはぎはら秋はわすれず」(『秋篠月清集』西洞隠士百首・

六四四・「秋廿首」)、「をる人はいさしらすげのまの萩わがたちぬるる露のに

しきか」(『拾遺愚草員外』三二九・「詞書省略」)等はその一例。「白菅」「雪」と

一首全体が白色のイメージで仕立てられている。

②あらぬ花さく宮きの、原―白雪を白色の萩の花に見立てる趣向。「宮城野やかれ

はだになき萩がえにをれぬばかりもふれるしらす雪」(『土御門院御集』三九八・「同

冬」)は類例。宮城野は陸奥国の歌枕。秋草の名所として古来より和歌に詠み込

まれてきた。

③雪もふり侍ぬらん―「ふり」は、「降る」という意とともに、「ふる、みち」とも

響き合う。直後の右歌の評「あたらし」も「古枝」と対応しており、修辭をちり

ばめた判詞となっている。

④古枝の小萩もあたらしくは侍らぬ―「秋はぎのふるえにさける花見ればもとの

ころはわすれざりけり」(『躬恒集』二七七・「むかししれりける人に、秋の野に

あひて)、「あきにあへぬこののみかはくだらののはぎのふるえもしたもみちせ

り」(『出観集』四八三)、「秋くればはぎもふるえにさくものを人こそかはれもと

のころは」(『粟田口別当入道集』七三・「顕昭法師ひさしうおとづれざりしかば、

秋ころ、はぎのえだにさしてつかはしたりし)、「くだら野のふる枝の萩の花みれ

ばことしばかりの秋としもなし」(『土御門院御集』四八・「萩」)等、先行例が散

見する。

⑤白雪のとてあらぬ花はしめて見侍れば―宮城野・萩・古枝の取り合わせとして

は、「めづらしや今朝初雪に宮城の萩の古枝に花さきにけり」(安元元年「右大

臣家歌合」初雪・九番左・三七・基輔)等の先行例がみえる。なお、為家は後に「草

木にもあらぬ花さく雪のうちの竹の葉分に鶯ぞ鳴く」(『為家集』四六・「同」(文永)

八年正月廿九日前左大臣家月次十首)と詠んでいる。

【通釈】
六十八番

左(歌)

権大(納言源) 通忠

歩いていく人が分け入っていく方向も分らないほど真野の古くなった道には雪が降り続いて・・・

右(歌) 勝

同(権大納言藤原) 実雄

白雪が降った古い枝の小萩を今朝見ると(雪が降り積もって萩とは) 別の(白雪の) 花が咲く宮城野の原・・・

〔判詞〕「分行かたもしらすけのまの、ふるみち」(という表現を聞くと)、本当に古びてしまつてその上雪が降り積もっているかのようでしょう。「古枝の小萩」という表現も新しくはございませんが、「白雪の」と言つて「あらぬ花」という表現は) 初めて見ましたので、目も止まりましたでしょうか。よつて右(歌)を勝とする。

〔六十九番〕

六十九番

左

同 定雅

春日野を分行人の袖さえて道もさりあへず雪は降つ、

右 勝

同 公相

けぬかうへに又跡つけよ玉ほこのみちある御代の野への白雪

左の雪下句すこし打とけて見え侍にや、右野

外雪、た、一句にかきりて無念なる方は侍れとも、

有道之世尤賞詠すへくこそ侍れは、又右為勝、

【校異】

- イ 同―権大納言(書・内・支・聚・群)
- ロ 勝―ナシ(書)
- ハ 同―権大納言(書・内・支・聚・群)
- ニ 左の―左(書・内・支・聚・群)

ホ 下句―上句(書・内・支・聚)、上の句(群) へ 野外雪―野雪(聚)
ト すへく―すへくと(支) チこそ―こそは(書) リ 侍れは―侍れ(支)
又 又―又以(群)

【他所書伝】

〔左歌〕ナシ 〔右歌〕ナシ

【語釈】

①春日野を分行人―春日野は、春日山の西方の麓、東大寺の南、興福寺の東に当たる野原。「かすがのわかなつみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらむ」(古今和歌集) 春歌上・二二・「歌たてまつれとおほせられし時よみてたてまつれる」貫之、「古今和歌六帖」四六では「仁和のみかどの御歌」とする) 等の如く、多く若菜と併せて早春の情景に詠み込まれる。春日野と雪の取り合わせの場合、多くは「かすがのはゆきのみつむとみしかどもおひいづるものはわかかなりけり」(後拾遺和歌集) 春上・三五・「(題不知)・和泉式部」の如く残雪であり、当該歌のように冬の情景歌はあまり多くない。「かすがののべのあきはぎしもゆきのとしふるごとにいるまさりけり」(能宣集) 一一三・「冬二首」は類例。

②道もさりあへず―「さりあへず」は、よけることができな程、の意。「あづさゆみはるの山辺をこえくれば道もさりあへず花ぞちりける」(古今和歌集) 春歌下・一一五・「しがの山こえに女のおほくあへりけるによみてつかはしける」貫之) が早い例で、後鳥羽院の「みよし野に春の嵐やわたるらん道もさりあへず花のしら雪」(後鳥羽院御集) 同(正治二年) 九月御歌合・一四八六・「落花」は、貫之詠を本歌としたもの。

③けぬかうへに―まだ消えないうちにの意。「けぬかうへに」又もふりしけ春霞たちなばみ雪まこれこそ見ぬ」(古今和歌集) 冬歌・三三三・「題しらず」・よみ人しらず) は早い例。

④玉はこの―「道」に掛かる枕詞。「玉梓の道行き疲れいなむしろしきても君を見むよしもがも」(万葉集) 卷第十一・二六四三・「(物に寄せて思ひを陳ぶる)」等、「万葉集」から用例がみえる。

⑤みちある御代―正しい政道の行われる世の意。「あふみのや坂田のいねをかけた

みて道ある御世のはじめにぞつく」(新古今和歌集) 賀歌・七五三・「仁安元年、大嘗会悠紀歌たてまつりけるに、稻春歌」・俊成、「はるにあひてみちあるみよに若なつむ野ばらの雪に跡は見えけり」(寛喜女御入内和歌) 八・「野沢摘若菜残雪処処」・知家等は一例。

⑥すこし打とけて見え侍にやー表現がくだけていることを難じたもの。例えば、『六百番歌合』の顕昭詠「あひそめてのちはしかまのいちにてもよがれがちをばかはじとぞおもふ」(恋部下・奇商人恋・廿五番左・一一八九)について、「右申云、左下両句、無下にうちとけたり」とみえる。また、為家は、『河合社歌合』三十番左「思ひねの夢を此世の逢ふ事に頼むさへこそかなはざりけれ」(五九・能違)について、「左、下句すこしうちとけてや侍らむ」と評している。

⑦た、一句にかきりてー『毎月抄』は「題をわから候事、一字題をばいくたびも下句にあらはすべきにて候。二字、三字より後は、題の字を甲乙の句にわから置くべし。結題をば一所に置く事は、無下の事にて待るとやらむ」と指摘する。

【通釈】

六十九番

左(歌)

同(権大納言源) 定雅

春日野を分け入って行く人の袖は冷え冷えとして道をよけることができな程雪は降り続けて……

右(歌) 勝

同(権大納言西園寺) 公相

雪がまだ消えないうちに(いい治世の余光が消えない内に) 又足跡をつけるように事跡を残せ、正しい道を行う御代の野辺の白雪に。

〔判詞〕左の雪(の歌は)上の句(の表現が)少し陳腐に見えましようか。右(は)「野外雪」(題が)、ただ(末句)一句のみに(詠み込まれて)て残念な点はありませんが、正しい道を行う世はもとも称賛すべきですので、又右を勝とする。

〔七十番〕

七十番

左 勝

同 公基 ぎんもと古本

霜かれのをの、あさちふ跡もなく心のま、につもるしら雪

右

為教 だめのり古本

かきくらし雪は降つ、梓弓末の、原は入人もなし

左、雪いみしくつもりて侍うへに、右、雪につけても

あつさ弓末の、原はどかり人もいる事さた

めて侍らん物を、霜かれのあさちふ猶よろしく

侍れば、以左勝と申へし、

【校異】

イ 勝ーナシ(書) 口 同ー権大納言(書・内・支・聚・群) ハ きんもと古本ーナシ(書・内・支・聚・群) ニ 霜ー雪(内) ホ 為教ー為教朝臣(書・内・支・聚・群) ヘ ためのり古本ーナシ(書・内・支・聚・群) ト 末の、原はーすゑのはら野は(書・内・支・聚・群) チ 雪ー雪は(内・聚) リ つもりてー心つもりて(内・支・聚) 又 右ーナシ(支・群)

ル 末の、原はーすゑのはら野は(書・内・支・聚・群)

ヲ とかり人ーとかりの人(書・内・聚・群)、とはかりの人(支)

【他書所伝】

〔左歌〕 ナシ 〔右歌〕 ナシ

【語釈】

①霜かれのをの、あさちふー「浅茅」は丈の低いチガヤ。霜枯れの浅茅に雪が降り積もる情景を詠んだ歌には、「霜枯とみし程もなきあさちふに初雪ふりぬいとどさびしも」(安元元年(一一七五)『右大臣家歌合』初雪・七番左・三三・季広)、「霜がれのをがかりしき旅ねする野べさへさえて雪降りにけり」(三井寺新羅社歌合)野宿雪・三十番右・六〇・長照等がある。また、本歌合にも「あさち原か

れふのをの、草の上にもしる色なくつもる白雪」(野外雪・七十八番右・一五六・為家)の例がある。

②心のまゝ訪れる人もいないので、雪が思うがままに積もる、という雪を擬人化した表現。「ふみわけてとふ人もなきやどなれば心のままにつもるゆきかな」(「明日香井和歌集」冬・一四一七・「冬歌よみけるなかに」)、「はらはじよ心のままにただつもれとはれぬ山の道のしら雪」(建長八年(一二五六)「百首歌合」冬・四百九十七番右・九九四・忠定)等の例がある。

③かきくらし雪は降つゝ、あたり一面の空を暗くして雪が降っている情景を指す。「かきくらし雪はふりつつかすがにわが家のそのに驚ぞなく」(「後撰和歌集」春歌上・三三三・よみ人しらず)と初二句が一致する。

④末の、原―歌本文・判詞ともに、諸本「すゑのはら野」とする。「梓弓末の腹野に鳥狩する君が弓弦の絶えむと思へや」(「万葉集」卷第十一・奇物陳思・二六三八)が初出例。「校本万葉集」に拠れば「末の腹野」の訓に異同はないが、この万葉歌が所収される作品のうち、「五代集歌枕」、「新勅撰和歌集」、「色葉和難集」、「歌枕名寄」、「夫木和歌抄」は「すゑのはらの」とし、「和歌童蒙抄」、「河海抄」は「すゑのはら」とする(「古今和歌六帖」は「すゑのはら」)。また院政期以降の用例も両様存する。なお、「五代集歌枕」第二・野に「すゑのはらの」と掲出されるが所在未詳。

⑤あつさ弓末の、原はとかり人もいる事さためて侍らん物を―末野の原には鳥狩りの人もきつと入るはずだと、前項に掲出した万葉歌を念頭に置いて「入人もなし」と詠むことを否定的に評価した発言。

【通釈】

七十番

左(歌) 勝

権大納言(西園寺)公基

霜枯れた野原の浅茅が生えている所は人の通った跡もなく、思うがままに積もる白雪であることよ。

右(歌)

(藤原) 為教朝臣

あたり一面の空を暗くして雪は降り続いていて、末野の原に入る人もいないこと

とだ。

【判詞】左(歌は)、雪がたいそう積もっている(情景)であります一方、右(歌は)、雪が降っているにしても末野の原には鳥狩りの人もきつと入るでしょうに。(左歌の)霜枯れの浅茅の情景がやはりよろしゅうございまして、左を勝と申すべきでしょう。

〔七十一番〕

七十一番

左 持

中納言 為経

磯上ふるの、み雪ふみ分て今そむかしの跡もみるへき

右

信実 朝臣

をのつからさてもそのみのをよふやと雪の朝の野へに出ぬる

思かねたる雪の朝の眺望、あはれにみなされて侍り、

ふるの、み雪、歌のさまよろしく見え侍を、

題の心やすくきこえ侍らん、いまそむかしの跡も

みるへきといへる、すてかたく侍れば、持にて侍へきにや、

【校異】

イ 持―ナシ(書) 口 ためつね古本―ナシ(書・内・支・聚・群)

ハ ナシ―続古今、冬(聚) 二 みるへき―みゆへき(支・聚・群)

ホ さても―みても(群) へ のそみの―のそみは(内・聚・群)

ト 雪の朝の―雪朝の(書)、雪の朝(内・支・聚・群)

チ みなされて―みなされ(書・内・支・聚・群)

リ 侍り―侍る(聚) 又 歌のさま―哥さま(書・内・支・聚・群)

ル 心やすく―こ、ろややすく(書)、心やあすく(内)、心やあさく(聚・群)

ヲ すてかたく―捨かたき(内)

【他書所伝】

〈左歌〉

【続古今和歌集】冬歌・六六一・「十首歌合に、野外雪を」・大宰権帥為経
いそのかみふるののみゆきふみわけていまぞむかしのあとも見るべき

【題林愚抄】冬歌下・五九〇二・「野外雪／続古」・大宰権帥為経
いそのかみふるののみゆきふみ分けて今ぞむかしの跡もみるべき

〈右歌〉ナシ

【語釈】

①磯上―大和国の歌枕。【万葉集】以来「石上布留」と続けて詠むことが多かった。
当該歌には「深雪」と「御幸」が掛け言葉として響いており、「むかしのあと」は、
一義的には安康・仁賢天皇の都があった場所として意識されていたであろうし、
かつての聖代を漠然と指すとみてもよい。「いそのかみふるき宮この郭公声ばかり
こそむかしなりけれ」（『古今和歌集』夏歌・一四四・「ならのいそのかみでらにて
郭公のなくをよめる」・素性）がある。

②をよぶ―歴史的仮名遣いは「およぶ」。ここでは成就する、望みどおりになる、
かなう、の意で、多くの場合打消しの語を伴って用いる。

③ふるの、のみ雪―底本はここに記した表記のとおりで、そのまま読めば「ふる
の、みちのみ雪」となるが、書写者の注記意図が少々わかりづらい。

【通釈】

七十一番

左（歌） 持

中納言（藤原）為経

いそのかみふる野の深雪を踏み分けて（行つて、太平の世の）今こそ昔の跡も
見るべきでしょう。

右（歌）

（散位藤原）信実朝臣

おのずから、さても望みが叶うのではあるまいかと、雪の（降った）朝の野辺
に出てきてしまったことだ。

【判詞】思えばぐねた翌日の雪の朝の眺望は、思いなしのせいか深く心を動かされ
ます。（左の）ふるののみ雪（の歌は）、歌のさまは悪くありませんものの、（『野外雪』

という）題（に応じる）歌意が安直に思われます。（しかし）「いまそむかしの跡
もみるべき」と言っているのが、捨てがとうございますので、持とするのが適當
ではありますまいか。

〈七十二番〉

七十二番

左 勝

右 通成

梓弓入の、みちの跡たえてしかもかよはすふれる白雪

右

右 雅光

さ、竹の野への古道まよふとも雪ふみならし問人もかな

さをしかの入野のす、きをとりてあつさ弓引

なさせるに、しかも又かよはすといへる、おもふ所な

きにあらず侍にや、右さ、竹の野へめつらしく見

え侍に、一ふしよせある事も侍らぬにや、いつくの

野にても侍ぬへかりけりとみえ侍、左聊勝侍へし、

【校異】

イ 勝―ナシ（書） □ 右衛―右衛門督（書・内・支・聚・群）

ハ の―も（内・支・聚・群） 二 右近―右近中将（書・内・聚・群）、右

近衛中将（支） ホ あつさ弓引なさせるに―梓弓にひきなせるに（書）、あつ

さ弓にひきなせるに（内・支・聚・群） ヘ しかも又かよはすといへる、おも

もふ所なきにあらず侍にや―ナシ（内・聚） ト 右さ、竹の―さ、たけの（書・

内・支・聚・群） チ 侍らぬにや―侍らぬや（書） リ 侍ぬへかりけり―

侍ぬへかりける（書・内・群）、侍るへかりける（支） 又 左聊勝―仍左いさ、

か勝（書）、仍左勝と（支）、仍左勝（内・聚・群）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉ナシ

【語釈】

①梓弓入の、みち―「入野」は入野神社がある山城国の歌枕とする説や、近江国とする説等がある。「五代集歌枕」では「国不蕃」、「歌枕名寄」でも未勘国部。「梓弓」は「射る」に掛かる「入野」の枕詞。「入野」には「(入野への道に) 入る」の意も掛かる。

②しかもかよはず―「さ雄鹿の入野のすすき初尾花いつしか妹が手を枕かむ」(『万葉集』巻第十・秋相聞・二二七七・「花に寄する」)。「新古今和歌集」では第五句「たまくらにせん」をふまえる。「万葉集」歌は将来、妹の許に通うことを期待した内容であるが、当該歌は深い雪のために鹿すらも通わない状況を詠む。鹿に雪を取り合わせた例は、「さびしさのかぎりは雪にふりとめつ竜田の里のしかの通ぢ」(『拾玉集』四〇二六・(詞書省略))、「雪ふかみ尋ぬる宿はうづもれて我よりさきのしかの通路」(『壬二集』院百首正治二年・冬・四六六)等がある。

③さ、竹の野へ―先行例を確認できない。「篠竹」は『万葉集』の「さすだけの大宮人は今もかも人なぶりのみ好みたるらむ」(巻第十五・「右の九首、娘子」・三七五八)の「さすだけ」から転じたらしく、鎌倉時代に入って「ちりもせじ衣にすれるささ竹のおほみや人のかさすさくら」(『新勅撰和歌集』賀歌・四八二)「泥絵屏風、石清水臨時祭」・定家)、「ももちどりけさこそきなけささだけのおほみや人」にはつねまたれて(『統古今和歌集』春歌上・二九・「春御歌の中に」・龜山天皇)のように「大宮人」と取り合わせた例が見られる。当該歌は鄙びた「野辺」と取り合わせ、新鮮味を狙ったか。

④古道―人の往来が途絶え、さびれた道。「ふるみちに我やまどはむいにしへの野中の草はしげりあひにけり」(『拾遺和歌集』物名・三七五・「やまと」・輔相)。ここでは「古」と「雪が」降る」を掛ける。なお、「野辺の古道」は「さ」の山みゆきふりにしせりかははのべのふるみちあとはありけり」(『古今和歌六帖』一一三二)「にわじ、せりかははに幸し給ふ時に」行平、「後撰和歌集」では「千世のふるみち」等の例がある。

⑤おもふ所なきにあらす侍にや―詠者には色々思いを抱く所があるようですが、『万葉集』歌をふまえつつも鹿を不在にしたところに、詠者の個人的な心境

が込められているのかと推量する。

⑥一ふしよせある事も侍らぬにや―右歌に「篠竹の野辺」の縁語が全く存しないことについて、篠竹の縁語「ふし(節)」を用いて難じる。

【通釈】

七十二番

左(歌) 勝

右衛(門督源) 通成

(「射る」「入る」という名をもつ) 入野の道であるが、往来の跡は絶え、鹿も通わず、ただ白雪が降っていることだ。

右(歌)

右近(衛権中将源) 雅光

たとえ迷っても、雪を踏みならし、篠竹の野辺の古道を訪れる人があればよいのに。

【判詞】(『万葉集』歌にある)「さ」をしかの入野のす、き」を取って梓弓をふまえるのに、鹿も又通わないとしたのは、(詠者に) 思う所がない訳ではないようだが(どうなのでしょうか)。右の「さ、竹の野へ」は珍しく見えますが、(それと) 一節も縁のある語がございませんでしょうか、(それでは) どの野であつてもかまわなかつたと見えます。左をわずかながら勝ちとするべきです。

〈七十三番〉

七十三番

左

判有教

うつもる、かれの、薄ふみ分て猶行末も雪のふる道

右 勝

井内侍

もとかしはもとよりうつむ雪の上なるからをの、道や絶なん

うつもる、枯野ふみ分て猶行末も、いかなる

見所侍へきそとゆかし侍を、雪のふるみち、

た、おなし事にて侍ける、無念にや侍へき、

もとかしはもとよりうつむとて、白雪のふるから

を野と侍は、上下あひかなひて、もとの心も
すてかたく侍にこそ、右勝侍へし、

【校異】

イ 兵——兵部卿（書・内・支・聚・群） □ 勝——ナシ（書）

ハ 見所——所（内・支・聚・群） 二 侍へきそと——侍へきそと（書）、侍るへ
きなど（内・支・聚・群） ホ 事にて——事にや（内・支・聚・群）

へ ふるから——ふるからに（内） ト 心も——心見え（内・支・群）、心見（聚）
チ 侍——ナシ（支・群）

【他書所伝】

〔左歌〕 ナシ 〔右歌〕 ナシ

【本歌】

〔右歌〕

【古今和歌集】雑上・八八六・「題しらず」よみ人しらず

いそのかみふるからをのものとがしは本の心はわすられなくに

【語釈】

①うつつもるゝかれの、薄—雪に埋もれた枯野の薄の荒涼とした光景。「雪」と「薄」とを取り合わせた先行歌としては、「婦負の野のすすき押し並べ降る雪に宿借る今日しかなしく思ほゆ」（『万葉集』巻第十七・四〇一六・高市連黒人）「今よりはつぎてふらなむわがやどのすすきおしなみふれるしら雪」（『古今和歌集』冬・三二八・「題しらず」よみ人しらず）が古い例である。「枯野の薄」には、「くちもせぬその名ばかりをとどめおきて枯野の薄かたみにぞみる」（『新古今和歌集』哀傷・七九三・西行）という著名な先行歌がある。なお、後世、「枯野の薄」は、「冷え寂びたる」（『ささめごと』）、「心はそきやう」（『兼載雑談』）といった美的様態の象徴とされる。

②ふみ分て—踏み分けて、の意。「ふみわけてさらにやとはむもみぢばのふりかくしてしみちとみながら」（『古今和歌集』秋下・二八八・「題しらず」よみ人しらず）、「わがやどは雪ふりしきてみちもなしふみわけてとぶ人しなれば」（『古今和歌集』

冬・三三二・「題しらず」よみ人しらず）のように、「踏み分く」には、妨げになるものを押し開いて進み、わざわざ訪ねる、といった内容の歌が多い。

③猶行末も——さらに行き進む先も、の意。第三句の「ふみ分て」を「行」が受ける。「こしかたも猶行末もふる雪に跡こそみえねかへる山人」（『建保名所百首』雑・一〇〇八・「還山越前国」・康光）。

④雪のふる道——「古道」は、今はもう寂れている道。「ふるみちに我やまどはむいにしへの野中の草はしげりあひにけり」（『拾遺和歌集』物名・三七五・「やまと」・輔相）「古る」に「降る」を掛ける。「たにふかみ雪のふるみちあとたえてつもれるとしをしる人ぞなき」（『新勅撰和歌集』冬・四三三・「古溪雪をよみ侍りける」・通方）。

⑤もとかしは——冬枯の柏の古木。「顕注密勘」では、本歌について、「もとかしはもふるがしはと云べきにや」（顕昭注）、「冬野にはなべて木の葉、草の色も残らぬに、かしは、かれたる葉の枝につきて、春までおちぬ物なれば……」（定家注）と説明されている。本歌に拠り、第二句の「もとより」を導く。

⑥もとより——もともと、以前から、の意。根本から、の意を掛ける。「あきはぎの下葉よりしももみづるはもとより物ぞ思ふべらなる」（『古今和歌六帖』秋はぎ・三六五・紀貫之）。

⑦ふるからをの——古から小野。「五代集歌枕」「八雲御抄」に拠れば、大和国の歌枕。本歌について、「顕注密勘」では、「いそのかみふるからをのとは、野の名也。いそのかみふるのなかみちともよめり。……布留の乾たる小野といふにや」（顕昭注）、「ふるからをのは枯野をいへる歎」（定家注）と説明する。寂れた枯野が想起されよう。さらに、弁内侍では、「雪が」降る「の意が掛けられる」。

⑧道や絶なん——道は絶えてしまふであろうか、の意。「布留」の「道」としては、「いそのかみふるのなか道なかなかに見ずはこひしと思はましや」（『古今和歌集』恋四・六七九・「題しらず」・貫之）が著名である。重ねて降り積もる雪に道はすっかり埋もれて、人の往来も途絶えてしまふのか、というのである。

⑨いかなる見所侍へきそとゆかしく侍を——どのような見所がありますのかと知りたく思いましたが、の意。「見所」は、見るに値するところ、の意。本歌合判詞

では、他に四例(十二・五十七・六十三・七十五番)用いられており、底本の形がふさわしい。わざわざ踏み分けて、行き進んだのだから、さぞかし素晴らしいのであるうかと期待していた、というのである。

⑩雪のふるみち、た、おなし事にて侍ける、無念にや侍へき―第五句の光景は、上句で描かれた光景と大差なく、拍子抜けであった、という非難である。

⑪もとの心もすてかたく侍にこそ―本歌の趣向を生かしている点も捨てがたく思われます、の意。あるいは、「もとの心」は、「もとがしはもとよりうづむ」という弁内侍の趣向を指しているとも考えられる。同じ古今歌を踏まえた七十六番左の為氏詠に対して、為家は、「かしはならては跡見えぬ雪にもとの心もわすれぬへく侍にや」と、「柏」が詠み込まれていない点を難じている。これに対して弁内侍では「柏」が詠み込まれ、この点が「上下あひかな」と評されたであろう。なお、「校異」トの「心見え」とする異文の方が解しやすい。

【通釈】

七十三番

左(歌)

兵(部卿源)有教

雪に埋もれた枯野の薄を踏み分けて、さらに行き着く先も雪の降る古道であることだ。

右(歌) 勝

弁内侍

本柏の根本から、もともと埋めている、その雪の上に、さらに雪が降っているので、古から小野の道は絶えてしまうことだろうか。

【判詞】埋もれた枯野を踏み分けてさらに行き着く先も、どのような見所があるのかと知りたく思いましたが、「雪のふるみち」と、ただ同じ光景でありますのは、遺憾なことではありませんか。「もとかしはもとよりうづむ」と言って、白雪が「ふるからを野」とありますのは、上句と下句とが釣り合って、本歌の趣向を生かしている点も捨てがたく思われます。右が勝ちましてございます。

〔七十四番〕

七十四番

左(歌)

有(部卿源)

磯上ふる野ののもりふみ分て雪にも御代の道は有けり

右

雅忠(朝臣)

つゝに又もみちぬ色やこれならん野中にたてる松の白雪

君之有道之徳、臣之勤節之貞、左右各存旨趣、彼是難申勝負、尤可為持、

【校異】

イ 持―ナシ(書) 口 右近―右近中将(書・内・聚・群)、右近衛中将(支)

ハ 道は―道(内) 二 君之―君(内・支・聚) ホ 徳―分(支)、跡(聚・群)

ヘ 臣之―臣(聚) ト 貞―興(支) チ 存―孝(支) リ 是―此(内・支・聚・群) 又 難申勝負―難申勝負(書・内・支・群)、難勝負申(聚)

ル 尤可為持―尤為持(書)

【他所書伝】

〔左歌〕ナシ 〔右歌〕ナシ

【語釈】

①磯上ふる野ののもり―七十一番【語釈】参照。「いそのかみふるのなか道なかなに見ずはこひしと思はましやは」(古今和歌集)恋歌四・六七九・「題しらず」・貫之。「野守」は禁獵の野を守る番人。「石上」「布留野」と「野守」を取り合わせた先例は確認できない。

②ふみ分て―七十三番【語釈】参照。「磯上ふるの中道いまささらにふみ分けがたくしげるなつ草」(宝治百首)夏十首・「夏草」・一〇一四・資季。

③御代の道―政道。後嵯峨院治世の太平を讃える。「おく山のおどろがしたもふみわけてみちある代ぞと人に知らせん」(新古今和歌集)雑歌中・一六三六・住吉歌合に、山を「後鳥羽院」。「わが君のあまねき御代のみちづくくりくぼめる身をも

あはれとはみよ」〔新撰和歌六帖〕六一九・「みち」・信実。

④つるに又もみちぬーやはり最後まで紅葉することはないと、確認する。「雪ふりて年のくれぬる時にこそつひにもみちぬ松も見えけれ」〔古今和歌集〕冬・三四〇・「寛平御時きさいの宮の歌合のうた」・よみ人しらず。当該歌では風雪に耐え、野中に立つ松の常緑と枝にかかる白雪の色に、永遠の御代を寿ぐ意を込める。
⑤野中にたてる松ー野の中に立つ松の孤高な姿。野中の松を詠んだ例は「磐代の野中に立てる結び松心も解けず古思ほゆ」〔万葉集〕巻第二・挽歌・一四四・「長忌寸奥麻呂、結び松を見て哀しび咽ふ歌二首」をはじめ、「ながめやるさとだに人の跡たえし野中の松に雪はふりつつ」〔順徳院百首〕冬十五首・六十八等がある。

⑥君之有道之徳、臣●勤節之貞ー「勤節」はよく勤めること。「貞」は迷わず、己の信念を貫くこと。各々の歌で帝の徳と、御代の安泰への祈りを詠じていることをいう。

【通釈】

七十四番

左(歌) 持

右近(衛権中将藤原)師継

石上の布留野の古道の雪を、野守が踏み分けていることだ。雪の中でも、御世の道は(確かに)あるのだなあ。

右(歌)

(右近衛権中将源)雅忠朝臣

ついに最後まで紅葉しない色とは、野中に立つ松の緑と白雪、これであるよ。

〔判詞〕帝による道の徳あり、臣下による勤節の貞もあり、左右各々に趣意がございます。あれこれと勝ち負けを申し難く、どういたしまして持とするべきでしよう。

〈七十五番〉

七十五番

左 勝

沙弥蓮性

下おれのみな^①のふし原いやしきにまなくも雪の猶つもるらん

右 下野

木の下^②の露にやまさる宮きの、みかさとりあへぬ雪の木の^③下露にまさるへ

みかさとりあへぬ雪の木の^④下露にまさるへ

き事、すてに^⑤ことにはあらはれて、うたかひなくや

みえ侍らん、^⑥みな^⑦のふし原いやしきにまなく

つもれる雪、見所^⑧ことに侍れば、尤^⑨以左為勝、

【校異】

イ 勝ーナシ(書・支) □ まなくもーまなくし(群) ハ つもるらんー

つもるらし(聚) ニ 雪のー雪(内・支・聚・群) ホ 木の下露ーした露(書)

へ ことにはーこと葉に(書・内・支・聚・群) ト みえ侍らんー侍らん(内・

支・聚・群) チ ふし原いやしきにー藤原數に(内)、ふしはらいや友に(支)

リ まなくーまなくも(群) ヌ つもれるーつもる(書) ル 為勝ー勝(内)

【他書所伝】

〈左歌〉

【現存和歌六帖】六一・「ゆき」・正三位知家

したをれのみな^①のふしはらいやしきにまなくも雪の猶つもりつつ

〈右歌〉 ナシ

【語釈】

①みな^①のふし原ー「猪名野」は摂津国の歌枕。今の兵庫県川西市・伊丹市・尼崎市を流れる猪名川の流域の野(歌枕歌ことは辞典 増訂版)。「万葉集」から用例が見られるが、「みな^②のふしはら」の形では「しながどり^③みな^④のふし原とびわたるしぎがはねおとしろきかな」(拾遺和歌集)神楽歌・五八六)のほか、「猿丸集」七、「堀河百首」冬十五首・凍・九九九・仲実、「堀河百首」雜廿首・野・一四〇三・基俊等の例がある。また、雪の積もった情景を詠んだ例には、「ふるゆき^⑤にみな^⑥のふし原うづもれてかるもかくべきかたやなからん」(夫木和歌抄)雜部四・原・九八九一・「みな^⑦のふし原、摂津/永久二年大神宮欄宜歌合、雪」・読

人しらず)、「ありまやまおろすあらしやさえつらむゆきふりにけりるなのふしはら」(『有房集』・二六二)。「ゆきのうちにはとけをねんず」がある。

② いやしきに―いよいよしきりに、の意。「春の雨はいやしき降るに梅の花いまだ咲かなくいと若みかも」(『万葉集』巻第四・相聞・七八六)。「大伴宿祢家持、藤原朝臣久須麻呂に報へ贈る歌三首」・家持)、「みどりなるは山の色やかはりぬるいやしきふれるはつしぐれかな」(『堀河百首』冬十五首・時雨・八九七・公実)等の例がある。

③ 木の下の露にやまさる―「みさぶらひみかさと申せ宮木のこのしたつゆはあめにまされり」(『古今和歌集』東歌・一〇九一)。「みちのくうた」に依拠した表現。当該歌の趣向は、宮城野では雨にまさるといふ木の下の露よりもなお雪の深さがまさるといふもの。同様に木の下の露よりもまさるものを挙げる例には、「みやぎのはこのしたつゆにさみだれのひかずふるこそなほまさりけれ」(『教長集』夏歌・二七七)。「東路五月雨 句題百首」)、「宮木野のこのしたふかきゆふつゆもなみだにまさる秋やなからん」(『新勅撰和歌集』雑歌四・二二八)。「題しらず」・平政村)等がある。

④ ことには―諸本に従い「こと葉に」に改める。

【通釈】

七十五番

左(歌) 勝

沙弥蓮性

下折れした猪名の柴原には、いよいよしきりに絶え間なく雪がいつそう降り積もっているだろう。

右(歌)

下野

(雨にまさるといふ) 木の下の露にもまさることよ。宮城野の御笠もとりおおせないほど降る雪の深さは。

【判詞】(右歌の) 御笠もとりおおせないほどの雪が木の下の露にまさるであろうということとは、すでに詞にそのまま表れていて、疑問が生じる余地もなくみえるでしょう。(左歌の) 猪名の柴原にいよいよしきりに絶え間なく雪が降り積もっている情景は、見所がとりわけございますので、左を勝といたします。

〔七十六番〕

七十六番

左 勝

為氏 朝臣

けさのまも跡こそみえね白雪のふるからをの、もとの通路

右

少将内侍

思ふよりいと、いくの、みち絶てまたふみもみすつもる白雪

左ふるからをの、もとのかよひち、かしはならては、

跡見えぬ雪に、もとの心もわすれぬへく侍にや、

右いくの、道またふみもみす、おかしく思いた

され侍に、思ふよりもといへる五字そすこしお

ほつかなく侍ける、左の今朝のまもといへるは、

いさ、か心侍へきにや、勝侍へし、

【校異】

イ 勝―ナシ(書) 口 白雪―雪哉(書・内・支)、雪哉(聚) ハ ならて

は―なくては(書・内・支・聚・群) 二 跡―跡は(支・群) ホ わすれ

ぬ―わかれぬ(内・支・聚・群) ヘ おかしく思いたされ―おもひ出され(支)

ト 思ふよりも―思ふより(書・内・支・聚・群) チ いへる五字そ―いへる

そ五字そ(書)、いへる五文字そ(内・聚)、いへる五文字(支・群) リ 左の

―左(内・支・聚・群) 又 いへるは、いさ、か心―いへるは心いささか(書)、

いへる心いさ、か(内・支・聚・群)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

【秋風抄】冬歌・一六六・「雪歌」・少将内侍

おもふよりいとどいくのの道たえてまだふみもみすつもる雪かな

建長三年(一二五二)【閑窓撰歌合】三十四番左・六六・少将内侍

おもふよりいとどいく野の道遠みまだふみもみず積る雪かな

【本歌】

（右歌）

【金葉和歌集】二度本・雑部上・五五〇・「和泉式部保昌にぐして丹後にはべりけるころ、みやこに歌合侍りけるに、小式部内侍うたよみにとられて侍りけるを定頼卿つばねのかたにまうできて、歌はいかがせさせ給ふ、丹後へ人はつかはしてけんや、つかひまうでこずや、いかに心もとなくおほすらんなど、たはぶれてたちけるをひきとどめてよめる」・小式部内侍

おほえやまいくののみちのとほればふみもまだみずあまのはしだて

※「百人秀歌」「袋草紙」等は第四句「まだふみもみず」。

【語釈】

①ふるからをの―七十二番【語釈】参照。当該歌も「いそのかみふるからをの」とがしは本の心はわすられなくに」（『古今和歌集』雑部上・八八六・題しらず・よみ人しらず）をふまえる。

②いくの―丹波国の歌枕。「いく」に「行く」の意をかける。

③かしはならては―「本柏」の語がなければ、「古今和歌集」歌の元々の趣向を忘れてしまい（※他の本文「わかれぬ」を採れば、「離れてしまい」、わからなくなるのではないか、の意。通い路の跡が見えなくなっていく様子に、往來の途絶えの意味を込めている。或いは恋の意を汲み、男の夜離れを嘆く歌ととるべきか。

④思ふよりもといへる五字そすこしおほつかなく侍ける―なぜ生野の道を想像したのか前後の脈絡がなく、歌の構造上、「思ふより」の五字の位置付けが不明瞭であることを批判する。なお、右歌初句と諸本の当該箇所「思ふより」とあるのを採用する。

【通釈】

七十六番

左（歌） 勝 （左近衛権中将藤原）為氏朝臣

今朝も跡は見えない。白雪が降るばかりの、古から小野の以前の通い路は。

右（歌） 少将内侍

想像した以上に、ますます生野の道に白雪が積もり、絶えてしまったので、まだ踏んでもいない。

【判詞】左歌の「ふるからをの、もとのかよいち」は、「古今和歌集」歌にあった「かしは」がないのだから、（通い路の）跡の見えない雪によって、「もとの心」も忘れてしまうのでしょうか。右歌の「いくの、道」「またふみもみず」は、（本歌が）面白く思い出されますが、「思ふより」という五字は少しほんやりしております。左歌の「けさのまも」というのは、僅かに歌の内容が明確でございますでしょうか。（左歌の）勝ちでございます。

（七十七番）

七十七番

左 榊

ふる雪に野中の松もうつもれて今は嵐の声たにもなし

右 沙弥禅信

ふみ分て行へき道も白雪のしらぬ野原の末そゆかしき

声たにもなし、すゑそゆかしき、いく程の勝劣侍らし、

【校異】

イ 持―ナシ（書）、勝（支） □ 経朝つねとも 古本―経朝朝臣（書・内・支・聚・

群） ハ の―に（内） ニ 野原―野中（内・支・聚・群） ホ 勝劣侍ら

し―勝負なし（内・支・群）、勝劣なし（聚）

【他書所伝】

（左歌）ナシ （右歌）ナシ

【語釈】

①ふる雪に……もうつもれて―上句は、「ふるゆきにすぎのあをばもうつもれてしるしも見えずみわのやまもと」（『金葉和歌集』二度本・冬・二八五・「宇治前太政大臣家歌合に雪の心をよめる」・皇后宮撰津）、「ふる雪にのきはの竹もうつもれて

友こそなけれ冬の山ざと」(『千載和歌集』冬・四六二)「醍醐の清滝の社に歌合し
侍りける時、よめる」・よみ人しらず)等のように、雪の歌の一つの型に添った詠
み方である。

②野中の松―「野中」は、人里のない原野。野中に立つ松を詠み込んだ歌として
は、「岩代の野中に立てる結び松心も解けず古思ほゆ」(『万葉集』巻第二・挽歌・
一四四二)「長忌寸奥麻呂、結び松を見て哀しび咽ふ歌二首」・長忌寸意吉磨)がある。

③今は嵐の声たにもなし―今は嵐の音さえ途絶えてしまった、の意。松に雪が積
もって嵐(風)の音が弱るといふ発想は、「ききなれし嵐の音はうづもれて雪にぞ
なびく峰の松ばら」(『壬二集』冬・二六五七)「後京極撰政治家詩歌合に、雪中松樹
低」・木ずゑにもよはのしらゆきつもるらしおとよわりゆくみねの松かぜ」(『六百
番歌合』冬・寒松・十二番右・五六四・慈円)、「ふる雪に軒ばの松もうづもれて
おとせぬ風もさえまさるなり」(『老若五十首歌合』冬・百九十番左・三七九・寂蓮)
等、先行例も多く、それほど目新しい趣向ではない。「嵐の声」は、嵐の音を擬人
的に表現したもの。「秋山のあらしのこゑをさく時はこのはならねど物ぞかなしき」
(『拾遺和歌集』秋・二〇七)「題しらず」・遍昭)。

④白雪のしらぬ―「白」に「知らず」を掛け、さらに、第四句「知らぬ」を導く。
「まつ人のゆききのかもしら雪のあすさへふらば跡やたえなん」(『壬二集』光
明峰寺入道撰政治家百首・冬・岡雪・六四八)、「さりとともいまゆくすゑもしらゆ
きのしらぬいのちにおもひきえつつ」(『如願法師集』春日詠百首応製和歌・雑・
九三)。

⑤しらぬ野原の末そゆかしき―不案内な野原の、その末が知りたいものだ、の意。
「けふは又しらぬ野ばらに行きくれぬいづれの山か月はいづらん」(『新古今和歌集』
羈旅・九五六)「(たびの歌とよめる)」・家長)。

【通釈】

七十七番

左(歌) 持

(左京権大夫藤原) 経朝朝臣

降る雪に、野中の松も埋もれて、今は嵐の音さえも途絶えてしまったことだ。

右(歌)

沙弥禅信

踏み分けて行くべき道も(降り積もった白雪のために)知られず、不案内な野
原の、その末がどうなっているのか知りたいものだ。
【判詞】「声たにもなし」、「すゑそゆかしき」、どれほどの勝ち負けもございませぬ。

〔七十八番〕

七十八番

左 勝

越前

春日野や秋の名残も見えわかすみな白妙の雪の下草

右

為家

あさち原かれふのをの、草の上にもまじる色なくつもる白雪

みな白妙、まじる色なく、おなし心に見え侍を、かれ

ふのを野、そことも見え侍らす、かすかにをよ侍らし、

【校異】

イ 勝―ナシ(書・内) □ 為家―前大納言為家(内)、前権大納言為家(書・

支・聚・群) ハ 見え侍らす―見えす(内・支・聚・群) ニ かすかに―

かすかのに(書・内・支・聚・群)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『天木和歌抄』雑部四・九六五三・「宝治十首歌合、野外雪」・民部卿為家卿

あさちはられふのをの草のうへにまじる色なくつもるしらゆき

【語釈】

①みな白妙の―すべてが真っ白に見えるの意。「峰の嵐浦の浪かぜ雪さえてみな白

たへの秋の夜の月」(『拾遺愚草』六九四・花月百首)、「千はやぶる神の心もふる

雪にみな白妙の住吉のうら」(『建保名所百首』冬十首・六二八)「住吉浦撰津国」・

家衡)等の先例がある。

【通釈】

七十八番

左(歌) 勝

(嘉陽門院) 越前

春日野では(今や)秋の名残も判別できない。みな真つ白の雪の下草となつてしまつて。

右(歌)

(前権大納言藤原) 為家

浅茅原は(今はみな)枯れ草となつた野原の草の上に、まじる色なく(白一色に)、つもる白雪であることよ。

〔判詞〕「みな白妙」、「まじる色なく」は、(共に)同じ趣向に見えますが、「かれふのを野」の方は、(特に)どこであるとも見えませんので、「春日(野)」には及びませんでしょう。

宝治元年『院御歌合』注釈―「忍久恋」題―

位 藤 邦 生 藤 川 功 和

はじめに

『尾道大学芸術文化学部紀要』第8号（平成21年3月刊行）に引き続き、宝治元年（一二四七）『院御歌合』の注釈を試みる。今回は「忍久恋」題十三番を取り上げる。各番（第一次稿）担当者と所屬を以下に示す。

七十九番―位藤邦生、八十番―藤川功和（尾道大学）、八十一番―位藤、八十二番―藤川、八十三番―位藤、八十四番―藤川、八十五番―位藤、八十六番―藤川、八十七番―位藤、八十八番―藤川、八十九番―位藤、九十番―藤川、九十一番―位藤

凡 例

一、底本は、永青文庫蔵本（一〇七・三六・七）（『細川家永青文庫叢刊』第八卷所収）を用いた。
一、校合した諸本と略号は、以下の通り。

書―書陵部蔵本（五〇一・七四）（『新編国歌大観』の底本）
内―内閣文庫蔵本（百三十番歌合（外題））（二〇一・二四七）
支―九州大学支子文庫蔵本（九一一・ホ・一）
聚―書陵部蔵歌合類聚本（『大日本史料』第五篇二十四所収）
群―群書類従本（巻第二百所収）

一、注釈は、番全体の本文【校異】を示した後、【他書所伝】【本歌（参考歌）】【語釈】【通釈】をあげた。
一、【語釈】の内、各詠作者並びに前号までに既出の語彙については、紙幅の関係上これを略した。
一、表記や送り仮名の異同はこれを略し、見せけちや補入符号によって訂正のある箇所は、訂正後の本文を採用した。
一、翻字本文には適宜読点を施し、字体は現行の活字体に改めた。
一、本文中、異同の存する箇所には、傍線及びイ、ロ、の如き符号を付し、語釈を施した箇所には、本文右傍に①、②…の通し番号を付した。
一、底本で文意不通等が認められる場合、他本の本文に拠り通釈

を施した場合がある。その際、本文【校異】【通釈】において他本に拠った箇所を網掛けを施した。

一、引用本文は、原則として「新編国歌大観」に拠り、その他の引用文献は、適宜底本を示した。なお、引用本文には、適宜、傍線、振り仮名等を付した。

一、「万葉集」については、本文、歌番号ともに塙書房刊『万葉集訳文篇』を用いた。

〈七十九番〉

七十九番 忍久恋^①

左 持^イ

女房

つれなきもいはねはこそと思はずは年月いかでなからへも

せん

小宰相

人しれぬ心ハにふるす年月ハのいハのちハとなれる程ハそつれなき

左 題心おかしくとりなされて、下の句ハことハによるしく

こそ侍れ、右人しれぬ心ハにふるすとし月ハといへる、

題みな上句ハにきはまりて侍れと、哥ハから優ハに

侍を、程ハそつれなきと侍るそいか、ときこそえ侍、た、

はかなきなどやうハによはよはしきさまに侍らハは、いま

すこしえんにも侍へくや、しかれとも是程ハにちか

つける程のおもひハいて侍らねは、はしめて持ハの字

をゆるさるへきにや侍らん、

【校異】

イ 持—ナシ(書) 口 新後撰—ナシ(書・内・支・群)、新

後撰、恋一(聚) ハ 続後撰—ナシ(書・内・支・群)、続後撰、恋一(聚) ニ 人しれぬ—人しれず(支) ホ 年月の—とし月を(書) ヘ 題心—題のこ、ろ(書・支・群)、題の心を(内・聚) ト 下の句—下句(書・内・支・聚・群) チ 上句—かみの句(書・支) リ 哥から—うた(書) 又 侍

を、程—侍るを、と(支) ル やうに—やうによみ(内・支・聚・群) ヲ 侍らは—侍れは(内) ワ 是程に—これ程の(内・支・聚)、これ程のつかひ(群) カ ちかつ—ナシ(群)

【他書所伝】

〈左歌〉

『新後撰和歌集』恋歌一・八二五・「宝治元年、十首歌合に、忍久恋」・後嵯峨院

つれなきもいはねばこそと思はずはとし月いかでながらへもせん

『題林愚抄』恋部一・六三一四・「新後撰」・後嵯峨院

つれなきもいはねばこそと思はずはとし月いかでながらへもせん

〈右歌〉

『続後撰和歌集』恋歌一・六七六・「十首歌合に、忍久恋」・土御門院小宰相

人しれぬ心ハにふるす年月ハのいハのちハとなれるほどぞつれなき

『題林愚抄』恋部一・六三〇九・「忍久恋」、続後撰・土御門院小宰相

人しれぬ心ハにふるすとし月の命ハとなれるほどぞつれなき

【語釈】

①忍久恋—『新編国歌大観』によると、『教長集』「わがこひのおなじいろなるころもでにふりぬるなみだ猶つつむかな」(恋歌・六五八)が「忍久恋」題を最初に使ったと思われる。『教長集』は平安末期の歌集で、作者藤原教長は院政期に活躍した歌人、歌

学者。没年は未詳であるが、治承二年七〇歳までは生存していた。
②いはねはこそと—時代が下るが、「思へどもいはねはこそとなくさめてながらへにける我ぞつれなき」〔新統古今和歌集〕恋歌一・一〇九七・「忍久恋を」・平光俊)があつて、当該歌の影響下の詠歌かと思われる。

③なからへもせん—当該歌以前の用例は見当たらず、同じ嵯峨院の召しによる『弘長百首』に「とへかしなあまのまてかたさのみやはまつに命のながらへもせん」(恋二十首・不逢恋・四五八・融覚)がある。為家は「下の句ことよろしくこそ侍れ」と評するが、やや無骨な表現というべきか。

④人しれぬ—「人」には、(恋する)相手の意と、(世間の)人の両方の用例がある。「人しれぬ思ひやなぞとあしかきのまぢかけれどあふよしのなき」〔古今和歌集〕恋歌一・五〇六・(題しらず)・(読人しらず)、「人しれぬ思ひをつねにするがなるふじの山こそわが身なりけれ」〔古今和歌集〕恋歌一・五三四・(題しらず)・(読人しらず)等は前者、「ひとしれぬわがかよひちのせ関守はよひよひごとのうちもねななむ」〔古今和歌集〕恋歌三・六三二・「ひむがしの五条あたりをしりおきてまかりかよひけり、しのびなるところなりければかどよりしもえいらでかきのくづれよりかよひけるを、たびかさなりければあるじききつけてかのみちに夜ごとをふせてまもらすれば、いきけれどえあはでのみかへりてよみてやりける」(業平)は後者。後者については『伊勢物語新釈』に「人にしられぬと云べきをつづめていへる哥詞なり」と説明している。当該歌では後者の意と解しておく。

⑤いのちとなれる—管見の限りでは当該歌の独自表現。「かぎりなきいのちとなるもなべて世の物のあはれをしればなりけり」

〔長秋詠草〕下・四一一・「人記品／寿命無有量、以愍衆生故」は類似表現。俊成歌では「かぎりなきいのち」で「永遠の命・寿命」をさしている。

⑥程そつれなきと侍るそいか、ときこえ侍—「程そつれなき」は当該歌以前には見当たらず、以後も「時鳥よそに過行く—こゑの又おとづれぬ程ぞつれなき」〔新統古今和歌集〕夏歌・二五〇・「夏歌の中に・足利義詮)を見る程度である。「程ぞはかなき」の例は「数ならばいとひもせまし長月にいのちをかくるほどぞはかなき」〔源氏物語〕藤袴・四〇三・鬚黒大将)や「ぬる夢にうつつのうさもわすられておもひなくさむほどぞはかなき」〔新古今和歌集〕恋歌五・一三八四・(題しらず)・徽子女王)など多くの例がある。

〔通釈〕

七十九番 忍久恋

左(歌) 持

女房(後嵯峨院)

(あの人が自分に)冷淡なもの、自分が(あの人への)恋心を胸に忍んで)打ち明けないからだと思わないならば、長い年月をどうして(生き)承らえられようか。

右(歌)

(承明門院) 小宰相

誰も知らない(私の)心の中で過ぎて行く(報われない)年月が、(やがて私の)命(を支えるもの)となった定め、なんとつれないこと。

〔判詞〕左(歌は)歌題を味わい深く(意識的に)とりなして、下の句が殊によろしうございます。右(歌は)「人しれぬ心にあふるとし月」と言っていて、題(の意)がみな上句に集中しておりますものの、(全体に)歌がらが優であります(が)、「程そつれなき」とありますのがさあどうであろうかと思われれます。ただ

「はかなき」などと弱弱いさまでございましたならば、いまま少し艶でもございましたでしょう。けれどもこれほどに（左歌に）近づいたほどの思い出もございませんから、はじめて「持」の字を（付けることを）許されるべきでもございませうか。

八十番

八十番

左 勝

太政大臣

① さのみやはたえぬ思もかくれぬの下行水のくるしかるへき

右

俊成卿女

秋をへて時雨の色を忍ふ山露をもらすな道のはてまで

左かくれぬの下行水といへるいか、と見え侍れと、
ことはやすらかにいひしりて、殊よろしく侍めり、
右ことなる難には侍らねと、忍ふ山はみちのおくと
申ならひたり、道のはてなるとはひたちおひにいひ
つきて侍にや、まことにおくまでといひてはよろし
からす侍へかりけり、負侍れかし、

【校異】

イ 勝—ナシ（書） 口 思も—おもひも（書・内・支・聚・群）
ハ といへる—そ（書・内・支・聚・群） 二 いか、と—いか
にと（書・内・支・聚・群） ホ 難には—難も（内・聚）
へ ならひたり—ならひ（書・内・支・聚・群） ト なるとは
—などは（書） チ つきて—つきん（書）、つけて（支・群）
リ にや、まことにおくまでといひてはよろしからす侍—ナシ
（内・支・聚・群） 又 けり—ける（内・支・聚・群）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

① さのみやは—反語表現で「そうとばかり—であろうか、いやそうではない」の意。初句に置く勅撰集中の初例として、「さのみやはわが身のうきになしはてて人のつらさをうらみざるべき」
〔金葉和歌集〕恋部下・四五五・「人をうらみてよめる」・源盛
経母）がみえ、以後「さのみやはうけさへ君をうらむべきおきてきつるは人のとがかは」〔林葉和歌集〕恋歌・七四三・「顕輔
卿家歌合に、後朝恋」）、「さのみやはあはぬためしのあるべきと
またぞこひぢにおもひたちぬる」〔教長集〕恋歌・六四三・「お
なじこころをよめる」等、用例が散見する。

② かくれぬの—隠れている沼が原義。忍ぶ恋を詠み込む際によく
用いられる。「かくれぬのした行く水のおもほえばいかにせよと
か我がねそめけん」〔古今和歌六帖〕一六八六・「ぬま」・赤人）
「紅の色にはいでじかくれぬのしたにかよひてこひはしぬとも」
〔古今和歌集〕恋歌三・六六一・「寛平御時きさいの宮の歌合の
うた」・友則）。

③ 下行水—忍ぶ恋を詠む際にしばしばみえる表現。「山高みした
行く水のしたにのみ流れてこひむこひはしぬとも」〔古今和歌
集〕恋歌一・四九四・「題しらず」・読人しらず）、「かくとだに
おもふ心をいはせ山した行く水のくさがくれつつ」〔新古今和歌
集〕恋歌二・一〇八八・「恋うたあまたよみ侍りけるに」・実定）
等はその一例。

④ 忍ふ山—信夫山。陸奥国の歌枕。「伊勢物語」第十五段で「男」
が「しのぶ山忍びて通ふ道もがな人の心のおくも見るべく」と詠
む。

⑤ 忍ふ山はみちのおくと申ならひたり―「いかにしてしるべなくとも尋ね見んしのぶの山のおくの通路」〔長秋詠藻三五九・頼輔朝臣の歌合によみておくりし五首中、忍恋〕、「おくもみぬ忍ぶの山に道とへば我が涙のみさきにたつかな」〔拾遺愚草〕二五七七・「建久七年内大臣殿にて、文字をかみにおきて廿首よみ侍りしに、恋五首、かたおもひ」〔隆信集〕恋一・四七八・「西行かなしのぶの山のおくの通路」〔隆信集〕恋一・四七八・「西行上人伊勢百首に」〔みちのくの忍の山のおくよりもおなじけふこそ春は立つらめ〕〔建保名所百首〕一八二・「忍山陸奥国」・「行意」等の如く、信夫山は多く「道」「奥」とともに詠まれている。

⑥ 道のはてなるとはひたちおひにいひつきて侍にや―「あづまぢのみちのはてなるひたちおびのかごとばかりもあひみてしかな」〔古今和歌六帖〕三三六〇・「おび」・友則を念頭に置いた指摘。

【通釈】

八十番

左(歌) 勝

太政大臣(西園寺実氏)

途切れることのない我が思いも隠れた沼のさらに奥底の水のように心の奥に秘めて苦しいばかりでいいものだろうか(早く思いをあらわにして幸せになりたい)。

右(歌)

俊成卿女

秋が深まり時雨によって紅葉する色を忍んで露を漏らさないように涙を漏らすなよ、この恋路の果てまで。

【判詞】左(の)「かくれぬの下行水」と言う(表現)はどうであらうかと見えますが、詞も穏当に言い方を心得ていて、特によいでしょう。右(は)たいした難点ではないですが、信夫山では

「道の奥」と申す習いで、「道のはてなる」という表現は常陸帯(という詞)を続けるでしょう。(そうかといって)本当に奥までと言つてはよろしくないでしょう。(右の)負けでしょうよ。

〈八十一番〉

八十一番

左 持

權大―通忠

としをふる涙なりともをのつからもらさは袖のひまもあらまし

右

同上 実雄

下にのみ忍ふの山の岩こすけいはて思ひの年そへにける

左年をふるなみたなりともなど、上句艶に

見え侍を、右又いはて思ひのとしそへにける、よろしく侍れば、これらはは持とこそ申侍らめ、

【校異】

イ 持―ナシ(書) 口 權大―權大納言(書・内・支・聚・群)

ハ 新後撰―ナシ(書・内・支・群)、新後、恋一(聚)

ニ 同―權大納言(書・内・支・聚・群) ホ 思ひの―思の

(内) ヘ 見え侍を―侍を(書・内・支・聚・群) ト へに

ける―へにけり(支) チ これらをは―これをは(内・群)、

是を以テ(支)、これを(聚) リ 持とこそ―持とこそは(内・聚・群)

※この箇所、底本は「れ」を見せけちとして「りイ」とする。

【他書所伝】

〈左歌〉

【新後撰和歌集】恋歌一・八三五・「宝治元年、十首歌合に、忍久恋」・右近大将通忠

年をふる涙なりともおのづからもらさば袖のひまもあらまし

【万代和歌集】恋歌一・一八七二・「十首歌合に、忍久恋といふことを」・右大将通忠

としをふるなみだなりともおのづからもらさばそでのひまもあらまし

【題林愚抄】恋部一・「同（新後撰）」・右大将

としをふるなみだなりともおのづからもらさば袖のひまもあらまし

〈右歌〉

【夫木和歌抄】雑歌十・一三五五四・「宝治十首歌合、忍久恋」・山階入道左大臣

下にのみしのぶの山のいはこすげいはで思ひのとしぞへにける

【現存和歌六帖】二六三・権大納言実雄

したにのみしのぶのやまのいはこすげいはでおもひの年ぞへにける

【語釈】

①ひまもあらまし―「なれてこそ心にかかれ玉だれのみずはわするるひまもあらまし」【新統古今和歌集】・恋歌二・一一九六・

「建長二年三首歌めされける次に、恋の心をよませ給ふける」・

後嵯峨院、【秋風和歌集】恋歌中・八三六〇があり、「わすられぬ夢だになくはおのづからさむる涙のひまもあらまし」【風葉和歌集】恋四・九九二・「しのびたる女にたまはせける おなじ（我が身にたどるの）みかどの御歌」の例がある。

【通釈】

八十一番

左（歌） 持

（恋心を打ち明けられぬまま）長年にわたって流す涙であつても、万一それ（||その恋心）を（あの人に）洩らしたならば、袖の（乾く）ひまもあるだろうに。

右（歌）

（権大納言藤原）実雄

（心の底の）下にのみ忍ぶの山の岩こすげではないけれども、（あの人への恋心を）言わないまま、（恋しく）思う（ばかり）長い年月を経てきたことだよ。

【判詞】左（歌は）「年をふる涙なりとも」など、上句（が）艶に見えますが、（一方）右（歌も）又「いはて思ひのとしそへにける」（の表現が）、なかなかようございますので、これら（の歌）を持とこそ申すことにいたしましたしょう。

〈八十二番〉

八十二番

左

あふ事をまつに涙の夕しくれとしはふるとも色に出すな

右 勝

同 公相

名とり川思ひくちても年はへぬまたあらはれぬせ、の埋木

左まつになみたの夕時雨、つつきもいか、と聞え

侍に、色に出すなといひはてたる程、しかるへき

すかたならずや侍らん、右名取川、下句よろし

く侍れば、右尤勝侍へし、

定雅 さたまさ 古本

【校異】

イ 定雅—権大納言定雅(書・内・支・聚・群) 口 さたまさ
古本—ナシ(書・内・支・聚・群) ハ すな—めや(群) ニ
勝—ナシ(書) ホ 同—権大納言(書・内・支・聚・群) ヘ
侍に—侍るうへに(聚) ト すなと—めやなど(群) チ 程
—など(内・支・聚・群) リ 侍らん—ナシ(支)

【他書所伝】

へ左歌—ナシ へ右歌—ナシ

【語釈】

①涙の夕しくれ—先行例として、「深山ゆく秋の涙のゆふしぐれ
あらそふものか槇の下葉も」(建永元年七月「卿相侍臣歌合」羈
中暮・廿九番右・五八・成茂)がみえる。

②名とり川—名取川。陸奥国の歌枕。「名とり河せぜのむもれ木
あらはれば如何にせむとかあひ見そめけむ」(「古今和歌集」恋歌
三・六五〇・「題しらず」・よみ人しらず)以来、「ありとても
あはぬためしのなとり河くちだにはてねせぜの埋木」(「新古今和
歌集」恋歌二・一一一八・「撰政太政大臣家歌合」よみ侍りけ
る」・寂蓮)、「なげかずよいまはたおなじなとり川せぜの埋木く
ちはてぬとも」(「新古今和歌集」恋歌二・一一一九・「千五百番
歌合」・良経)等、「埋れ木」とともに詠み込む恋歌が散見する。
③色に出すなといひはてたる程、しかるへきすかたならずや侍ら
ん—「色に出すな」という表現は先行例が見あたらない。

【通釈】

八十二番

左(歌)

(権大納言源) 定雅
(恋しい人に) 逢うのを待ちこがれて夕方に時雨が降り注ぐよ
うに涙が流れる、(こんな風に忍んで) 年は過ぎて行こうとも決

して他人に悟られはすまい。

右(歌)

同(権大納言西園寺) 公相

(あの人への恋しい) 思いが実らぬまま年月は経ってしまった。
二度とあらわれぬ瀬々の埋木(のように)。

【判詞】左(の)「まつになみたの夕時雨」(という表現は、(詞
の) 続き具合もどうであろうかと聞こえますが、(下の句で)「色
に出すな」と言い終えているあたり、理想的な姿でないのではな
いでしょうか。右(の)「名取川」は、下の句よろしいので、右
が当然勝ちです。

八十三番

左

公基

あふ事を命にかへて思ふ身の何と忍ひて年のへぬらん

右

為教

みなそこになひく玉もの年をへて思みたると人はしらしな

左下句すこし無念ともや申つへく侍らん、右

玉藻なといへる、哥さまいさ、かえんに侍にや、

へ八十三番

【校異】

イ ナシ—持(支) 口 同—権大納言(書・内・支・聚・群)
ハ あふ事を—逢うことは(書) ニ 勝—ナシ(書・内・支)
ホ 為教—為教朝臣(書・内・支・聚・群) ヘ 申つへく—申
へく(内・支・聚・群) ト えんに—ナシ(書・内・支・聚)、
勝(聚)、まさる(群) チ 侍にや—にや(群)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『題林愚抄』恋部一・六三一八・「(宝治御百首)」・為教朝臣
みなそこになびく玉もの年をへて思ひみだると人はしらじな

【語釈】

①なびく玉もの―「河のせになびくたまものみがくれて人にしられぬこひもするかな」(『古今和歌集』恋歌二・五六四・(紀とも
のり)や「いもせ川なびくたまものみがくれてわれはこふとも
人はしらじな」(『古今和歌六帖』第三・かは・一五七六)など、
恋の比喩に用いた多くの例がある。

【通釈】

八十三番

左(歌)

(権大納言藤原)公基
(あの人に)会うことを命に代えてもと祈っている我が身が、
何で恋心を秘めたまままで何年も経てきているのだろうか。

右(歌) 勝

(右近権少将藤原)為教
水底に靡く玉藻が何年にもわたって乱れるように、私も(長年
あの人を恋うて)思い乱れているとも、あの方は知らないのだな
あ。

【判詞】左(歌は)下句(の表現が)少々無念であるとも申しあ
げるのが適当でしょう。右(歌は)玉藻などと言って、(この方
が)歌さまが少々艶でありましょう。

八十四番

八十四番

左

知かたき人の心のやすらひにいはておもひの年をへにける
右勝 信実 為経

月ゆへと人にはいひて誰をかもめて、も恋の老となるらん

左上句題おほつかなく侍うへに、やすらひもすこし心

ゆかす侍にや、右月故と人にはいひてたれをかも

めて、も恋の老となるらん、心たくみにすかたお

かしく侍れば、まさり侍らん、

【校異】

イ 中――中納言(書・内・支・聚・群) 口 いはて―いか

て(支) ハ 年を―としそ(書・内・支・聚・群) 二 勝―

ナシ(書) ホ 信実―信実朝臣(書・内・支・聚・群)

へ 誰を―たれを(書・内・支・聚・群)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『夫木和歌抄』雑部十八・一七一一・「宝治十首歌合、忍久恋」・

信実朝臣

月ゆゑと人にはいひてたれをかもめてでもこひのおいとなるらん

『題林愚抄』恋部一・六三一九・「(宝治御百首)」・信実朝臣

月ゆゑと人にはいひてたれをかもめてでも恋のおいとなるらん

【語釈】

①やすらひ―躊躇すること。「秋のよの有明の月のいるまでにや

すらひかねてかへりにしかな」(『新古今和歌集』恋歌三・一一六九・「九月十日あまり、夜ふけて、いづみしきぶがかどをたたかせ侍りけるに、きまつけざりければ、あしたにつかはしける」・敦道親王)、「あづまぢやしのぶのさとにやすらひてなこそせきをこえぞわづらふ」(『新勅撰和歌集』恋歌一・六七一・「題しらず」・西行)、「やすらひにいにし人のかよひぢをふるきのほら」といまはみるかな」(『六百番歌合』恋三・絶恋・十三番左・七四五・良経)、「やすらひにいにしままの月のかげ我がなみだのみそでにまでも」(同・恋六・寄月恋・五番左・九〇九・定家)等、恋歌の用例が散見する。

②おもひの年―片思いのまま年を経た意。「かずならでおもふおもひのとしふともかひあるべくもあらずなりゆく」(『好忠集』四五四・「ひのと」)、「大空にちぎる思ひのとしもへぬ月日もうけよ行すゑの空」(『後鳥羽院御集』承元二年二月内宮卅首御歌・一三七七・「雑」)等。

③月ゆへと―「なげけとて月やは物をおもはするかこちがほなるわが涙かな」(『千載和歌集』恋歌五・九二九・「月前恋といへる心をよめる」・西行)等、恋の物思いを月にかこつける発想。

【通釈】

八十四番

左(歌)

中(納言藤原) 為経

知りがたいあの人の気持ち(確かめようかどうかと)躊躇して(思いを)言ひ出さず思うだけの年月を経ってしまったのだなあ…

右(歌) 勝

(散位藤原) 信実

月のせいで、人には言ひ、誰かを気に入り愛しても、結局、恋がそのまま老いになってしまっているのだろうか…

〔判詞〕左(の)上の句題がはつきりしない上に、「やすらひ」という詞の使い方)も少し納得行きませんでしょうか。右(の)「月故と人はいひてたれをかもめて、も恋の老となるらん」(という詠みぶりは)、心たくみで姿が面白いですので、勝つてしましう。

八十五番

八十五番

左

通成 みちなり 古本

忍^①ふるもくるしき物をなつ引^②のてひきの糸の年をへぬれば

右 勝 雅光 まさみつ 古本

思ひつ、いくとせ波にくちぬらん忍ふの浦の海士のたくなは

左て引の糸の年をへぬればと、をはりの句に

いひはてたる、いと程^③よりもつよく聞え侍にや、

右あまのたくなは哥^④すかたまさりて優^⑤に侍に、

下句や若ちかき哥に侍けん、れいの勘出侍らん程、

勝と申へし、

【校異】

イ 通成―右衛門督通成(書・内・支・聚・群) 口 みちなり

古本―ナシ(書・内・支・聚・群) ハ 勝―ナシ(書)

二 雅光―右近中将雅光(書・内・聚・群)、右近衛中将雅光(支)

ホ まさみつ 古本―ナシ(書・内・支・聚・群) ヘ いひは

てたる―いひえてたる(支) ト 程―おもひ(書) チ より

も―よりは(書・内・支・聚・群) リ つよく聞え侍にや―心

つよく聞え侍にや(内・聚・群)、ナシ(支) ヌ 右―ナシ(支)

ル たくなは—たくなはは(書) ヲ 哥すかた—うたのすかた
 (書・内・支・聚・群) ワ 侍に、下句や若ちかき哥に侍けん
 —侍らん(内・支・聚・群) カ 勘出—勘出し(内・支・聚・群)
 群) ヨ 申へし—申侍へし(書・内・支・聚・群)

【他書所伝】

へ左歌へナシ

へ右歌へ

『夫木和歌抄』雑部七・一一六八八・「しのぶのうら、陸奥／建
 長六年歌合」・雅光卿

おもひつついくとせなみにくちぬらんしのぶのうらのあまのたくなは

【語釈】

① 忍ふるもくるしき物を—「しのぶるもくるしかりけりかずならぬ人はなみだのなからましかば」(『金葉和歌集』三奏本・恋・四一九・「ものおもひはべりける時よめる」・出羽弁)なども先蹤がある。

② なつ引のてひきの糸—「ぬれつつもくると見えしは夏引のてびきにたえぬいとにやありけん」(『後撰和歌集』恋五・九七六・「雨にもさはらずまできて、そら物がたりなどしけるをとこの、かどよりわたるとて、雨のいたくふればなんまかりすぎぬるといひたれば」・(読人しらず) など、早くから用例がある。「夏びきのてびきのいとのとしをへてもたえぬおもひにむすほはれつつ」(『新古今和歌集』恋歌二・一一四〇・「ひさしきこひといへること」を・越前)の例もあり、越前は当該歌合の参加者であった。

③ 忍ぶの浦の海士のたくなは—「忍ぶの浦」は、陸奥国の歌枕。

「うちはへてくるしき物は人めのみしのぶのうらのあまのたくなは」(『新古今和歌集』恋歌二・一〇九六・「忍恋の心を」・二条

院讃岐)がある。この歌は『千五百番歌合』に提出された。「下句や若ちかき哥に侍けん」との為家の指摘はこの歌を意識しているようか。

【通釈】

八十五番

左(歌)

(恋心を打ち明けないで) 忍んでいるのも苦しいこと、夏引の手引きの糸が年を経たので(弱るように)。

右(歌)

(あの人を恋しく) 思い思いしながら何年波に朽ちてしまっていることだろう、しのぶの浦の海士の栲縄は。(そして同じような自分は。)

【判詞】左(歌は)「て引の糸の年をへぬれは」と、末句に言い果てているのが、(歌中の)糸(の表現)よりも強く(不調和に)聞こえましよう。右(歌)「あまのたくなは」(の方)は歌姿が優でありますものの、下句はもしかしたら最近の歌にありましたでしょうか。(そうであっても)例によって(自分で)案出したところは、(こちらを)勝と申すべきでしょう。

へ八十六番

【校異】

八十六番

左 持

我ならぬ忍^イの山の松の葉も年へて色に出る物かは

右

おもふ事いはて心のうちにのみつもる月日をしる人のなき

兵 有教

弁内侍

左我ならぬといひはしむるより、いつる物かはとはて
 たるまで、いつくこそと見ゆる所なく、詞つよく
 よみくたして侍めり、右あやにくにちからなく優
 なる姿とりく⑤に侍れば、よき持とこそ見え侍れ、

イ 持—ナシ(書) 口 兵—有教—兵部卿有教(書・内・支・
 聚・群) ハ 新後撰—ナシ(書・内・支・群)、新後撰、恋一
 (聚) ニ ナシ—続拾遺、恋一(聚) ホ いはて—いかて(内・
 支・群) ヘ かはと—かはとて(内・支・聚) ト つよく—
 よく(書) チ くたして—出して(内・支・聚・群) リ と
 こそ—にこそ(書)

【他書所伝】
 <左歌>

【新後撰和歌集】恋歌一・八二六・「(宝治元年、十首歌合に、忍
 久恋)」。兵部卿有教

われならぬしのぶの山の松の葉も年へて色にいづるものかは

【夫木和歌抄】松・一三七八六・「宝治十首歌合、忍久恋」・大蔵

卿有家卿

われならぬしのぶの山の松のはもとしへていろにいづるものかは

【歌枕名寄】山・六九四〇・「同十一」・兵部卿有教

我ならぬしのぶの山の松の葉もとしへて色にいづるものかは

<右歌>

【続拾遺和歌集】恋歌一・七九〇・「(宝治元年十首歌合に、忍久

恋)」。院弁内侍

おもふこといはず心の中にのみつもる月日をしる人のなき

【題林愚抄】恋部一・六三二三・「同」・院弁内侍

おもふこといはず心の中にのみつもる月日をしる人ぞなき

【語釈】

① 忍の山の松の葉—「忍の山」(信夫山)については、八十番参
 照。信夫山と松風の取り合わせとしては、「谷川の氷につけてし
 のぶ山なほうきものは松のゆふ風」(「壬二集」恋部・二八一二・
 「元久元年仙洞にて、北野宮歌合に、忍恋」)、「いかにせむしの
 ぶの山の峰の松いまひとしほの色にいでなば」(「範宗集」四九
 一・「春恋」)等。

② 詞つよく—「六百番歌合」恋部下・寄樵夫恋・廿八番では「こ
 ころざしあべのいちぢにたつ人はこひに命をかへむとやする」
 (家房)について「右、恋に命をといへる、つよき様に侍るべし、
 以右為勝」と積極的評価語として用いている。

③ よみくたして—「左右歌、上下句の心詞ともにをかしくよみく
 だされて侍れば」(「千五百番歌合」恋二・千二百七十四番判詞・
 顕昭)の如く、最初から最後まで詠みきっていることを指す。

④ ちからなく—女歌特有の嫵嫵たる風情を言うか。紀貫之は、「古
 今和歌集」仮名序で、小野小町の歌について「あはれなるやうに
 て、つよからず。いはば、よき女のなやめるところあるに似たり。

つよからぬは、女の歌なればなるべし」と評する。例えば、「千
 五百番歌合」の丹後の出詠歌「ひとりねの袖にしらるるしぐれこ
 そ秋しもわかぬものと見えけれ」(千三百三十番・二六五九)に
 ついて、「右歌は、かみしもあひかなひてよみおほせられて侍る
 めり、古今序に、小野小町が歌を申すに、艶にして気力なしと侍
 り、つよからぬはをんなの歌なればとまうせり、以右為勝」とい
 う判がみえる。

⑤ とりくく⑤に侍れば—左右両歌の美点を尊重する言。「左、すは
 のうみのこほり、右、おくやまのゆきの木ずえ、とりどりに見え
 侍れば勝負難定歎」(「千五百番歌合」春二・百四十九番判詞・忠

良判)等の例がみえる。

【通釈】

八十六番

左(歌) 持

兵(部卿源)有教

(あの人への恋心を忍びとおしている)私ならぬ、信夫山の松の葉も、長年たつと色にでる(恋心が外にあらわれる)ものだろうか。(松は常盤木だからそんなことはない。私もあの松のように辛抱して忍びとおそう。)

右(歌)

弁内侍

思っている事を言わないで(私の)心の内にばかり積み重なっていく月日を知る人のいないことよ。

【判詞】左(の)「我ならぬ」と言い始めるところから、「いつる物かは」と言い果てるところまで、どこそこ(が欠点)と見える所がなく、詞を強く最初から最後まで詠み下しています。右(の)女の歌らしく(ひじょうに弱々しく優美な姿で(左右)めいめい(の良さ)ですので、よい持とみえます。

八十七番

【校異】

八十七番

左 勝

師 継

人しれす思ひしほれて朽ねとや袖に年ふる我涙哉

右

雅 忠 朝 臣

いたつらに年をふるの、を篠原露たに秋の色に出めや

右 小篠原又ことなるふしもみえ侍らぬにや、秋と

侍も、させる用なくや、左くちねとやと侍そ心

ゆかぬ様に侍れと、袖に年ふる我涙かなといへる
はよろしく侍れば、いさ、か勝とや申侍へき、

イ 勝—ナシ(書) □ 右近—右近中将(書・内・聚・群)、

右近衛中将(支) ハ ナシ—統拾遺、恋一(聚) ニ 人しれ

す—人もしれ(支) ホ 露たに—われたに(支) ヘ 又—ナ

シ(支・群) ト も—にも(内・聚・群) チ 我—ナシ(内)

リ いへるは—いへる(書) 又 は—ナシ(支) ル 申侍へ

き—申へき(書)

【他書所伝】

へ左歌

『統拾遺和歌集』恋歌一・七八九・「宝治元年十首歌合に、忍久

恋」・前内大臣師

ひとしれずおもひしをれてくちねとや袖にとしふるわが涙かな

『題林愚抄』恋部一・六三二・「同(統拾)」・前内大臣師

人しれずおもひしほれてくちねとや袖に年ふるわが涙かな

へ右歌—ナシ

【語釈】

①を篠原—小笹原。笹が生い茂っている原。「をざさ原風松露の

消えやらずこのひとふしを思ひおこな」(『新古今和歌集』雑歌

下・一八二二・「やまひかぎりにおほえ侍りける時、定家朝臣中

将転任のこと申すとて、民部卿範光のもとにつかはしける」・俊

成)の例があり、恋歌の例には「わがこひはあはでふるのをざ

さはらいく世までとかしものおくらん」(『新勅撰和歌集』恋歌

四・九〇四・「題しらず」・実朝)がある。

【通釈】

八十七番

左(歌) 勝

(右近権中将藤原) 師繼

あの人に知られないまま、思い萎れて朽ちてしまえ、というわけだろうか、(私の) 袖に長年にわたって降る涙であることよ。

右(歌)

(源) 雅忠朝臣

(いっこうに実ることなく) いたずらに年を経るばかりの、古野の小笹原、(まるで私自身のようだ) せめて露だけでも秋の色にあらわれればよいのに。

【判詞】 右(歌) 小笹原は特別な曲も見えないでしょう。「秋」とございますのも、特に用はないのでは。左(歌は) 「くちねとや」とございますのがわかりにくいようでありますもの、「袖に年ふる我涙かな」と言っているのがよろしうございますので、(こちらを) 少々勝と申すべきでしょう。

八十八番

八十八番

左

沙弥蓮性

すかのねのしのひにむすふ^①下^②紐^③のとけすや恋む^④年はへぬとも

右 勝

下野

恋をのみしつか庵のかやむしろしきしのふまに年そへにける

左の下ひも忍ひにむすふ程、おもひいれて侍にや、

右俊頼朝臣哥思出され侍れとも、ことはのつ、

き是もよろしく侍れは、右勝にや、

【校異】

イ おひーひヒ (書・内・支・聚・群) 口 恋むー恋む (書・

内・支・聚・群) ハ へぬともーへぬれと (書) ニ 勝ーナシ

(書) ホ 年そーとしそイ(群) ヘ けるーけるイ(群) ト 左

のー左(書・群) チ ひもー紐も(支) リ いれてー出(書)

又 右俊頼ー俊頼(支) ル ことはのーことは(書)、ことの

(内・支・聚・群) ヲ 是もよろしくーよろしく(聚) ワ に

やーとや(支)

【他書所伝】

へ左歌へ

【題林愚抄】 恋部一・六三二〇・蓮性

すがのねの忍びにむすぶ下紐のとけばやとけん年はへぬれど

へ右歌へ

【蓮性陳状】 一九

【語釈】

①すかのねー「長し」「思ひ乱る」等に多く掛かる枕詞。「昔の根」

「忍ぶ」と続く例としては、『万葉集』に「(前略) 千鳥鳴くその

佐保川に石に生ふる昔の根取りてしのふ草(後略)」(巻第六・雑

歌・九四八・「四年丁卯の春正月、諸王・諸臣子等に勅して、授

刀寮に散禁せしむる時に作る歌一首」と見える。

②下おひのとけすやー底本「おひ」だが、諸本「ひも」とする点

底本の判詞に「左の下ひも」とある点、さらに「昔の根のねもこ

ろ君が結びたる我が紐の緒を解く人はあらじ」(『万葉集』巻第十

一・物に寄せて思ひを陳ぶる・二四七三)、「人まつをいふはたが

ことすがのねのこのひもとけてといふはたがこと」(『猿丸集』

九・「いかなりけるをりにか有りけむ、女のもとに」等、「紐」

とともに詠み込まれる例が見える一方で、「管の根」「帯」という先行例が見えない点等から、「下ひも」として解釈する。なお、「下紐が解ける」は、「我妹子し我を偲ふらし草枕旅の丸寝に下紐解けぬ」(『万葉集』巻第十二・羈旅にして思ひを發す・三一四五)等に見える如く、衣の下紐が自然に解けるのは恋人が自分に逢いたがっているしるしとする俗信による。

③しつか庵―身分の低い者の住む粗末な庵。「いとどしくしづのいほりのいぶせきに卯のはなくたし五月雨ぞする」(『千載和歌集』夏歌・一七八・「堀河院御時、百首歌たてまつりける時、五月雨のうたとてよめる」・基俊)等の例がみえる。「賤」には、「恋をのみしづのをだまきくるしきはあはで年ふる思ひなりけり」(『千載和歌集』恋歌三・七八八・「堀河院御時、百首歌たてまつりける時、恋の心をよめる」・師時)の如く、恋を「する」という意を掛ける。なお、「恋をのみしつか庵のかやむしろ」は「敷き」を導く序詞。

④おもひいれて侍にや―「宮河歌合」九番左「世の中を思へばなべてちる花の我が身をさてもいかさまにせん」(一七)について、定家は「左歌、世の中を思へばなべてといへるより、をはりの句の末まで、句ごとにおもひ入れて、作者の心ふかくなやませる所侍れば、いかにも勝ち侍らん」と評する。

⑤右俊頼朝臣哥思出され侍れとも―「あさではすあづまをとめのかやむしろしきしのびてもすぐすころかな」(『千載和歌集』恋歌三・七八九・「堀河院御時、百首歌たてまつりける時、恋の心をよめる」・俊頼)を念頭に置いた言。なお、『蓮性陳状』では、「判詞に、俊頼歌おもひ出され侍とも、詞つ、きよろしと候なる、此歌の本意は、しき忍ふを詮と見え候につきては、めつらしきふしなくや候らん」と指摘し、定家や家隆の先行歌を例示しつつ、下

野詠の表現が珍しくないことを指摘する。

【通釈】

八十八番

左(歌)

(あの人を) 恋い忍んで(こっそりと) 結ぶ下紐が解けないように、心解けぬまま私はあの人を恋いつづけよう。年月は経ても右(歌) 勝

恋をするばかり賤の庵のかやむしろではないが、(ずっとあの人を恋い忍んでいる間に年が経ってしまった)。

〔判詞〕左の「下ひも忍ひにむすふ」あたりは、(詠者が)心を込めていましょうか、右(歌は)俊頼朝臣の歌が思い出されますが、詞の続き具合もよろしいですので、右が勝でしょうか。

八十九番

八十九番

左

為氏朝臣

いはて思ふつらきま、なる年月の契イなロに、かゝる命ト

右 勝

少将内侍

おさふへき袖は昔に朽はてぬ我ハくろかみよ涙ニもらすな

たのみよなに、といへる艶ハに見え侍を、袖はむかしに
くちはてぬわかろかみよ涙もらすな、題心ハふかく
おも影あはれにいたはしくもみえ侍れば、左の負侍ハぬる
にや、

【校異】

イ 年月の―年月を(群) 口 契よ―たのみよ(書・内・支・

聚)、誰みよ(群) ハ そーは(聚) ニ 勝ーナシ(書) ホ
続後撰ーナシ(書・内・支・群)、続後撰、恋三(聚) へ くら
かみよー黒かみに(支) ト たのみよーたれ見よ(内・支・群)
チ 艶ー艶(書・内・支・聚・群) リ 題心ーたいの心(書・
内・支・聚・群) 又 いたはしくもーいたはしく(支) ル 左
のー左(書・内・支・聚・群) ヲ 負侍ぬるにやーまけ侍へき
にや(書)、負侍るにや(支)

【他書所伝】

へ左歌>ナシ

へ右歌>

【続後撰和歌集】恋歌一・六七七・「(十首歌合に、忍久恋)」。少
将内侍

おさふべきそではむかしにくちははてぬわがくろかみよなみだもら
すな

【和歌口伝抄】少将内侍

おさふべき袖はむかしに朽ちははてぬわがくろかみよ涙もらすな

【題林愚抄】恋部一・六三一〇・「同(続後撰)」。少将内侍

おさふべき袖はむかしに朽ちははてぬわがくろかみよ涙もらすな

【閑窓撰歌合 建長三年】四十六番左・九〇・少将内侍

おさふべき袖は昔に朽ちははてぬわがくろかみよ涙もらすな

【女房三十六人歌合】七一・少将内侍

おさふべき袖はむかしに朽ちははてぬわが黒かみよなみだもらすな

【語釈】

①契よー書陵部本、内閣文庫本、支子文庫本、歌合類聚本は「た
のみよ」としており、永青文庫本の為家の判詞も「たのみよな
に、」としているので、「たのみよ」で解釈する。

【通釈】

八十九番

左(歌)

打ち明けぬまま、一方的に恋しく思いつづけ、(相手は私に)
冷淡なままである(この)長い年月の、(はかない)頼み、いつ
たい何に縋って(生きて)いる(私の)命やら。

右(歌) 勝

少将内侍

(涙を)押さえるべき袖はとつくの昔に朽ちははててしまった。我
が黒髪よ、(独り寝の床で私が流す)涙を漏らさないでくれ。

【判詞】「たのみよなりに」と言っているのが艶に思われますが、
「袖はむかしにくちははてぬわがくろかみよ涙もらすな」(と言っ
ている)が、題意を深くあらわして(恋の)面影が心を打ちい
たわしくも見えますので、(この番は)左が負けとなります。

へ九十番>

九十番

左

山川の下行水のしたにのみ音こそたてね年経朝は経朝

右勝

沙弥禅信

秋をへてふるき軒はの忍草しのひに露のいくよをくらん

左山川の下ゆくとはいかに侍にか、山たかみなどはき、
なれて侍り、川水下行は、ことほりもかなはずや、又
をとこそたてねといへるも、山川のをとにのみきく
も、しきをなとこそ、ふるくも申ならひて侍れ、

かた／＼おほつかなくや、右ちからあるさまには侍ら
ねと、難なきにつきて可為勝、

【校異】

イ 経朝—経朝朝臣(書・内・支・聚・群) 口 ふれともイへにけり—
 ねどもイ(書・内・支・聚・群) ハ 勝—ナシ(書) ニ しの
 ひ—しのふ(群) ホ をくらん—へぬらん(内・支・聚・群)
 へとは—水とは(聚・群) ト などは—なと(内・支・聚・
 群) チ 侍り—侍る(内・支・聚・群) リ 川—河の(書・内・
 支・聚・群) ヌ 又 ことはりも—ことはり(聚) ル も—と(支)
 フ も、しき—百しき※(書) ワ なとこそ—なと(書)、なとを
 こそ(内・支) カ さま—やう(群) ヨ つきて—つけて(支・
 群) タ 可為勝—為勝(書・内・支・聚・群)
 ※この箇所「百」と読んだが、存擬。

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ
 〈右歌〉

【題林愚抄】恋部一・忍久恋・六三二一・「已上同」(宝治御百首)・禪信

秋をへてふるき軒ばの忍ぶ草しのびに露のいくよおくらん

【語釈】

- ① へにけり—諸本により「ふれとも」に改める。
- ② ふるき軒ばの忍草—「忍くさ」は、「忍ぶ草」と「忍ぶ」の掛詞。定家撰「小倉百人一首」に採られた「もししきやふるきのきはのしのぶにも猶あまりある昔なりけり」(『続後撰和歌集』雑歌下・一二〇五・「題しらず」・順徳院)は著名。
- ③ 山川の下ゆくとはいかに侍にか、山たかみなとはき、なれて侍り—「山高みした行く水のしたにのみ流れてこひむこひはしぬとも」(『古今和歌集』恋歌一・四九四・「題しらず」・読人しらず)を念頭に置いた表現。「した行く水」は、「山した水」(山陰

を流れる水)と同意。

④ 山川のをとにのみきくも、しきをなとこそ、ふるくも申ならひて侍れ—「山河のおとにのみきくももしきを身をはやながら見るよしもがな」(『古今和歌集』雑歌下・一〇〇〇・「歌めしける時にたてまつるとてよみて、おくにかきつけてたてまつりける」・伊勢)を念頭に置く。「古今和歌集」歌の「音」は噂の意。

【通釈】

九十番

左(歌)

(左京権大夫藤原) 経朝
 山川の山陰を流れる水が麓の方にばかりのみ音が立つように心の内ではばかり忍び音を立てよう、
 右(歌) 勝 沙弥禅信

秋が過ぎて古い軒端の忍草のように恋人に飽きられてしまった人にはそつと露が置くように昔を恋い忍んで涙を幾夜流すのだからか。
 【判詞】左(の)「山川の下ゆく」とはどういうことでしょうか。「山たかみ」等は聞き慣れてます。「川水下行」は、道理も叶わないか、又「を」とこそたてね」という(表現)も、「山川のをとにのみきくも、しきを」等に、古くに申し馴れています。(左右)それぞれ意味がはっきりしないか、右(は表現に)力強さがあるようではないですが、難がないので勝としよう。

〈九十一番〉

九十一番

左 勝

越前

故郷のしのぶの露も色に出ぬいつわか袖よ人の問まで

右

為家

いはて思ふ枕の下のなみたともしらしな人につもる年月

左忍ニ忍ハすくなくや侍らん、右つもるとし月術

尽たることにこそ侍めれ、れいの負侍へし、

【校異】

イ 勝―ナシ (書) 口 わか―わる (聚) ハ 為家―前権大

納言為家 (書・支・群)、前大納言為家 (内・聚) ニ 忍恋―

忍ニ忍ハる (書・内・支・聚・群) ホ 侍らん―ナシ (聚)

へ こと―ナシ (内・支・聚・群) ト れい―仍例 (支)

【他書所伝】

へ 左歌へナシ

へ 右歌へ

【題林愚抄】恋部一・「(宝治御百首)」・六三二七・為家卿

いほでおもふ枕のしたの涙をもしらしな人につもるとし月

【語釈】

①故郷のしのぶの露―故郷の軒のしのぶ草に置いた露の意。「故

郷のしのぶの露も霜ふかくながめしのきに冬はきにけり」(『拾遺

愚草』・冬・二四二〇・「文治三年冬、侍従公仲よませ侍りし、冬

十首)。「訳注藤原定家全歌集」で久保田淳氏は「荒れまさる軒

のしのぶをながめつつしげくも露のかかる袖かな」(源氏物語・

須磨・花散里)を「参考」としてあげている。

②色に出ぬ―様子にあらわれること。涙の場合は血涙、紅涙となつ

て、人の目に見えるようになること。

③忍恋―永青文庫本以外の五本は「忍心」としており、こちらの

本文を採用して解釈する。

【通釈】

九十一番

左(歌)勝

(嘉陽門院)越前

故郷の(軒の)しのぶ草の露も(秋が深まり周りも紅葉して)

色にあらわれてしまったことだ。いったいいつ、我が袖よ、(忍

ぶ恋心のために涙が紅涙にかわって袖の色を変え、)あの人(ど

うしたのかと)尋ねてくれるまで(になるだろうか)。

右(歌)

(前権大納言藤原)為家

(自分の気持ちに相手に)言わないままでも恋しく思つて(流す)

枕の下の涙とも、(あの人)知らないだろうよ。(彼と我の)人

の上に、ただ(むなしく)年月がつもるばかりで。

【判詞】左(歌は) (の題意)が少ないのではないでしょ

うか。右(歌は)積もる年月(の間に、恋を成就させる)術が尽

きてしまったということのようであります。例によつて(右歌の)

負けでしょう。

宝治元年「院御歌合」注釈―「逢不遇恋」題―

位藤邦生 森下要治
田野慎二 山崎真克
赤迫照子 藤川功和

はじめに

『長崎大学教育学部紀要 人文科学』第七十五号（平成21年3月発行）に引き続き、宝治元年（一二四七）『院御歌合』の注釈を試みる。今回は「逢不遇恋」題十三番を取り上げる。各番担当者と所属を以下に示す。

九十二番―位藤邦生（長崎大学）、九十三番―赤迫照子（広島大学図書館）、九十四番―藤川功和（尾道大学）、九十五番―藤川、九十六番―山崎真克（松江工業高等専門学校）、九十七番―森下要治（広島文教女子大学）、九十八番―藤川、九十九番―田野慎二（広島国際大学）、百番―赤迫、百一番―山崎、百二番―田野、百三番―田野、百四番―位藤

凡例

一、底本は、永青文庫蔵本（一〇七・三六・七）（細川家永青文庫叢刊）第八卷所収）を用いた。

一、校合した諸本と略号は、以下の通り。

書―書陵部蔵本〔五〇一・七四〕（『新編国歌大観』の底本）

内―内閣文庫蔵本「百三十番歌合（外題）」〔二〇一・二四七〕
支―九州大学支子文庫蔵本（九一一・ホ・一）

聚―書陵部蔵歌合類聚本（『大日本史料』第五篇二十四所収）
群―群書類従本（巻第二百所収）

一、注釈は、番全体の本文【校異】を示した後、【他書所伝】【本歌（参考歌）】【語釈】【通釈】をあげた。

一、【語釈】の内、各詠作者並びに前号までに既出の語彙については、紙幅の関係上これを略した。

一、表記や送り仮名の異同はこれを略し、見せけちや補入符号によって訂正のある箇所は、訂正後の本文を採用した。

一、翻字本文には適宜読点を施し、字体は現行の活字体に改めた。
一、本文中、異同の存する箇所には、傍線及びイ、ロ、の如き符号を付し、語釈を施した箇所には、本文右傍に①、②…の通し番号を付した。

一、底本で文意不通等が認められる場合、他本の本文に拠り通釈を施した場合がある。その際、本文【校異】【通釈】において他本に拠った箇所を網掛けを施した。

一、引用本文は、原則として『新編国歌大観』に拠り、その他の引用文献は、適宜底本を示した。なお、引用本文には、適宜、傍線、振り仮名等を付した。

一、『万葉集』については、本文、歌番号ともに塙書房刊『万葉集 訳文篇』を用いた。

〔九十二番〕

九十二番 逢不逢恋^①

左 勝^① 女房

あかしかねまたる、物となりけりさしもいとひし鳥の八声も^③

右 小宰相

下のおひのあたに結し中なればめぐりあふへき限たになし^④

左さしもいとひし鳥の八こゑ、またる、物になれる

心、き、所おほくゆへふかく思入られて、優美の姿

幽玄の心、ことよろしくこそ侍れ、右下のおひ

あたにむすひしなどは、さもやとみえ侍に、下句

かきりたになしとて、恋心今は思すてたるやう^⑤

に見え侍、題の本意侍らねは、尤為負、

【校異】

イ 勝―ナシ(書) 口 八声も―八こゑを(内・支・聚・群)

ハ 物に―物と(内・支・聚・群) ニ おほく―多く侍る(群)

ホ ゆへふかく―ふかく(支・群) ヘ 入られて―いれて(内・

聚) ト 下のおひ―下のおひの(内・支・聚・群) チ 恋心

―恋の心(書・内・支・聚・群) リ 見え侍―見侍(内・聚)

又 本意―本意に(聚) ル 尤―尤可(内・聚)

【他書所伝】

〔左歌〕

『題林愚抄』恋部二・六九六六・「宝治元仙洞歌合」・女房

あかしかねまたる物と成にけりさしもいとひし鳥の八こゑに

〔右歌〕ナシ

【語釈】

①逢不逢恋―「ひとよとはいつかちぎりしかはたけのながれてとこそおもひそめしか」(『金葉和歌集』二度本・恋部上・三九七・「遇不遇恋の心をよめる」・経忠)、「おもひきやあひみし夜はのうれしさにのちのつらさのままさるべしとは」(『金葉和歌集』三奏本・恋下・四四〇・「逢不逢恋のこころを」・実能)とあるのが、歌題としての早い例。院政期・鎌倉期の勅撰集、私家集等に頻出する。なお、「逢不逢恋」「逢不遇恋」「会不会恋」等の表記がある。

②あかしかね―夜が明けるのを待ちかねて。「ほととぎす来鳴く五月の短夜も一人し寝れば明しかねつも」(『万葉集』巻第十・一九八一・「夏の相聞(鳥に寄する)」、この歌は『拾遺和歌集』夏・一五二・読人しらず、また人麿の作として『古今和歌六帖』第五・二六九九にも入集)。

③鳥の八声―暁に時を告げて多く鳴く鶏。「思ひかねこゆる関路に夜を深みやこゑの鳥に音をぞ添へつる」(『千載和歌集』恋五・九四八五・「隔関路恋といへるこころをよめる」・雅頼)がある。「堀河百首聞書」には「とほつみちいそぎて過ぎし関路には八こゑの鳥を人ぞ

となへし」(『堀河百首』雜廿首・一四一五・仲実)についての注に「庭鳥の声八声なくと申説候へどもたゞしげく啼くといへるまで也」と説明している。「かねのおともやこゑのとりもこころあらばこよひばかりは物わすれなれ」(『建礼門院右京大夫集』二七三)もある。

④下のおひの―下の帯のこと。枕詞。下の帯は下着、すなわち装束のしたの小袖にしめる帯のこと。帯がいったん左右に分かれて、結ぶときにまた合うところから、「別れて逢う」「めぐりて逢う」などにかかる。「したのおびの道はかたがた別るとも行きめぐりても逢はんとぞ思ふ」(『古今和歌集』離別・四〇五・友則)。小宰相の当該歌でも「めぐりあふへき」に掛かる。また「あたに結し」の縁語ともなる。

⑤かきりたになしとて、恋心今は思すてたるやうに―「かきりたになし」については、「すむ月もちさとのほかはこほりしきゆきのあしたはかきりだになし」(『千五百番歌合』冬三・九七六番右・一九五一・俊成)の如く、空間・距離を示すものがあるが、ここでは同じ『千五百番歌合』恋三・一二九二番左・二五八二「めぐりあはんかぎりはいつとしらねども月なへだてそよそのうき雲」(『新古今和歌集』恋四・二七二・良経、『秋篠月清集』八八六にも)のように、「限り」は「折、機会」の意となっている。「逢不逢恋」の題で「めぐりあふへき限たになし」と断定的な口調で言い切るのは「恋心今は思すてたるやうに見え侍」というのが為家の批判であった。

【通釈】

九十二番 逢不逢恋

左(歌) 勝

(あの人が来ない長い夜を)あかしかねて、(自然)待たれるものになってしまったよ、(以前は、暁の別れを誘うものとして)あんなにも嫌っていた鳥の八声も。

右(歌)

(承明門院)小宰相

(はじめから)かりそめに結んだ(あの人との)仲だから、(今と違っては再び)めぐり逢う機会とてないことだ。

〔判詞〕左(歌)あんなにも厭うた鳥の八声が、(今では)待たれるものになった(という)趣旨は、聞きどころが多く趣深く共感を誘われて、(一首全体の)優美の姿幽玄の心は、殊によろしくございませぬ。右(歌の)「下のおひあたにむすひし」などは、そうもあらうと思われませぬものの、下句(に)「かきりたになし」と(言つ)て、恋の心は(もう)思い捨てているように見えますのが、(逢不逢恋という)題の本意ではございませぬので、(こちらを)当然負けといたします。

〈九十三番〉

九十三番

左

太政大臣

①身をうらの海士のもしほ木こりすまに立や煙のよそにきえつ、

右 勝^イ

俊成卿女

⑤ わけし夜の契もきえてかなしきはとへとこたへぬ道芝の露

左の哥のさまよろしき姿には侍を、こりすまと

はかりにてもあひにける心は侍ぬへけれども、右分し

夜のといへるより題心^チいますこしあらはにや、いか、

【校異】

イ 勝—ナシ (書) 口 契も—契と (内・支) ハ きえて—き

て (内・支) ニ 左の哥のさま—左うたのさま (書)、左のさま

(内・支・聚・群) ホ 姿には—姿に (支) ヘ こりすまと—

こりすまにと (内・支・聚・群) ト 侍ぬ—侍 (書) チ より

—よりは (内・支・聚) リ 題—題の (書・内・支・聚・群)

又 や—侍にや (書・内・支・聚・群)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉『蓮性陳状』一五・俊成卿女

わけし夜の契りも消えて悲しきはとへと答へぬ道芝の露

『題林愚抄』恋部二・六九六七・「宝治元仙洞歌合」・俊成

わけしよのちぎりもきえてかなしきはとへとこたへぬ道しばの露

【語釈】

① 身をうらの—「浦」と「憂」を掛ける。ここでは海士の辛い境遇と、恋の叶わぬ憂き我が身を掛ける。「見るめなきわが身をうらとし

らねばやかれなであまのあしたゆくくる」(『古今和歌集』恋歌三・六二三・「題しらず」・小野小町)。

② もしほ木—藻塩を焼く際にくべる木。「さみだれはあまのもしほ木

くちにけりうらべに煙たえてほどへぬ」(『千載和歌集』夏歌・八五

・「崇徳院に百首歌たてまつりける時、よめる」・待賢門院安芸)。

③ こりすま—「こりすまに又もなきなはたちぬべし人にくからぬ世

にしすまへば」(『古今和歌集』恋歌三・六三一・「題しらず」・よ

み人しらず)のように、「懲りもせず」の意。当該歌では「身をう

らの」と結びついて撰津国の歌枕「こりすまのうら」となり、「すま

と「須磨」の意を掛ける。『源氏物語』須磨卷「こりすまの浦のみる

めのゆかしきを塩焼くあまやいかが思はん」(一九〇・光源氏)。

④ 立や煙のよそにきえつ、—浦から遠く余所へと消えていくのに、

煙が性懲りもなく立ち続ける様子に、拒まれても懲りずに恋する意

を掛ける。「風をいたみくゆる煙のたちいでも猶こりすまのうらぞ

こひしき」(『後撰和歌集』恋四・八六五・「人のむすめのもとにしの

びつつかよひ侍りけるを、おやききつけていといたくいひければ、

かへりてつかはしける」・貫之)。

⑤ わけし夜—「道芝の露」を分け入って相手の許を訪ね、契りを結

んだ夜。「ささわけし袖のためしのぬれ衣ほさでいく夜の道芝の露」

(『俊成卿女集』三七・「不逢恋」)。

⑥ 道芝の露—道端の草の露。「尋ぬべき草の原さへ霜枯れて誰に問は

まし道芝の露」(『狭衣物語』四五・狭衣)のように、恋人の許への

道案内を尋ねるものとして詠まれている。また、結んだ契りのはかなさも表現する。「露」と「きえて」は縁語。「みちしばのつゆにあらそふわが身かないづれかまづはきえむとすらむ」(『新古今和歌集』雑下・一七八八・「題しらず」・実頼)。

⑦「こりすまとはかりにても」『新編国歌大観』では「こりすまとは、かりにても」と読点を打つが、ここは「こりすまとはかりにても」とし、左歌は「こりすま」という語がある程度で「逢不逢恋」題に叶っているという文意でとるべきであろう。

⑧題心いますこしあらはにや―右歌は「逢不逢恋」題の趣旨がはっきり現れているという評価。「題はあらはに心はこもりて、ことよろしきよし皆悉申す」(建長三年(一二五二)九月「影供歌合」八十五番判詞 ※判者は為家)。

【通釈】

九十三番

左(歌)

太政大臣(西園寺実氏)

憂き我が身は、こりすまの浦の海士がくべる藻塩木ではないが、余所に消えつつも立つのを繰り返す煙のように、懲りないことだよ。

右(歌)

俊成卿女

(道を)分け入り、結んだ契りも消えて、悲しいのは道端の草の露に(あの人の許への道案内を)問うても答ええないことだ。

【判詞】左の歌の様は良い姿でございますが、「こりすま」という程でも逢瀬があった心はございますけれども、右は「分し夜の」とい

いますことで題の心が(左歌よりも)今少しはつきりしているのではないのでしょうか。いかがでしょうか。

〈九十四番〉

九十四番

左

通忠

限りとも思はてしもや契をきしそのま、にひぬ袖の白露

右 勝

実雄 さねを 古本

思ひ侘わか心にも忘れぬとなけにいひてもねはなかれつ、

左哥^④下句すこし心ゆかぬやうに侍うへに、右哥^⑤

心、さる^⑥事も侍なんとめつらしく侍れば、勝侍へきにこそ、

【校異】

イ 通忠―権大納言通忠(書・内・支・聚・群) □ しもや―の

みや(支) ハ 契―むすひ(内・支・聚・群) 二 勝―ナシ(書

・内) ホ 実雄 さねを 古本―権大納言実雄(書・内・支・聚・

群) ヘ 忘れぬと―わすれぬを(内・支・聚・群) ト なけに

―歎(書) チ 右哥―右うたの(書・内・支・聚・群)

リ さる―させる(書)

【他書所伝】

へ左歌へナシ へ右歌へナシ

【語釈】

①契をきし—お互いに約束する意。「千世へむと契りおきてし姫松のねざしそめてしやどはわすれじ」(『後撰和歌集』恋三・七九二・「方たがへに、人の家に人をぐしてまかりて、かへりてつかはしける」・(よみ人しらず)等。当該歌では、「契をきし」は上句と下句両方にかかると。

②白露—「わがごとや君もこふらん白露のおきてもねてもそでぞかわかぬ」(『後撰和歌集』恋二・六二六・「とほき所にまかりけるみちより、やむごとなきことによりて京へ人つかはしけるついでに、ふみのはしにかきつけ侍りける」・よみ人しらず)等の如く涙を暗示する。

③ねはなかれつ、—声をあげて泣く意。「つれづれとながむる空の郭公とふにつけてぞねはなかれける」(『後撰和歌集』夏・「五月なが雨のころ、ひさしくたえ侍りにける女のもとにまかりたりければ、女」・一八五・(よみ人しらず)、「ひるはきてよるはわかるる山どりのかげ見る時ぞねはなかれける」(『新古今和歌集』恋歌五・(「題しらず」・一三七二・読人しらず)等。

④下句すこし心ゆかぬやうに侍—「そのま、」の内実が理解しにくい表現の不足を難じたものか。「契をきしそのま、にひぬ」と続ける と理解しやすい。

【通釈】

九十四番

左(歌)

(権大納言源) 通忠

最後まで思ったりもしないで(次を)約束したのだろうか。(けれども相手の心変わりによって)約束を交わした時のままで乾かない(私の)袖の涙・・・

右(歌) 勝

(権大納言藤原) 実雄

(相手が離れたことを)つらく思つて私だつてあの人のことなどもう忘れてしまったと気持ちのないようなことをいっても(相手の心変わりはやはり)つらくて(実際には)声をあげて泣き続けてしまふ。

〔判詞〕左歌(の)下の句は(意味として)すつきりしないようでございます上に、右歌(の)心、そのような事もございますでしょうと珍しくございますので、(右の)勝ちでございます。

へ九十五番

九十五番

左 勝

定雅

いたつらに明ぬくれぬと玉くしけ二たひあはぬ身こそつられ

右

公相 きんすけ 古本

忘れぬも我身のとかとしるはかりありしにかはるあかつきもかな

右有しにかはる暁もかな、優なるさまにきこえ侍る
 を、心いかにと侍にか、短慮まとひて思わき侍らぬ
 程、左ことほりかくれなく侍れば、勝侍へし、

【校異】

イ 勝―ナシ（書） □ 定雅―権大納言定雅（書・内・支・聚・

群） ハ 新後撰―ナシ（書・内・支・群）、続後撰、恋四（聚）

ニ 公相 きんすけ 古本―権大納言公相（書・内・支・聚・群）

ホ するはかり―しりにけり（内・支・聚・群） へ もかな―も

かなと（内・聚・群） ト さまに―さまには（書・内・聚）、やう

には（群） チ 侍るを―侍に（書・内・聚・群） リ ことはり

―詞は（内・聚・群） 又 勝侍へし―勝へし（内・群）、勝なるへ

し（聚） ※（支）は、判詞が全て欠

【他書所伝】

〈左歌〉

【新後撰和歌集卷】恋歌四・一〇五九・「宝治元年、十首歌合に、逢
 不遇恋」・花山院入道右大臣

いたづらに明けぬくれぬと玉くしげふたびあはぬ身こそつられ

へ右歌〉ナシ

【語釈】

①いたづらに明けぬくれぬと―「みねふかき山さくらどのいたづらに
 明けぬくれぬと花ぞふりしく」（承久元年（一二一九）『内裏百番歌

合』深山花・十六番左・三一・為家）、「いたづらに明けぬ暮れぬと
 住佐びぬ人めかれ行く草のとぎしは」（『洞院撰政治家百首』雜・山家
 五首・一六〇八・経通）等、中世には数例みえる。

②玉くしけ―玉匣。玉櫛笥とも。玉は美称で、櫛等の化粧道具を入
 れる立派な箱。「明」「二（ふた）」「身」は縁語。「海辺月」題五十七
 番（『表現技術研究』第4号所収）参照。

③あかつきもかな―「暁であつてほしい」の意で、八代集にはみえ
 ない言い回し。「見ぬもうしみてもわりなし夢故に物を思はぬ暁もが
 な」（『林葉和歌集』恋歌・八九〇・「暁恋、右大臣家歌合」）、「いか
 にせん夕つけどりのおのづからなく音をいとふあかつきもがな」（『道
 助法親王家五十首』恋・寄鳥恋・九三三・知家）等。

④心いかにと侍にか―「ありしにかはる」が具体的にどういった状
 況を指すのかが曖昧な点を難じたものか。

【通釈】

九十五番

左（歌） 勝

（権大納言源）定雅

（このまま）甲斐なく明けた暮れたと（月日を過ぎし）二度と（あ
 の人と）逢わない我が身は本当に苦しいことだなあ。

右（歌）

（権大納言西園寺）公相

（相手が忘れたのなら私も相手を忘れないといけないのに、私の
 方はあの人を）忘れないのは私の罪と知らされるばかり。（あの人に
 逢っていた頃と）違う暁であつてほしいなあ。

〔判詞〕右（歌）「有しにかはる暁もかな」（という表現は）、優美であるように聞こえますが、（一首全体の）心はどうでございましょうか。浅慮に惑って判別出来ませんうちに、左（歌の）道理ははつきりしてございますので、勝でございましょう。

〈九十六番〉

九十六番

左

公基^イ

①今こむといひし契や^②あた人のた、偽のなさけなりけん^ロ

右勝^ハ

為教^ニ

思きやか、るつらさを契にて有し^③その夜をかきるへしとは

左右ともに同^④ほ^トにみえ侍に、今こんといひし

はかりにてもあふ心にはかよ^⑤侍らめと、ありし其

夜はたしかに侍れは、^⑥哥合^チのならひ勝と申侍へきにや、

【校異】

イ 公基―権大納言公基（書・内・支・聚・群） 口 なりけん―なるらん（書・内・支・聚・群） ハ 勝―ナシ（書） 二 為教―為教朝臣（書・内・支・聚・群） ホ ほとに―ほとには（書）ヘ 心には―心に（支） ト かよひ―かなひ（内・支・聚・群）

チ 哥合の―哥合（書）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

【題林愚抄】恋部二・逢不遇恋・六九六九・（宝治元仙洞歌合）・為教朝臣

【語釈】

①今こむといひし契―男が女に対して今すぐに行くよと言った約束のことで、「今こむといひし」ばかりに長月のありあけの月をまちいでつるかな」（『古今和歌集』・恋四・六九一・「題しらず」・素性）をふまえた表現である。

②あた人のた、偽のなさけなりけん―約束したにもかかわらず訪れないので、移り気な人のひとえに偽りの情愛であった、と恨みを述べる意。あるいは、「こぬ人をうらみもはてじちぎりおきしそのことのはもなさけならずや」（『詞花和歌集』恋下・二四八・「新院位におはしましたし時、雖契不來恋といふことをよませ給けるにのみ侍りける」・忠通）、「いつはりのことのはならんとおもへどもちぎるはなほもなさけなりけり」（『六百番歌合』恋上・契恋・九番左・六七七・季経）などの例のように、男が約束したにもかかわらず訪れないことは、ひとえに移り気な人の偽りではあるけれど、その約束はせめてもの思いやりなのだと思える発想か。「逢不遇恋」題では、相手を

恨むよりは一途に恋情を吐露することが多いことから、試みに後者として解釈する。

③有しその夜をかきるへし―「ふえ竹のあなあさましのよの中やありしやふしのかぎりなるらん」〔千載和歌集〕雑歌下・誹諧歌・一九一・「堀河院御時百首のうち、恋の歌とてよめる」・基俊、「いかがせむ有りし別をかぎりにて此世ながらの心かはらば」〔拾遺愚草〕恋・二六五五・「ひさしくかきたえたる人に」などの例のように、あなたと逢ったその夜を最後の機会とするという意。

④あふ心にはかよひ侍らめと―左歌の「今すぐに行くよと言った」という表現だけでも「逢不遇恋」題の一度逢う心には通うものがあるが、右歌の「あなたと逢ったその夜」のほうが題意がはっきりと現れている点を勝負の根拠として指摘する。

⑤哥合のならひ―題意に適う歌を勝とするのが、歌合批評の習わしである。『千五百番歌合』春四・二百二十九番（俊成判）などに例が存する。

【通釈】

九十六番

左（歌）

（権大納言西園寺）公基

今すぐに行くよと言った約束は、ひとえに移り気な人の偽りではあるけれど、せめてもの思いやりだったのだなあ。

右（歌） 勝

（藤原）為教（朝臣）

思ってもみただであらうか。このような冷淡な仕打ちとなることを

二人の宿縁として、あなたと逢ったその夜を最後の機会とすることになろうとは。

〔判詞〕左右（の歌は）ともに同じほど（の出来）であるともえますのに、（左歌の）「今こんといひし」という表現だけでも題の一度逢う心には通うものがありますが、（右歌の）「ありし其夜」は題意がはっきりと現れておりますので、歌合の習わしとして（右歌の）勝と申すべきでしょう。

〈九十七番〉

九十七番

左 勝

中 為経

右

信実朝臣

いとはる、つらさある世の逢事を何そはまたとたのめをきけん
なにそは又とたのみをきけんといへる心、おかしく
思ひ入ることチによるしく侍を、いきてつらさをなけ
きけるあふにかへてし命ならずやと侍こそ殊
艶に侍れ、右すてかたく侍れとも、左猶勝侍へきにや、

【校異】

イ 勝―ナシ(書) 口 中―中納言(書・内・支・聚・群)

ハ 続後撰―ナシ(書・内・支・群)、続後撰、戀四(聚)

ニ 歎ける―歎きつる^{ける}(支) ホ 何そは―何そ(内)

ヘ たのめ―契(書) ト たのみ―たのめ(内・支・聚・群)

チ ことに―こと葉(書)、詞(内・支・聚)、ナシ(群)

リ 殊―ことに(書・内・支・聚・群) ヌ 侍―ナシ(書)

【他書所伝】

へ左歌

【続後撰和歌集】恋四・八七一・「十首歌合に、逢不遇恋」・太宰権帥為経

つれなくぞいきてつらさをなげきけるあふにかへてしいのちならずや

へ右歌

【万代和歌集】恋歌四・二三七〇・「十首御歌合に、遇不逢恋を」・信実朝臣

いとほるるつらさあるよのあふことになにそはまたとたのみおきけん

【題林愚抄】恋部二・六九七〇・(宝治元仙洞歌合)・信実朝臣

いとほるるつらさあるよのあふことをなにぞは又とたのめおきけん

【語釈】

①あふにかへてし命ならずや―逢うことに代えて、捨てたはずの命ではなかったか、の意。下句が完全に一致する例として「いきてな

ぞのちのつらさをなげくらむあふにかへてしいのちならずや」(『万代和歌集』恋歌四・二三九九・「遇不逢恋のころを」・法橋頭昭)が確認される。またこの他に次のような例が、逢うことの引き換えに命を捨てるという発想の先行例として「いのちやはなにぞはつゆのあだ物をあふにしかへばをしからなくに」(『古今和歌集』恋二・六一五・「題しらず」・とものり)など、多数確認できる。なお、「恋ひ死ぬ」の語を用いた歌に代表されるように、恋ゆえに命を捨てるという発想による歌そのものは『万葉集』以来たいへんに多い。

②たのめをきけん―「たのめをきけん」の箇所は、後続の判詞中の本文引用箇所も含めて、諸本の本文が一定しない。【校異】に示したように「たのめ」「たのみ」「契」の三つの形があるが、底本本文どおり「たのめお(を)く」として通釈する。

③おかしく思ひ入て―「やがて嫌われ逢えなくなることもあり得る逢瀬と分かっていたはずなのに、相手の「また(逢いにくるよ)」という言葉を当てにしまった」という右歌に対して、いったん肯定的な評価を与える言葉。右歌の理に傾いた内容について、特に評したものが。

【通釈】

九十七番

左 勝

中 (納言藤原) 為経

そしらぬ顔をして、生きたまま(逢えぬ)つらさをかこつことだ。逢うことに代えて、捨てたはずの命ではなかったか。

右

(藤原) 信実朝臣

嫌われるつらさというものがあるこの世での逢うことなのに、どうして「また(逢いにくるよ)」と、あてにさせるようなことを言い置いたのだろうか。

〔判詞〕「なにそは又とたのみをきけん」という(一首の)心は、興深く思いを入れていて特によろしいのですが、「いきてつらさをなげきけるあふにかへてし命ならずや」とありますのこそ、特に艶でありましょう。右歌は捨て難いのですが、左歌をやはり勝とするのがよろしいでしょう。

〈九十八番〉

九十八番

左

右 勝

今はた、かさねし袖のうつりかも心のうちにのこる斗そ

右 勝

右 勝

うしとても恨ははてしかた糸のなからへは又あふ夜ありやと

左袖のうつりか、さもとおほえ侍を、とこの枕ねやの

むしろなどを、きて、心のうちにしものこるにかとお

ほつかなく侍り、右かたいとのなからへは又あふ夜あり

やと侍、させるとかむへきふしもみえ侍らねは、為勝、

【校異】

イ 右衛門督通成(書・内・支・聚・群) 口 ナシ―新
続古、恋四(聚) ハ 斗そ―はかなさ(内・支・聚・群)

二 勝―ナシ(書) ホ 右近中将雅光―右近中将雅光(書・内・聚・群)、

右近中将雅光(支) ヘ さもと―さもやと(書) ト などを

、きて―などをきて(内・支・群) チ にかと―かと(内・支・

聚・群) リ 侍り―侍る(聚) ヌ なからへ―存命(群)

ル 侍―侍に(書)

【他書所伝】

〈左歌〉

【新続古今和歌集】恋歌四・一四〇三・「宝治元年九月十三夜内裏十
首歌合に、遇不会恋」・土御門入道前内大臣

いまはただかさねし袖のうつり香も心のうちに残るばかりぞ

〈右歌〉

【万代和歌集】恋歌四・二三八二・「十首御歌合に、遇不逢恋を」・
右近中将雅光

うしとてもうらみははてじかたいとのながらへばまたあふよありや
と

【語釈】

①かさねし袖のうつりか―『建礼門院右京大夫集』に「わびつつは
かさねし袖のうつり香におもひよそへてをりしたちばな」(一五二・
「かへし」・建礼門院右京大夫)という類例がみえる。

②かた糸のなからへは又あふ夜ありやと―「かた糸」(片糸)は、縫り合わす前の細糸。ここでは、「かたいとをこなたかなたによりかけてあはずはなにをたまのをにせむ」(『古今和歌集』恋歌一・四八三・「題しらず」・読人しらず)等の如く、「あふ」に「逢う」意を掛ける。また、糸を縫り合わせて長くすることから、「よりかけてまだ手になれぬ玉のをのかたいとながくたえやはてなん」(『拾遺愚草』一四五六・「不遇恋」)、「としをへて思ひやよわるかた糸のながらへ」(『隣女集』恋・一四一七・「久恋」)等とも詠まれる。

③とこの枕ねやのむしろなどを、きて、心のうちにしものこるにかとおほつかなく侍り―移り香は、枕や筵と縁がある表現なのに、それらの表現を用いず「心のうちにのこる斗そ」と詠じた点を難じたもの。「心にも袖にもとまるうつり香をまくらにのみやちぎりおくべき」(『建礼門院右京大夫集』一四八・「返りてのちみつけたりけるとて、やがてあれより」・資盛)、「あかざりし袖のかたみのうつりがを枕にのこすよはのむめがえ」(『親清五女集』一六六・「梅薰枕」)等は、判詞の指摘と符合する例。

【通釈】
九十八番

左(歌)

右衛(門督源) 通成
今となつては(昔)重ねた袖の移り香も(消えてしまって)心の中に残るばかりだよ……

右(歌) 勝

右近(衛中將源) 通光

つらいけれども恨み切ることはするまい。片思いと言つても(細糸を縫り合わせて長くなるように)永らえばまた(あの人に)逢う夜がありはしないかと(思われるので)……

【判詞】左(歌)「袖のうつりか」、そうであろうとも思えますが、「とこの枕」「ねやのむしろ」など(の表現)を差し置いて、(香りが)心の内にだけ残る(と理解する)のかと(表現として)あいまいでございませう。右(歌)「かたいとのなからへは又あふ夜ありや」とございませう、これといった非難すべき節もみえませぬので、勝とする。

〈九十九番〉

九十九番

左 持

右 弁内侍

たのめをきし我身やあらぬとはかりを今一たひはいかてとはまし
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦
またれしをかはるつらさと思ふまにやかてこぬ夜のつもりはてぬ
④ ⑤ ⑥ ⑦

左は、道雅卿、おもひたえなんの心優に侍れとも、をよひ
かたく侍にや、右又、やかてもちりのといへる事ならひて、
共に心詞ふるきを思ふに、おなし程にて、為持、

【校異】

イ 持―ナシ(書) □ 兵―兵部卿(書・内・支・聚・群)

ハ とはかりを―と斗を本ノマ、(内) ニ 一たひは―一度を(内・支・

聚)、一たひと(群) ホ ナシ―新續古、戀四(聚) へ つもり

―つもる(支) ト はてぬる―ぬる哉(書)、はかなさ(支)

チ をよひ―おもひ(内・支・聚・群) リ 又―ナシ(内・支・

聚・群) 又 ちりの―ちりての(支) ル ならひて―かよひて

(書・内・支・聚・群) ヲ ふるきを―ふかきを(内・支・群)、

ふかき(聚) ワ 思ふに―おもへり(書)、かす(内・支・群)、

おもひ(聚) カ 程にて―程とて(書)

【他書所伝】

へ左歌>ナシ

へ右歌>

【新統古今和歌集】恋四・一四〇四・「(宝治元年九月十三夜内裏十
首歌合に、遇不会恋)・後深草院弁内侍

またれしをかはるつらさと思ふまにやがてこぬ夜のつもりはてぬる

【本歌】

へ左歌>

【後拾遺和歌集】恋三・七五〇・「(伊勢の齋宮わたりよりのぼりて
はべりけるひとにしのびてかよひけることを、おほやけもきこしめ
してまもりめなどつけさせたまひてしのびにもかよはずなりにけれ
ばよみはべりける)・左京大夫道雅

いまはただおもひたえなんとばかりを人づてならでいふよしもがな

【参考歌】

へ左歌>

【千載和歌集】恋五・九二七・「題不知」・俊恵

君やあらぬわが身やあらぬおぼつかなたのめしことのみなかりぬ
る

へ右歌>

【千載和歌集】恋四・八八〇・「恋のうたとてよめる」・さぬき

ひとよとてよがれし床のさむしろにやがてもちりのつもりぬるかな

【語釈】

①たのめをきし―(あなたが)あてにさせた、の意。「たのめおくこ
との葉だにもなきものをなにかかされるつゆのいのちぞ」(『金葉和
歌集』二度本・恋上・四二〇・「恋のころを人にかはりて」・皇
后宮女別当)、「よひのまままつに心やなぐさむといまこんとだにた
のめおかなん」(『千載和歌集』恋三・八〇三・「百首歌たてまつり
ける時、恋のころをよめる」・上西門院兵衛)などのように、女
性が男の不実を恨む歌で用いられる場合もあるが、当該歌では、【本
歌】と同様に、何らかの事情で逢えなくなった女を恨む男の心で詠
じられている。

②我身やあらぬ―我が身は同じ我が身ではないのか、の意。【参考歌】
に掲げた俊恵歌により、言外に、あなたは元の同じあなたではない
のか、の意を含ませているか。「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身

ひとつはもとの身にして」「古今和歌集」恋五・七四七・業平、「伊勢物語」第四段)の世界が髣髴とされる。

③今一たびは—せめてもう一度だけは、の意。「あらざらんこのよのほかのおもひいでにいまひとたびのあふこともがな」(『後拾遺和歌集』恋三・七六三・「こちれいならずはべりけるころ人のもとにつかはしける」・和泉式部)。

④またれしを—(相手の訪れが)自然と待たれましたが、の意。「を」は軽い逆接を表す。「いりあひのおとにつけてはまたれしをねよとのかねに思ひよわりぬ」(『六百番歌合』恋上・待恋・十三番左・六八五・顕昭)

⑤かはるつらさ—(相手の心が)変わってしまう辛さ、の意。「いきて又かはるつらさを見つるかな心にかなふいのちならねば」(『洞院撰政家百首』遇不逢恋・一三〇四・大納言四条坊門)。

⑥ならひて—学んで、または、真似をしての意。本歌合では、「右ふるき哥のことはおなし句詞イにならひてめつらしき心きこえずや侍らん」(百十二番判詞)という例があり、否定的な評語である。他本の「かよひて」だと、似通つての意となる。いずれにせよ【参考歌】に掲げた二条院讚岐歌との表現・趣向上の共通点が問題になっている。

⑦心詞ふるきを思ふに—他本では、「ふるき」を「ふかき」とするものが多いが、底本の方が意味を取りやすい。「詞は古きを慕ひ、心は新しきを求め、及ばぬ高き姿をねがひて……」(『近代秀歌』)などと考えるのが定家の教えである。ここでは、両首ともに、古歌の詞・

歌境を志向している点を一応認めてはいるが、それほどの成果は得られていないと判じられている。

【通釈】

九十九番

左(歌) 持

兵(部卿藤原)有教

(あなたが)期待させた私は、昔の私ではないのですか(あなたは昔のあなたではないのですか)と、ただそれだけを、せめてもう一度だけは何とかして尋ねたいものです。

右(歌)

弁内侍

(あの時は、あなたの訪れが)待たれましたが、(あなたの)心変わりが辛いと思っておりますうちに、そのまま(あなたが)通つて来ない夜の日数がすっかり積もり重なってしまったことです。

【判詞】左は、道雅卿の、「おもひたえなん」の歌の心が優美に感じられますが、(道雅卿の歌には)及びがたいのではないでしようか。右もまた、「やかてもちりの」という歌の表現に学んでいて、両首共に心や詞が古いことを心掛けていますが、同じ程度のもので、持とします。

〈百番〉

百番

左

韋イ師イ繼

① 忘らるゝ思にきえぬ命こそをのか物からうらみられけれ

右勝

雅忠朝臣

はかなしやたか心よりとたえしてみる夜もしらぬ夢のうき橋

左心おかしく侍に、下句そ我身をはうらみぬ事

といひさためたるやしに侍、右ゆめのうきはし、心もうか

れたるさまに侍れと、こと葉つゝき優なるすかた

に侍れば、まさると申へきにこそ、

【校異】

イ 右近——右近中将(書・内・聚・群)、右近衛中将(支)

口 けれ—ける(内) ハ 勝—ナシ(書) ニ 朝臣—ナシ(内

・支) ホ ナシ—續拾遺、戀五、(聚) ヘ 夜も—よし(支)

ト 心おかしく—おかしく(支) チ 事と—事に(書・内・支・

聚・群) リ いひさためたるやしに—いひさためたるやしに(書

・内・聚・群)、いひさためやうに(支) ヌ さま—やう(書)

ル 優なるすかたに—優なるすかた(内・群)、優にすかた(支)

ヲ 申へきに—申へき(支)

【他書所伝】

へ左歌へナシ

へ右歌へ『続拾遺和歌集』恋歌五・一〇四八・「題しらず」・大納言

雅忠

はかなしやたが心よりとたえしてみるよもしらぬ夢の浮橋

【語釈】

① 忘らるゝ思にきえぬ命—自分の恋心が相手に忘れられ、悲しくて

死んでしまいたい、それでもなお消えずにいる命。「思」に「おも

ひ(火)」を掛ける。「火」と「きえぬ」は縁語。「うつりがのうすく

なりゆくたきものくゆるおもひにきえぬべきかな」(『後拾遺和歌

集』恋一・七五六・「あるをんなに」・清原元輔)、「よとともうき

人よりもつれなきはおもひにきえぬいのちなりけり」(『千五百番歌

合』恋二・千二百十一番右・二四二一・惟明親王)。

② みる夜—夢を見る夜と男女が逢う夜を掛ける。「せきかへす涙の川

にうきねしてみる夜の夢のさだかにもあらぬ」(『後鳥羽院御集』一

五九四・「依忍増恋」)。

③ 夢のうき橋—夢。「源氏物語」の最終巻名を、藤原定家が「春の夜

のゆめのうき橋とだえして峰にわかるる横雲のそら」(『新古今和歌

集』春歌上・三八・「守覚法親王、五十首歌よませ侍りけるに」と

詠んで以来、和歌で用いられるようになる。「とたえして」は夢が途

切れることと男女の逢瀬の途絶えの意を掛ける。「はかなしや夢のわ

たりの浮橋を頼む心の絶えも果てぬよ」(『狭衣物語』一五二・狭衣)。

④ 下句そ我身をはうらみぬ事といひさためたるやしに侍—左歌の下

句の表現では、自分の命を恨むばかりで、我が身の方は恨まないこ

とと取り決めたかのようにあるということ。「やし」は諸本によって

本文を改める。

⑤ 心もうかれたるさまに侍れと—右歌では「夢のうき橋」という表

現だけでなく、歌の趣旨も恋心が抑えきれず落ち着かない様子を詠んでいるという意。

【通釈】

百番

左(歌)

右近(衛中将藤原) 師継

私の思いは(あなたに)忘れられ、死んでしまいたいが、(それでもなお)消えない命は、我が物ながら恨まれることだよ。

右(歌) 勝

(源) 雅忠朝臣

はかないものだなあ。誰の心変わりによって途絶え、見られる夜もわからない夢なのか。

〔判詞〕左は歌の趣旨が面白くございますが、下句では(まるで)我が身を恨まない事に取り決めたかの^{よう}でございます。右の「ゆめのうきはし」は、心もすっかりしていない様子ですが、ことばの続きが優美な姿でございますので、(右歌が)勝っていると申しあげるべきでしょう。

〈百一番〉

百一番

左 勝^イ

沙弥蓮性

①たのめてもこぬ偽にふけし夜をなかくや人の忘^ロはてける

右

下野

②おとろかす人しなれば今はた、みしは夢かと誰に問はまし
左、こぬいつはりにふけし夜^ハ、ことによるしく侍めり、
右もみしは夢かとたれにとはましなというに侍
れとも、今はた、といへるほど、をとり侍へし、

【校異】

イ 勝―ナシ(書)

ロ 忘はてける―忘果ぬる(書)、わかればて

ける(内・支)、別はてける^{ぬイ}(聚)、別はてぬる(群) ハ ナシ―
續拾遺、戀三(聚) ニ 夜―夜を(内・支・聚・群)

【他書所伝】

へ左歌へナシ

へ右歌へ

【続拾遺和歌集】恋歌三・九四二・「宝治元年十首歌合に、逢不遇恋」

・後鳥羽院下野

おどろかす人しなければ今はただみしは夢かと誰にとはまし

【語釈】

①たのめてもこぬ偽―私に頼みにさせていながら来ない偽りの状態の意。「たのめつつこぬ夜あまたに成りぬればまたじと思ふぞまつにまされる」(『拾遺和歌集』恋三・八四八・「題しらず」・人麿)、「たのめつつこぬいつはりのつもるかなまことのみちにいりし人さへ」(『建礼門院右京大夫集』一一二九・「しりたる人のさまかへたるが、

こんといひておともせぬに」などの例がみえる。

②おとろかす人しなけれは―「あさましやみしはゆめか」とふほどにおどろかすにもなりぬべきかな」(『後拾遺和歌集』恋三・七三四・「頼綱朝臣ちちのともみものくにはべりけるとき、かのくにのをむなにあひてまたおともしはべらざりければ女のよめる」・読人不^知)をふまえた表現。自分に逢いに来てくれる人の不在を嘆く。

③今はた、―一度逢つて後再び逢えない現在の状況を詠むのが「逢不遇恋」題であるので、「今はた、」とわざわざ詠む必要はないというのが判者為家の批判であると考えられる。

【通釈】

百一番

左(歌)

沙弥蓮性

私に頼みにさせていながら来ない偽りの状態のまま更けた夜を長く私を感じるように、永久にあの人は忘れ果ててしまったのだ。

右(歌) 勝

下野

(自分に逢いに来て) 気付かせてくれる相手がないので、今となつてはもう現実にお逢いしたのは夢かと一体誰に尋ねたらよいのであろうか。

〔判詞〕左(歌の)、「こぬいつはりにふけし夜」、特によろしゅうございます。(右歌)も「みしは夢かとたれにとはまし」などという表現は優でございますが、「今はた、」という部分は、劣っておりますよう。

〈百二番〉

百二番

左 勝

為氏朝臣

口續千載① ありしよをこふるうつ、はかひなきに夢になさはや又もみるや

と

右

少将内侍

④ 夢にたに今はみゆとはみえした、忘れし人にそはぬ身なれは
おなし夢、左、めつらしく見なして侍にや、為勝、

【校異】

イ 勝―ナシ(書)

口 續千載―ナシ(書・内・支・群)、續千載、

戀三(聚)

ハ みるやと―みるやと(書)、みゆやと(内・支・聚

・群)

ニ みゆとは―みゆとも(書) ホ そはぬ―そめぬ(内

・支)

へ 左―左は(書・内・支・聚) ト 見なして―見なし

(内・支・聚・群)

【他書所伝】

へ左歌

『続千載和歌集』恋三・一四二二・「宝治元年十首歌合に、遇不逢恋」
・前大納言為氏

ありし夜をこふるうつつはかひなきに夢になさはや又もみゆやと

【題林愚抄】六九四一・（統千）／逢不遇恋・為氏

ありしよをこふるうつつはかひなきに夢になさばや又もみゆやと
〈右歌〉ナシ

【参考歌】

〈左歌〉

【後拾遺和歌集】恋二・六七五・「をむなにつかはしける」・西宮前
左大臣

うつつにてゆめばかりなるあふことをうつつばかりのゆめになさば
や

〈右歌〉

【古今和歌集】恋四・六八一・（題しらず）・伊勢

夢にだに見ゆとは見えじあさなあさなわがおもかげにはづる身なれ
ば

【語釈】

①ありしよを―過ぎ去ったむかしの逢瀬の夜を、の意。「有りし夜や
うら鳥が子の箱ならんあけにし日より逢ふ事のなき」（『堀河百首』
遇不逢恋・一一二二・永縁）「よ」には、「世」（男女の仲）を響かせ
る。「めのまへにかはりぬめりとみるものをまたわすれずやありしよ
のこと」（『和泉式部集』六〇七）。

②夢になさはや―夢にしてみたいものです、の意。現実には甲斐がな
いのでその代わりに夢を頼みとするという趣向は、小町歌「うたた
ねに恋しきひとを……」（『古今和歌集』恋二・五五三）に代表され

る伝統的な発想である。直接は、【参考歌】に掲げた後拾遺歌を念頭
に置く。この後拾遺歌は、『和泉式部集』に採録されており（五八四
・「人のおきたりけるかがみのはこそ、かへしやるとて」）、作者は
和泉式部かと思われる。なお、和泉式部には、「うつつにて思へばい
はむかたもなし今宵のことを夢になさばや」（『和泉式部集』四一七、
『和泉式部日記』一三二にも）という歌もある。

③又もみるやと―もう一度（夢で）見えるかと思つて、の意。「見る」
という自分の意志で行う行為よりも、「見ゆ」とするイ本注記などの
本文が適切であろう。「おもひかね夢にみゆやとかへさずはうらさへ
袖はぬらさざらまし」（『千載和歌集』恋三・八二八・「題不知」・頼
政）。

④夢にたに今はみゆとはみえした、―（あなたと逢えなくなつた）
今となつては、せめて夢の中だけでも（あなたに）見えているとは、
ただもう思われたくはないのです、の意。【参考歌】に掲げた伊勢歌
を念頭に置いた表現。「みえした、」は、「ただ見えじ」の倒置表現。

⑤忘れし人にそはぬ身なれは―（私のことを）忘れたあの人に寄り
添わない我が身ですので、の意。二人の仲が疎遠になつても心（魂）
は身から離れてあの人への許へさまよい行くという発想が根底にある。
「ものおもへばさはのほたるをわがみよりあくがれにけるたまかと
ぞみる」（『後拾遺和歌集』雑六 神祇・一一六一・「をとこにわすら
れて侍けるころきぶねにまゐりてみたらしがはにほたるのとび侍け
るをみてよめる」・和泉式部）がよく知られている。「いとほるるみ

をうしとてや心さへわれをはなれて君にそふらん」〔千載和歌集〕
恋三・八三〇・「題不知」・隆親)なども一例。【参考歌】に掲げた伊勢歌の趣向をなぞりつつ、下句の状況を替えて、「遇不逢恋」の心を表した。

【通釈】

百二番

左(歌) 勝

(藤原) 為氏朝臣

昔の、あの逢瀬の夜のことを恋しく思う今の現実には甲斐のないものですので、いっそのこと夢にしてみたいものです。もう一度(夢で)見えるかと思つて。

右(歌)

少将内侍

(あなたと逢えなくなった)今となつては、せめて夢の中だけでも(あなたに)見えているとは、ただもう思われたくはないのです。(私のことを)忘れたあの人に寄り添わない我が身です。〔判詞〕同じ夢(を題材とした歌で)、左は、珍しく捉えてございませうか。勝とします。

〈百三番〉

百三番

左

経朝朝臣

① 暁はつらきならひの鳥の音を二たひきかぬ契なりけり
②
③

右 勝^イ

沙弥禅信

思きや手枕ふれし朝ねかみみたれてし又恋ん物とは

左、上句はよろしく侍を、八声の鳥のねふた、ひ

きかぬといへる心、おほつかなくや、二夜といへる心なる

へきにや、あふ事は、一夜逢たるによりて、題心ふか、

るへきにあらざるにや、右、手枕ふれしあさねかみ、

作者面影いか、とおほえ侍れと、勝侍へし、

【校異】

イ 勝―ナシ(書) ロ し又―もまた(書)、も又(内・支・聚・群)

ハ とは―かは(支) ニ 上句は―上句(内・支・聚・群)

ホ いへる心なるへきにや、あふ事は、一夜―ナシ(書)

へ あふ事は―あふ事(内・支・聚・群) ト 題心―題の心(内

・支・聚・群) チ にや―や(内・支・聚・群) リ 手枕―枕

(内・支・群) ヌ あさ―あした(支) ル 作者―作者の(書

・内・支・聚・群) ヲ いか、と―いかにとは(書)、いか、とは

(内・支・聚・群) ワ 侍れと―侍れとも(書)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【参考歌】

〈右歌〉

【拾遺和歌集】恋四・八四九・「題しらず」・人麿

あさねがみ我はけづらじうつくしき人のた枕ふれてしものを

〔万葉集〕卷第十一・正述心緒・二五七八、第三句「うるはしき」

第四句「君が手枕」、〔古今和歌六帖〕第五・「かみ」・三二七五など）

〔千載和歌集〕恋二・七五三・「乍臥無実恋といへる心をよめる」・

西住法師

たまぐらのうへにみだるるあさねがみしたにとけずと人はしらじな

【語釈】

①暁はつらきならひ―暁は、逢瀬を過ぎした男女の別れの時で、辛い憂きものとして詠じられる。「有あけのつれなく見えし別より暁ばかりうき物はなし」〔古今和歌集〕恋三・六二五・「題しらず」・忠岑）

②鳥の音―鶏の鳴き声。男女の暁の別れを告げる。「ひとりねし時はまたれし鳥のねもまれにあふよはわびしかりけり」〔拾遺和歌集〕恋二・七一八・「はじめて女の許にまかりて、あしたにつかはしける」・読人知らず）第二句「つらきならひの」は、初句を承け、第三句へ掛かる。

③二たひきかぬ契なりけり―二度は聞かない、（仮初めの）契りであったよ、の意。「けり」は、そのことに初めて気づいた意を表す。

④手枕ふれし朝ねかみたれてし又―（あの人の）手枕が触れた（私）朝寝髪が乱れてもまた、の意。「朝寝髪」は、朝の寝起きの乱れた髪で、男女が共寝した朝の様子を表す。「手枕ふれし朝ねかみ」は「みたれ」を導く序詞でもあり、「みたれ」には、気持ち乱れる意

を掛ける。なお、イ本注記や他の伝本の本文「みたれてもまた」が適切である。

⑤八声の鳥のねふたゝひきかぬといへる心、おほつかなくや、二夜といへる心なるへきにや、あふ事は、一夜逢たるによりて、題心ふかゝるへきにあらざるにや―「八声の鳥」は、鶏を指す。「おもひかねこゆるせきぢに夜をふかみやこゑの鳥にねをぞそへつる」〔千載和歌集〕恋五・九四八・「隔関路恋といへるころをよめる」・雅頼）

〔奥義抄〕には、「鶏をば八声の鳥と云ふ。やこゑ鳴く故也」、〔堀河院百首聞書〕には、「庭鳥のはつ音、八こゑ鳴と申説候へども、たゞしげく鳴といへる心まで也」とあり、文字通り、「八声鳴く鳥」という認識があった。判詞では、八声鳴くという鶏の鳴き声を二度聞かないという趣向の意味するところが判然としない点が難じられている。「八声」に留意すれば、当該歌では、逢瀬の夜を過ぎした男が、最初の鶏の鳴き声を聞いて慌ただしく帰った、とも解せよう。ただし、為家は、「二たひ」は、二夜と捉えるのがよく、一夜の逢瀬によって、「遇不逢恋」の題意がより深く表現されるのではないかと考えているようである。

⑥作者面影いかゝとおほえ侍れと―評語としての「面影」は、歌から感じられる情景、詩的なイメージを意味するが、ここでは、文字通り、人の面ざし、面もち、風貌を意味するか。当該歌は、女性の立場で詠じられた恋歌で、「くろかみのみだれもしらざうちふせばまづかきやりし人ぞこひしき」〔後拾遺和歌集〕恋三・七五五・「題

不知)・和泉式部)、「ながからむ心もしらずくろかみのみだれてけさは物をこそおもへ」(『千載和歌集』恋三・八〇二)・(百首歌たてまつりける時、恋のこころをよめる)・待賢門院堀川)、「かきやりしそのくろかみのすぢごとにうちふすほどは面かげぞたつ」(『新古今和歌集』恋五・一三九〇)・「題しらず」・定家)などのような、官能的な世界を志向したものであろう。僧が、女性の立場で恋歌を詠むことは珍しいことではないが、「手枕ふれしあさねかみ」という生々しい表現から、作者・禅信の面ざしが思わず想起されてしまったことを記したのであろうか。

【通釈】

百三番

左(歌)

(藤原) 経朝朝臣

暁には辛い習いの鳥の音を二度とは聞かない、(仮初めの)契りであつたことです。

右(歌) 勝

沙弥禅信

思いもしませんでした。(あなたの)手枕が触れた(私の)朝寝髪が乱れていたように、(こんなにも)思い乱れてもまた(あなたのことを)恋しく思うことにならうとは。

【判詞】左は、上句は悪くないのですが、八声の鳥の鳴き声を再び聞かないという趣向は、判然としないのではないのでしょうか。(「二たひ」というのは)二夜という意味でありましようか。逢瀬は、一夜逢つたことによつて、題意がより深まるのではないのでしょうか。

右は、「手枕ふれしあさねかみ」は、作者の面ざしはどんなものであつたかと思われませんが、勝とするのがよいでしょう。

〈百四番〉

百四番

左 勝

右

①よひのまのふけ行かねの恨たに思ひたえても年いけいへぬる身を
 ②越前
 ③為家
 ④ホ
 ⑤かたり、うけられす侍れは、又負侍へし、
 我はかり心なかさをかたるとも見しゆめとやは思ひあはせん
 左哥今の世まで思つ、けられ侍るらん、恋しき
 事に物忘せず、さもおかしくこそ侍れ、右のゆめ

【校異】

イ 勝―ナシ(書)

口 恨たに―限りたに(支)

ハ へぬる―けい

へける(書・内・支・聚)、へぬる(群) 二 為家―前権大納言為家(書・内・支・聚・群) ホ 見しゆめとやは―見しは夢とや(内・支・聚・群) へ つ、けられ―つ、けられて(内・聚)

【他書所伝】

〈左歌〉

【題林愚抄】恋部二・六九七二・(宝治元仙洞歌合)・越前

あさねがみ我はげづらじうつくしき人のた枕ふれてしものを

〔万葉集〕卷第十一・正述心緒・二五七八、第三句「うるはしき」

第四句「君が手枕」、〔古今和歌六帖〕第五・「かみ」・三二七五など）

〔千載和歌集〕恋二・七五三・「乍臥無実恋といへる心をよめる」・

西住法師

たまぐらのうへにみだるるあさねがみしたにとけずと人はしらじな

【語釈】

①暁はつらきならひ―暁は、逢瀬を過ぎした男女の別れの時で、辛い憂きものとして詠じられる。「有あけのつれなく見えし別より暁ばかりうき物はなし」〔古今和歌集〕恋三・六二五・「題しらず」・忠岑）

②鳥の音―鶏の鳴き声。男女の暁の別れを告げる。「ひとりねし時はまたれし鳥のねもまれにあふよはわびしかりけり」〔拾遺和歌集〕

恋二・七一八・「はじめて女の許にまかりて、あしたにつかはしける」・読人知らず）第二句「つらきならひの」は、初句を承け、第三句へ掛かる。

③二たひきかぬ契なりけり―二度は聞かない、（仮初めの）契りであったよ、の意。「けり」は、そのことに初めて気づいた意を表す。

④手枕ふれし朝ねかみたれてし又―（あの人の）手枕が触れた（私（の）朝寝髪が乱れてもまた、の意。「朝寝髪」は、朝の寝起きの乱れた髪で、男女が共寝した朝の様子を表す。「手枕ふれし朝ねかみ」は「みたれ」を導く序詞でもあり、「みたれ」には、気持ち乱れる意

を掛ける。なお、イ本注記や他の伝本の本文「みたれてもまた」が適切である。

⑤八声の鳥のねふたゝひきかぬといへる心、おほつかなくや、二夜といへる心なるへきにや、あふ事は、一夜逢たるによりて、題心ふかゝるへきにあらざるにや―「八声の鳥」は、鶏を指す。「おもひかねこゆるせきぢに夜をふかみやこゑの鳥にねをぞそへつる」〔千載和歌集〕恋五・九四八・「隔関路恋といへるころをよめる」・雅頼）

〔奥義抄〕には、「鶏をば八声の鳥と云ふ。やこゑ鳴く故也」、〔堀河院百首聞書〕には、「庭鳥のはつ音、八こゑ鳴くと申説候へども、たゞしげく鳴といへる心まで也」とあり、文字通り、「八声鳴く鳥」という認識があった。判詞では、八声鳴くという鶏の鳴き声を二度聞かないという趣向の意味するところが判然としない点が難じられている。「八声」に留意すれば、当該歌では、逢瀬の夜を過ぎした男が、最初の鶏の鳴き声を聞いて慌ただしく帰った、とも解せよう。ただし、為家は、「二たひ」は、二夜と捉えるのがよく、一夜の逢瀬によって、「遇不逢恋」の題意がより深く表現されるのではないかと考えているようである。

⑥作者面影いかゝとおほえ侍れと―評語としての「面影」は、歌から感じられる情景、詩的なイメージを意味するが、ここでは、文字通り、人の面ざし、面もち、風貌を意味するか。当該歌は、女性の立場で詠じられた恋歌で、「くろかみのみだれもしらさうちふせばまづかきやりし人ぞこひしき」〔後拾遺和歌集〕恋三・七五五・「題

不知)・和泉式部)、「ながからむ心もしらずくろかみのみだれてけさは物をこそおもへ」(『千載和歌集』恋三・八〇二)・(百首歌たてまつりける時、恋のこころをよめる)・待賢門院堀川)、「かきやりしそのくろかみのすぢごとくにうちふすほどは面かげぞたつ」(『新古今和歌集』恋五・一三九〇)・「題しらず」・定家)などのような、官能的な世界を志向したものであろう。僧が、女性の立場で恋歌を詠むことは珍しいことではないが、「手枕ふれしあさねかみ」という生々しい表現から、作者・禅信の面ざしが思わず想起されてしまったことを記したのであろうか。

【通釈】

百三番

左(歌)

(藤原) 経朝朝臣

暁には辛い習いの鳥の音を二度とは聞かない、(仮初めの)契りであつたことです。

右(歌) 勝

沙弥禅信

思いもしませんでした。(あなたの)手枕が触れた(私の)朝寝髪が乱れていたように、(こんなにも)思い乱れてもまた(あなたのことを)恋しく思うことにならうとは。

【判詞】左は、上句は悪くないのですが、八声の鳥の鳴き声を再び聞かないという趣向は、判然としないのではないのでしょうか。(「二たひ」というのは)二夜という意味でありましようか。逢瀬は、一夜逢つたことによつて、題意がより深まるのではないのでしょうか。

右は、「手枕ふれしあさねかみ」は、作者の面ざしはどんなものであつたかと思われませんが、勝とするのがよいでしょう。

〈百四番〉

百四番

左 勝^イ

越前

①よひのまのふけ行かねの恨たに思ひたえても年^{ハケイ}へぬる身を

右

為家

我はかり心なかさかたるとも見しゆめとやは思ひあはせん

左哥今の世まで思つ、けられ侍らん、恋しき

事に物忘せず、さもおかしくこそ侍れ、右のゆめ

かたり、うけられす侍れは、又負侍へし、

【校異】

イ 勝―ナシ(書)

口 恨たに―限りたに(支)

ハ へぬる―^{ケイ}

へける

(書・内・支・聚)、へぬる(群) 二 為家―前権大納言為

家(書・内・支・聚・群) ホ 見しゆめとやは―見しは夢とや(内

・支・聚・群) へつ、けられ―つ、けられて(内・聚)

【他書所伝】

〈左歌〉

【題林愚抄】恋部二・六九七二・(宝治元仙洞歌合)・越前

よひのまの深行くかねのうらみだに思ひたえでも年へける身を

〈右歌〉

『題林愚抄』恋部二・六九七三・「已上同（宝治元仙洞歌合）」・為家卿

我ばかり心ながさをかたるともみしは夢とやおもひあはせん

【語釈】

①よひのまの―越前の当該歌は、著名な「待宵の小侍従」の歌「まつよひのふけ行くかねのこゑきけばあかぬわかれの鳥はものかは」〔『新古今和歌集』恋歌三・一一九一・「題しらず」・小侍従〕と、「まちし夜のふけしをなになげきけんおもひたえてもすごしける身を」〔『金葉和歌集』二度本・恋部上・四〇二・「かたらひける人のかれがれになりてうらめしければつかはしける」・白河女御越後〕を合体させた趣の歌。

②思ひたえても―「誰かはと思ひたえてもまつにのみおとづれてゆく風はうらめし」〔『新古今和歌集』雑歌中・六二二・「守覚法親王、五十首歌よませ侍りけるに、閑居の心をよめる」・有家〕や「うらみわび思ひたえてもやみなましなにおもかげのわすれがたみぞ」〔『新勅撰和歌集』恋歌四・九二一・寂蓮〕など、「思ひたえても」の句を含む複数の歌があるが、『新編国歌大観』では、当該歌の「思ひたえても」を「思ひたえでも」と解している。これに従う。

③心なかさを―「心なかさ」は、「いつまでも心がわりしないこと、誠実であること、また、その度合」〔『日本国語大辞典』〕。「君を思ふ

心ながさは秋の夜にいづれまさと空にしらなん」〔『後撰和歌集』恋四・八四二・「返し」・源是茂、※またざりし秋はきぬれどみし人の心はよそになりもゆくかな（同・八四一・「心ざしおろかに見えける人につかはしける」・なかきがむすめ）への返歌〕などの用例があり、当該歌よりも後の歌に「あひみての心ながさを思ひやれつらきをだにも忘れやはする」〔『続拾遺和歌集』恋歌三・九一八・「題しらず」・津守国基〕の如き類想歌がある。

④見しゆめとやは―当該句は「見し夢とやは」（底本・書陵部本）と「見しは夢とや」（内閣文庫本・九州大学蔵支子文庫本・書陵部蔵類聚歌合本・群書類従本）の二つに本文が分かれている。後者が本来の形であれば、「見し（ふたりが逢って契りかわしたの）は夢だったと（あの人は）思い合わせるであろうか」の意となり、前者が本来の形であれば、「（ふたりの逢瀬は（実は自分のみた）夢だったと（あの人は）思い合わせるのではないか（まさかそんなことはあるまい））」の意となる。本注釈の方針に従って、通釈は底本の本文のままで行うことにする。

⑤うけられす侍れは―信頼して受け入れられませんのでの意で、否定的評価語の一つ。

【通釈】

百四番

左（歌） 勝

（嘉陽門院）越前

宵の間に、夜が更けて行くのを知らせる鐘の（音を聞きながらあ

の人の訪問を待っていた) あの恨みさえも (忘れず、あの人を) 思いつづけて、もう何年も **過ぎた** わが身だよ。

右 (歌)

(前権大納言藤原) 為家

私ばかりが (あの人を忘れない) 心長さを語っても、(あの人の方は、私と違って、ふたりのことは) 見た夢だったと、思い合わせていることだろうか (まさかそんなことはないだろうけれど)。

〔判詞〕左歌は今の世まで (かわらず恋しく) 思いつづけられていますのでしよう。恋しい事を (そのままに) 物忘れせず、たいそう味わい深うございます。右 (歌の) 夢語りは、受け入れにくうございますので、又負けとなります。

宝治元年『院御歌合』注釈―「旅宿嵐」題―

藤川 功和 位藤 邦生

田 野 慎二 山 崎 真 克

はじめに

『表現技術研究』第5号（平成21年3月）に引き続き、宝治元年（一二四七）『院御歌合』の注釈を試みる。今回は「旅宿嵐」題十三番を取り上げる。各番担当者と所属を以下に示す。

百五番―位藤邦生（長崎大学）、百六番―藤川功和、百七番―位藤、
百八番―藤川、百九番―山崎真克（松江工業高等専門学校）、
百十番―位藤、百十一番―藤川、百十二番―田野慎二（広島国際
大学）、百十三番―位藤、百十四番―山崎、百十五番―田野、
百十六番―藤川、百十七番―藤川

凡 例

一、底本は、永青文庫蔵本〔二〇七・三六・七〕（『細川家永青文庫叢刊』第八卷所収）を用いた。

一、校合した諸本と略号は、以下の通り。

書―書陵部蔵本〔五〇一・七四〕（『新編国歌大観』の底本）

内―内閣文庫蔵本〔百三十番歌合（外題）〕〔二〇一・二四七〕

支―九州大学支子文庫蔵本〔九一・一・ホ・一〕

聚―書陵部蔵歌合類聚本（『大日本史料』第五篇二十四所収）
群―群書類従本（巻第二百所収）

一、注釈は、番全体の本文【校異】を示した後、【他書所伝】【本歌（参考歌）】【語釈】【通釈】をあげた。

一、【語釈】の内、各詠作者並びに前号までに既出の語彙については、紙幅の関係上これを略した。

一、表記や送り仮名の異同はこれを略し、見せけちや補入符号によって訂正のある箇所は、訂正後の本文を採用した。

一、翻字本文には適宜読点を施し、字体は現行の活字体に改めた。

一、本文中、異同の存する箇所には、傍線及びイ、ロ、の如き符号を付し、語釈を施した箇所には、本文右傍に①、②…の通し番号を付した。

一、底本で文意不通等が認められる場合、他本の本文に拠り通釈を施した場合がある。その際、本文【校異】【通釈】において他本に拠った箇所に網掛けを施した。

一、引用本文は、原則として『新編国歌大観』に拠り、その他の引用文献は、適宜底本を示した。なお、引用本文には、適宜、傍線、振り仮名等を付した。

一、『万葉集』については、本文、歌番号ともに塙書房刊『万葉集訳文篇』を用いた。

〈百五番〉

百五番 旅宿嵐^①

左 勝^イ 女房

松かねの枕^②さためんかたそなきいかに^④はけしき夜半の嵐そ

右 小宰相

いくかへりなれぬ嵐も時雨らん都を忍ふ夜はのまくらに

右 哥題のほかのしくるらんといへる、なにのようとも

きこえ侍らす、夜はの枕になれぬあらしも、又こひ

ねかふへきこと葉つゝきならずや侍らん、左上下相

かなひて、旅宿のころ、景気、面影^⑤あらはに侍に、いか

にねし夜か夢にみえけむ、それとはなく思いたされ

侍、ことよろしくこそ、左尤勝侍へし、

【校異】

イ 勝―ナシ (書) ロ まくらに―嵐に (支) ハ いへる―ナ

シ (聚) ニ 侍らす―侍らぬ (書・内・群) ホ ねし夜か―ね

しよそ (支) ヘ それとはなく―それとはなくて (支)

ト 思いたされ侍―思ひ出され侍るに (支・群) チ ことに―ナ

シ (支・群)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【本歌】

〈左歌〉

『古今和歌集』恋歌一・五一六・「題しらず」・(よみ人しらず)

よひよひに枕さだめむ方もなしにねし夜か夢に見えけむ

『古今和歌六帖』第五・三三三四

ゆふさればまくらさだめんかたもなしにねしよかゆめにみえけ

ん

【語釈】

① 旅宿嵐―「岩かねのどこに嵐をかたしきてひとりやねなんさよの

中山」(『新古今和歌集』騎旅・九六二・藤原有家)の詞書に「石清

水歌合に、旅宿嵐といふ事を」とある。石清水歌合は建仁元年(一

二〇一)催行。定家、慈円の詠歌にも同歌合「旅宿嵐」題のものがある。

② 松かねの枕―「松かねの」は「待つ」「絶ゆ」にかかる枕詞。「松

かねの枕」は松の根を枕とすること、また松の根を枕として野宿す

ること。「松かねの枕もなにかあだならむ玉のゆかとしてつねのどこか

は」(『千載和歌集』羈旅歌・五一〇・崇徳院)などの例がある。

③ 枕さためんかたそなき―枕定むは、寝るとき頭にする方向を定め

る意。その方向によって恋人を夢にみるという俗信があった。当該

歌は先にあげた『古今集』歌を本歌として、恋歌を騎旅歌へと転換

しているが、本歌の「いかに」までを生かそうとしてやや生硬な表

現となっている。

④かたそなき―「かた」は「方角」や「手段」。「ながむればおもひやるべきかたぞなき春のかぎりの夕ぐれのそら」(『千載和歌集』春歌下・一二四・式子内親王)などの先例がある。

⑤面影―詩的イメージ。「景気」と通じるところがある。

⑥いかにねし夜か夢にみえけむ、それとはなく思いたされ侍―「いかにねし夜か夢にみえけむ」は、既出の『古今和歌集』、『古今和歌六帖』のほか『新勅撰和歌集』、『袋草子』、『定家八代抄』等に載せるよみ人しらず歌の下句で、為家はこの歌を本歌と考えていなかったことがわかる。

【通釈】

百五番 旅宿嵐

左(歌)

(今見渡せば、あたりは荒れ) 松がねの枕を定めて野宿をする方も手立てもない。そんなにも激しかった夜半の嵐であったことよ。

右(歌)

何度も何度も、馴れぬ嵐も時雨を運んで(袖は涙に濡れて) いるだろう。(旅にあつて恋しく) 都を忍ぶ夜半の枕に。

〔判詞〕右歌(は) 題にはない「時雨るらん」といつているのが、何の必要があるともわかりません。「夜はの枕になれぬあらし」というのも、又庶幾すべき言葉つづきではないでしょう。左(歌)は上句・下句(の表現)があいかなっていて、旅宿の内容、景気、面影があらわではありますが、「いかにねし夜か夢にみえけむ」という

女房(後嵯峨院)

小宰相

古歌)が、それとなく思い出されますのが、殊によろしゅうございまして、左(歌)がはるかに勝でございましょう。

【補遺】

「旅宿嵐」の歌は、この番の小宰相の歌を例外として、出詠者全員が「旅宿嵐」を経験する当人の視点で詠歌している。小宰相のみが、嵐を聞き時雨に涙して都を恋慕する人物を思いやる立場で歌を詠んでいる。この歌は土佐(阿波)に遷幸した土御門院の悲運を(歌合に参加した)人々に想起させたであろう。(拙稿「宝治元年『院御歌合』と小宰相」(『国語と教育』第三十三号、平成二十年十二月刊)

〈百六番〉

百六番

左 掛^イ

嵐とてよなくきしをとよりも旅ねの庵ははけしかりけり

右

俊成卿女

露^ロけさを契^②やをきし草枕^③あらし吹そふ秋のたひねに

あらしとてよなくきしと侍程は、すこしおほつ

がなく侍に、旅ねのいはははけしかりけりとてこそ、

故郷の事^トきなされてよろしく侍れ、露けき

草枕^ホあらし吹そふ秋のたひねなどいへる、哥のすかた

優艶^⑤に侍れは、持^トなど申へきにや、

【校異】

イ 持—ナシ(書) ロ ナシ—後拾遺、羈旅(聚)

ハ と侍程は、すこしおほつかなく侍に、旅ねの—ナシ(支)

ニ 事—事も(内・支・聚・群) ホ あらし—ナシ(支)

へ など—と(支・群)、など、(聚)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『続拾遺和歌集』羈旅歌・六七九・「宝治元年十首歌合に、旅宿嵐」

・皇太后宮大夫俊成女

露けさをちぎりやおきし草枕あらし吹きそふ秋のたびねに

『俊成卿女集』二二三・「宝治元年十月歌合、旅宿花」

露けさを契りやおきし草枕嵐吹きそふ秋の旅寝に

【語釈】

①旅ね—『万葉集』以来羈旅の歌をはじめ頻繁に用いられる表現。

当該歌合「旅宿嵐」題でも、当番右歌の他、百十番右歌、百十二番右歌、百十六番左右歌で詠み込まれている。旅寝と嵐という組み合わせの先行例としては、「吹きまよふあらしとともに旅ねする涙の床に木のはもるなり」(『散木奇歌集』冬部・五八八・「小野山家にて旅宿落葉を」)、「をしみかねはなのあたりに旅ねしつよはの嵐よ心してふけ」(『月詣和歌集』三月附羈旅・一七二・祝部成仲)等がみえる。

②露けさを契やをきし草枕—「露けさ」は、露のように湿りけが多

いことをいい、涙を暗示する場合もある。「草枕」は、本来枕詞だが、

草を結んだ枕、或いは旅や旅寝そのものを意味することもある。「つ

ねだにもねざめのそらはあるものを露けさまさるくさまくらかな」

(『兼澄集』「たびのねざめ」七二)、「草まくらかりがねのねにゆめ

さめてつゆけさまさるたびごろもかな」(『為忠家初度百首』秋・「羈

旅雁」・三四八)等に見る如く、旅寝において露けさがまさるとい

う系譜がみてとれる。また、「露けさ」は、「いとどしくこひしき人

のゆめにみてつゆけさまさるくさまくらかな」(『関白殿藏人所歌合』

「水上待月」題右・一七)、「あひみても帰るあしたのつゆけさはさ

さわけし袖におとりしもせじ」(『重家集』一八二・「後朝恋十首」)

等、恋歌でもしばしば用いられる。

③あらし吹そふ—『源氏物語』帚木巻で、夕顔の頭中将への返歌に

「うち払ふ袖も露けきとこなつに嵐吹きそふ秋も来にけり」(一六)

とみえる。

④あらしとてよなくきしと侍程は、すこしおほつかなく侍—(嵐

を夜な夜な聞く)という例は少なく、先行例として「中中にさても

ねぬべき夜な夜なをうたて嵐の窓たたくらん」(『仙洞句題五十首』

「寄風恋」・二七九・俊成卿女)がみえる。

⑤優艶—上品で美しいことをいう。『六百番歌合』において、俊成は

「くぢらとるかしくきうみのそこまでも君だにすまばなみぢしのが

ん」(七番左・九七三・「寄海恋」・頭昭)について、「いとおそろし

くきこゆ」とした上で、「凡は歌は優艶ならん事をこそ可庶幾」とす

る。

【通釈】

百六番

左（歌） 持

太政大臣（西園寺実氏）

嵐といつて夜ごと聞いていた（嵐の）音よりも、旅のやどりの庵（で聞く嵐の音）は（一層）激しかったよ。

右（歌）

俊成卿女

湿っぽさ（旅のわびしさで流す涙）をお互いに（あらかじめ）約束しておいたのだろうか。嵐が吹き加わる秋の旅寝に。

〔判詞〕「あらしとてよなくきし」とありますあたりは、（表現として）少しはつきりしません、「旅ねのいほははけしかりけり」とあるので、故郷の事が連想されてよろしうございます。露けき草枕「あらし吹そふ秋のたひね」などと詠じているのは、歌の姿が優艶でございますので、持など申すべきでしょうか。

〈百七番〉

百七番

左

① 夜をさむみ衣かせ山秋深てかたしく霜を問あらし哉

右 勝

② ③ ④ ⑤ 幾夜われかたしき侘ぬ旅衣かさなる山の峯のあらしに

左 哥させる難には侍らねと、哥合には、ふるくも

旅の心、みやこの遠きを思ふへきやうに申をき侍

にや、かせ山秋ふけてかたしく霜をとふ嵐など侍る、

ことにかけりたるすかたにて、今の世にはこひ

ねかふへき風体にも侍らぬ上に、旅衣かさなる

山はめつらしき事には侍らねと、題の中に

みえ侍れは、為勝、

【校異】

イ 通忠—権大納言通忠（書・内・支・聚・群） □ 勝—ナシ（書）

ハ 実雄—権大納言実雄（書・内・支・聚・群） 二 新後撰—新

後撰、羈旅（聚）、ナシ（書・内・支・群） ホ 左哥—左（聚・群）

へ 旅の—旅ねの（内・聚） ト 嵐など—嵐哉と（書）

チ かけりたるすかたにて、今の世にはこひ—ナシ（内・支・聚・

群） リ 事には—事に（内・支・聚・群）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『新後撰和歌集』羈旅歌・五八四・「宝治元年、十首歌合に、旅宿嵐」

・山階入道左大臣

いく夜われかたしきわびぬ旅衣かさなる山の峰のあらしに

【語釈】

① 夜をさむみ衣—「かせ山」にかかる序詞。同じ序詞が「夜をさむ

み衣かりがねなくなへに萩のしたばもうつろひにけり」(『古今和歌集』秋歌上・二二一・「題しらず」・「よみ人しらず」)のごとく「かり(がね)」にかかる場合もある。

②かせ山―鹿背山。京都府相楽郡木津町北東部にある山。木津川に臨む。歌枕。「都いでて今日みかの原いづみ河かは風さむし衣かせ山」(『古今和歌集』羈旅歌・四〇八・「題しらず」・「よみ人しらず」)。

③かたしく霜を―「さむしろに衣かたしきこよひもや我をまつらむうちのはしひめ」(『古今和歌集』恋歌四・六八九・「題しらず」・「よみ人しらず」)を本歌として「さむしろや待つよの秋の風ふけて月をかたしく宇治の端姫」(『新古今和歌集』秋歌上・四二〇・定家)や「かたしきの袖をや霜にかさぬらむ月によがるる宇治のはしひめ」(『新古今和歌集』冬歌・六一一・「橋上霜といへる事をよみ侍りける」・法印幸清)など多くの歌が詠まれた。当該歌の「かたしく霜を」も同様の発想。霜を片敷いて侘しく寝る意。

④問あらし哉―訪ねてくる嵐よ。「まくらにも袖にも涙つららるてむすばぬ夢を問ふあらしかな」(『新古今和歌集』冬歌・六三二・「だいしらず」)・「後鳥羽院」他、多くの例がある。

⑤旅衣かさなる山の―「衣」と「かさなる」の縁語を用い、旅を重ね、幾つもの山を越えてきたことを表現している。「しぐれつつかさなる山のとび衣もみちのしづく袖もほしあへず」(『壬二集』六七八・「秋」)はその先例。

⑥かけりたるすかた―「かける」は、和歌で一句の表現に心の動き

がはつきり現れること。動的表現が鋭く出ていること。「にぶく眠りめなる歌人には、かけりたるかたをまなべと」(『ささめごと』)「こくでは否定的評価につながっている。

【通釈】

百七番

左(歌)

(権大納言源) 通忠

夜が寒いので衣を貸せという、鹿背山の秋が深まつてきて、霜を片敷いて(侘しく)野宿している(私のもと)を訪ねて来る嵐だよ。

右(歌) 勝

(権大納言藤原) 実雄

旅衣が重なり、(旅をつづけて)いくつも重なった山の峯を吹く嵐に、いったい幾夜、私は(旅の衣を)片敷き侘びたことだろうか。「判詞」左歌はとりたてて重大な難ではございませんが、歌合では、昔から旅の内容、都が遠いのを慨嘆すべきように申し置いたのではございませんでしょうか。「かせ山秋ふけてかたしく霜をとふ嵐」などございますのは、特に連想に飛躍の多い姿であって、今の世では庶幾すべき風体でもございませんに、(一方)「旅衣かさなる山」は珍しい事ではございませぬものの、(旅宿嵐という)題の中に(それが)見えておりますので、(こちらを)勝とします。

〈百八番〉

百八番

定雅

左
草枕夢^①のかよひち吹とちて夜半の嵐の音のさやけさ

右
公相

本續後撰
嵐ふく嶺のさゝやの草枕かりねの夢はむすぶともなし^②

此左の哥も、夢の通路吹とちてといへる程、を^④

とめの姿をおもへる雲のかよひちよりは、まことすくなく侍にや、あらし吹みねのさゝや、おほつかなき

ふしも侍らねは、又右勝侍へし、

【校異】

イ 定雅—権大納言定雅（書・内・支・聚・群） □ さ—き（内

・聚） ハ 勝—ナシ（書） ニ 公相—権大納言公相（書・内・

支・聚・群） ホ 續後撰—ナシ（書・内・支・群）、續後撰、羈旅

（聚） ヘ 左の—左（書） ト 哥も—哥（聚）

チ まこと—まことに（内・支・聚・群） リ 又—ナシ（内・支

・聚・群）

【他書所伝】

〈左歌〉

『万代和歌集』雜歌四・三三七九・「十首御歌合に、旅宿嵐を」・権大納言定雅

くさまくらゆめのかよひぢふきとちてよはのあらしのおとのさやけさ

〈右歌〉

『続後撰和歌集』羈旅歌・一三〇二・「十首歌合に、旅宿嵐」・右近大将公相

あらしふくみねのささやの草枕かりねのゆめはむすぶともなし

『万代和歌集』雜歌四・三三八〇・「十首御歌合に、旅宿嵐を」・権大納言公相

あらしふくみねのささやのくさまくらかりねのゆめはむすぶともなし

し

【語釈】

①夢のかよひち吹とちて—「夢のかよひち」は、夢路と同義。夢の

通路（夢路）が閉じられると詠む例は、「さゆるよのゆめぢは雪にと

ぢられてふしみのさとのかひやなからん」（『雲葉和歌集卷』冬歌・

八五二・（後京極摂政家にて三首歌講ぜられし時、伏見里雪）・宜

秋門院丹後）、「わするとてさてとぢむべき夢ぢかはのちの世までも

たえしあふせを」（『我が身にたどる姫君』四八・（関白）等がある

が、あまりみえない表現。夢が途絶えることをも意味する。

②嶺のさゝや—「さゝや」（笹屋）は、笹ぶきの小さな家で、「この

のへのくもぬのうへにすむ月のしづのささやにいかでもらん」（『唯

心房集』九六・（月の歌）、「あられふるしづがささ屋よそよさら

に一夜ばかりの夢をやはみる」（『拾遺愚草』・閑居百首・二六一・

（冬十五首）」等がみえる。勅撰集では、当該公相詠と前掲定家詠

が『続後撰和歌集』に初めて入集する。「嶺の笹屋」とする例は、「つ

りぶねのはるかにうかぶかがり火をみねのささやにいくよみつらん」

〔『定家名号七十首』五六・「(山家)」にみえる。なお、右歌の類例として「ささの屋の夜ぶかきしものおきもせずねもせぬとこにあらし吹くなり」〔『明日香井和歌集』雜・一五六六・「これもおなじあづまの道にてよみ侍りける歌の中に」〕があげられる。

③むすふともなし―先行例として「なほざりに袖のあやめをかたしきて枕も夢も結ぶともなし」〔『老若五十首歌合』夏・七十三番右・一四六〕がみえる。なお、公相は後に「あらしふくみねのしの屋の草まくらかりねの夢はむすぶともなし」〔『三十六人大歌合』五番左・六九〕を出詠している。

④をとめの姿をおもへる雲のかよひち―「あまつかぜ雲のかよひぢ吹きとぢよをとめのすがたしばしとどめむ」〔『古今和歌集』雜歌上・八七二・「五節のまひひめを見てよめる」・宗貞〕を踏まえる。

【通釈】

百八番

左(歌)

(権大納言源) 定雅

旅寝にあつて夢の中での行き通いが吹き閉じて。夜の嵐の音の響きのさえていること…

右(歌) 勝

(西園寺) 公相

嵐が吹く嶺の笹屋の旅寝のうたたねでは夢をみることもない。

〔判詞〕この左の歌も、「夢の通路吹とちて」というあたり、(あの『古今集』歌の)乙女の姿を思える「雲のかよひち」よりは、真実味が少ないでしょうか。「あらし吹みねのさゝや」、はつきりしない

言い回しもごさいませんので、又右(歌)が勝ちでございませぬ。

〔百九番〕

百九番

左

権大―公基

吹まよふあらしの風の寒夜にかりねさひしきさやの中山

右 勝

為教 朝臣

かり枕夢もむすはすさゝの屋のふしうき程の夜半の嵐に

左、やすらかにてさせる難なく侍にや、右、さゝの

屋ふしうき夜半の嵐なと結構しいたして侍、心

優如し侍へきにや、

【校異】

イ 左―左勝(支) □ 権大―公基―権大納言公基(書・内・支

・聚・群) ハ 風―かけ(支) 二 勝―ナシ(書・内・支)

ホ かり枕―かり枕(聚) ヘ やすらかにて―やすらかに(書)

ト 難なく侍にや―難侍らぬにや(書・内・支・聚・群) チ さ

ゝの屋―さゝの(書)、さゝのやの(内・聚・群)、さゝの(支)

リ 夜半の嵐―よは(書・内・支・聚・群) 又 さしに―

支・聚・群) ル 優如し侍へきにや―優如く侍へきにや(書)、

優怒し侍へきにや(内)、優ぬし侍るへきにや(支)、優に侍るへき

や(聚)、優に侍るへきにや(群)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『続拾遺和歌集』羈旅歌・六九二・「宝治元年十首歌合に、旅宿風」
・前右兵衛督為教

かり枕ゆめもむすばずささのやのふしうきほどのよはの嵐に

【語釈】

①さやの中山―遠江国の歌枕。旅の情景を詠んだ歌には、「岩がねの
とこに嵐をかたしきてひとりやねなんさよの中山」『新古今和歌集』
羈旅歌・九六二・「石清水歌合に、旅宿風といふ事を」・有家、「よ
そながら嵐の声のさびしさをそへてやきかむさやの中山」『建保名
所百首』雜二十首・一一二二・「佐夜中山 遠江国」・兵衛内侍、「夜
もすがら松吹く風の音づれてかりねさびしきさやの中山」『嘉元百
首』旅・四八六・藤原師教）などがある。

②夢もむすはず―旅寝の仮の枕では夢を見ることもないという意。

「旅ごろもうらがなしさにあかしかね草の枕は夢もむすはず」『源
氏物語』明石巻・二二三、「まくらにも袖にも涙つららゐてむすば
ぬ夢を問ふあらしかな」『新古今和歌集』冬歌・六三三・「だい
しらず」・良経、「草まくらむすばぬゆめは夜ごろへてただ山風の
松にふくこゑ」『石清水社歌合』（建仁元年）一番左・旅宿風・一・
後鳥羽院）などの例がある。

③結構しいたして―「おひかぜにすだくかはづのもろごゑも浪もよ

りくるるでの河みづ」『六百番歌合』春部・廿番左・一五九・蛙・
有家）に対する俊成判に「左、おひかぜ右方申旨可然歟、浪もより
くるなども、結構の気は見えて殊なる事なきにや」とあるように、
趣向をめぐらした様子を指す。この歌の場合は、旅寝で夢を見るこ
とがないのは、粗末な篠屋に吹き寄せる夜更けの強い風のためとし
た趣向を指すか。

④さしに―諸本に従い「更に」と改める。

⑤優如し侍へきにや―諸本間で異同がみられるが、右歌を「優」と
して肯定的に評価する判詞と解釈できる。あるいは『千五百番歌合』
夏三・五百十番の良経判「浦号郷名強結構 若優其志定同科」を為
家は意識しているか。

【通釈】

百九番

左（歌）

権大（納言西園寺）公基

方角も定まらず吹き乱れる強い山風が寒い夜に、仮寝がさびしい
佐夜の中山であることよ。

右（歌） 勝

（藤原）為教朝臣

旅寝の仮の枕では夢も見ることはない。篠の屋の臥しわずらうほ
どの夜更けの強い風のために。

「判詞」左（の歌は）、穏やかでやさしく取り立てて欠点がないよう
でございましょうか。右（の歌は）、「さ」の屋ふしうき夜半の嵐」
などは趣向をめぐらしてあり、歌の内容が優（優）のよう（優）でござい

ましようか。

〔百十番〕

百十番

為経

① 左 勝イ
さ、枕また臥なれぬうた、ねに嶺のあらしも心してふけ

右

信実

今夜又こゝに旅ねの松のかけむへ山あらしをとのさひしさ

右哥すかたことはいひしりてをかしくきこえ侍

を、むへ山あらしと思ひあはせむこと、すこしおほつか

なくや侍へき、左夏衣またひとへなる秋風峯の

あらしに、音まさりてこそきこえ侍めれ、為勝

【校異】

イ 勝―ナシ(書) 口 為経―中納言為経(書・内・支・聚・群)

ハ 信実―信実朝臣(書・内・支・聚・群) ニ かけ―風(聚)

ホ さひしさ―さひしき(群) ヘ ことは―詞は(内・支・聚)

ト こと―ころ(書・内・支・聚・群) チ おほつかなくや―

おほつかなく(支・群) リ 侍へき侍へし(支・聚・群)

又 左夏―左哥(書) ル 秋風―秋風の(支・群) ヲ 吹なせ

る―~~秋風~~(書・内・支・聚・群) ワ 侍めれ―侍らめ(内

・支・聚・群)

【他書所伝】

〔左歌〕ナシ 〔右歌〕ナシ

【語釈】

① ささ枕―草枕に同じ。笹を結んで枕として野宿すること。「すがはらやふしみのさとのささ枕ゆめもいくよの人めよくらん」(『続後撰和歌集』恋歌二・七三〇・「名所百首歌めしける時」・順徳院)「すがはらやふしみにむすぶささまくらひとよのつゆもしぼりかねつる」(『秋篠月清集』南海漁夫百首・五六六・「羈旅十首」・良経)等、新古今時代前後に愛好された表現。

② また臥なれぬ―まだ臥しなれていない。「みじか夜のまだふしなれぬあしのやのつまもあらはにあくるしのため」(『新勅撰和歌集』雑歌四・一二八四・「名所歌たてまつりける時、あしのや」・家隆)のほか新古今時代の用例が多い。

③ 心してふけ―「うたたね」とともに詠む例に「夏衣まだひとへなるうたたねに心してふけ秋のはつ風」(『拾遺和歌集』夏・一三七・「あきのはじめによみ侍りける」・安法法師)。この歌は夏部の巻頭歌であり、『千五百番歌合』の判詞に引用されるなど著名であった。「まだひとへなる」を「また臥しなれぬ」に対応させるなど、為経の当該歌は安法法師の歌を強く意識していた。

④ むへ山あらし―人口に膾炙した「吹くからに秋の草木のしをるればむべ山かぜをあらしといふらむ」(『古今和歌集』秋歌上・二四九・「これさだのみこの家の歌合のうた」・文屋康秀)を踏まえた表現。

【通釈】

百十番

左(歌) 勝

(中納言藤原) 為経

笹を結んで枕にするものの、まだ臥しなれていない(私の)うたたねに、峰の嵐も心して吹け。

右(歌)

(散位藤原) 信実

今夜またここに旅寝をする松の木陰、なるほど山嵐の音が(ひとさわ)寂しく聞こえることだ。

〔判詞〕右歌は姿・ことばを、(作者が)よく心得ていて面白く聞こえますが、「むへ山あらし」と(古歌を)思い合わせることは、少々はつきりしないのではないでしょうか。左(歌)は「夏衣またひとへなる」秋風を峰の嵐に(意識的に) ~~吹~~、(そのほうが嵐の)音もまさって聞こえるようですので、(こちらを)勝とします。

〈百十一番〉

百十一番

左 勝

通成

① 足引の山の嵐をかたしきてならはぬ岩の枕をそする

右

雅光

いか計都の遠くなりぬらん夢ちもよそに吹嵐哉

③ 左嵐をかたしくといひ、右吹あらし哉とはてたる、

ともにこのみ詠すへきすかた詞に侍らねと、左
はことわりつよく侍にや、右夢のならひ、都ちかき
程はみえ、とをさかれは、見えぬにや侍らん、もろこし
も夢に見しかはなと申ならひて侍にや、左
にはおとり侍へきにこそ、

【校異】

イ 勝―ナシ(書) □ 通成―右衛門督通成(書・内・支・聚・群) ハ 岩―いま(書) ニ 雅光―右近中将雅光(書・内・聚・群) 右近衛雅光(支)、右近少将雅光(群) ホ には―(内・支・聚・群) ヘ 左は―左(内・支・聚・群) ト 夢―都(内・支・群)、旅(聚) チ 見え―み(支・聚・群)
リ おとり―■とり(内) ※■は未読箇所

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

① 足引の山の嵐―「足引の」は「山」に掛かる枕詞。当該歌の如く「山の嵐」と続く例は、「あしひきの山のあらしは吹かねども君なき夕はかねて寒しも」『万葉集』巻第十・冬の相聞・二三五〇・「夜に寄する」等、古来よりみえる。

② 岩の枕―旅寝において岩を枕にすること。「苔むせる岩の枕に旅ねして外山の桜ちるまでもみん」『田多民治集』一八・「さくらを」・「このごろは苔のさむしろ片敷きて巖の枕臥しよからまし」『狭衣

物語』一四六・狭衣)、「やまかげやいはのまくらのなみむしろしみ
づ身にしむ月のかげかな」(『如願法師集』春日詠百首応製和歌・三
一・〔夏〕)等。

③嵐をかたしくといひ―先行例として「岩がねのところに嵐をかたし
きてひとりやねなんさよの中山」(『新古今和歌集』羈旅歌・九六二
・「石清水歌合に、旅宿嵐といふ事を」・有家、『石清水社歌合』出詠
歌で有家の自讃歌)があげられるが、他にあまり例をみない。

④吹あらし哉とはてたる―「ささのはは深山もさやにうちそよぎこ
ほれる霜を吹く嵐かな」(『新古今和歌集』冬歌・六一五・「百首歌た
てまつりし時」・良経)、「露をだにいまはかたみのふぢ衣あだにも袖
をふくあらしかな」(『新古今和歌集』哀傷歌・七八九・「ちち秀宗身
まかりての秋、寄風懐旧といふ事をよみ侍りける」・秀能)、「浅茅生
や袖にくちにし秋の霜わすれぬ夢をふく嵐かな」(『新古今和歌集』
雑歌上・一五六四・「寄風懐旧といふことを」・通光)等が先行例。
勅撰集では前掲『新古今集』歌が初出で、新古今時代に流行した表
現。

⑤右夢のならひ、都ちかき程はみえ、とをさかれは、見えぬにや侍
らん、もろこしも夢に見しかはなと申ならひて侍にや―「もろこし
も夢に見しかばちかかりきおもはぬ中ぞはるけかりける」(『古今和
歌集』恋歌五・けむげい法し・七六八)を踏まえた言。ある対象を
夢にみるのは、その対象を近くに認識しているという和歌的発想に
基づく。

【通釈】

百十一番

左(歌) 勝

(右衛門督源) 通成

山の嵐を(床に)敷いて慣れない岩の枕をする(かのような私の
旅寝よ)。

右(歌)

(右近衛中将源) 雅光

どれぐらい都は遠くになつてゐるのだろうか。夢をみることもな
く、夢と関係なく、吹く嵐であるよ…

〔判詞〕左(歌)「嵐をかたしく」といい、右(歌)「吹あらし哉」
と言いつわつてゐる、共に好んで詠むべき姿・詞ではございませ
んが、左(歌)は理が強うございましょうか。右(歌)は夢というも
のの習いとして、都が近い距離では夢に見え、(都を)遠ざかった
で、(この右歌では)見えないのでしょうか。(『古今集』歌の)「も
ろこしも夢に見しかは(ちかかりき)」など言い慣わしておりました
う。(右歌は)左(歌)には劣りますでしよう。

〈百十二番〉

百十二番

左 勝

有教

① ② ③
かたしきて幾夜になりぬ旅衣袖になれぬる嶺の嵐を

右

弁内侍

岩の上の嵐のかせはいとさむし旅ねの衣かす人もかな

右、ふるき哥ニ④のことは、おなし句ホにならひて、めつらし
 き心きこえずや侍らん、左チ、たひ衣、袖リをはさて
 をきて、かたしく物にみねの嵐をせられて侍、こと
 はりたかひてや侍らん、たゝし、此番ヌの左、思出ルすく
 なく侍れば、これはかりは、右フのまカけに申ナすへ
 くや侍らん、

【校異】

イ 勝—ナシ(書) 口 有教—兵部卿有教(書・内・支・聚・群)
 ハ 上の—上に(書) ニ ふるき—ふかき(内) ホ 哥の—哥(内
 ・支・聚・群) ヘ ことは—ことは、(内・支) ことはに(聚)
 詞は(群) ト おなし句トに—おなし句トに(書) 同句に(内・支・
 聚・群) チ 左—ナシ(内・聚) リ さてをきて—まきをきて
 (内・支・聚・群) ヌ 番の—番(内・支・聚・群) ル 思出
 —おもひいて(書) おもひて(内) 思ひて(支・聚) 思ひ出(群)
 ヲ はかりは—はかり(内・支・聚) ワ 右の—ころの(群)
 カ 申—ナシ(内・聚)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【本歌】

〈右歌〉

『後撰和歌集』雑三・一一九五・「いその神といふてらにまうでて、
 日のくれにければ、夜あけてまかりかへらむとてとどまりて、この

寺に遍昭侍りと人のつげ侍りければ、ものいひ心見むとていひ侍り
 ける」・小野小町

いはのうへに旅ねをすればいとさむし昔の衣を我にかさなん

(同 一一九六・「返し」・遍昭)

世をそむく昔の衣はただひとへかさねばうとしいざふたりねん

【語釈】

①かたしきて幾夜になりぬ旅衣—二句切。「片敷く」は、恋歌や羈旅
 歌で頻用され、独り寝の寂しさを表す。有教歌は、上句だけで考え
 ると、「(旅衣を) 片方だけ敷いて幾夜になっただろうか」という意
 となろう。「旅ころも夜な夜な袖をかたしきておもへばわれはとほく
 ゆきなん」(『平家物語』覚一本・巻第七・「経正都落」・「経正」)。当該
 歌では「旅衣」は上句・下句のどちらにも掛かる仕掛けとなってい
 る。

②袖になれぬる嶺の嵐を—袖に馴染んだ嶺の嵐を、の意。旅宿を幾
 夜も続けたことで、嶺の嵐にもすっかり馴染んでしまったというので
 ある。「しら雲のいくへの嶺をこえぬらんれぬ嵐に袖をまかせて」
 (『新古今和歌集』羈旅・九五五・「たびの歌とてよめる」・「雅経」
 とは対照的。

③嵐のかせはいとさむし—「嵐の風」を「寒し」とする先行歌として
 は、「相坂の嵐のかせはさむけれどゆくへしらねばわびつつぞぬる」

(『古今和歌集』雑下・九八八・「題しらず」・よみ人しらず)、「人
 心嵐の風のさむければこのめも見えず枝ぞしをる」(『後撰和歌集』

雑四・一二八二・「人のもとにつかはしける」・伊勢）などが早い例である。特に、後者は、嵐に、人の心の荒々しき、寒々しきが重ねられる。

④ふるき哥のことは、おなし句にならひて、めつらしき心きこえずや侍らん——本歌の語句（特に初句と第三句）の置き所が同じであることの指摘である。定家は、『近代秀歌』において、「かの本哥を思ふに、たとへば五七五の七五の字をさながらをき、七々の字をおなじくつゞけつれば、新しき哥にきくなされぬところぞ侍る」と述べ、判詞でも、古歌との距離をどのようにとるかを度々問題にしている。

⑤たひ衣、袖をはさてをきて、かたしく物にみねの嵐をせられて侍、ことはりたかひてや侍らん——片敷くものが「旅衣」や「袖」ならば、道理に叶った表現であるが、「嶺の嵐を」と結ばれたため、「嶺の嵐を片敷く」という文脈が際立ってしまう。「旅衣」や「袖」を差しおいて、「嶺の嵐」を「片敷く」とするのでは、道理に合わないという指摘である。為家は、本歌合百十一番左「足引の山の嵐をかたしきてならばぬ岩の枕をそする」（通成）について、「左、嵐をかたしくといひ、右、吹あらし哉とはてたる、ともにこのみ詠すへきすかた詞に侍らねと」とも難じている。しかし、「岩がねのどこに嵐をかたしきてひとりやねなんさよの中山」（『新古今和歌集』羈旅・九六二・「石清水歌合に、旅宿嵐といふ事を」・有家）という歌もあって、「嵐を片敷く」には先例がある。

⑥思出すくなく侍れは——「思出」は、後で思出す事柄、思出す

縁となるもの、の意。歌合判詞では、多く、「思ひ出でられて」といった表現で、特定の古歌・古詩などが想起されることを示す。本歌合では、三十八番の用例が、古今歌の表現を想起するという意味で、「梅花色みえぬ事をおもひいて」と用いられている。しかし、ここは、本歌合の有教歌に、当該歌合における記憶に残るような出来のいい歌が少ないので、の意。次項⑦参照。

⑦これはかりは右のまけに申なすへくや侍らん——ここまで弁内侍と有教の番の勝敗は、弁内侍の五勝三持であった。また、有教歌に対して、「花よりはなの日かす、すかたこと葉こひねかふへきさまに侍らぬうへに、山ちの末もおほつかなくこそ侍れ」（廿一番）、「題のさ月ほいなくや、五月雨卯月もいかと見え侍へし」（三十四番）、「うつもるゝ枯野ふみ分て猶行末もいかなる見所侍へきそとゆかしく侍を、雪のふるみち、たゝおなし事にて侍ける、無念にや侍へき」（七十三番）など、厳しい評が目立つ。

【通釈】

百十二番

左（歌） 勝

兵部卿（藤原）有教

片方だけ敷いて幾夜になったことだろうか。旅衣の袖に馴染んでしまった嶺の嵐を。

右（歌）

弁内侍

岩の上の嵐の風はたいそう寒い。旅寝の衣を貸してくれる人がいればいいなあ。

〔判詞〕右は、古歌の詞が、同じ句に並んで、珍しい趣向が聞こえないのではないでしようか。左は、旅衣や袖を差しおいて、片敷くものに嶺の嵐をなさっておられますのは、道理に合わないのではありませんか。ただし、この番いの左は、記憶に残るような出来のいい歌が少なくございますので、今回ばかりは、右の負けだとあえて申し上げるのが適当でしようか。

〈百十三番〉

百十三番

左 勝^イ

師^ロ繼

さゆる夜の嵐に夢もむすひけり身はならはしの草の枕^ハに

右

雅^ニ忠

草枕^ハね覚^ハの床のさひしさもことわり過て吹嵐哉

左さゆるといひてさせるようなくやみえ侍らん、

あらしにならひて草の枕夢むすふ心はさも

侍らん、右あまりにやすくて脂燭^チの哥^トなど申

へくや侍らん、為^リ負、

【校異】

イ 勝—ナシ(書) ロ 師繼—右近中将師繼(書・内・支・聚・

群) ハ 枕に—枕を(支) ニ 雅忠—雅忠朝臣(書・内・支

・聚・群) ホ ね覚—旅ね(群) ヘ 心は—心(支・聚・群)

ト 右—ナシ(支・聚) チ 脂燭—脂燭^チ(支)、照燭(群)
リ 為負—為勝(聚)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①嵐に夢もむすひけり—嵐にも(かかわらず)夢はむすびけりの意。「夢も結ばぬ」の例は多いが、この歌ではそれを逆転させている。

②身はならはしの—身は慣れ次第だ、慣れっこになってしまった、等の意。「た枕のすきまの風もさむかりき身はならはしの物にぞありける」(『拾遺和歌集』恋四・九〇一・「題しらず」)・「よみ人しらず」や、これを本歌とした「さとはあれぬむなしきとこのあたりまで身はならはしの秋かぜぞふく」(『新古今和歌集』恋歌四・一三二・「和歌所にて歌合侍りしに、あひてあはぬ恋の心を」・寂蓮)などの例がある。

③ことわり過て—道理にも過ぎて。「うきも身のむくひなれども折ふしにことわり過ぎてねこそなかるれ」(『為家集下』雑・一四四五・建長五年作)があるが、雅忠の当該歌以前には用例を見ない。

④脂燭の哥—紙(脂)燭が一、二寸燃える短い間に作る歌。また、それを作る競技。紙燭一寸の歌とも言う。「右はしそくの歌にや侍らむ。いと心得ずとて左勝つべくや」(『六百番歌合』秋上・七番、俊成の判詞※本によつて「秀句の歌にや」とする)。

【通釈】

百十三番

左(歌) 勝

(右近権中将藤原) 師繼

冷える夜の嵐の中でも夢は結んだことだよ。(今では)慣れっこになつた草を結んで枕にする野宿に。

右(歌)

(源) 雅忠(朝臣)

草枕をして寝る(夜の)、寝覚めの床の寂しさは覚悟しているが、道理にも過ぎて吹きつける嵐であることよ。

〔判詞〕左(歌)は「さゆる」と言つて(いるが)特に「旅宿嵐」

のこの歌では)用もなく思われましよう。嵐に慣れて草の枕(にも)

夢を結ぶ(という)内容はそのようでもありません。右(歌)は

あまりに安易で「脂燭の歌」などと言うべきでしょう。(右歌を)負

けとします。

〈百十四番〉

百十四番

左 勝

沙弥 蓮性

岩かねの枕のあらしさらたにいねかてなるを心してふけ^①

右

下野

行暮[□]てひと夜^②よとかる松かねに何と嵐^③の床はらふらん

左、上下句はしめの同文字みとかむるおりも侍れ^④

とも、いねかてなるを心して吹、ことよろしく、おなし[□]

嵐もきこえ侍にや、右、なにと嵐のといへる、心にいれぬさまに侍れば、尤^ト以左為勝、

【校異】

イ 勝—ナシ(書)

□ 行暮て—^{新古今 羅城}ゆき暮て(聚) ハ 左—左哥

(書・内・支・聚・群) ニ 上下句—上下の句(書・支) ホ

おなし—おかしく(書) ヘ 右—ナシ(内・聚) ト 尤—ナシ

(聚)

【他書所伝】

〔左歌〕ナシ

〔右歌〕

『新統古今和歌集』羈旅歌・九一八・「宝治元年九月十三夜仙洞にて十首歌合に」・後鳥羽院下野

行きくれて一夜やどかる松がねになにとあらしの床はらふらむ

【語釈】

①心してふけ—風や嵐に対して「心してふけ」と呼びかけた例は、「夏衣まだひとへなるうたたねに心してふけ秋のはつ風」(『拾遺和歌集』秋・一三七・「あきのはじめにのみ侍りける」・安法法師、『拾遺抄』秋・八七)が早く、旅の情景を詠んだ歌には「をしみかねはなのあたりに旅ねしつよはの嵐よ心してふけ」(『月詣和歌集』三月・一七二・「花筵」・祝部成仲)、「吹きすぐる峰のあらしも心せよ真木のいたぶし今夜ばかりぞ」(『石清水社歌合』(建仁元年)二番右・旅宿嵐・四・小侍従)などがある。百十番語釈参照。

②何と嵐の—強い風はどうして(くだらう)と疑問を呈する意。「谷風はとをふきあけているものをなにとあらしのまどたたくらん」『山家集』雑・九六六、「しをれ果て結ぶさびしくさまくらなにと嵐のあはれそふらむ」『石清水社歌合』(建仁元年)二番左・旅宿嵐・三・通親)などの例がある。

③床はらふらん—「まそでもちとこうちはらひきままつとをりしあひだにつきかたぶきぬ」『万葉集』巻第十一・寄物陳思・二六六七、「夕されば人なきとこを打ちはらひなげかむためとなれるわがみか」『古今和歌集』恋歌五・八一五・「題しらず」・よみ人しらず)などの例のように、床を払うのは男の来訪を祈る行為。この歌の場合、旅の仮寝の床を強い風が払うのはどうしてかと疑問を呈し、誰も訪れるはずのない旅先での一人寝の寂しさを歌ったものである。

④上下句はしめの同文字みとかむるおり—第一句の始めの文字(「岩かね」の「い」と第四句の始めの文字(「いねかてなるを」の「い」)が同じ文字であることを咎めるもので、平頭病とされる。『内裏歌合』(天徳四年)恋・一八番右・三七・中務歌に対する実頼判、『或所歌合』(保延四年)恋・殿下参河歌に対する基俊判(『袋草紙』の記述による)のほか、『俊頼髓脳』、『和歌童蒙抄』、『袋草紙』、『八雲御抄』などに取り上げられるが、歌病として咎める対象にする場合と、取り立てて問題にしない場合とがある。

【通釈】

百十四番

左(歌) 勝

岩を枕にする旅寝に吹く強い風よ、そうでなくてさえ寝つけないだから気を遣って吹いてくれよ。

右(歌)

下野

旅行くうちに日が暮れて松の根元に一夜の宿を借りているのに、強い風はどうして床を払うのだろう。

〔判詞〕左(歌の)、上の句と下の句の始めが同じ文字であることを見咎めることもございませうが、「いねかてなるを心して吹」というのは、殊によろしゅうございまして、同じ嵐でも(格別に情趣が増して)聞こえますことでしょうか。右(歌)の、「なにと嵐の」と(疑問を呈する)部分は、納得がいかないさまでございませうので、左歌を勝ちといたします。

〈百十五番〉

百十五番

左 持

為氏朝臣

① うちとけてねられやはする草枕むすふ山路の嶺の嵐に

右

少将内侍

都人なにか夢にみえつらんかりねかなしきみねのあらしに

左の草枕は、むすふ^ハうちとけてねられぬを
かこち、右のかりねは、都人何しか夢に見ゆらん

とおもへる程、をのく心なきにあらされは、嶺の
あらし、かたくチいつれときわかれ侍らす、リ為持、

【校異】

イ 持—ナシ(書) 口 左の—左(書) ハ 山路の—
・内・支・聚・群) ニ 何しか—なにしにか(内・支) ホ 夢
に—夢かり(内) ヘ 見ゆらん—見えつらん(内・支・聚・群)
トをのく—各(書・内)、右(支) チ かたく—ナシ(内)
リ 為持—為勝(内)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①うちとけて—くつろいで、の意。「霜むすぶ袖のかたしきうちとけてねぬよの月の影ぞさむけき」(『新古今和歌集』冬・六〇九・「千五百番歌合に」・通具)。左歌中の「むすぶ」の縁でこう言った。
②かりね—旅などで、いつもの床でない床で眠ること。「草まくらかりねの夢にいくたびかなれし都にゆきかへらん」(『千載和歌集』羈旅・五三四・「旅のうたとてよみ侍りける」・隆房)。
百十五番

左(歌) 持

為氏朝臣

くつろいで眠ることなどできようか。草枕を結ぶ山路の嶺の嵐の激しさに。

右(歌)

少将内侍

都人がどうして夢に見えたのであろうか。仮寝が悲しく感じられる嶺の嵐(が吹くなか)で。

「判詞」左の草枕は、結ぶくつろいで眠れないのを託ち、右の仮寝は、都人がどうして夢に見えるのかと思っている様子は、それぞれ情趣が感じられないわけではないので、両首の嶺の嵐は、どちらか一方をすぐれていると判断することができません。持とします。

〈百十六番〉

百十六番

左 勝イ

経朝朝臣

①故郷にかよふ夢路の関守は旅ねおとろく嵐なりけり

右

沙弥禅信

嵐吹山ちかさなる草枕むすぶ旅ねの夢そすくなき

②左旅ねおとろかすとそ、ありたく聞え侍れとも、右

むすぶ旅ねに夢そすくなき、又見なれて侍

うへに、あらし吹山ちかさなる、いひくたされぬ

やうに侍にや、関守力ありけにみえ侍れば、勝侍へきにや、

【校異】

イ 勝—ナシ(書) 口 一の(支・聚・群) ハ なる—なる

とは(聚・群) ニ みえ侍—侍(内・支・聚・群)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〔右歌〕ナシ

【語釈】

①故郷にかよふ夢路の関守…嵐なりけり―「まどろまぬうつともなき旅ねしてあらしにたゆるふるさとの夢」(建仁元年(一一〇一))

『石清水社歌合』十番左・九・俊成卿女)、「たびねするよはのあらしにゆめさめてうちながむればありあけの月」(『千五百番歌合』千四百二十六番左・二八五二・後鳥羽院)等の如く、嵐が夢を断ち切る例は散見する。なお、類想歌として「故里の秋の夢ぢの関もりはみかきがはらの松虫のこゑ」(建仁元年(一一〇一))『和歌所影供歌合』故郷虫・四番左・一一五・慈円)があげられる。夢路にせよ現実にせよ、出逢いを妨げるものとしての関守は、もとより『伊勢物語』第五段に基づいている。

②左旅ねおとろかすとそ、ありたく聞え侍れ―嵐が主体の場合、「おとろかす」とするのが意味の通りとして妥当であることを指摘する。

「嵐」が「驚かす」例としては、「ねがふ事みつの深山のたびねとや嶺のあらしやおどろかすらん」(建仁元年(一一〇一))『石清水社歌合』旅宿嵐・六番右・一二・静賢)、「おどろかす関のとだちのあらしかなゆめもむすばぬ旅のまろねは」(同・九番右・一八・中納言)等がみえる。

③あらし吹山ちかさなる、いひくたされぬやうに侍にや―「吹」は「山ち」に掛かり、(嵐が吹く中、険しい山路がひき続く旅路)とい

う意で、言葉つづきに流麗さがなくことを難じたものか。「山ちかさなる」という表現は、「さよふけてむまやづたひのすずきけば山ちかさなるものぞかなしき」(正治二年(一一〇〇))『三百六十番歌合』十四番左・内大臣・六〇三)、「わかれても心へだつなたび衣いくへかさなる山路なりとも」(『拾遺愚草』初学百首養和元年四月・別・九〇)、「心のみへだてずともたび衣山路かさなるをちのしら雲」(『十六夜日記』一〇八・為相)等にみえる。「いひくたされぬ」は、例えば、『六百番歌合』で俊成が、「きさかたやいもこひしらにさぬる夜のいそのねざめに月かたぶきぬ」(旅恋・廿九番左・八九七・顕昭)について「左歌、はじめをはりよくいひくたしてはみえ侍り」と用いている。

【通釈】

百十六番

左(歌) 勝

(藤原) 経朝朝臣

故郷に通う夢路の関守は、旅寝にあつて(その音で)目が覚める嵐であつたのだなあ。

右(歌)

沙弥禅信

嵐が吹く山路が続く旅寝において見る夢は(まんじりとも出来ず)に)本当に少ない。

【判詞】左(歌)「おとろく」でなく「旅ねおとろかす」と、ありたいところですが、右(歌)「むすぶ旅ねに夢そすくなき」という表現は、又見慣れておりますうえに、「あらし吹山ちかさなる」(と

いう表現は、(すんなりとは) 言いくだされないうようでごさいます
ようか。(左歌の)「関守」という(表現の方が)力があるように思
われますので、(左歌の)勝ちでございませうか。

〈百十七番〉

百十七番

左 勝^イ

越前

花す^①きかりねの野へに片敷て月も嵐も都恋しも^ロ

右

為家

草木ふくむへ山風とき^ハしかと猶そかりねの袖はしほる^イ

左あらしあらはに聞え侍れば、為勝

【校異】

イ 勝—ナシ(書) ロ も—き(群) ハ 為家—前権大納言為

家(書・内・支・聚・群) ニ かり—旅(内・支・聚・群)

ホ 聞え—聞えて(書)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『和歌用意条々』故禅門(為家)・二八

草木ふくむべ山風と聞きしかば旅ねの袖は猶ぞしほる

『為家集』雑・「旅宿嵐 宝治元年仙洞十首歌合」・一三三二

草木吹くむべ山風と聞きしかど猶ぞかりねの袖はしほる

【本歌】

〈右歌〉

『古今和歌集』秋歌下・「これさだのみこの家の歌合のうた」・文屋
やすひで・二四九

吹くからに秋の草木のしをるればむべ山かぜをあらしといふらむ

【語釈】

①花すき—穂の出た薄。『万葉集』以来多くの例がみえる。「野べ
ならばたびねしてまし花薄まねくたもとにこころとまりて」(『大武
高遠集』「花すすき」・一三九)、「ゆく人をまねくかのべのはなすす
ききよひもここにたびねせよとや」(『忠盛集』「野客留人」・一二〇)
は一例。

②月も嵐も—「きよみがたひとりいはねの秋のよに月もあらしもこ
ろぞかなしき」(『秋篠月清集』南海漁父百首(「羈旅十首」)・五七三)、
「外にすみよそにふかなん秋のよの月も嵐も恨みはてけり」(『壬二
集』「恋歌あまたよみ侍りしに」・二八七六)等が、先行例としてみ
える。

【通釈】

百十七番

左(歌) 勝

(嘉陽門院) 越前

(私は) 穂の出た薄を仮寝の野辺に片敷いて寝て、月につけ嵐につけても都が恋しいことだ。

右(歌)

(前権大納言藤原) 為家

『古今集』歌が詠じるように、「嵐」は(草木を吹いて(萎れさす)なるほど山の風と聞いてはいたが、それ以上に(私の)仮寝の袖が萎れるよ。

〔判詞〕左(歌)の「あらし」は(その様子が)はっきりとわかりますので、勝ちとする。